

鬼塚遺跡第 8 次発掘調査報告書

1997

財団法人 東大阪市文化財協会

序

東大阪市は、古代より栄えた河内の一画を占めています。市内には、旧石器時代以降各時代の遺跡が現在約130箇所、確認されており、埋蔵文化財の宝庫と言えます。なかでも、市域の生駒山の山麓には、今回報告します鬼塚遺跡をはじめ鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡など全国的にも著名な弥生時代の大集落が存在し、原始時代の繁栄の様子を今に示しています。

江戸時代以降は、商都大阪の近郊農村地帯でありましたが、現在市域の大半は住宅・工場などが立ち並びまとまった水田地帯はわずかとなり、市街化が進んでおります。

今回報告する鬼塚遺跡第8次調査は、伸線工場の跡地にマンションの建築が計画され、遺跡が破壊されるために実施したものです。

鬼塚遺跡は、鬼虎川・西ノ辻遺跡の南に隣接した遺跡で早い時期から弥生時代の開始を考えるうえに重要な遺跡と考えられていました。ただその実態は、まだ不明な点が少なくありません。この度の調査では、縄文・弥生・古墳時代に関する新たな発見が多くありました。多くの出土品は当時の人々の生活を偲ばせてくれるものであります。

本書が、原始・古代の社会を解明するうえでお役に立てれば幸いです。また、地域の文化財の学習資料となりますことを願っております。

最後になりましたが、調査および整理を実施するうえに、多大なご協力をいただきました正起工業株式会社をはじめとする関係機関、方々に心より謝意を表します。

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 日吉 亘

例 言

1. 本書は正起工業株式会社が計画したマンション建設工事に伴う、鬼塚遺跡第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は財団法人東大阪市文化財協会が、正起工業株式会社の委託を受けて実施した
3. 主要な現地調査は、昭和57年5月24日から11月8日まで福永信雄を担当として実施した。
4. 本書の執筆はⅣ章—4・5およびⅤ章—3・4・5を中西克宏が行なった。附編のⅥ章については、それぞれⅥ—1パリノサーベイ株式会社、Ⅵ—2多賀谷昭、Ⅵ—3金弘美、Ⅵ—4安田博幸・井村由美、Ⅵ—5藁科哲男・東村武信（敬称略）に依頼し玉稿を賜った。その他の章の執筆と編集は福永が行なった。観察表については、小西優美・津田美智子の協力を得た。また、Ⅶ章で用いた縄文時代晩期土器の統計処理は、小西優美が担当した。
5. 遺構写真は福永・中西克宏が撮影し、遺物写真撮影は落合信生氏に委託した。
6. 現地調査実施にあたっては、正起工業株式会社の方々から多大なご協力いただいた。記して謝意を表する。
7. 遺構実測図は調査に参加した全員で作成し、整図は中西・津田が担当した。遺物実測図は、中西・小西を中心に福永・津田・山本裕子が作成した。石器については松田順一郎の協力を得た。なお、本書掲載の遺物の挿図番号は、図版番号と一致させている。
8. 石材の鑑定は、パリノ・サーベイ株式会社に委託し報告を受けた。
9. 遺構実測図の水準高はT.P値を用いた。
10. 調査および本書作成にあたって、下記の方々から多くの教示を得た。心より謝意を表する。
(敬称省略・順不同)
西谷真治・金関恕・中村五郎・中村友博・泉拓良・家根祥多・置田雅昭・木下密運・秋山浩三・森島 康雄・濱田延充・那須考悌・樽野博幸・栗田薫
11. 現地調査および整理作業において、下記の方々の参加を得た。また、最終の整理作業は整理部が担当した。
丹山昌則・後藤義行・中森一矢・辻栄二・宮崎恵三・越野一郎・小松謙介・田中裕之・森田浩史・小西優美・津田美智子・山本裕子・松井朋子・石渡玲子・藤原雅子・天津正代・平 泰子・山脇陽子・米谷佳世子・木梨昌美・堀内朋子・川越菊美・谷口純子・森田久美子・国分政子・百合藤厚子・西山由美・八田美代子

本文目次

I. 位置と環境	1
1. 位置	1
2. 地理的環境	1
3. 歴史的環境	2
II. 調査概要	6
1. 従来 of 調査	6
2. 調査に至る経過	7
3. 調査方法・目的	8
III. 層序	10
1. 第 I 調査区	10
2. 第 II 調査区	14
3. 第 I 調査区と第 II 調査区の層序の対応	15
IV. 遺構	16
1. 縄文時代の遺構	16
縄文時代後期（縄文 V）の遺構	16
縄文時代晩期（縄文 IV~I）の遺構	16
2. 弥生時代の遺構	24
3. 自然流路	30
4. 古墳時代の遺構	33
5. 飛鳥時代の遺構	37
V. 出土遺物	44
1. 縄文時代後期以前の遺物	44
2. 縄文時代晩期の遺物	47
縄文 IV 出土土器	50
縄文 III 出土土器	51
縄文 II 出土土器	56

縄文Ⅰ出土土器	65
東海地方系土器	65
土製品	67
石製品	71
3. 弥生時代の遺物	74
弥生時代前期土器	74
弥生時代中期土器	76
弥生時代後期土器	80
4. 古墳時代の遺物	80
古墳時代前期土器	80
古墳時代中期土器	81
その他の出土遺物	92
5. 飛鳥時代の遺物	93
Ⅵ. 附編	131
1. 東大阪市鬼塚遺跡試料花粉分析及び植物珪酸体分析報告	131
2. 鬼塚遺跡出土人骨について	136
3. 鬼塚遺跡出土の歯牙について	138
4. 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期の数種の土器片に塗布された赤色顔料物質の科学分析	144
5. 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、剥片の石材産地分析	146
Ⅶ. 考察	160
1. 遺構について	160
イ. 調査地点における遺構の変遷と集落の推移	160
ロ. 再葬墓（土壙墓1・2）について	166
2. 縄文Ⅳ～Ⅰの土器について	170
Ⅷ. 総括	187

挿図目次

第1図 調査地周辺遺跡分布図	3
第2図 調査地位置図	7
第3図 調査地区割図	9
第4・5図 調査地土層断面図	11・12
第6図 縄文時代後期遺構（縄文V）平面図	16
第7図 縄文時代晩期遺構（縄文IV）土壙墓1・2平面図	17
第8図 縄文時代晩期遺構（縄文IV）土壙墓1検出状況実測図	18
第9図 縄文時代晩期遺構（縄文IV）土壙墓2検出状況実測図	18
第10図 縄文時代晩期遺構（縄文IV）ピット他検出状況平面図	20
第11図 縄文時代晩期遺構（縄文IV）ピット・土壙断面実測図	20
第12図 縄文時代晩期遺構（縄文III）溝・土壙検出状況平面図	22
第13図 縄文時代晩期遺構（縄文III）土壙22検出状況平面図	23
第14図 縄文時代晩期遺構（縄文II）溝33検出状況平面図	23
第15図 弥生時代遺構（中期）方形周溝墓他検出状況平面図	25
第16図 弥生時代遺構（中期）木棺墓検出状況実測図	26
第17図 弥生時代遺構（中期）木棺墓墓壙内土層断面図	27
第18図 弥生時代遺構（中期）方形周溝墓3南側周溝供献土器検出状況実測図	29
第19図 自然流路平面図	31
第20図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物他検出状況平面図	34
第21図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物1検出状況実測図	35
第22図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物2検出状況実測図	36
第23図 飛鳥時代遺構、土壙3検出状況実測図	37
第24図 縄文時代中・後期以前土器実測図、拓影・断面図	45
第25図 縄文時代中・後期土器拓影・断面図	46
第26図 縄文時代晩期土器（縄文IV）実測図	49
第27図 縄文時代晩期土器（縄文IV）拓影・断面図	50
第28図 縄文時代晩期土器（縄文III・土壙22）実測図	51
第29図 縄文時代晩期土器（縄文III・土壙21・22、溝35）拓影・断面図	52
第30図 縄文時代晩期土器（縄文III・溝35）実測図	53
第31図 縄文時代晩期土器（縄文III・黒灰色粘土）実測図	54
第32図 縄文時代晩期土器（縄文III・黒灰色粘土）拓影・断面図	55
第33図 縄文時代晩期土器（縄文III・黒灰色砂質土下層）拓影・断面図	57
第34図 縄文時代晩期土器（縄文II・溝33）実測図	59

第35図	縄文時代晩期土器 (縄文Ⅱ・溝33) 実測図	60
第36図	縄文時代晩期土器 (縄文Ⅱ・溝33) 拓影・断面図	61
第37図	縄文時代晩期土器 (縄文Ⅱ・黒灰色砂質土) 実測図	62
第38図	縄文時代晩期土器 (縄文Ⅱ・黒灰色砂質土) 拓影・断面図	63
第39図	縄文時代晩期土器 (縄文Ⅰ・黄灰色シルト) 拓影・断面図	64
第40図	縄文時代晩期土器 (縄文Ⅱ・東海地方系土器) 拓影・断面図	65
第41図	縄文時代晩期土器 (攪乱) 実測図、拓影・断面図	66
第42図	縄文時代晩期土製品実測図	67
第43図	縄文時代晩期石器 (石鏃・石錐) 実測図	68
第44図	縄文・弥生時代石器 (石錐・石匙・打製尖頭器・打製石剣) 実測図	69
第45図	縄文時代晩期石器 (直刃削器他) 実測図	70
第46図	縄文時代晩期石器 (ピエス・エスキューエ他) 実測図	71
第47図	縄文時代後・晩期石器 (石錘・敲石) 実測図	72
第48図	縄文時代後・晩期石器 (磨製石斧・打製石斧・石皿) 実測図	73
第49図	弥生時代前期土器実測図	74
第50図	弥生時代前期土器拓影・断面図	75
第51図	弥生時代中期土器 (方形周溝墓3 南側周溝) 実測図	77
第52図	弥生時代中期土器 (土壙14・木棺墓他) 実測図	78
第53図	弥生時代中期土器 (自然流路他) 実測図	79
第54図	弥生時代後期～古墳時代前期土器 (自然流路他) 実測図	80
第55図	古墳時代中期土器 (須恵器) 実測図	81
第56図	古墳時代中期土器 (須恵器) 実測図	82
第57図	古墳時代中期土器 (須恵器) 拓影、(土師器) 実測図	83
第58図	古墳時代中期土器 (土師器) 実測図	85
第59図	古墳時代中期土器 (土師器) 実測図	87
第60図	古墳時代中期土器 (韓式系土器) 実測図、拓影・断面図	88
第61図	古墳時代中期遺物 (製塩土器・鑄造鉄斧・紡錘車・鞆羽口他) 実測図	90
第62図	飛鳥時代土器 (須恵器・土師器) 実測図	92
第63(1)図	鬼塚遺跡試料主要プラントオパールダイアグラム	135
第64(1)図	サヌカイト原産地	150
第65(2)図	金山・五色台地域のサヌカイト, ガラス質安山岩の原産地	151
第66図	縄文時代後期遺構 (縄文Ⅴ) 位置図	160
第67図	縄文時代晩期遺構 (縄文Ⅳ) 位置図	161
第68図	縄文時代晩期遺構 (縄文Ⅲ) 位置図	162
第69図	縄文時代晩期遺構 (縄文Ⅱ) 位置図	163

第70図	縄文時代晩期遺構（縄文Ⅰ）位置図	163
第71図	弥生時代中期遺構位置図	165
第72図	古墳時代中期遺構位置図	167
第73図	飛鳥時代遺構位置図	168
第74図	各遺構・層出土主要縄文土器（深鉢）一覧	171・172
第75図	各遺構・層出土主要縄文土器（深鉢・壺・底部）一覧	173・174
第76図	各遺構・層出土主要縄文土器（浅鉢）一覧	175・176
第77図	各遺構・層出土縄文土器器種構成円グラフ	177
第78図	凸帯分類図	180
第79図	突起分類図	182

表目次

表1	遺構一覧表	38
表2	縄文土器観察表	94
表3	土偶及び土製品観察表	117
表4	石製品観察表	118
表5	弥生土器観察表	120
表6	古墳時代遺物観察表	123
表7	飛鳥時代土器観察表	129
表8	各遺構・層出土の縄文土器、器種別点数（口縁部）	130
表9	縄文時代各遺構・層出土の石材一覧	130
表10	鬼塚遺跡試料表	131
表11	鬼塚遺跡花粉分析結果	132
表12	試料表	134
表13	鬼塚遺跡試料プラントオパール分析結果	135
表14	ジフエニルカルバジドによる呈色スポットのRF値と色調	145
表15	ジチゾンによる呈色スポットのRF値と色調	145
表16	各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差	152
表17	岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果	153
表18	和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果	153
表19	和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果	153
表20	鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、石片分析結果	154
表21	鬼塚遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石器、石片の原産地推定結果	157
表22	鬼塚遺跡各地点出土土器の時期と標高	169

表23	深鉢凸帯の施文部位の分類 (%)	181
表24	浅鉢凸帯の施文部位の分類 (%)	181
表25	浅鉢、突起の個数と比率 (%)	183
表26	黒色磨研および磨研風土器の個数と比率 (%)	184
表27	浅鉢、煤付着の個数と比率	186

図版目次

図版1	調査地 上. 第I調査区調査開始風景(南西より)下. 第II調査区攪乱検出状況(北東より)
図版2	調査地土層断面 上. 第II調査区南壁断面(北より)下. 第II調査区東壁断面(西より)
図版3	調査地土層断面 上. 第II調査区南壁断面(北より)下. 第I調査区北壁断面(南より)
図版4	調査地土層断面・遺構 上. 第I調査区西壁断面(北より)下. 縄文V遺構(溝38・土壙48)検出状況(北より)
図版5	遺構(縄文IV) 上. 第I調査区土壙墓1・2検出状況(北より)下. 第I調査区土壙墓1検出状況(東より)
図版6	遺構(縄文IV) 上. 第I調査区土壙墓1中央集骨状況(北東より)中. 第I調査区土壙墓1石撤去後の状況(東より)下. 第I調査区土壙墓1完掘状況(北東より)
図版7	遺構(縄文IV) 上. 第I調査区土壙墓2検出状況(北より)下. 第I調査区土壙墓2検出状況(南より)
図版8	遺構(縄文IV) 上. 第I調査区土壙墓2集骨状況(南より)中. 第I調査区土壙墓2完掘状況(北東より)下. 第I調査区土壙墓1・2完掘状況(北より)
図版9	遺構(縄文IV) 上. 第II調査区ピット検出状況(南西より)下. 第II調査区ピット検出状況(北より)
図版10	遺構(縄文IV・Ⅲ・Ⅱ) 上. 第II調査区ピット検出状況(東より)下. 第II調査区溝35・33検出状況(北より)
図版11	遺構(縄文Ⅲ・Ⅱ) 上. 第II調査区溝35検出状況(南西より)下. 第II調査区溝33検出状況(北より)
図版12	遺構(縄文Ⅲ・Ⅱ) 上. 第II調査区溝33遺物出土状況(南西より)下. 第II調査区土壙22遺物出土状況(北より)
図版13	遺構(縄文IV・Ⅲ・Ⅱ) 上. 第II調査区溝33遺物出土状況(北より)中. 黒灰色粘土層遺物出土状況(北より)下. 第II調査区暗黄灰色粘土層深鉢出土状況(東より)
図版14	遺構(弥生時代中期) 上. 第I調査区土壙14甕出土状況(北より)下. 第II調査区方形周溝墓2周溝検出状況(南より)
図版15	遺構(弥生時代中期) 上. 第II調査区木棺墓検出状況(西より)下. 第II調査区木

棺墓蓋撤去後状況（北東より）

- 図版16 遺構（弥生時代中期） 上．第Ⅱ調査区木棺墓人骨検出状況（南より）下．第Ⅱ調査区木棺墓人骨取り上げ後の状況（東より）
- 図版17 遺構（弥生時代中期） 上．第Ⅱ調査区木棺墓人骨上半身検出状況（東より）下．第Ⅱ調査区木棺墓、掘方埋土の状況（南より）
- 図版18 遺構（弥生時代中期） 上．第Ⅱ調査区木棺墓、掘方埋土の状況（東より）下．第Ⅱ調査区方形周溝墓3、西側周溝供献土器出土状況（北より）
- 図版19 遺構（弥生時代中期） 上．第Ⅱ調査区方形周溝墓3、西側周溝供献土器出土状況（南より）下．第Ⅱ調査区方形周溝墓2、北側周溝供献土器出土状況（南より）
- 図版20 遺構（弥生時代中期） 上．第Ⅱ調査区方形周溝墓2、北側周溝供献土器出土状況（北より）中．第Ⅱ調査区方形周溝墓2、西側周溝甕出土状況（東より）下．第Ⅱ調査区自然流路3壺出土状況（南より）
- 図版21 遺構（自然流路） 上．第Ⅰ調査区自然流路1完掘状況（南より）下．第Ⅰ調査区自然流路1完掘状況（北より）
- 図版22 遺構（自然流路） 上．第Ⅰ調査区自然流路1完掘状況（東より）下．第Ⅰ調査区自然流路1肩口完掘状況（東より）
- 図版23 遺構（自然流路） 上．第Ⅰ調査区自然流路堆積土断面（東より）下．第Ⅰ調査区自然流路1肩口自然木検出状況（南より）
- 図版24 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅰ調査区遺構検出状況（北より）下．第Ⅱ調査区遺構検出状況（北より）
- 図版25 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区遺構検出状況（東より）下．第Ⅱ調査区中央部北半遺構検出状況（東より）
- 図版26 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区北西部遺構検出状況（東より）下．第Ⅱ調査区中央部南半遺構検出状況（東より）
- 図版27 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅰ調査区溝5遺物出土状況（西より）下．第Ⅰ調査区土壙4遺物出土状況（東より）
- 図版28 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅰ調査区東壁断面遺物出土状況（西より）下．第Ⅰ調査区遺物出土状況（北西より）
- 図版29 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区溝21製塩土器他出土状況（北より）下．第Ⅱ調査区溝・ピット検出状況（北より）
- 図版30 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区溝27遺物出土状況（南より）下．第Ⅱ調査区溝26遺物出土状況（西より）
- 図版31 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区南西部溝・ピット検出状況（北より）下．第Ⅱ調査区ピット33柱根検出状況（西より）
- 図版32 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区ピット32検出状況（北より）下．第Ⅱ調査区

- 掘立柱建物1柱穴（ピット32・33・35）断ち割り状況（西より）
- 図版33 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区ピット35断ち割り状況（西より）下．第Ⅱ調査区ピット32断ち割り状況（西より）
- 図版34 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区ピット28根石検出状況（南より）中．第Ⅱ調査区ピット28検出状況（東より）下．第Ⅱ調査区ピット30根石検出状況（西より）
- 図版35 遺構（古墳時代中期） 上．第Ⅱ調査区ピット10根石検出状況（南より）中．第Ⅱ調査区ピット47根石検出状況（東より）下．第Ⅱ調査区ピット33柱根取り上げ後の状況（西より）
- 図版36 遺物（縄文時代後期以前・土器） 上左．深鉢、上右．深鉢下．深鉢・浅鉢・底部
- 図版37 遺物（縄文時代後期以前・土器） 上．深鉢・浅鉢、下．深鉢・浅鉢・底部
- 図版38 遺物（縄文Ⅳ） 上．深鉢・浅鉢・底部、下．深鉢・浅鉢
- 図版39 遺物（縄文Ⅳ・Ⅲ） 上左．深鉢、上右．深鉢、下．深鉢・底部
- 図版40 遺物（縄文Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ） 深鉢（68・101・103・105・107）浅鉢（103）
- 図版41 遺物（縄文Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ） 深鉢
- 図版42 遺物（縄文Ⅲ） 上．深鉢・浅鉢、下．深鉢・浅鉢
- 図版43 遺物（縄文Ⅲ） 上．深鉢・浅鉢、下．深鉢・浅鉢
- 図版44 遺物（縄文Ⅲ） 上．深鉢・浅鉢、下．深鉢・浅鉢
- 図版45 遺物（縄文Ⅲ） 上．深鉢・浅鉢・底部、下．深鉢・浅鉢
- 図版46 遺物（縄文Ⅲ） 上．深鉢・浅鉢、下．深鉢・浅鉢
- 図版47 遺物（縄文Ⅲ・Ⅱ） 上．深鉢・浅鉢・底部、下．深鉢・浅鉢・底部
- 図版48 遺物（縄文Ⅱ） 上．深鉢、下．浅鉢・底部
- 図版49 遺物（縄文Ⅱ） 上．深鉢・浅鉢・底部、下．深鉢・浅鉢
- 図版50 遺物（縄文Ⅱ） 上．深鉢・浅鉢、下．深鉢・浅鉢
- 図版51 遺物（縄文Ⅱ） 上．浅鉢、下．深鉢・底部
- 図版52 遺物（縄文Ⅱ） 上．浅鉢、下．浅鉢・壺
- 図版53 遺物（縄文Ⅱ・Ⅰ） 上．深鉢（東海地方系）、下．深鉢・浅鉢
- 図版54 遺物（縄文Ⅰ） 上．深鉢・浅鉢、下．深鉢・浅鉢
- 図版55 遺物（縄文時代晩期・土器） 上．深鉢・浅鉢（攪乱出土）、下．深鉢・浅鉢（攪乱出土）
- 図版56 遺物（縄文時代晩期・土器・土製品） 上左上．浅鉢、上左下．ミニチュア鉢、上右．蓋、下．土偶・土製品
- 図版57 遺物（石製品） 上．石鎌・石錐、下．磨製石斧・打製石斧・石錐・石匙・打製石剣・打製尖頭器
- 図版58 遺物（石製品） 上．直刃削器他、下．ピエス・エスキーエ他
- 図版59 遺物（石製品） 上．石錐、下．磨石・敲石
- 図版60 遺物（弥生時代前期・土器） 上左上．甕、下左．蓋、下右．壺

- 図版61 遺物(弥生時代前期~中期・土器) 上. 壺・甕、上左下. 壺、上右. 壺底部、下. 甕
- 図版62 遺物(弥生時代中期・土器) 上左. 壺、上右. 壺、下左. 壺、下右. 壺
- 図版63 遺物(弥生時代中期・土器) 上左. 甕、上右. 甕、下. 壺・甕・高杯
- 図版64 遺物(弥生時代中期・土器) 蓋(38) 壺(40・41・52) 甕(42) 鉢(50)
- 図版65 遺物(古墳時代中期・須恵器) 杯(1・2) 杯蓋(5~7) 有蓋高杯蓋(9・10) 有蓋高杯(11)
- 図版66 遺物(古墳時代中期・須恵器) 上左上. 有蓋高杯(12) 上左下. 甕(14) 上右上. 杯身(15) 上右下. 杯蓋(20)、下. 有蓋高杯・壺・高杯・杯身・杯蓋
- 図版67 遺物(古墳時代中期・須恵器) 上左. 高杯(25) 上右上. 有蓋高杯(26) 上右下. 壺(28)、下. 甕・壺・器台
- 図版68 遺物(古墳時代中期・土師器) 上左上. 鉢(56) 上左下. 壺(64) 上右上. 壺(63) 上右下. 高杯(61)、下. 甕・高杯・甗他
- 図版69 遺物(古墳時代中期・土師器) 甕(65・66・70・71・73・74・75) 土製支脚(67) 高杯(69)
- 図版70 遺物(古墳時代中期・土師器) 甕(76・77・91) 土製支脚(68) 移動式竈(78)
- 図版71 遺物(古墳時代中期・土師器) 甕(79・82~85・90)
- 図版72 遺物(古墳時代中期・土器) 上. 韓式系土器甕他、下. 製塩土器
- 図版73 遺物(土製品他) 土製紡錘車(15) 鑄造鉄斧(16) 土錘(14) 滑石製双孔円板(17) 輪羽口(18) 須恵器鉄鉢(5)
- 図版74 遺物(縄文Ⅲ~Ⅱ、飛鳥時代・土器他) 上. 須恵器杯・杯蓋・甕、土師器椀他、下左. 緑豆の半割れ、下中. 米(玄米) 圧痕、下右. 米(玄米) 圧痕
- 図版75 遺物(縄文時代晩期・土器の刻目、調整) 口縁端部の刻目(1・2・5・6) 1条凸帯の刻目(7・8・9) 2条凸帯の刻目(3) 体部の二枚貝調整(4)
- 図版76 遺物(縄文時代晩期・土器の調整) 板ナデ(1・2) ケズリ(3・4・5)
- 図版77 花粉化石 1. *Carduo Ideae* 2. *Artemisia* 3. *Gramineae* 4. *Monoletespore* 5・6・7. 状況写真
- 図版78 花粉化石 8~11. 状況写真
- 図版79 花粉化石 12・13. 状況写真
- 図版80 珪酸体化石 1~5. ファン型、6~9. 棒状型、10~12. ポイント型、13・14. サナ型

I 位置と環境

1. 位置

鬼塚遺跡は、東大阪市箱殿町・新町に所在する。遺跡は、東から西に向かってゆるやかに傾斜する扇状地の扇央部、標高10～35m付近に位置する。近鉄奈良線額田駅より西へ約900m、生駒山の西麓を下った所に、旧枚岡電報電話局と東大阪市立枚岡中学校がある。

遺跡の範囲は、この付近を中心に東西800m、南北500mに広がると推定されている。遺跡推定地の小字は「鬼塚」「古下」「惣の丸」「一本木」「柳原」「箱殿」などである。今回の調査地の標高はT.P 12～14m、現在の地名は東大阪市新町456番地で小字「一本木」「古下」の一面に当る。遺跡推定範囲の中では西よりの地で平野部に近い。枚岡中学校から西へ約100m下った所である。国土地理院発行1/25000地形図（生駒山）で見れば、左下隅から上へ1.2cm、左へ6.5cmの地点である。また東高野街道の後身である旧国道170号線と、大阪（玉造）と奈良を結んだ暗奈良街道の交差点の南西隅付近にあたる。

2. 地理的環境

遺跡の位置する扇状地は、背後の生駒山から西下する豊浦川によって形成されたものである。豊浦川のような生駒山地より流れ出した小河川が造った扇状地は、東大阪市北部から八尾市南部にかけての山麓に発達し、0.7～1km（ほぼ、0.9km）の間をおいて流れている。これら中小の河川は山麓部や平野部では、時代によって徐々に流れが異なることが今回の調査も含め最近の調査で明らかになりつつある。このような扇状地は、約15～5万年前に形成されたと考えられる低位段丘で、標高100～10m付近まで広がる。

背後の生駒山地は、新第3紀鮮新世（約1000万年前）から第4紀最新世中頃（約50万年前）までの基盤褶曲によって形成されたものである。主峰の生駒山の標高は642.3mである。生駒山地は、大阪府と奈良県の境に位置する。山地を等高線100m以上の範囲とすると、北の端は交野市私市、南の端は大和川で、南北距離は約27km、東西の幅約11kmのひろがりをもつ。主峰の生駒山を頂点とし、北では標高320m南では標高430mの等高性を保って南北に長く連なる。西の大阪側斜面は、東の奈良盆地側の斜面に比べて急である。

生駒山地を形成する基盤岩類は、黒雲母花崗岩、角閃石—黒雲母花崗閃緑岩、黒雲母石英閃緑岩、閃緑岩質斑れい岩などである。このうち東大阪市上石切町から横小路町にかけて分布する角閃石—黒雲母花崗閃緑岩などが風化した粘土でつくられた土器は、胎土中に有色鉱物の角閃石、黒雲母を多量に含み、「生駒山西麓の土器」として知られている。この土器は縄文時代以降、平安時代まで製作され時代により地域や量に異なりはあるものの、周辺地域にもたらされている。特徴的な胎土と茶褐色を呈する色調から各地の在地の土器と容易に識別できるため、各時代の土器の流通や社会を考えるうえで重要な指標の一つとされている。

本遺跡付近の弥生時代から中世の旧地形は、北に隣接する鬼虎川遺跡の最近の調査成果によれば、西側の段丘西端は縄文海進に伴う海食崖に起因する崖と考えられる。東側は山麓部につ

ながる。北及び南側は、前述した小河川が本遺跡の北端と南端を画して流れていたことが想定される。

地理的に見れば本遺跡は標高10～35mの山麓部に位置するが、すぐ西に平野部が存在し、平野部に隣接する段丘西端に営まれたといえる。

3. 歴史的環境

本遺跡は、既述のように縄文海進にともなう海食崖のすぐ東に隣接して存在する。鬼虎川遺跡で検出された当時の海岸からは、縄文土器（前期～中期前半）や解体痕のある獣骨などが出土している。

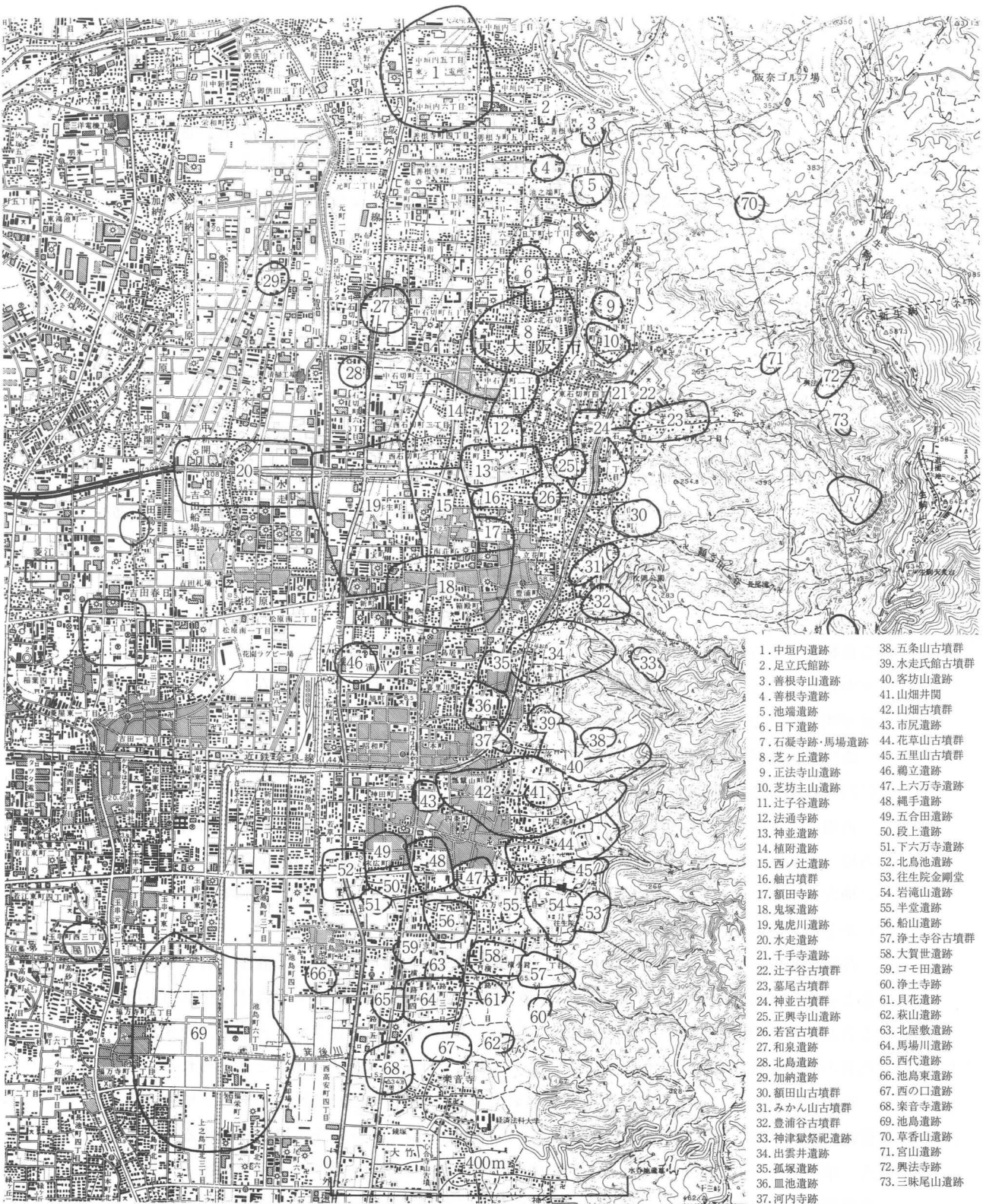
旧石器時代や縄文時代早期にも人々が活動していたことが、北に約500m離れて位置する神並遺跡（旧石器～縄文時代早期）や鬼虎川遺跡の海岸から出土した旧石器により明らかである。特に、神並遺跡からは膨大な量の土器・石器とともに土偶、屋外炉も検出されており、生駒山地を生活圈とする人々の主要拠点と考えられる。本遺跡においても、最近の調査で縄文時代早期の土器が少量出土している。

縄文時代前期～中期前半は、遺構は検出されていないが土器や動植物遺存体が鬼虎川遺跡の海岸から出土しており確実に生活が行われていたことを示している。

縄文時代中期後半～晩期前半の遺跡も、平野部に河内湾から河内潟に変化する水域が広がっていたため山麓部に存在する。中期前半の遺物は鬼虎川遺跡からしか出土していないが、中期後半以降、生駒山地から西下する小河川により南と北を画された段丘上（標高15～25m）にほぼ1ヶ所ずつ集落が存在する。北から南に善根寺（中期末・北3km）日下（後期末～晩期・北2km）芝ヶ丘（後期末～晩期・北1.5km）本遺跡（中期末～晩期）縄手（中期末～晩期・南1.5km）馬場川（中期～晩期・南3km）遺跡である。出土土器から見ると同時に存在したのは中期後半～後期が1～2遺跡、晩期が2～3遺跡程度と考えられる。遺跡の分布状況から見ておそらく、現在の市域の北半と南半で2ないし3集団が同時に居住し時期により居住域を替えたものと考えられる。

縄文時代晩期末から弥生時代初頭の同時期に並存した主な遺跡は、本遺跡の西1kmに水走遺跡と鬼虎川遺跡および北、1kmに位置する植附遺跡がある。水走遺跡は、河内湖縁辺の低湿な地に晩期後半以降、営まれた集落で貝塚と共に少量の弥生土器と多量の縄文土器が同時に使用されている。鬼虎川遺跡は、晩期末のいわゆる長原式土器が少量出土している。植附遺跡は、ごくわずかな縄文土器と多量の現状では河内地方で最も古いものの一つと考えられる畿内第I様式古・中段階（以下、煩雑になるため畿内を略す）に属す弥生土器が出土している。

弥生時代中期には、山麓部に本遺跡のほか植附・西ノ辻・縄手、山麓に近い平野部には鬼虎川・水走遺跡が存在する。植附・鬼虎川・西ノ辻の3遺跡は、それぞれ河川・海食崖などの自然地形で画されているが隣接して存在する。出土遺物から見て、弥生時代における遺跡の開始順序は、植附→鬼虎川→西ノ辻遺跡の順であるが、遅くとも第II様式の終り頃から第IV様式まで3遺跡が同時に存在していたことは確実である。一つの集落と見れば東西1.4km、南北1.6km



- | | |
|--------------|-------------|
| 1. 中垣内遺跡 | 38. 五条山古墳群 |
| 2. 足立氏館跡 | 39. 水走氏館古墳群 |
| 3. 善根寺山遺跡 | 40. 客坊山遺跡 |
| 4. 善根寺遺跡 | 41. 山畑井岡 |
| 5. 池端遺跡 | 42. 山畑古墳群 |
| 6. 日下遺跡 | 43. 市尻遺跡 |
| 7. 石凝寺跡・馬場遺跡 | 44. 花草山古墳群 |
| 8. 芝ヶ丘遺跡 | 45. 五里山古墳群 |
| 9. 正法寺山遺跡 | 46. 鶴立遺跡 |
| 10. 芝坊主山遺跡 | 47. 上六万寺遺跡 |
| 11. 辻子谷遺跡 | 48. 縄手遺跡 |
| 12. 法通寺跡 | 49. 五合田遺跡 |
| 13. 神並遺跡 | 50. 段上遺跡 |
| 14. 権附遺跡 | 51. 下六万寺遺跡 |
| 15. 西ノ辻遺跡 | 52. 北鳥池遺跡 |
| 16. 袖古墳群 | 53. 往生院金剛堂 |
| 17. 額田寺跡 | 54. 岩滝山遺跡 |
| 18. 鬼塚遺跡 | 55. 半堂遺跡 |
| 19. 鬼虎川遺跡 | 56. 船山遺跡 |
| 20. 水走遺跡 | 57. 浄土寺谷古墳群 |
| 21. 千手寺遺跡 | 58. 大賀世遺跡 |
| 22. 辻子谷古墳群 | 59. コモ田遺跡 |
| 23. 墓尾古墳群 | 60. 浄土寺跡 |
| 24. 神並古墳群 | 61. 貝花遺跡 |
| 25. 正興寺山遺跡 | 62. 萩山遺跡 |
| 26. 若宮古墳群 | 63. 北屋敷遺跡 |
| 27. 和泉遺跡 | 64. 馬場川遺跡 |
| 28. 北鳥遺跡 | 65. 西代遺跡 |
| 29. 加納遺跡 | 66. 池島東遺跡 |
| 30. 額田山古墳群 | 67. 西の口遺跡 |
| 31. みかん山古墳群 | 68. 楽音寺遺跡 |
| 32. 豊浦谷古墳群 | 69. 池島遺跡 |
| 33. 神津嶽祭祀遺跡 | 70. 草香山遺跡 |
| 34. 出雲井遺跡 | 71. 宮山遺跡 |
| 35. 孤塚遺跡 | 72. 興法寺跡 |
| 36. 皿池遺跡 | 73. 三味尾山遺跡 |
| 37. 河内寺跡 | |

第1図 調査地周辺遺跡分布図

の大集落が想定される。河内における最大規模の集落としても過言ではない。それぞれの集落は、独自の墓域をもつことから、一定の独自性を保ちながら密接なつながりを保持していたと考えられる。本遺跡は、西ノ辻・鬼虎川遺跡の大集落に隣接して位置し特に第Ⅱ～Ⅲ様式には同時に存在していたことから濃密な関係を保持していたことは想像に難くない。上記3遺跡に本遺跡の範囲を加えれば、東西は変化がないが南北は1.5kmとなり河内湖東辺における最大の規模をもつ大集落群が想定される。河内湖南辺に位置する瓜生堂・山賀遺跡なども群としてみれば同様の規模をもつ。

これらの、大集落を支えた背景は後の時代に上述の遺跡がほとんど全て縮小することから河内湖縁辺の耕作地と背後の生駒山地の存在だけでは考えられない。おそらく、水運など他の富を得る手段が存在したものと考える。鬼虎川遺跡で出土した銅鐸をはじめとする鋳型や金属製品の存在も、この背景を踏まえて理解できると考える。

弥生時代後期は本遺跡と西ノ辻遺跡を残し、鬼虎川遺跡と植附遺跡が廃絶する。この時期は、山麓に近い平野部では本遺跡の南2.5kmに北鳥池遺跡が知られるが、小規模な集落と考えられる。むしろ、主な居住地は馬場川・上六万寺遺跡（南2km）など、より山側に移動しているがいずれも小規模な集落と考えられる。

古墳時代の集落も神並・縄手遺跡など山麓部が中心である。平野部では鬼虎川遺跡で5世紀後半から6世紀にかけての短期間に営まれた集落が知られている。これらの集落は、現状では5世紀後半から営まれるものが多い。しかし、今後調査が進めば後述する背後の古墳の存在などから見て居住地点は替えるものの、山麓部において全期間にわたって存在したいくつかの遺跡が明らかになると思われる。

弥生時代後期から古墳時代にかけての集落の状況変化は、原因の一つに自然環境の変化と共に旧大和川の運ぶ土砂により河内湖の水運が衰退したことが考えられる。

古墳は、南2.5kmに前期末のえの木塚古墳（径約30mの円墳）が、北0.5kmに中期前半の塚山古墳（径約20mの円墳）が知られるほか、市域南半の山麓、標高50～150mの間の各河川沿いに横穴式石室を主体とする後期群集墳が存在する。市域の北半は、後期の単独墳が存在する。しかし群集墳は知られていない。

後期群集墳の大半は、5～10基程度で、古墳の営まれた河川を利用する在地の有力家長の墳墓と考えられる。例外は、南東2.3kmに位置する山畑古墳群で、隣接する客坊・花草山古墳群と合わせ約100基からなる中規模群集墳である。山畑古墳群は調査された古墳中、約5割から馬具の副葬が確認され、大和政権に馬に関する職掌で仕えた氏族の古墳群と考えられる。

終末期の群集墳は、7世紀前半に築造された墓尾古墳群（北東1.5km）がある。単独墳は、標高約360mの山岳部に営まれた切り石造りの石室をもつイノラムキ古墳が存在する。また最近、植附遺跡から5世紀後半から7世紀後半にかけての小型低方墳や小石室を検出した。従前、平野部で検出されていたこの種の古墳が、山麓部においても存在したことが明らかになると同時に、横穴式石室の被葬者との階層差を示していると考えられる。

飛鳥時代から奈良時代にかけては山麓に石凝寺（北東1.5km）・法通寺（北東0.7km）・河内寺（南1.5km）が造営される。石凝寺は行基が建立し、残る2寺は在地豪族の氏寺と想定される。河内寺は、郡名を冠することから郡衙に付属した郡寺の性格もあわせもつ。寺院を建立した氏族が関係すると思われる火葬墓や土器棺墓が、山麓部上位付近で検出されている。現状は、ほとんど単独出土であるが、群集するものに墓尾古墳群隣接地で検出がある。

飛鳥時代は、遺物が西ノ辻遺跡などで出土しているが集落を示す遺構はまだ知られていない。今回、報告する土壌が現在市内で知られる唯一のものである。今後調査が進めば明らかになるであろう。

奈良時代の集落は神並遺跡と本遺跡で最近、検出されている。本遺跡では今回の調査地点の北東約500m（第13次調査・標高28～32m）付近で、奈良時代前期から平安時代初頭までの下級貴族の屋敷跡が明らかにされている。この下級貴族は、出土遺物などから法通寺と関係していたと推定している。

水走遺跡からは遺構は検出されていないが奈良時代、河内湖の縁辺で行なわれた祭祀に用いられたミニチュアの竈や甕など多数が出土し、西ノ辻遺跡でも同種の遺物や国産の小型海獣葡萄鏡が検出されている。これらの遺物は、律令国家が行った祭祀をこの地に居住した人々が忠実に実行したことを示している。

平安時代中期の集落は西ノ辻遺跡で断片的に知られている以外、明確でないが平安時代後期以降、室町時代の集落は本遺跡や神並・西ノ辻・水走・上六万寺遺跡などで検出されている。

以上のように本遺跡の位置する山麓部は、旧石器時代から現代に至るまで人々が居住した地域と言える。なかでも本遺跡は、山麓を南北に通る東高野街道と河内平野を東西に通る奈良街道の交差地を含む範囲に位置する。両街道は、いつから存在したか明らかでないが東高野街道は沿道に縄文時代以降、各時期の遺跡が存在し早くから利用されたことは間違いなく、奈良街道も難波と奈良を結ぶ最短ルートとして遅くとも奈良時代に存在したことはまちがいない。古代よりの交通の要衝に位置する遺跡といえることができる。

参考文献

藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

藤井直正・都出比呂志他 1967年『枚岡市史』第1巻本編 枚岡市史編纂委員会

東大阪市文化財協会 1984『甦る河内の歴史』

他、各遺跡調査報告書

Ⅱ 調査概要

1. 従来 of 調査

平成7年現在、鬼塚遺跡の調査は20次に及んでいるがここでは今回報告する調査を実施する以前の調査成果を概観（第2図）したい。

本遺跡は、昭和35年に旧枚岡電報電話局の建設工事が行われた際に、排出された土砂の中から多数の縄文時代晩期土器と弥生時代前期土器が発見されたことで存在が知られた。この地点は標高18m付近で当初、A地点と呼ばれたが現在では第1次調査^{注1}と称している。

同年、今回の調査地の南に隣接する地点で第Ⅱ様式に属す完形の高杯と土師器・須恵器が採集された。当初は小字から古下遺跡^{注2}と命名されたが、後に本遺跡の一画にあたる地点であることが判明した。

昭和40年には本調査地と道（旧170号線）を隔てて東に隣接する場所（最初の遺物発見地点からは西に約100m・B地点）で枚岡農業共同組合の建設工事が行われ再度多数の縄文晩期土器と土偶1点などが発見された。現在第2次調査^{注3}と称している。

昭和43年には第1次調査地の北に隣接する場所（標高19m付近）で、初めて発掘調査^{注4}（C地点・現在第3次調査と称す）が実施され、縄文時代晩期土器と弥生時代前期土器が同一包含層中から出土したほか、弥生時代後期の壺棺も検出されている。この調査で畿内における縄文時代から弥生時代に移行する状況を知るうえに、本遺跡が重要な位置を占めることが認識されるに至った。

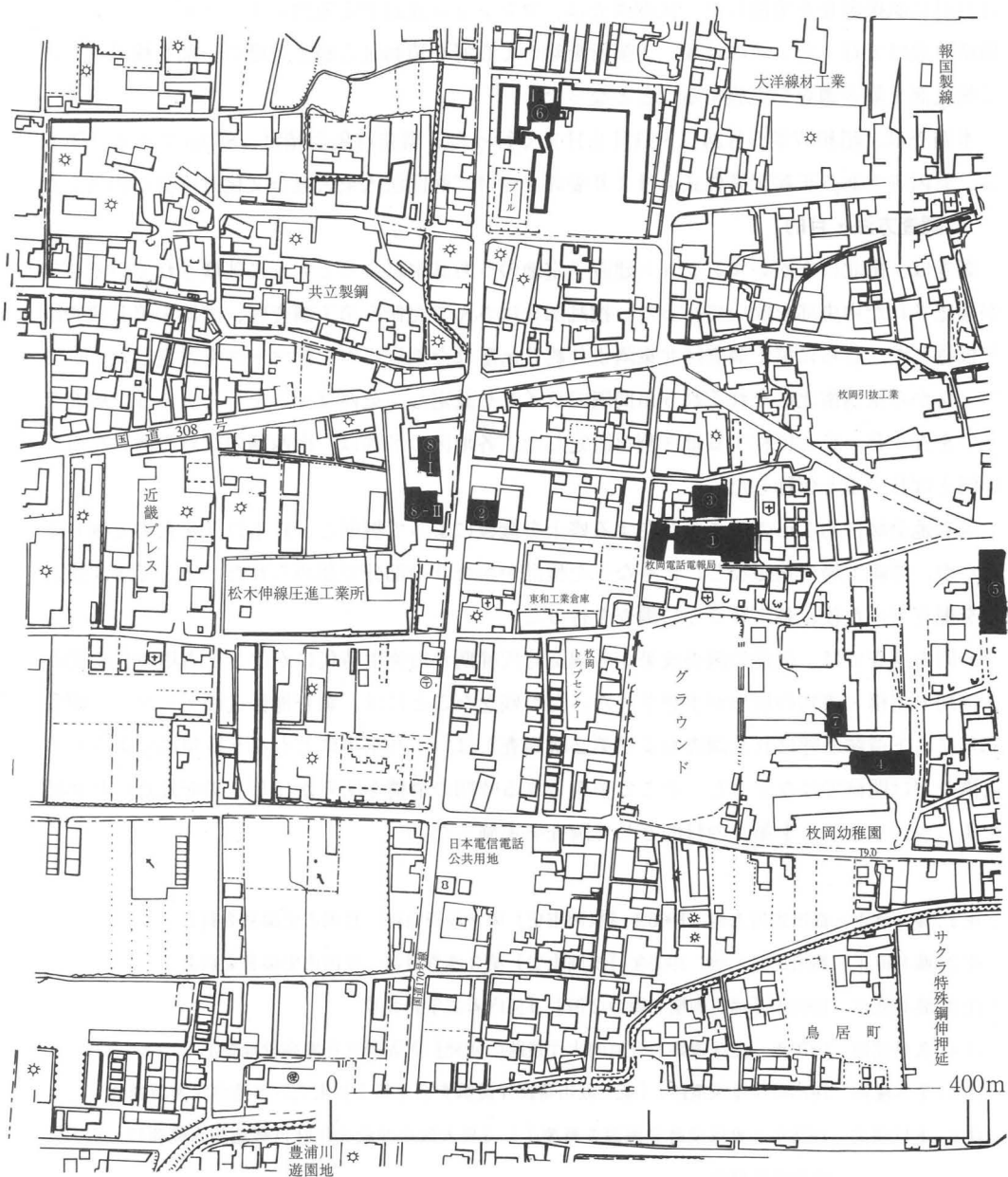
昭和47年、枚岡中学校の校舎改築（第1次調査地の南約200m）にともない第4次発掘調査^{注5}が実施された。遺構は検出されなかったが弥生時代後期の土器を中心に縄文時代晩期と弥生時代中期、古墳時代前期等の土器や土偶（1点）が出土した。

昭和53年には、第1次調査地の東約200m、標高25m付近で第5次調査^{注6}が実施され、弥生時代後期の火災にあった竪穴住居1棟をはじめとして弥生時代前期や古墳時代前期の土壇、平安時代の掘立柱建物が検出されている。特に竪穴住居は、建築部材が炭化して遺存しており当時の住居の構造を知るうえに貴重な資料とされる。

昭和56年8月、枚岡西小学校校舎増築に伴い行われた第6次調査（第1次の北約300m）では古墳時代中期末～後期初頭の溝と、これに伴う須恵器・土師器や滑石製勾玉などが検出されている。縄文時代や弥生時代の遺構・包含層は、認められずこの地点まで分布が及んでいないことが明らかになった。

同年10月、枚岡中学校校舎増築工事にともなって実施された第7次調査（第1次の南約150m）では、古墳時代前期初頭の掘立柱建物2棟（1×1・1×2間）と溝1条が同時期の土師器とともに検出されている。他に弥生時代後期の土器や奈良から平安時代の須恵器・土師器が認められるが、縄文時代晩期後半や弥生時代前期の土器は出土していない。

以上のように本遺跡は、時代により居住地を替えるものの縄文時代晩期から平安時代に至る



第2図 調査地位置図

複合遺跡であることが判明している。

2. 調査に至る経過

今回の調査地は当初、江戸時代の水車工業の伝統を引く地場産業の一つである伸線工場が存在していた。この跡地にマンションが建設されることとなり、遺跡が破壊されるため事前調査を実施することとなった。

伸線工場の基礎で地下が破壊されていることも考えられるため、まず昭和57年4月12日～4

月14日に試掘調査を実施した。試掘調査は、マンション建設予定範囲に4×2mのトレンチ5箇所を設けて行った。その結果、1箇所を除いて良好な遺物包含層と遺構の一部を検出したので攪乱部を除き調査を実施することとなった。

本調査は、昭和57年5月24日～11月9日まで行った。調査対象面積は、850㎡である。調査は、原因者である正起工業株式会社より委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が担当した。

3. 調査方法・目的

調査は、南北にながいマンション建設予定地のうち試掘によって完全に破壊されていることが確認された中央部を除いて行った。攪乱部をはさんで北側を第Ⅰ調査区、南側を第Ⅱ調査区と仮称した。さらに第Ⅰ調査区北東隅より約6m離れた地点にベンチマークを設定した。このマークから東西南北にそれぞれ5m間隔でラインを設定し、東西ラインを1・2・3、南北ラインをA・B・Cと仮称する地区割を設定した。各地区の名称は、南西隅の交点の名称をもちい例えばB-1と仮称した。

調査地全域に約1mの厚さで存在する盛土を機械によって掘削し、耕土以下を人力で掘り下げたが、伸線工場の基礎などにもなった攪乱がかなりの部分で認められた。そこでまず攪乱部を掘り下げた後、各土層ごとに調査を行った。

今回の調査では、従前の調査成果から縄文時代晩期から弥生時代にかけてと古墳時代中期から後期の遺構・遺物の検出が予想された。ただ残念なことには、調査地付近のデーター（昭和35年に古下遺跡と呼ばれた調査および第2次調査）はいずれ工事にもなう採集品であるため遺構などは明確ではなかった。そこで予想される時期の遺構を明らかにし、調査地点の具体像を明らかにすることを第1の目的として調査を実施した。

注1. 藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

注2. 藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

注3. 藤井直正 1969年「縄文晩期土偶の2例」『河内考古学』3号

注4. 久貝健他 1970年「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高校地歴部

注5. 芋本隆裕 1975年「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会

注6. 下村晴文 1978年「鬼塚遺跡発掘調査概要Ⅰ」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17』東大阪市教育委員会

芋本隆裕 1979年「鬼塚遺跡Ⅱ、若江遺跡発掘調査報告」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19』東大阪市教育委員会



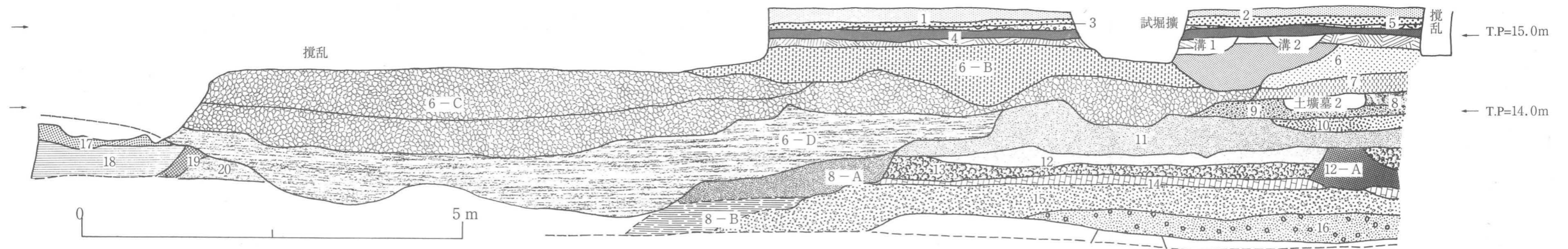
第3図 調査地区割図

Ⅲ 層 序

調査地は、前述の様に生駒山より西に派生する扇状地のゆるやかに傾斜する南側扇側部にあたる。扇状地化した段丘の土層の堆積は、周知のようにかなり複雑な様相を呈する。今回の調査地も、東西23m南北55mにわたるため、その層序は、第Ⅰ調査区と、第Ⅱ調査区でかなり異なる。したがって、それぞれの調査区の層序について堆積状況を明瞭に把握できた第Ⅰ調査区の南北断面、第Ⅱ調査区の東西断面を中心に模式化して述べ、ついで両者の土層の対応を行いたい。調査地全域に、約100cmの厚さの盛土と20cmの厚さで工場が建設される直前の耕土が認められたが、層序の記述から省く。

1. 第Ⅰ調査区

- 第1層 暗緑灰色砂質土（床土）層厚約20cm。瓦器、土師器、須恵器、弥生土器などの細片が出土。
- 第2層 灰褐色砂質土。層厚7～12cm。北に行くほど厚くなる。土師器、須恵器出土。
- 第3層 青灰色砂礫。層厚4～8cm。第4層上面の凹地を埋めた状態で存在する。土師器、須恵器出土。
- 第4層 黄褐色砂質土。層厚8～13cm。上面より土壌3を検出。土師器、須恵器および種類不明の魚の骨出土。
- 第5層 黄褐色シルト。層厚8～12cm。北端で厚くなる傾向が認められる。上面より、溝、土壌などを検出。土師器、須恵器および馬の下顎臼歯出土。
- 第6層 黒灰色砂質土。層厚32～40cm。後述の自然流路1で切られているため、2ラインより北でしか検出できなかったが、南に行くほど厚くなる傾向がある。第Ⅱ様式の弥生土器（第53図50）と晩期後半の縄文土器少量出土。この層以下、第15層までは南側を各時期の自然流路により切られる。
- 第6—A層 黄灰色砂質土。最大の厚さ60cm。自然流路1の上部肩口の堆積土。土師器、須恵器および馬の切歯出土。
- 第6—B層 黄褐色シルト質粘土。厚さ32～80cm。自然流路1の上部堆積土。上面は古墳時代に削平を受けたとみえ平坦であるが、下面は凹凸が激しい。弥生土器、土師器、須恵器出土。
- 第6—C層 灰黒色砂礫。最大の厚さ120cm。1ラインより南に存在し、4ライン付近まで検出できたが、それから南については攪乱のため不明。2と3ライン中間より南では、礫の多少により上部と下部が分層できるが、出土遺物などに違いが認められないことから同一層として扱う。第Ⅴ様式の弥生土器と少量の庄内式・布留式土器出土。
- 第6—D層 黄褐色砂。最大の厚さ100cm。2ライン以南に存在する。南端は、攪乱により不明であるが、残存部分より推定すると4ライン付近と考えられる。第Ⅰ～Ⅳ様

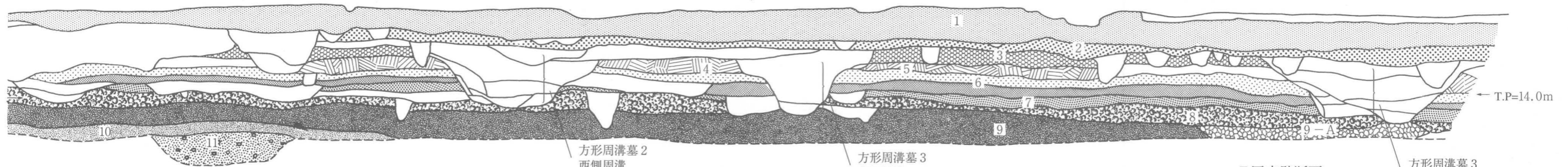


I区南北断面

- 1 暗緑灰色砂質土 (床土)
- 2 灰褐色砂質土
- 3 青灰色砂礫
- 4 黄褐色砂質土
- 5 黄褐色シルト
- 6 黒灰色砂質土
- 6-A 黄褐色砂質土
- 6-B 黄褐色シルト質粘土
- 6-C 灰黒色砂礫
- 6-D 黄褐色砂

- 7 暗黄灰色砂質土
- 8 黒灰色砂質粘土
- 8-A 黒色粘土
- 8-B 黒色シルト
- 9 黒灰色砂礫
- 10 暗青灰色砂質土
- 11 暗茶灰色粘土
- 12 茶灰色粘土
- 12-A 暗黄灰色砂質粘土

- 13 黄灰色粘土
- 14 暗黄灰色粘土
- 15 黄褐色砂質粘土
- 16 黄褐色粘土
- 17 黒灰色粘土
- 18 青灰色シルト
- 19 青灰色シルト質粘土
- 20 黒褐色砂混じり粘土



II区南壁断面

- 1 暗緑灰色砂質土
- 2 暗赤褐色砂質土
- 3 暗黄褐色砂質土
- 4 黄灰色シルト
- 5 黒灰色砂質土
- 6 黒灰色砂質土

- 7 黒灰色粘土
- 8 暗黄灰色粘土
- 9 暗灰色粘土
- 9-A 暗灰色砂礫
- 10 暗茶灰色粘土
- 11 黄褐色粘土

第4・5図 調査地土層断面図

式の弥生土器と、滋賀里Ⅲb式を中心に同Ⅳ式併行の土器を少量含む晩期縄文土器およびシカの左中足骨など出土。

- 第7層 暗黄灰色砂質土。厚さ16～24cm。南側は、第6—C層で切られている。北に行くほど厚くなる傾向がある。晩期後半縄文土器少量出土。
- 第8層 黒灰色砂質粘土。厚さ16～20cm。1ラインより北に認められる。上面より土壙墓1・2、土壙15を検出。後期縄文土器出土。
- 第8—A層 黒色粘土。最大の厚さ48cm。2ラインより、3ラインまでに存在。後期縄文土器少量と晩期縄文土器、石斧およびサワラの歯、シカの角、イノシシの左側頭骨などが出土。晩期縄文土器は、滋賀里Ⅲb併行に属す。出土遺物と堆積状況からみて、第8および9層の上面より本来切り込んでいた自然流路の堆積土と思われる。
- 第8—B層 黒色シルト。厚さ44cm以上。第8—A層と同じ自然流路内の堆積土。遺物は出土しなかった。
- 第9層 黒灰色砂礫。厚さ24～12cm。3cm以下の礫と砂より成る。1と2ラインの間付近より北に存在。1ラインより北では上部に第8層が堆積する。南側は自然流路により切られる。遺物は出土しなかった。
- 第10層 暗青灰色砂質土。厚さ20cm。1と2ラインの間より北に存在。第11層の凹地をおおうように堆積。中期末、後期縄文土器出土。
- 第11層 暗茶灰色粘土。厚さ68～20cm。自然流路に南側を切られるため2と3ラインの間より北に存在。北に行くほど薄くなる傾向がある。中期末、後期縄文土器出土。
- 第12層 茶灰色粘土。厚さ24～12cm。2ラインより北に第13層の凹地を埋める状態で存在。上面で溝38、土壙48を検出。中期末、後期縄文土器出土。第12—A層（自然流路）が北端で切り込む。
- 第12—A層 暗黄灰色砂質粘土・暗黄灰色粘土。最大の厚さ32cm。1ラインより北に存在。北東方向よりの浅い自然流路内の堆積土と考えられる。
- 第13層 黄灰色粘土。厚さ32～9cm。2と3ラインの間より北に存在。この層以下、第16層までは生駒山西麓の扇状地化した段丘に存在する通有のいわゆる地山である。
- 第14層 暗黄灰色粘土。厚さ16～8cm。2と3ラインの間より北に存在。北に行くほど厚くなる傾向が認められる。1ライン付近で第12—A層によって切られる。
- 第15層 黄褐色砂質粘土。厚さ40cm。3ラインより北に存在。
- 第16層 黄褐色粘土。厚さ36cm。2ラインより北に存在。
- 第17層 黒灰色粘土。厚さ20cm以上。自然流路1に切られて4ライン以南に存在。上部は攪乱を受ける。第2調査区まで広く分布する。
- 第18層 青灰色シルト。厚さ40cm以上。4ライン以南に存在。後期縄文土器少量出土。以下、20層まで自然流路の堆積土。
- 第19層 青灰色シルト質粘土。厚さ20cm。第18層と同じ自然流路内の堆積土。堆積状況か

らみて肩口の堆積と思われる。遺物は出土していない。

第20層 黒褐色砂混じり粘土。厚さ28cm以上。第19層に切られているが、この層も自然流路内の堆積土と思われる。

層の形成時期

各層の形成時期は、出土遺物と層の切り合い関係からみて第1層近世以降、第2・第3層飛鳥時代、第4層古墳時代後期前半、第5層古墳時代後期初頭、第6・第7層弥生時代中期初頭（第Ⅱ様式）第17層縄文時代晩期中頃、第8～第12層縄文時代後期と考えられる。

自然流路の堆積である第6—A・B層は古墳時代後期初頭、第6—C層は弥生時代後期から古墳時代前期（布留式）、第6—D層は弥生時代中期、第8—A・B層縄文時代晩期中頃（滋賀里Ⅲb）第18～20層縄文時代後期と考えられる。

2. 第Ⅱ調査区

第1層 暗緑灰色砂質土（床土）層厚12～44cm。東に薄く西に厚く存在。調査区西端では、上面が1段下がり棚田であった状況が認められた。陶磁器・瓦器・土師器・須恵器・弥生土器・晩期縄文土器出土。

第2層 暗赤褐色砂質土。層厚8～24cm。東端上面のT.P15.2m、西端はT.P14.8mである。上面で近世以降の耕作に伴うと思われる溝などを検出。土師器・須恵器と少量の弥生土器、晩期縄文土器および馬の臼歯出土。

第3層 暗黄褐色砂質土。層厚16～24cm。上面から自然流路2・3・4が切り込む。また、上面で古墳時代の土壌、ピット、溝、弥生時代の方形周溝墓、木棺墓などの遺構を検出。第Ⅰ様式新段階の土器と晩期縄文土器少量出土。

第4層 黄灰色シルト。層厚16～20cm。滋賀里Ⅳ式併行の土器を中心にⅤ式が少量混じる晩期縄文土器出土。

第5層 黒灰色砂質土。層厚14～24cm。東端上面のT.P14.6m、西端はT.P14.1mである。南東隅の上面で、土壌を検出。滋賀里Ⅳ式を中心にⅤ式併行の土器が少量混じる。晩期縄文土器およびシカ、イノシシの歯など出土。

第6層 黒灰色砂質土（下層）。層厚8～20cm。10ラインより南の調査区南半に存在。青灰色シルトがブロック状に混じることにより上層と区別した。上面で溝33を検出。滋賀里Ⅳ式を中心にⅤ式併行の土器が少量混じる。晩期縄文土器およびシカの角など出土。

第7層 黒灰色粘土。層厚12～20cm。上面で溝29、土壌などを検出。後期縄文土器少量と滋賀里Ⅳ式併行の晩期縄文土器およびシカの歯など出土。北に行くほど砂、礫が多く含まれる。

第8層 暗黄灰色粘土。層厚16～32cm。（W—13ラインより西には存在しない。）滋賀里Ⅲb式に属す晩期縄文土器と、少量の後期縄文土器および種類不明の動物遺存体出土。上面よりピット、土壌など検出。

第9層 暗灰色粘土。層厚20～40cm。北に行くほど厚くなる傾向がある。遺物は出土しなかった。上面より第9—A層が切り込む。

第9—A層 暗灰色砂礫。最大層厚20cm。調査区南西隅付近で検出した第9層上面より切り込む小さな自然流路の堆積土。

第10層 暗茶灰色粘土。層厚16～48cm。西に行くほど傾斜して下がるため東西断面では東側でしか認められない。南に行くほど砂分が減少する。出土遺物はない。

第11層 黄褐色粘土。層厚72cm以上。遺物は出土していない。

層の形成時期

各層の形成時期は、出土遺物などからみて第1層近世以降、第2層古墳時代後期前半、第3層弥生時代前期後半（第I様式新段階）、第4～6層縄文時代晩期後半（滋賀里Ⅳ～Ⅴ）、第7層縄文時代晩期後半（滋賀里Ⅳ）、第8層縄文時代晩期中頃（滋賀里Ⅲb）、第9層縄文時代後期以前と判断した。

3. 第I調査区と第II調査区の層序の対応

2ヵ所の調査区で明らかになった土層のうち、同一層は第I調査区の第17層（以下1—17層と略す。他の層も同様）と第II調査区の第7層（第I調査区と同様に略す）と、1—16層と2—11層の2層と両地区の第1層である。その他の層は、攪乱や自然流路によって切られていることからつながりも明らかにできない。

このため、前記の層の形成時期から各層の対応をみてみたい。1—2・3層は、第II調査区では存在しない。本来存在しないのか、後世に削平されたのかは不明だが、2—1層の出土遺物からみると存在していたとしても遺物の量などは多くないと思われる。1—4層と2—2層は、ほぼ同一時期に形成されたと思われる。

1—5・6・7層は、第II調査区では、存在しないが、この時期の遺構が認められるため、本来これらに対応する層が存在したが、古墳時代に削平された可能性が高い。2—3層は第I調査区に存在しないが、この時期の遺物が出土していないことからみて本来なかった可能性が高い。

2—4・5・6・8層も第I調査区に認められないが、2—8層上面にこの時期の土壌墓が、検出されたことから、1—7層と1—8層の間に存在したと考えられる。しかし、1—17層で遺物が出土していないことや、第I調査区全体のこの時期の出土遺物をみると、遺物包含の多少は別として2—7・8層に対応する層の存在は想定できるが、2—4～6層は本来より存在していなかったと考えられる。

1—8～11層は、第II調査区では認められないが、出土遺物からみて2—8と2—9層の間に存在したと考えられる。しかし、第II調査区では、縄文時代中期末の土器が出土しておらず、後期の土器も少量であることから、これらの層は、主として第I調査区に存在したものと考えられる。1—13～15層は、2—9・10層に対応する地山（段丘）の上部層と思われる。

IV 遺 構

今回の調査では、縄文時代の後期から近代にいたる各時期の遺構を検出した。溜池など近代の遺構を除き検出した遺構の内訳は、土壙48基、ピット87個、溝58条（方形周溝墓の周溝3条を含む）落ち込み2ヵ所、木棺墓1基、土壙墓2基である。

ここでは各時期の主要な遺構について記す。個々の遺構に関しては、別載の遺構一覧表（表1）を参照されたい。

1. 縄文時代の遺構

この時代の遺構面を5面確認したので、縄文Ⅰ～Ⅴとして古い時期（Ⅴ）から順に記述する。縄文時代後期（縄文Ⅴ）の遺構（茶灰色粘土上面遺構）

第Ⅰ調査区の北東隅近くで溝1条（溝38）、土壙1基（土壙48）を検出した。

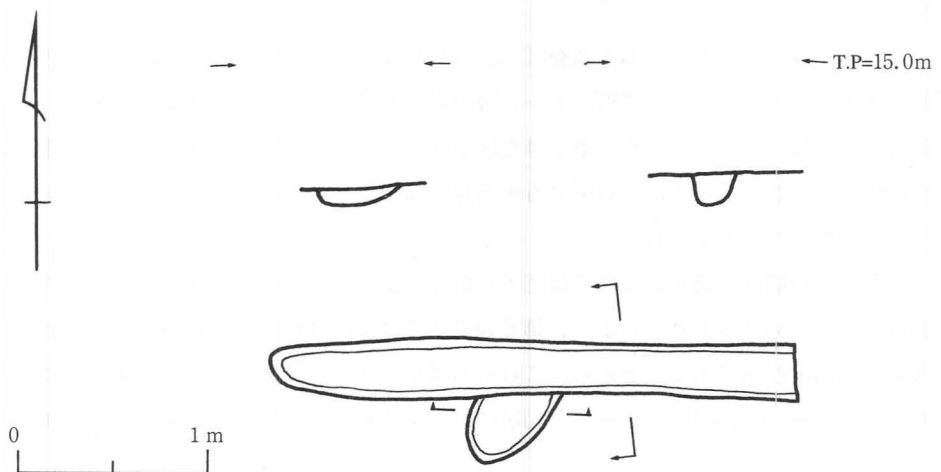
溝38

幅24cm、深さ16cmの溝で断面形はU字形を呈し、東から西に走る溝である。長さ1.4mを検出した。東端は調査区外に続くが、確認した東端と西端の底面の比高は、3.4cmである。堆積土は、淡灰青色砂質土で遺物は出土しなかった。

土壙48

溝38によって北端を切られる。平面形は長軸40cm以上、短軸38cmの楕円である。深さ8cmで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は暗灰黒色粘土である。遺物は出土しなかった。

両遺構とも遺物が出土しなかった。しかし遺構面である茶灰色粘土層と、遺構をおおう暗茶灰色粘土層が、縄文時代後期前半の包含層であるため、この時期に属すと考えられる。切合いが認められたことから両者の遺構に時間差が存在する。この時期の遺構と遺物は、従来、鬼塚遺跡で知られておらず、本遺跡の開始を考える上に重要である。当時の集落は、包含層の堆積状況からみて今回の調査地の北から北東にかけて存在したと推定される。



第6図 縄文時代後期遺構（縄文Ⅴ）平面図

縄文時代晩期（縄文Ⅳ～Ⅰ）の遺構

この時期の遺構は、第Ⅰ調査区で、遺構面にして1面、第Ⅱ調査区で4面を検出した。上層の遺構面より、縄文Ⅰ～Ⅳとし、記述は、古い時期から順（Ⅳ～Ⅰ）に行なう。

縄文Ⅳ（第Ⅰ調査区・黒灰色砂質粘土、第Ⅱ調査区暗黄灰色粘土上面遺構）

第Ⅰ調査区で、土壙墓2基と土壙1基を検出した。第Ⅱ調査区の遺構は、暗灰色粘土上面で検出したが、断面観察により遺構面が、一層上の暗黄灰色粘土上面であることが判明した。遺構は、ピット44個、土壙19基、小溝2条、落ち込み2カ所である。

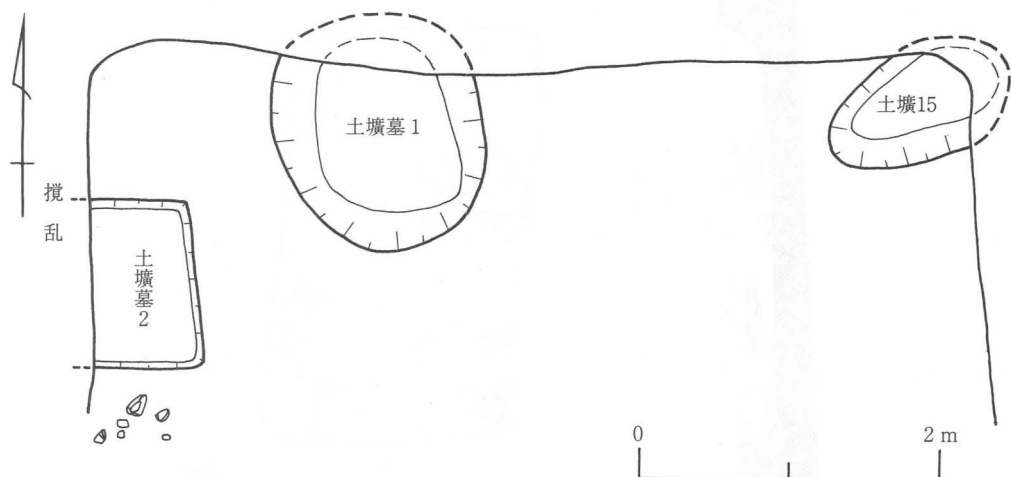
土壙墓1

第Ⅰ調査区北端のほぼ中央で確認した平面形は長軸150cm（推定、検出した長さ120m）短軸140cmの楕円形を呈する。北端は側溝によって破壊される。深さは32cmで埋土は、黒灰色粘土である。断面形は浅い皿状を呈する。内部より成人6人、小人1人を含む8個体以上の一部焼けた骨や歯を含む人骨を検出した。人骨の埋葬状況は、8個体分の下顎骨を土壙の底縁にそって置き、その内部に長管骨を積み重ねていた。土壙の中央よりやや北によった長管骨の直上に人頭大の角礫を置いていた。焼骨は、これらの骨にかぶされた状態で検出した。なお、焼骨の中には、生焼けの骨や、歯の一部も含まれていた。埋土内より晩期縄文土器19点と焼土、サヌカイトフレーク各1点が出土した。

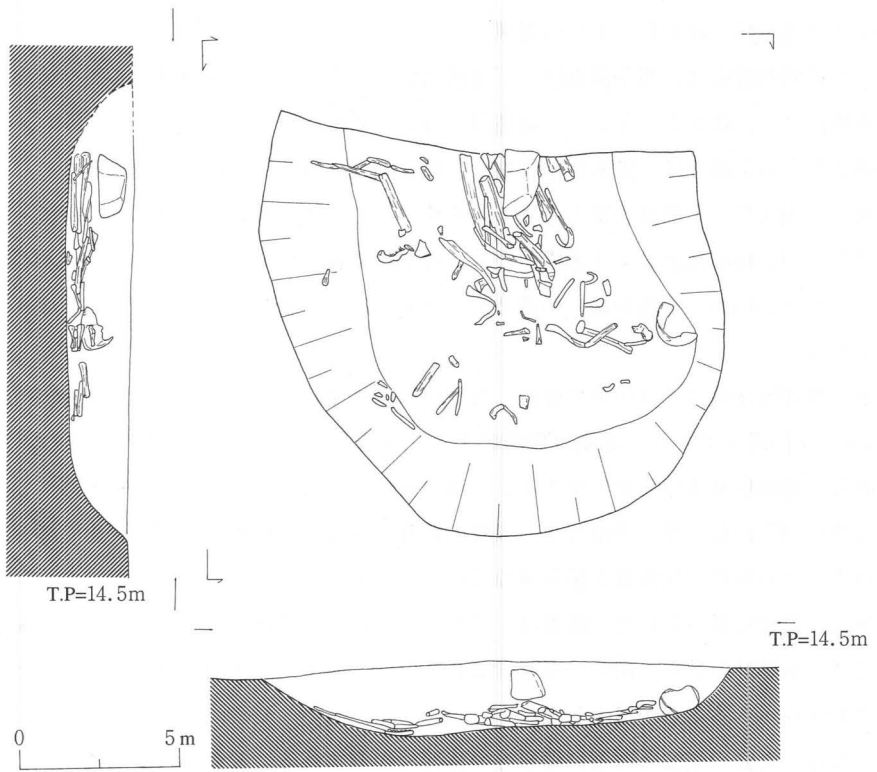
土器は、丸底の底部と肩部に稜をもつ体部片が含まれる。これらの土器はすべて少破片で、複数の個体と考えられることから供献されたのではなく、埋土に本来、包含されていたと考えられる。土壙墓の底面には、焼けた痕跡が認められない。したがって人骨は、土壙内ではなく別の場所で焼かれて土壙内に移されたことはまちがいない。

土壙墓2

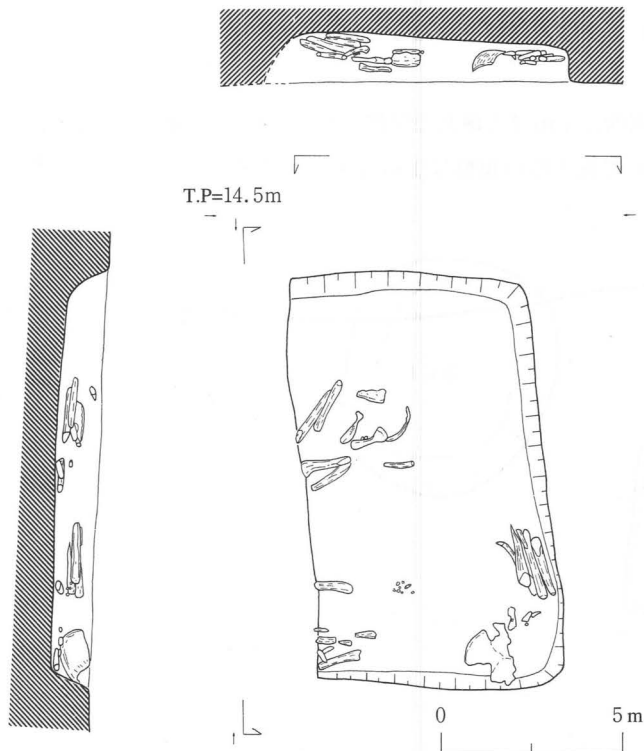
土壙墓1より南西に1mほど離れた位置で検出された。西側部分は攪乱により失われているが、平面形は方形で検出時の規模は1辺110cmと1辺70cm以上である。深さ30cm、埋土は黒褐



第7図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅳ）土壙墓1・2平面図



第8図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅳ）土墳墓1 検出状況実測図



第9図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅳ）土墳墓2 検出状況実測図

色粘土である。断面形は逆台形を呈する。内部に大人2人、小人1人以上の焼骨を含む人骨が葬られていた。人骨の埋葬状況は、北東と南東の隅に頭骨を置き、その間に長管骨をまとめて積み重ねていた。焼骨は、これらの骨にかぶされたり、埋土内に混じった状態で検出した。

土壙墓1では、自然礫を骨の上に置いていたが、土壙墓2では西側が破壊されているため不明瞭とはいえ、そのような状況は認められなかった。ただ土壙墓のすぐ南側で挙大から小児の頭大の自然礫6個をかたまった状況で検出した。これらの自然礫は人為的に置かれた可能性が高く、土壙墓となんらかの関係をもつ（配石遺構？）と考えられる。

埋土内より晩期縄文土器片4点が出土した。これらの土器は出土状況からみて埋土に本来含まれていたものである。土壙墓の底面は、焼けた跡はなかった。

土壙墓1・2のつくられた時期は、遺構が縄文時代後期の包含層を切ること、土壙墓内より晩期縄文土器が出土していること、同一遺構面上で弥生時代中期初頭（第Ⅱ様式）の土壙を検出していること、遺構面を弥生時代中期初頭の包含層がおおうことから、大きくみれば、縄文時代晩期から弥生時代中期初頭までの間である。しかし時間幅が広すぎる。土壙墓内から丸底の底部を含む晩期縄文土器しか出土していない点を重視し時期を限定し、滋賀里Ⅲb～Ⅳ式併行期に営まれたとしておきたい。この種の焼骨を含む洗骨再葬墓の類例から見ても矛盾がない。第Ⅱ調査区との関係からすれば、縄文Ⅳか縄文Ⅲの遺構のどちらかと同一時期と考えられるが、いずれに属すかは明らかでない。ここでは一応、住居址と思われるピットなど多数の遺構を検出した縄文Ⅳ（滋賀里Ⅲb式併行）の時期としておく。土壙墓1と土壙墓2の先後関係は明らかにできなかった。他に、1基の土壙14を検出したが遺物は出土していない。

第Ⅰ調査区では第Ⅱ調査区に比べて攪乱および自然流路からの晩期縄文土器の出土量が極端に少ない。縄文時代晩期の包含層は本来的にあまり厚くなく、土器量も少なかったためと考えられる。おそらく、この時期の包含層は、弥生時代中期初頭に削平されたのであろう。

ピット48～91

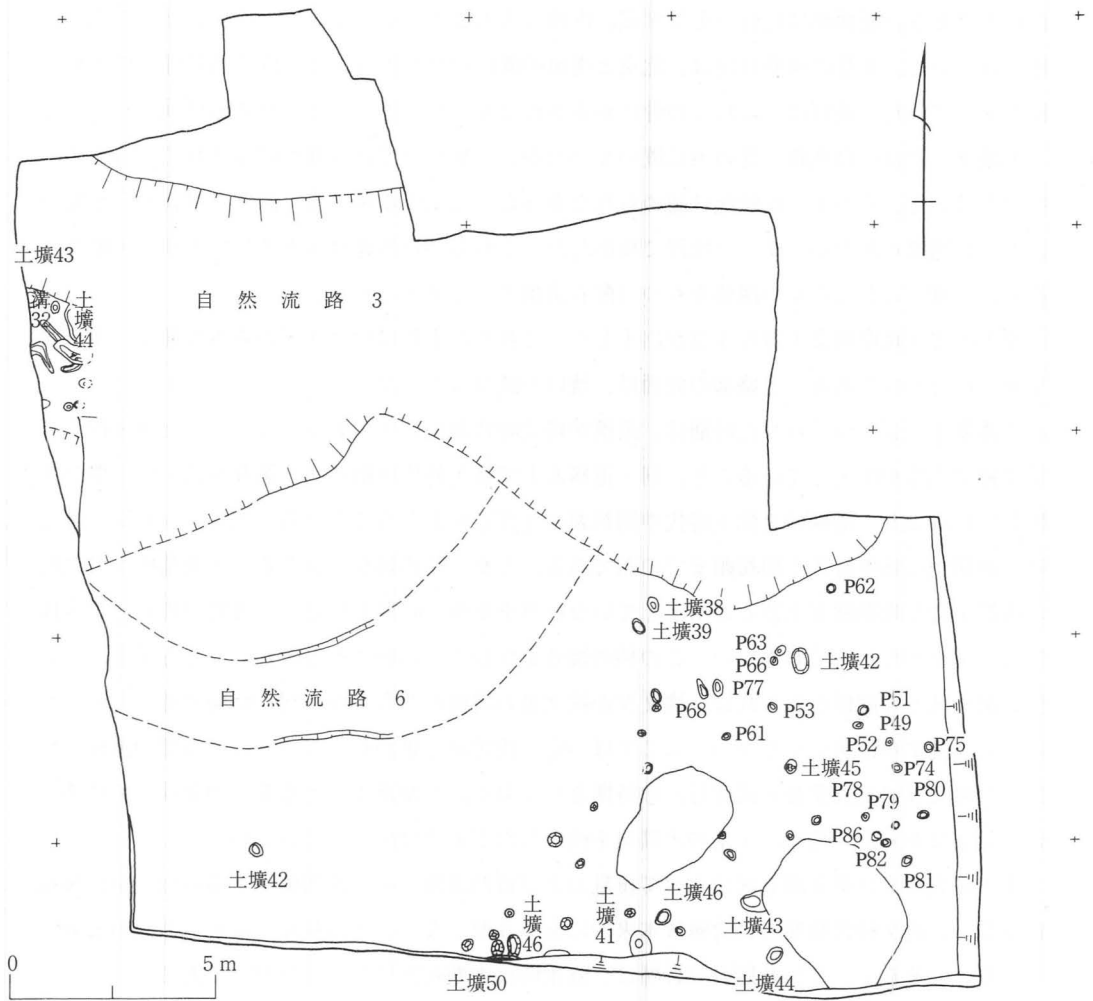
大部分、第2調査区の南東部に集中して認められた。少数は北西部にも存在した。平面形は楕円ないし円形を呈し、径は20cm前後である。深さは検出面から10～20cm前後であった。断面形は、ほぼ直立のU字形を呈する。堆積土は、灰黒色粘土が多く、ピット68のように暗灰色砂質土など少し異なった堆積土も認められたが、いずれも単一の土層である。ピット65・69などからは滋賀里Ⅳに属す土器や焼土、サヌカイト製のフレイク片などが少量出土している。

溝36・37

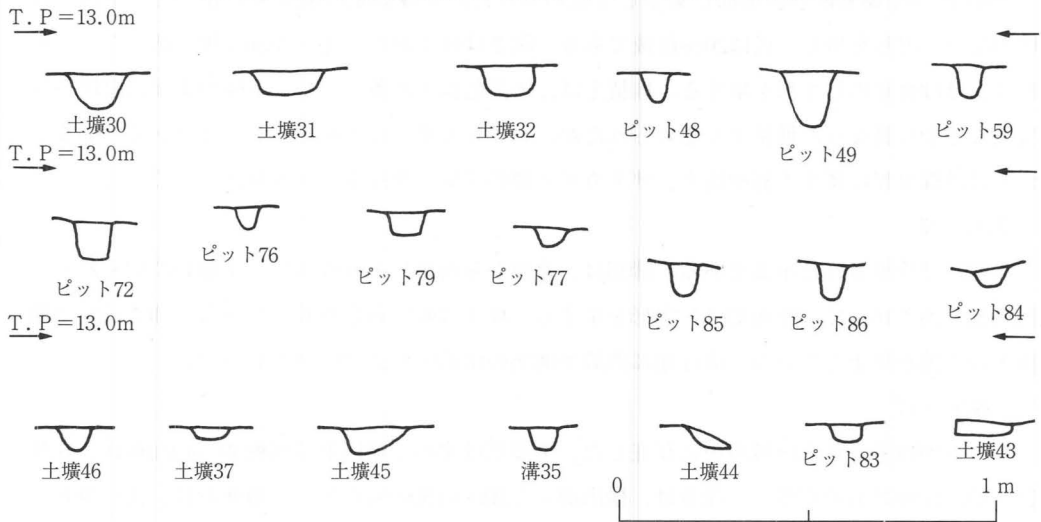
北西部で検出された小溝である。溝36は、北西から南東に走り南東側で土壙45に切られる。幅16cm・深さ16cmで、断面形はU字形を呈する。埋土は暗灰黄色砂質土である。縄文時代晩期後半の土器が出土している。溝は他に溝37が溝36の南約0.4mの所で検出された。

土壙30～47

ピットが検出された区域の中に存在した。平面形はすべて楕円形で長軸30～40cm前後、短軸24～30cm前後のものが多く、深さは、検出面から20cm前後のものが多い。断面形は、浅い皿状・



第10図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅳ）ピット他検出状況平面図



第11図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅳ）ピット・土壌断面実測図

逆台形・尖端がにぶいV字形などがみられる。埋土はすべて1層で灰黒色粘土が多いが、土壙43のように灰黒色砂質土など異なった土も認められる。一部の土壙からは、滋賀里Ⅳ式に併行する土器・石器・炭化物などが出土している。土壙34では、深鉢の破片とともに炭化したイチイガシの実、土壙45では石皿が出土している。

これらの遺構は、住居址に関連する遺構と思われる。ピットは、堅穴住居の柱穴、土壙34をはじめとする土壙の一部はゴミの処理穴と考えたい。第Ⅱ調査区内の南東部と北西部に集中してみられることから、ほぼ同時期に少なくとも2棟以上の住居址が存在したことになる。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土上面遺構）

第Ⅱ調査区のみ存在した。遺構は溝2条および土壙10基である。溝は、Cラインより東、9ラインより南で検出した。土壙は、調査区全域に散在して認められた。

溝34・35

溝35は南より北に走る。南端は調査区外に延び、北端は自然流路および攪乱により破壊される。確認した長さは10mで、幅22cm、深さ16cmである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は暗黒灰色粘土である。堆積土中より、滋賀里Ⅳ式に併行する土器が多数出土した。（堆積土が単一であり、出土遺物からみても、短期間機能した溝と考えられる。）他に溝35の北端付近、東から西に走って切る溝34を1条検出した。

土壙20～29

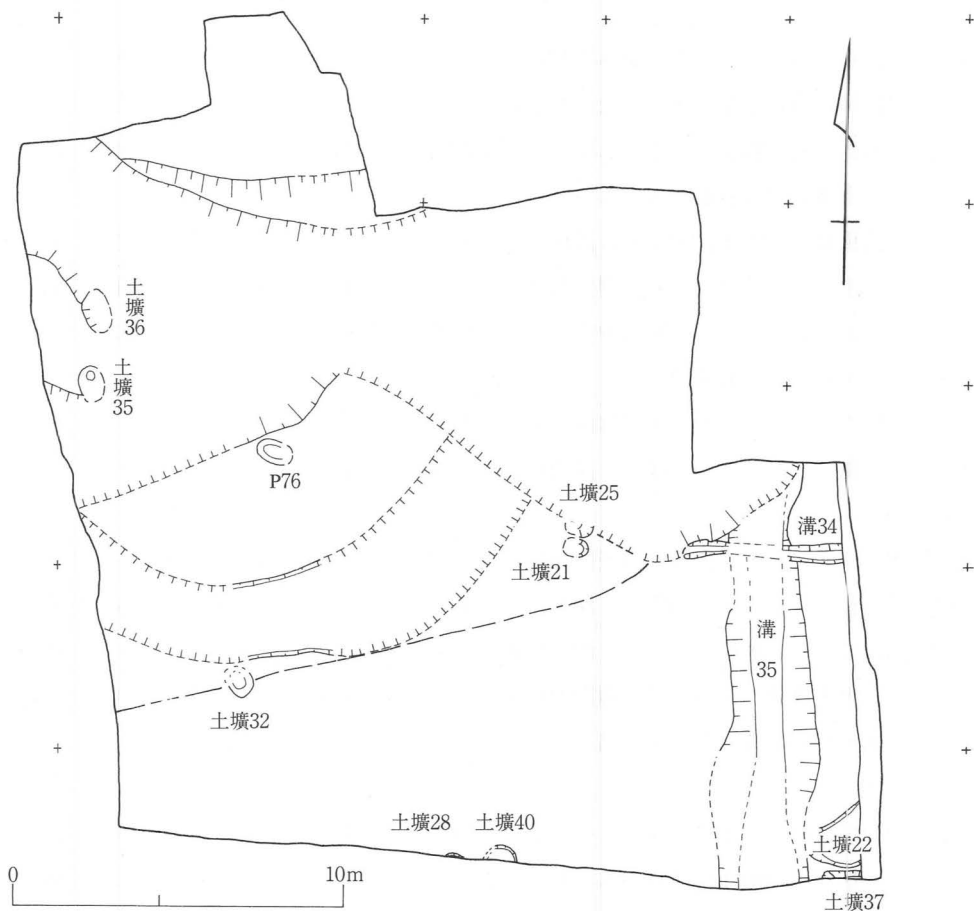
この遺構面で検出した土壙は埋土とベースの土の区別が困難であった。したがって、攪乱の断面や、土層観察用の壁面にあらわれたものしか検出できなかった。断面観察によれば検出した土壙より極端に多くなるとは考えられない。なお、後述するように掘り込まれた深さが検出した土壙すべて20cm前後であるため、縄文Ⅳの遺構面には及んでいないと考える。平面形は、楕円形で、短軸は40～60cm前後のものが多く、深さは20cm前後で、断面形は、浅い皿状ないし逆台形を呈する。堆積土は、土壙27に2層（上より黒褐色粘土、暗灰色粘土）認められるだけで、他は単一の土である。堆積土は、遺構面の土層である黒灰色粘土とほとんど区別がつかず、断面観察によってわずかに色調が褐色味をおび、砂分が多いことが判明したが、平面からの識別は困難であった。この面の最大の土壙22（短軸140cm、長軸180cm以上、深さ12cm）からは、滋賀里Ⅳ式に併行する土器の他に、磨製石斧や大量の焼土塊などが出土した。また獣骨や焼土の入った土壙25・28なども認められた。土器は、土壙22を除いて細片が多かった。これらの土壙の性格は、遺物の出土状況からみて、ゴミの処理穴などが考えられる。

縄文Ⅱ（黒灰色砂質土下層上面遺構）

第Ⅱ調査区の南東隅で検出した溝33が唯一である。

溝33

南より北に向かい途中で方向をやや北西に変えて掘られる。南端は調査区外に延び、北東端は、攪乱と近・現代のため池によって破壊されている。また東肩の一部も方形周溝墓2の西側周溝（溝17）によって切られる。検出した長さは5.6mである。最大幅240cm、最大深さ20cmで



第12図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅲ）溝・土壙検出状況平面図

南端の底面より北東端の底面のほうが5 cm程低く南より北に向かって流れていたことが知られる。断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色砂質土1層である。溝内より、滋賀里ⅣおよびV式に併行する土器多数と打製石斧・獣骨などが出土した。溝の堆積土が一層であり、さほど深く掘られていないことからみても、短期間だけ機能していたと思われる。この面での遺構の中心は溝の走る方向から見て、調査区の南に存在するものと考えられる。

縄文Ⅰ（黒灰色砂質土上面遺構）

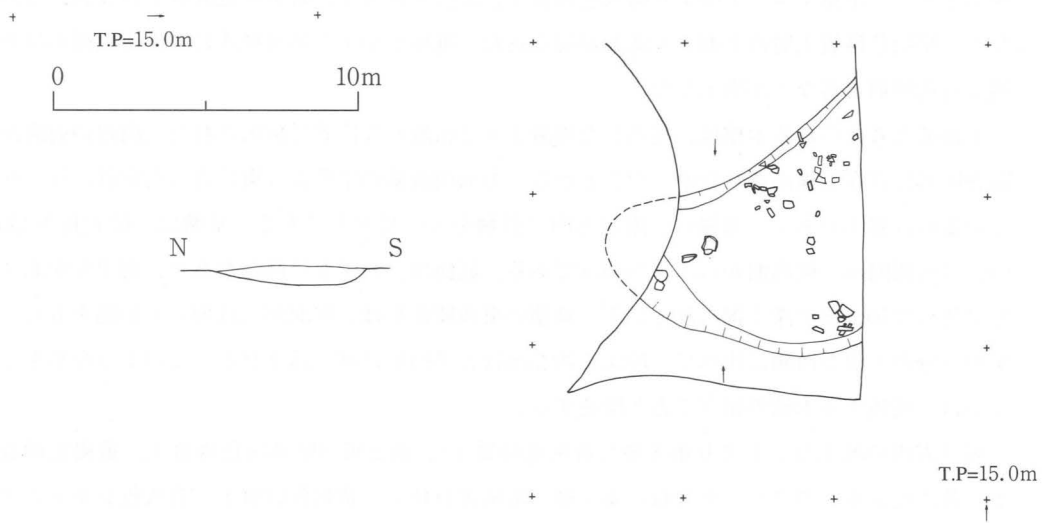
第Ⅱ調査区の南東隅で3基の土壙（17～19）を検出した。

土壙17～19

土壙17は平面形が隅丸三角形を呈し、最大長辺40cm最小短辺36cmで最大の深さは7 cmである。断面形は、逆台形をなす。堆積土は、黒灰色砂質粘土である。少量の縄文時代晩期土器細片が出土した。土壙17の南6.5mほどはなれて、土壙18、19を検出した。この面の遺構は、検出状況からみて縄文Ⅱ・Ⅲの遺構と同じく調査区の南に存在すると考えられる。遺構の時期は遺構内出土の遺物では明らかにできないが、層序よりみて滋賀里V式の早い時期に併行すると思われる。



第14図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅱ）溝33検出状況平面図



第13図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅲ）土壙22検出状況平面図

2. 弥生時代の遺構（黒褐色砂礫・黄褐色砂質土上面遺構）

この時期の遺構は、第Ⅰ調査区で縄文Ⅳの遺構面と同一面で検出された土壙1基（土壙14）と、第Ⅱ調査区で古墳時代遺構と同一遺構面で検出された土壙1基（土壙16）、溝1条（溝35）方形周溝墓3基（方形周溝墓1・2・3）である。方形周溝墓1に伴う木棺1基が検出された。

土壙14

土壙14は、第Ⅰ調査区の北東の隅近くで検出された。平面形は、楕円形で最大長軸64cm、最大短軸44cm、深さ8cmの規模をもつ、埋土は、暗黒褐色粘土である。埋土内より、底部に穿孔をもつ第Ⅱ様式に属す甕1点（図52—42）が出土した。

この土壙の北約0.5mの所に土壙15を検出したが、遺物が出土しなかったため、前述のように縄文Ⅳに属すとして説明した。土壙14は、底部穿孔の甕が出土したことから、同時期の第Ⅱ調査区で検出された方形周溝墓と何らかの関連が考えられる。

溝32

第Ⅱ調査区の北端中央よりやや西よりの地点で検出した。東から西に走る小溝である。検出した長さは、2.7mで、両端とも調査区外に延びる。最大幅36cm、最大深さ8cmで、堆積土は、暗灰色砂礫である。堆積土中より様式不明の弥生土器が1点出土した。他の遺構からみて第Ⅱ～第Ⅲ様式に属するものであろう、東半分を土壙16によって切られる。

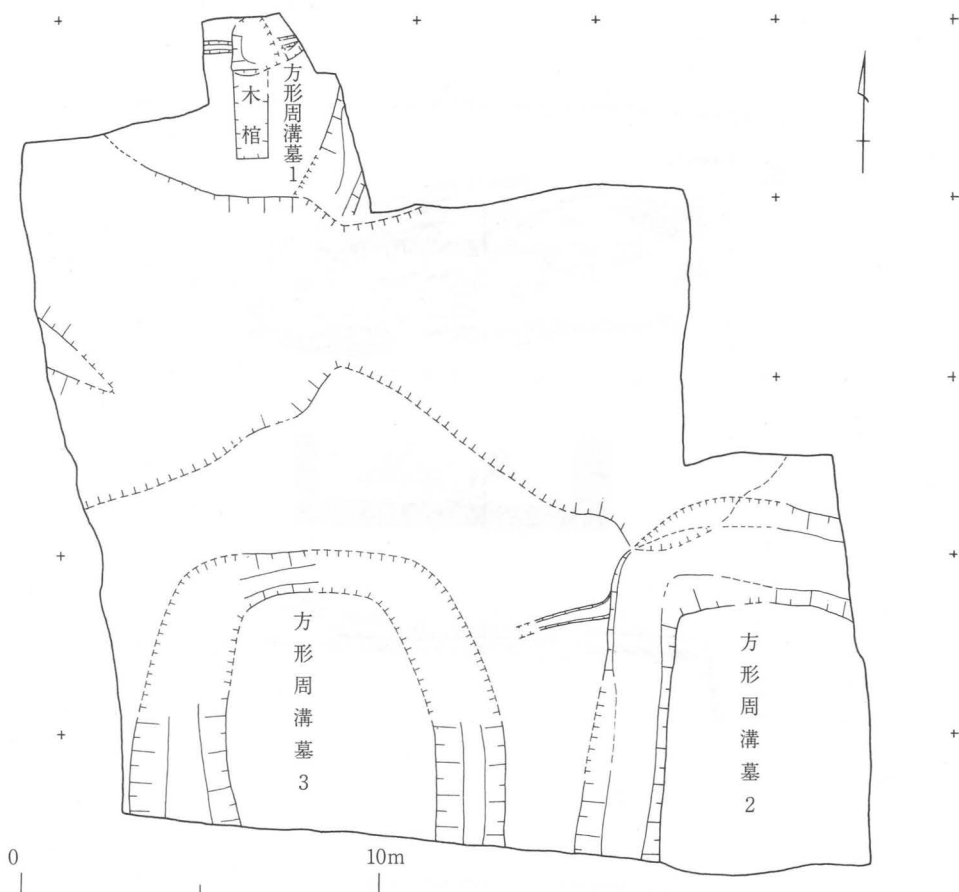
方形周溝墓1・2・3

方形周溝墓1

第Ⅱ調査区北辺の中央よりやや西よりで方形周溝墓1を検出した。北側は、調査区外に延び、南側は、後述する自然流路3によって切られているため、形状・規模は不明であるが、東辺の周溝の一部と主体部の一つと考えられる木棺1基を検出した。検出面で最大長1.2mを検出した周溝は、南北に長く東側にわずかに弯曲する弧状形を呈する。最大幅1.6m最大深さ0.6mの規模をもつ。堆積土は、上層より暗灰色砂質土、黒灰色砂質土、暗黄灰色砂質土の3層に分かれる。暗灰色砂質土層の上面より溝29が切り込む。堆積土中より第Ⅲ様式に属する土器のほか、縄文時代晩期土器などが出土した。

主体部と考えられる木棺は、検出した周溝より2m離れた位置で検出された。西辺の周溝が調査区外に存在し検出されなかったことから、方形周溝墓の中央より東に寄った位置に作られているのは確実である。墓壙は、南北方向に長軸をもつ長方形である。墓壙は、最大長さ250cm、最大幅94cm、検出面からの深さ54cmである。底面は、わずかに凹凸があり、南半分が北半分比べて10cmほど深く掘られている。墓壙の東西断面形は、底面が二段掘りの形態をもち、東側半分が平坦な西側に比べて一段深く約25cmほど半円形に掘り込まれる。このような形をとるのは、後述する木棺の組立て方と関連する。

掘り方内の埋土は、上より第1層（黄灰色砂質土）、第2層（暗黄灰色砂質土、黄褐色砂質土、黄灰色シルトのブロック含む）第3層（暗灰黄色粘土、黄褐色砂質土、黄灰色シルトのブ



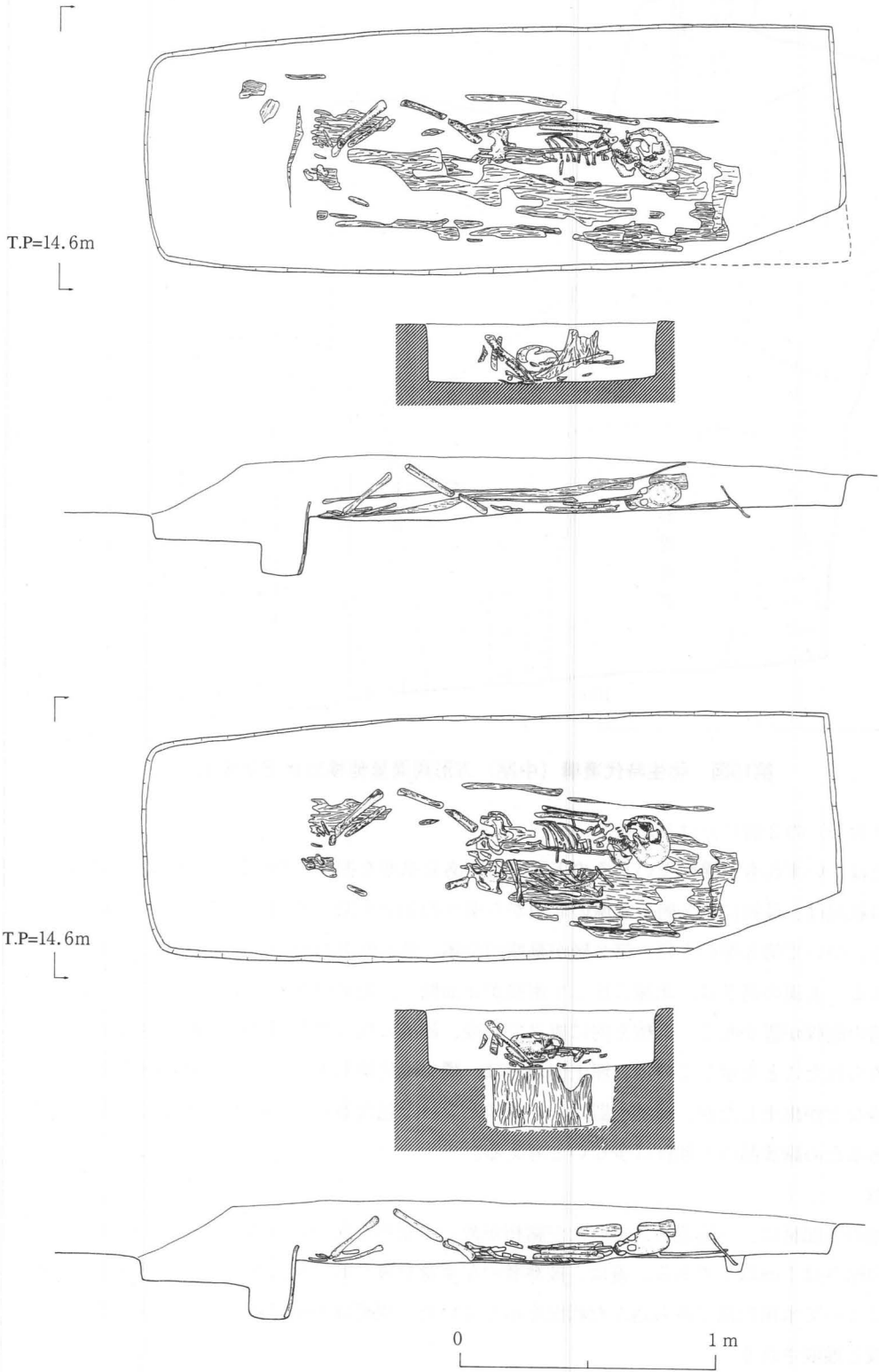
第15図 弥生時代遺構（中期）方形周溝墓他検出状況平面図

ロック含む）の3層に分けられる。

埋土は、いずれも遺構面ないしその下層の土であり墓壙を掘った際の排土を埋土としている。埋土の状況は、最初に第3層が墓壙の北辺から南へ約40cmを除く範囲に、最大厚さ18cmで埋められる。ついで第3層の上に、第2層が墓壙内全体に最大厚さ24cmで上面を平坦にそろえて埋められる。上面の高さは、北端に比して南端が2cm低く、南に向かって少し傾斜する。この面に木棺の底板が置かれる。木棺を内に組立てた後、最後に残った空間に第1層の黄灰色砂質土が埋められたことを示している。埋土内からは、縄文時代晩期土器、土偶と第Ⅲ様式に属す弥生土器などが出土したが、縄文土器は、ベースとなった包含層からの混入で、弥生土器も小破片であるため副葬品の可能性は少ないと考える。

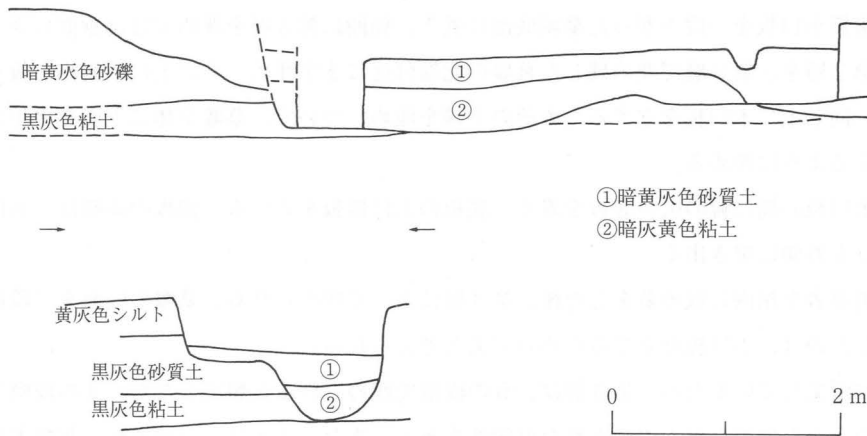
木棺

木棺の各部材は、一応遺存していたが腐朽が激しく原形を保つものはなかった。検出した各部材の厚さは1cm以下である。蓋は、被葬者の左半身を覆う形で検出され、縁辺が腐植した後、土圧によって木棺内部に落ち込んだ状況を示していた。規模は不明であるが、残存部よりみて一枚板と推測される。



第16図 弥生時代遺構（中期）木棺墓検出状況実測図

T.P=13.0m



第17図 弥生時代遺構（中期）木棺墓墓壇内土層断面図

側板は、断続して西側が全長の約1/2、東側が約1/3ほど遺存していたが、上半部は消失しわずかに下半部の一部のみが認められた。大部分土圧によって内や外側に動いており、原位置を保っているのは東側が、被葬者の頭部付近、西側は腰部付近にかぎられる。東側側板は、底板の外縁より内側5cmのところ到底板と接して長さ65cmほど検出された。西側側板のうち南側小口板付近に遺存したものは、土圧により外側に移動しているが、南端部は小口板より2cmほど南に突出して検出された。この状況からみて、側板は本来長さ185cm前後の一枚板で底板の上に置かれ、側端部は小口板より外側に突き出していたと思われる。

小口板は、南側で幅41cm、高さ29cm、北側で幅27cm、高さ16cm遺存していた。他の部材と同じく旧形は失われていたが、遺存状況は最も良かった。木口板の下端は、検出時で底板より南側で23cm、北側で4cm下に埋め込まれていた。当初は、いわゆる木口穴をもつと考えて調査を進めたが、墓壇を立割った結果、木口穴はなく木口板は、埋土によってささえられたものと判明した。残りが良かった検出状況からみて小口板は、南北とも幅46cm前後の一枚板と思われる。高さは不明であるが、南側のものが北側に比べて、20cm前後高かったことは確実である。底板は、被葬者の上半身の下にあたる部分で比較的良好に残っていたが、下半身側ではほとんど検出できず、わずかに右足の甲の付近に一部遺存しているのが認められた。

底板は、原位置を動いていないと考えられる。底板の平面の大きさは、長さ172cmで、幅65cm前後であろう。

木棺の主軸はN5°Eで墓壇の主軸からは、6°東へずれている。被葬者は身長160cm以下、20代後半の女性で埋葬姿勢は仰臥屈葬であった。遺体は、頭部をほぼ北に向け検出時で頭部と北側小口板との間には24cm、足と南側小口との間は8cmあけて収められていた。

これらのことから木棺の埋葬の順序を復元すれば以下のように想定される。

- (1) 方形周溝墓の中心より東にはずれたマウンド上（既に古墳時代中期後半に削平）より、

墓壙を掘る。この墓壙は、長辺にそって底面の東側半分を一段低く断面半円形に掘り下げる二段掘りである。

- (2) 南側小口板を一段下がった墓壙底面に置き、周囲に第3層を埋めてほぼ垂直に立てる。
- (3) 第2層を、第3層で埋め残した墓壙の北端付近にまず埋め、その上に北側小口板を置く。同じ土で木口板を立てるためその下端を埋め、ついで、墓壙全体に上面を平坦にそろえるように埋める。
- (4) 木口板の間に幅の広い底板を置く。底板の上に側板を立てる。側板の両端は、木口板よりも外側に突き出る。
- (5) 被葬者を棺内に収め蓋をした後、第3層によって埋められる。墓壙の底面を二段掘りにしたのは、木口板を立てるための工夫と考えられる。

上部が消失しているため、第3層は、(5)の段階で埋められると想定したが、(4)の段階で埋められ蓋の上から他の土がかぶせられた可能性もある。また、(3)(4)は、一部逆転、北側木口は底板を置いた後、埋めた可能性も考えられる。

方形周溝墓2

第Ⅱ調査区、南東隅で検出した。方形周溝墓1からは約12m南東に離れた位置に存在する。平面形は、東側と南側の周溝が調査区の外に存在するため不明確ながら、北側周溝のまわり方からみて、南北に長い長方形（東西4.8m以上・南北6.7m以上）と思われる。主体部および墳丘の盛土は、削平されて存在しなかった。

検出した周溝の規模は、北側周溝が長さ8.4m、最大幅2.68m、最大の深さ0.6m、西側周溝は長さ6.4m、最大幅2.4m、最大の深さ0.9mである。北側と西側周溝南端の底面の比高は、西側が48cm低い。溝の底は、平坦であることと粘土層に掘り込まれていることから雨水などは西側と南側周溝を中心に溜まったものと考えられる。

周溝の断面形は、逆台形を呈する。北側周溝の堆積土は、第1層暗茶褐色砂質土、第2層茶褐色砂質土、第3層暗青灰色砂礫、第4層黒灰色砂質土（ブロック状に黄灰色シルト、黄褐色砂質土が少量混じる）第5層黒灰色砂質土（第4層に同じ）第6層黒褐色砂質土（黄灰色シルト、黄褐色砂質土ブロック状に混じる）である。

第1層を除く他の層は、堆積状況からみて両側の肩口からの流入土と考えられる。肩口からの流入土の厚さは、8～12cmとうすく、あまり堆積が進行しないうちに第1層がまとめて堆積したのと考えられる。中央よりやや東に寄った位置の第4層上面で、胴部下半に1孔の穿孔をもつ第Ⅱ様式に属す壺が横だおしの状態で1点出土した。この壺は、供献土器と考えられるので、第4層は、周溝の掘削時の残土の可能性がある。

西側周溝の堆積土は、北側に比して複雑である。第1層黒灰色粘土、第2層暗灰色シルト、第3層黒灰色粘土、第4層暗灰色砂質土、第5層暗黄褐色砂質土、第6層暗灰色砂質土、第7層暗褐色砂質土の順に堆積している。層厚は、第7層が一番厚く最大52cmである。断面観察によって第1～第5層は、徐々に堆積したのち、一度掘り直された後に第6・第7層が堆積した

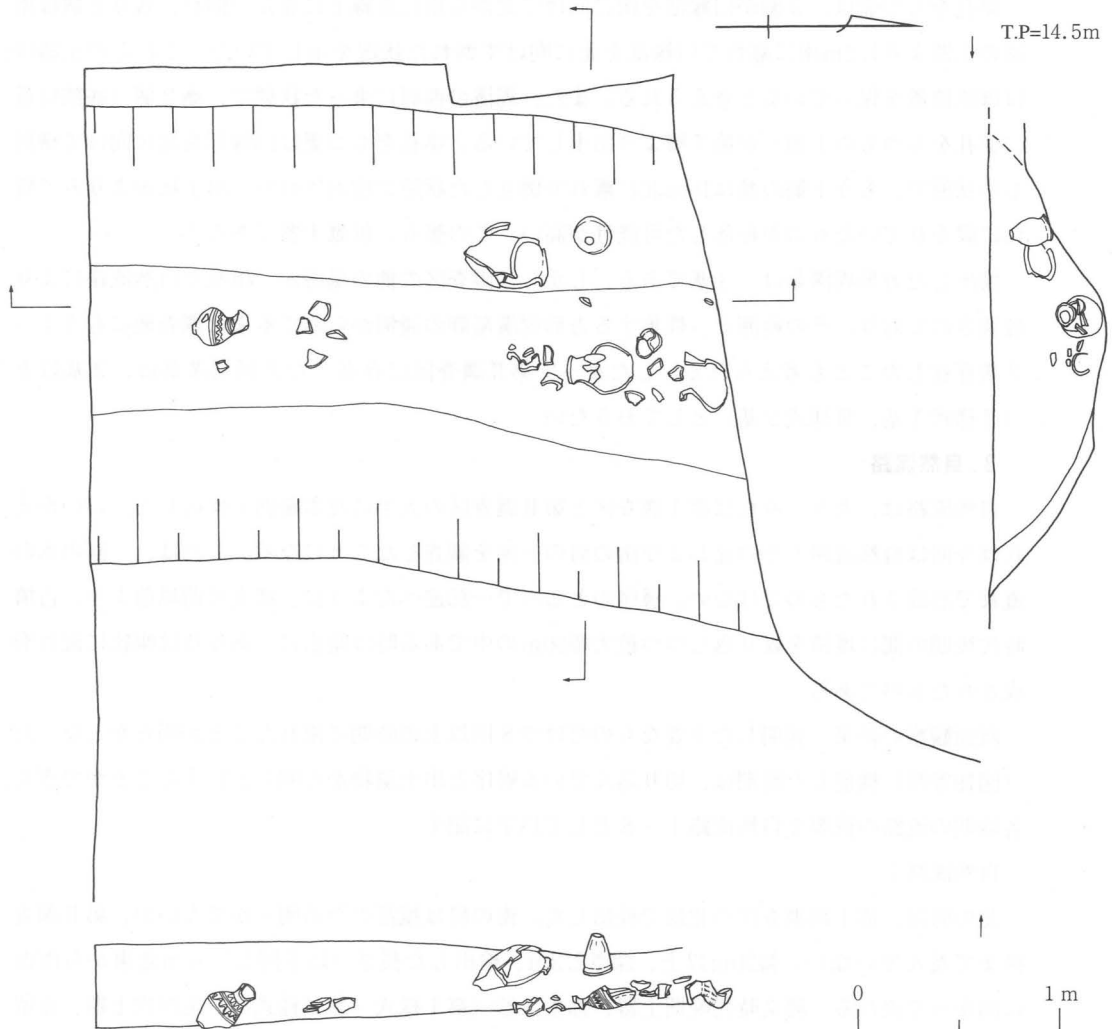
土の可能性が考えられる。南壁近くで第7層より、甕の下半部が1点出土した。供献土器かどうかは不明である。

周溝は縄文時代晩期、弥生時代前期の包含層を切るため、これらの時期の遺物も出土したが、供献土器よりみて方形周溝墓は第Ⅱ様式に属す時期に営まれたと考えられる。

方形周溝墓3

方形周溝墓2の西約2mに隣接して存在する。南側周溝は、調査区外に延び北側と東・西側周溝と結ぶコーナー付近は、攪乱によって破壊される。全体の平面形は、検出できなかったが、周溝のめぐり方からみて南北に長い隅丸長方形（東西5.7m以上・南北7m以上）と考えられる。主体部および墳丘は削平されて存在しなかった。

検出した周溝の規模は、東側が長さ3.68m、最大幅2.0m、最大深さ0.92m、西側で長さ3.36m、最大幅3.2m、最大深さ0.8mである。北側周溝は、長さ2.4m最大幅1.6m最大深さ0.4mである。周溝の断面形は西と北側が逆台形、東側が2段掘りのU字形を呈する。周溝の



第18図 弥生時代遺構（中期）方形周溝墓3南側周溝供献土器検出状況実測図

底は平坦であり、東側に比べて西側の底面は40cm低い。東側周溝の堆積土は、下より第1層暗黄褐色砂質土、第2層暗青灰色砂質土、第3層黄灰色砂質土である。第1・2層は、最大の層厚が16cmと8cmである。第3層は、最大の層厚80cmであり、第1・2層が薄く堆積した後、一挙に第3層が厚く堆積している。

西側周溝の堆積土は、下より第1層黄灰色シルト、第2層黒褐色砂質土、第3層暗褐色砂質粘土、第4層褐色シルト、第5層暗褐色砂質土、第6層褐色シルト、第7層暗褐色砂質土、第8層黄褐色砂質土である。方形周溝墓2と同様に西側周溝の土層の堆積は複雑である。第7層は、堆積土中で一番厚く、最大32cmの層厚をもつ。断面観察の結果、第4層堆積後に一度掘り直された後、第5層以下が堆積したものと考えられる。

第Ⅲ様式に属す供献土器が、西側周溝より出土した。第5層をベースにして横倒しになった状況で壺5個（底部付近に穿孔をもつもの4個）が認められた。壺5個のうち在地産の土器は1個で他は他地域産である。

穿孔をもつ壺は、3個が口縁部を南に向けて北から南に直線上に並んで倒れ、残り1個は南端の土器より1.2m南に離れて口縁部を北に向けて倒れた状況を示していた。これらの土器は、ほぼ原位置を保っていると考えられる。また、周溝の西肩に乗った状態で、甕2個（底部付近に穿孔をもつもの1個）が第7層より出土している。穿孔をもつ甕は口縁部を北に向けて横倒しの状態で、もう1個の甕は16cm北に離れて倒立した状態で検出された。出土状況よりみて肩口に置かれていたものが転落した可能性が高い。この甕も、供献土器であろう。

検出した方形周溝墓は、3基である。しかし、調査区他の場所が、攪乱と自然流路により破壊されており、その範囲と、群集する方形周溝墓群の通例からみて本来は調査地にもう1～2基存在したことも考えられる。したがって第Ⅱ調査区に存在した方形周溝墓は、3基以上（Ⅱ様式1基、Ⅲ様式2基）としておきたい。

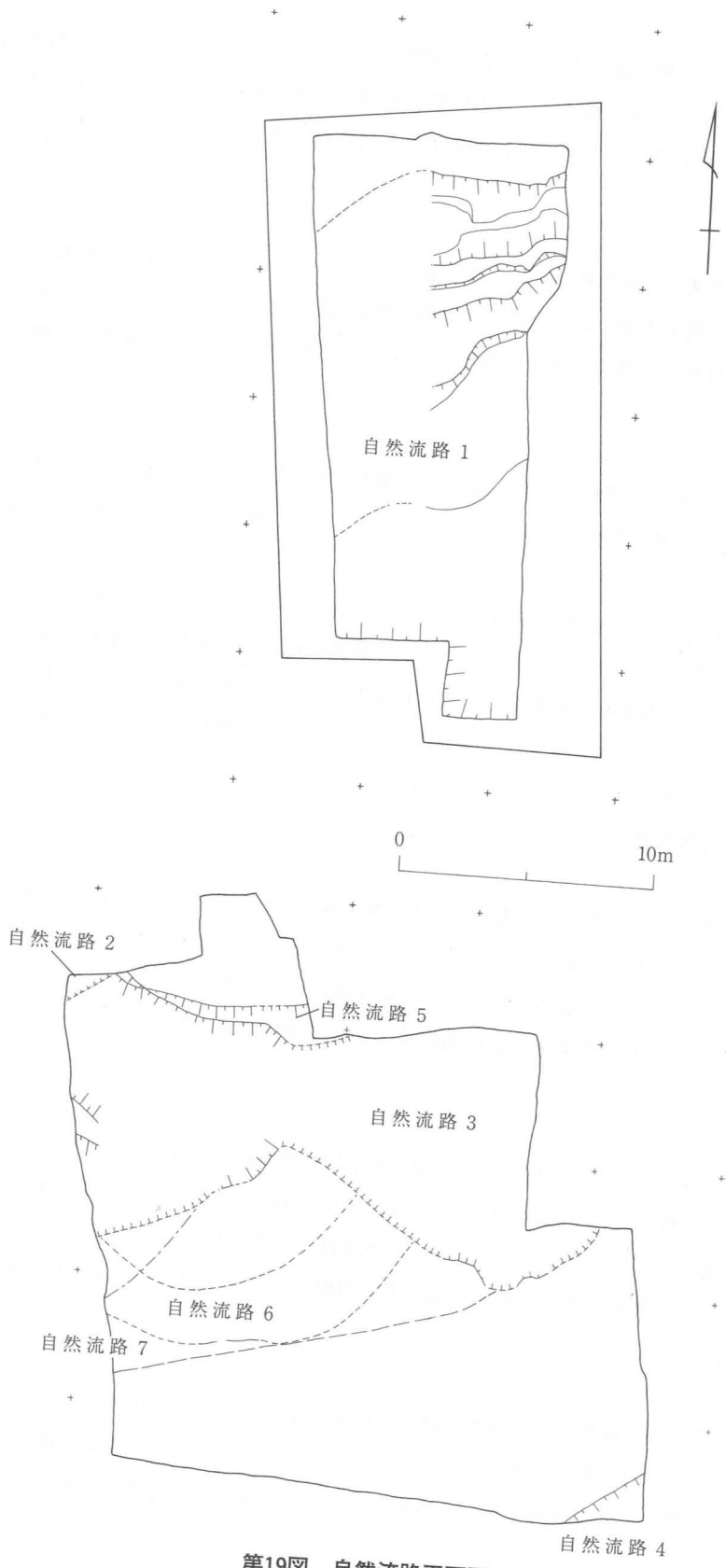
3. 自然流路

自然流路は、大きくみれば第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区の大半に及ぶ範囲で検出した。いいかえれば今回は自然流路とその北および南の肩の一面を調査したことになる。これは、一回の水の流れで形成されたものではない。層序のところで一部述べたように、縄文後期以前より、古墳時代後期に間に堆積を繰り返しつつ最大幅50mの中である時は幅広に、ある時は幅狭に流れ形成されたものである。

断面観察の結果、判明した主要なものだけで8回以上の時期に流れたことが明らかとなった。（図19参照）機能した時期は、切り込んでいる層序と出土遺物から明らかにすることができた。各時期の流路の概要を自然流路1～8として以下に記す。

自然流路1

北の肩は、第Ⅰ期調査区の北端で検出した。南の肩は攪乱のため明らかでないが、第Ⅱ調査区まで及んでいない。幅20m以上、深さ2.2m、検出した長さ（以下同じ）6m北東から南西に向かって流れる。縄文時代晚期土器、弥生土器（第Ⅰ様式～第Ⅴ様式）、庄内式土器、布留



第19图 自然流路平面图

式土器、須恵器など各時期の遺物が出土した。遺物の出土状況と層序からみて、弥生時代中期末ないし後期（第Ⅳないし第Ⅴ様式）から古墳時代中期中頃まで機能していないものと考えられる。この流路の下部に切られた状態で、滋賀里Ⅲbに併行する自然流路の一部を検出したが、規模などは不明である。

自然流路2

第Ⅱ調査区の北西隅で一画を検出した。幅1m以上、深さ0.6m長さ2.4mで、北東から南西に向かって流れる。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。溝29、ピット46によって切られる。出土遺物と遺構の切り合い関係からみて古墳時代中期後半の短期間だけ機能していたと考えられる。

自然流路3

第Ⅱ調査区の中央より北で検出した。幅7m、深さ2.2m以上、長さ22mで、東から西に向かって流れる。縄文土器、弥生土器、布留式土器が出土した。埋没したのち上面より古墳時代中期後半の溝、ピットなどが切り込む。

出土遺物と遺構の切り合い関係からみて、古墳時代前期から中期にかけて機能していたと考えられる。第Ⅱ調査区に存在した弥生時代の方形周溝墓や縄文時代晩期の遺構や包含層を破壊している。破壊された周溝墓の被葬者と考えられる頭骨を1点単独で検出した他、供献された土器と考えられる底部に穿孔を持つほぼ完形の壺も出土した。西壁付近で2つに分かれる。2つの自然流路が切り合うことも考えられるが明らかにできなかった。出土遺物には差異がないので一応1条の自然流路としておく。

自然流路4

第Ⅱ調査区の南東隅で北端の一画を検出した。幅1.6m以上、深さ0.8m、長さ4mで、北東から南西に向かって流れる。縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器が出土した。古墳時代中期後半の遺構面を切り込み、古墳時代後期前半の包含層によって覆われている。出土遺物と土層の関係からみて、古墳時代中期末から後期初頭にかけての短期間のみ機能していたと考えられる。

自然流路5

第Ⅱ調査区の西壁中央付近で検出した。攪乱および自然流路3によって破壊されているため西壁断面で存在を確認した。幅2m以上、深さ0.5mで北東より南西に向かって流れていたと考えられる。黄褐色砂質土上面より切り込み、自然流路3に切られる。したがって機能していた時期は、弥生時代中期初頭から古墳時代前期までの間となるが、規模からみて長期間の機能は考えられない。

自然流路6

第Ⅱ調査区の北端で検出した。自然流路3や攪乱によって大半が破壊されているので、確認したのは、北の肩のみである。幅1.6m以上、深さ0.4m、長さ8mで、東から西に向かって流れる。黄褐色砂質土上面より切り込むと考えられる。埋没後、方形周溝墓1の溝により切られ

る。弥生時代中期初頭（第Ⅱ様式）の土器が出土したことから合わせて、この時期に機能していたことは確実である。

自然流路 7

第Ⅱ調査区のほぼ中央で検出した。攪乱および自然流路3で破壊されている部分が多い。幅2.2m、深さ0.2m、長さ6mで、北東から西に向かって南に弯曲しながら流れる。黒灰色粘土層上面より切り込む。規模と層序からみて、滋賀里Ⅳ式並行期に、短期間機能したものである。

自然流路 8

第Ⅰ調査区の南半分と第Ⅱ調査区の北側2/3ほどの範囲で検出した。第Ⅰ調査区は自然流路1で肩が破壊されているため正確な幅は不明である。推定で幅約40m、深さ2.4m、長さ18mで、東から西に向かって流れていたと考えられる。最上部の堆積土より縄文時代後期に属す粗製土器が出土しており、この時期以前の流路である。上限は、出土遺物がないため不明である。断面観察によって、1条の自然流路ではなく、複数の流路が集合しているのは確実であるが、規模、機能した時期などは不明である。縄文時代後期以前にかなり長期間にわたって存在していたことは、複数の流路が認められるためまちがいない。

自然流路が、縄文時代後期以前から古墳時代後期初頭の長期間にわたって存在したのは、調査地の中央付近の旧地形が、浅い凹地状を呈していたためと考えられる。そのためある時期に自然流路がほとんど埋没しても、次々と新しい流路ができたのであろう。今回、確認できた自然流路の機能した時期は、たとえば弥生時代前期など空白時期が存在する。しかし、古い時期の流れが新しいものに破壊されていることや、旧地形が凹地状を呈していたと考えられることからすると、幅の狭い広いは別として古墳時代後期初頭まで連続して自然流路が存在したと思われる。

古墳時代後期初頭で自然流路が流れを変えて以降、再び流れないのは古墳時代中期後半に集落が営まれた際に、方形周溝墓のマウンドを削平するなどかなり大規模な地形の改変を行っておりこの際、自然流路の流れを人工的に変えたことも考えられる。

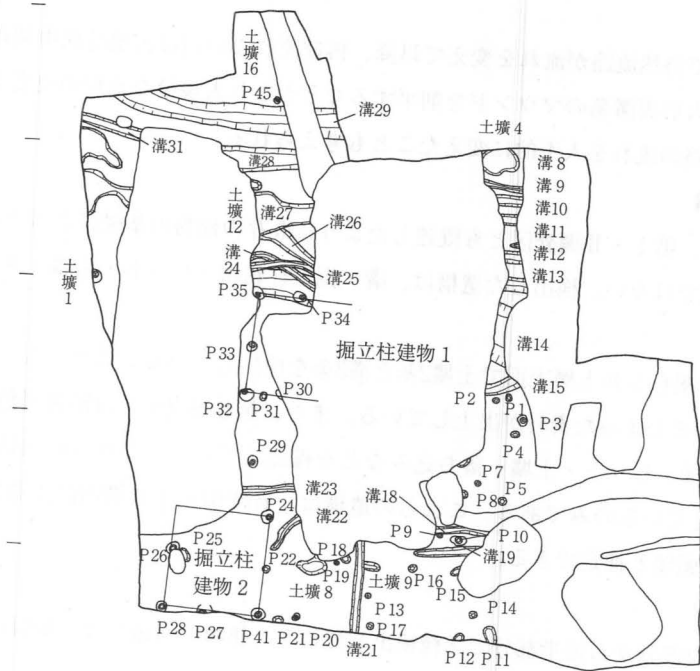
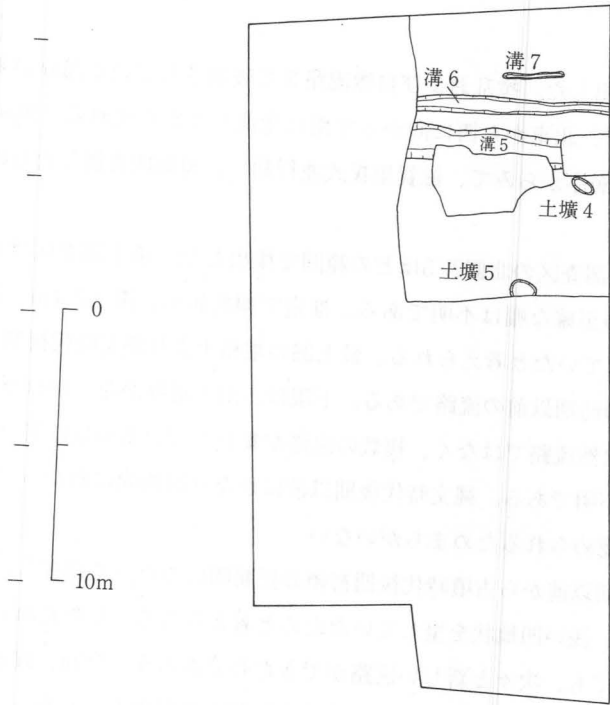
4. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、第Ⅰ・Ⅱ調査区とも既述したように既存の建物の基礎による大規模な攪乱のため良好な状態ではない。検出した遺構は、溝・掘立柱建物・ピット・土壙・落ち込み等である。

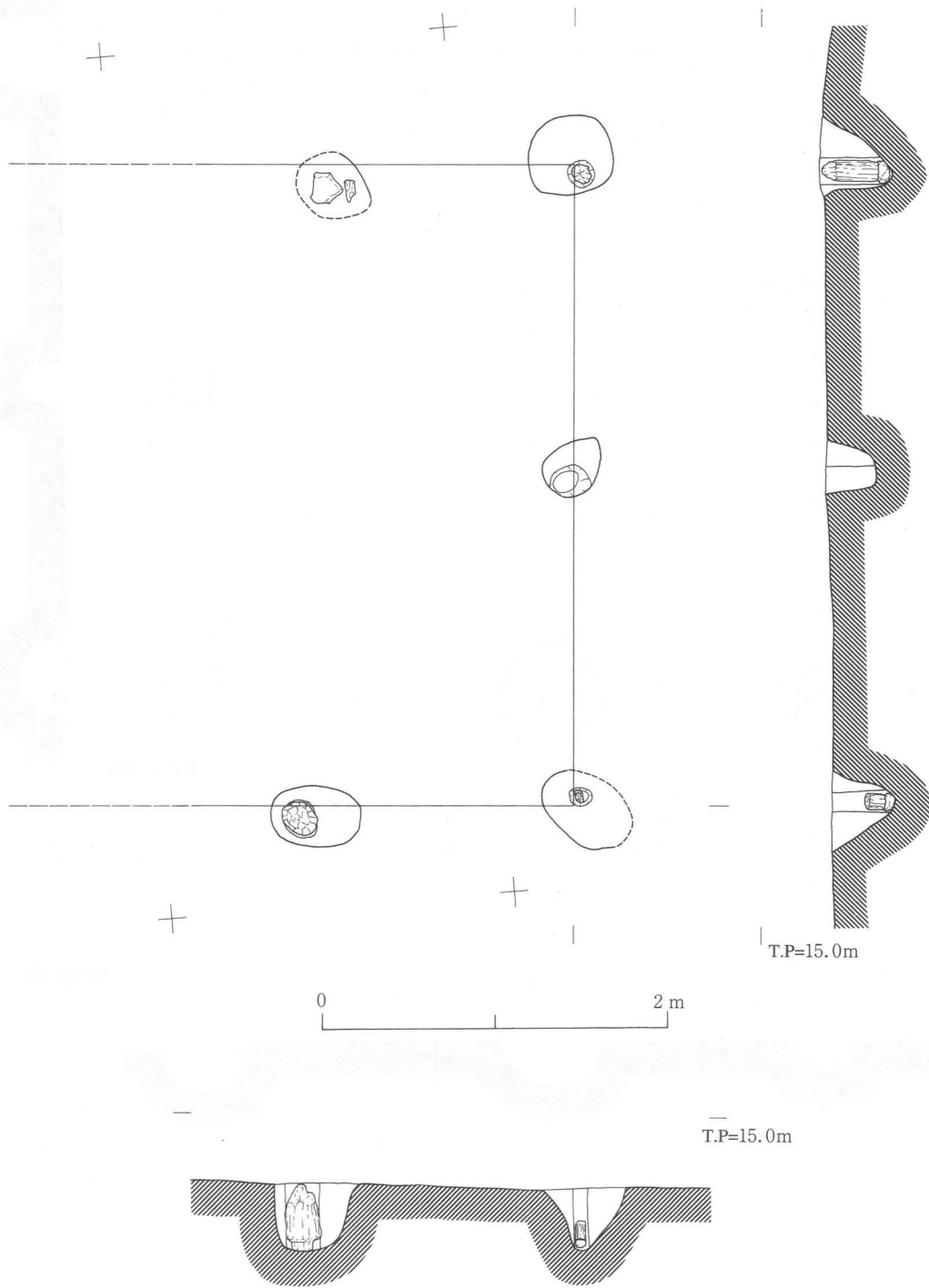
第Ⅰ調査区では黄褐色シルト層上面で土壙2基と溝3条を検出している。このうち、土壙4・溝5からは、比較的まとまった資料が出土している。また、第Ⅱ調査区では暗黄褐色砂質土層上面で掘立柱建物2棟・ピット・土壙・落ち込みなどを確認している。これらの遺構内からは、少量の遺物が出土しているのみである。これらの遺構は、層位関係と遺構内出土物から5世紀後半から6世紀初頭頃と推定できる。

掘立柱建物 1・2

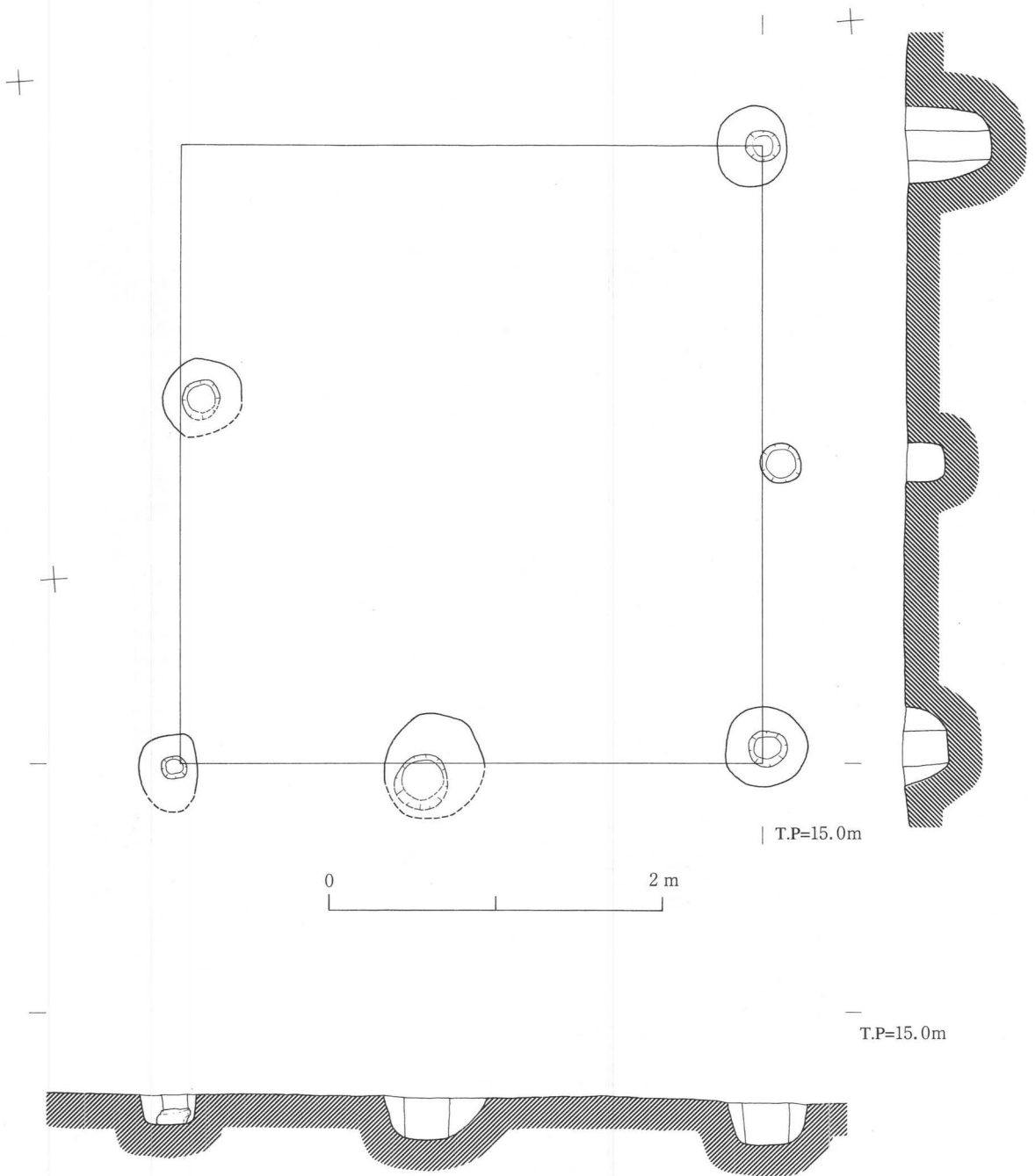
第Ⅱ調査区の中央部分から南半部分で2棟検出している。建物の周辺には、多数の柱穴が存



第20図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物他検出状況平面図



第21図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物1検出状況実測図



第22図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物2 検出状況実測図

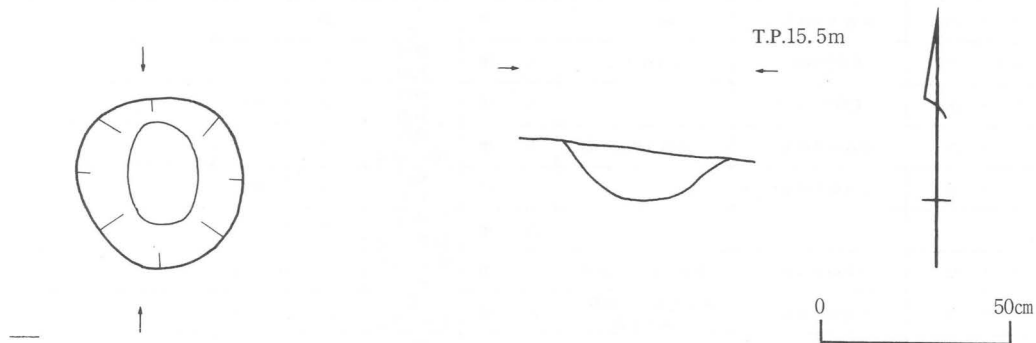
在することや攪乱によって既に削平された柱穴を考慮するとさらに多くの建物を想定できる。2棟の建物は、約4.5m離れて位置し、ほぼ同一方位をとる。第Ⅱ調査区の中央部分にある掘立柱建物1は、東西1間以上・南北2間の規模である。柱間距離は、東西方向が1.65m・南北方向が1.9mを測る。総柱の建物の可能性もあるが攪乱のために不明。建物を構成する柱穴は直径50cm程度の楕円形で、各柱穴間に大小の差はない。しかし、各コーナーに位置する柱穴の深さが建物の柱列の中間にくる柱穴よりも深い傾向がある。柱穴の底面には、扁平な石を据え置き根石としているものもある。柱穴内には柱根の残存するものもある。柱根は、最も保存状態の良いもので直径17.3cm・長さ54.5cmを測る。掘立柱建物2は第Ⅱ調査区の南西端部分にある。建物の規模は、東西2間・南北2間に復元できる。柱間距離は、東西方向が1.7m・南北方向が1.6mを測る。建物2を構成する柱穴は、直径50cm程度の円形である。柱穴の底面には、建物1と同様に根石を据えるものもある。

以上の点から5世紀後半から6世紀初頭頃の今回の調査地は、集落の一画にあたるものと推定できる。同期の集落は、山麓部に位置する芝ヶ丘遺跡・西ノ辻遺跡・神並遺跡・市尻遺跡・縄手遺跡などでも確認されている。これらは、集落の継続期間や後述する渡来系の遺物を出土している点で共通している。

5. 飛鳥時代の遺構

第Ⅰ調査区の灰褐色砂質土層・青灰色砂礫層・黄褐色砂質土層が6世紀後半から7世紀の須恵器・土師器を含む堆積層である。同期の遺構は、黄褐色砂質土層をベースとする土塋3を1基検出している。第Ⅱ調査区では、同期の遺物を含む堆積層や遺構を確認できなかった。第Ⅰ調査区で検出している土塋3は直径44cm・深さ12cmを測り、平面楕円形を呈する。土塋内からは、須恵器鉄鉢1個体分が出土している。

このような遺構の検出状況から本調査地点において5世紀後半から6世紀初頭まで続いていた集落は、6世紀中頃に断絶し、その後6世紀後半から7世紀頃に再び形成しはじめたものと推定できる。このような集落の動向は、神並遺跡でも確認されている。



第23図 飛鳥時代遺構、土塋3 検出状況実測図

表1 遺構一覽表

柱穴(ピット)

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	平面形状 (cm)	深さ(cm)	柱痕・根石	備考
ピット 1	なし	縄文土器・弥生土器	古墳	楕円 長28・短20	27		
ピット 2	なし	縄文土器・弥生土器	古墳	楕円 長24・短20	27		
ピット 3	暗茶褐色砂質土	縄文土器	古墳	不整円 長40・短36	29		
ピット 4	なし		古墳	楕円 長28・短17	26		
ピット 5	なし	弥生土器・縄文土器	古墳	円 24	不明		
ピット 6	淡茶褐色砂質土		古墳	楕円 長20	8		
ピット 7	なし	製塩土器・土師器	古墳	楕円 長20・短16	12		
ピット 8	暗灰黄色砂質土		古墳	楕円 長28	14		
ピット 9	なし		古墳	楕円 長16	10		
ピット 10	淡黒褐色砂質土	製塩土器	古墳	不整円 長60・短36	16	根石	
ピット 11	暗茶褐色シルト	弥生土器?	古墳	不整円 短48	20	根石	
ピット 12	暗灰黄色砂質土	須恵器・土師器	古墳	隅丸方形 短28	13		
ピット 13	淡黒褐色砂質土 小礫を含む		古墳	円 16	10		
ピット 14	茶褐色砂質土	製塩土器・縄文土器	古墳	円 28	31		
ピット 15			古墳	楕円 短30	不明		
ピット 16			古墳	楕円 長24	2		
ピット 17	暗灰黄色砂質土		古墳	円 24	31		
ピット 18		弥生土器	古墳	楕円 短28	19		
ピット 19			古墳	円 16	7		
ピット 20	暗黄灰色砂質土		古墳	楕円 長28・短21	13		
ピット 21	茶褐色砂質土		古墳	楕円 長40	20		
ピット 22			古墳	円 24	10		
ピット 23			古墳	円 12	6		
ピット 24	暗灰黄色砂質土		古墳	楕円 長46・短40	40		
ピット 25			古墳	楕円 長52	22		
ピット 26	暗黄灰色砂質土	縄文土器	古墳	円 48	30		
ピット 27	茶褐色砂質土	弥生土器?	古墳	楕円 長60	30		
ピット 28	茶褐色砂質土		古墳	楕円 短36	36	根石	
ピット 29	暗黄灰色砂質土	土師器?縄文土器	古墳	楕円 長40・短32	62		
ピット 30	暗黄褐色砂質土		古墳	楕円 短40	28	根石	
ピット 31			古墳	楕円 長28・短23	9		
ピット 32	淡茶褐色砂質土	製塩土器・土師器	古墳	隅丸長方形 長48・短44	不明	柱痕・根石	
ピット 33	淡黄褐色砂質土	製塩土器・土師器・ 縄文土器	古墳	不整円 長40・短32	20		
ピット 34		弥生土器・縄文土器	古墳	楕円 長52・短36	不明	柱痕	

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	平面形状 径 (cm)	深さ (cm)	柱痕・根石	備考
ビット 35	淡灰褐色砂質土・ 淡茶灰色砂質土(柱)	製塩土器・土師器	古墳	楕円 長52	28	柱痕・柱石	
ビット 36	淡黄灰色砂質土	縄文土器	古墳	円 20	10		
ビット 37	暗茶褐色シルト		古墳	楕円 短20	8		
ビット 38	茶褐色砂質土		古墳	楕円 短32	36		
ビット 39	茶褐色砂質土		古墳	楕円 長52	40		
ビット 40	茶褐色砂質土		古墳	楕円 長36	21		
ビット 41	茶褐色砂質土		古墳	楕円 32	20		
ビット 42	茶褐色砂質土		古墳	楕円 長16	12		
ビット 43	茶褐色砂質土		古墳	楕円 長20	16		
ビット 44	茶褐色砂質土		古墳	楕円 長40	25		
ビット 45	暗黄灰色砂質土		古墳	楕円 長36	24		
ビット 46	暗黄灰砂質土・礫を含む		古墳	楕円 長40	36	根石	
ビット 47	黒褐色砂質土	炭化物	古墳	楕円 長52	40	根石	
ビット 48	灰黒色粘土	焼土・炭化物	縄文 IV	楕円 長52・短17	16		
ビット 49	〃	炭化物	〃	円 16	16		
ビット 50	〃	焼土・炭化物	〃	円 24	28		
ビット 51	〃	炭化物	〃	円 20	8		
ビット 52	〃	炭化物・焼土	〃	円 20	10		
ビット 53	〃	炭化物・焼土	〃	楕円 長20・短16	4		
ビット 54	〃	土器・炭化物・焼土	〃	円 24	8		
ビット 55	〃	土器・炭化物・焼土	〃	楕円 長21・短13	9		
ビット 56	〃	土器・炭化物・焼土	〃	円 19	7		
ビット 57	〃	焼土・炭化物	〃	円 24	8		
ビット 58	〃	土器・焼土・炭化物	〃	楕円 長25・短17	11		
ビット 59	〃	焼土・炭化物・土器	〃	円 16	10		
ビット 60	〃	土器・焼土・炭化物	〃	楕円 長29・短16	17		
ビット 61	〃	焼土・炭化物・サヌカイト	〃	楕円 長20・短12	10		
ビット 62	〃	焼土・炭化物	〃	楕円 長21・短12	8		
ビット 63	〃	土器・焼土・炭化物	〃	円 18	9		
ビット 64	〃	焼土・炭化物	〃	円 17	12		
ビット 65	〃	土器・焼土・炭化物	〃	楕円 長24・短16	8		
ビット 66	〃	土器・焼土・炭化物	〃	楕円 長26・短16	13		
ビット 67	〃	土器・焼土・炭化物	〃	楕円 長21・短16	8		
ビット 68	〃	焼土・炭化物・土器	〃	円 20	8		
ビット 69	〃	土器・焼土・炭化物	〃	楕円 長21・短15	6		
ビット 70	黒褐色粘土	土器・焼土・炭	〃	円 10	10		
ビット 71	黒灰色粘土	土器・炭化物	〃	円 24	30		

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	平面形状 (cm)	深さ(cm)	柱痕・根石	備考
ピット 72	灰黒色粘土	炭化物	縄文 IV	円 21	7		
ピット 73	〃	炭化物	〃	円 23	20		
ピット 74	〃	炭化物	〃	楕円 長20・短16	5		
ピット 75	〃	炭化物	〃	楕円 長32・短21	8		
ピット 76	〃	焼土・炭化物	〃	楕円 長20・短16	9		
ピット 77	〃	炭化物	〃	円 17	12		
ピット 78	〃	焼土・炭化物	〃	楕円 長22・短16	9		
ピット 79	〃	炭化物	〃	楕円 長32・短25	6		
ピット 80	〃	土器・炭化物・縄文土器	〃	円 18	12		
ピット 81	〃	土器・炭化物・縄文土器	〃	楕円 長25・短21	6		
ピット 82	〃	炭化物	〃	楕円 長29・短22	12		
ピット 83	暗黒褐色砂質土		〃	楕円 長24・短20	19		
ピット 84	暗黒灰色砂質土	縄文土器	〃	楕円 短18	8		
ピット 85	暗灰色砂質土		〃	楕円 短18	16		
ピット 86	暗黒褐色砂質土	炭化物・縄文土器	〃	円 18	20		
ピット 87	暗黄褐色砂質土		〃	円 12	10		
ピット 88	暗灰色粘土	炭化物	〃		21		
ピット 89	暗灰色粘土	炭化物	〃		28		
ピット 90	暗灰色粘土	炭化物	〃		24		
ピット 91	暗灰色粘土	炭化物	〃		24		

溝

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	幅 (cm)	深さ(cm)	方向	備考
溝 1	オリープ黒色砂質土	弥生土器	近代	24	88	E→W	
溝 2	暗オリープ色砂質土	弥生土器	近代	40	28	E→W	
溝 3	暗茶褐色砂質土	須恵器・陶器・弥生土器・ 縄文土器・土師器 etc.	近代	120	100	NW→SE	
溝 4	〃	瓦・樋管・陶磁器 etc.	近代	100	40	E→W	
溝 5	暗灰褐色粗砂	須恵器・土師器	古墳	16	108	E→W	
溝 6	淡灰褐色砂質土	須恵器・土師器・鉄斧	古墳	12	60	E→W	
溝 7	淡灰褐色砂質土	須恵器・土師器	古墳	4	16	E→W	
溝 8	黄灰色砂質土	須恵器	古墳	5	18	E→W	
溝 9	暗灰褐色砂質土	須恵器・土師器	古墳	12	36	E→W	
溝10	暗灰色砂質土 (1cm前後の礫炭)	弥生土器・土師器・ 須恵器・製塩土器	古墳	8	40	E→W	
溝11	暗黄褐色砂質土	弥生土器・(縄文?)	古墳	7	16	E→W	
溝12	暗黄褐色砂質土	韓式系土器・製塩土器・ 縄文土器・土師器	古墳	9	45	E→W	
溝13	淡黒褐色砂質土	土師器・製塩土器・ 須恵器	古墳	16	48	E→W	

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	幅 (cm)	深さ (cm)	方向	備考
溝14	黒褐色砂質土	土師器・製塩土器	古墳	12	212	NW→SE	
溝15	淡灰色砂礫	なし	古墳	6	49	NE→SW	
溝16	暗灰色砂質土	弥生土器	弥生	5	40	E→W	
溝17	暗茶褐色砂質土	縄文土器・ 弥生土器・石器	Ⅱ様式	60	280	E→S→N	方形周溝墓 2
溝18	淡灰黄色砂質土		古墳	6	280	E→W	
溝19	暗灰黄色砂質土	製塩土器・土師器・ 須恵器・縄文土器	古墳	10	280	E→W	
溝20-1	黄灰褐色砂質土	弥生土器Ⅰ様式新・ Ⅱ様式・縄文土器	弥生	92	200	S→N	方形周溝墓 3
溝21	茶褐色砂質土	製塩土器・弥生土器	古墳	25	30	S→N	
溝22	灰黒色砂質土	製塩土器・土師器・ 弥生土器	古墳	130	28	NE→SW	
溝23	淡黄灰色砂質土	製塩土器・弥生土器	古墳	7	28	E→W	
溝20-2	淡灰褐色砂質土	弥生土器	弥生	30	98	E→W	方形周溝墓 3
溝24	淡黄灰色砂質土 炭を含む	土師器・製塩土器・ 弥生土器	古墳	8	24	SW→NE	
溝25	黄灰色砂質土	製塩土器・土師器・弥生 土器・縄文土器・須恵器	古墳	8	24	E→W	
溝26	暗黄灰色砂質土	製塩土器・土師器・弥生 土器・縄文土器・須恵器	古墳	8	84	SE→NW	
溝27	灰茶灰色砂質土	製塩土器・土師器・ 弥生土器・須恵器	古墳	9	160	E→W	
溝28	暗灰色砂質土	須恵器・製塩土器・ 土師器	古墳	13	96	E→W	
溝29	淡茶褐色砂質土 小礫を含む	土師器・製塩土器・人骨・ 弥生土器・縄文土器	古墳	16	96	E→W	
溝30	暗黄灰色砂質土	弥生土器・縄文土器	弥生Ⅲ様式	60	60	N→S	方形周溝墓 1
溝31	灰黒褐色砂質土 炭を含む	須恵器・土師器・ 製塩土器・弥生土器		8	38	E→W	
溝20-3	黄褐色砂質粘土	弥生土器	弥生Ⅲ	80	320	S→N	方形周溝墓 3
溝32	暗灰色砂礫	弥生土器	弥生	8	36	E→W	土壌16に切られる
溝33	暗褐色砂質土	縄文土器・石器・石	縄文Ⅱ	20	240	S→NW	方形周溝墓
溝34	暗黄灰色砂質土	縄文土器・石	縄文Ⅲ	24	52	E→W	
溝35	暗黒灰色粘土	縄文土器・石	縄文Ⅲ	16	220	S→N	
溝36	暗灰黄色砂質土	縄文土器	縄文Ⅳ	13	160	NW→SE	
溝37	暗灰黄色砂質土	縄文土器	縄文Ⅳ	7	27	NW→SE	
溝38	淡灰青色砂質土	なし	縄文Ⅴ	16	24	E→W	縄文後期

土 壙

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	平面形 径 (cm)	深さ (cm)	備考
土壙1	赤褐色砂質土	なし	近世~近代	楕円 長168	68	
土壙2	暗茶灰色砂質土	陶器・弥生土器	近世~近代	楕円 長128	56	
土壙3	オリブ黒色 小礫・混り土	須恵器 etc.	飛鳥	円 44	12	
土壙4	暗褐色砂質土	須恵器・土師器	古墳	楕円 長88・短44	5	
土壙5	淡黄褐色細砂	土師器・製塩土器	古墳	楕円 長90	28	
土壙6	暗灰色砂質土	須恵器・土師器・ 製塩土器	古墳	不整円形 長70	4	
土壙7	暗灰褐色砂質土	土師器	古墳	楕円 長50	20	

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	平面形状 (cm)	深さ(cm)	備考
土壌8	茶褐色砂質土 緑灰色砂質土	製塩土器・土師器	古墳	楕円 長120・短50	28	
土壌9	暗灰褐色砂質土	縄文土器	古墳	楕円 短29	5	
土壌10	茶褐色砂質土	製塩土器・土師器	古墳	円 48	15	
土壌11	茶褐色砂質土	縄文土器	古墳	不整形円形 長40・短24	5	
土壌12	淡灰褐色砂質土	土師器	古墳	楕円 短36	10	
土壌13	茶灰色砂質粘土		古墳	楕円 長136	24	
土壌14	暗黒褐色粘土	弥生土器	弥生	楕円 長64・短44	8	底部穿孔の甕1
土壌15	明黒褐色粘土	炭	縄文or弥生	楕円 短80	16	
土壌16	暗灰褐色砂質土	弥生土器	弥生	楕円 短120	22	
土壌17	黒灰色砂質粘土	縄文土器	縄文Ⅰ	隅丸三角 長40・短36	7	
土壌18	黒灰色シルト質粘土	炭化物	縄文Ⅰ	ひし形 長88・短52	20	
土壌19	緑灰色砂	なし	縄文Ⅰ	楕円 短24	19	
土壌20	黒褐色砂質粘土	縄文土器	縄文Ⅲ	楕円 短40+α	32	
土壌21	黒褐色砂質粘土	縄文土器	縄文Ⅲ	楕円 短52	16	
土壌22	黒褐色砂質粘土	縄文土器・石斧・焼土塊	縄文Ⅲ	楕円 短140	12	西端は擾乱で破壊、東端は調査区外にのびる
土壌23	暗灰色粘土	縄文土器	縄文Ⅲ	楕円 短68	24	
土壌24	淡灰褐色砂質粘土	縄文土器	縄文Ⅲ	楕円 短60		
土壌25	黒褐色砂質粘土 炭を含む	獣骨・焼土・土器	縄文Ⅲ	楕円 短48+α	20	
土壌26	黒褐色砂質粘土	縄文土器	縄文Ⅲ	楕円 長80+α		
土壌27	黒褐色粘土 暗灰色粘土	炭化物	縄文Ⅲ	楕円	27	
土壌28	暗灰色粘土	獣骨・炭化物・焼土	縄文Ⅲ	楕円 長52	28	
土壌29	暗灰色粘土	炭	縄文Ⅲ	楕円 長72	16	
土壌30	灰黒色粘土	縄文土器・焼土・炭化物	縄文Ⅳ	楕円 長36・短24	12	
土壌31	灰黒色砂質土	縄文土器・焼土・炭化物	縄文Ⅳ	楕円 長40・短24	24	
土壌32	灰黒色粘土	焼土・焼骨・炭	縄文Ⅳ	楕円 長40・短24	24	
土壌33	灰黒色粘土	焼土・炭化物	縄文Ⅳ	楕円 長60・短40	21	
土壌34	灰黒色粘土	植物の種子・土器・炭化物	縄文Ⅳ	楕円 長32・短30	20	
土壌35	灰黒色粘土	土器・焼土・炭化物	縄文Ⅳ	楕円 短44	12	
土壌36	灰黒色粘土	土器・炭化物・焼土	縄文Ⅳ	楕円 長44・短28	9	
土壌37	暗青灰色砂質土	焼土・炭化物・土器片	縄文Ⅳ	楕円 長40・短30	8	
土壌38	灰黒色粘土	炭化物	縄文Ⅳ	楕円 長53・短24	8	
土壌39	灰黒色粘土	炭化物	縄文Ⅳ	楕円 長36・短24	7	
土壌40	灰黒色粘土	炭化物	縄文Ⅳ	楕円 長36・短32	16	
土壌41	暗灰色粘土	土器・炭化物	縄文Ⅳ	楕円 短56	56	
土壌42	灰黒色砂質土	土器・炭化物	縄文Ⅳ	楕円 長33・短24	5	
土壌43	暗灰色砂質土	縄文土器	縄文Ⅳ	楕円 短45	8	
土壌44	暗灰褐色砂質土	縄文土器	縄文Ⅳ	楕円 長92	12	

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	平面形状 (cm)	深さ(cm)	備考
土壌45	暗灰色砂質土	石器・土器・石皿	縄文Ⅳ	楕円 短40	13	
土壌46	明黒褐色砂質土	縄文土器	縄文Ⅳ	楕円 短12	12	
土壌47	暗灰色粘土	炭	縄文Ⅳ	楕円 長80以上	20	南壁断面
土壌48	暗灰色粘土	なし	縄文Ⅴ	楕円 短38	8	
土壌49	暗灰色粘土	炭・焼土・土器	縄文Ⅳ		44	
土壌50	暗灰色粘土	炭	縄文Ⅳ		24	
土壌51	暗灰色粘土	炭	縄文Ⅳ		36	

方形周溝墓

遺構番号	堆丘規模(m)	周溝(m)	周溝幅(m)	周溝深(m)	墓壇(m)	木棺(m)	埋葬主体	供献土器	備考
方形周溝墓 1	?×5.6以上	?×3.3以上	1.6	0.6	2.5×1 深さ0.6以上	底板1.72×0.65 内方1.72×0.48	20代後半女性 頭位北		周溝及び墓壇内に第Ⅲ様式の土器
方形周溝墓 2	6.72以上×4.8以上	8.4以上×6.4以上	2.68 2.4	(北)0.6 (西)0.88				第Ⅱ様式壺1(北) 甕下半部1(西)	
方形周溝墓 3	7.06以上×5.76	7.68以上×10.56	2 3.2 1.6	(東)0.92 (西)0.8 (北)0.4				第Ⅲ様式壺5、壺蓋1、 甕2、砥石1(西側)	

自然流路

名称	幅(m)	深さ(m)	長さ(検出)(m)	方向	堆積土	出土遺物	時期	備考
自然流路1	20以上	2.2	6	NE→SW	黄灰色砂質土、黄褐色シルト質粘土、灰黒色砂礫、黄褐色砂	弥生Ⅴ、布留Ⅰ、須恵器、庄内、弥生Ⅰ～Ⅴ、縄文晩期	弥生Ⅳ・Ⅴ～古墳中期中項	第1調査区
〃 2	1以上	0.6	2.4	NE→SW	黄灰色砂、暗緑灰色砂、暗青灰色シルト、暗黄灰色砂	須恵器、土師器、弥生Ⅰ～Ⅴ、縄文晩期土器	古墳中期中項	溝とピット46に切られる
〃 3	7	2.2以上	2.2	E→W	暗赤褐色砂礫、黄灰色砂、青灰色砂礫、青灰色砂	縄文、弥生、布留式土器	古墳中期中項	上面より古墳時代中期後半の遺構
〃 4	1.6以上	0.8以上	4	NE→SW	黄褐色砂、黄褐色砂礫	須恵器、土師器、弥生、縄文土器	古墳後期初頭	古墳時代中期後半遺構面を切る
〃 5	2以上	0.5			黄褐色砂、黄褐色砂質土	なし	弥生Ⅱ～布留	断面で確認
〃 6	1.6以上	0.4以上	8	E→W	黄褐色砂礫	弥生土器	弥生Ⅲ	方形周溝墓1の溝が切る
〃 7	2.2以上	0.2	6	NE→W	黒褐色砂礫	なし	滋賀Ⅳ	黒灰色粘土上面より切る
〃 8	40	2.4以上	18	E→W	黄灰色砂礫、暗青色シルト	縄文土器	縄文後期以前	いくつかの流路の集合
その他		1以上	2?		黒色粘土、黒色シルト	滋賀ⅢⅥ、後期、縄文	滋賀ⅢⅥ後期	第1調査区

墓

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	深さ(cm)	平面図 規模(cm)	備考
木棺墓 1	暗黄灰色砂質土、暗灰色粘土(黄灰色シルトのブロック含む)	弥生土器、縄文土器	畿内第Ⅲ様式	掘り方54 木棺 22	掘り方250×94 木棺170×48	黄灰色シルト 上面で検出
土壌墓 1	黒灰色粘土	石、縄文土器	滋賀ⅢⅥ b	19	楕円形 160前後×140	埋土内出土土器
土壌墓 2	黒褐色粘土	石、縄文土器	滋賀ⅢⅥ b	15	方形 56×(34+α)	埋土内出土土器

落ち込み

遺構名称	埋土土層名	出土遺物	時期	深さ(cm)	備考
落ち込み 1	黒灰色砂質土	縄文土器、深鉢	縄文Ⅳ	約20	埋め甕の甕棺の可能性有り
落ち込み 2	黒灰色砂質土	縄文土器、焼土 etc.	縄文Ⅳ	約30	

V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代から近代に至る各時期のものがある。その量は、コンテナ300個以上にのぼる。このうちの大部分は、縄文～古墳時代に属す遺物である。

遺物の時期別量の内訳は、縄文時代に属すものが最も多くコンテナ120個、次いで古墳時代中期の遺物コンテナ100個、弥生時代の遺物コンテナ50個、古墳時代後期以降現代に至る遺物コンテナ30個である。

古墳時代後期以降現代に至る土器は、7世紀代の遺構が少数認められた以外、他は一部の近代のものを除いて、旧耕土および床土よりの出土である。旧耕土及び床土より出土した古代・中世・近世の遺物は、鬼塚遺跡が縄文時代より現代に至るまで存続していたことを示すものであるが、本調査地点においては当該時期の遺構を検出しておらず、現代のものを除いてその出自を明確にできない。

したがって、この章では遺構などを伴ない本調査地点における出自が明らかな時期の遺物を縄文時代後期以前、晩期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期・中期、飛鳥時代に分けて記述する。なお、古墳時代中期のなかには後期初頭に属すものも含める。

土器の胎土については、現在の東大阪市域の生駒山地の一部を形成する閃緑岩などが風化した粘土に含まれる角閃石を含み、色調が茶褐色を呈するいわゆる生駒山地西麓産あるいは河内産ともよばれる土器について在地産とし、異なるものについては他地域産とする。

在地産の土器の中には、角閃石を多量に含むものと少量含むものが存在する。これについては、第IV章の2で述べる。本書に掲載した遺物実測図および拓影の個々の説明は、観察表を参照していただきたい。本文中では遺物の概要と明らかにしえた事柄について記述する。

1. 縄文時代後期以前の遺物

縄文時代後期以前の遺物が全部でコンテナ1/5程度、出土している。

縄文時代後期以前の土器

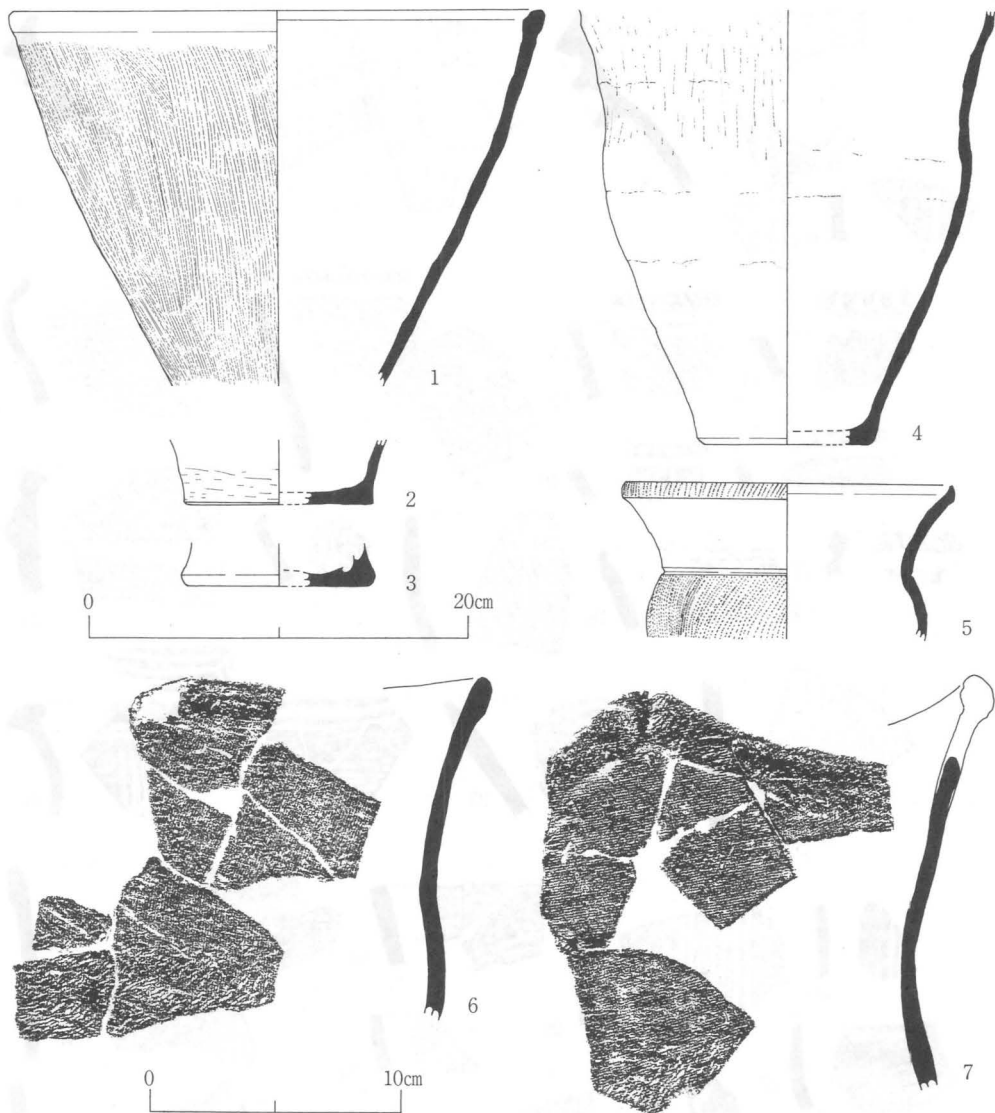
加曾利EⅡ式系（咲畑式）の土器は、口縁部外面に撚糸文、隆帯による渦文を施し渦文の下に押し引きによる並行沈線をもつ図8～10を代表とする。里木Ⅱ式系の土器は外方に開く体部から内彎する口縁部をもつ図14のようなものが出土している。

器種は、精製、粗製の深鉢が認められる。土器はほとんど小破片で、わずかに平底で体部上半の外面を縦方向のケズリ調整をする粗製の深鉢図4が、ある程度の形を知ることのできるものである。土器の胎土は、在地産も見られるが後・晩期の土器に比して他地域産の比率が高い。第I調査区から出土した。周辺ではこの時期の資料はほとんど知られていない。

縄文時代後期中頃の土器

後期中頃の土器は、北白川上層Ⅱ式を主にするものである。一部、同Ⅰ式に属すかと考えられる。器種は、深鉢が大半で浅鉢も少量認められる。深鉢は、縁帯文をもつものが多い。

土器は小破片が多い。波状口縁をもち口縁部外面と体部下半に縄文を施す深鉢図6・7や体



第24図 縄文時代中・後期以前土器実測図、拓影・断面図

部外面を貝殻により調整する図1などは全形をある程度知ることのできるものである。

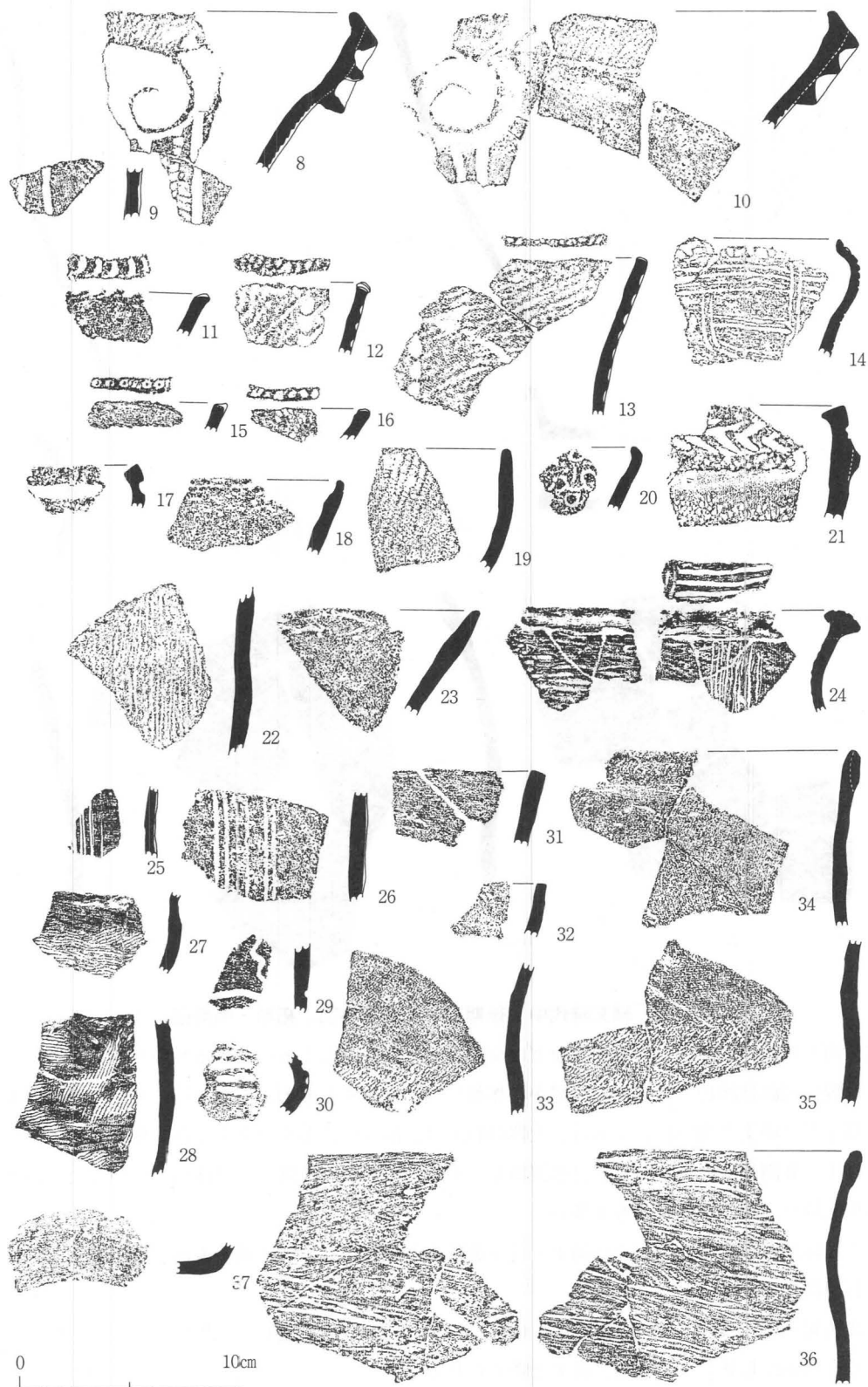
精製の浅鉢は図19のように口縁部から体部に縄文を施すものと、深鉢と同じく口縁部外面と体部下半に縄文を施す図5がある。土器の胎土は、図5の浅鉢を除き全て在産である。

第Ⅰ・Ⅱ調査区の包含層や、自然河川から出土しているが遺構からは検出していない。遺物の出土量は、第Ⅱ調査区の方が多い。

この時期の土器は、周辺では縄手・日下遺跡などで知られており縄手遺跡では主体をなす。

石製品

淡黄褐色粘土層から出土した石匙(図17)があげられる。攪乱から出土した石錘1点(図51)も形態から見てこの時期に属すと考えられる。



第25図 縄文時代中・後期土器拓影・断面図

2. 縄文時代晩期の遺物

この時期の遺物は、遺構および包含層や攪乱から出土した。遺物の内訳は、土器を中心に土偶などの土製品と石鏃などの石製品がある。動物遺存体（シカ・イノシシ・サワラなど）・植物遺存体（イチイガシなど）も少量認められる。

土器の時期を細かく分ければ、晩期後半の滋賀里Ⅲb～V式併行までの土器に細分される。それぞれの土器は土層・遺構別に見れば、滋賀里Ⅲb式併行の土器が、暗黄灰色粘土層および上面で検出した土壙34や竪穴住居を構成したと考えられるピットなどの遺構（縄文Ⅳ）から出土している。

滋賀里Ⅳ式併行に属す遺物が黒灰色粘土・黒灰色砂質土下層と黒灰色粘土層の上面より切り込まれた溝35などの遺構内（縄文Ⅲ）より出土し、滋賀里Ⅴ式併行に属す土器が黒灰色砂質土下層上面に切り込まれた溝33やこれを覆う黒灰色砂質土・黄灰色シルト（縄文Ⅱ・Ⅰ）から出土している。

土製品と石製品に関しては別にまとめる。土器をはじめとする個々の遺物の詳細は観察表を参照されたい。また、各遺構・包含層出土土器の個体数（口縁部から算出）を表8に掲げたので併せて参照されたい。

土器は、深鉢・浅鉢・壺を形態からいくつかのタイプに分類した。分類基準の概要を記した後、遺構面と同じく縄文Ⅳ～Ⅰに分けて説明する。

深鉢はA～Ⅰとその他（1点しか出土していないので浅鉢の可能性も考えられる）の10タイプに分類した。

深鉢A 肩の張る体部と外反する口縁部をもつ。口縁部内外面はナデ肩部以下の外面はケズリで仕上げる。ケズリの方向は肩部付近を水平、下半は底部から上に向かう縦方向である。滋賀里遺跡出土の滋賀里Ⅲ式に属す甕E₂に相当する。

深鉢B 深鉢Aの口縁端部に刻目を施すものである。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ式に属す甕E₂の中に含まれるものに相当する。

深鉢C 深鉢Bの口縁部外面に1条の刻目凸帯を巡らすものである。刻目をもたない凸帯や口縁端部に刻目を持たないものも少量認められる。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ式に属す甕M₁に相当する。船橋遺跡などで類例が知られる。

深鉢D 深鉢Cの口縁端部に刻目をもたないものである。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ式に属す甕M₂に相当する。船橋・森の宮遺跡に類例が知られる。

深鉢E 深鉢Dの肩部に1条の凸帯を巡らす。凸帯には刻目を施すものが多いが、少数無いものもある。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅴ式に属す甕Pに相当する。船橋遺跡に類例が知られる。

深鉢F 砲弾状の器体をもつもので外面はケズリ内面はナデで仕上げる。口縁端部に刻目をもたないものをF₁、施すものをF₂と細分する。F₂は少ない。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ～Ⅴ式に属す深鉢Gに相当する。長原遺跡などに類例が有る。

深鉢G 深鉢Fの口縁部外面に1条の刻目凸帯を巡らす。口縁端部に刻目を施すものをG₁、

もたないものG₂と細分する。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ～Ⅴ式に属す深鉢Gに含まれる。長原遺跡などに類例が有る。

深鉢H 深鉢Dの形態に類似するが口縁部外面に巡らす1条の凸帯に刻目を持たない。波状口縁を呈するものがある。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ式に属す甕K₁に相当する。日下遺跡などに類例が有る。

深鉢I 体部から口縁部にかけて2段に屈曲するものである。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ式に属す深鉢A₁に相当する。2個体分出土している。馬場川遺跡などに類例が有る。

その他は、口径が大きく器高も高くなることが予想されるため深鉢としたが内外面ともミガキ調整することから後述する浅鉢Eとすべきかも知れない。1点出土している。

壺は、凸帯の有無などの形態の違いからA～Cの3タイプに分類した。

壺A 内傾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデで仕上げる。長原遺跡などに類例がある。

壺B 口縁部外面に1条の刻目をもたない凸帯を巡らす。内外面ともナデで仕上げる。馬見塚遺跡F地点などに類例がある。

壺C 口縁部外面に1条の刻目凸帯を巡らす。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ～Ⅴ式に属す壺Cに相当する。船橋遺跡などに類例がある。

浅鉢は、形態の異なりなどからA～Fの6タイプに分類した。

浅鉢A 著しく外反する体部から頸部はほぼ直立して短く立ち上がり、口縁部は再度外反する。口縁端部は肥厚する。口縁部に突起をもつものがある。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ式に属す浅鉢B₂に相当する。日下遺跡などに類例がある。

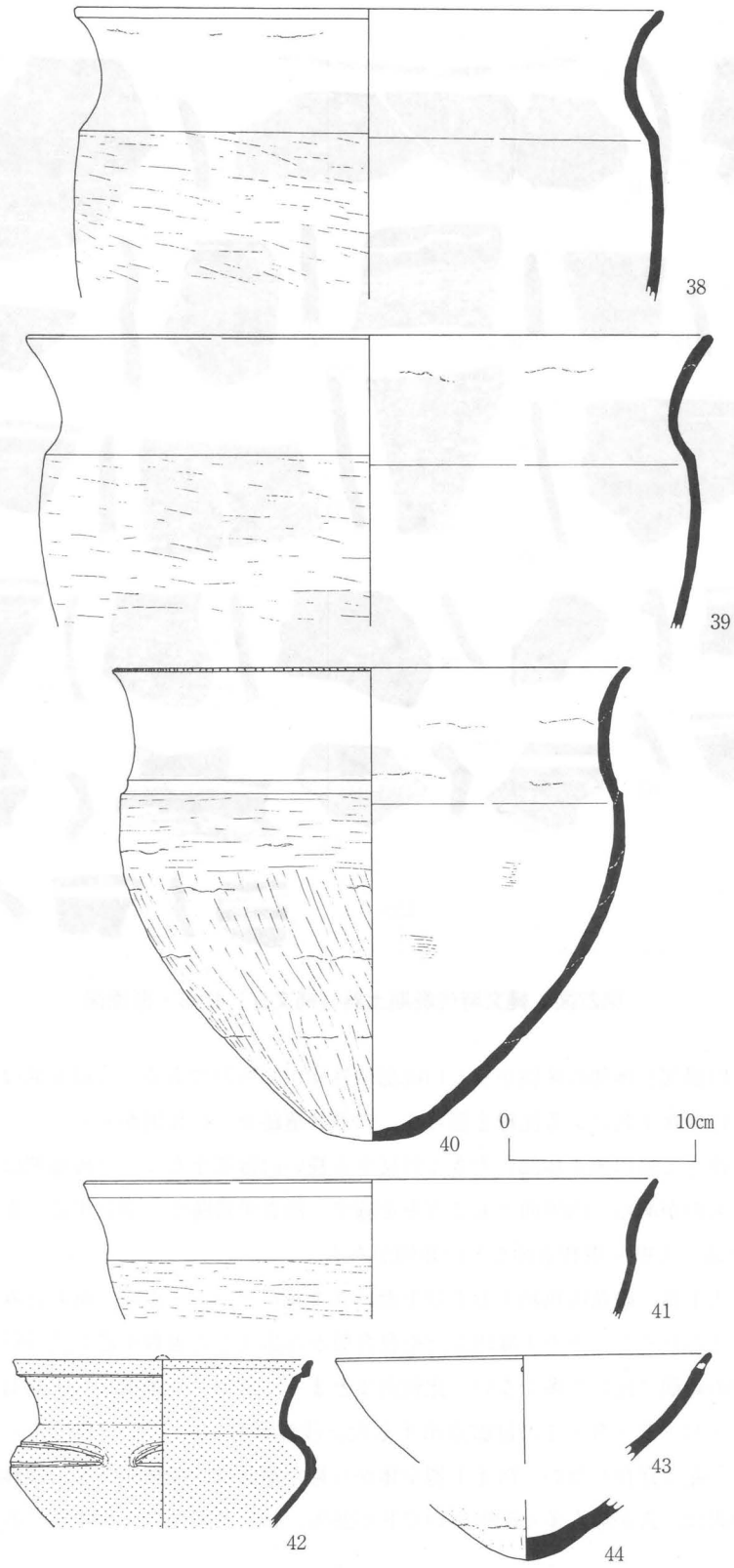
浅鉢B 体部が浅くかつ屈曲する。口縁部は短く外反し口縁端部を肥厚させる。口縁部に突起をもつものがある。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ式に属す浅鉢E₄に相当する。日下遺跡などに類例がある。

浅鉢C 口縁部と体部の区別のない椀状を呈するものである。口縁端部に刻目をもつものがある。外面にケズリを施すものをC₁、内外面ともミガキで仕上げるものをC₂と細分する。C₁は滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ～Ⅴ式に属す鉢B₄、C₂は鉢B₃に相当する。長原遺跡などに類例がある。

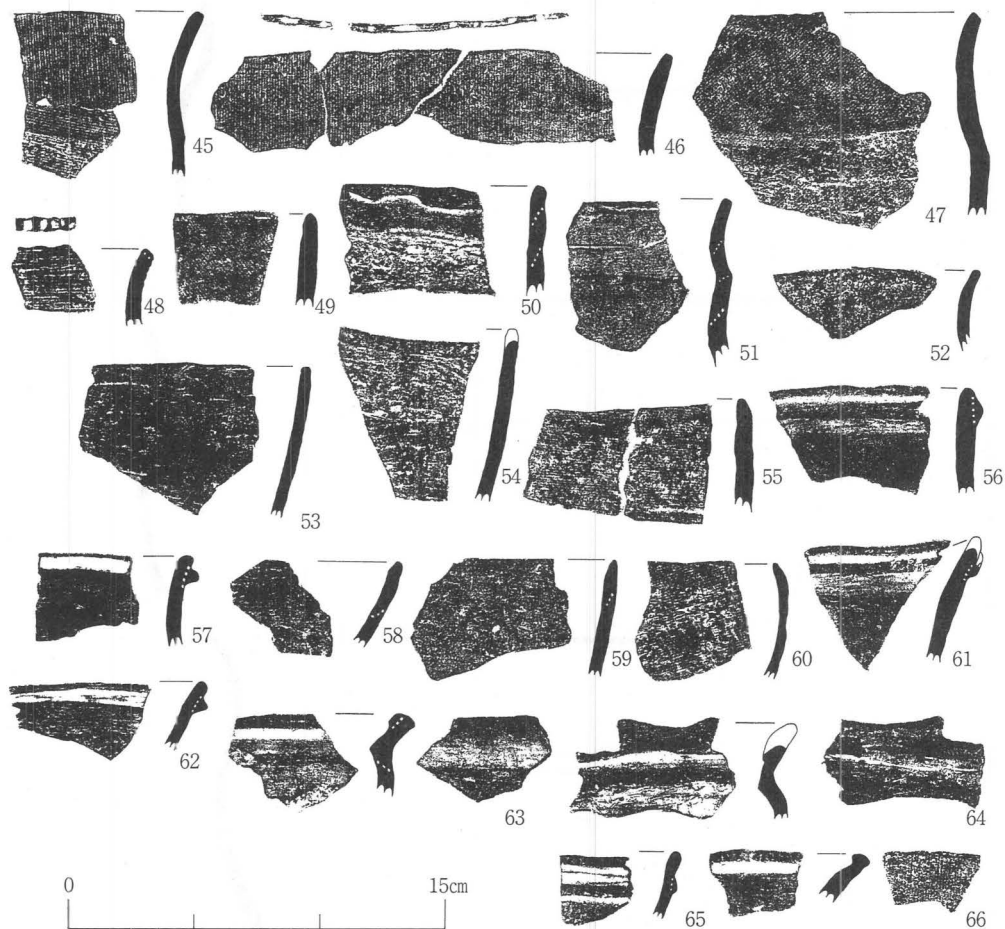
浅鉢D 直口の体部に凸帯が1条巡るものである。凸帯の大半は刻目をもたないが、少量もつものがある。内外面ともミガキで調整する。馬見塚遺跡F地点に類似したものがある。

浅鉢E 肩の張る体部から口縁部が内傾気味に外反するものである。口縁部外面に刻目をもたない凸帯を1条巡らす。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ～Ⅴ式に属す浅鉢G₅に相当する。船橋遺跡などに類例がある。

浅鉢F 肩のはる体部に内傾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面を横ナデ、内面を横方向のミガキで仕上げる。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅳ～Ⅴ式に属す浅鉢G₂に相当する。穴森口酒井遺跡などに類例がある。



第26図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅳ）実測図



第27図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅳ）拓影・断面図

浅鉢G 口縁部と体部の区別がなく口縁部が外反するものである。口縁端部は肥厚する。口縁端部内面に棒状工具による沈線を巡らす。口酒井遺跡などに類例がある。

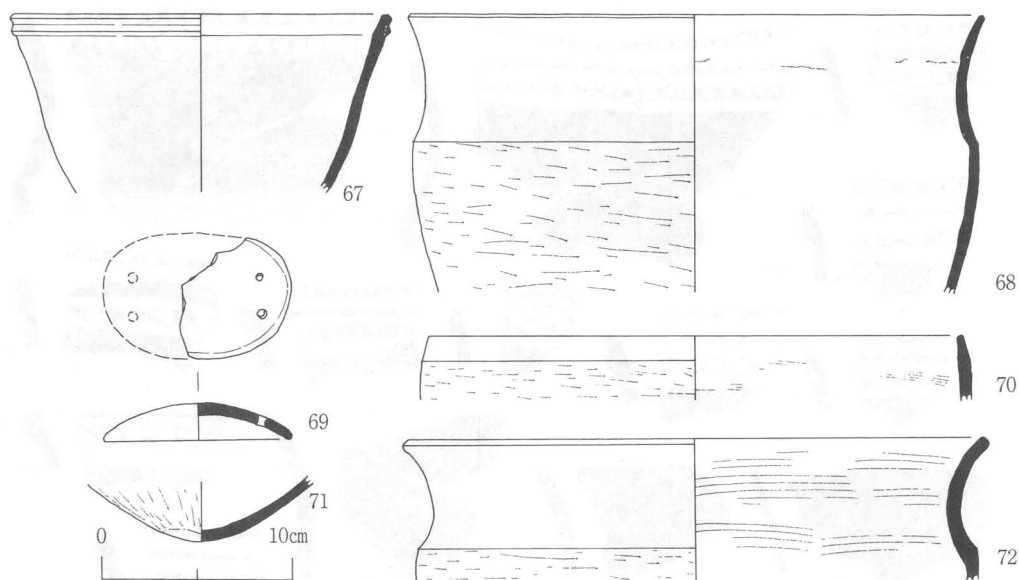
浅鉢H 浅くて肩の張る体部に大きく外反する長い口縁部をもつ。口縁端部は肥厚するものと、しないものがある。内外面ともミガキを施す。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ～Ⅳ式に属す浅鉢A₁に相当する。大県・恩智遺跡などに類例がある。

縄文Ⅳ出土土器（暗黄灰色粘土および上面に営まれたピット・土壇・落ち込み・土壇墓）

柱穴と考えられるピットや土壇内などや包含層から出土した滋賀里Ⅲb式並行の土器である。出土量は他の時期に比して多くない。比較的まとまって出土した遺構は、土壇34である。

深鉢はA・B・F・H・Iの計27点出土した。浅鉢はB・C₁・C₂・D・E・Hの計19点が認められる。壺は存在しない。出土土器全体から見た割合は、深鉢56.8%、浅鉢43.2%である。

深鉢の内訳は、Aが最も多く52%次いでFが28%、B・H 8%、Iが4%である。少量なが



第28図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・土壙22）実測図

ら刻目をもたない凸帯をもつHと、前代からの系譜を引くIの存在が注目される。

浅鉢はC₁が最も多く36.8%次いでDが26.3%、B15.8%、C₂10.5%、E・H5.3%と続く。馬場川遺跡出土品と形態の類似した黒色磨研でベンガラを塗布したEが認められる。

胎土は深鉢では在地産が92%、他地域産が8.0%、浅鉢は在地産が73.7%、他地域産が26.3%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産84.1%、他地域産15.9%となる。深鉢は大半が在地産であることに注意したい。

縄文Ⅲ出土土器（黒灰色粘土および上面に営まれた溝・土壙・黒灰色砂質土下層）

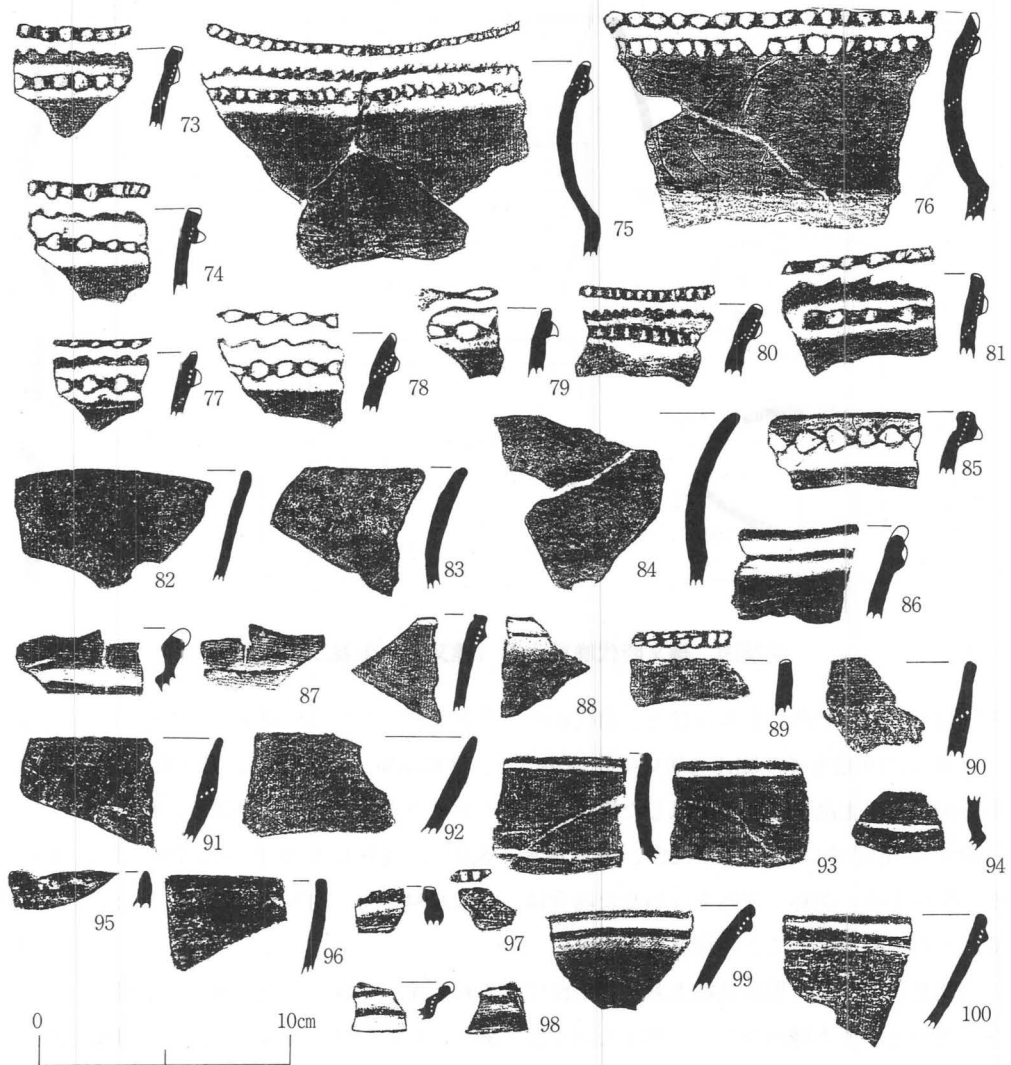
包含層と溝や土壙内などから出土した土器である。比較的まとまって出土した遺構は溝35・土壙22で、これらの遺構のベースとなっている黒灰色粘土層からの出土も多い。

深鉢は、A・B・C・D・F・G₁・G₂・H・I、浅鉢はA・B・C₁・C₂・D・E・G・Hが存在する。壺は認められない。

黒灰色粘土層の出土土器全体（277点）から見た割合は、深鉢65.6%、浅鉢34%、蓋0.4%である。溝35出土品（55点）では、深鉢72.6%、浅鉢27.4%である。蓋は認められない。両者とも7割前後が深鉢であることを示している。蓋については存在していることは確実であるが主要な器形ではない。

以下、まとめて土器の出土した黒灰色粘土層と溝35の出土品の器種構成について述べるが最初に粘土層、次の（ ）内に溝35における割合を記す。溝35はやや新しい傾向を示す。

深鉢は182（40）点出土している。内訳は、Aが最も多く43.4（47.5）%、次いでCが24（30）%、H9.9（2.5）%、F8.3（0）%、G₁8.3（2.5）%、B3.8（12.5）%、G₂2.2（0）



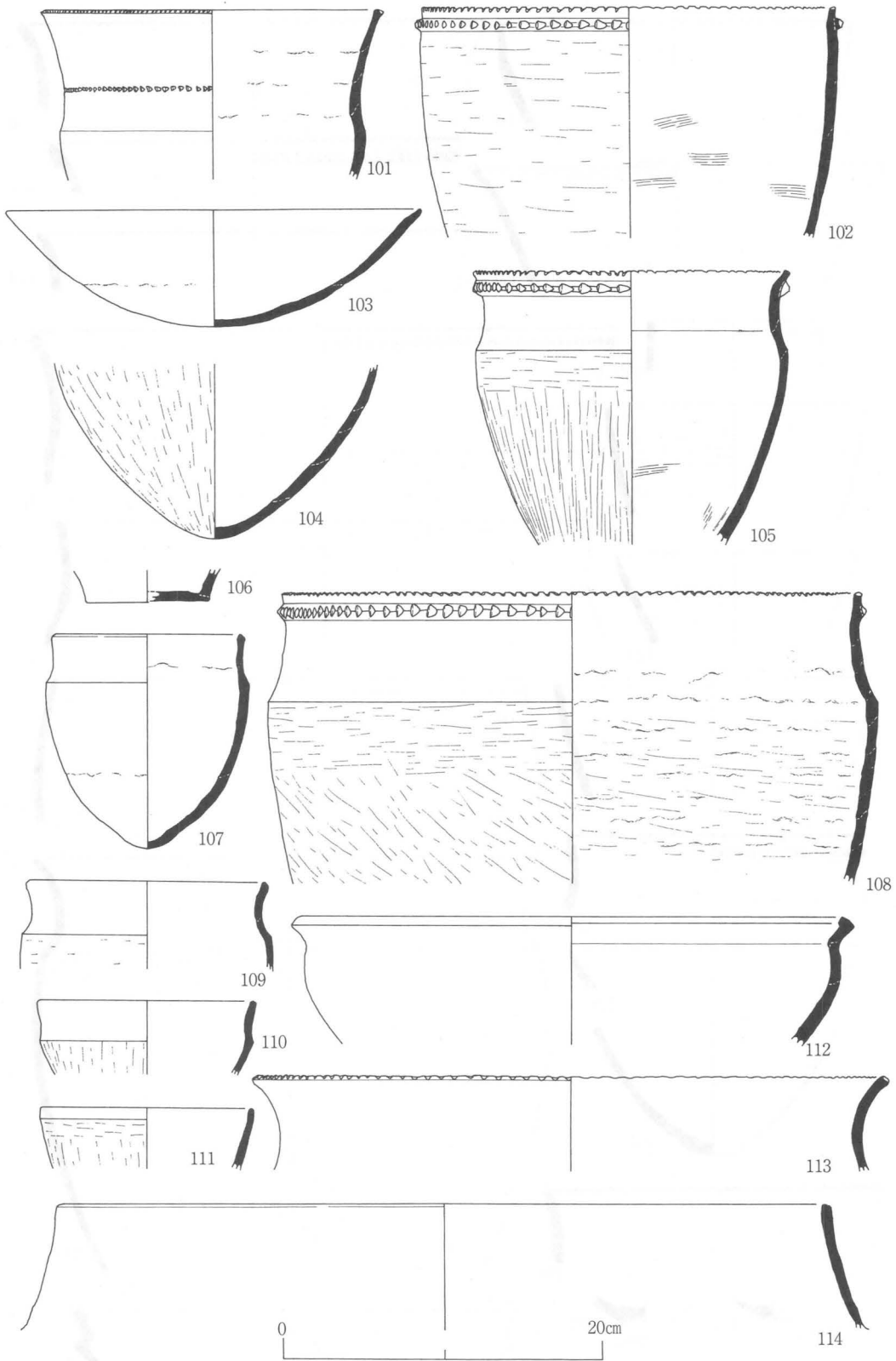
第29図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・土壙21・22、溝35）拓影・断面図

%、D0.5 (2.5) %である。1条の刻目凸帯を施すC・D・Gが出現している。主体をなす器形はA・Cである。両者、合わせると7割前後にのぼることから明らかである。

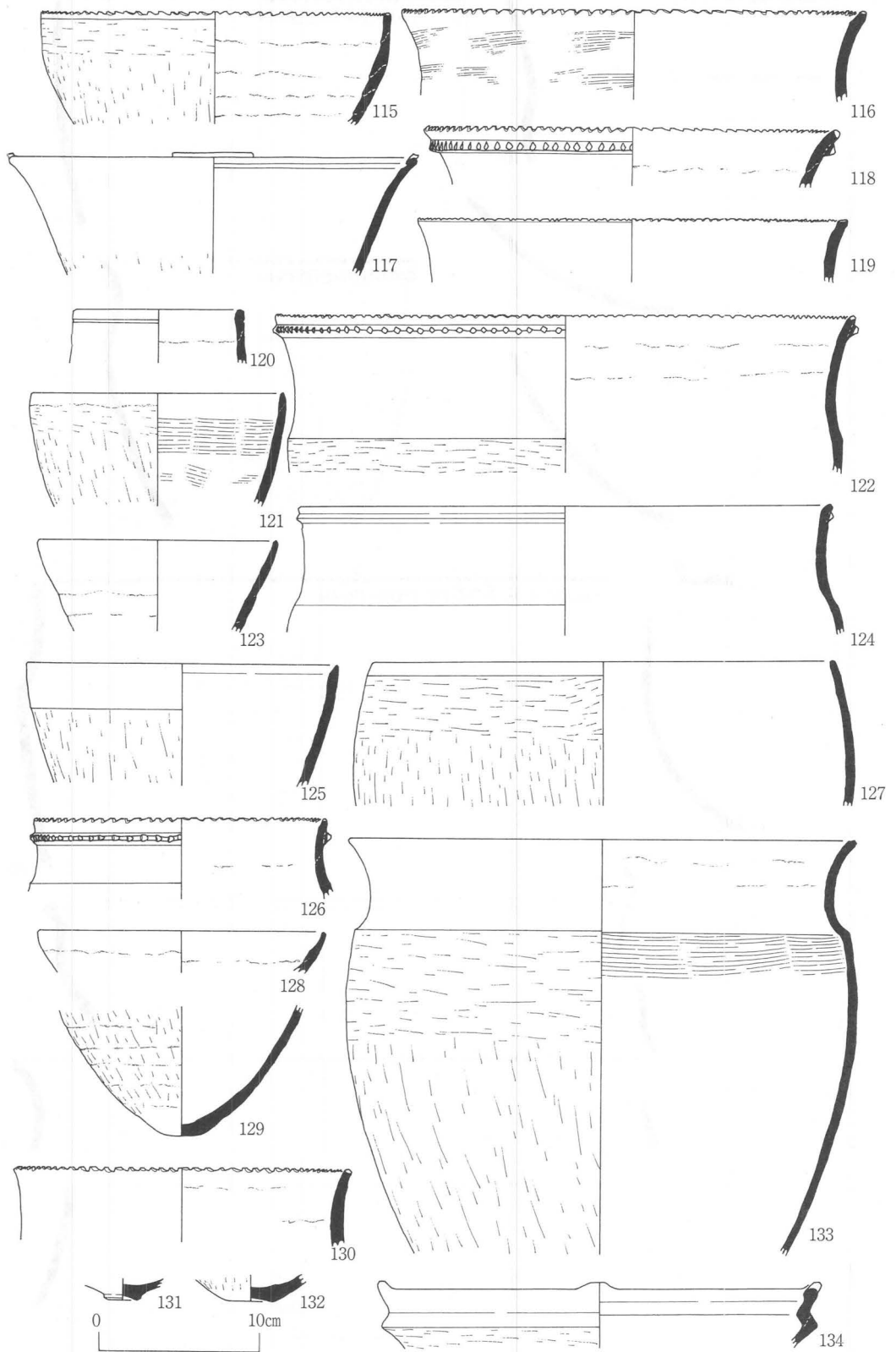
前代からの系譜を引くAがまだ5割近くと最大の比率を占めているものの、刻目凸帯をもつC・D・Gの出現が注目される。特にCは、約2～3割を占め主要なタイプの一つとなっている。また、口縁端部に刻目を施さないDも少数ながら存在する。

浅鉢は93 (15) 点出土している。C₁が最も多く41.9 (40) %次いでEが30.1 (13.3) %、B6.5 (26.7) %、H6.5 (0) %、D5.4 (13.3) %、A3.2 (0) %、その他3.2 (0) % G2.1 (0) %、C₂1.1 (6.7) %と続く。

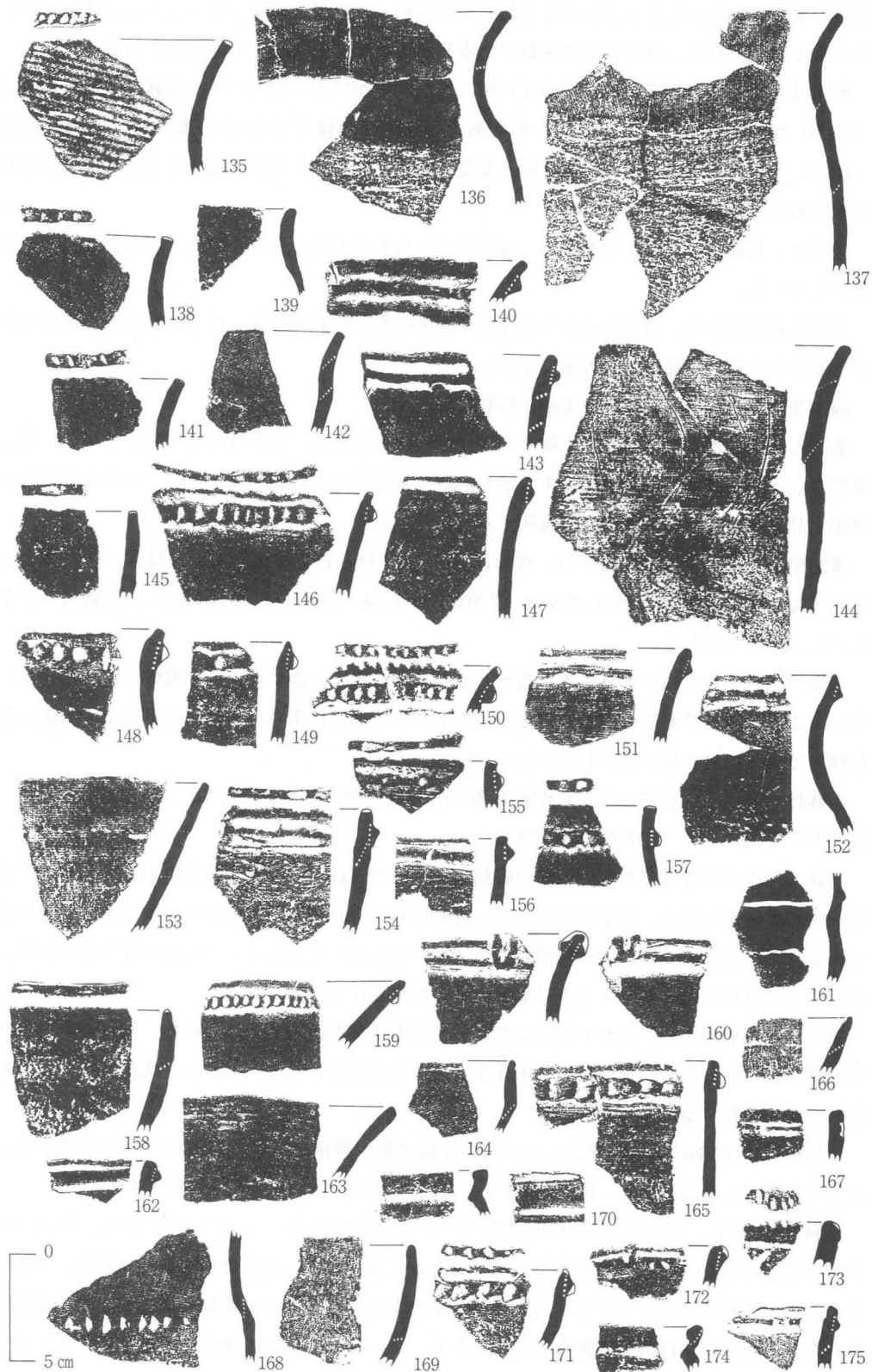
浅鉢は、黒灰色粘土層と溝29とも最も単純な器形であるC₁が約4割と変わらないが、他は



第30図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・溝35）実測図



第31図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・黒灰色粘土）実測図



第32図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・黒灰色粘土）拓影・断面図

割合が異なる。しかしEを合わせると前者が7割強、後者が5割強となりこの2器種が主体を占めると考えられる。縄文Ⅳでは少数であるEが主要なタイプとして存在している。

胎土は深鉢では在地産が88.1 (87.5) %、他地域産が11.9 (12.5) %、浅鉢は在地産が91.4 (93.3) %、他地域産が8.6 (6.7) %である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産89.2 (89.1) %、他地域産10.8 (10.9) %となる。縄文Ⅳと異なり深鉢、浅鉢ともに在地産が約9割を占める点を注意しておきたい。

底部は、丸底がほとんどであるが一部凹底ぎみのものも見られる。また、平底が溝35で1点出土している。

黒灰色粘土層から、稲であることは確実に玄米である可能性の高い種子圧痕をもつ体部片が1点認められた。(那須氏の教示による)

縄文Ⅱ出土土器 (溝33および黒灰色砂質土)

溝33と上部を覆う黒灰色砂質土層から出土した土器である。出土量は他に比して多い。特に溝33からは、今回検出した遺構の中で最も良好な資料が出土した。以下では、溝33と同砂質土層出土品についてそれぞれ概要を説明する。

溝33出土土器 深鉢は、A～H、浅鉢はC₁・C₂・D・Eが存在する。壺はA～Cの全てが存在する。この遺構の出土土器全体 (129点) から見た割合は、深鉢66.6%、浅鉢31%、壺2.4%、蓋0.8%である。

壺は、出現するもののまだ主要な器形とはなっていない。蓋についても前代と同じく存在していることは確実にあるとするに留まる。以下、タイプ毎に深鉢・浅鉢の比率を示す。壺・蓋は検討できるだけの量が出土していない。

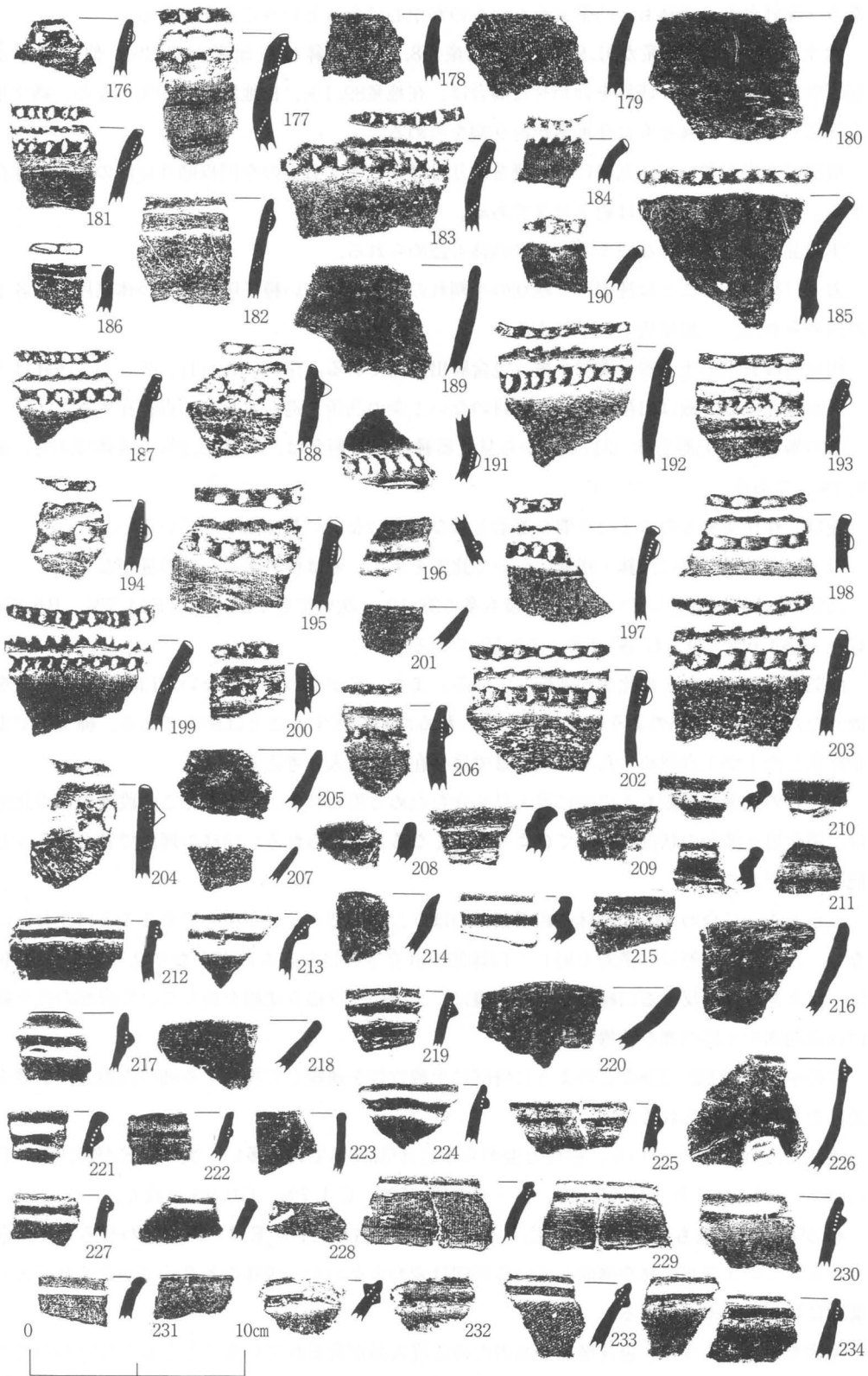
深鉢は、86点出土している。Cが最も多く61.6%、次いでAが17.4%、G₁6.9%、B・H・D各3.5%、E・F・G₂が各1.2%である。

深鉢は船橋式の特徴である口縁部と肩部に各1条の刻目凸帯を施すEが出現している。Cが約6割と主体を占める。Aがそれにつき、両者合わせると約8割にのほりこの2タイプが中心であることを示している。Aの形態は、縄文Ⅳ～Ⅲと新しくなるほど口縁部の外弯度を弱めるが、ここでは更に弱まり直立ぎみになる。Bの形態変化も同様である。

前代からの形譜を引くAがまだ約2割弱と一定の比率を占めているものの、刻目凸帯をもつCが縄文Ⅲに比して約6割と倍増し主体を占める点が注目される。また、2条凸帯をもつEも少数ながら存在する。

Cの中には図136のように頸部にヘラ描き沈線で粗い鋸歯文を描く瀬戸内地方の影響を受けたものが認められる。Hは、図105のように波状口縁をもつものの存在が注目される。

浅鉢は42点出土している。前代と変わらずC₁が50%最も多い。次いでEが25%、D22.5%、C₂2.5%と続く。C₁が5割と主要なタイプである。D・Eも、両者合わせると5割近くを占めこの3者が浅鉢を構成していると言って差し支えない。縄文Ⅲで主要なタイプとなったEと少数存在したDがこの段階で主要なタイプとなる。D・Eいずれも口縁部に凸帯を施すタイプで



第33図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・黒灰色砂質土下層）拓影・断面図

ある。深鉢と共に浅鉢も、凸帯文をもつものが中心になるということができる。

胎土は深鉢は在地産が91.9%、他地域産が8.1%、浅鉢は在地産が83.3%、他地域産が16.7%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産89.1%、他地域産10.9%となる。縄文Ⅲと同じく深鉢、浅鉢ともに在地産が約9割を占める。

底部は丸底が多いが、丸底に粘土紐を貼り付け平底とするものや円板貼り付けのものが存在する。丸底と平底の割合は約7対3である。

実用品とは考えられないミニチュアの鉢も認められる。

玄米（稲であることは確実）と緑豆の半割れの可能性の高い種子圧痕をもつ体部片が、各1点認められた。（那須氏の教示による。）

黒灰色砂質土出土土器 溝33を覆う包含層出土品である。深鉢はA～D、F～I、浅鉢はA～Hが存在する。壺は口縁部外面に刻目のない1条の凸帯を巡らすBが1点存在する。

この層の出土土器全体（317点）から見た器種構成の割合は、深鉢62.2%、浅鉢37.5%、壺0.3%、である。

壺は、存在するもののまだ主要な器形とはなっていない。蓋は出土していない。

以下、各タイプ毎に深鉢・浅鉢について比率を示す。壺は検討するだけの量がない。

深鉢は、197点出土している。Aが最も多く38.1%、次いでCが27.9%、F14.7%、B6.6%、G₁・H各4.6%、D・G₂各1.5%、I0.5%である。

溝33と異なりAとCの比率が逆転している。また、Eが現われていないが口縁部で個体数を数えたため、図335のように体部片が見られるため存在することは確実である。縄文Ⅳで少量存在したIが1点認められるが縄文Ⅲでは存在せず混入と考える。

AとCの比率の逆転もAの中に混入品を含むためと思われる。おそらくこの段階のAの比率は、縄文Ⅲと溝30の状況からみてCよりは低くなると考えられる。同様の理由でFももう少し低くなるであろう。

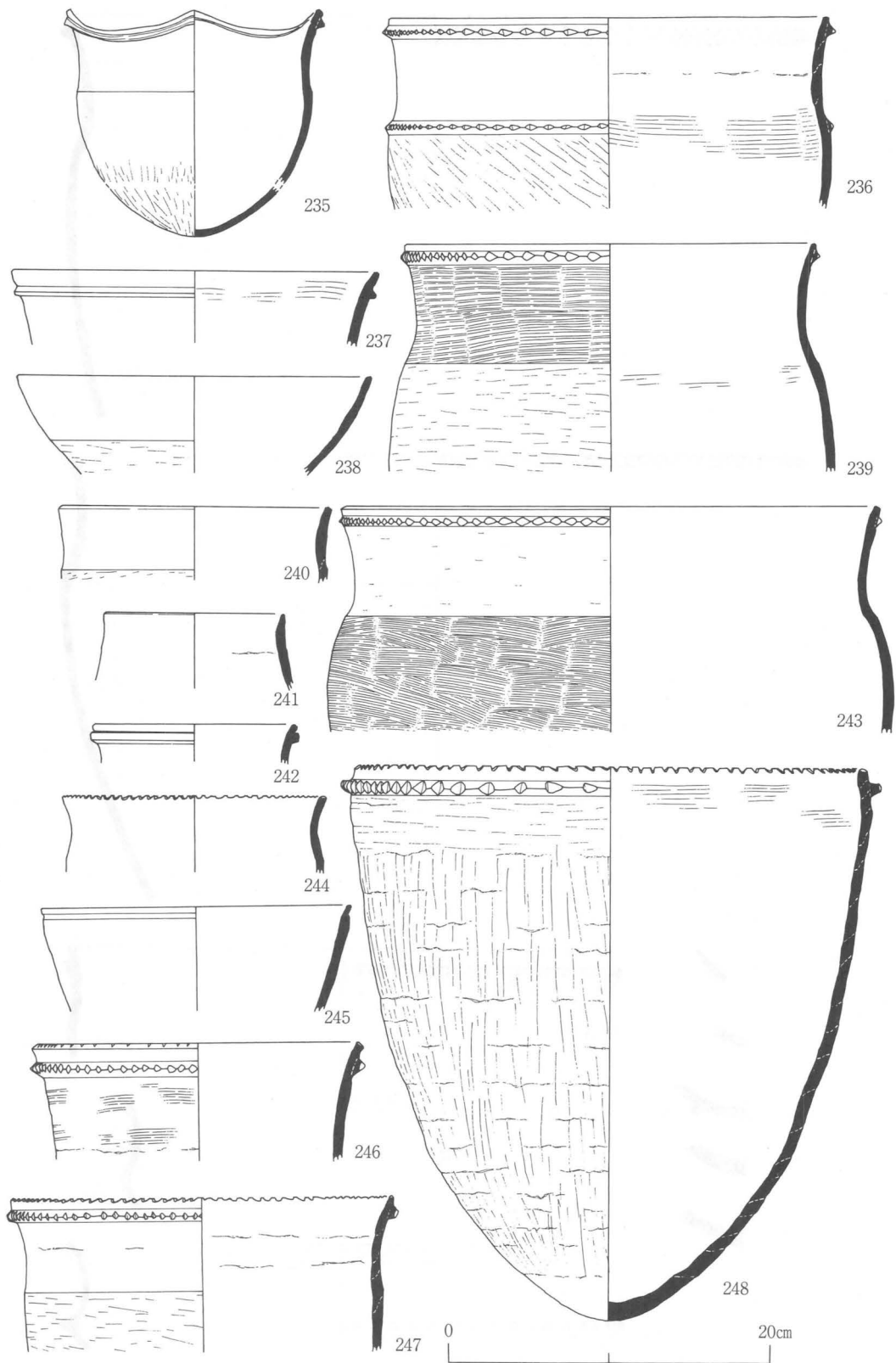
しかしA・C合わせると深鉢の約7割にのぼり、この2タイプが中心であることに変わりはない。A・Bの形態は、溝33と同じく口縁部が直立ぎみになるものがかなり見られる。図310は、直立ぎみに外反する口縁部と肩部の境に、2条のヘラ描き沈線を施して肩部の稜を除けば前期弥生土器の甕を彷彿とさせる。

Cの中には図292・348などのように肩部に半截竹管を連続して押捺する瀬戸内地方の影響を受けたものが認められる。

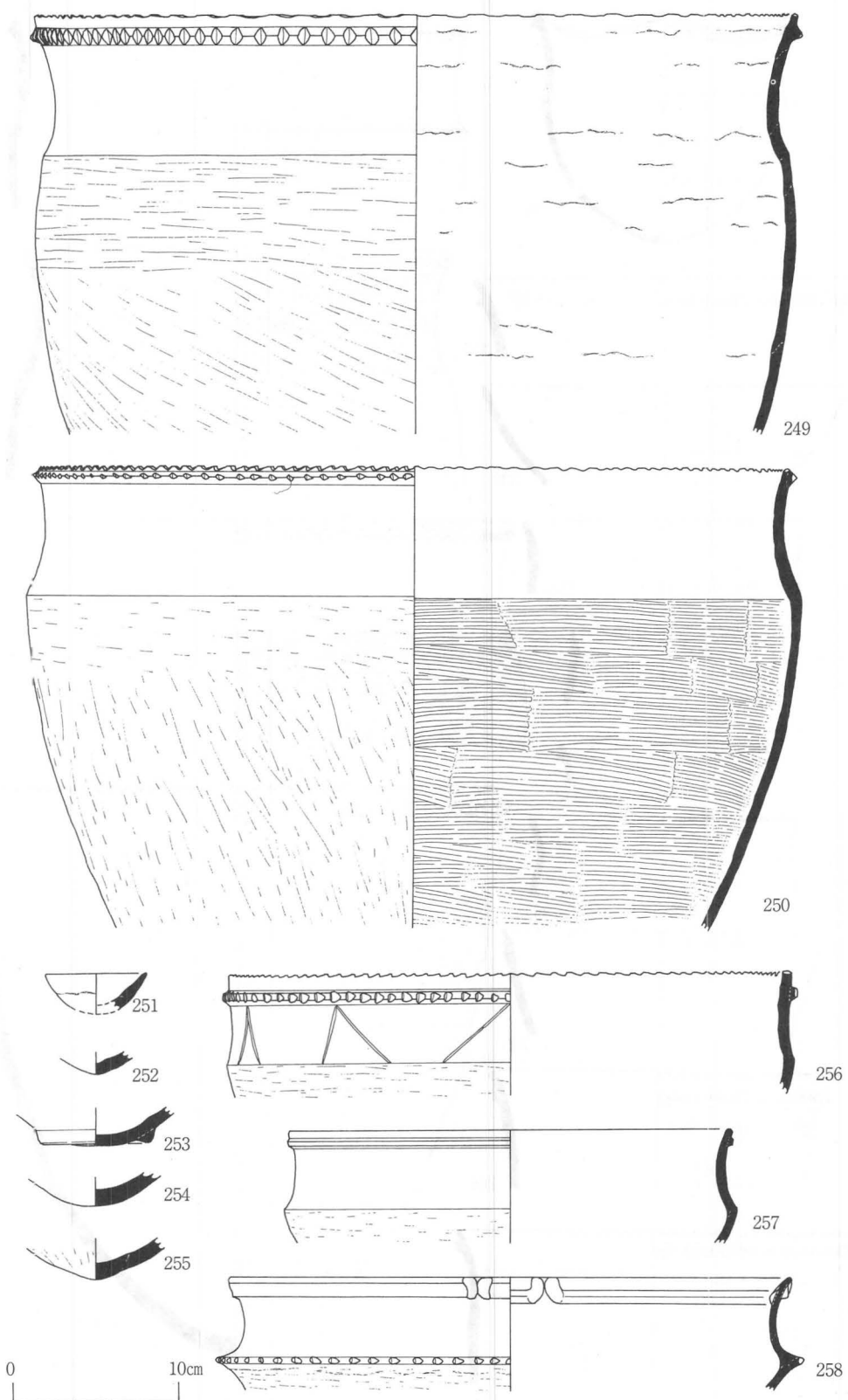
浅鉢は119点出土している。前代と変わらずC₁が37.8%で最も多い。次いでEが26.9%、D11.8%、A5.9%、B・H各5.0%、F・その他2.5%、C₂1.7%、G0.9%と続く。

C₁が約4割と最も多い。溝33でC₁とともに中心を占めたD・Eは、両者合わせると4割弱である。この3者が浅鉢を構成している傾向は変わらないが、浅鉢の各タイプが含まれており、溝33に対して比率が下がる。

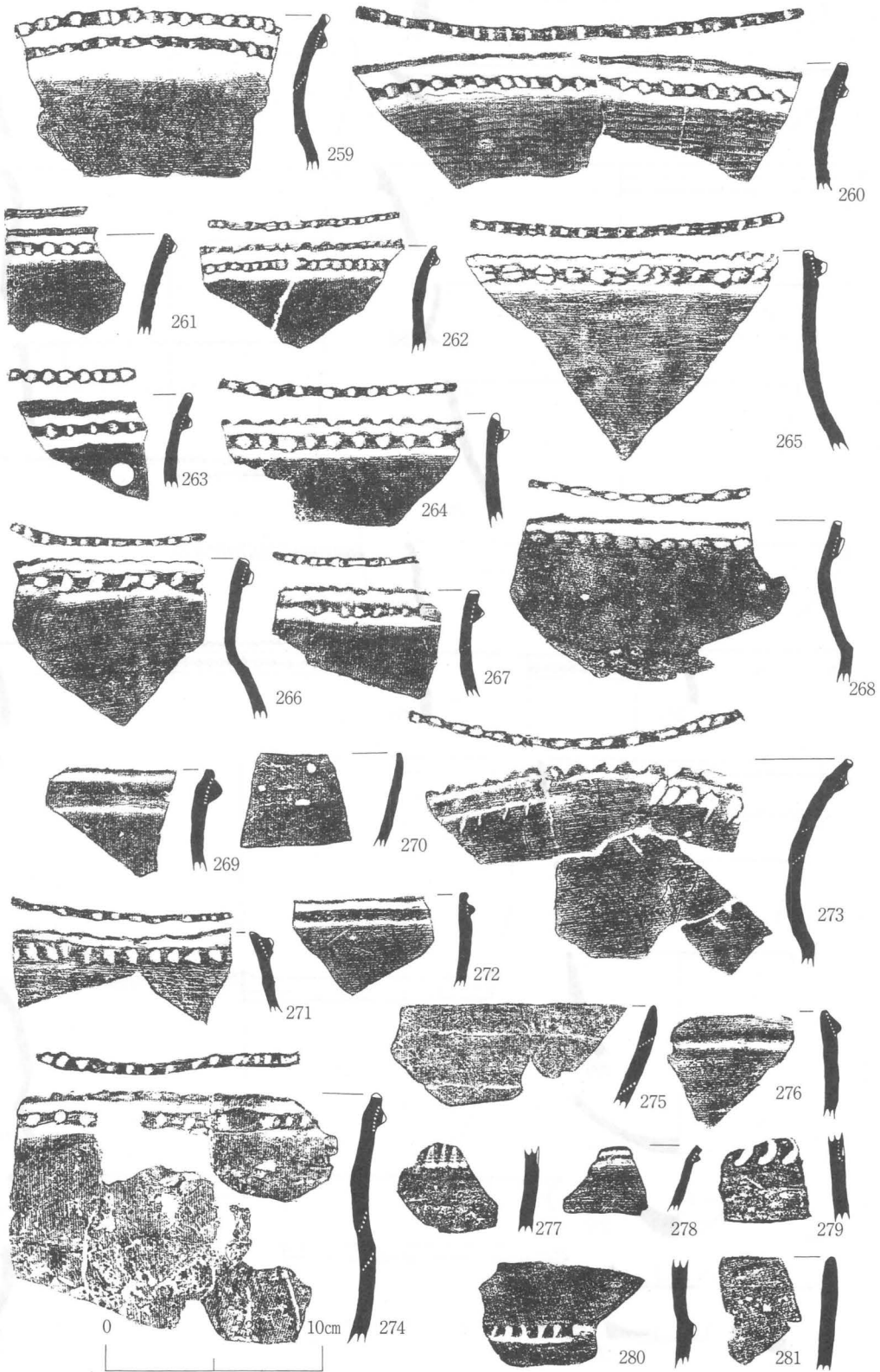
深鉢で述べたように、包含層出土品のために混入品が含まれていることを示しているのであ



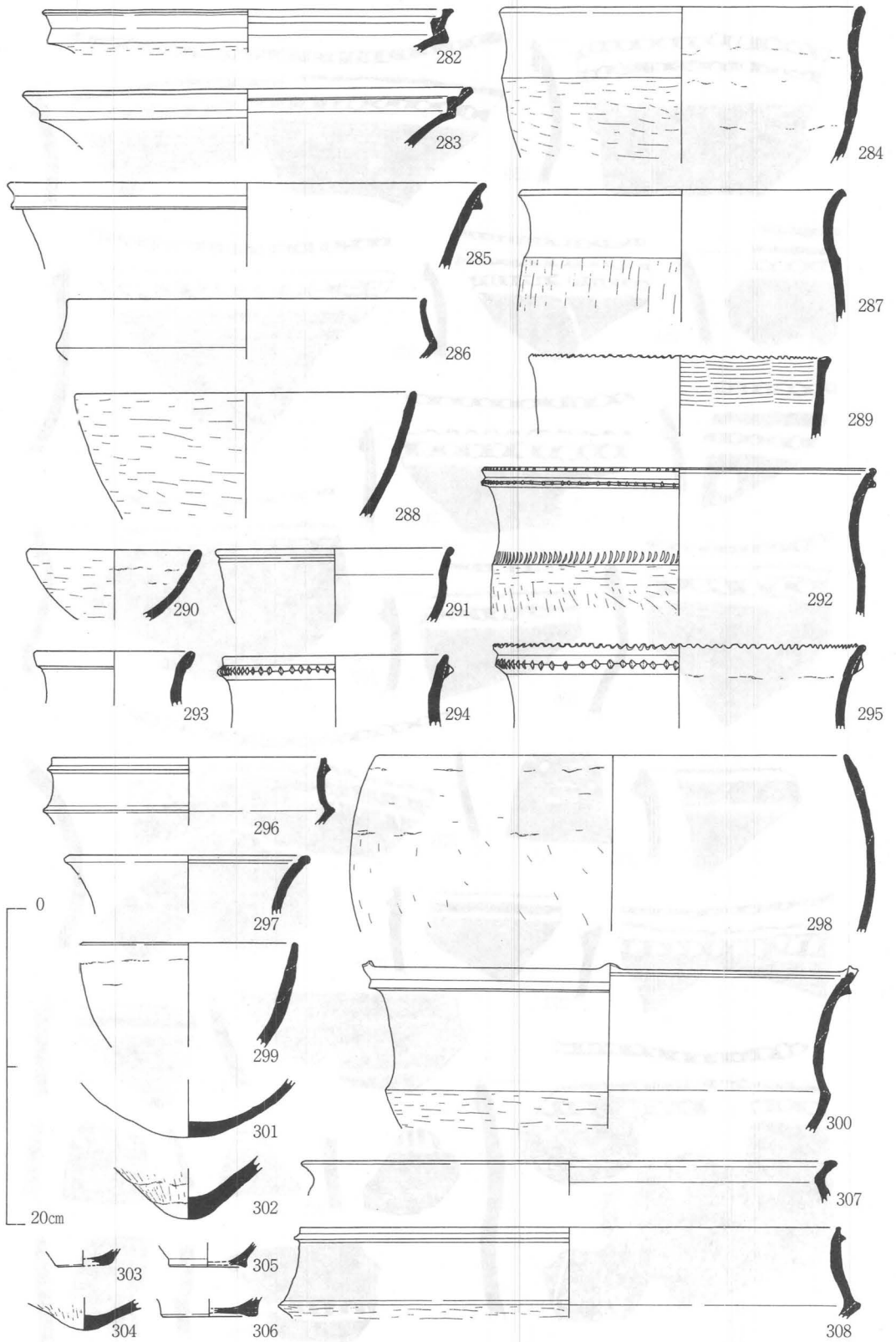
第34図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅱ・溝33）実測図



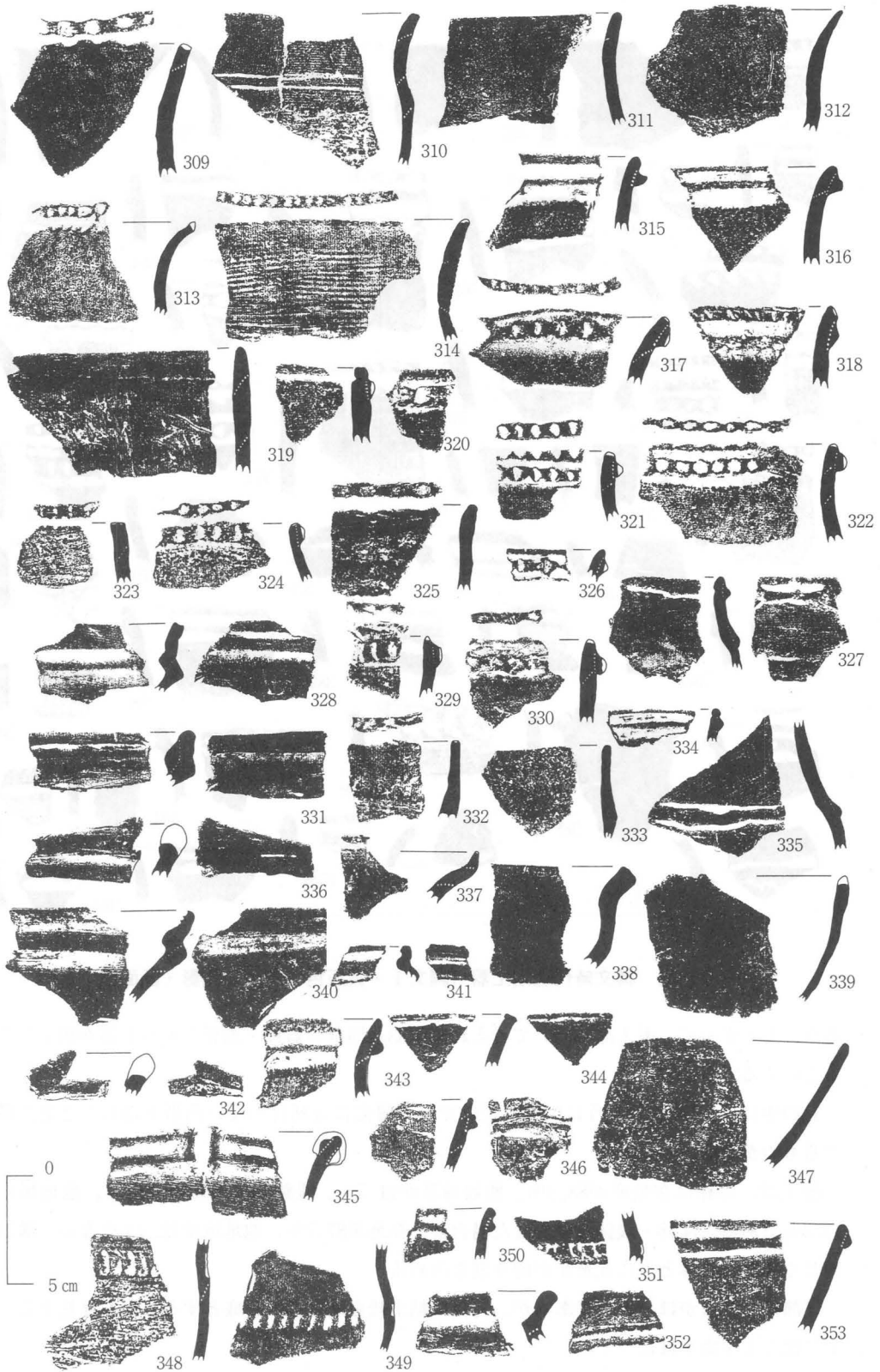
第35図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅱ・溝33）実測図



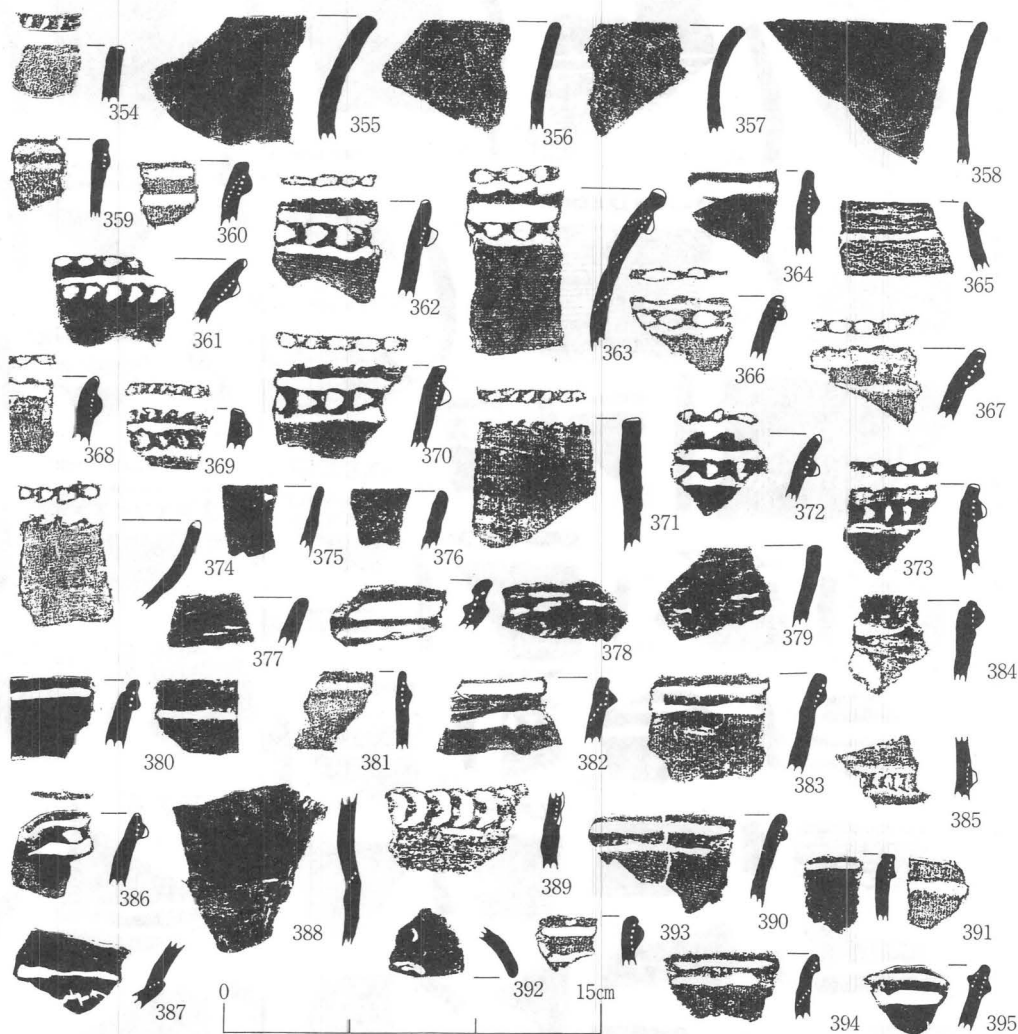
第36図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅱ・溝33）実測図



第37図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅱ・黒灰色砂質土）実測図



第38図 縄文時代晚期土器（縄文Ⅱ・黒灰色砂質土）拓影・断面図



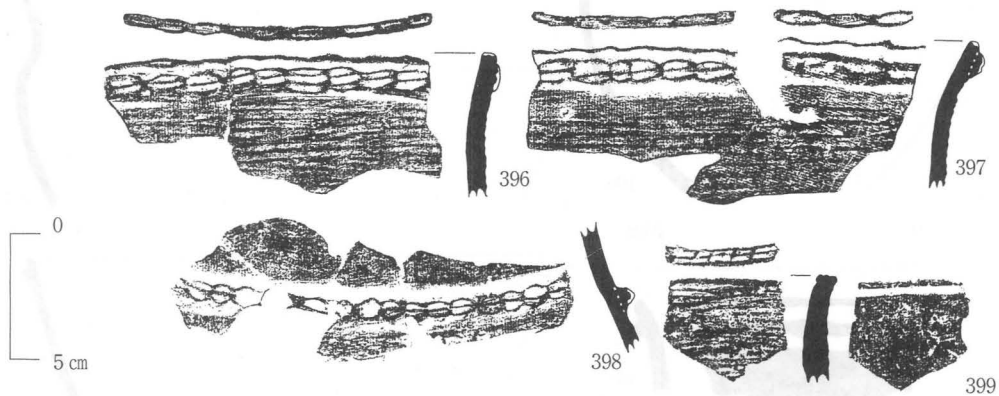
第39図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅰ・黄灰色シルト）拓影・断面図

ろう。したがって、混入品を除いて考えれば溝33と同様の器種・形態をもつ土器が出土しているといえるであろう。

Eの中には、図296のように口縁部だけでなく肩部にも刻目のない凸帯を巡らし2条凸帯とするものがある。

胎土は、深鉢は在地産が88.3%、他地域産が11.7%、浅鉢は在地産が86.7%、他地域産が13.3%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産87.7%、他地域産12.3%となる。溝33と同じく深鉢、浅鉢ともに在地産が約9割を占める。

底部は、丸底がほとんどであるが、丸底に粘土紐を貼り付け平底とするものも存在する。溝33に比して平底が目につく。



第40図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅱ・東海地方系土器）拓影・断面図

縄文Ⅰ出土土器（黄灰色シルト）

黒灰色砂質土の上部に堆積した包含層である。土器の出土量は多くない。

深鉢はA・B・C・F・G₁・G₂・Hの計45点出土した。浅鉢はA・B・C₁・D・E・H・その他の計19点が認められる。壺Aと蓋が少量存在する。出土土器全体から見た割合は、深鉢67.2%、浅鉢28.3%、壺1.5%、蓋0.8%である。

深鉢の内訳は、Cが最も多く44.5%次いでAが31.1%、F・H各8.9%、B・G₁・G₂各2.2%である。Eの数値は上げていないが、図385のように体部片が存在している。

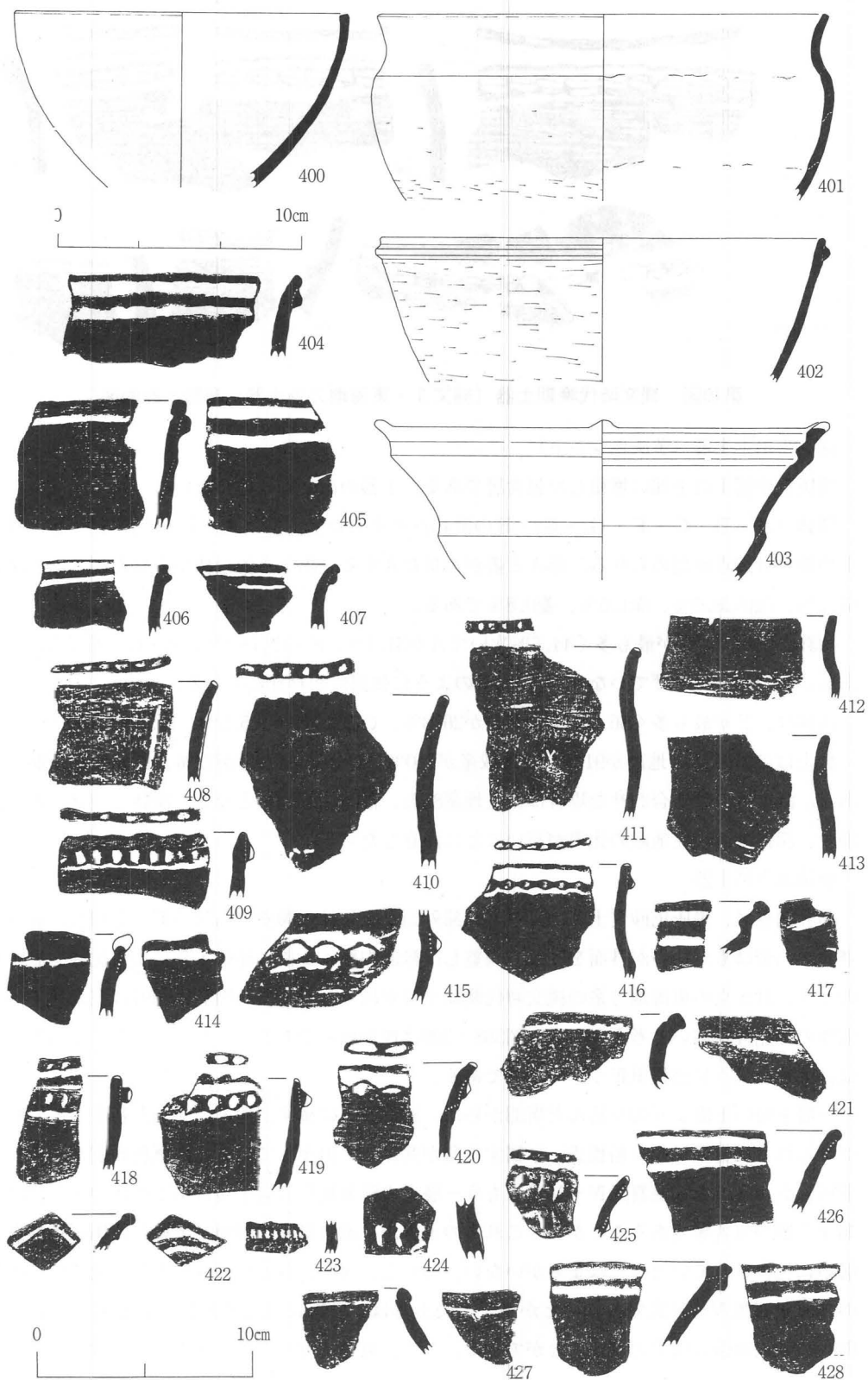
浅鉢は、Eが最も多く36.8%次いでDが26.3%、C₁21.0%、B5.5%、A5.3%と続く。

胎土は深鉢では在地産が91%、他地域産が9.0%、浅鉢は在地産が72%、他地域産が28%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産85%、他地域産15%となる。深鉢と浅鉢を比べた場合、深鉢の方が在地産の比率が高いことに注意したい。

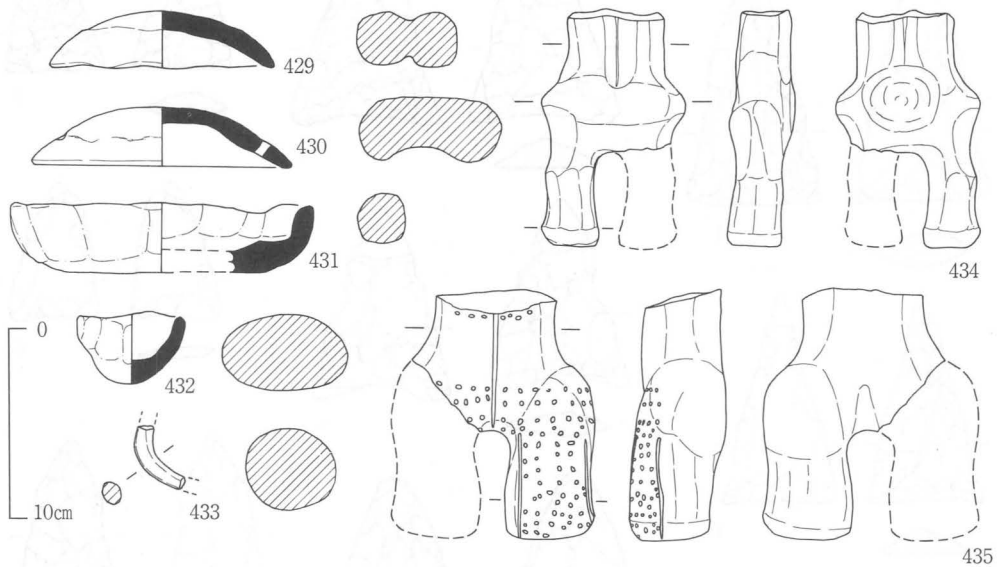
東海地方系土器

第Ⅱ調査区、黒灰色砂質土層内より口縁部外面を2枚貝で調整し凸帯の刻みも同様に施す2点と、凸帯はもたないが外面を同様に調整し口縁部内面に1条の棒状工具による沈線を施すもの1点、計3点の東海地方系の縄文時代晩期土器が出土している。図396・397は在地産で同一個体の可能性が高いと考えられる。図398・399は他地域産である。これらの土器と伴出したのは、上述のように滋賀里Ⅳ～Ⅴの土器である。

一層下層の上面より切り込んだ溝33からは、滋賀里Ⅳに属す土器と、2条凸帯をもって特徴づけられる滋賀里Ⅴ式（船橋式）に属す土器が共伴して出土している。黒灰色砂質土、直上の黄灰色シルト層より滋賀里Ⅳ～Ⅴ式、もう一層上の暗黄褐色砂質土層は第Ⅰ様式中～新段階に属す土器の包含層であることから、これらの土器が、滋賀里Ⅴ式初頭に堆積した黒灰色砂質土層中に包含されていたことはまちがいない。しかし、同一包含層中より出土した土器は、前記の如く滋賀里Ⅳ～Ⅴ式であることから、この土器は、厳密には滋賀里Ⅳ（おそらくは最終段階）～Ⅴ式初頭に属すと言することができる。さて、東海地方でこのタイプの土器は、馬見塚F



第41図 縄文時代晩期土器(攪乱)実測図、拓影・断面図



第42図 縄文時代晩期土製品実測図

地点に見ることができる。同地方ではこの時期の土器編年については、いくつかの意見が存在するようであるが大きく見れば五貫森式に相当すると考える。

土製品

土偶やミニチュア土器、用途不明土製品が第Ⅱ調査区の遺構や包含層内、あるいは上層の別時代の遺構や包含層より少量出土した。詳細は、観察表(表3)を参照されたい。

土偶 4点出土している。いずれも在地産である。図434は体部下半の破片で右足を欠失する。胴部の表裏に縦方向の窪みを付けている。腰に窪みを付け尻を表現している。

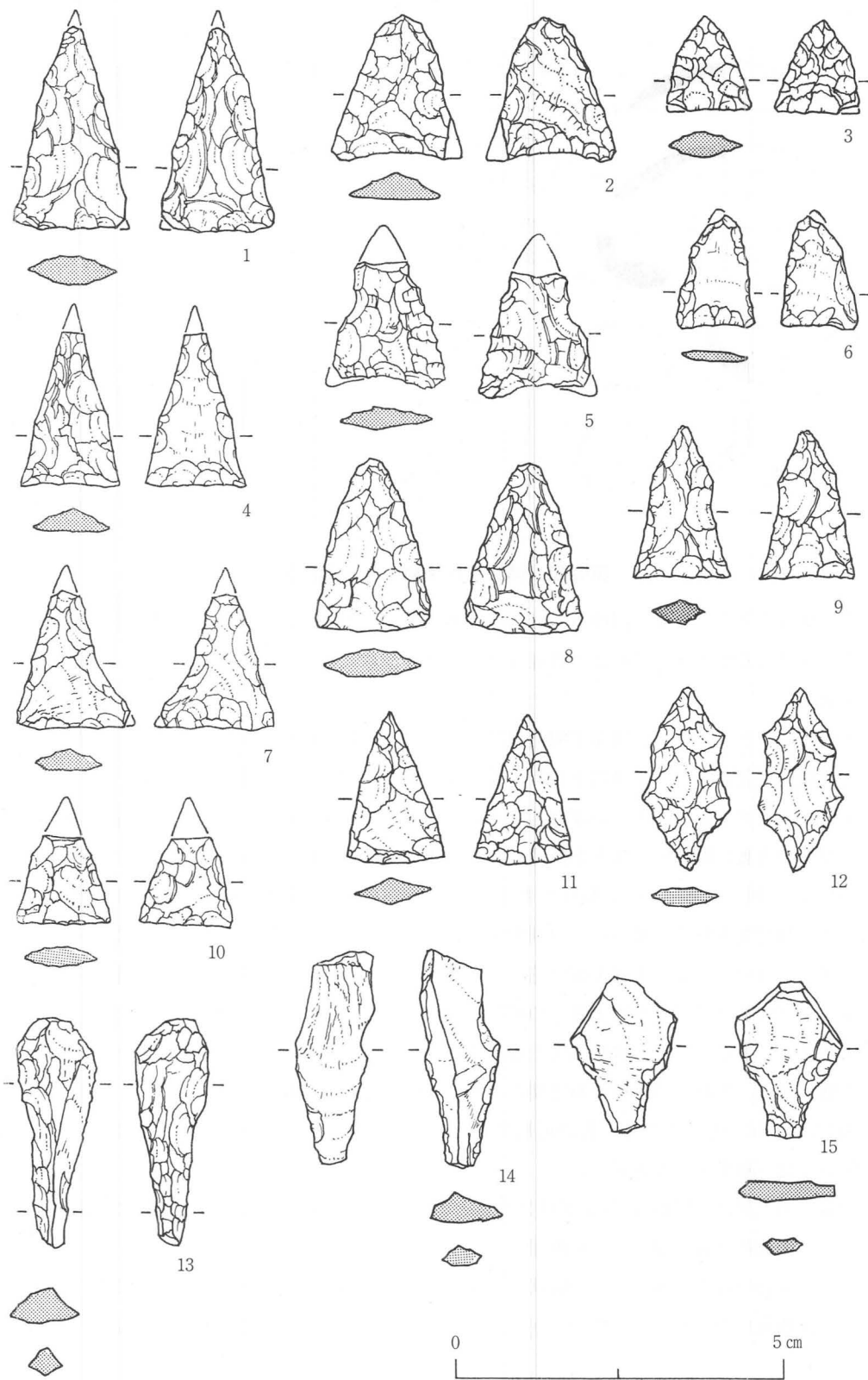
図435は、同じく体部下半の破片である。左足を欠失する。腹部を除く腰から脚と体部上半の表面に刺突文を施す。腰から下の刺突文はあたかもズボンを表現したかのように見える。体部中央に1条のヘラ描き沈線を縦に施している。2点とも黒灰色砂質土層出土。他に体部(後世遺構)と脚部(黒灰色砂質土層)の破片が各1点存在する。

ミニチュア土器 すでに溝33出土土器で1点説明したが他に1点、黒灰色砂質土層から出土した鉢がある。半球状の手づくねで製作されたものである。在地産。

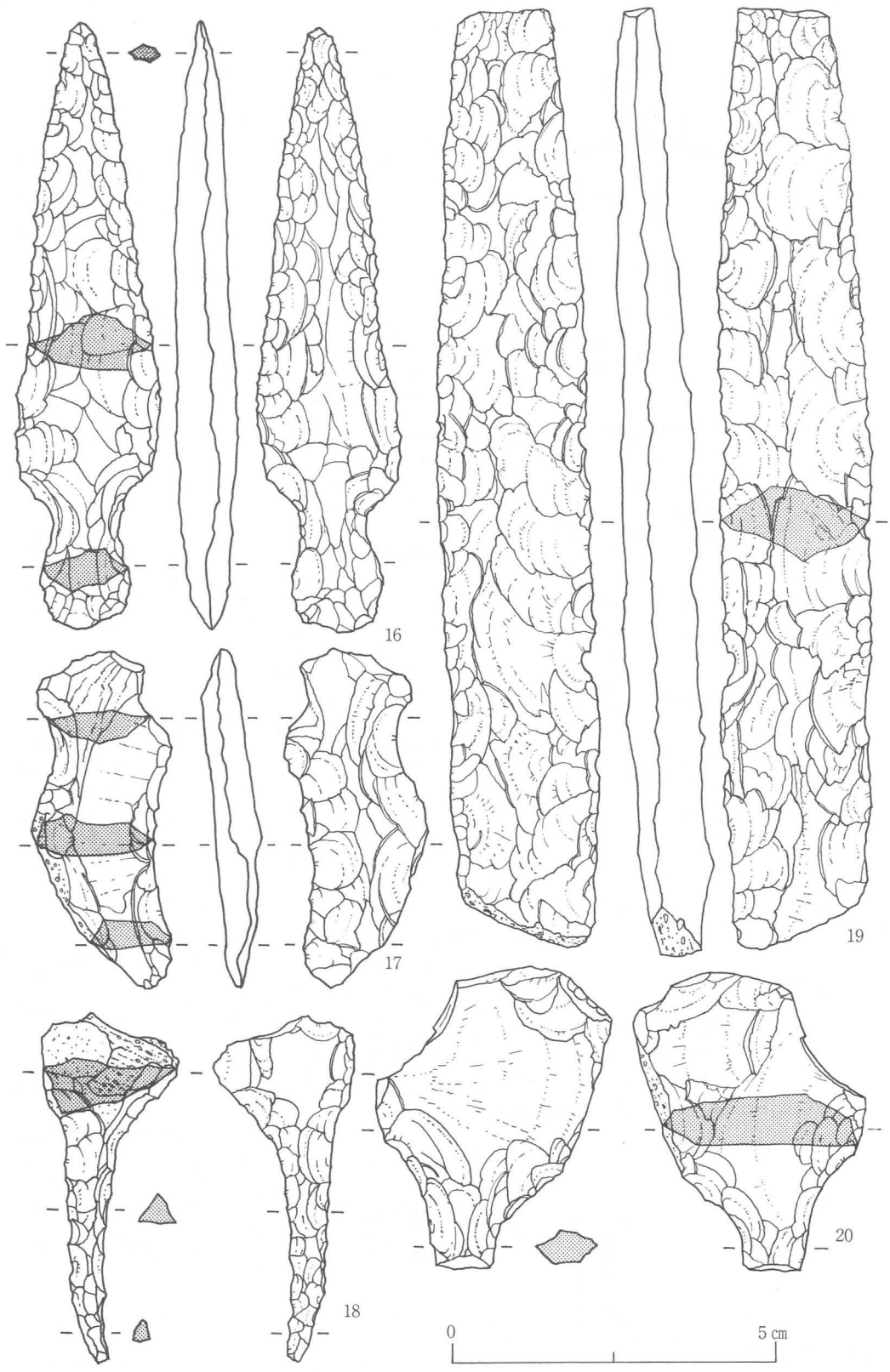
図431は皿状のものである。蓋の可能性もあるが、形態が少し異なるため、この中に含めた。黒灰色砂質土層出土。在地産。

用途不明土製品 図433はリング状になると考えられるものである。長原遺跡に類例が認められる。黒灰色砂質土層出土。在地産。

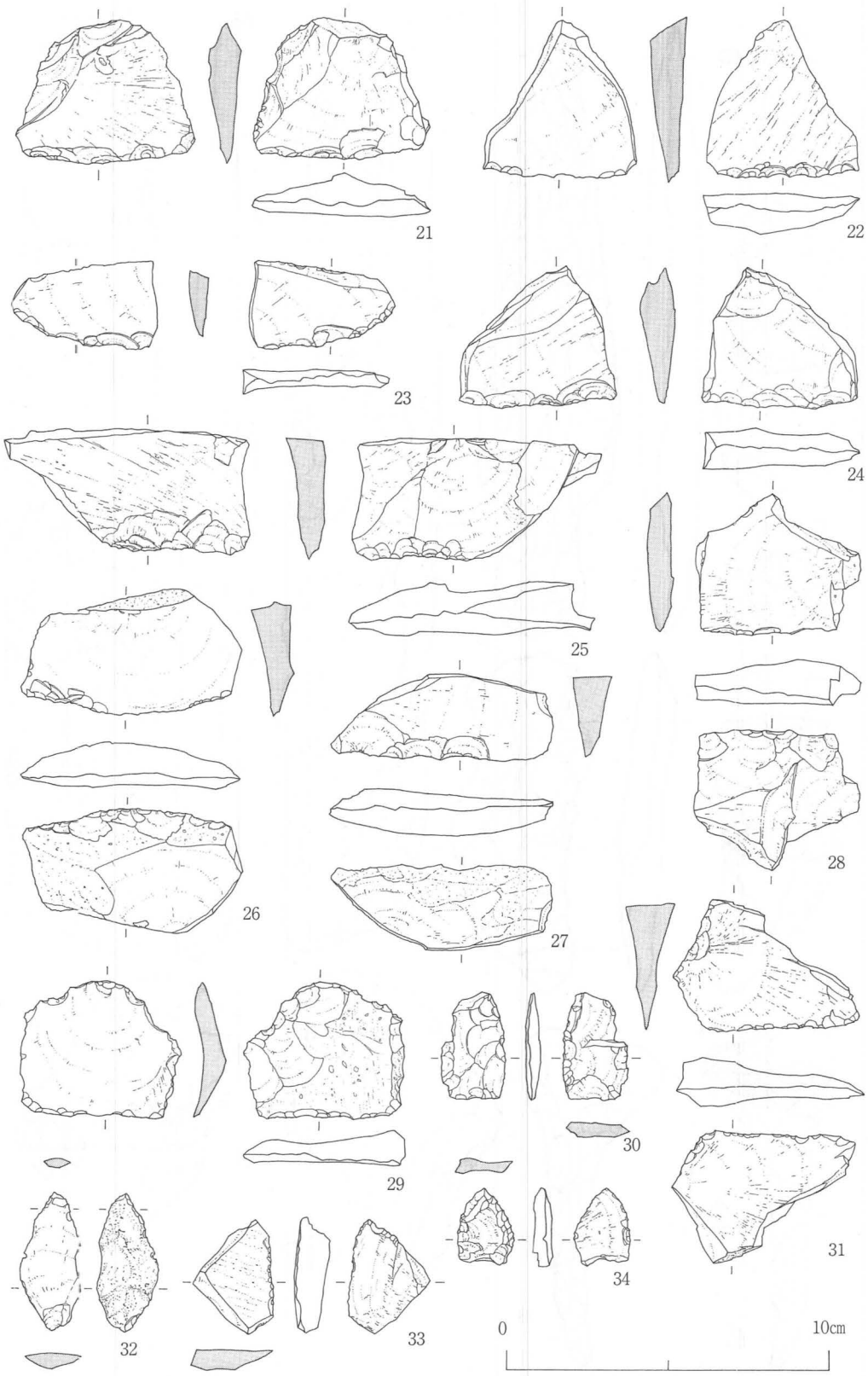
他に黒灰色砂質土下層から髯の脚状を呈する在地産のもの、ピット内から孤状に刻目を施すもの(在地産)などが出土しているが、いずれも少破片で全形を知ることができない。



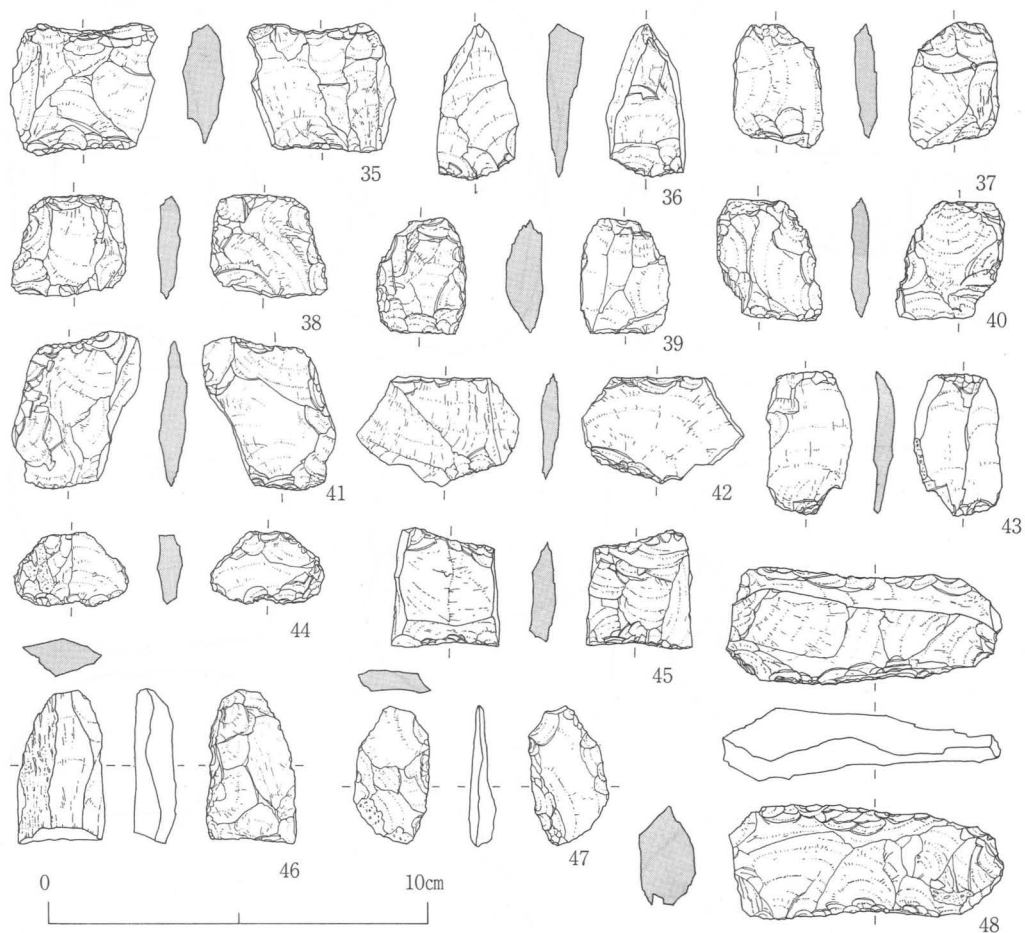
第43図 縄文時代晩期石器（石鏃・石錐）実測図



第44図 縄文・弥生時代石器（石錐・石匙・打製尖頭器・打製石剣）実測図



第45図 縄文時代晩期石器（直刃削器他）実測図



第46図 縄文時代晩期石器（ピエス・エスキーエ他）実測図

石製品

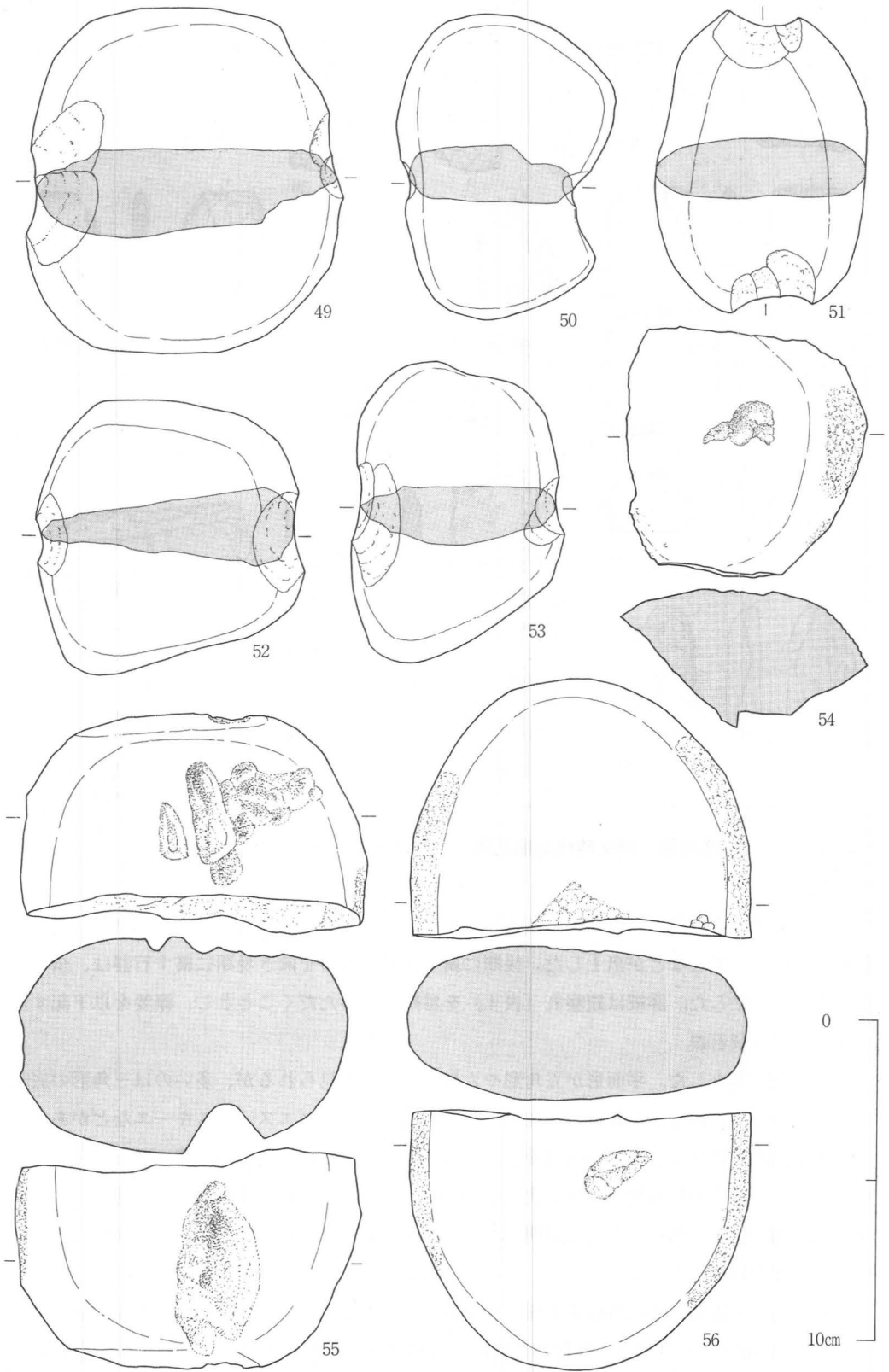
石鎌・石錐・直刃削器・削器・尖頭器などのサヌカイト製石器と石錘・敲石・磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石などが出土した。後期に属す少量のものを除き晩期に属す石器は、全て第Ⅱ調査区で出土した。詳細は観察表（表4）を参照していただくこととし、概要を以下記す。

サヌカイト製石器

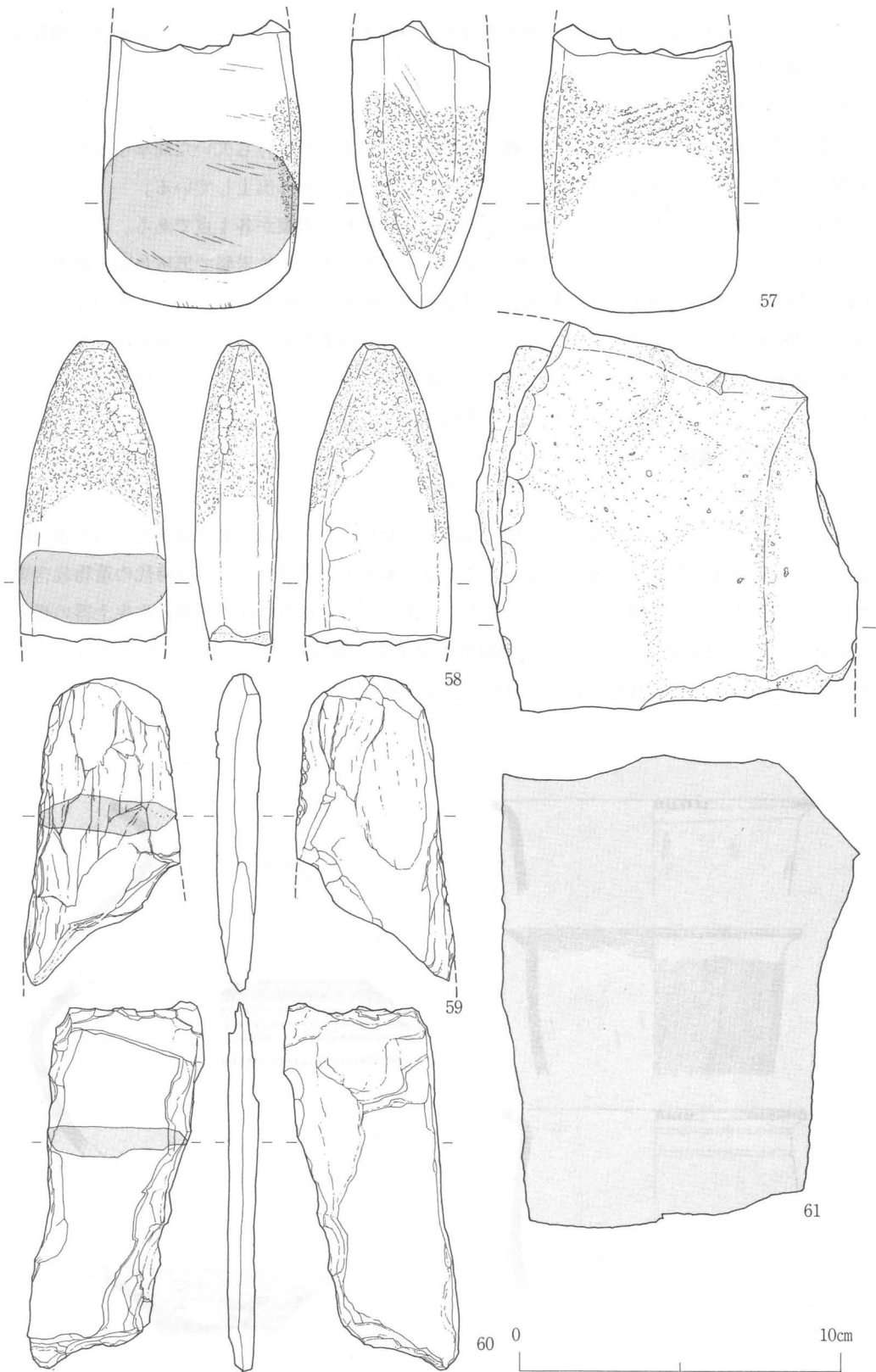
石鎌 12点出土した。平面形が五角形や六角形のものも見られるが、多いのは三角形の底辺がやや凹むものである。石錐は、5点出土した。他に削器やピエス・エスキーエなどがある。

打製尖頭器 図16は、晩期の包含層を切って造られた方形周溝墓1の周溝内から出土した。所属時期は、縄文時代晩期と弥生時代中期のいずれかである。余り類例のない形態のため、いずれの時期か決しかねる。ここで説明したが、基部の形態などから図19のような弥生時代の尖頭器の一変形の可能性が高い。

黒灰色粘土・溝33・黒灰色砂質土層（縄文Ⅲ～Ⅱ）から出土したサヌカイト製品や剥片を、それぞれ約50点ずつ計143点、無作為に抽出し石材産地の分析を依頼した。結果は時期により



第47図 縄文時代後・晩期石器（石錘・敲石）実測図



第48図 縄文時代後・晩期石器（磨製石斧・打製石斧・石皿）実測図

若干異なるが、香川県の金山産の石材が約3～8%含まれることが判明した。詳細は附編IV章一5を参照されたい。

サヌカイト製以外の石器

石錘 5点出土している。偏平な円礫の両端を縄を掛るために打ち欠いた簡単なものである。石材はいずれも砂岩である。黒灰色粘土・黒灰色砂質土などから出土している。

磨製石斧 2点出土している。変質輝緑岩製と変質斑れい岩製が各1点である。

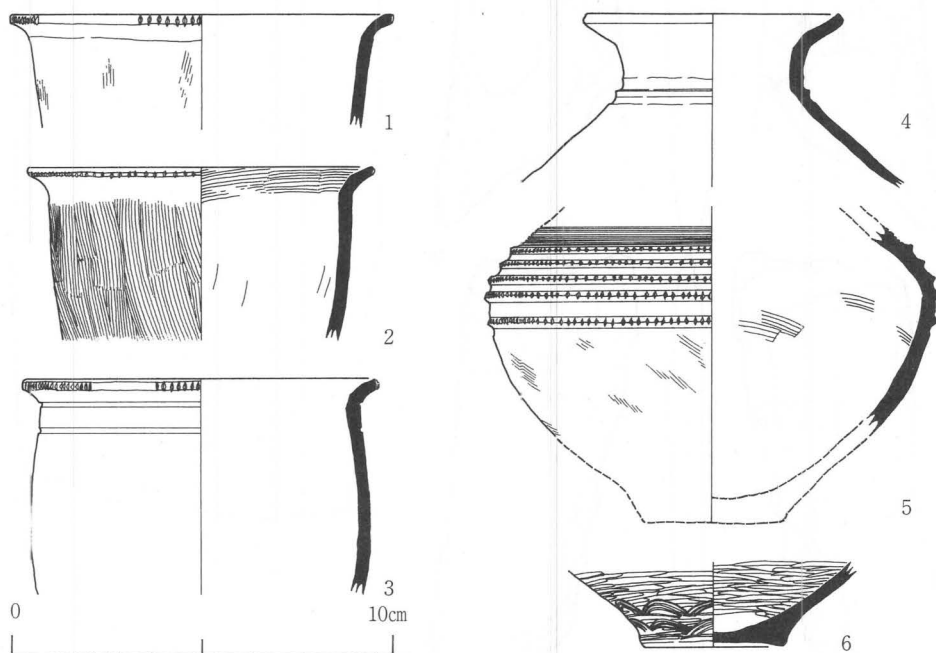
打製石斧 2点出土している。図59は刃部を欠失する。黒色千枚岩製で黒灰色粘土層出土。図60は角閃石片岩製で溝33出土。打製石斧は周辺の同時期の遺跡からは、ほとんど出土していない。本遺跡においても従前の出土品にはない。当時の生業を考えるうえで重要な資料である。

他に敲石3点以上（砂岩製）石皿2点以上（砂岩製）磨石などがある。この他、出土した石材について一覧表（表9）にまとめたので参照されたい。

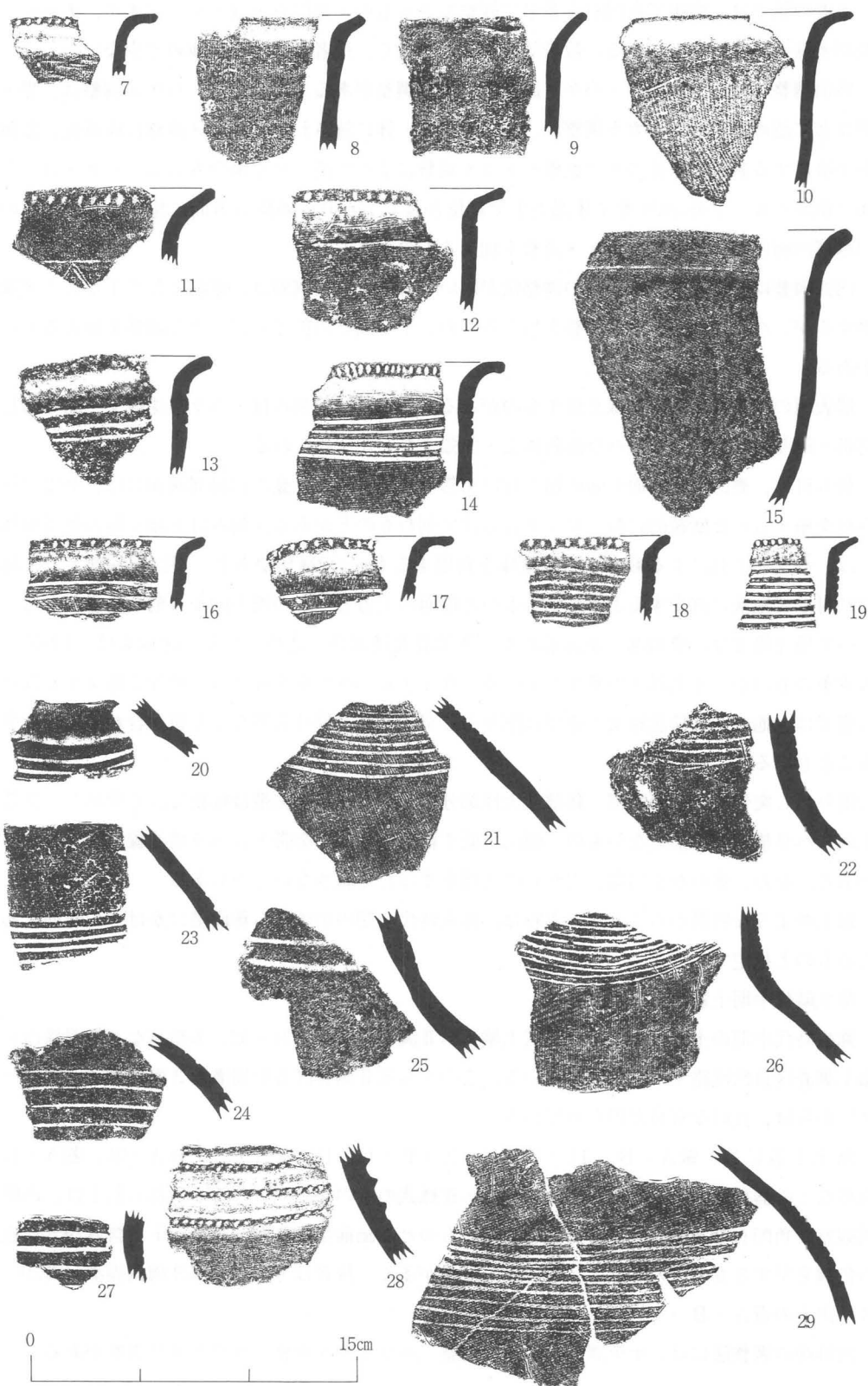
3. 弥生時代の遺物

弥生時代前期土器

今回の調査では、弥生時代前期の遺構を検出できなかったものの、第II調査区の暗黄褐色砂質土層が同期の遺物包含層に相当する。ここでは、本層出土遺物のほか古墳時代の遺物包含層や攪乱部分に混入した資料を含め記述してゆく。出土している資料は、同期の弥生土器の甕・壺がある。甕は口縁部が短く外反し、倒鐘形を呈する。壺は安定した平底の底部から大きく張った体部につづく。口縁部は、強く外反し端部に面をもつ。



第49図 弥生時代前期土器実測図



第50图 弥生時代前期土器拓影・断面図

土器の胎土は、肉眼で角閃石を多量に観察できるものと角閃石をほとんど含まず、チャート粒が多量に混じるものがある。数量的には前者が多く、後者の出土量は極めて少ない。

外面調整には、ナデ調整・ハケメ調整・ミガキ調整がある。ナデ調整・ハケメ調整は、甕・壺などに認められる。ミガキ調整は、壺・壺用蓋・鉢に施される。ハケメ調整は成形後、器体を平滑にする調整法で後のナデ調整やミガキ調整によって消される場合もある。ハケメは、全体に細かく6～7条/cm程度で体部上半で縦位から左上がりの斜位の方向に施す。また、甕の口縁部内面には、横方向のハケメ調整を加えるものがある。

内面調整は、外面調整と同様の調整法が用いられる。内面調整は、原則として丁寧にナデ調整するが、ハケメ調整後ナデ調整を加えるもの、ナデ調整の後さらにミガキ調整を加えるものがある。

器表面の調整終了後、文様を施すものがある。文様には、刻み目・ヘラ描沈線文・削り出し突帯・貼り付け突帯のほかヘラ描斜線文・円弧文などが認められる。

刻み目は、甕口縁部端面や壺の貼り付け突帯上に施される。甕の口縁部端面には、全周に刻み目を施すものと断続的に数ブロックに分けて刻むものがある。刻み目を施す際の使用原体には、ヘラ状工具によるものとハケ原体を利用するものの2種類がある。甕口縁部では、端面に対して幅狭に直交するように刻むものと端面の上方と下方の両方向から刻む場合がある。

ヘラ描沈線文は、甕頸部・壺頸部および体部最大径部分に認められる。沈線文は、3条以下の少条のものから4条以上の多条のものまで存在する。ヘラ描沈線文は、単独で施文する以外に甕では、他のヘラ描沈線文と壺では削り出し突帯や貼り付け突帯などと組み合わせて装飾することもある。

削り出し突帯は、壺の頸部・体部最大径部分に認められる。突帯は幅狭で高く突出し、突帯上面にヘラ描沈線を加えないもの、幅広で低く扁平なもので突帯上にヘラ描沈線を加えるものがある。なお、甕のなかには、これらの文様をまったく施さないものもある。

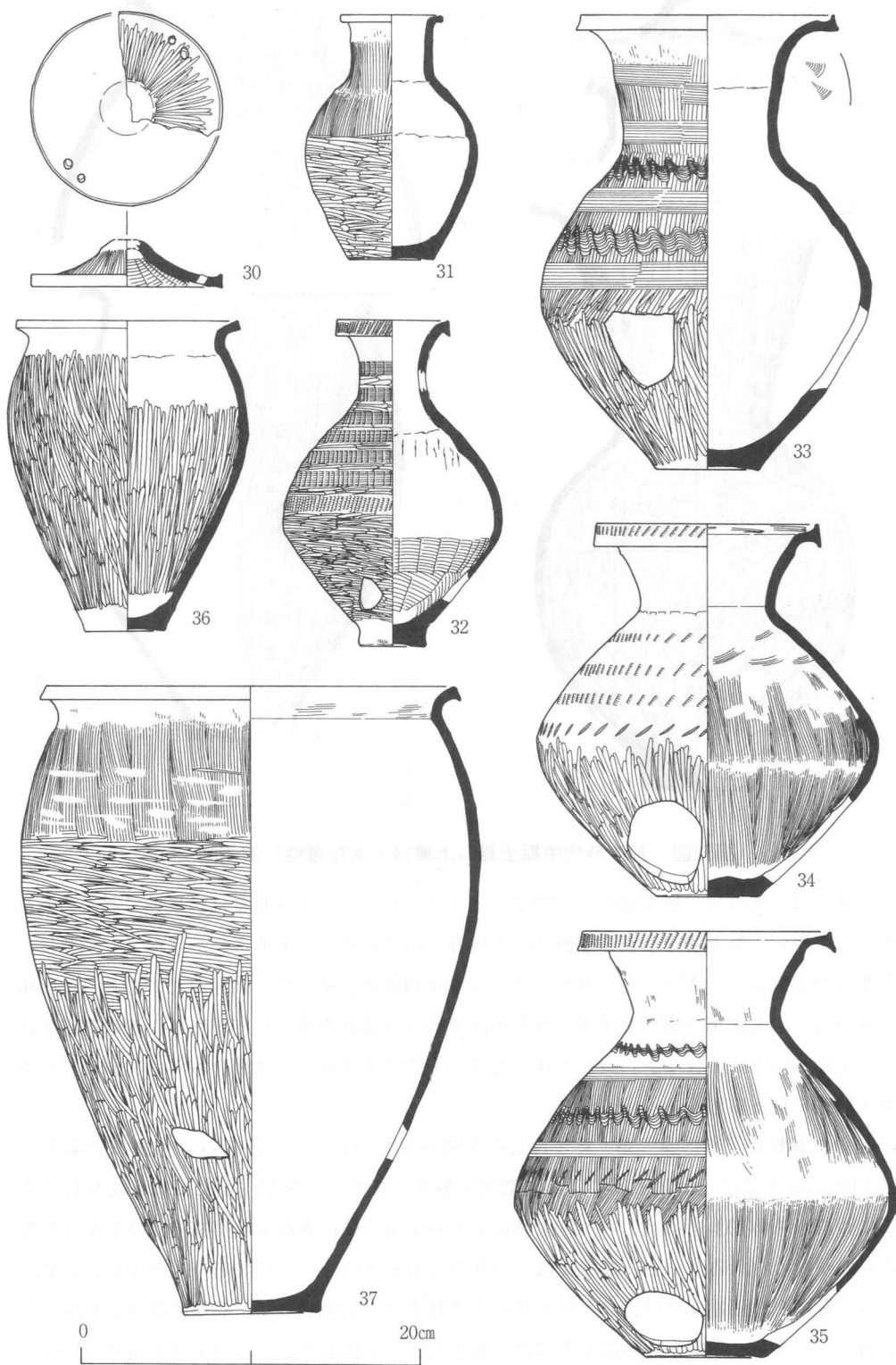
以上のような特徴からこれらの資料は、弥生時代前期の中頃から新段階にかけての時期にあたるものと推定できる。

弥生時代中期土器

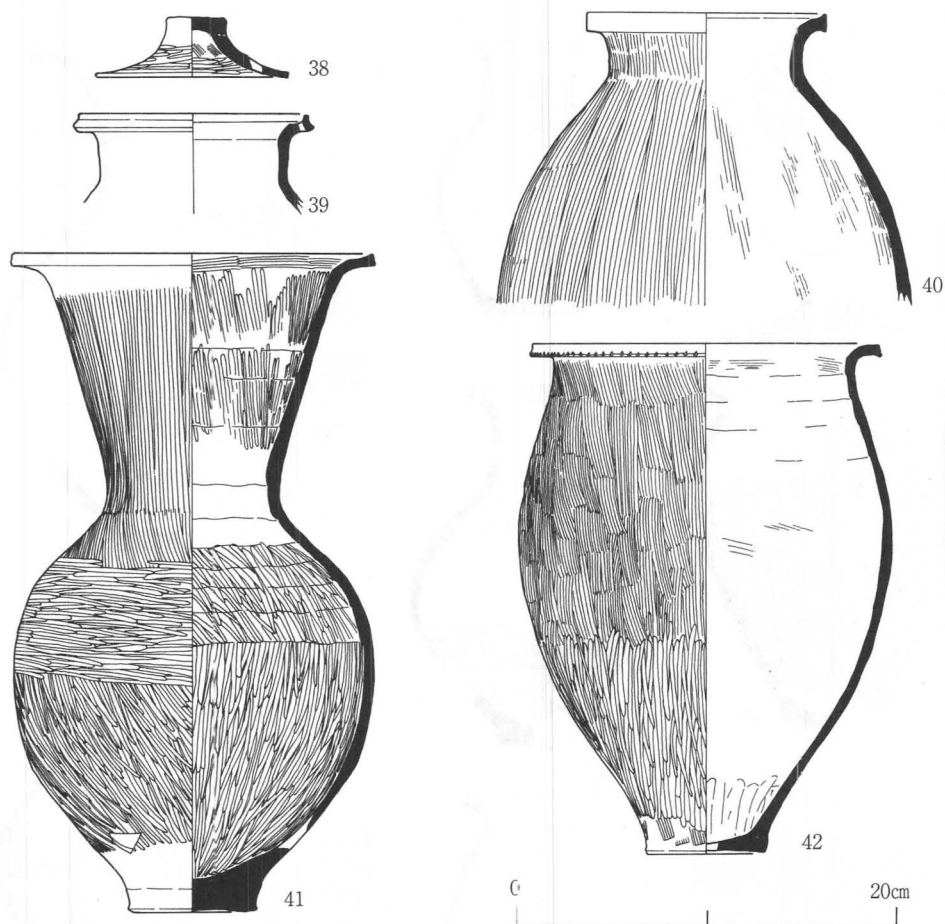
弥生時代中期の土器は、第Ⅰ調査区土壇・第Ⅱ調査区溝3・24・32、木棺墓などの遺構内や第Ⅰ調査区自然流路1から出土している。このうち第Ⅱ調査区方形周溝墓3南側周溝（溝20—3）からは、良好な資料が得られている。

出土土器には、壺A・B₁・B₂・C・D・E・F・G・H、甕A・B、鉢A・B、蓋A・B、高杯などの器種がある。所属時期は、第Ⅱ～Ⅳ様式のものが認められる。土器の胎土は、肉眼的観察で角閃石を多量に含み茶褐色を呈するものと1mm前後の長石・チャートを含み淡乳白色の色調を呈するものがみられる。前者の出土量が多く、後者は方形周溝墓3南側周溝（溝20—3）出土の壺A・B₁・B₂などに認められる。

内外面の調整法には、ナデ調整・ハケメ調整・ヘラミガキ調整・ヘラケズリ調整がある。口



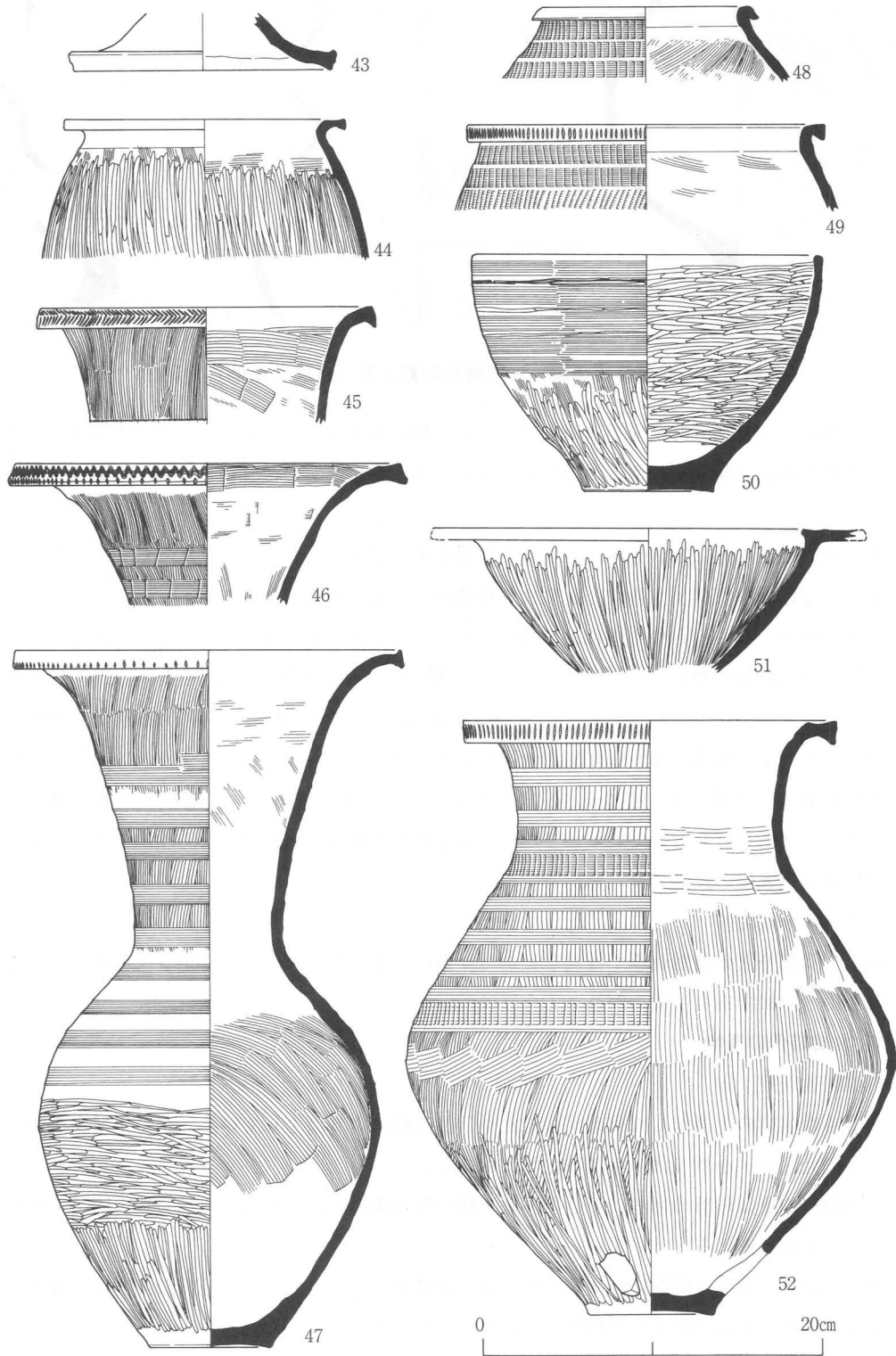
第51图 弥生時代中期土器（方形周溝墓3南側周溝）実測図



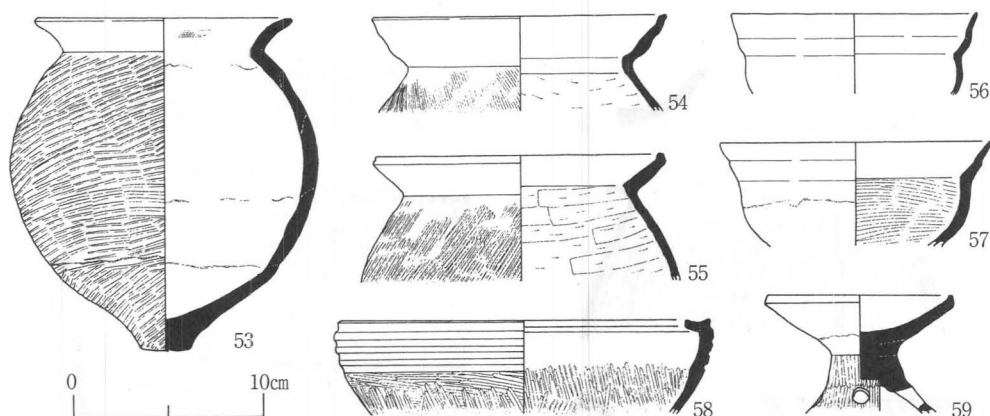
第52図 弥生時代中期土器（土壌14・木棺墓他）実測図

縁部内外面は、例外なく横方向のナデ調整で仕上げている。ハケメ調整は、単独で器面の最終調整として用いられる場合や別の調整手法と重複し消されることもある。ヘラケズリ調整は、壺Aなどの底面に一定方向に施される。ヘラミガキ調整は、壺・鉢・高杯などの貯蔵・供膳用の器種のほか、煮沸用の甕にも多用される手法で器面の最終調整として施され、他の調整手法によって消されることはない。壺Cや鉢Aでは、後述する文様の施文後、さらに文様間にヘラミガキ調整を加える例もある。

器表面の調整終了後、壺・甕・鉢には文様を巡らすものがある。角閃石を含まない壺B₁・B₂の口縁部端面にはハケ状工具による刺突文を施す。また、口縁部内面には扇形文を加える。さらに頸部から体部上半には、ハケ状工具による刺突文や櫛描直線文と櫛描波状文を交互に配するものが認められる。一方、簾状文はどの部位にも施されない。角閃石を胎土中に含む壺C・F・G・Hの口縁部端面には、ハケ状工具による刺突文、羽状列点文、櫛描波状文、刻み目などを加える。また、頸部から体部上半には、簾状文とハケ状工具による刺突文を組み合わせる



第53図 弥生時代中期土器（自然流路他）実測図



第54図 弥生時代後期～古墳時代前期土器（自然流路他）実測図

もの、簾状文と櫛描直線文を組み合わせるもの、櫛描直線文のみを施すものなどがある。一方、この部位に櫛描波状文を施すものはない。なお、壺A・D・Eには文様をまったく施文されない。

甕Aの口縁部端面には、刻み目を連続的に施すものがある。

鉢Aには、櫛描直線文を施す。鉢Bの文様構成は、壺Cと共通する。

口径約15cmを測る蓋Bの内面には、外周に沿って約2cmの幅で煤の付着が認められることから、口径13cm前後の甕にのせて使用したものと推定できる。甕B₁は、体部全体に煤の付着が認められる。さらに底部周辺には、二次焼成痕がある。一方、甕B₂は、底部周辺に二次焼成痕は認められず、体部上半から体部最大径付近にかけてベルト状に煤が付着する。

方形周溝墓3南側周溝（溝20—3）出土の壺B₁・B₂・C、甕Bは、焼成後の段階で体部下半の1～2ヶ所を打ち欠いている。また、土壙5出土の甕Aや攪乱部分から検出している壺Hには底面に焼成後の段階で穿孔を施している。

弥生時代後期土器

第I・II調査区の自然流路や攪乱などから少量の土器が出土している。第5次調査などで出土したのと同様である。破片が小さく今回は図示していない。

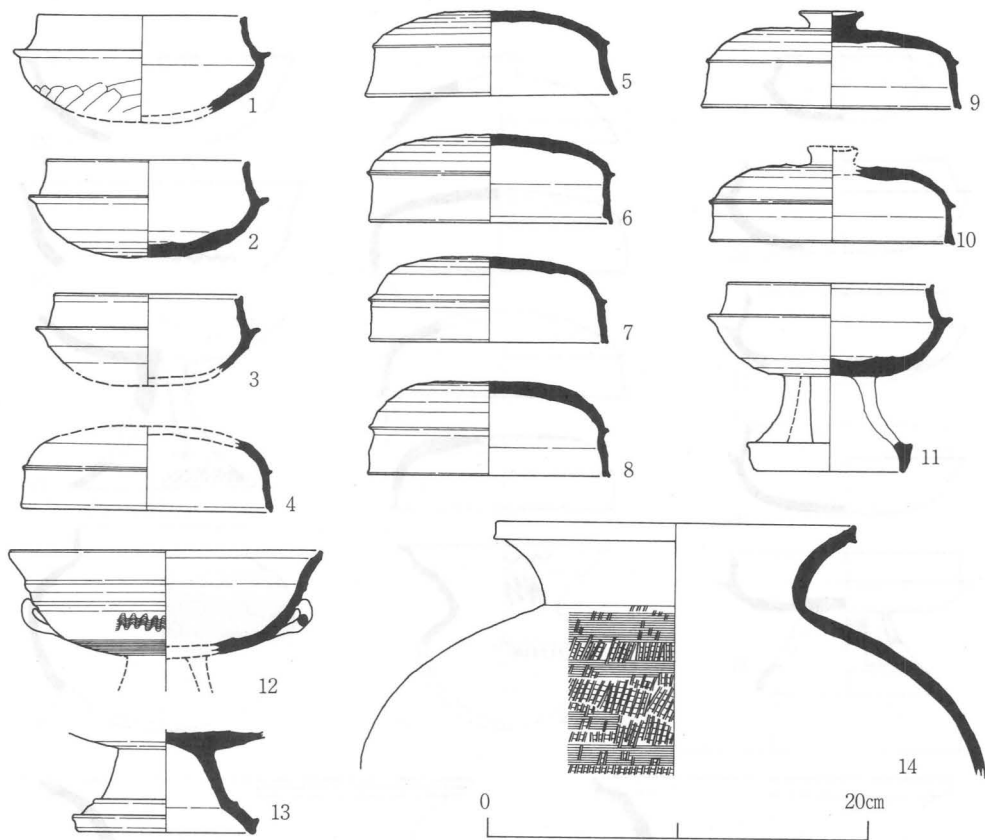
4. 古墳時代の遺物

古墳時代前期土器

古墳時代前期の土器は、両調査区の攪乱や自然流路内より出土している。出土量は少ないが、甕・小型丸底壺・小型浅鉢・小型器台などがある。

（図53）の甕は球形の体部に小さな平底を持つ在産の土器である。（図54）と同じく庄内式に並行すると考える。

他に布留式でも早い時期に属す甕や小型丸底壺等が出土している。この種の土器は、前述した第7次調査において掘立柱建物等と共に出土している。



第55図 古墳時代中期土器（須恵器）実測図

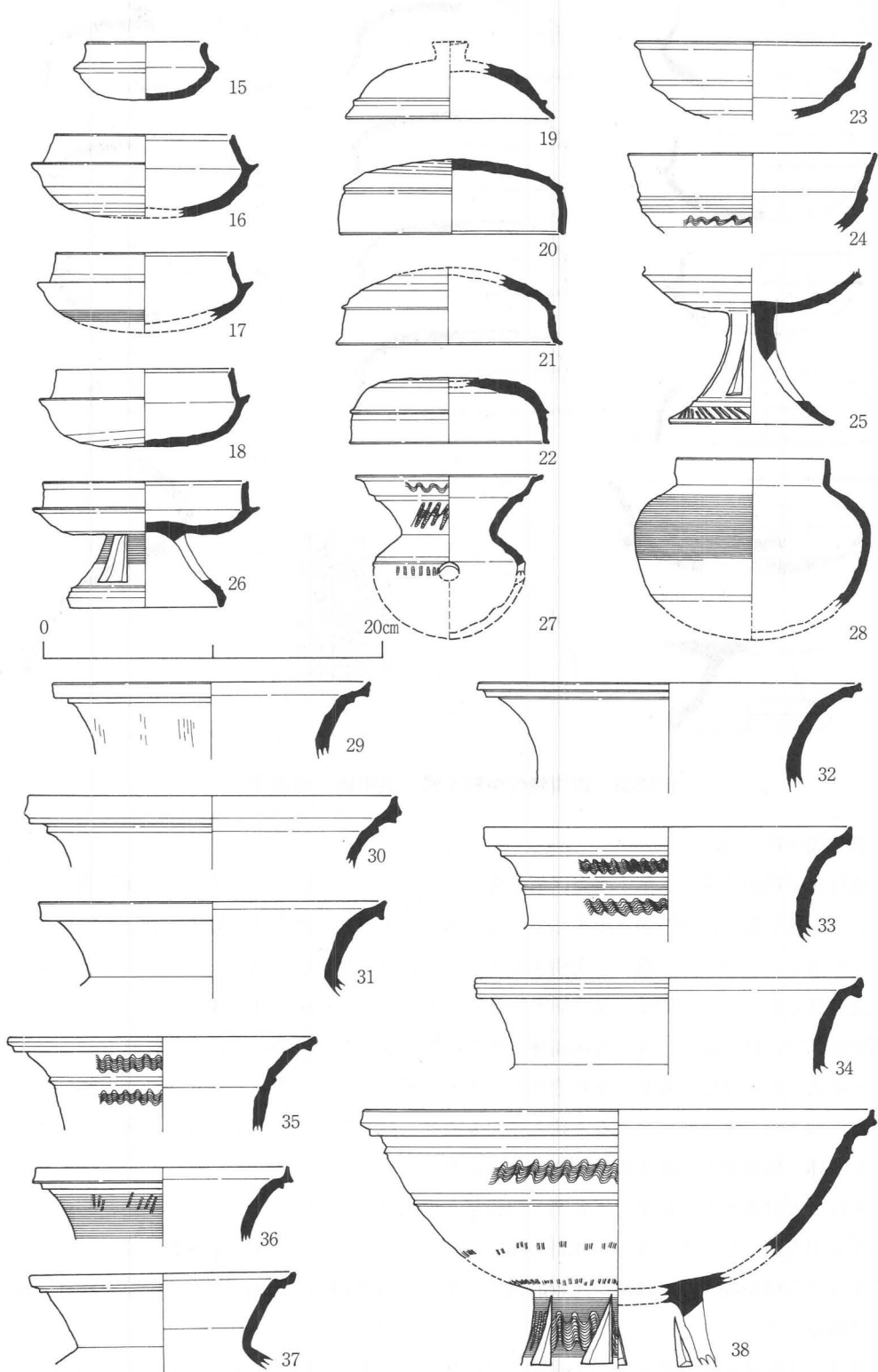
古墳時代中期土器

古墳時代中期の土器は、第Ⅰ調査区第5層・第Ⅱ調査区第3層をベースとする同時期の遺構をはじめ上部を覆う包含層から出土している須恵器・土師器・韓式系土器・陶質土器・製塩土器などがある。このうち、溝5・土壇4などからは、良好な資料が出土しているものの数量的に限定されており、以下では、包含層や攪乱層出土土器をも対象に検討する。

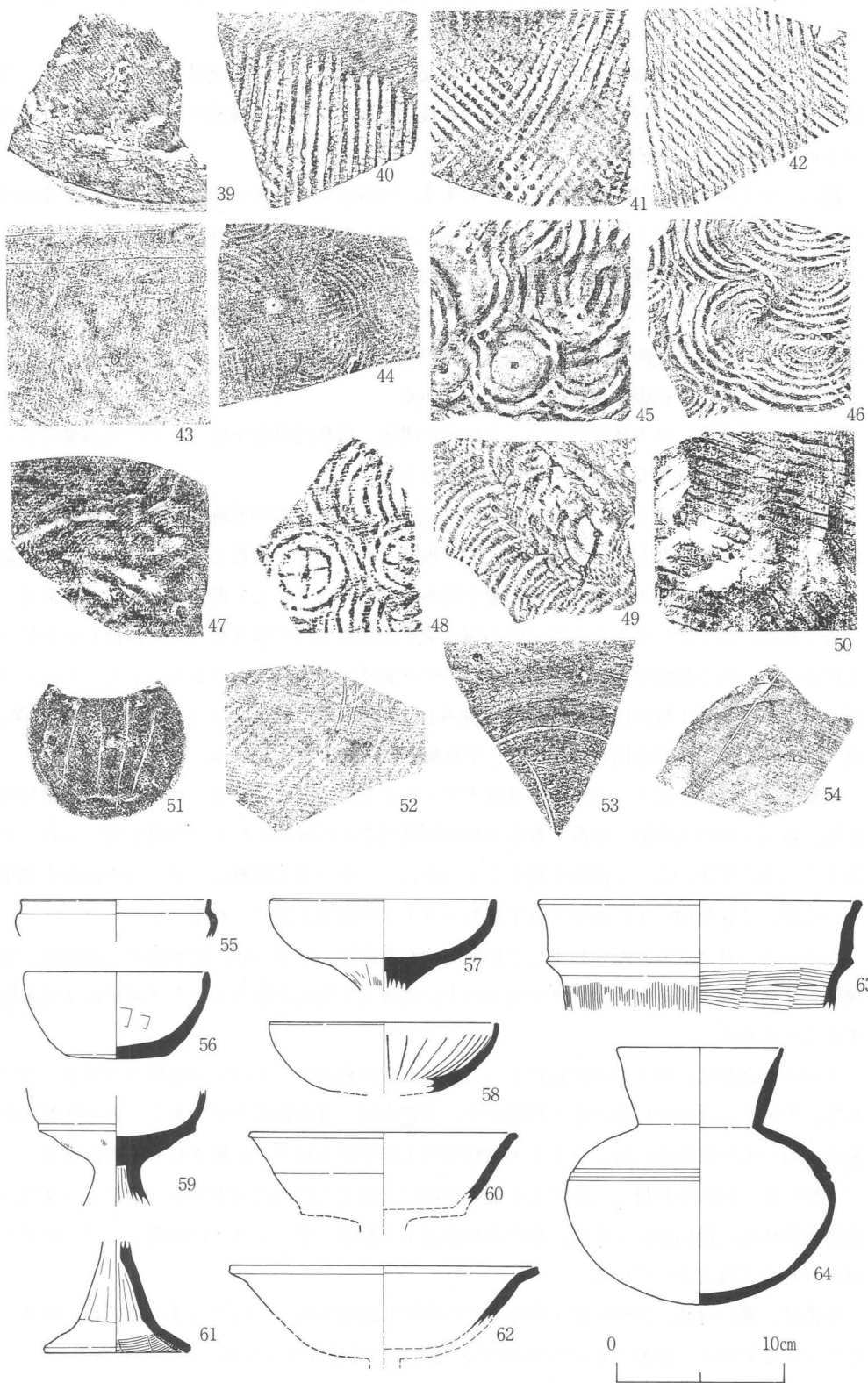
須恵器には、杯、蓋A・B、有蓋高杯、無蓋高杯、甗、器台、壺、甕が認められる。このうち杯と蓋A、有蓋高杯と蓋Bはそれぞれセットをなす。杯には、たちあがりやや内傾し端部をまるくおさめ、体・底部をまるく仕上げたものと、たちあがり内傾し端部に内傾する面を構成し、体・底部を丸くおさめる形態のものがある。

蓋Aは、天井部がやや扁平で天井部と口縁部との境界が短く突出し、口縁部が比較的高く、端部を水平な面やわずかに内方へ傾斜気味におさめるものと、天井部が丸みを持ち天井部と口縁部を分ける稜が鈍く、口縁部が比較的低く、端部を内傾気味に仕上げたものや段を構成するものに細分できる。

蓋Bは、天井部が丸みを持ち、天井部と口縁部とを区画する稜は、大きく突出し鋭い稜をな



第56図 古墳時代中期土器（須恵器）実測図



第57図 古墳時代中期土器(須恵器)拓影、(土師器)実測図

す。口縁部は短く外方へのび端部を丸く仕上げる。天井部中央には、高い中凹みのつまみのつくものと扁平な中凹みのつまみのつくものがある。

有蓋高杯は杯に短い脚をつけたもので、脚部には、断面三角形の突帯や透かしを施す。無蓋高杯は杯部が浅く、口縁部と杯底部をわける稜は、鋭さを欠く。稜線の下位には、1対の飾りつまみをもつものがある。

甕は、短く外上方へひろがる口頸部を有する。口縁端部は、杯・蓋と同様に広い平端面をもつ。体部は、肩に稜をもつ。器台は浅い杯部に、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は、上方へ立ち上がりやや複雑化している。細い脚部には、透かしが施される。

壺は、内傾気味に短く立ち上がる直口壺である。甕には大型と中型品があり、いずれも朝顔形に外反する口縁部に断面三角形の突帯や櫛描波状文などで装飾する。口縁端部は、四角くおさめるものや上下に拡張し複雑化したものがある。

これらの須恵器には大体の形をつくる成形の段階、器体内外面を整え仕上げる調整段階、調整終了後の文様の施文などで様々な技法が認められる。

タタキメは、叩き板と当て具を用いて器壁を叩きのばした際の痕跡で甕の口縁部や体部、無蓋高杯の脚部、器台などに認められる。叩き板は木製の原体を使用し、木目に対し平行に数条の溝を刻んだ平行タタキメと直交した溝を刻み、木目の浮き出した擬格子タタキメがある。

当て具は、わずかに突出する面に同心円の溝を加えたもので叩き板による外面からの打圧を受け止める。当て具痕は、後の調整の工程でナデ調整で消されるものが多い。当て具痕には、同心円状のほか第1輪の内側に十字形の刻み目を施すもの（車輪文）や直線状の刻みが第2輪以上にのびるもの、同心円状ではなく、平行線状のものも認められる。

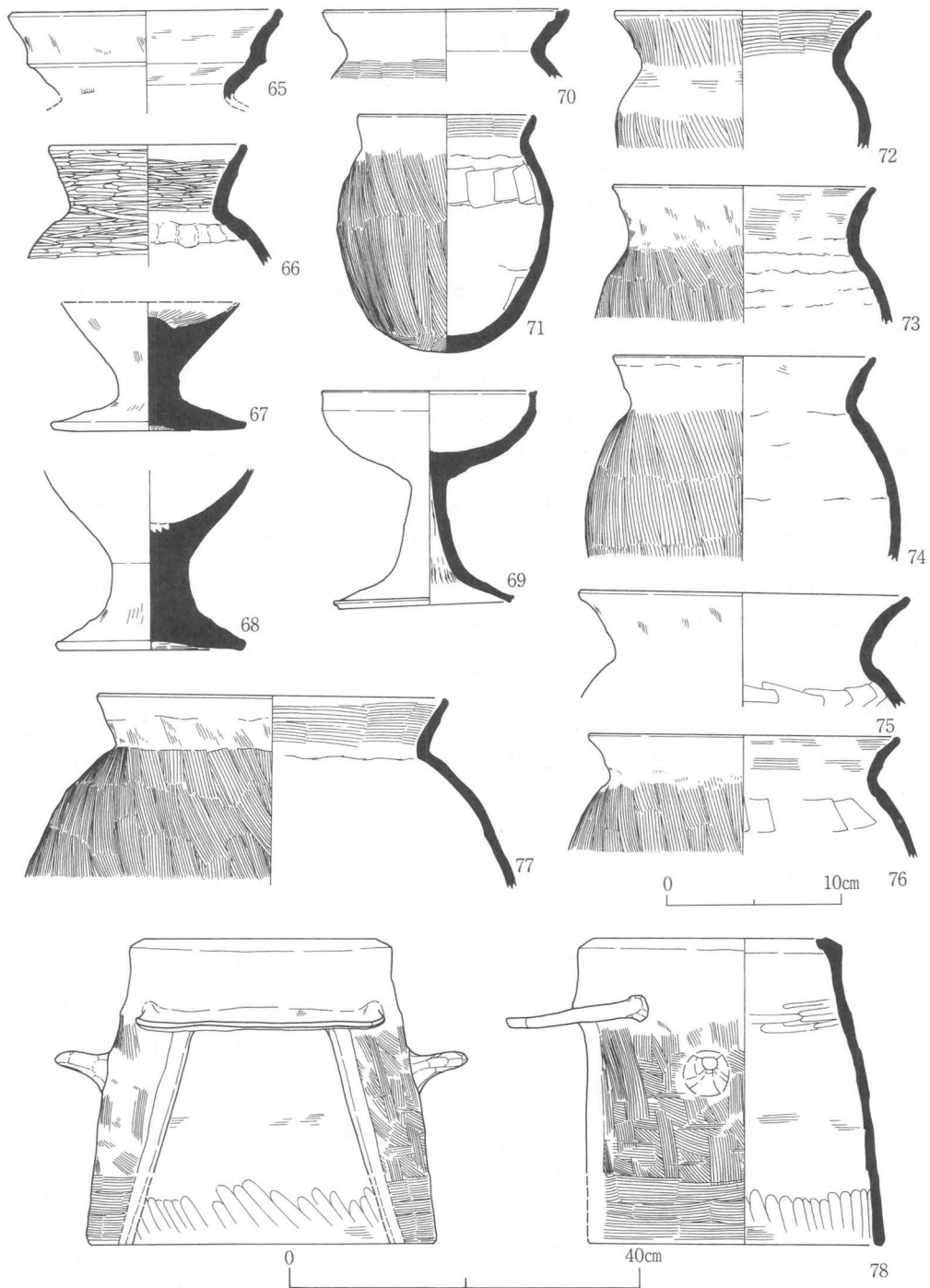
調整には、ヘラケズリ・カキメ・ヨコナデ・ナデなどの手法がある。ヘラケズリ調整は杯の底部、蓋A・Bの天井部、無蓋・有蓋高杯の杯底部などの外面の仕上げ段階で用いられ、調整後さらに別の手法によって調整を施すことはない。ヘラケズリ調整は、ロクロの回転を利用しているが、これを用いずに調整する手持ちヘラケズリ調整も認められる。

カキメは、ロクロの回転を利用して杯底部や有蓋高杯、無蓋高杯、器台脚部、壺体部、甕口縁部・体部に施されるもので、タタキメの上に重複して加える場合やカキメ調整後文様を施文することもある。

ヨコナデ調整は、ロクロの回転によって施される調整法で、すべての器種の内外面に加えられる。ナデ手法はロクロの回転を利用せず、不定方向・非連続のナデである。杯の底部内面や蓋A・Bの天井部内面には、ヨコナデ調整後の工程で仕上げナデが施されるものがある。

文様には、回転を利用した波状文やこれを用いず施文した列点文がある。これらの文様は無蓋高杯の杯部、甕口縁部・体部、器台の杯部および脚部、甕A・Bの口縁部などに単独または組み合わせて施文されている。

突帯は、甕口縁部、器台杯部・脚部などの部位に認められる。低くつまみ出され、断面三角形を呈する突帯は、単独のもののほか2帯の突帯間に櫛描波状文を巡らすこともある。



第58図 古墳時代中期土器（土師器）実測図

有蓋高杯、無蓋高杯、器台の脚部に認められる透かし穴は、すべて1段透かしである。杯部に透かし穴を切り取る際の切り目が残存することから、透かし穴は、脚部と杯部の接合後の工程であけられている。透かし穴には長方形と三角形の形態がある。透かし穴の配置は、3方のほか4方に配置することを意図した製品もある。透かし穴の切り取り面には、面取りを施し丁寧仕上げたものもある。

調整完了後、杯底部外面・壺底部外面・甕体部外面にヘラ記号を施すものが認められる。記号の種類は、1種類に限定されることなく、複数の種類が存在する。出土須恵器のなかには、焼け歪みが著しく本来の形態の崩れたものや器壁の叩き締めが不十分なため器壁が膨張したもの、他の須恵器と融着したもの、焼成温度が不十分な製品などが多数認められる。

土師器には、壺A・B、甕A・B・C・D、鍋A・B、甑、高杯A・B・C・D、椀、土製支脚、移動式竈などがある。

壺には、2段に屈曲する二重口縁のもの(A)と偏球形の体部に外上方へ直線的にのびる口縁部のつくもの(B)がある。壺の出土量は、極めて少ない。

甕には、口縁部が内傾し端部に肥厚する面をもち、布留式の系譜につながるもの(A)、小型で平底の底部をもつもの(B)、丸底の底部に外反する短い口縁部のつくもの(C)、丸底の底部から長胴形の体部につづき、外反する口縁部をもつもの(D)がある。

鍋は外反する口縁部に肩の張る体部がつき、体部最大径が口径を凌ぐもの(A)、外反する口縁部から張りの小さい体部につづき、口径が体部最大径よりも大きいもの(B)が出土している。

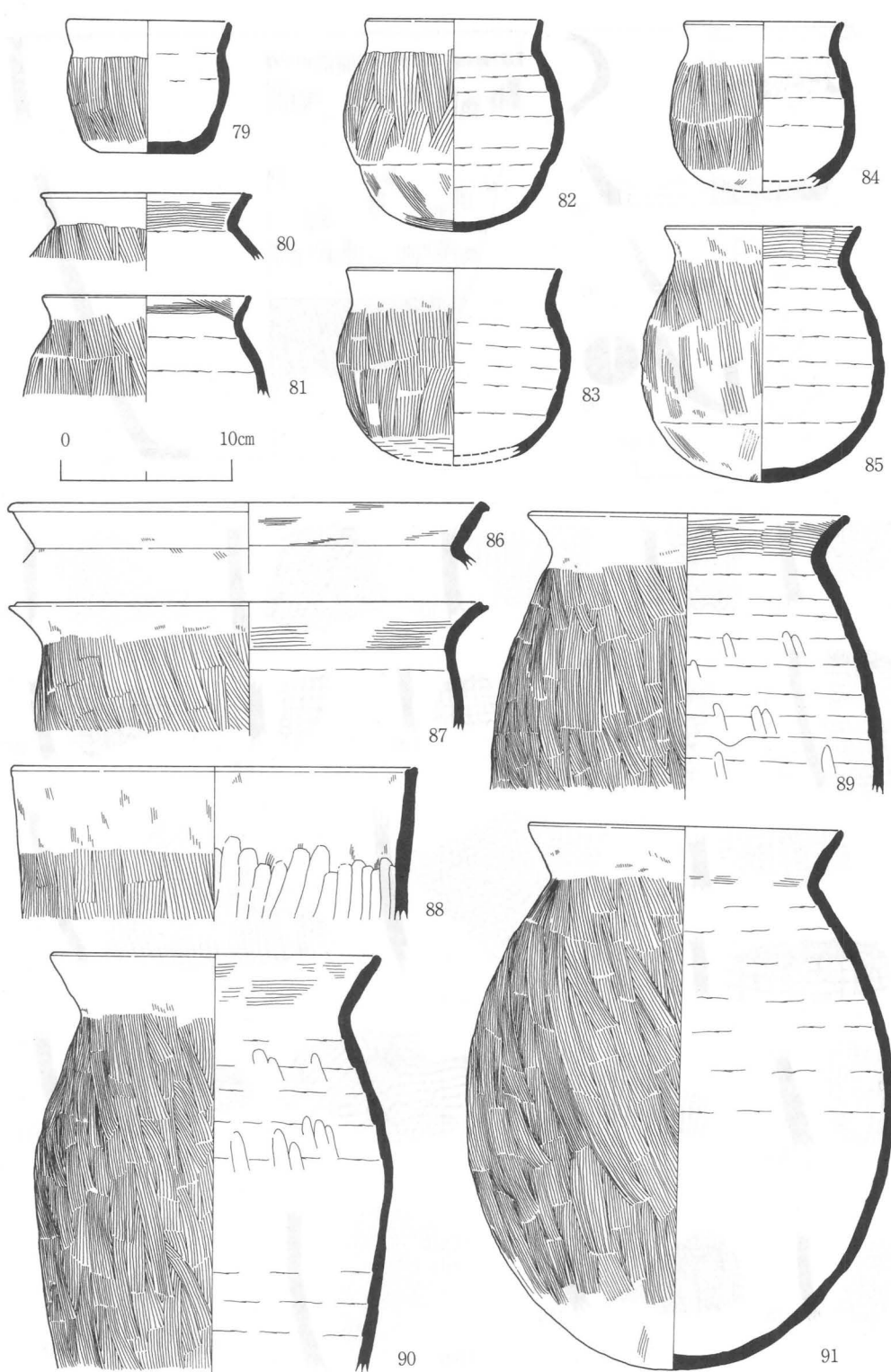
甑は、直線的に外上方へのびる体部から口縁部につづく形態で口縁端部に面を構成する。

高杯は、杯部が椀形を呈するもの(A)、杯底部に段をもち、口縁部が内傾気味にたちあがるもの(B)、段を有する杯底部に外上方へ直線的にのびる口縁部のつくもの(C)、外上方へゆるくのびる杯底部から短く外折する口縁部につづくもの(D)の4形態に細分できる。これらのうち、最も出土量の多いものは高杯Aで、高杯B・C・Dの出土量はいずれもわずかである。高杯Aの口径・脚径・器高は、個体差が小さいことから同一規格によって製作されたものと推定できる。

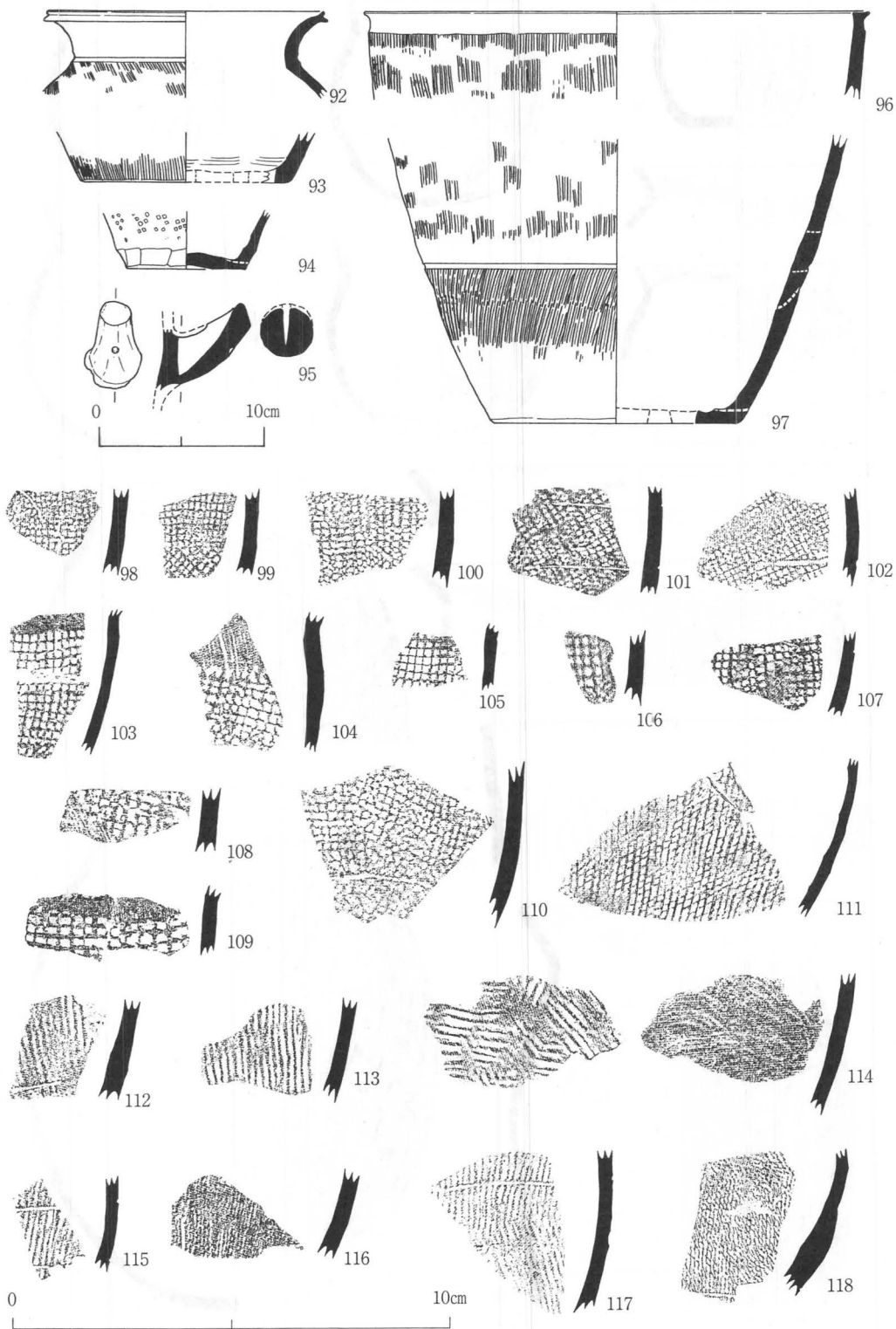
椀は、底部から内傾気味にのびる体部につづき、口縁端部を尖り気味におさめている。

土師器の胎土には、肉眼的にみて角閃石・雲母を多量に含み、茶褐色の色調を呈するもの(I類)、砂粒の混入がほとんど目立たず赤褐色を呈するもの(II類)、チャート粒が混入し、角閃石を含まないもの(III類)などがある。煮炊き用の甕・鍋・甑・移動式竈・土製支脚の胎土は、I類とIII類のみである。出土量は、I類が圧倒的に多い。壺Aの胎土はI類に限られるのに対して、壺BはII類のみである。高杯では、最も出土量の多いAおよびB・DはB類に限定できる。高杯Cの胎土はすべてA類である。

出土している土師器には、器種や器形によって胎土に差異が認められる。胎土の特徴の差が製作地のちがいを反映しているとすれば、同期の土師器は、器種ごとに生産がおこなわれていた可能性のあることを示唆している。



第59図 古墳時代中期土器（土師器）実測図



第60图 古墳時代中期土器（韓式系土器）実測図、拓影・断面図

出土した土師器の調整法には、ハケメ調整・ヘラケズリ調整・ナデ調整・ヘラミガキ調整がある。

ハケメ調整は、壺A・高杯をはじめ煮炊き用の甕・鍋B・甑・移動式竈・土製支脚など多くの器種に施される。ハケメ調整は、後の工程で加えられたナデ調整・ヘラケズリ調整・ヘラミガキ調整によって消される場合もある。I類の胎土の甕の体部外面は、ハケメ調整で仕上げるのを基本とするのに対してⅢ類の胎土の甕や鍋Aの体部外面はハケメ調整を加えている。

ヘラケズリ調整は壺B、甕C・D、甑などの体部内面に施される。布留式土器の甕内面に普遍的に施されていたヘラケズリ調整は、口縁端部の形態に布留式の特徴を残す甕Aにも認められない。これにかわり、I類の胎土の甕の体部内面にはナデで調整するだけで体部上半に粘土紐の接合痕を残すものが多い。一方、Ⅲ類の胎土のものには横方向にヘラケズリ調整を施すものが認められる。

ナデ調整は、すべての器種の内外面に用いられる。前述したようにI類の胎土の甕の体部内面の調整には、多用されている。ヘラミガキ調整は壺Bの口縁部内外面および体部外面に横方向に施されるほか、高杯Aの杯部内面に放射状に施し、暗文風に仕上げるものもある。

土師器には相伴して出土した同期の須恵器の壺・甕などの口縁部外面にみられた波状文や列点文などの文様を加えるものはない。壺Bの体部最大径部分には、2条の沈線を施すものがある。これは、同期の須恵器の壺・甕に認められることからこれを模倣したものとも考えられる。

甕Dをはじめ小型の甕Cには体部外面に煤の付着する例や底部に二次焼成痕をもつものがある。煤は、体部最大径付近から底部を除く体部下半全体にベルト状に付着するものが認められる。土製支脚には、器体上部にわずかに煤が付着するものの二次焼成痕はない。

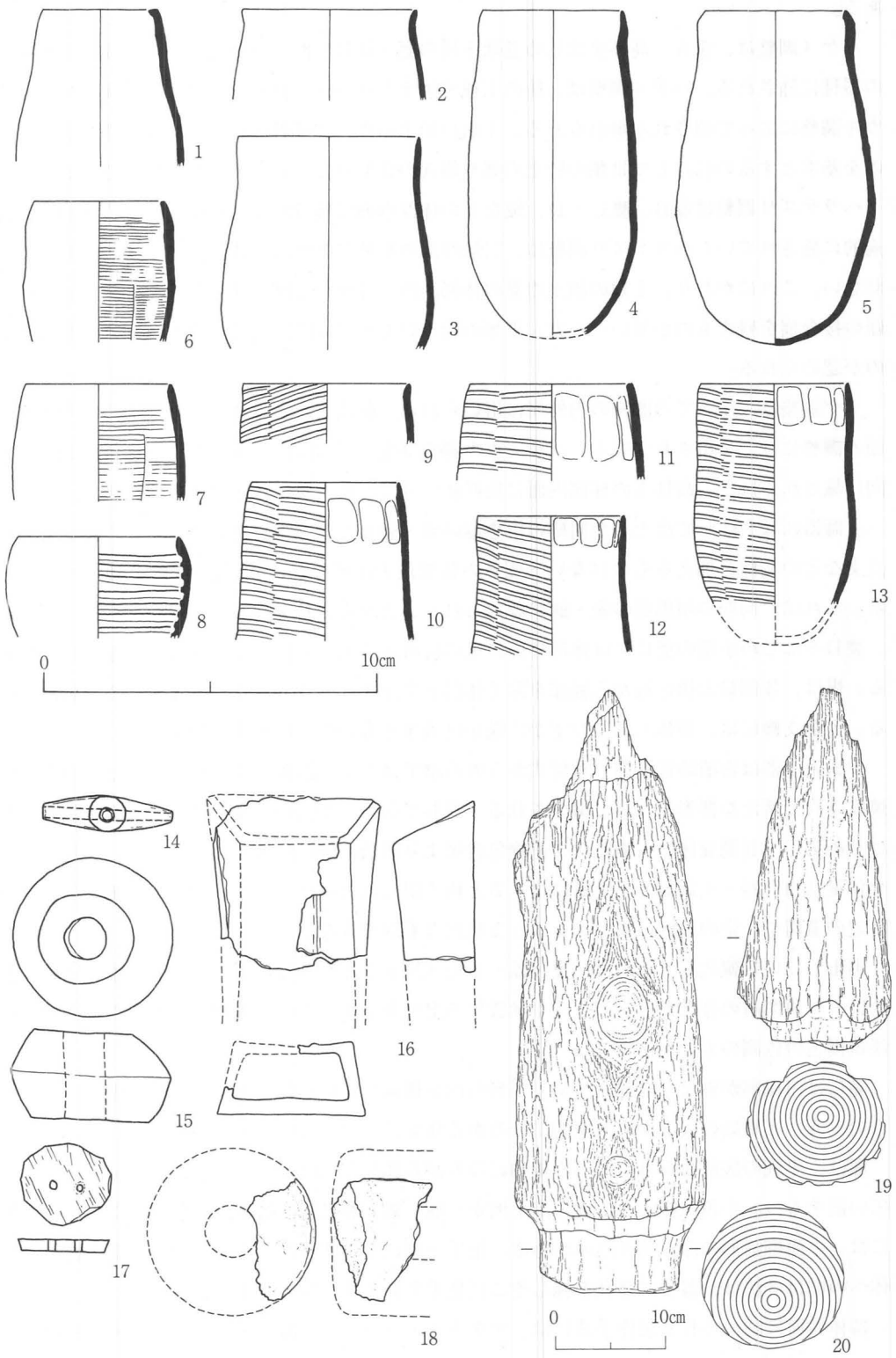
韓式系土器は古墳時代前期の布留式からの系譜ではなく、器表面にタタキメをとどめ酸化焰焼成された新たな器形によって構成される土器群である。今回の調査では、第I調査区溝5をはじめ第I・II調査区古墳時代の遺物包含層より多数の破片が出土している。しかし、その全体量は須恵器・土師器の出土量に比べると極く限られた量にすぎない。また、韓式系土器が特定の遺構や一定の地区に集中するような状態は看取できない。

出土している韓式系土器には、甕・甑・牛角状把手などがある。韓式系土器の胎土は、肉眼的にみて角閃石の存在が目立ち、やや軟質で茶褐色を呈するものと角閃石は顕著でなく硬質で淡黄褐色の色調のものがある。

甕には口縁部が外反し端部に「M」字形の面を構成し、球形の体部から丸底の底部にいたるもの(A)と平底の底部から直線的にひろがる体部につづくもの(B)がある。

甑は、平底の底部から外上方へ直線的にひろがる体部につづく。口縁部は外反せず、端部に広い面をもつ。牛角状把手は、他の出土例から甑・鍋・移動式竈の体部に取り付く。把手上面には、平面柳葉形の深い切り込みがある。把手下面には棒状工具の刺突痕がのこる。把手の器体への貼付け法は、器体に穿孔を施しそこに把手を挿入する挿入法をとる。

器体外面に認められる製作手法には、タタキメ・ヘラケズリ調整・ハケメ調整・ナデ調整が



第61図 古墳時代中期遺物（製塩土器・鑄造鉄斧・紡錘車・鞆羽口他）実測図

ある。タタキメには、平行タタキメ・格子タタキメ・斜格子タタキメが認められる。本調査で最も多く出土したのは、格子タタキメで以下、平行タタキメ、斜格子タタキメの順となる。平行タタキメは3条/cm程度のもが多く、5条/cm前後の細かいタタキメのものもある。格子タタキメには、2～2.5mm角の正方形を呈するものも多く、1.5mm角程度の正方形で細かいもの、3mm前後でやや長方形気味のものなどもある。

ヘラケズリ調整は、甕B・甌などの平底の底部をもつ器形の底部外面に認められる。

ハケメ調整は、甕Aの頸部に局部的に施されている。外面調整終了後、甌・鍋・甕・移動式竈の体部に圏線を単独または複数に巡らすものがある。把手をもつ器種では、圏線のある位置に把手を貼り付けており、把手挿入箇所を目安としている。

内面の調整には、ナデ調整を加えるものの須恵器と同様に器体を叩き締める際に使用した同心円状の当て具痕が残存するものもある。また、ハケメ調整を施すものも1点認められる。

陶質土器には、器種の判明するものはない。外面には平行タタキメのほか縄蓆文タタキメが認められる。内面はナデ調整を施し、当て具痕を消している。外面の調整後には、韓式系土器と同様の圏線を巡らすものもある。

製塩土器は、遺構内および遺物包含層で細片化した状態で約1030g出土している。このうち第Ⅱ調査区溝7からは、まとまって出土している。製塩土器は、完形に復元できるものは2点にとどまるが、丸底の底部からやや張りをもつ円筒形の体部にいたり、口縁部を尖り気味におさめる形態が最も多いほか、体部がややくびれる形態のものもある。いずれの形態も器壁は、薄手に仕上げる。製塩土器の口径には、3.4cmから6.2cm前後のものまで確認できるものの口径4.5cm前後のものが最も多い。

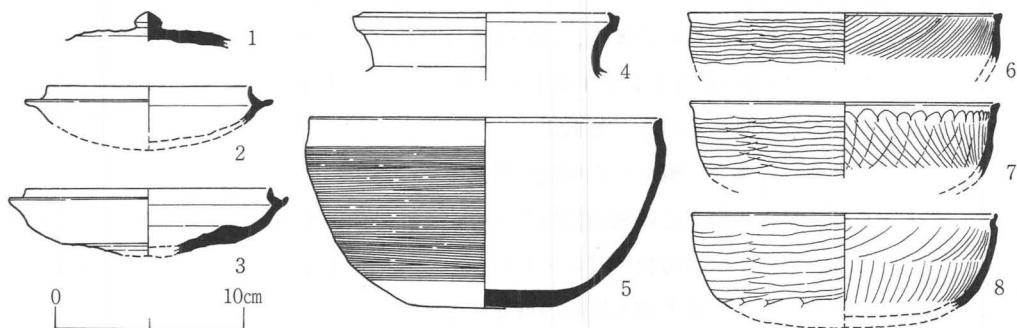
製塩土器は、器体の一部に粘土紐の継ぎ目を観察できる例のあることから粘土紐を巻上げて成形したものと推定できる。製塩土器の外面にはタタキメとナデ調整がみられる。数量的には、ナデ調整を施したものが圧倒的に多く約932gある。

タタキメは水平方向からやや左上がりないし、右上がりの平行タタキメに限られる。

内面調整は、ナデ調整・ハケメ調整・二枚貝の腹縁による貝殻調整に分けることができる。このうち、ナデ調整を施すものは972gあり、ハケメ調整や貝殻調整を加えるものは極く少量である。

外面をナデ調整するもののうち、内面をナデ調整するものは880.5g、ハケメ調整するものが31.2g、貝殻調整を施すもの20.7gである。また、外面にタタキメを残すもののうち、内面をナデ調整で仕上げるものが91.7g、ハケメ調整を加えるものは2.6gあり、貝殻調整を施すものはない。

製塩土器の胎土には、肉眼で観察して砂粒をほとんど含まず、白色から淡褐色を呈しやや軟質のもの(I)、長石粒の混入が目立ち、黄褐色の色調を示す硬質の一群(II)、黒色粒を多量に含み灰色系の色調を呈するやや軟質のもの(III)、くさり礫を多量に混入し、淡灰色から淡黄褐色を呈する硬質の一群(IV)、雲母粒を含み、淡褐色を呈するやや硬質のもの(V)がある。なお、



第62図 飛鳥時代土器（須恵器・土師器）実測図

角閃石の目立つ茶褐色のものはない。

これらのうち、外面をナデ調整するものは、I～V群に認められる。また内面調整に貝殻調整を施すものは、I群に限られる。IV群・V群の外面には、タタキメが施されている。

その他の出土遺物

土製品

出土している土製品には、土錘・紡錘車・轆羽口がある。

土錘

近代以降の耕作用溝から1点出土している土錘は、全長3.8cm・最大幅1cm・内径4mm、重量4gを測る。胎土中には角閃石を含まない。外面はナデで調整する。

紡錘車

第II調査区、暗赤褐色砂質土層から出土している紡錘車は、直径4.7cm・厚さ2.6cm・内径2.3cm・重さ61.9gを測る算盤玉形の断面形を呈する。体部中央の稜は鈍く、丸みをもつ。外面は、全体にナデ調整で仕上げている。焼成は土師質で赤褐色を呈する。胎土には、角閃石を含んでいない。類例は、大阪府陶邑深田遺跡・土師遺跡・八尾南遺跡などの初期須恵器や韓式土器の出土している集落址や陶邑深田窯・香川県宮山窯などの初期須恵器窯からも出土している。また、朝鮮半島からも近似した資料が出土している。

轆羽口

第I調査区、暗茶褐色砂混り土から1点検出している。外径10.1cm・内径3.1cm前後に復元できる。胎土内に多量の角閃石を観察できる。端部周辺には、二次焼成痕が認められる。第8次調査では、鉄滓は出土していないが、同期の縄手遺跡では多量の轆羽口とともに碗形滓を検出していることから同期の集落では小鍛冶的な鉄製品の生産を実施していたものと推定できる。

石製品

双孔円板 双孔円板は、第II調査区、暗赤褐色砂質土層から1点検出している。直径2.6cm、厚さ3.8mmのほぼ円形を呈する滑石製品である。両面および側面には、斜方向の擦痕が明瞭に

残る。双孔円板は、本遺跡の周辺にある芝ヶ丘遺跡・下六万寺遺跡などからも出土している。

鉄製品

鑄造鉄斧 第I調査区溝6から少量の土器類とともに出土している。刃部を欠損しているため全形態は不明であるが、現状で長さ5.2cm・袋部末端部の幅4.5cm・袋部上面厚2mm・同下面厚4mm・側面厚4mmを測る。袋部の平面形は中央でややくびれる形態である。また断面形は台形を呈する。袋部上面には、縦方向に1条の突線が鑄出されている。鑄造鉄斧のほとんどが古墳の副葬品として検出されており、集落出土の本例は極めてまれである。

木製品

柱材 掘立柱建物1を構成する柱穴内より腐朽を免れた柱材が出土している。最も良好な遺存状態の(図20)は直径17.3cm、長さ54.5cmを測り基部は、直径13cmと他の部分に比して1段細く削りだしている。

5. 飛鳥時代の遺物

包含層から出土している須恵器には、杯・蓋・横瓶などの器種が認められる。杯はたちあがりの退化が著しく、体部全体が浅い形態を呈する。体部外面のヘラケズリ調整は狭い範囲にとどまる。蓋は、天井部に宝珠つまみのつく小型のものがある。土壙3から出土している鉄鉢は、安定した丸底から深い体部につづくもので初源的な形態を呈する。

土師器杯は、口縁端部に平坦な面をもつものと口縁端部が内傾し段をなすものがある。両者とも胎土内に角閃石を含まない。

外面調整は、横方向のヘラケズリ調整後横方向のヘラミガキ調整を加えるものとナデ調整後横方向のヘラミガキ調整を施すものがある。内面には、ナデ調整後斜放射状暗文を加えるもの、斜放射状暗文と放射状暗文とを組み合わせるもの、斜放射状暗文と放射状暗文とともに連弧文を加えるものが認められる。

表2 縄文土器観察表

縄文土器 (中期・後期)

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考	
縄文土器 (中期)	深鉢	8 9 10	○直線的に外反する体部から、内弯気味の口縁部。 ○端部は内側に屈曲し、肥厚する。	○口縁部には渦巻状の隆帯文を施している。 ○渦巻文下に、押し引きによる沈線を施している。 ○口縁部端面に縄文が施されている。	○在地産(8・9・10)。 ○I暗青灰色砂質土(8・9)、II黒灰色砂質粘土(10)
		11 12 13 15 16	○直線的に外反する口縁部をもつ。 ○端部はそのまま面をもって終わる。 ○(12・13)は推定口径38cm。	○口縁部端面には竹管による刻目を施すもの(11・15)と、ヘラによる刻目(12・13・16)がある。 ○内外面にナデを施すもの(11・15)と、内面にナデ・外面に縄文と沈線を施すもの(12・13)と、外面に縄文を施すもの(16)がある。	○在地産(11・12・13・15・16)。 ○I暗青灰色砂質土(11・12・13・15) ○外面に煤が付着(11・12・13・15) ○I茶灰色粘土(11・15・16)、II淡褐色粘土(12・13)
		14 20	○外方に開く体部から、内弯する口縁部。端部は屈曲して短く立ち上がる(14)。 ○外方に開く体部から、内折する口縁部(20)。 ○推定口径16cm(14)。	○口縁部外面に沈線、体部に半截竹管による文様を施している(14)。 ○体部に円形竹管による文様を施している(20)。 ○内面はナデ調整を行っている。	○在地産(20)。 他地域産(14) ○I暗青灰色砂質土(14)、II淡黄褐色粘土(20)
		17 21	○直立気味の体部から、内傾する口縁部。端部はそのまま面をもつ。	○口縁部外面に工具による沈線。 ○口縁部端面と体部外面に縄文を施している(21)。	○他地域産(17・21)。 ○I黒灰色砂質粘土(17)、II茶灰色粘土(21)。
		22	○傾き不明。	○外面に縄文を施し、内面はナデ調整を行っている。	○他地域産(22)。 ○II暗青灰色砂質土
底部	4	○平らな底部をもつ。	○外面に縦方向のケズリ調整を施す。 ○内面はナデ調整を行っている。	○他地域産(4)。 ○I茶灰色粘土	
縄文土器 (後期)	深鉢	1	○直線的に外反する体部から、やや屈曲して上方に向かう口縁部。 体部内面が肥厚し、面をもつ。口径27.9cm。	○口縁部内面および体部内面はヨコナデ調整を施している。 ○体部外面は縦方向に貝殻(二枚貝?)調整を施している。	○在地産(1)。 ○II暗黄灰色粘土。
		5	○外反しながら外上方にのびる。 ○端部外面に面をもつ。口径17.2cm。	○口縁部端面と体部に羽状縄文を施している。 ○頸部境界にヘラによる沈線(?)を施している。	○他地域産(5)。 ○I攪乱。
		6 7 33 36	○内傾する体部に、屈曲してゆるやかに外方にひろがる口縁部。端部は外面肥厚(6・34・36)。 ○推定口径(34)は26cm、(36)は25cm。	○外面体部に縄文を施し、頸部にミガキ調整を行うもの(6・7・33・34・35)、板状工具による調整を行うもの(36)がある。 ○内面は貝殻条痕と板状工具による条痕(36)を施している。	○在地産(6・7・33~36)。 ○II暗黄灰色粘土(6・7・33・34・35)、I青灰色シルト(36) ○外面に煤が認められる(6・7・36)
		31 32	○やや外方に開く口縁部。端部はそのまま面をもつ。	○内外面にナデ調整を施している。	○在地産(31・32)。 ○I暗青灰色砂質土。
		18 23	○外方に直線的に開く体部にそのままつづく口縁部。	○口縁部外面の端部および内面はヨコナデ調整、外面は横方向のケズリを施す(18)。 ○(23)は風化の為調整不明。	○在地産(18・23)。 ○II黒灰色砂質粘土(18)、II暗青灰色砂質土(23)
		19	○外方に開く体部から、屈曲して上方に直立気味の口縁部。 ○端部は丸味をもつ。	○外面に縄文を施し、内面はナデ調整を行っている。	○在地産(19)。 ○I淡黄褐色粘土。
		24	○外反する口縁部。端部は内外に拡張する。 ○推定口径30cm。		○在地産(24)。 ○II黒灰色粘土。

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
縄文（後期）	25 26 29 30	○傾き不明。	○外面に半截竹管によるもの(25・26)と、棒状工具によるもの(29・30)で文様を描いている。	○在地産(25・26・29)、他地域産(30) ○I黒灰色砂質粘土(26)、II黒灰色粘土(29)、I暗青灰色砂質土(30)、出土地不明(25)。 ○外面に煤が認められる(30)。
	27 28	○傾き不明。	○外面に縄文を施し、内面はナデ調整を行う。	○在地産(27・28)。 ○I黒色粘土
	2 3 37	○平らな底部をもつ。 ○推定底径13cm(37)。	○外面にケズリ調整を施すもの(2・37)、ナデ調整を行うもの(3)がある。 ○内面はナデ調整を行う。	○在地産(2・3・37)。 ○II黒灰色粘土(3・37)、II暗青灰色粘土(2)。

縄文Ⅳ（暗黄灰色粘土上面遺構）

深鉢	A	38 39 41 45 47	○口縁部は、全体に弧を描くように外反し、上端でわずかに上方へ立ち上がり、端部外面に面をなすもの(38・41)と、全体にゆるやかに外反し、端部は面をもつもの(45・47)、下方で強く外反し、上方は直線的に外上方へのび、端部は丸味のある面を持つもの(39)がある。体部はゆるやかに内弯するが、あまり膨らみをもたない。肩部が張りだし、明瞭な稜をつくる。 ○口径30cmから37cmのもの、14cm前後の小型のものがある。(39)は36.5cm、(41)は30.6cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整およびナデ調整を施している。 ○体部外面は水平から左上がりの横方向のケズリ調整、内面はナデ調整で仕上げている。体部外面のケズリ調整は時計廻りに施すものが一般的だが、逆時計廻りに施すもの(47)が1例ある。 ○(47)は内面のナデ調整の前に口縁部および体部に横方向の板ナデ調整を行っている。	○在地産6例(38・39・41・45・47)。 ○5例に煤が認められる。(38)は体部外面に、(41)は外面全体に煤が付着。 ○土壌34(38・39)、土壌30(41・45)、土壌43(47)。
	B	40 48	○口縁部は弧を描くように外反し、端部は面をもち刻み目をつけている。 ○肩部は張り出して稜をもち、体部は浅い砲弾状で底部が丸底を呈するもの(40)がある。 ○(48)口径19.3cm、器高18.1cm。	○口縁部は、端部および内面はヨコナデ調整、外面は横方向の二枚貝調整を施すもの(48)と、外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整で仕上げるもの(40)がある。 ○体部は外面肩部付近を時計廻りの横方向のケズリ調整、以下を下方から上方に向かって縦方向に底部と体部中位の2段に分けてケズリ調整を施し、内面は横方向の板ナデ調整、底部内面をナデ調整で仕上げているもの(40)がある。 ○口縁端部の刻み目はヘラ状の原体による。 ○(40)は外面にヘラ状の原体で幅の広い沈線をめぐらせている。 ○(40)は内外面に粘土紐の継ぎ目痕が認められる。粘土紐の幅は1.5cmから3.5cmのものがあるが、3cm前後のものが多い。	○在地産1例(48)、他地域産1例(40)。 ○2例とも煤が認められる。(40)は外面全体に煤が付着しているが、底部は煤の付着が少ない。 ○落ち込み3(40)、ピット58(48)。
	F ₁	49 55	○口縁部はほとんど膨らみをもたず直線的に上方へのびる。口縁端部は丸味をもつ。 ○推定口径25cmから30cm。	○外面は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整を施し、口縁端部にヨコナデ調整を加えている。	○在地産2例(49・55)。 ○2例とも煤が認められる。 ○土壌35(55)、土壌46(49)。
浅鉢	C ₂	43	○体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯しながら外上方へ大きく広がる。 ○口縁部はわずかに外反しており、端部は狭い面をなす。 ○口径20cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施しているが、外面は風化が激しい。 ○口縁部に直径約3mmの穿孔を焼成前に施している。	○在地産1例(43)。 ○土壌34。

縄文Ⅳ（暗黄灰色粘土上面遺構）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	C ₁	60 ○体部から口縁部にかけて弧を描くように内湾しており、口縁部は内傾している。口縁端部は丸味をもつ。 ○推定口径15cm。	○口縁端部はヨコナデ調整。以下を、外面は時計廻りの横方向のケズリ調整、内面はナデ調整を行っている。外面のケズリ調整は粗く、器壁の厚みは一定しない。	○他地域産1例(60)。 ○内外面に煤が認められる。 ○ピット60。
	E	42 ○腹部が大きく張り出す体部から「く」の字形に外反して外上方にのびる口縁部をもつ。口縁部は上端で水平近く外反し、端部は屈曲して短く立ち上がる。 ○口径16cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整。外面口頸部および体部下半と内面全体に横方向のケズリ調整を施した後、内外面ともに全体に横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁端部が口縁部から立ち上がる部分では、内外面に沈線状の凹みをつけて屈曲を明瞭にしている。 ○肩部外面にヘラ状の原体で沈線状を施している。 ○突起をもつが、大半を欠損しているため形状は不明。	○在地産1例(42)。 ○外面全体と内面口縁部から体部上半部に赤色顔料を塗布している。 ○黒灰色粘土。

縄文Ⅳ（暗黄灰色粘土）

深鉢	A	52 ○口縁部は全体にゆるやかに外反するもの(52)と、直線的に外上方へのびるものがある。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。	○在地産6例、他地域産1例(52)。 ○4例に煤が認められる。
	B	46 ○口縁部は直線的に上方へのびるもの(46)と、ゆるやかに外反するものがある。口縁端部は面をもち、刻み目をつけている。 ○(10)は、推定口径30cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○刻み目はヘラ状の原体による。(46)は内端部に非常に浅い小O字形の刻み目をつけている。他に、小さく深いO字形のもの、浅い横長のO字形のものがある。	○在地産2例(46)、他地域産1例。
	H	56 61 ○口縁部はわずかに外反し、端部は丸味をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○(61)は波状口縁を呈する。 ○推定口径(56)は35cm、(61)は27cm。	○口縁部外面は横方向のミガキ調整で仕上げているが、内面は風化の為不明。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産6例(56・61)。 ○4例に煤が認められる。
	F ₁	50 53 54 ○ほとんど膨らみをもたない体部から単純に口縁部が続く。 ○(54)は波状口縁を呈する。 ○推定口径21cmから29cm。	○口縁端部および内面全体はヨコナデ調整、外面は時計廻りの横方向にケズリ調整しているもの(50・53・54)が4例、口縁端部はヨコナデ調整、以下を内外面ともに横方向のケズリ調整しているものが2例ある。	○在地産(50・53・54)。
	I	51 ○体部が2段に屈曲する。口縁部は外反し、端部は面をもつ。上段部の屈曲は強く、稜をなす。 ○推定口径40cm。	○口縁部内外面および体部外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整で仕上げている。	○在地産1例(51)。
浅鉢	B	63 64 ○口縁部は短く外反し、端部内面が肥厚して段をなしており、その断面が三角形を呈するもの(64)と、台形を呈するもの(63)がある。頸部内面は鋭く稜をなしている。 ○肩部は丸味をもち、強く張り出すもの(64)と、ほとんど張り出さないもの(63)がある。 ○推定口径(63)は25cm、(64)は37cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。(63)は体部内面をヨコナデ調整している。 ○(64)は黒色磨研土器。 ○(64)は突起(P-2)をもつ。	○在地産1例(63)、他地域産1例(64)。 ○(64)は外面に赤色顔料が残る。
	C ₂	59 ○体部から口縁部にかけてやや内湾気味だが、ほとんど膨らみをもたず、ほぼ直上にのびる。口縁端部は器壁が薄くなり尖り気味になる。 ○推定口径30cm。	○外面に時計廻りの横方向のケズリ調整を施した後、内外面ともに横方向のミガキ調整を加えている。	○他地域産1例(59)。

縄文Ⅲ（暗黄灰色粘土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	C ₁	58 ○体部から口縁部にかけてほとんど膨らみをもたない。 ○口径10cm前後の小型のものと、30cm前後のものがある。	○口縁部内外面および体部内面にヨコナデ調整、体部外面に横方向のケズリ調整を施している。ケズリ調整の方向は、確認できないものを除けばすべて時計廻りに行っている。	○在地産5例(58)。 ○3例には煤が認められる。
	D	62 65 ○内湾する体部から単純に口縁部が続く。口縁端部が外反気味になり外面にやや肥厚するもの(65)がある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。(65)は他のものより口縁端部からやや離れた位置に突帯がついている。 ○推定口径(62)は16cm、(65)は26cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げるもの(65)と、口縁端部および内面はヨコナデ調整の後、横方向のミガキ調整を施し、外面は突帯以下を横方向にケズリ調整しているもの(62)がある。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産4例(62・65)。 ○4例ともに煤が認められる。
	E	57 ○口縁部は弧を描くように外反する。口縁端部は面をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 推定口径28cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○黒色磨研土器。 ○突帯は断面が台形を呈する。	○在地産1例(57)。
	H	66 ○口縁部は直線的に外上方へのび、外端部は角張っている。 ○推定口径25cm。	○内面は横方向のミガキ調整を施している。外面は風化の為不明。 ○口縁端部内面に沈線をめぐらせている。	○他地域産1例(66)。
底部	44	○丸底を呈する。	○外面は下方から上方に向かう縦方向のケズリ調整、内面はナデ調整を施している。	○在地産1例(44)。

縄文Ⅲ（土壙22）

深鉢	A	68 72 ○口縁部は弧を描くように外反しているが外反の強いもの(72)と、外反のゆるやかなもの(68)がある。肩部は稜をなす。 ○体部はゆるやかに内湾しているがあまり膨らみをもたない。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施すものが多い。内面を横方向に巻貝調整しているもの(72)、横方向に板ナデ調整した後、丁寧にナデ調整をしているもの(68)がある。 ○体部は外面時計廻りの横方向にケズリ調整を行い、内面は丁寧にナデ調整を施しているもの(68)がある。	○在地産11例(68・72)。 ○6例に煤が認められる。(72)は外面部分的に煤が認められる。
	B	89 ○口縁部はほぼ直立し、端部は面をもち、刻み目をつけている。 ○推定口径26cm。	○口縁端部および内面はヨコナデ調整、外面は時計廻りの横方向に軽いケズリ調整を施している。 ○刻み目は二枚貝の押し引きによるもので、逆時計廻りに施している。	○他地域産1例(89)。 ○外面に煤が認められる。
	C	○直線的に上方へのびる口縁部の一部端部は器壁が薄くなるが面をもち、刻み目をつけている。外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈する。刻み目はヘラ状の原体により、口縁端部が小D字形、突帯がD字形を呈するものと、口縁端部、突帯ともに小O字形を呈するものがある。	○在地産1例、他地域産1例。
	F ₁	70 95 ○口縁部は内湾気味で端部は器壁が薄くなる。 ○(70)は口径28.0cm。	○口縁端部をヨコナデ調整、以下を外面は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整を施している。(70)は内面のナデ調整の前に横方向の板ナデ調整を施している。	○在地産2例(70・95)。 ○外面に煤が付着する。
浅鉢	A	98 ○口縁部は短く外反する。口縁端部内面は肥厚して段をもつ。肩部に稜をもつ。 ○推定口径13cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁端部に豆粒状の突起(P-8)をもつ。	○他地域産(98)。

縄文Ⅲ（土壙22）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	B 87 97	○口縁部が短く外反するもの(87)と、外反せずに立ち上がるもの(97)がある口縁部内面は肥厚して段をもち端部は平坦な面をもつ。 ○(87)は推定口径21cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(87)と、外面ヨコナデ調整内面横方向のミガキ調整するもの(97)がある。 ○(87)は口縁部に突起(P-4)をもつ。 ○(97)は口縁端部にヘラ状の原体によるV字形の刻み目をつけている。	○在地産1例(87)、他地域産1例(97)。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土上面遺構 土壙21、土壙22）

浅鉢	C ₁	90	○体部から口縁部にかけて、ほとんど膨らみをもたず直線的に上方へのびる。	○口縁端部はヨコナデ調整。以下を、外面縦方向のケズリ調整、内面横方向のミガキ調整のもの(36)と、内外面ともにナデ調整のものがある。	○在地産2例(90)。 ○1例には煤が認め。 ○焼土塊周辺。
	D	67 100	○内湾する体部から口縁部が単純に内湾しながら立ち上がるもの(100)と、直線的に上方へのびるもの(67)がある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○推定口径20cmから28cm。(67)は19.7cm。	○口縁端部はヨコナデ調整。以下を、外面横方向のケズリ調整の後、内外面に横方向のミガキ調整を加えるもの(44)、外面突帯以下に横方向のケズリ調整、内面横方向のケズリ調整の後、ナデ調整を施すもの(43)がある。他に、外面はヨコナデ調整、内面は横方向のミガキ調整のものが1例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産5例(67・100)。 ○4例に煤が認められる。(67)は体部外面全体に煤が附着。 ○焼土塊周辺(100)、土壙22(67)。
	E	99	○口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○推定口径28cm。	○内外面ともに横方向の丁寧なミガキ調整を施すもの(99)と、ナデ調整で仕上げるものがある。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産2例(99)。 ○土壙21(99)。
	F	93	○口縁部は直線的にほぼ直上へのびる口縁部の下端部が強く外反して内面では稜をもつため、体部は欠損しているが、口縁部と体部の区別が明確になると考えられる。 ○口径は計測できないが、かなり大きくなると思われる。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁端部の内外面に沈線をめぐらせている。外面の沈線は半截竹管状の原体で、内面の沈線はヘラ状の原体で施している。	○他地域産1例(93)。 ○土壙21。
			94		○外面ヘラによる沈線。 ○内面ヨコナデ。
底部		71	○丸底を呈し、体部に向かって大きく広がる。 ○浅鉢の底部と考えられる。	○外面は下方から上方に向かって削り上げている。内面はケズリ調整の後ナデ調整を施している。	○他地域産1例(71)。 ○外面に煤が附着し、外底面には使用時のものと思われる剝離が見られる。 ○土壙22。
蓋		69	○楕円形で中高の笠形を呈する。 ○相対する方に2孔1対の紐孔をもつ。 ○口径は長軸8cm、短軸6cm。	○内外面にナデ調整を施している。 ○紐孔は焼成前に内外より穿孔を行っている。	○在地産1例(69)。 ○土壙22。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土上面遺構 溝35）

深鉢	A	83 84 107 109 110	○口縁部が短く、外半のゆるやかなもの(107・110)と、口縁部が長く、やや強く外半するもの(83・84・109)がある。肩部は稜をなす。 ○体部は欠損しているものが多いが、(107)は体部が砲弾状で、底部が尖り気味の丸底を呈する。 ○口径は11cmから15cmの小型のものと30cmを超えるものがある。(107)は11.3cm、(109)は14.4cm。	○口縁部は、内外面ともにヨコナデ調整を施すものが17例、内外面ともにミガキ調整を施すもの(107)が1例ある。 ○体部外面は横方向にケズリ調整をするもの(110)、横方向のケズリ調整をした後に横方向のミガキ調整を加えるもの(109)がある。また、外面は縦方向の、内面は横方向のミガキ調整で仕上げるもの(107)もある。	○在地産18例(83・84・107・109・110)、他地域産1例。 ○13例に煤が認められる。(110)は底部を除く外面全体に煤が附着。 ○(110)は口径・傾きともに図上復元。
----	---	-------------------------------	--	--	--

縄文Ⅲ（黒灰色粘土上面遺構 溝35）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	B 101 113	○口縁部が弧を描くように外反するもの(113)と、ゆるやかに外反する頸部から直線的に外上方へ立ち上がり、端部は内外に肥厚して面をなすもの(101)がある。 ○口縁端部に刻み目をもつ。 ○口径(101)は20.7cm、(113)は38.7cm。	○口縁部は、内外面ともにヨコナデ調整を施すもの(113)が4例、内外面ともに横方向のケズリ調整の後、ナデ調整で仕上げるもの(101)が1例ある。 ○体部外面は軽いケズリ調整、内面はナデ調整を施すもの(101)がある。 ○刻み目はヘラ状の原体による。 ○(101)は口頸部の中ほどに半截竹管状の原体による刻み目をつけている。	○在地産3例(113)、他地域産2例(101)。 ○煤の認められるものが、3例ある。 ○(101)は外面に著しく煤が付着。
	H 86	○口縁部が直線的に上方へのびるもの(86)と、外反するものがある。口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○(86)は波状口縁を呈する。 ○推定口径28cm。	○外面は横方向のミガキ調整、口縁端部および内面はナデ調整を施すもの(86)と、内外面ともにヨコナデ調整で仕上げるものがある。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産1例(86)、他地域産1例。 ○1例には煤が認められる。
	D 85	○口縁部は外反し、端部は面をもつ。 ○口縁端部に上端を沿わせて刻み目のある突帯をめぐらせている。 ○推定口径40cm。	○外面はヨコナデ調整、口縁端部および内面には横方向のミガキ調整を施している。 ○突帯は断面が台形を呈し、二枚貝の押し引きによる刻み目を施している。口縁端部内面に棒状の原体で沈線をめぐらせている。	○在地産1例(85)。
	C 73 / 81 105 108	○ゆるやかに外反する口縁部は、内傾気味に上方へのびるもの(75・76・108)と、直上へのびるもの(5)がある。 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目突帯をめぐらせている。 ○体部はあまり膨らみをもたず、肩部に明瞭な稜をなす。 ○口径は19cmから35cmのものがあるが30cm前後のものが多い。(105)は19.2cm、(108)は35.5cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施すものが主体を占めるが、中には内面に横方向のケズリ調整を施すもの(73)、内面に横方向にケズリ調整した後、横方向のミガキ調整を加えるもの(75・81)、また、外面には横方向のケズリ調整を施すもの(80)がある。 ○体部外面は肩部付近に横方向のケズリ調整、以下を下方から上方に向かう縦方向のケズリ調整を施している。内面は横方向にケズリ調整するもの(108)と、ナデ調整で仕上げるもの(105)がある。 ○突帯は断面が台形を呈するものが6例、三角形を呈するものが6例ある。刻み目はD字形を呈するものが多く、逆時計廻りに施すものが一般的だが、口縁端部と突帯で施文方向の異なるもの(73)、また、口縁端部の施文方向が途中で変わるもの(105)がある。刻み目を時計廻りに施すもの(74)も1例ある。	○在地産11例(73～81・108)、他地域産1例(5)。 ○6例に煤が認められる。(108)は体部外面に、(105)は外面全体に煤が付着し、内面にも煤が認められる。
	G ₁ 102	○体部はゆるやかに内湾するが、あまり膨らみをもたない。口縁部の器壁は体部に比べてやや薄くなり、直立している。口縁端部は丸味をもち刻み目をつけており、口縁端部の直下に刻み目突帯をめぐらせている。 ○口径は25.4cm。	○口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。 ○体部外面は横方向にケズリ調整しており、内面は横方向に板ナデ調整した後ナデ調整で仕上げている。 ○突帯は断面が台形を呈する。 ○刻み目はヘラ状の原体によるものでD字形を呈する。	○在地産1例(102)。 ○外面全体に煤が付着している。
その他	114	○口縁部は直線的に内上方へのびる。口縁端部は平坦な面をもつ。 ○口径は47cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げている。内面に比べて外面の調整はやや粗い。	○在地産1例(114)。
浅鉢	B 112	○口縁部は短く外反し、口縁端部は内面が肥厚して段をもつ。 ○体部は張り出さず、ゆるやかに内湾して底部に続く。 ○(112)は口径33.4cm。	○口縁部、体部ともに内外面とも横方向のミガキ調整を施すもの(112)が3例、ヨコナデ調整のものが1例ある。 ○突起(P-3)をもつものが1例ある。	○在地産4例(112)。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土上面遺構 溝35）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	C ₂	103 ○体部はゆるやかに内湾しながら外方に大きくひろき、口縁部へ続く。口縁部は器壁が薄くなり丸味をもつ。 ○底部は丸底を呈する。 ○他の浅鉢Cに比べると、かなり浅く皿状を呈している。 ○口径25.5cm。	○内面は口縁部から体部にかけて横方向のミガキ調整、底部内面は丁寧なナデ調整を施している。外面は底部から口縁部に至るまで全面に縦方向のミガキ調整を施している。	○在地産1例(103)。
	C ₁	82 91 92 96 119 ○口縁部は、ゆるやかに内湾しながら外上方へのびるもの(91・92・96)と直線的に外上方へのびるもの(82・111)がある。口縁部は狭い面をもつ。 ○口径は13cmから34cm前後。	○口縁部および体部内面はヨコナデ調整を施している。体部外面は、口縁部付近を横方向に、以下を下方から上方に向かう縦方向にケズリ調整しているもの(111)、横方向のケズリ調整を施すもの(92・96)、ナデ調整で仕上げるもの(82・91)がある。	○在地産6例(82・91・92・96・119)。 ○6例とも煤が付着。 ○(111)は口径・傾きともに図上復元。
	D	○口縁部は丸味をもち、口縁部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○推定口径16cmのものと26cmのものがある。	○内外面ともにヨコナデ調整を施しているが、突帯以下に横方向のミガキ調整を加えるものが1例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産2例。 ○1例には煤が認められる。
	E	88 ○口縁部は直線的に外上方へのび、端部はシャープな面をなす。 ○外面口縁部直下の刻み目のない突帯をめぐらせている。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○黒色磨研土器。 ○突帯は断面が三角形を呈する。 ○口縁部内面に沈線をめぐらせている。	○他地域産1例(88)。
	底部	104 106 ○尖り気味の丸底のもの(104)が1例、平底のもの(106)が2例ある。 ○(104)は砲弾形の体部をもつ深鉢の底部になると考えられる。(106)は平坦な底部からはほぼ直角に体部が立ち上がっている。器壁は丸底のものより薄く、浅鉢の底部になると思われる。 ○(106)は底部径7.5cm。	○丸底のもの(104)は外面を下方から上方に向かう縦方向のケズリ調整、内面はナデ調整を施している。 ○平底のもの(106)は内面ナデ調整、側面はミガキ調整、底面はいくつかに分割して、ケズリ調整を施している。 ○(4)は断面に粘土紐の縦じまが確認できる。粘土紐の幅は1.7cmから3.3cm。	○在地産2例(104・106)他地域産1例。 ○(104)は外面部分的に煤が付着し、二次焼成痕が見られる。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土）

深鉢	A	133 136 137 139 142 144 ○口縁部が長く、比較的強く外反し、肩部に明瞭な稜をもつもの(133・136)と、口縁部がゆるやかに外反し、口縁部と体部の境の屈曲も弱く、肩部の稜もあまいもの(137・144)や、稜をもたずなだらかになるもの(139・142)がある。 ○口径は11cmから16cmの小型のもの、22cmから33cmのものがある。また40cm前後の大型のものもある。(133)は31.5cm。	○口縁部は内外面ともにナデ調整およびヨコナデ調整で仕上げるものが主体を占める。また、口縁部外面はナデ調整で、内面を横方向にケズリ調整するもの、内外面ともに横方向にミガキ調整するもの(139・142)、内面のみミガキ調整するものがある。他に、外面は横方向の二枚貝調整で内面は指調整を施しており指頭圧痕が明瞭に残るもの(144)がある。 ○体部外面は肩部付近を横方向にケズリ調整するもの(136・137・144)、また肩部付近を横方向に、以下を縦方向にケズリ調整するもの(133)がある。体部内面はナデ調整で仕上げるものが多いが、横方向の板ナデ調整を施しているもの(144)がある。	○在地産62例(133・136・137・142・144)、他地域産8例(139)。 ○31例に煤が認められるが、小片のため不明なものが多い。
	B	116 119 130 135 138 138 141 ○口縁部はゆるやかに外反する。 ○口縁部に刻み目をもつ。 ○推定口径18cmから28cm。	○内外面ともにヨコナデ調整を施すもの(119・130・138・141)が5例、外面は二枚貝調整、内面はナデ調整のもの(116・135)が2例ある。 ○刻み目はヘラ状の原体によるものが一般的だが、半截竹管状の原体によるもの(119)が1例ある。D字形を呈するものが多い。	○在地産5例(116・119・130・135・138)、他地域産2例(141)。 ○3例に煤が認められる。 ○(116・119・130)は口径ともに図上復元。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	H	124 ○口縁部は、直線的に直上にのびるもの(124・143・147)と、外反して外上にひらくもの(140・151・152)がある。 140 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。 147 ○肩部は稜をもたずなめらかに口縁部から体部に移行するもの(10・29)がある。 151 ○口径は22cmから40cmに近いものまでであるが30cm前後のものが多い。 152	○口縁部は内外面ともにナデ調整を施し、端部にヨコナデ調整を加えるもの()が多い。内面に横方向のミガキ調整を加えるもの()、内面に横方向のケズリ調整を施した後、内外面に横方向のミガキ調整を加えるもの()があるが、風化を受けており調整の不明なもの()も多い ○体部は外面に横方向のケズリ調整、内面にヨコナデ調整を施しているもの(152)がある。 ○突帯は断面が低い三角形を呈するもの(124・152)と台形を呈するもの(143)があるが三角形を呈するものが多い。	○在地産10例(143・147・151・152)他地域産1例(124)。 ○7例に煤が認められる(124)は体部外面に薄く煤が付着している。 ○(124)は口径・傾きともに図上復元。
	D	148 ○口縁部は外反し、端部はヘラ状のもので断続的に面取りを行っている。 ○外面口縁部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。 ○推定口径35cm。	○内外面ともにナデ調整を施し、端部にヨコナデ調整を加えている。 ○突帯は断面が台形を呈する。刻み目はヘラ状の原体によるもので○字形を呈する。	○他地域産1例(148)。
	C	118 ○口縁部はゆるやかに外反し、外上方にのびるもの(118・122・146・150)とんど直上に立ち上がるもの(155・157)がある。口縁部と体部の境の屈曲はゆるやかであるが、明瞭な稜をもつ。 122 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 146 ○口径は18cmから36cm前後のものがある。(118)は25.3cm、(122)は36.0cm 150 155 157	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施しているもの(118・150)が主体を占める。他に、口縁部内面に横方向の粗いミガキ調整を加えるもの(122)、外面に横方向のミガキ調整を加えるもの(146)が3例ある。また内面は横方向のケズリ調整で、外面が横方向のミガキ調整のものが1例内面横方向のケズリ調整で、外面はヨコナデ調整のものが1例ある。 ○体部は肩部付近を外面横方向のケズリ調整、内面ナデ調整するもの(122)があるが、多くは体部を欠損しているため不明である。 ○突帯は断面が台形を呈するもの(122・150・157)と、三角形を呈するもの(118・146・155)がある。刻み目はすべてヘラ状の原体によるもので、D字形の物が多い。	○在地産29例(118・122・146・150・157)、他地域産3例(64)。 ○17例に煤が認められるが、小片のため不明が多い。(118・122)は外面に煤が付着。
	E	126 ○体部から口縁部にかけて内傾している。 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○推定口径は18.1cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。	○在地産(126)。
	F ₁	127 ○口縁部から体部にかけてゆるやかに内湾し、口縁部が内傾するもの(127)と、直線的に直上にのびるもの、また、外上方にのびるものがある。縁端部は面をもつもの(127)、丸味をもつもの、器壁が薄くなり尖り気味になるものがある。 ○口径は20cmから30cmのものがある。(127)は28.7cm。	○外面は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整で、口縁端部にヨコナデ調整を施しているものが多いが、内外面ともに横方向のケズリ調整で仕上げてるものが1例ある。(127)は口縁部外面を横方向に、体部外面を下方から上方に向かう縦方向のケズリ調整を施し、内面はナデ調整で仕上げている。	○在地産10例(127)、他地産2例。 ○11例に煤が認められる。(127)は外面に煤が付
	F ₂	145 ○口縁部から体部にかけてゆるやかに内湾する。口縁端部は丸味をもつもの(158)と、面をなすもの(145)があり、刻み目を施している。 158 ○(145)は推定口径23cm。	○外面は時計廻りの横方向にケズリ調整、内面はナデ調整で、口縁端部にヨコナデ調整を施している。 ○刻み目はヘラ状の原体により、横長の○字形を呈する。	○在地産2例(145・158)。 ○2例とも煤が認められる。
	G ₂	156 ○体部から口縁部にかけて直線的に上方へのびる。 ○外面口縁端部の直下に突帯をもつ。 ○推定口径(156)は38cm。他に29cmのものがある。	○口縁端部から内面にかけてヨコナデ調整、外面は突帯以下を時計廻りの横方向にケズリ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産2例(156)。 ○2例とも煤が認められる。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	G ₁	149 165 ○体部から口縁部にかけて直線的に上方へのびるもの(165)と、やや内弯しながら上方へのび、端部が外反気味になるもの(149)がある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をもつ。 ○推定口径(165)は18cm。	○口縁端部および突帯はヨコナデ調整、以下を外面は横方向にケズリ調整を施している。内面は横方向のミガキ調整のもの(165)と、ナデ調整のもの(149)がある。 ○突帯は断面が台形を呈し、ヘラ状の原体によるD字形の刻み目を施している。	○在地産2例(149・165)。 2例とも煤が認められる。
	G ₁	154 ○体部から口縁部にかけて直線的に上方へのびる。口縁端部は丸味をもつ ○口縁端部に刻み目をもち、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯がめぐる。 ○推定口径32cm。	○口縁端部および突帯はヨコナデ調整、以下を外面は横方向のケズリ調整内面はヨコナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈する。刻み目はヘラ状の原体によるもので○字形を呈する。	○在地産1例(154)。
	G ₁	171 ○体部から口縁部にかけて内弯するもの(171)と直線的に上方へのびるものがある。 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。 ○口径は13cmから23cmのものがある。(171)は推定口径13cm。	○口縁端部および突帯はヨコナデ調整、以下を外面は横方向のケズリ調整で、内面はナデ調整のもの(171)と、横方向のケズリ調整のものがある ○突帯は断面が台形を呈する。刻み目はヘラ状の原体により、D字形を呈するものと○字形を呈するものがあるが、(171)は原体が棒状のものである可能性がある。	○在地産5例(171)。 ○5例とも煤が認められる。
	体I部	161 ○体部に2つの段をもつ。上下の段とも外面に稜をなす。	○外面は口縁部から下段部まで横方向のミガキ調整、下段部以下はナデ調整を施していると思われるが、風化の為明瞭ではない。内面は全体に横方向のミガキ調整で仕上げている。	○在地産1例(161)。 ○外面に煤が付着している。
	体部	168 ○外方にひらく体部から内方へ屈曲し、上方へのびる。 ○肩部と思われる屈曲部に突帯のない刻み目をめぐらせている。	○外面体部上方と内面はヨコナデ調整。 ○外面体部下方は横方向のケズリ調整を施している。	○在地産(168)。
浅鉢	A	134 174 ○口縁部は短く外反し、端部内面は肥厚する。頸部および肩部が屈曲して稜をなす。 ○推定口径(134)は26.7cm。	○口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面は横方向のケズリ調整を施し、内面は口縁部から体部にかけて横方向の巻貝調整を施しているもの(134)、口縁部外面はヨコナデ調整で内面に横方向のミガキ調整を加えるもの(174)、また内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げているものがある。 ○突起(P-1)をもつもの(134)がある。	○在地産3例(134・174)。 ○(134)は口径・傾きともに図上復元。
	B	170 ○口縁部は短く外反し、端部内面は肥厚しており段をもつ。また、口縁部が直上に立ち上がるもの(170)がある。 ○推定口径26cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。また、体部内面に横方向の2枚貝調整を施しているもの(170)が1例ある。	○在地産4例、他地域産1例(170)。
	C ₂	 ○直線的に上方へのびる口縁部。	○内外面ともに横方向のミガキ調整。	○在地産1例。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	C ₁	120 ○体部から口縁部にかけて、内湾しながら上方にのびるもの(169・167)、内湾しながら外上方にひろくもの(128)、直線的に外上方にひろくもの(121・123・125・153・166)、内傾気味になるもの(120)がある。(125)は内面の器壁が薄くなり、端部内面に内傾する面をもつ。 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 ○口径10cmから26cmのものがある。18cm前後のものが多い。(120)は10cm、(121)は15.5cm、(123)は14.7cm、(125)は19.3cm、(128)は17.8cm。	○口縁端部はヨコナデ調整。以下は内外面ともにナデ調整するもの(120・123・128・153・166)が11例ある。また、外面は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整するもの(167・169)が9例あり、そのうち外面に軽く横方向のミガキ調整を加えるものが2例ある。また、外面縦方向のケズリ調整、内面ナデ調整のもの(125)が1例、外面口縁部を横方向に、体部を縦方向にケズリ調整し、体部内面を横方向の板ナデ調整した後、一部にナデ調整を加えるもの(121)が1例、外面はナデ調整、内面が板ナデ調整のものが1例、外面ナデ調整、内面横方向のミガキ調整のものが1例、内外面ともに粗いミガキ調整のものが1例、内外面ともに横方向のケズリ調整のものが1例ある。 ○口縁部外面に沈線をめぐらせているもの(120)が1例、また、原体は不明だが平行線状の押し引きを加えるもの(167)が1例ある。他に口縁端面に沈線を施しているもの(166)が1例ある。	○在地産27例(120・121・123・125・128・153・166・167・169)。他地域産1例。 ○16例に煤が認められる。
	C ₁	115 ○体部から口縁部にかけて内湾しながら上方へのびる。 173 ○口縁端部に刻み目をもつ。 ○(115)は推定口径21.6cm。(173)は6cm。	○口縁端部はヨコナデ調整。以下を外面は口縁部付近を横方向にケズリ調整するもの(115)が2例あり、内面はナデ調整を施している。(115)は体部まで残っており、体部外面は縦方向のケズリ調整を施している。また内外面ともにナデ調整で仕上げているもの(173)が1例ある。 ○刻み目はヘラ状の原体による。 ○外面にヘラ状のものによる線刻をもつもの(173)がある。 ○(115)は内面に粘土紐の継ぎ目痕を残している。粘土紐の幅は1.3~1.8cm。	○在地産3例(115・173)。 ○1例には煤が認められる。 ○(115)は口径・傾きともに図上復元。
	D	○口縁部はやや内湾気味で、端部外面がやや肥厚するものがある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産1例、他地域産1例。
	D	159 ○体部から口縁部にかけて直線的に外上方へひろき、端部は面をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。 ○推定口径17cm。	○口縁端部にヨコナデ調整を施し、外面は横方向のミガキ調整、内面はナデ調整で仕上げている。 ○突帯は断面が台形を呈し、ヘラ状の原体によるV字形の刻み目を施している。	○在地産1例(159)。
	E	160 ○口縁部はゆるやかに外反する。 162 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 172 175	○内外面ともに横方向のミガキ調整のもの(160・162・175)が12例、内外面ともにヨコナデ調整のもの(45)が9例ある。他に、口縁端部および突帯はヨコナデ調整、以下を外面は横方向のケズリ調整を施し、内面はヨコナデ調整するものが1例、内面にミガキ調整を加えるものが1例ある。 ○黒色磨研土器が4例ある。 ○突起(P-7)をもつもの(172)が1例ある。 ○口縁端部内面にも突帯を施しているものは4例あり、そのうち突起(P-6)をもつもの(160)が1例ある。 ○口縁端部内面に沈線をめぐらせているもの(175)は3例ある。	○在地産20例(160・162・172・175)他地域産3例。 ○6例には外面に煤が認められる。
深鉢	その他	163 ○ゆるやかに外反する口縁部。端部は面をもつものが4例、丸味をもつものが1例ある。 ○口径27cmから30cm前後のものがある。(163)は推定口径30cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○黒色磨研土器が1例見られる。 ○口縁端部内面に沈線をもつものが2例ある。	○在地産4例(163)、他地域産1例。 ○煤の認められるものが1例ある。

縄文Ⅲ（黒灰色粘土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	I	117 ○口縁部は長くゆるやかに外反し、端部は丸味をもつ。 ○口径は25.0cm。	○口縁部外面は横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整、体部外面は縦方向のケズリ調整を施し、内面は全体に横方向のミガキ調整で仕上げている。 ○黒色磨研土器。 ○口縁端部内面に沈線をめぐらせ、突起（P-5）をつけている。	○在地産1例（117）。
	H	164 ○直立する口縁部。端部は部分的に面をもつ。体部と口縁部の境は屈曲し外面に稜をもつ。 ○推定口径11cm。	○口縁部内外面および体部外面は横方向のミガキ調整、体部内面はナデ調整を施している。 ○口縁部内外面に沈線をもつ。	○在地産1例（164）。
底部		129 131 132 ○丸底を呈するもの（129）が5例、底を呈するもの（131・132）が3例ある。 ○凹底を呈するものには、丸底状の底面を凹ませたもの（132）と、丸底の底面に粘土紐を輪にして張りつけたもの（131）がある。 ○（129）は深鉢の低部、（131・132）は浅鉢の底部になると考えられる。	○外面は下方から上方に向かう縦方向のケズリ調整を施し、外底面および内面をナデ調整しているもの（129・132）と、内外面ともにミガキ調整で仕上げているもの（131）がある。	○在地産8例（129・131・132）。 ○（129・132）は底面を除く外面全体に煤が付着している。

縄文Ⅲ（黒灰色砂質下層）

深鉢	A	178 179 180 ○口縁部は短く、直線的なものが多い。肩部の稜がなくなり、なめらかに口縁部から体部へ移行するもの（180）がある。 ○推定口径15cmから28cm。	○口縁部は内外面ともにナデ調整およびヨコナデ調整を施している。体部まで残存するもの（180）は1例しかないが内外面ともに横方向のケズリ調整を施している。	○在地産16例（178・179・180）、他地域産1例。 ○4例に煤が認められる。
	B	184 185 190 ○口縁部はゆるやかに外反しながらほぼ直上へのびるものと、外上方へのびるもの（184・185・190）がある。 ○口縁端部に刻み目をつけている。 ○推定口径18cmから20cmのものがある。	○口縁部は端部にヨコナデ調整、以下をナデ調整するもの（184・185・190）が3例ある。また、口縁端部および内面をヨコナデ調整、外面は横方向にケズリ調整した後、ナデ調整を加えるものが1例ある。 ○刻み目はヘラ状の原体による。	○在地産3例（184・185・190）、他地域産1例。 ○1例には煤が認められる。
	H	182 ○口縁部は直線的に上方へのびる。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。 ○推定口径28cm。	○口縁部は内外面ともにナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈するが（182）は特に低い。	○在地産1例、他地域産1例（182）。 ○2例とも外面に煤が認められる。
	D	176 ○口縁部はやや外反し、端部は面をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目突帯をめぐらせている。	○口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈し、ヘラ状の原体によるD字形の刻み目をつけている。	○在地産1例（176）。
	C	177 181 183 187 192 193 197 198 199 397 ○口縁部はゆるやかに外反するもの（177・183・187・199・397）と、直線的に上方へのびるもの（181・192・193・197・198）がある。 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。	○内外面ともにヨコナデ調整するものが一般的だが、内面を横方向にケズリ調整するもの（181・192・199）が3例ある。また、外面は二枚貝調整、内面はナデ調整を施すもの（397）が1例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈するものと、台形を呈するものがほぼ同数見られる。刻み目はヘラ状の原体によるものがほとんどであるが、二枚貝によるもの（397）も3例見られる。突帯よりも口縁端部の方が浅く軽い刻み目を施す傾向がある。	○在地産43例（177・181・183・187・192・193・197・198・199・397）、他地域産1例。 ○16例に煤が認められるが、小片のため不明なものも多い。 ○東海系が1例見られる（397）。

縄文Ⅲ（黒灰色砂質下層）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	E	191 ○体部から口縁部にかけて内傾しているもの(196・398)が2例、体部と口縁部の境が屈曲しているもの(191)が1例ある。 ○口縁部と体部の境に突帯をめぐらせているが、刻み目をもつものが2例(191・398)、刻み目のないものが1例(196)ある。	○内外面ともにヨコナデ調整を施しているもの(196)と、外面は突帯より上にナデ調整、突帯以下に横方向のケズリ調整、内面をナデ調整するもの(191・398)が2例ある。 ○突帯は断面が台形を呈する。 ○刻み目はヘラ状の原体によるD字形を呈するもの(191)と、二枚貝の押し引きによるもの(398)がある。	○在地産2例(191・196)、他地域産1例(398)。 ○東海系が1例見られる(398)。
	F ₁	189 ○体部から口縁部にかけてほとんど膨らみをもたずに上方へびる。 ○推定口径14cm。	○外面は横方向のケズリ調整の後、ナデ調整を施し、内面はナデ調整を行い口縁端部にヨコナデ調整を加えている。	○在地産1例(189)。 ○外面に煤が認められる。
	G ₁	188 ○口縁部は直線的なもの(194・195・200・203・204)、内湾するもの(188)、外反気味になるもの(202・206)がある。 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。 ○口径18cm前後から40cm近いものがある。	○突帯および口縁端部から体部内面にかけてヨコナデ調整、外面は突帯以下を水平から左上がりの横方向にケズリ調整している。 ○突帯は断面が三角形を呈するものと、台形を呈するものがある。 ○刻み目はヘラ状の原体によるもので、D字形を呈するものが多い。	○在地産7例(188・194・195・202・203・204・206)他地域産1例(200)。 ○6例に煤が認められる。
浅鉢	A	209 ○口縁部が短く外反し、端部内面が肥厚して端部は面をもつ。頸部と体部の境が屈曲し、外面は稜をなす。 210 211 215 ○推定口径24cmのものがある。	○内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げるもの(209・210・215)と、内外面にヨコナデ調整を施すもの(211)がある。	○在地産4例(209・210・211・215)。 ○(211)は体部外面に煤が認められる。
	C ₁	201 ○内湾する体部から単純に続く口縁部が、ほぼ直上にのびるもの(208・216・223)と、外上方にのびるもの(205・207・214・218・220)がある。口縁端部は丸味をもつものが多いが、端部の器壁が薄くなり尖り気味になるもの(214)もある。 216 218 ○推定口径10cmから20cm。 220 223	○口縁端部はヨコナデ調整。以下を内外面ともにナデ調整を施しているもの(201・208・223・214)が4例、内外面ともに横方向のケズリ調整の後、粗い横方向のミガキ調整を加えるもの(205・220)が2例、外面は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整で仕上げて仕上げるものが3例ある。その他外面横方向のケズリ調整の後、粗い横方向のミガキ調整、内面横方向のケズリ調整の後、ナデ調整を施しているもの(216)、また、外面横方向のケズリ調整の後、内外面ともにナデ調整で仕上げて仕上げるもの(218)が各1例ずつある。	○在地産12例(201・205・207・208・214・216・218・220・223)。 ○4例に煤が認められる。
	C ₂	186 ○ほぼ直上にのびる。 ○口縁部の端部に刻み目をつけている。	○内外面ともにナデ調整を施し、端部にヨコナデ調整を加えている。 ○刻み目はヘラ状の原体によるもので横長のO字形を呈する。	○在地産1例(186)。
	D	217 ○口縁部が内湾する体部から単純に続くもの(217・222・226・230・234)と、やや外反気味になるもの(219・224・225)がある。 224 ○口径15cm前後から30cm近いものがある。 225 226 230 234	○口縁端部および内面全体にヨコナデ調整、外面突帯以下に横方向のケズリ調整を行うもの(217・219・222・226)が4例、内外面ともにヨコナデ調整のもの(224・225・230)が4例、横方向のミガキ調整のもの(234)が1例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈するものが多い。	○在地産8例(222・234・225・219・217・210)、他地域産1例。 ○3例に煤が見られる。

縄文Ⅲ（黒灰色砂質下層）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	E	212 ○口縁部は外上方にのびるもの(213・229・232・233)ほぼ直上にのびるもの(212・221)がある。口縁端部の器壁は口縁部全体よりやや薄くなるが、同程度の厚みであるのが一般的だが、外方に肥厚し他の部分より厚みをもつもの(221・213)がある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。	○口縁部内外面ともに横方向のミガキ調整するもの(212・229・232・233)が8例、ヨコナデ調整するものが3例ある。他に、口縁端部および外面は横方向のミガキ調整、内面はナデ調整するもの(213)、また、外面はヨコナデ調整で、内面は横方向のミガキ調整を施すもの(221)がある。 ○突帯は断面が三角形を呈するものが多い。内面にも突帯をもつもの(233・232)が2例ある。 ○口縁端部内面に沈線をもつもの(229)が4例ある。	○在地産10例(212・229・221・213・233)、他地域産3例(232)。 ○5例に煤が認められる
	H	228 ○口縁部は外反し、端部は面をもつ。 231 ○推定口径25cmのもの(228)がある。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁端部内面に沈線をめぐらせているもの(228・231)が3例、口縁端部の内外面に沈線を加えているものが1例ある。	○在地産1例(231)、他地域産3例(228)。
蓋		○円形で中高の笠形を呈する。端部は丸味をもつ。 ○周縁に穿孔をもつ。2孔1対で相対する2方に認められるものがある。 ○口径7.8cmと6.7cmのものがある。	○内外面ともにナデ調整を施している。 ○穿孔は焼成前に内面より行っている。	○在地産2例。
壺	B	227 ○口縁部はやや外反する。端部は内傾する面をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○推定口径10cm。	○内外面ともにヨコナデ調整を施した後、外面に横方向のミガキ調整を加えている。 ○突帯は断面が台形を呈する。	○在地産1例(227)。

縄文Ⅱ（溝33）

深鉢	A	240 ○口縁部は短く直線的で、直上にのびるものが多い。口縁端部は面をもつもの(240)が7例、丸味をもつものが8例ある。 ○口縁部と体部の境の屈曲はゆるやかになり、稜もあまくなる。 ○推定口径10cmから30cm前後のものがある。(240)は口径15.5cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○(240)は口縁部内面に板状の工具痕が残る。	○在地産14例(240)、他地域産1例。 ○12例に煤が認められる(240)は外面全体に煤付着。
	B	244 ○口縁部は短くゆるやかに外反する。端部付近でやや屈曲して上方に立ち上がるものが1例、端部内面が肥厚するものが1例ある。 ○口縁端部は面をもち刻み目をつけている。 ○口縁部と体部の境の屈曲はゆるやかになり、稜もあまくなる。 ○(244)は口径16.0cm。他に推定口径22cmのものがある。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○刻み目はへら状の原体によるもので、いずれも逆時計廻りに施している。	○在地産3例(244)。 ○3例とも煤が認められる。(244)は体部外面に煤が付着する。 ○(244)は小片のため傾きは図上復元。

縄文Ⅱ（溝33）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	H 235 237 269	<p>○口縁部はゆるやかに外反し、端部は面をもつもの(235・269)が2例、丸味をもつもの(235)が1例ある。</p> <p>○(235)は口径と器高がほぼ同じ位で波状口縁を呈する。体部は半球形状を呈し、口縁部から体部へなだらかに移行し、肩部にわずかな稜をもつ。</p> <p>○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。</p> <p>○口径(235)は15.5cm、(237)は22.6cm、(269)は推定口径32cm。</p>	<p>○口縁部は内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(235)と、外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整で仕上げるもの(237・269)がある。(237)は内面のナデ調整の前に、横方向に二枚貝調整を行っている。</p> <p>○体部外面は底部から上方に向かって縦方向にケズリ調整した後、体部に縦方向のミガキ調整を加えており、体部内面は横方向のミガキ調整を施し、底部内面もミガキ調整で仕上げているもの(235)がある。</p> <p>○突帯は断面が三角形を呈するもの(235・269)と、台形を呈するもの(237)がある。(237)は他のものより少し低い位置に突帯をつけている。</p> <p>○(235)は口縁端部内面に沈線をめぐらせている。</p>	<p>○在地産3例(235・237・267)。</p> <p>○2例は煤が認められる。</p>
	D 239 243	<p>○ゆるやかに外反する頸部から、直線的に外上方へのびる口縁部をもつ。口縁端部は面をもつもの(243)と丸味をもつもの(239)がある。</p> <p>○外面口縁端部の直下に刻み目突帯をめぐらせている。</p> <p>○肩部の稜はあまくなる。体部は丸味をもち口径より腹径の方が大きい。</p> <p>○口径(239)は25.3cm、(243)は32.9cm。</p>	<p>○口縁部は、外面に横方向の二枚貝調整、内面にナデ調整を施すもの(239)と、外面に横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整を加え、内面は丁寧なナデ調整で仕上げるもの(243)がある。</p> <p>○体部は外面横方向のケズリ調整のもの(239)と、横方向の二枚貝調整を施すもの(243)がある。体部内面はナデ調整を施しているが、肩部付近に二枚貝調整の残るもの(239)がある。</p> <p>○突帯は断面が三角形を呈する。刻み目はヘラ状の原体によるもので、D字形を呈する。</p>	<p>○在地産3例(239・243)。</p>
	C 246 247 249 250 256 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 273 274	<p>○外反する頸部から口縁部が直線的に直上に立ち上がるもの(250・256・264・265)、直線的に外上方へのびるもの(246・249・261・266)、外反しながら外上方へのびるもの(247・259・260・262・263・273)、外反しながらほぼ直上にのびるもの(267・268・274)がある。</p> <p>○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目突帯をめぐらせている。</p> <p>○肩部の稜が明瞭なもの(249・250・256・268)と、稜をもたずなだらかに体部から口縁部へ移行するもの(246・259・265)がある。</p> <p>○口径は18cmから45.5cmのものがあるが、20cmから30cmのものが多い。(246)は19.8cm、(247)は23.5cm、(249)は45.5cm、(250)は45.0cm、(256)33.8cm、(273)は31.8cm、(274)は20.3cm。</p>	<p>○口縁部は、端部にヨコナデ調整を施し、内外面をナデ調整するものが多いが、内外面とも丁寧なヨコナデ調整を施すもの(250・256)、外面はナデ調整で内面にミガキ調整を加えるもの(264)、外面は横方向の板ナデで、内面はナデ調整するもの(265)がある。また、外面に横方向の二枚貝調整を施しているものには、内面をナデ調整あるいはヨコナデ調整で仕上げるもの(246・261)と、横方向に巻貝調整を施し、上半部に横方向のナデ調整を加えるもの(260)がある。</p> <p>○体部外面は肩部付近を横方向に、以下を水平から左上がりの縦方向にケズリ調整するもの(249・250)と、外面全体を縦位方向にケズリ調整するもの(274)がある。内面はナデ調整で仕上げているもの(249・274)と、横方向の板ナデ調整を施すもの(250)がある。</p> <p>○突帯は断面が三角形を呈するものと台形を呈するものがある。刻み目はヘラ状の原体によりD字形とO字形を呈するもの多い他に、二枚貝の押し引きによる刻み目を施すもの(260・265)もある。(273)は突帯の刻目の施し方が粗雑で刻み目のついていない部分がある。</p> <p>○(256)は口縁部外面に山形の沈線文を施している。</p> <p>○内面に粘土紐の織目痕の残るもの(247・249)がある。粘土紐の幅は1cm程度のものもあるが、1.5cm～2cmのものが多い。</p>	<p>○在地産48例(247・249・250・256・259・268・273)、他地域産5例(246・274)。</p> <p>○27例に煤が認められる。</p>

縄文Ⅱ（溝33）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	E	236 280 ○口縁部はほとんど外反せず、ほぼ直上へのび、端部は面をもつ。 ○外面口縁端部の直下と、口縁部と体部の境に刻み目のある突帯をめぐらせている。 ○(236)は口径27.1cm。	○口縁部は内外面ともにナデ調整を施している。 ○体部外面は左上がりの斜方向のケズリ調整を施すもの(236)と、横方向のケズリ調整を施すもの(280)がある体部内面はナデ調整で仕上げているが、肩部付近に横方向の板ナデ調整の残るもの(2)がある。 ○突帯は断面が三角形を呈する。刻み目はヘラ状の原体により、やや浅めのD字形を呈する。 ○(236)は内面に粘土紐の継ぎ目痕が残る。粘土紐の幅は1.5～2cm。	○在地産2例(236・280)。 ○(236)は外面肩部の突帯以下に煤が付着している。
	F ₁	281 ○体部から口縁部にかけてやや直線的に上方へのびる。口縁端部は丸味をもつ。 ○推定口径21cm。	○口縁端部にヨコナデ調整を施し、以下を外面は時計廻りの横方向にケズリ調整しており、内面はナデ調整で仕上げている。	○在地産1例(281)。 ○煤が認められる。
	G ₂	○口縁部は直線的で、口縁端部は面をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○推定口径26cm。	○口縁端部および内面はヨコナデ調整、外面は横方向にケズリ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○他地域産1例。 ○外面に煤が認められる。
	G ₁	248 271 ○口縁部はやや内弯している。 ○体部は砲弾形で、底部が丸底を呈するもの(248)がある。 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目突帯をめぐらせている。 ○口径は24cmから31cmのものがある。29cm前後のものが多い。(248)は31.2cm。	○口縁端部はヨコナデ調整、口縁部外面は時計廻りの横方向のケズリ調整を施し、口縁部内面は二枚貝調整の後、ナデ調整を加えているもの(248・271)が3例ある。 ○体部外面は下方から上方に向かう縦方向のケズリ調整を施し、体部内面はナデ調整で仕上げているもの(248)がある。 ○(248)の外面調整は繊維束状の原体によるものである。 ○突帯は断面が三角形を呈するもの(271)と、台形を呈するもの(248)があるが台形を呈するものが多い。刻み目はヘラ状の原体で施しており、D字形を呈するものが多い。 ○(248)は内外面に粘土紐の継ぎ目痕が残る。粘土紐の幅は1.0～2.5cmのものがあるが、1.5～2.0cmのものが多い。	○在地産6例(248・291)。 ○5例に煤が認められる(248)は外面口縁部から体部中位にかけて煤が付着するが、底部は煤の付着が見られない。
浅鉢	C ₂	245 ○体部から口縁部にかけてほとんど膨らみをもたず、直線的に上方へのびる。口縁端部は薄くつまみ出している。 ○口径19cm。	○口縁部内外面および体部内面は横方向のミガキ調整、体部外面は縦方向のミガキ調整を施している。 ○口縁部外面に棒状の原体による1条の沈線をめぐらせている。	○他地域産1例(245)。
	C ₁	238 270 275 ○口縁部はゆるやかに内弯している。 ○口径は13cmから20cmのものがあり、18cm前後のものが多いが、40cm近くあるもの(275)もある。(238)は21.7cm。	○口縁部内外面および体部内面はナデ調整を施し、体部外面は横方向のケズリ調整で仕上げているもの(238)が多い。他に、内外面ともに横方向のケズリ調整を施しているもの(270)、外面はナデ調整を施し、内面は横方向の板ナデ調整を施しているもの(275)、また、外面を縦方向にケズリ調整しているものも1例ある。	○在地産18例(238・270・275)、他地域産1例。 ○14例に煤が認められる小片のため不明なものも多い。
	C ₂	○口縁部はゆるやかに内弯しており、端部に刻み目をもつ。	○内外面ともにナデ調整を施し、口縁端部にナデ調整を加えている。 ○刻み目はヘラ状の原体によるものでO字形を呈する。	○在地産1例。 ○煤が認められる。

縄文Ⅱ（溝33）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	D	272 ○内湾する体部から口縁部が単純に内湾しながら立ち上がるもの(272・276)と、端部がわずかに外反するもの(278)がある。 ○口縁端部は面をなすものが多く、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。 ○推定口径(278)は11cm、(276)は30cm、(272)は34cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、体部外面は横方向のケズリ調整、体部内面はナデ調整で仕上げるもの(276)が多い。他に、内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(278)、内外面ともに横方向のケズリ調整を施した後、ヨコナデ調整を加えるもの(272)がある。 ○突帯は断面が台形を呈するもの(272・276)と、三角形を呈するもの(278)がある。	○在地産8例(272・276・278)他地域産1例。 ○4例に煤が認められる。 ○(278)は外面に赤色顔料が残る。
	E	257 ○口縁部は外反しながら上方へのび、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯がめぐる。 ○肩部は強く張り出して稜をなす。体部は内湾するもの(257)と、外反気味になるもの(258)がある。 ○口径は20cmから34cmのものがあり、30cm前後のものが多い。(257)は26.5cm、(258)は33.8cm。	○口縁部は内外面ともにナデ調整およびヨコナデ調整で仕上げるものが多い、また、内外面ともに横方向のミガキ調整を加えるもの(257・258)が4例、外面のみミガキ調整を施すものが1例ある。 ○体部外面は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整で仕上げている。 ○(257)は内面のミガキ調整およびナデ調整の前に、全面に横方向の巻貝調整を施している。 ○突帯は断面が台形を呈するものが多い。また、内面にも突帯をめぐらし突起(P-6)をつけ、鋭く張り出した肩部に刻み目を施しているもの(258)がある。刻み目はヘラ状の原体によるものでD字形を呈する。	○在地産6例(257・258)他地域産4例。 ○4例に煤が認められる。(258)は体部の一部に煤が付着している。 ○(258)は内外面に赤色顔料を塗布している。
		277	○外面は横方向のケズリ調整を施し、二枚貝による刻み目がある。 ○内面は二枚貝による横方向のケズリ調整を施している。	○在地産。
		279	○外面は横方向のケズリ調整を施し、半截竹管による刻み目がある。 ○内面は横方向のナデ調整を施している。	○在地産。
	壺	A	241 ○口縁部は直線的に、やや内傾しながら上方へのびる。口縁端部の器壁はやや薄くなり、尖り気味になる。 ○口径は11cm。	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。
B		242 ○口縁部は外反する。端部は丸味をもつが、内端部は角張っている。 ○口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。 ○口径は12.4cm。	○口縁部は内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げている。 ○突帯は断面が台形を呈する。	○在地産1例。
底部	252	○平底を呈するもの(253)が1例、丸底を呈するもの(252・254・255)が3例ある。	○(253)は丸底の外底面に輪にした粘土紐を貼りつけて平底をつくり、内外面にナデ調整を施している。	○在地産3例(252・254・255)、他地域産1例(253)。
	254	○(253)は浅鉢の底部と考えられる。	○丸底のものは内外面ともにナデ調整を施しているもの(252・254)と、外面に縦方向のケズリ調整、内面にはナデ調整を施しているもの(255)がある。	○(252・254・255)は外面に煤が認められる。
	255	○丸底のものは、弧を描くように丸くなるもの(254)と、やや尖り気味になるもの(252・255)がある。		
蓋	251	○半球形を呈する器形をもつ。器壁は厚いが、口縁端部に向かって薄くなり端部は尖り気味になる。	○内外面ともにナデ調整を施している。	○在地産1例。

縄文Ⅱ（黒灰色砂質土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	A	284 ○口縁部が長く外反が強く、肩部の稜の明瞭なものと、口縁部が比較的短く外反がゆるやかで、肩部の稜もあまいもの(284・287・310・311・312)がある部は面をもつものが主体を占める。 ○口径は12cm前後のものから38cm前後のものがある。25cm前後のものが多い。	○口縁部は内外面ともにナデ調整およびヨコナデ調整を施している。中には内面に横方向のケズリ調整を施しているものが1例、内面口縁端部に横方向のミガキ調整を加えるものが1例、外面に横方向のケズリ調整を施すものが1例ある。他に、口縁端部にヨコナデ調整、外面横方向のミガキ調整、内面横方向のケズリ調整の後、粗いミガキ調整を加えているもの(311)がある。 ○体部は外面横方向のケズリ調整、内面ナデ調整するもの(284・310・312)が7例あり、内面に板ナデ調整を施すものも1例ある。また、体部外面は横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整を加え、内面肩部付近に板ナデ調整を施すものも1例見られる。他に、口縁部にヨコナデ調整の後横方向にミガキ調整を加え、体部外面は縦方向にケズリ調整を施しているもの(287)が1例ある。 ○頸部外面にヘラ描き沈線を加えるものがあり、1条のものと2条のもの(310)がある。また、肩部に半截竹管状のもので押し引きを施しているものがある。	○在地産67例(284・287・310・311)、他地域産8例(312) ○30例に煤が認められるが、小片が多く不明なものも多い。
	B	289 ○口縁部が強く外反するもの(309・313)、ゆるやかに外反するもの(314)、ほとんど外反せず直線的に上方へのびるもの(289・323・314・323・399)がある。 ○口縁端部に刻み目をもつ。 ○口径は15cmから33cm前後のものがある。	○口縁部内面ともにヨコナデ調整を施しているもの(313)が多い。中には二枚貝調整のものがあり、内面に行うもの(289)と、外面に施すもの(314・323・399)がある。内面は横方向のケズリ調整を施すもの(323)と、ナデ調整で仕上げるもの(314・399)がある。他に、(309)は外面のナデ調整の前にケズリ調整を施している。 ○刻み目はヘラ状の原体によるものが多いが、二枚貝の押し引きによるもの(289・314・323・399)も4例ある。	○在地産9例(289・313・323)他地域産4例(314・309・399)。 ○4例に煤が認められる。 ○東海系が1例見られる(399)。(323)も東海系と思われる。 ○(289)は口径・傾きともに図上復元。
	H	285 ○口縁部は外反するもの(34)と、直線的に上方へのびるもの(285・315)がある。口縁端部は丸味をもつものが多い。 ○口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○口径25cmから36cm前後のものがある。30cm前後のものが多い。(285)は29.8cm。	○口縁部内外面をヨコナデ調整するもの(315)が一般的だが、内外面にミガキ調整を加えるもの(285)、外面のみミガキ調整で仕上げるものがある。 ○突帯は断面が台形を呈するものと、三角形を呈するものがある。	○在地産7例(285・315・316)。 ○3例に煤が認められる。
	D	320 ○口縁端部は面をもつもの(320)と、丸味をもつもの(326)がある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。	○内外面にヨコナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形のもの(326)と、台形のもの(320)があり、刻み目はヘラ状の原体によるもの(326)と、二枚貝の押し引きによるもの(320)がある。 ○口縁端部内外面に棒状あるいはヘラ状のものによる沈線をめぐらせているもの(320)がある。	○在地産2例(326)、他地域産1例(320)。 ○(320)は馬見塚F地点に類例あり。
C	318 ○口縁部は直線的にのび、端部付近でやや外反し、外傾する面をもつ。口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○推定口径28cm。	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。口縁端部内面にヘラ状のものが当たった痕跡が残る。 ○突帯は断面が三角形を呈する。口縁端部の刻み目はヘラ状の原体によるものでV字形を呈する。	○他地域産1例(318)。	
体部	348		○外面は横方向のケズリ調整後、半截竹管による刻み目を施している。 ○内面は横方向のナデ調整を施している。	○他地域産(348)。
	349		○外面は横方向のケズリ調整後、半截竹管による刻み目を施している。 ○内面は風化の為調整不明	○在地産(349)。

縄文Ⅱ（黒灰色砂質土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考	
深鉢	体部	351	○外面は横方向のナデ調整後、半截竹管による刻み目を施している。 ○内面は風化の為調整不明	○在地産(351)。	
	C	292 295 317 321 322 324	○口縁部はゆるやかに外反しながら上方にのびるもの、あるいは外上方にのびるもの(292・295・317)が一般的だが、強く外反して大きく外上方にひろくもの、また、あまり外反しないもの、内傾気味になるもの(321・324)がある。口縁部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。また、口縁端部の上端に突帯を沿わせて施しているものもある。 ○口径19cmから42cmのものがあり、25cmから30cmのものが多い。(292)は24.6cm、(295)は23.2cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整、あるいはナデ調整を施しているものが一般的だが、内面に横方向のミガキ調整を加えるもの、横方向のケズリ調整を施すものが1例ずつ見られる。 ○体部の残るものは1例しかなく、外面肩部付近を横方向に、以下を縦方向にケズリ調整しており、内面は板ナデ調整の後、ナデ調整を加えている(292)。 ○刻み目はヘラ状の原体によるものが一般的だが二枚貝の押し引きによるものも5例見られる。突帯よりも口縁端部の刻み目の方が軽く浅くなる傾向がある。	○在地産48例(295・317・321・322・324)、他地域産(292)。 ○21例に煤が認められるが小片が多く不明なものが多い。(295)は口縁部外面に、(292)は胴部外面に煤が付着している。 ○東海系が3例見られる(396)。
	E	327 335	○口縁部はゆるやかに外反しながらやや内傾気味に上方へのびる。外面口縁端部の直下と口縁部と体部の境に突帯がめぐる。 ○推定口径(327)は31cm。	○口縁部内外面ヨコナデ調整、体部内外面に横方向のケズリ調整を施しているもの(327・335)がある。	○(327・335)は在地産。 ○(335)は肩部の突帯以下に煤が付着。
	F ₁	298 319	○体部から口縁部にかけて弧を描くように内弯して、口縁部が内傾するもの(298)、ゆるやかに内弯しながらほぼ直上にのびるもの、ほとんど膨らみをもたず上方にのびるもの(319)がある。 ○口径15cmから30cm前後のものがあり、25cm前後のものが多い。(298)は29.5cm。	○口縁端部及び内面をナデ調整外面をケズリ調整するものが一般的である。外面のケズリ調整は、口縁部付近を横方向に以下を下方から上方に縦方向に施すもの(319)が多い。また、口縁部および内面は横方向に、体部外面は縦方向にミガキ調整を加えているもの(298)もある他に、口縁部外面のみ横方向に粗いミガキ調整を加えているものも1例見られる。	○在地産24例(319)、他地域産2例(298)。 ○16例に煤が認められる小片が多く不明なものも多い。(319)は外面全体と内面の一部に煤が付着している。
	F ₂	325	○体部から口縁部にかけてほとんど膨らみをもたない。 ○口縁端部に刻み目をもつ。 ○推定口径25cmのもの(325)がある。	○口縁端部はヨコナデ調整、以下を、外面は横方向にケズリ調整を施しているもの(325)と、内外面にナデ調整を施しているものがある。 ○刻み目はヘラ状の原体による。	○在地産3例(325)。 ○2例に煤が認められる。(325)は外面に煤が付着している。
	G ₁		○口縁部は直線的で、端部は面をもつものと、丸味をもつものがある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目をもつ。 ○推定口径37cmのものとして20cmのものがある。	○口縁端部および内面はヨコナデ調整、外面は突帯下半より以下を横方向のケズリ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産2例。 ○1例に煤が認められる。
	G ₂		○口縁部は直線的で、端部は丸く仕上げている。 ○口縁端部に刻み目をもち、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○推定口径22cm。	○内外面ともにヨコナデ調整。 ○刻み目はヘラ状の原体によりV字形を呈する。突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産1例。
	G ₁	329 330	○口縁部が内弯気味のもの(329)と、直線的になるもの(330)がある。口縁端部は面をもつものと丸味をもつものがあるが、面をもつものが多い。 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。 ○口径17cmから30cm前後のものがあり、20cm前後のものが多い。	○口縁端部および口縁部内面にヨコナデ調整、外面は突帯以下を横方向にケズリ調整するもの(330)が一般的である。また、内面を二枚貝調整するもの(329)もある。 ○刻み目はヘラ状の原体による。 ○突帯は断面が台形を呈するもの6例、三角形を呈するもの4例ある。	○在地産9例(329・330)他地域産1例。 ○7例に煤が認められる。
浅鉢	A	282 283 328 331 340 341 352	○口縁部が短く外反し、端部内面が肥厚するもの(282・283・340・341・352)と口縁部が屈曲して上方に立ち上がり、端部がシャープな面をもつ(328)がある。直立する口縁部の内面が肥厚し、断面が四辺形を呈するもの(331)がある。頸部は強く屈曲し内面に段をなす。肩部は強く張り出して稜をもつ。 ○口径18cmから36cm前後のものがある。(282)は25.6cm、(283)は28.0cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施しているもの(282・283・331・340・341・352)が7例、内外面ともにヨコナデ調整を行うもの(328)が1例ある。 ○黒色磨研土器(331)が1例見られる。	○在地産8例(282・283・328・331・340・341・352)。 ○内外面に赤色顔料を塗布する(341)、口縁部内面の一部に赤色顔料が残る(331)、内面一部に朱の残る(331)が各1例見られる。

縄文Ⅱ（黒灰色砂質土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	C	307 ○口縁部は短く外反し、端部内面が肥厚して段をもち、頸部で「く」の字形に屈曲して丸味のある体部に移行するもの(307・336・338・342)が基本的な形態だが、中には口縁端部内面が肥厚せず、端部が外傾する面をなすもの(338)がある。 ○口径28cmから34cm前後。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(336・338・342)が3例、口縁部外面および体部外面にヨコナデ調整、口縁部内面に横方向のミガキ調整、体部内部にナデ調整を施すもの(307)が1例ある。 ○突起(P-4)をもつもの(336・342)が2例ある。	○在地産2例(366・338)他地域産2例(307・342)。 ○(307)は口径・傾きともに図上復元。
	C ₂	291 ○口縁部が内弯する体部から単純に続くもの(291)と、口縁部が若干外反するもの(291)がある。他に、外上方へ直線的にのびるものがある。口縁端部は面をもつ。 ○(291)は推定口径14.7cm、(299)は13.3cm。	○口縁部内外面および体部外面に横方向のミガキ調整、体部内面にナデ調整を施しているもの(291)と、内面はナデ調整の後、横方向のミガキ調整、外面は摩滅のため方向は不明だが、ミガキ調整を施しているもの(299)がある。 ○口縁端部外面にヘラ状工具による沈線をもつもの(291)がある。 ○黒色磨研土器が1例ある。 外面に、粘土紐の継ぎ目の残るものがある。粘土紐の幅は1.3cm。	○在地産2例(291・299)他地域産1例。 ○(291・299)は口径・傾きともに図上復元。
	C ₁	288 ○口縁部が内弯する体部から単純に続くもの(288・290・333・339)と、直線的上方へのびるもの(347)がある。 339 ○口径10cm前後から27cm前後のものがある。 347 15~20cm前後のものが多い。	○口縁端部はヨコナデ調整、以下を、外面横方向のケズリ調整、内面をナデ調整するもの(290・339・347)が18例、内外面ともにナデ調整を施すものが5例ある。他に、外面横方向のケズリ調整、内面横方向のミガキ調整のもの、内外面ともに横方向のケズリ調整後、ナデ調整を施すもの、外面横方向のミガキ調整、内面ナデ調整のもの、外面縦方向のケズリ調整、内面横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整のもの、外面口縁部を横方向に、以下を、縦方向にケズリ調整、内面ナデ調整を施し口縁部に横方向のミガキ調整を加えるもの(288)がそれぞれ1例ずつ見られる。 ○突起(P-3)をもつもの(339)がある。 ○口縁端部外面に沈線をもつものが2例、端部内面に沈線をもつものが1例ある。 ○内面に粘土紐の継ぎ目の残るもの(290)がある。粘土紐の幅は1.2cm。	○在地産39例(288・290・333・339・347)他地域産3例。 ○24例に煤が認められる。(288・290)は外面に薄く煤が付着している。
	C ₁	332 ○口縁部が内弯する体部から単純に続くものと、直線的に上方へのびるものがある。 ○口縁端部に刻み目をもつ。 ○推定口径22cmのもの(322)がある。	○口縁部内外面および体部内面ヨコナデ調整、体部外面は横方向にケズリ調整するもの(332)と、口縁端部はヨコナデ調整、以下を、内外面ともに横方向のケズリ調整を行うものがある。 ○刻み目はヘラ状の原体による。○字形を呈するものと、不規則なものがある。	○在地産2例(332)。 ○1例には煤が見られる。
	D	346 ○口縁部が内弯する体部から単純に続くもの(346・353)と、やや外反気味になるものがある。 353 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。口縁端部に突帯の上端を沿わせてつけているものも1例ある。 ○口径8cm前後のものから30cm前後のものがある。	○口縁部内外面をヨコナデ調整、体部内外面をナデ調整するものが一般的だが、外面突帯以下を横方向にケズリ調整するもの、内面を横方向にミガキ調整するもの(346)がある。(353)は風化の為不明。 ○突帯は断面が三角形を呈するもの(353)が9例、台形を呈するもの(346)が2例ある。 ○口縁端部内面および突帯上にヘラ状のものによる沈線を加えるもの(346)がある。	○在地産9例(346・353)。 ○外面に煤が認められる。
D	○内弯する体部からやや外反気味に上方へのびる口縁部をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をもつ。	○口縁部内外面はヨコナデ調整、体部は内外面にナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈する。刻み目はヘラ状のものにより、小D字形を呈する。	○在地産1例。 ○外面に煤が認められる。	

縄文Ⅱ（黒灰色砂質土）

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	E	296 ○外反する口縁部に肩の張り出す浅い体部がつく。口縁部が外上方にひらくもの(300・308・334・350)と、ほぼ直上にのびるもの(296・334・350)と、内傾気味になるもの(308)がある。 345 ○(334)は壺になるかもしれない。 350 ○外面口縁端部の直下に突帯をもつ。	○口縁部内外面横方向のミガキ調整のもの(345)が10例ある。そのうち体部まで残存するものが4例あり、外面横方向のケズリ調整、内面ナデ調整するもの(300・308)が3例、内外面ともにナデ調整するもの(296)が1例ある。また、口縁部内外面ともにヨコナデ調整のもの(334)が7例、口縁端部から内面にかけてヨコナデ調整を施し、外面には横方向のミガキ調整を加えるものが1例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈するもの31例、台形を呈するものが2例ある。(内面にも突帯をめぐらせているものが4例、内面に沈線を加えるものが3例ある。) ○内外面に突帯をもつものには突起(P-6)をつけるもの(345)、突起(P-4)をつけるものが1例ずつある。内面に沈線をもつものには突起(P-1)をつKているもの(300)が1例ある。	○在地産28例(296・334・343・345・350)、他地域産(300・308)。 ○14例に煤が認められる。小片のために不明なものも多い。(300)は外面に煤が薄く付着している。
	H	297 ○口縁部は長くゆるやかに外反する。口縁端部は丸味をもつもの(297)、シャープな面をもつもの(344)がある。また端部が屈曲して短く立ち上がり端面に刻み目をもつもの(337)が1例ある。 337 344 ○口径15cmから26cm前後のものがある。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(344)が3例、ヨコナデ調整を施すもの(337)が2例、外面ヨコナデ調整、内面横方向のミガキ調整を施すもの(297)が1例ある。 ○口縁端部内面に沈線をめぐらせているもの(297・344)が4例ある。 ○(337)はヘラ状の原体によるもので小O字状を呈する刻み目を施している。	○在地産5例(297・337・344)、他地域産2例。
	F	286 ○肩の張る体部に内傾する口縁部をもつ。口縁部はやや外弯して端部は丸味をもつ。 ○口径16cm前後から22.4cm前後のものがある。	○外面口縁部はヨコナデ調整、体部は横方向のケズリ調整、内面は口縁部から体部にかけて横方向のミガキ調整を施している。他に、口縁部片では内外面ともにヨコナデ調整のものがある。 ○口縁端部外面に沈線をもつものがある。	○在地産2例(286)、他地域産1例。
壺	B	293 ○口縁部はゆるやかに外反しながら上方へのびる。 ○刻み目のない突帯を口縁端部に上端に沿わせてめぐらせている。 ○口径9.8cm。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○突帯は幅の広い扁平なものを施している。	○在地産1例(293)。
	C	294 ○口縁部はゆるやかに外反し、端部は器壁が薄くなり尖り気味になる。 ○外面口縁部の直下に刻み目のある突帯をもつ。 ○口径14cm前後。	○口縁端部から外面にかけてヨコナデ調整、内面はナデ調整をしている。 ○突帯は断面が三角形を呈する。ヘラ状の原体によるV字形の刻み目をつけている。	○在地産1例(294)。
底部	301 ○丸底を呈するもの(301・302・304)が6例、 302 平底を呈するもの(303・305・306)が3例ある。 303 304 ○平底のものはやや上げ底風になるもの(305・ 305 306)が2例ある。 ○丸底のものでは体部へのひらき方から(302)は深鉢のもの、(301・304)は浅鉢のものと考えられる。 ○平底のものは調整の仕方から、浅鉢のものと考えられる。	○丸底のものは、外面縦方向のケズリ調整、内面および外底面にナデ調整を施しているもの(302・304)と、内外面にミガキ調整を施しているもの(301)がある。(301)のミガキ調整は、外面は、横方向に行った後、外底面は一定方向に施し、内面は縦方向に行った後、内底面は一定方向に施しており格子状を呈する。 ○平底のものは内外面ナデ調整を施しているが、内面にミガキ調整を加えるもの(305)がある。 ○上げ底風のものはやや丸底気味の底部に断面が三角形を呈する粘土紐を輪にして貼りつけているもの(305)と、粘土板を基底として作り上げた底面の周囲に薄く輪にした粘土紐を貼りつけているもの(306)がある。	○在地産7例(301・302・304・305・306)、他地域産(303)。 ○(304)は二次焼成と思われる痕跡がある。	

縄文 I (黄灰色シルト)

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
蓋		○円形で中高の笠形を呈する。口縁端部は丸味をもつ。 ○口径5.8cm。	○内外面ともにナデ調整を施しているが、粗雑に仕上げている。	○在地産1例。
深鉢	A	355 ○口縁部はゆるやかに外反するもの(355・357)と、ほとんど外反しない直線的なもの(356・358)とがある。 356 357 358 ○口径30cm前後のものが多いが13cm前後の小型のものもある。	○口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。内面にミガキ調整を加えているもの(357)が1例ある。	○在地産15例(355～358)。 ○2例に煤が認められる小片のため不明なものが多い。
	B	354 ○直線的ではほぼ直立している口縁部の端部近くの破片。端部は面をもつ。 ○口縁端部に刻み目を施している。	○調整は風化の為不明。ヨコナデ調整か? ○刻み目はヘラ状の原体により、V字形を呈している。	○在地産1例(354)。
	H	360 ○口縁部は外反して端部に面をもつもの(360・364)と、内傾して端部の器壁が薄くなり尖り気味になるもの(365)がある。 364 365 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。 ○口径25cm前後。	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈している。	○在地産5例(360・364・365)。 ○(360)には煤が認められる。(365)は船橋に類似あり。
	C	367 ○口縁部は外反し、端部は丸味をもつ口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 368 ○推定口径23cmから33cm。	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○刻み目は二枚貝の押し引きによるもの(367)と、ヘラ状の原体によるもの(368)がある。 ○突帯は断面が三角形を呈するもの(367)と、台形を呈するもの(368)がある。	○在地産1例(367)、他地域産1例(368)。 ○(368)には煤が認められる。
	C	361 ○口縁部はゆるやかに外反して外上方にのびるもの(361・363・373・386)と、直線的に上方にのびるもの(362・366・369・370)がある。 362 363 366 ○口縁端部に刻み目を施し、外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 369 370 ○推定口径22cmから40cm。 372 373 386 388	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈するものが6例、台形を呈するものが12例ある。 ○刻み目はヘラ状の原体による。口縁部はD字形が6例、O字形が3例、小D字形が1例、小O字形が5例、V字形が1例あり、突帯は、D字形9例、O字形6例、小D字形1例、小O字形1例、V字形が1例あり、口縁端部のほうが突帯より刻み目が浅く軽くなる傾向がある。	○在地産16例(361・362・363・366・370・372・373・386・388)、他地域産2例(369)。 ○5例に煤が認められる。
	E	385 ○口縁部と体部の境に刻み目のない突帯をめぐらせている。 389	○突帯および内面はヨコナデ調整を施し、外面突帯以下を横方向にケズリ調整している。 ○突帯は断面が台形を呈し、ヘラ状の原体でV字形の刻み目をつけている。	○在地産1例、(385)、他地域産(389)。
	F ₁	379 ○口縁部はやや内弯気味で、上方にのびる。端部は面をもつものと丸味をもつものがある。 ○口径34cm前後。	○外面は逆時計廻りの横方向にケズリ調整、内面はヨコナデ調整を施している。	○在地産2例(379)。 ○2例ともに煤が認められる。
	F ₂	371 ○体部から口縁部にかけて直線的に上方にのびる。端部は面をもつ。 ○口縁端部に刻み目をつけている。 ○口径31cm前後。	○外面は時計廻りの横方向のケズリ調整、内面はヨコナデ調整を施している。 ○刻み目はヘラ状の原体によるものでV字形を呈している。	○在地産1例(371)。
	G ₂	384 ○口縁部は直線的に上方にのびる。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○口径24cm前後。	○口縁端部はヨコナデ調整、以下を外面横方向の粗いケズリ調整、内面はケズリ調整の後、ナデ調整を加えている。 ○突帯は断面が三角形を呈する。 ○口縁端部内面に沈線状の凹みをもつ。	○他地域産1例(384)。
	G ₁	○口縁端部近くの破片。 ○口縁端部は器壁が薄くなる。 ○口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。	○内外面ともにヨコナデ調整。 ○口縁端部から内面にかけて風化が激しく端部の刻み目は不明瞭。断面が三角形を呈する突帯には、ヘラ状の原体によるD字形の刻み目をつけている。	○在地産1例。

縄文 I (黄灰色シルト)

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	A	378 ○口縁部は短く外反して立ち上がり、端部内面は肥厚する。肩部は強く張り出して稜をもつ。内面は口縁部と体部の境に断面三角形の段をつくり出している。 ○推定口径25cm。	○口縁部内外面はヨコナデ調整の後に外面に横方向のミガキ調整を加えている。体部外面は横方向にケズリ調整を施している。	○在地産 1 例 (378)。
	B	○口縁部の一部。口縁端部内面が肥厚して段をなす。	○内外面ともにヨコナデ調整。	○他地域産 1 例。
	C ₁	375 376 377 ○体部から口縁部にかけて直線的に上方にのびる。	○内外面ともにヨコナデ調整のもの(375)、内外面横方向のケズリ調整の後、端部から外面にかけてヨコナデ調整を加えるもの(376)、外面のみケズリ調整した後、内外面にヨコナデ調整を施すもの(377)がある。	○在地産 4 例 (375・376・377)。
	C ₁	374 ○内弯する体部から単純に続く口縁部をもつ。口縁端部に刻み目をもつ。 ○推定口径22cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整、体部は外面横方向のケズリ調整、内面はナデ調整を施している。 ○刻み目はヘラ状の原体によるもので D 字形を呈する。	○在地産 1 例 (374)。
	D	359 381 382 383 ○内弯する体部から単純に続く口縁部をもつ。口縁部がやや外反気味になるもの(383)もある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。	○内外面ともにヨコナデ調整するもの(382)と、口縁端部のみヨコナデ調整を施し、体部外面は横方向のケズリ調整、体部内面はナデ調整を施しているもの(383)がある。(359・381)は風化の為、調整は不明。 ○突帯は断面が三角形を呈する。	○在地産 5 例 (359・381・382・383)。
	E	380 390 391 393 394 395 ○口縁部はあまり外反せず、直線的に上方あるいは外上方にのびる。口縁端部にシャープな面をもつもの(391)がある。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をもつ。また、内面にも突帯をもつもの(395)が 1 例ある。	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。内面に横方向のミガキ調整を加えるもの(391)が 1 例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈するもの(391・393・394・325)と、台形を呈するもの(380・390)がある。 ○口縁端部内面に沈線を施しているもの(380・391)が 2 例ある。	○在地産 2 例 (390・393)、他地域産 5 例 (380・390・391・394・395)。
	体 H 部	392 ○肩部推定径13cm。	○内面ナデ調整。一部に工具痕?がみられる。 ○外面上部はヨコナデ調整、下部にケズリ調整を施している。	○在地産 (387)。
蓋	392 ○体部から口縁部にかけて内弯する。口縁部は丸い。 ○口径 5 cm 前後。	○内外面にナデ調整を施しているが、指頭圧痕が残る。	○在地産 1 例 (392)。	

攪乱

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	A	401 412 413 ○短くゆるやかに外反しながら直上に立ち上がる口縁部に、やや肩の張る体部がつく。 ○口径(401)は27.5cm。	○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整のもの(412)と、外面ヨコナデ調整、内面横方向のミガキ調整のもの(401・413)がある。 ○体部は外面横方向のケズリ調整で、内面ナデ調整のもの(413)と、二枚貝調整のもの(412)がある。また、外面は横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整、内面は全面に横方向のミガキ調整を施しているもの(401)がある。	○在地産 (401・412・413)。 ○II 中央攪乱(401)、I 自然流路(412)、II 溝17(413)。

攪乱

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
深鉢	B	408 ○口縁部は長くゆるやかに外反している。 410 ○口縁端部に刻み目をつけている。 411 ○推定口径(408)は19cm、(410)は18cm、(411)は20cm。	○内外面ともにヨコナデ調整およびナデ調整しているもの(410)と、内面ナデ調整の前に横方向のケズリ調整をしているもの(408)がある。また口縁部外面および、体部内面は板ナデ調整で、口縁部内面はナデ調整、体部外面はユビ調整を施しているもの(411)がある。 ○刻み目はヘラ状の原体により、D字形のもの(410)と、小O字形のもの(408)がある。また、(411)の刻み目は、外面の板ナデ調整に使用した原体と同じものと思われる。 ○二枚貝あるいは半截竹管状のもので縦横に押し引き状の沈線文をつけているもの(408)がある。 ○(410)は内面に粘土紐の織目痕が残る。粘土紐の幅は1.6～2cm。	○在地産(408・410・411)。 ○(410・411)は外面に煤が認められる。 ○Ⅱ東壁断面(408)、Ⅱ溝17(410)、Ⅰ攪乱(411)。
	C	416 ○口縁部は全体に弧を描くようにゆるやかに外反するもの(420)、頸部で外反し、直線的に上方へのびるもの(416)がある。口縁端部は面をもつ。 420 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらせている。 ○口径(416)は26cm前後。	○(416)は口縁端部ヨコナデ調整、以下を内外面ともにナデ調整を施している。(420)は口縁端部から内面にかけてヨコナデ調整を施し、外面は二枚貝調整を行っている。 ○突帯は断面が三角形を呈している。刻み目はヘラ状の原体によるもので(416)は小O字形、(420)はD字形を呈する。	○在地産(416・420)。 ○(416)は肩部外面に煤が認められる。 ○Ⅱ溝17(416・420)。
	G	409 ○内弯する体部から単純に立ち上がる口縁部をもつ。 418 ○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯がめぐる。 419 ○口径17cm前後のもの(419)と、35cm前後のもの(409)がある。	○口縁端部にヨコナデ調整を施し、外面突帯以下を時計廻りの横方向にケズリ調整し、内面はナデ調整を施している。(409)の外面調整は二枚貝。 ○突帯は断面が台形を呈する。刻み目は、口縁端部が小O字形、突帯がV字形のもの(418)と、口縁端部が小O字形、突帯がO字形のもの(409)と口縁端部・突帯ともにD字形のもの(419)がある。	○在地産(409・418・419)。 ○(418)は体部外面に煤が付着している。 ○Ⅱ溝17出土(418)、Ⅱ上げ土(419)、不明(404)。
	H	404 ○口縁部はやや外反気味に外上方へのび、端部は面をもつ。 405 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯がめぐる。 426 ○推定口径(404)は42cm、(405)は20cm、(426)は30cm。	○外面は口縁端部および突帯をヨコナデ調整し、突帯以下を横方向のミガキ調整を施している。内面は横方向のミガキ調整と思われるが、二枚貝調整の可能性もあるもの(404)と、巻貝調整を施しているもの(405)と、ナデ調整を施しているもの(426)がある。 ○突帯は断面が台形を呈するもの(404・405)と、三角形を呈するもの(426)がある。 ○口縁端部内面に沈線をめぐらせているもの(405)がある。	○在地産(404・426)。 ○(426)は突帯以下に煤が認められる。 ○攪乱Ⅰ(405)、Ⅱ(404・426)。
	E	415 ○口縁部と体部の境、刻み目突帯をもつ。	○外面は突帯より上をナデ調整、以下を横方向のケズリ調整、内面はナデ調整。	○在地産(415)。 ○Ⅰ自然流路黄褐色砂。
		424 ○半截竹管による刻み目をもつ。	○外面は横方向のケズリ調整を施している。 ○内面はナデ調整を施している。	○在地産(424)。 ○Ⅱ上げ土。

攪乱

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
浅鉢	A 403 417	○口縁部は大きく外反し、端部近くで屈曲して短く立ち上がるもの(403)と、体部から屈曲して短く外反するもの(417)がある。 口縁端部内面が肥厚して段をつくる。肩部は稜をなす。 ○口径(403)は26cm、(417)は25cm前後。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。(403)は口縁部外面横方向のミガキ調整の前に横方向のケズリ調整を施している。 ○(403)は突起(P-1)をつけている。(図では4方に復元している)(417)は突起(P-8)をつけている。	○在地産(403)、他地域産(417)。 ○I上げ土(403)、II溝17(417)。
	C 400	○内弯する体部から単純に口縁部が続く。口縁端部は面をもつ。 ○口径20.5cm。	○外面は横方向のミガキ調整と思われるが、風化の為不明瞭。内面は口縁部ヨコナデ調整、体部ナデ調整を施している。	○在地産(400)。 ○I攪乱。
	D 402	○ゆるやかに内弯する体部から単純に口縁部が続く、口縁端部は丸味をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻み目のない突帯をめぐらせている。 ○口径27.0cm。	○外面は突帯以下に時計廻りの横方向にケズリ調整、内面は全体に横方向のミガキ調整を施している。 ○突帯は貼り付けにより断面が三角形を呈する。	○在地産(402)。 ○I攪乱。
	E 406 407 414 425 428	○口縁部は直線的なもの(406・407・425・428)と、強く外反するもの(407)がある。 ○外面口縁端部の直下に突帯をもつ。	○内外面ともに横方向のミガキ調整のもの(406・407・414)、口縁端部をヨコナデ調整、以下を内外面ともにナデ調整を施しているもの(428)がある。 ○口縁端部内面に沈線を施しているもの(406・414)と、内面にも突帯をめぐらせているもの(428)がある。また、外面肩部にも突帯をめぐらし、口縁端部と2つの突帯に刻み目を加えるもの(425)がある。刻み目はヘラ状の原体によるやや不規則なV字形のものをつけている。	○在地産(406・407・414・425・428)。 ○不明(406・407・414・425)、II溝17(428)。
	H 422	○波状口縁をなし、外反して外上方にのびる。口縁端部は内外に肥厚して丸味をもつ。	○内外面ともにナデ調整を施し、ミガキ調整を加えている。 ○内面に口縁端部に沿って沈線を加えている。	○他地域産(422)。 ○II暗青灰色シルト。 ○菜畑に類例、山の寺式浅鉢I。
	H 421	○内面口縁端部に棒状またはヘラ状工具による沈線をもつ。 ○推定口径24cm。	○外面は横方向のナデ調整、内面は横方向のヘラミガキ調整を施している。	○在地産(421)。 ○II攪乱。
	F 427	○内傾する口縁部の端部は外方に折り曲げて突帯をつくっている。	○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁端部内面に沈線がめぐる。	○他地域産(427)。 ○出土地不明。
		423	○外面はヘラ状工具による刻み目をもつ。 ○推定口径13cm。	○内外面ともにヨコナデ調整を施している。

表3 土偶及び土製品観察表

土偶および土製品

土製品	蓋	429 430	○体部から口縁部にかけて内弯する。端部は丸くおさめる。	○内外面共にナデ調整を施す。	○在地産。 ○II黒灰色砂質土下層。
	皿	431	○平底。 ○直立気味の口縁部に、端部は丸くおさめる。	○内外面共にナデ調整を施す。	○在地産。 ○II黒灰色砂質土。
	鉢	432	○やや半円形を呈する。	○手づくね。	○在地産。 ○II黒灰色砂質土。
	耳環?	433	○円柱状の棒を曲げたもの。	○ナデ調整を施す。	○在地産。 ○II黒褐色砂質土。
土偶		434 435	○くびらえた腰に、張り出す脚部をもつ。	○沈線を体部中央に1条施すもの(434)、体部中央と脚部に施すもの(435)がある。 ○刺突文でスボン条の文様を作る(435)。	○在地産。 ○II黒灰色砂質土。

表4 石製品

番号	種類	石 材	法 量				備 考	出 土 地
			長さ	幅 (cm)	厚さ	重さ (g)		
1	石鏃	サヌカイト	(cm) (3.2)	(1.7)	(cm) 0.45	2.0	平基無茎式。先端と基部一部欠損。中央断面形両凸。	II 土壌22
2	石鏃	サヌカイト	2.2	1.8	0.4	1.4	凹基無茎式。基部一部欠損。中央断面形片凸。	II 黒灰色砂質土
3	石鏃	サヌカイト	1.5	1.3	0.4	0.8	平基無茎式。基部一部欠損。中央断面形両凸。	II 土壌20
4	石鏃	サヌカイト	(2.4)	1.6	0.4	1.2	平基無茎式。先端部欠損。中央断面形片凸。	II 溝20-2
5	石鏃	サヌカイト	(2.0)	(1.8)	0.3	1.0	凹基無茎式。先端と基部一部欠損。中央断面形両凸。	II 黒灰色砂質土下層
6	石鏃	サヌカイト	1.7	1.2	0.2	0.4	凹基無茎式。先端部欠損。	I 淡黄褐色粘土
7	石鏃	サヌカイト	(2.1)	(1.7)	0.3	1.0	平基無茎式。先端部欠損。中央断面形片凸。	II 黒灰色粘土
8	石鏃	サヌカイト	2.7	1.8	0.4	1.8	平基無茎式。中央断面形両凸。金山産？	II 黒灰色砂質土下層
9	石鏃	サヌカイト	2.3	1.5	0.4	1.0	平基無茎式。中央断面形両凸。	II 黒灰色砂質土
10	石鏃	サヌカイト	(1.4)	1.5	0.3	0.6	平基無茎式。先端部欠損。中央断面形両凸。	II 黒灰色粘土
11	石鏃	サヌカイト	2.3	1.5	0.4	1.0	平基無茎式。中央断面形両凸。金山産？	II 黒灰色砂質土
12	石鏃	サヌカイト	2.8	1.4	0.3	1.2	凸基有茎式。	II 黒灰色砂質土
13	石錐	サヌカイト	(3.6)	1.2	0.7	2.4	先端部欠損。全面に細部調整を施す。	II 溝33
14	石錐	サヌカイト	(3.3)	1.25	0.4	2.0	先端部欠損。旧皮を残す。	II 溝33
15	石錐	サヌカイト	(2.4)	1.6	0.35	1.4	先端部欠損。	II 溝33
16	有舌尖頭器	サヌカイト	9.5	2.3	0.9	18.2	全縁に細部調整。	II 溝17
17	石匙	サヌカイト	5.3	2.15	0.75	7.4	一縁に細部調整。一部に表皮残存。	I 淡黄褐色粘土
18	石錐	サヌカイト	5.4	2.1	0.8	5.2	二縁に細部調整。一部に表皮残存。	II 黄灰色シルト
19	石槍	サヌカイト	(14.7)	2.5	1.1	49.0	先端部欠損。基部に表皮残存。	II 暗黄灰色砂質土
20	石錐	サヌカイト	(4.7)	3.6	0.8	14.6	先端部欠損。一部に表皮残存。	II 溝22
21	直刃削器	サヌカイト	5.5	4.5	1.4	27.4	二縁に片面細部調整。一部に表皮残存。	II 溝35
22	直刃削器	サヌカイト	4.7	5.0	1.25	25.0	一縁に形面細部調整。両側縁に折りとり面をもつ。	II 黒灰色粘土
23	削器	サヌカイト	4.5	2.7	0.8	9.2	やや凸刃。尖頭削器の可能性あり。	II 溝35
24	直刃削器	サヌカイト	4.95	4.4	1.3	27.0	両側縁に裁断をもつ。	II 黒灰色粘土上面
25	直刃削器	サヌカイト	7.6	3.9	1.5	46.0	刃部につぶれ痕をもつ。一部に表皮残存。	II 黒灰色粘土
26	横形削器	サヌカイト	6.8	4.0	1.3	28.0	一縁に細部調整。一部に表皮残存。	II 黒灰色砂質土
27	直刃削器	サヌカイト	6.9	2.8	1.4	24.2	背縁に折りとり面・裁断面をもつ。	II 土壌22
28	細部調整剥片	サヌカイト	5.1	4.4	1.5	22.8	ピエス・エスキーエ様。一部に表皮残存。	II 溝35
29	削器	サヌカイト	5.0	4.5	1.1	17.8	全周縁に細部調整を施す。	II 黒灰色粘土
30	小型削器	サヌカイト	3.5	2.1	0.5	3.8	ほぼ全周縁に細部調整を施す。	II 溝33
31	直刃削器	サヌカイト	5.8	4.1	1.5	17.6	一部に表皮残存。	II 溝17

番号	種類	石材	法 量				備 考	出 土 地
			長さ	幅 (cm)	厚さ	重さ (g)		
32	剥片尖頭器	サヌカイト	(cm) 4.3	1.9	(cm) 0.5	3.2	先端部には使用痕、あるいは細部調整がみられる。	II ビット87
33	尖頭器	サヌカイト	3.7	2.5	1.1	6.4	先端部には使用痕、あるいは細部調整がみられる。	II 黄灰色礫
34	剥片尖頭器	サヌカイト	2.4	1.8	0.6	2.6	基部ノッチ状の剥離。旧皮を残す。	I 淡黄褐色粘土
35	ピエス・エスキーエ	サヌカイト	3.4	3.9	1.1	19.4	一縁辺裁断面、使用時のものと思われる。	II 黒灰色粘土
36	細部調整剥片	サヌカイト	4.1	2.15	0.9	8.2	ピエス・エスキーエ様。	II 黒灰色砂質土下層
37	ピエス・エスキーエ	サヌカイト	3.3	2.4	0.6	5.2	一縁辺裁断面、使用時のものと思われる。	II 黒灰色砂質土
38	ピエス・エスキーエ	サヌカイト	2.6	3.0	0.6	7.0	四縁辺とも使用。	I 淡黄褐色粘土
39	ピエス・エスキーエ	サヌカイト	3.1	2.3	1.0	7.8	四縁辺とも使用。	II 黒灰色砂質土
40	ピエス・エスキーエ	サヌカイト	3.2	2.8	0.5	5.6	四縁辺とも使用。	II 焼土壌
41	ピエス・エスキーエ	サヌカイト	4.1	3.4	0.7	11.8	一側縁折りとり面。	II 黒灰色粘土
42	細部調整剥片	サヌカイト	3.4	4.4	0.5	8.0	ピエス・エスキーエ様。	II 溝33
43	細部調整剥片	サヌカイト	4.8	2.3	0.5	5.6	ピエス・エスキーエ様。	II 黒灰色砂質土下層
44	細部調整剥片	サヌカイト	1.9	3.0	0.6	4.8	ピエス・エスキーエ様。	II 黒灰色砂質土下層
45	ピエス・エスキーエ	サヌカイト	3.2	2.8	0.6	11.8	一縁辺裁断面、その対縁折りとり面。	II 暗赤褐色砂質土
46	細部調整剥片	サヌカイト	4.1	2.2	1.1	12.6	ノッチ状の使用痕。	II 溝20-1
47	細部調整剥片	サヌカイト	3.6	2.0	0.7	4.4	ノッチ状の使用痕。	II ビット87
48	複刃削器	サヌカイト	7.3	3.0	1.9	40.6	刃部につぶれ痕をもつ。ピエス・エスキーエとの類似。	II 溝35
49	石錘	砂岩	10.6	9.8	2.6	382.2	偏平な円礫の両端に縄掛け用の打ち欠き痕がみられる。	II 黒灰色粘土
50	石錘	砂岩	9.4	6.7	2.1	160.6	偏平な円礫の両端に縄掛け用の打ち欠き痕がみられる。	II 黒灰色砂質土
51	石錘	砂岩	9.35	6.5	2.0	180.2	偏平な円礫の両端に縄掛け用の打ち欠き痕がみられる。	I 攪乱
52	石錘	砂岩	8.5	8.2	1.9	199.4	偏平な円礫の両端に縄掛け用の打ち欠き痕がみられる。	II 黒灰色粘土
53	石錘	砂岩	9.3	6.2	1.6	159.8	偏平な石の両端に縄掛け用の打ち欠き痕がみられる。	II 黒灰色粘土
54	敲石	砂岩	(7.8)	(7.8)	(4.35)	300.2	敲打痕がみられる。火を受けたためか、黒変している。	II 暗黄灰色粘土
55	敲石	砂岩	(6.8)	10.6	6.7		敲打痕がみられるが、平滑な面では磨石として使用されていたと思われる。	I 黒色粘土
56	敲石	砂岩	(8.1)	10.5	4.8		敲打痕がみられる。	II 暗黄灰色粘土
57	磨裂石斧	変質輝緑岩	(8.9)	6.1	4.2	348.4	両刃。若干の使用痕がみられる。基部欠損。	I 黒色粘土
58	磨裂石斧	変質斑れい岩	(9.4)	4.5	2.3	197.4	先端部の欠損は使用によるものか？基部欠損。	II 土壌22
59	打製石斧	黒色千枚岩	(10.4)	4.8	1.2	69.0	原礫面残存。片面一部使用痕？	II 黒灰色粘土
60	打製石斧	角閃石片岩	(11.5)	5.1	0.9	81.8	原礫面残存。	II 溝33下部
61	石皿	砂岩	(12.2)	(11.9)	14.6		一部に磨痕がみられる。	II 土壌45

表5 弥生土器観察表

弥生前期

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考	
弥生土器	1 2 3 8 10 14 16 18 19	○ゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。	○外面はハケメ調整を施すもの(1・2・10・14・16)、丁寧にナデで仕上げたもの(3・8・11・13・18・19)がある。 ○口縁部端面に刻目を施す(1~3・11・12・14~19)。 ○胴部上縁にヘラ描き沈線文を加える(3・11~19)。	○他地域産(19)。 ○II暗黄褐色砂質土(1・14・16)II攪乱(2・3・13)、II黄褐色砂礫(8・12)、II耕作溝内(10)、II木棺墓(11)、赤褐色砂質土(18)、I上げ土(19)。	
	9 15	○口縁部はなだらかに外弯し、端部は丸くおさめる。	○外面はハケメ調整を施すもの(15)、ナデ調整を施すもの(9)がある。	○在地産。 ○II上げ土(9)、II床土(15)。	
	7 17	○口縁部は外折し、端部は丸くおさめる。	○外面はハケメ調整を施し、内面はナデ調整する。 ○胴部上縁にヘラ描き沈線文を加える。	○他地域産。 ○I青褐色シルト	
	壺体部	4	○短く立ち上がる頸部に、なだらかに外反する口縁部。端部は面をもつ。	○頸体部境に削り出し突帯。 ○内外面にナデ調整を施す。	○他地域産。 ○I青褐色シルト
		5 20 29		○内外面にナデ調整を施すもの(24・25)、ハケメ調整を施すもの(22)、ヘラミガキ調整を施すもの(26・27)、ハケメ調整の後ナデを行うもの(23)、内面をナデ調整・外面にハケメ調整を施すもの(20・21・29)がある。 ○外面にヘラ描き沈線文を加える(5・20~27・29)。 ○外面に削り出し突帯を加える(20)。	○他地域産(22・27)。 ○II土壙・近世以降(5)、I黒灰色砂質土(20)II暗赤褐色砂質土(21)、II赤褐色砂(22)、II溝20-1(23)、II暗青灰色砂質土(24・25)IIピット87(26)、ピット11(27)、II自然流路(28)、II暗茶褐色砂質土(29)。
		底部	6	○やや上げ底気味の底部をもつ。	○内外面共にヘラミガキ調整を施す。 ○外面に3条一単位からなる重弧文を加える。

弥生中期

壺A蓋	30	○口縁部は大きく開き、端部で広い面をもつ。 ○紐孔は2孔1対で、2ヶ所にある。	○外面はヘラミガキ調整を施す。 ○内面はハケメ調整で仕上げる。	○在地産。 ○II溝20-3。
壺A	31	○直立する頸部から、ほぼ水平に短く外折する口縁部をもつ。 ○体部最大径は器体のやや上位にあり、安定した大きい平底の底部に続く。	○口頸部外面は縦方向のハケメ調整を施す。 ○体部外面は縦方向のハケメ調整後、最大径部以下に横方向のヘラミガキを加える。 ○内面はナデ調整で仕上げる。 ○底面は一定方向のヘラケズリ調整する。	○他地域産。 ○II溝20-3。
壺C	32	○胴部の張る器体に、細くしまった頸部と漏斗状に開く口縁部をもつ。 ○口縁部は下方に肥厚する。 ○底部は突出する小形の平底を呈する。 ○体部下半には焼成後外面より穿った穿孔を2ヶ所もつ。	○底面は一定方向のヘラミガキ調整する。 ○口縁部端面には刺突文を施す。口頸部から体部上半部には6帯の袋状文を施し、さらに最下端に刺突文を1帯加える。 ○体部は細く密な横方向のヘラミガキ調整を施す。 ○器体内面は最大径部上半を丁寧にナデで仕上げ、下半部は横方向のハケメ調整を加える。	○在地産。 ○II20-3。

弥生中期

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	壺B ₁	33 ○やや張りをもつ長めの体部に、直立気味に開く太めの口縁部をもつ。 ○口縁部は水平近く外反し、端部で上方に肥厚する。 ○底部は安定した平底。 ○体部下半には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。	○口頸部から体部上半外面は縦方向のハケメ、下半をヘラミガキ調整する。 ○内面は全面丁寧にナデて仕上げる。 ○口頸部から体部上半部には4帯のクシ描直線文を施し、さらに体部上半の直線文間にクシ描波状文を2帯加える。 ○口縁部内面には扇形文をもつ。	○他地域産。 ○体部下半に煤付着。 ○II溝20-3。
	壺B ₂	34 35 ○胴部の張る器体に、しまった頸部漏斗状にひろがる口縁部をもつ。 ○口縁端部は上下両方に肥厚する。 ○底部は安定した平底を呈する。 ○体部下半には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。	○口縁端部には刺突文を加える。 ○体部上半には刺突文を4段巡らすもの(34)と、クシ描波状文とクシ描直線文を2帯づつ交互に施し、さらに最下端に刺突文を加えるもの(35)がある。 ○体部上半は丁寧にナデて仕上げたもの(34)と、縦方向のハケメ調整を施すもの(35)がある。 ○体部下半は縦方向のヘラミガキ調整を加える。ヘラミガキは全体を5~7ブロックに分割して、逆時計回りに施す。 ○体部内面は縦方向のハケメ調整後、上半部を一部ナデ調整を加える。	○他地域産。 ○(34・35)ともに胎土・色調が類似している。 ○II溝20-3。
	甕A	36 ○胴部はゆるやかに膨らみ、短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。 ○胴部の最大径が器体のやや上位に位置する。 ○底部は平底を呈する。	○体部は縦方向のハケメ調整後、体部全体を丁寧な縦方向のヘラミガキ調整を施す。 ○体部内面は横方向のハケメ調整後、縦方向のヘラミガキ調整で仕上げるもの。	○在地産。 ○体部最大径下半に煤付着。 ○II溝20-3。
	甕B	37 ○胴部がゆるやかに膨らみ、短く外反する口縁部をもつ大型甕。 ○口縁部はわずかに外反し、端部で下方に折れ曲がる。 ○最大径は器体の上位に位置する。 ○底部は安定した平底を呈する。 ○胴部下半には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。	○体部は縦方向のハケメ調整後胴部中位を横方向にヘラミガキ調整し、さらに胴部下位に縦方向にヘラミガキ調整を加えて仕上げる。 ○底面は一定方向のヘラミガキ調整する。 ○口縁部内面は横方向のハケメ調整後、ヨコナデ調整を加える。 ○体部内面は丁寧にナデて仕上げる。	○在地産。 ○体部中位に煤付着。 ○II溝20-3。
	壺蓋A	38 ○口縁部は大きく開き、端部は丸く納める。 ○紐孔は2孔1対で、2ヶ所にある。	○外面はヘラミガキ調整を施す。全体を6ブロック程度に分割して、逆時計回りの放射状に調整する。 ○内面はハケメ調整後、横方向のヘラミガキ調整を加える。	○在地産。 ○II溝30。
	壺D	39 40 ○直立する頸部から、水平ちかく外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は上方に立ち上がり2孔1組の紐孔をもつもの(39)、端部が上下両方に肥厚し紐孔をもたないもの(40)がある。 ○体部は肩の張りが弱く、なで形の形態をとる。	○口頸部はヨコナデ調整で仕上げるもの(39)と、縦方向のハケメ調整後ヨコナデ調整を加えるもの(40)がある。 ○体部外面は縦方向の粗いハケメ調整する。 ○内面は縦方向のハケメ調整後ナデ調整を施す。	○(39)在地産、(40)他地域産 ○II木棺墓。
	壺E	41 ○胴部の張りの小さい球体の体部に、長く漏斗状に開く口縁部をもつ。 ○口縁部は水平に近く屈折し、端部で面をもつ。 ○底部はやや突出気味の平底を呈する。 ○胴部下半には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。	○口頸部内面から胴部上位にかけては、粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。 ○口頸部から胴部上位は縦方向のハケメ調整を施す。 ○胴部下位は左上がりのヘラミガキ調整を施し、その後胴部中位に横方向のヘラミガキ調整を加える。 ○口縁部内面は横方向のハケメ調整を施す。 ○口頸部内面から体部内面にはヘラミガキ調整?を施す。	○在地産。 ○II溝17。

弥生中期

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考	
弥生土器	甕A	42	<ul style="list-style-type: none"> ○胴部はゆるやかに膨らみ、短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁部は面をもつ。 ○胴部の最大径が器体のほぼ中に位置する。 ○底部は若干突出する平底。 ○底部中央には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁端部に刻目を施す。 ○体部は縦方向のハケメ調整後、体部下位のみに縦方向のヘラミガキを加える。 ○体部内面は横方向のハケメ調整後、ナデ調整を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○在地産。 ○体部全体に煤付着。 ○I土壌5。
	甕蓋A	43	<ul style="list-style-type: none"> ○笠形を呈する。 ○口縁部は上方に若干肥厚する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○内外面共ナデ調整で仕上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○在地産。 ○口縁部外面から口縁部内面の幅約2cmにわたり帯状に煤付着。 ○I自然流路青褐色砂。
	甕A	44	<ul style="list-style-type: none"> ○胴部はゆるやかに膨らみ、短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁部は面をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部外面は縦方向のハケメ調整後、縦方向のヘラミガキ調整を施す。 ○内面は横方向のハケメ調整後、縦方向のヘラミガキ調整を加える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○在地産。 ○I自然流路黄褐色砂。
	壺F	45	<ul style="list-style-type: none"> ○外反気味に開く口縁部をもち、口縁部で下方に肥厚する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部外面は縦方向のハケメ調整を施す。 ○内面は横方向のハケメ調整後、ナデで仕上げる。 ○口縁部端面には羽状点文を施す。 ○口頸部には簾状文が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○在地産。 ○I黄褐色砂。
	壺G	52	<ul style="list-style-type: none"> ○丈高の器体から明瞭な頸部をつくらず、そのまま外反する口縁部をもつ。 ○口縁部は短く水平に折れ曲がり、端部は下方に肥厚する。 ○底部は安定した平底を呈する。 ○体部下半には焼成後外面より、穿った穿孔を1ヶ所もつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部端面には刺突文を加える。 ○口頸部から体部上半には9帯のクシ描直線文を施し、施文後口頸部間及び最終直線文間に簾状文2帯を加える。 ○口頸部から体部上半は縦方向のハケメ調整、体部下半は右上がりのハケメ調整を施す。さらに最大径部には最終的な右上がりのハケメを加える。 ○口頸部内面は横方向のハケメ調整後ヨコナデ調整を加える。 ○体部内面には縦方向のハケメ調整を施す。 ○体部下半はやや左上がりの雑なヘラミガキ調整を加える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○在地産。 ○II自然流路。
	壺H	46 47	<ul style="list-style-type: none"> ○球形にちかい器形に漏斗状に開く長い口頸部をもつ。 ○口縁部は水平に近く折れ曲がり、端部で下方に肥厚する。 ○底部は安定した平底をもつ。 ○底部中央には、焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部には波状文やキザミメを施す。 ○口頸部から体部上半には9帯のクシ描直線文を施すもの(47)、簾状文を施文するもの(46)がある。 ○口頸部は縦方向のハケメ調整を施す。 ○胴部上半は丁寧にナデで仕上げる。胴部下半は中位を横方向のヘラミガキ調整を施し、さらに下位を縦方向に全体を4ブロックに分けヘラミガキ調整を加える。 ○口頸部内面はハケメ調整後ナデ調整を施す。 ○胴部内面上位は左上がりのハケメ調整を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○在地産。 ○I自然流路黄褐色砂(46)、II攪乱(47)。
	鉢A	50	<ul style="list-style-type: none"> ○碗形の器体に直行の口縁部をもつ。 ○口縁部は面をもち、やや内方へ肥厚気味である。 ○底部はやや突出気味の安定した平底を呈する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部下半は縦方向のハケメ調整後、縦方向のヘラミガキ調整を施す。 ○体部上半には5帯のクシ描直線文を施し、施文後文様帯間に横方向のヘラミガキ調整を加える。 ○底面は一定方向のヘラミガキ調整を加える。 ○体部内面は横方向のヘラミガキ調整を加える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○在地産。 ○I黒灰色砂質土。

弥生中期

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	鉢 B 48 49	○腰部に稜をもつ器体に、短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は下方に肥厚する。	○口縁端面に刺突文をもつもの(49)がある。 ○体部には簾状文や刺突文を施す。 ○体部内面はハケメ調整後、ナデ調整を加える。	○在地産。 I 自然流路1 黄褐色砂。
	高杯	51 ○水平に広がる口縁部をもつ。 ○水平に口縁の内側に突帯を巡らす。	○杯部内外面は縦方向のヘラミガキ調整を施す。 ○口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整で仕上げている。	○在地産？ ○II 暗赤褐色砂質土。

弥生後期

弥生(後期)	甕	53 54 55	○平底から球体を呈する。屈曲して外方にひらく口縁部をもつ(53)。 ○外折する口縁部に、端部は屈曲して短く立ち上がる(55)。	○体部外面にタタキメを施し(53・55)、内面にヘラケズリ調整(54・55)を行っている。	○在地産。 ○II 暗青灰色シルト(54)、I 攪乱(53)、黄褐色(55)。
	小型丸底甕	56	○S字状に近い口縁部を呈する。	○内外面共にヨコナデ調整を施している。	○他地域産 ○II 攪乱。
	浅鉢	57	○口縁部に一条の段を呈する。	○口縁部内外面および体部外面はヨコナデ調整を施している。 ○体部内面に横方向のハケメ調整を行っている。	○他地域産。 ○II 暗黄灰色砂礫
	器台	58	○朝顔型に開く杯部を口縁部までつづく。端部は屈曲して短く立ち上がる。	○杯部内外面および脚部内面はナデ調整を行っている。 ○脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施している。	○在地産。 ○I 自然流路1 黄褐色砂
	高杯	59	○外方に開く体部に口縁部は内傾し、端部はさらに内折する。	○口縁部外面に4条の凹線文を施している。	○在地産。 ○I 灰黒色砂礫

表6 古墳時代遺物観察表

古墳時代須恵器

須恵器	杯 A	1 2 3	○立ちあがりはやや内傾し、口縁部は丸く納める。 ○底部がやや扁平なもの(1・2)。 ○小ぶりの器体で、立ち上がりが内傾し、口縁端部に段をもち、体部が丸味をもつもの(3)。	○ヘラケズリはロクロ回転を利用するもの(2・3)と、手持ちヘラケズリのもの(1)がある。	○II 土壙10(1)、II ビット12(2)、II 溝28(8)。
	杯蓋 A	4 5 6 7 8	○天井部は、やや扁平なもの(5・6)と、全体に丸みをもつもの(7・8)とがある。 ○天井部と口縁部を画する稜が突出して鋭いもの(4・7・8)がある。 ○口縁部はわずかに外へ開き、稜線部よりも口径の方が大きい。直立気味に立つもの(6・7)、内傾するもの(4・8)がある。 ○口縁端部は、水平な面をもつもの(7・8)、大きく内へ傾斜するもの(4・6)、角ばって終わるもの(5)がある。	○天井部のヘラケズリの幅が狭く広範囲に及ぶもの(5・6)、ややケズリの幅が広く小範囲に限られるもの(7・8)がある。 ○ロクロ回転左廻りのもの(4・5・7)と、右廻りのもの(6)がある。	○II 溝8(4)、II 土壙10(5)、I 土壙4(6・7)、溝28(8)。
	蓋 B	9 10	○平坦な天井部に中凹みのつまみをもつ。 ○天井部と口縁部との境界は突出した稜をなす。 ○口縁部は比較的高く直立気味である。口縁部は鋭い面をもつ。	○天井部全体の3/4程度を丁寧にヘラケズリする。 ○ロクロ回転左廻り。	○I 土壙4。

古墳時代須恵器

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
須 恵 器	有蓋高杯 11	○小形の杯に脚をつけたもので、杯部の形態は(3)と類似し全体に鋭さを欠く。 ○脚部は短く、三角透しを三方にもつ。	○杯部のヘラケズリの範囲は、全体の1/3程度で狭い。 ○ロクロ回転右廻り。 ○器壁は若干厚く、凹凸が目立つ。 ○杯部内面中央には、仕上げナデが認められる。	○I溝5。
	無蓋高杯 12	○杯部は浅く、口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸くおさめ、内側は浅い凹線がめぐる。 ○口縁部と底部とをわける稜は、2段あり鋭さを欠く。 ○稜線の下にはクシ描波状文をめぐらし、小型のつまみが1対つく。	○脚部周囲の杯底部には、ハケメ調整を施す。	○I土壌4。
	高杯 13	○脚部は短く透かしを持たない。 ○裾部近くには突帯を1段めぐらす。 ○脚端部は上方へ突出させている。		○II落ち込み。
	甕 14	○口縁部は朝顔形に短く外反、端部は上下に鋭い稜を持つ。 ○口縁部には装飾はまったく認められない。 ○体部は全形不明であるが、肩が張っている。	○体部外面は擬格子目タタキ成形後、部分的にカキ目調整する。 ○内面は当て具痕を丁寧にナデで消している。	○I土壌4。
	杯 15 16 17 18	○立ち上がりは直立気味で、口縁端部を丸く納めるもの(15)、内傾気味に立ち上がり口縁端部が内傾するもの(16)、段を構成するもの(17・18)がある。 ○受け部は水平にのび、先端を丸く仕上げるもの(15)、上方へ直線的にのびるもの(16・17・18)がある。 ○体部は全体に丸味を持っている。 ○小型・大型がある。	○体部のヘラケズリは回転を利用せず、手持ちヘラケズリするもの(15)、回転ヘラケズリするもの(16・18)、カキ目調整するもの(17)がある。 ○杯底部内面中央に仕上げナデを施すもの(18)がある。 ○ロクロの回転方向左廻りのもの(16・18)がある。	○II攪乱(15・17)、 II暗赤褐色砂質土(16)、I攪乱(18)。
	蓋A 20 21 22	○天井部はやや扁平なもの(20)、丸味を持つもの(21・22)がある。 ○天井部と口縁部を分ける稜が突出するもの(21・22)がある。 ○口縁端部は水平な面を持つもの(22)、わずかに内傾気味の面を有するもの(20・21)がある。	○天井部は回転を利用したヘラケズリで、天井部全体の2/3程度に及ぶもの(86・87)、1/2程度の範囲に限られるもの(22)がある。 ○ロクロの回転方向左廻りのもの(20・22)、右廻りのもの(21)がある。 ○ヘラケズリの部分以外はすべてヨコナデ調整を施す。	○II暗赤褐色砂質土。
	蓋B 19	○丸味をもつ天井部から外方に開く口縁部。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○天井部と口縁部の界に稜がみられる。	○天井部はヘラケズリ後ヨコナデ調整を施し、他はヨコナデ調整を行う。	○I試掘第1ピット 黄褐色シルト(23・25)。
	無蓋高杯 23 24 25	○口縁部は内湾気味に立ち上がるもの(23)、外上方へ直線的にのびるもの(24)がある。 ○口縁端部は内側に傾斜する広い面をもつもの(23)、丸くおさめるもの(24)がある。 ○口縁部と底部が明瞭な稜線が区分されるもの(23)、稜線が鋭さを欠き稜線下にクシ描波状文をめぐらすもの(24)がある。 ○脚部はやや長く裾部近くに低い段をもつ(25)。	○脚部の透かしが長い三角形透かしで、当初4方向からの装飾を予定していたが、その配置がきわめて不均等なので、3方からはいるものの、1方はヘラで穿って刻みを加えるのである。 ○脚端部は単純に四角くおさめ、装飾はみられない。 ○底部は回転を利用したヘラケズリ調整している。 ○脚裾部には平行タタキメが残存している。	○I黄褐色シルト(23・25)、II攪乱(24)。
	有蓋高杯 26	○立ち上がりは低く直立し、端部に段をもつ。 ○受け部は水平にのび、先端は鋭さを欠く。 ○脚部は短く、太い幅の狭い長方形透かしを3方にもつ。 ○脚端部には段を持ち、拡張している。	○ヘラケズリは底部の1/3程度の範囲に限られる。ケズリの幅は広く、浅い。 ○脚部上方にはカキメ調整を施す。	○II攪乱。

古墳時代須恵器

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	越	27 ○口頸部は一旦が外反したのち、段をつくって外上方へのびる。 ○口頸部にはそれぞれの雑なクシ描波状文をめぐらす。 ○体部には肩をつくり、肩部直下にクシ状原体による列点文を施す。 ○口縁端部は外方突出する広い面をもつ。		○I 上げ土。
	短頸壺	28 ○短い口縁がわずかに内弯気味に直立する。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○体部上半はカキメ調整で仕上げられる。 ○体部下半はヘラケズリ調整を施す。	○II 攪乱。
	甕	29 ○口縁部は朝顔形に外反する。 30 ○口縁端部は四角くおさめ、端部直下に断面三角形の突帯をめぐらすもの(32)、端部が上下に拡張気味で口縁近くに断面三角形の突帯をもつもの(29・30・33・34)、突帯を省略するもの(31)。 31 ○口頸部には低い断面三角形の突帯をもち、その上下に1帯のクシ描波状文を巡らすもの(33)がある。	○口頸部にタタキメを残すもの(29)がある。	○I 攪乱(29・33)、 II 攪乱(30・31・32・34)。
	壺	35 ○口縁部は朝顔形に外反する。 36 ○口縁端部は四角くおさめ、端部直下に断面三角形の突帯をめぐらし、頸部には断面三角形の突帯を持ち、その下に1帯のクシ描波状文をめぐらすもの(35)がある。 37 ○口縁端部が上方に立ち上がり、その下に突帯を有するもの(36・37)がある。	○口頸部にカキメ調整を施すもの(36)がある。	○I 排水用溝内(35)、 I 黄灰色砂質土(36)、 I 攪乱(37)。
	器台	38 ○杯部は全体に浅めで、2帯の低い断面三角形の突帯をもつ。 ○脚部は細めでわずかに外反しながら広がり、ほぼ同大の三角形透かしを8方にもつ。	○杯部は平行タタキメ調整後、ヨコナデ調整で仕上げる。 ○脚部はカキメ調整を施す。 ○杯部は突帯間と脚部には、1帯のクシ描波状文を施す。	○II 上げ土。

古墳時代土師器

土師器	鉢	55 ○丸味をもつ体部に、屈折して上方に直立する口縁部。	○口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。 ○体部内外面はナデ調整を施す。	○他地域産。 ○II 暗赤褐色砂質土。
	椀	56 ○口縁部は若干内弯し、端部はやや尖り気味で肥厚する。 ○底部は安定した平底を呈する。	○口縁部内外面のみ、ヨコナデ調整を施す。 ○体部外面は未調整で、内面は一部板ナデ調整後ナデ。	○他地域産。 ○II 暗赤褐色砂質土。
	高杯A	57 ○椀形の杯部をもつ高杯。 58 ○杯部がやや浅い形態で、口縁部が直立気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げるもの(57)、口縁部で若干内弯気味となり端部を丸く仕上げ、全体に薄手のもの(58)がある。 ○杯部内面には、放射状のやや太い暗文を持つものがある。	○口縁部内外はヨコナデ調整で仕上げる。 ○杯部内外面ともにヨコナデ調整を施すもの(58)、杯底部に縦方向のハケメ調整を加えるもの(57)がある。	○他地域産。 ○II 暗赤褐色砂質土(57)、 黄褐色シルト質粘土(58)。
	高杯B	59 ○杯部は外上方へ広がる杯底部に、段を構成し、口縁部に続く。 ○口縁部は内弯気味に上方へのびる。 ○脚部は細く「ハ」の字形に開く。	○口縁部はヨコナデ調整で仕上げる。 ○杯底部外面は縦方向のハケメ調整後ヨコナデを加える。 ○脚部内面にはシボリメが残存する。	○他地域産。 ○I 黄褐色シルト。
	高杯C	60 ○口縁部は外上方へ直線的に開き、先端で小さく外へ折れる。 ○口縁端部は丸く納められている。	○口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。	○在地産。 ○II 暗赤褐色砂質土。
高杯	61 ○脚部は6~7面のかるい面を構成し、「八」の字形にのび、裾部でさらに大きく開く。 ○脚端部は面をもっている。	○外面はヨコナデ調整を施す。 ○脚部内面はシボリメを残し、裾部では横方向のハケメ調整を加える。	○他地域産 ○II 暗赤褐色砂質土。	

土師器

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	高杯 D	62 ○杯部は外上方へのび、先端でさらに大きく外反する。 ○口縁端部は角張り、面をもつ。	○杯部の内外面はヨコナデ調整を施す。	○他地域産。 ○I 黄褐色砂質土。
	壺 A	63 ○二重口縁をもつ。 ○頸部直立気味にのび、上端で短く外反する。 ○口縁部は直立気味に立ち上がり、丸く仕上げる。	○口縁部内外面はハケメ調整後、ヨコナデ調整を加える。 ○頸部内外面はハケメ調整を施す。	○在地産。 ○II 攪乱。
	壺 B	64 ○口縁部は短く外上方へのび、端部は尖り気味に仕上げる。 ○口頸部と体部の境は明瞭な稜をもつ。 ○体部は強く肩が張り、扁球形を呈する。底部丸底をなす。 ○体部最大径のやや上位に2条の沈線を施す。 ○須恵器の直口壺を模倣した形態である。	○口縁部内外面はハケメ調整を施す。 ○体部外面は磨滅が著しいため調整は不明。 ○体部内面は最大径部分を横方向にヘラケズリ後、上半分を縦方向にヘラケズリ調整を加える。下半分は丁寧にナデで仕上げる。	○他地域産。 ○I 黄褐色シルト。
	壺 A	65 ○二重口縁。	○口縁部内外面はハケメ調整後、ヨコナデ調整で仕上げる。	○在地産 ○II 溝25
	壺 B	66 ○短い直口の口縁部をもつ。	○口頸部内面と外面は横方向のヘラミガキ調整する。 ○体部内面上部には粘土紐の継ぎ目を明瞭に残す。	○在地産？ ○I 溝5。
	土製支脚	67 68 ○裾広がりの安定した脚部に、大きく内弯気味に開く台状部をもつ。	○脚部外面は縦方向のハケメ後、ナデを加える。 ○脚部・台部共に内面は、ハケメ調整で仕上げる。 ○台状部と脚部の接合方法は貼り付けにより接合部の周囲に粘土を補強している。	○在地産。 ○(70) 台状部先端の内外面に煤が付着。 ○I 溝5。
	甕 A	70 ○口縁部は内弯気味に開き、端部で内傾する広い面をもつ。	○体部外面は横方向のハケメ調整を施す。	○他地域産。 ○II 溝8。
	甕 C	71 ○口縁部は短く直立気味に立つ。 ○最大径は体部のやや上位にもつ。 ○外面の凹凸はあまり目立たない。 ○底部は丸底である。	○外面調整は体部に左上がりのハケメ調整後、底部に横方向のハケメ調整を加えて仕上げる。 ○口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向のハケメ調整後、ナデ調整する。	○在地産。 ○体部から口縁部にかけて煤、二次焼成痕が認められるが底部中央の径7.5cmに煤は付着しない。 ○I 土壌5。
		72 ○口縁部は外反し、端部で面をもつ。 ○体部は肩の張りが小さい。	○口縁部内外面はハケメ調整で仕上げる。 ○体部上半は横方向のハケメを部分的に加える。 ○体部の最大径部分には縦ハケメを施す。	○在地産。 ○体部最大径部分より上位に煤の付着有り。 ○I 溝5。
		73 74 ○口縁部はやや外反気味にのび、端部を丸くおさめる。 ○口縁部と体部との境はなだらかで稜を持たない。	○口縁部内外面ともハケメ調整し、その後外面のみナデ調整を加えるもの(75)と、内外面ともヨコナデ調整を加えるもの(76)がある。 ○体部内面は粘土紐の継ぎ目を明瞭に残している。	○在地産。 ○口縁部から体部上半にかけて煤二次焼成が認められる。 ○(73) II 土壌10(74) I 土壌5
	甕 D	75 76 77 ○口縁部は強く外反し、端部を丸く納めるもの(75・76)と口縁部が外上方へ直線的にのび端部に面をもつもの(77)がある。 ○口頸部と体部の境界に稜をもつもの(77)と持たないもの(75・76)がある。 ○(76)ハケメ6条/cm、(77)ハケメ4条/cm。	○体部外面は左上がりのハケメ調整をするもの(76・77)とナデ調整のみで仕上がるもの(75)がある。 ○口縁部は内外面共ハケメ調整後ヨコナデを加えるもの(76)と、外面のみヨコナデ・内面のハケメをそのまま残すもの(77)がある。 ○体部内面は縦方向のナデ調整を施すもの(77)と、ヘラケズリを加えるもの(75)がある。	○他地域産(75・76)、在地産(77)。 ○II 溝27(75)、I 溝5(76・77)。

土師器

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
移動式竈	78	○「ハ」の字形の体部に、円柱状の把手と、長方形の鐔が付く。	○体部外面は縦・横方向、裾部は横方向のハケメ調整を施している。 ○体部内面は横方向のハケメ調整後、ナデ調整を施している。裾部は縦方向のエビナデ調整を施している。	○在地産。 ○I溝5。
高杯A	69	○椀形の深い杯部に、裾で大きく開く脚部をもつ。 ○口縁部は直立気味に立ち上がり、端部で内側へ傾斜する面をもつ。 ○脚端部は面を持って仕上げる。	○口縁部内外面はヨコナデ調整する。 ○脚部内面にはシボリ目を明瞭に残し、棒状工具による突きさしが杯底部にまでおよぶ。	○他地域産。 ○I土壌5。
甕B	79	○口縁部は短く直立し、端部を尖り気味におさめる。 ○体部は張りが少なく、底部は安定した平底である。	○口縁部内外面はヨコナデ調整で仕上げる。 ○体部外面は縦方向のハケメ調整を施す。 ○内面はナデ調整を施すが、一部に粘土紐の継ぎ目が認められる。 ○底面は一部横方向のハケメ調整を施す。	○在地産。 ○口縁部から体部にかけて二次焼成痕及び、煤付着あり。 ○II暗赤褐色砂質土。
甕C	80 81 82 83 84 85	○口縁部は短く外反するもの(80・81・83・85)、直立気味に立つもの(82・84)がある。 ○口縁端部は面をもつもの(80)、丸く納めているもの(81・83・85)がある。 ○口頸部と体部との境界は比較的明瞭な稜を持つもの(80)、明瞭な稜をもたずなだらかに移行するもの(81～85)がある。 ○体部は全体に凹凸が激しく粗雑な感がある。 ○体部下半には成形の単位を示す段が明瞭に認められる(82・84・85)。 ○底部は丸底のもの(82・85)、安定した丸底のもの(84)がある。	○口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はハケメ調整するもの(80・85)、ハケメ調整後ヨコナデを加えるもの(81・82)がある。 ○体部外面は左上がりのハケメ調整を施すもの(80・84)、全面に部分的にハケメ調整するもの(81・82・83)がある。 ○体部内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に見られる。 ○体部内面はナデ調整で仕上げる。 ○底部は横方向のハケメ調整するもの(82～84)がある。	○他地域産(80)、在地産(81～85)。 ○I黄褐色シルト(80・81)、II暗赤褐色砂質土(82・83・85)、I黄褐色シルト質粘土(84)。 ○体部全体に煤の付着するもの(80・83・84)、外面全体に強い2次焼成が認められるもの(80)、底部周辺に2次焼成痕の認められるもの(85)がある。
鍋A	86	○口縁部は短く外反し、端部は外方へ肥厚気味におさめる。 ○口頸部と体部の境は明瞭な稜をもつ。 ○体部は肩が強くはる形態をとるものと思われる。	○口縁部内外面はハケメ後、ヨコナデ調整を加える。 ○体部外面は部分的にハケメ調整を施す。 ○体部内面はナデ調整する。	○他地域産。 ○I黄褐色シルト。
鍋B	87	○口縁部はなだらかに外反し、端部に凹面をつくる。 ○口頸部から体部にはなだらかに移行する。 ○体部は口径より小さく、直立気味である。	○口縁部内外面はハケメ調整後、ヨコナデを施す。 ○体部外面は左上がりのハケメ調整で仕上げる。ハケメは8条/cm程度で細かい。 ○体部内面は丁寧なナデ調整を行う。	○他地域産。 ○II暗赤褐色砂質土。
甕	88	○体部は直立気味に立つ。 ○口縁端部は内傾する面をもつ。	○体部は縦方向のハケメ調整する。 ○口縁部内外面はハケメ調整後、ヨコナデ調整する。 ○体部内面は縦方向のヘラケズリ調整する。	○在地産。 ○I試掘。
甕	89 90 91	○口縁部は外反気味にのび、口縁端部で角張るもの(89)、小さな面を持つもの(90)、丸く納めるもの(91)がある。 ○口縁部と体部の境には、明瞭な稜をもたない。 ○体部は最大径の位置が低く、下ぶくれの形態を呈するもの(89)、体部の張りが小さいもの(90)がある。	○口縁部外面はハケメ調整後、ナデ調整を加えるもの(89・91)、ナデ調整のもの(90)がある。 ○口縁部内面はハケメ調整後、丁寧なヨコナデ調整で仕上げるもの(90・91)、ハケメ調整のみのもの(89)がある。 ○体部内面はナデ調整を施すが、粘土紐の継ぎ目を明瞭に残す。	○在地産。 ○I黄褐色シルト(89・90)、II暗赤褐色砂質土(91)。

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
韓式系土器	甕	92 ○なだらかに外反する口縁部(92)。 94 ○平底(94)。	○口縁端部に一条の凹線文を施す。 ○外面に平行タタキメ(92)、格子タタキメ(94)を施す。 ○内面はナデ調整。	○Ⅰ黄褐色シルト(94)、Ⅰ試掘黄褐色シルト(92)。
	甌	93 ○直立する口縁部、端部は面をもつ(96)。 96 ○平底(93・97)。 97	○外面に平行タタキメを施す。 体部下方に一条の沈線を加える(97)。	○Ⅱ暗赤褐色砂質土(93・96)、Ⅰ溝5(97)。
	把手	95 ○断面円柱状。	○上部に深い凹み、下部に刺突を施す。	○Ⅱ攪乱。
	不明	98 118	○格子タタキメ(98~100・102・103~110)。 ○格子タタキメと沈線(101)。 ○平行タタキメ(111~113)。 ○平行タタキメと沈線(114・117)。 ○縄席文(115・116・118)。	

土器	製塩土器	1 5		○内外面にナデ調整を施す。	○Ⅱ溝21(4・5)、Ⅱ溝22(1)、Ⅱ溝26(3)、Ⅱ溝27(2)。
		6 8		○外面ナデ調整。 ○内面板状工具によるナデ(6・7)、貝殻によるナデ(8)。	○Ⅱ暗赤褐色砂質土(6)、Ⅱ黄灰色砂(7)、Ⅰ出土地不明(8)。
		9 13		○内面にナデ調整を施す。 ○外面をタタキ調整する。	○Ⅱ黄褐色砂質土(11)、Ⅱ暗青褐色砂質土(10)、Ⅰ出土地不明(9・12・13)。
土製品	土錘	14	○全面に丁寧なナデ調整を施す。	○長さ3.9cm 幅1.0cm 厚さ1.1cm 重さ4.0g ○色調 淡茶褐色	○在地産。 ○Ⅱ耕作用溝。
	紡錘車	15	○算盤珠の形をもつ。 ○全面に丁寧なナデ調整を施す。	○長さ4.75cm 幅4.8cm 厚さ2.7cm 重さ61.9g ○色調 淡乳褐色	○他地域産。 ○Ⅱ暗赤褐色砂質土。
鉄製品	鑄造鉄斧	16	○断面空洞。	○長さ(5.3)cm 幅(5.0)cm 厚さ2.2cm、(0.5)cm	○Ⅰ溝6。
石製品	滑石製双孔円板	17	○側縁を粗く打ち欠く。	○長さ2.45cm 幅2.75cm 厚さ0.35cm 重さ4.2g	○Ⅱ暗赤褐色砂質土。
土製品	輪羽口	18		○推定外径10.0cm 内径3.2cm 重さ149.8g	○在地産。 ○Ⅰ暗茶褐色砂混り。
木製品	柱根	19	○著しい風化の為、遺存状態不良。	○(19)長さ54.5cm 幅17.4cm 厚さ13.0cm	○Ⅱピット33。
		20		○(20)長さ32.6cm 幅14.0cm 厚さ11.2cm	

表7 飛鳥時代土器観察表

器形	番号	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	1	○宝珠つまみを有する。 ○ツマミは比較的高く乳頭状を呈する。	○天井部外面はヘラケズリ後、ナデ調整を加える。 ○内面がヨコナデ調整後、中央部を仕上げナデを加える。	○I排水溝内。
	2 3	○立ち上がりは短くのび、口縁部は尖り気味におさめる。 ○受け部は外上方に直線的にのびるもの(2)、上方に立ち上がるもの(3)があり、端部は丸い。 ○体部は浅く若干尖り気味におさめる。	○体部のヘラケズリの範囲は全体の1/4程度である。 ○他はヨコナデ調整で仕上げる。	○I黄褐色砂質土(2)、I攪乱(3)。
	4	○口頸部は短く外反気味にたちあがり、端部で凹線をもつ。	○口縁部は内外面はヨコナデ調整する。	○I青灰色砂礫。
	5	○口縁部は若干内傾し、端部で内側へ傾斜する面をもつ。 ○体部は深く底部が安定した平底を呈する。	○口縁部は内外面ともヨコナデ調整する。 ○底部外面は未調整、内面は丁寧にナデで仕上げる。	○I土壌3。
土師器	6 7 8	○口縁部の内側には段を構成する。 ○体部はやや深い形態を呈する。	○底部は横方向のヘラケズリを施す。 ○口縁部は内外面ともヨコナデ調整後、外面は密な横方向のヘラミガキ調整する。 ○内面は右上がりとし左がりの斜放射状暗文を施すもの(7)、2段放射状暗文を施すもの(8)、右上がりの斜放射状暗文を施すもの(6)がある。	○他地域産。 ○I灰褐色砂質土(8)、試掘(6・7)。

遺構・層	詳細																		計							
	深A	深B	深C	深D	深E	深F	深G ₁	深G ₂	深H	深I	浅A	浅B	浅C ₁	浅C ₂	浅D	浅E	浅F	浅G	浅H	浅H ₂	壺A	壺B	壺C	蓋		
暗黄灰色粘土	8	2	0			5	0		1	1		3	6	1	5	1										33
ピット・土城	5					2			1				1	1					1							11
黒灰色粘土	70	6	32	1		14	7	2	11		3	4	30	1	2	23		2	4	1					1	215
黒灰色粘土上面	9	1	11			1	8	2	7			2	9		3	5			2	2						62
溝35	19	5	12	1			1		1	1		4	6	1	2	2										55
土壙22	11	1	2			2					1	2	2		5	1									1	28
黒灰色砂質土下層	17	4	43	2		1	8	1	4		3	1	14		4	16			4	2			1		1	126
黒灰色砂質土	75	13	55	3		29	9	3	9	1	7	6	45	2	14	32	3	1	6	3			1			317
溝33	15	3	53	3	1	1	6	1	3				20	1	9	10						1	1	1	1	130
黄灰色シルト	14	1	20			4	1	1	4		1	1	4		5	7				1	1				1	66
攪乱	2	4	10	1		4		2	1	2			1		1	4			1	2						35
	245	40	238	11	1	59	44	10	43	4	17	23	138	7	50	101	3	3	18	11	2	3	1	5	1077	

表8 各遺構・層出土の縄文土器、器種別点数（口縁部）

		岩石名		数
火成岩	深成岩	花崗閃緑岩（黒雲母一角閃石花崗閃緑岩）		1
		閃緑岩（細粒閃緑岩）		2
		斑れい岩（細粒斑れい岩、変質斑れい岩）		1
	半深成岩	石英斑岩		
		ひん岩		1
		輝緑岩（変質輝緑岩）		6
	火山岩	アブライト		
		流紋岩		8
		安山岩		
	堆積岩	軽石		2
砂岩（珪質～石英質砂岩、凝灰質砂岩）		6		
頁岩～粘板岩（凝灰頁岩）		3		
シルト岩				
チャート（結晶）		3		
凝灰岩		4		
変成岩	凝灰角礫岩		1	
	輝緑凝灰岩			
	黒色千枚岩		6	
	緑色片岩			
	緑泥石片岩		2	
	角閃石片岩		1	
	石英片岩（緑簾石一石英片岩、ざくろ石一石英片岩）		2	
	絹雲母一石英片岩		4	
	黒雲母一石英片岩（白雲母一黒雲母一石英片岩）		1	
	白雲母一石英片岩		4	
その他	角閃石一白雲母一石英片岩（白雲母一角閃石一石英片岩）		4	
	角閃石一石英片岩		3	
	紅簾石一白雲母一石英片岩		5	
	ゾイサイト片岩			
	ホルンフェルス			
	滑石			
	角礫岩			
集塊岩		1		
				128

表9 縄文時代各遺構・層出土の石材一覧

Ⅵ 附 編

1. 東大阪市鬼塚遺跡試料 花粉及び植物計酸体分析報告

このたび東大阪市文化財協会殿より、東大阪市鬼塚遺跡試料の花粉分析及び植物計酸体（プラントオパール）分析の御依頼をうけ、分析完了いたしましたので御報申し上げます。

I. 花粉分析

1. 試料

試料は、計15点で下記表—10に土質及び花粉・胞子化石産出傾向等についてまとめた。

表—10 鬼塚遺跡試料表

試料番号	地 点	土 質	花粉・胞子化石産出傾向 ¹⁾
1	O	黒色シルト質粘土	RR
2		黒灰色砂質土	RR
3		暗黄灰砂質粘土	RR
4		Z	黒灰色砂質粘土
5	I	黒灰色砂礫	RR
6		暗青灰色砂質土	RR
7		暗茶灰色粘土	RR
8		黄灰色粘土	RR
9	O	暗赤褐色砂質土	RR
10		暗黄褐色砂質土	RR
11		Z	黄灰色シルト
12	II	黒灰色砂質土	RR
13		暗褐色砂質土	RR
14		黒灰色粘土	RR
15		暗灰色粘土	RR

1) 花粉・胞子化石産出傾向は、R：少ない、RR：極めて少ない、である。

2. 分析方法

2) 花粉・胞子化石の抽出は、試料20g（湿重）を秤量し、Hcl → 48%HF → 重液分離（ZnBr）→ アセトリシス処理 → 10%KOHの順に物理・化学処理を行った。残渣をグリセリンゼリーで封入し検鏡に供した。

表11 鬼塚遺跡試料花粉分析結果

Sample	OZ-I								OZ-II						
	No 1	No 2	No 3	No 4	No 5	No 6	No 7	No 8	No 9	No10	No11	No12	No13	No14	No15
Pollen & Spores															
Pinus		2							1						
Podocarpus									1						
T.C.T		1											1		
AP-1	0	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0
Alnus										1					
Celtis-Aphananthe										1					
Ulmus-Zelkova		1						1							
Araliaceae								1							
AP-2	0	1	0	0	1	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0
AP	0	4	0	0	1	0	1	1	2	2	0	0	1	0	0
Moraceae										2					
Polygonum sect. Persicaria										1					
Caryophyllaceae												1			
Chenopodeaceae	1	3								2		1		1	3
Cruciferae										1					
Artemisia	1	3	5	7	2	4	4	7	1	43	11	11	18	30	12
Carduoideae (except Artemisia)								1		1	1			1	
Cichorioideae		1	2	2		2		2		1			2	4	3
Gramineae	1	6				1			2	8	1	3	1		
NAP	3	13	7	9	2	7	4	10	3	59	13	16	21	36	18
Trizonoporate pollen					1										
Trizonocolporate pollen	2		3	1				4	1	1			2	1	2
FP	2	0	3	1	1	0	0	4	1	1	0	0	2	1	2
Lycopodium				1	1					1					
Pteris		1		3	1	1				4	1				1
Polypodiaceae	1									1					
Monolete spore	5	10	4	4	6	5	45	12	8	31	8	1	5	3	22
Trilete spore	1	14	1					1		2					
FS	7	25	5	8	8	6	45	13	9	38	7	1	5	3	23
Total Number	12	42	15	18	12	13	50	28	15	100	20	17	29	40	43

3. 分析結果

分析結果は、個体数で表示しまとめた（表—11）。主要花粉・孢子化石と試料内容の状況を PLATE—1—1～1—3として添付したので参照されたい。

今回の試料中より次の化石が検出された。

《AP—1（針葉樹花粉）》

Pinus（マツ属），Podocarpus（マキ属），T.C.T.（Taxaceae・イチイ科，Cupressaceae・ヒノキ科，Taxodiaceae・スギ科，この3科の中の何れかであるが判別が困難なもの）

《AP—2（広葉樹花粉）》

Alnus（ハンノキ属），Celtis（エノキ属），Aphananthe（ムクノキ属），Ulmus（ニレ属），Zelkova（ケヤキ属），Araliaceae（ウコギ科），

《NAP (草本花粉)》

Moraceae (クワ科), Polygonum (タデ属), Persicaria (サナエタデ属), Caryophyllaceae (ナデシコ科), Chenopodiaceae (アカザ科), Cruciferae (アブラナ科), Artemisia (ヨモギ属), Carduoideae (キク亜科), Cichorioideae (タンポポ亜科), Gramineae (イネ科),

《FP (形態分類花粉)》

Trizonoporate pollen (三孔型花粉)。

Trizonocolporate pollen (三溝孔型花粉)。

《FS (羊歯類孢子)》

Lycopodium (ヒカゲノカズラ属), Pteris (イノモトソウ属), Polypodiaceae (ウラボシ科),

Monolete spore (単条溝型孢子),

Trilete spore (三条溝型孢子),

以下分析結果について述べる。

OZ—I・OZ—IIともに検出個体数が少なく、OZ—IIのNo10で100個体検出されるが他の試料では50個体以下と極めて少ない。全試料でヨモギ属、単条溝型孢子が検出され、それらが少ない検出個体数の中では比較的多く検出される。樹木花粉はほとんど検出されなかった。

OZ—I地区では縄文晩期のNo2試料において針葉樹マツ属とT.C.T. (イチイ科、ヒノキ科、スギ科の中の何れかではあるが判別困難)が検出された他はイネ科が6個、単条溝型孢子10個、三条溝型孢子14個等極めて少ない。

No3、No4、No8試料では、樹木花粉は検出されず僅かに草本のヨモギ属、キク亜科がみられるのみである。

OZ—II地区では、No10にはやや多くの花粉化石が認められ、広葉樹のハンノキ属、エノキ属—ムクノキ属の他草本のヨモギ属が著しく多く、他にアカザ、イネ科などが若干みられる。

その他の試料No14、No15等もこれらの花粉構成は大きな差異はない。

従って、草本の生育した環境がこれら分析結果から推定できる。

なお、PLATE—1—1のNo5以下およびPLATE—1—2、1—3に示したように分析結果の残渣中には花粉・孢子化石は極めて少なく黒色の植物組織が存在している。

II. 植物珪酸体 (プラントオパール) 分析

1. 試料

分析試料は、OZ—IIのNo.11~No14までの4点である。表12はこれらの試料表である。

2. 分析方法

試料の秤量 (湿重10g) → H₂O₂処理 → 遠心分離法により水洗 → 重液分離 → 封入 (キシロールバルサム) → 検鏡 (×400)。

表12 試 料 表

試料番号		土 質	プラントオパール産出傾向 ¹⁾
O Z II	No 11		C
	12	土質については、花粉分析の	C
	13	試料表（表-10）を参照されたい。	C
	14		C

1) 産出傾向 C：普通

3. 分析結果

各試料から検出されたプラントオパール（以下同一表現）は、佐瀬・近藤（1974）の分類基準に従い、大型（ファン型、棒状型、ポイント型）、小型（ササ型、ヒゲシバ型、キビ型、ウシノケグサ型、その他）、ヘアー、樹木（はめ絵パズル状、平板状、ブレイド状）、起源不明等の形態に分けてその検出個体数を表13に記した。このなかで産出頻度の高い種については合計を基数とする比率のダイアグラムを作成し図63に表示した。さらに写真図版 PLATE—2—1 を作成したので参照されたい。

図63でも明らかなおり4試料とも大型珪酸体の占める割合が86%以上と非常に高かった。このうち、ファン型と棒状型が高率で出現し、ポイント型は10%前後であった。

小型珪酸体は、ササ型とキビ型が低率ながら連続して検出された。佐瀬（1980）によれば植物分類グループと密接な関係がみとめられるのは小型珪酸体であり大型珪酸体はあまりみとめられないとされている。

ササ型の給源植物はタケ亜科にみとめられ、とくにササ類に多いとされている。キビ型は、キビ亜科に特徴的でありダンチク亜科、スズメガヤ亜科等にもみとめられる。

今回多産したファン型は、イネ科の機動細胞起源のものであり、棒状型は長細胞起源のものである。これらの大型珪酸体はイネ科にすべて含まれており、特定の植物には限定されない。

従って、今回の分析では小型珪酸体が低率であったので植物分類グループとの対応は不明であった。

引用文献

- 佐瀬・近藤 （1974） 北海道の埋没火山灰土腐植層中の植物珪酸体について
帯広畜産大学学術研究報告、第1部 8、P.465—483
- 佐瀬 隆 （1980） 南部浮石層直下の埋没土壌の植物珪酸体分析
第四紀研究 vol.19、No. 2、P.117—124

第63図 鬼塚遺跡試料主要プラントオパールダイアグラム

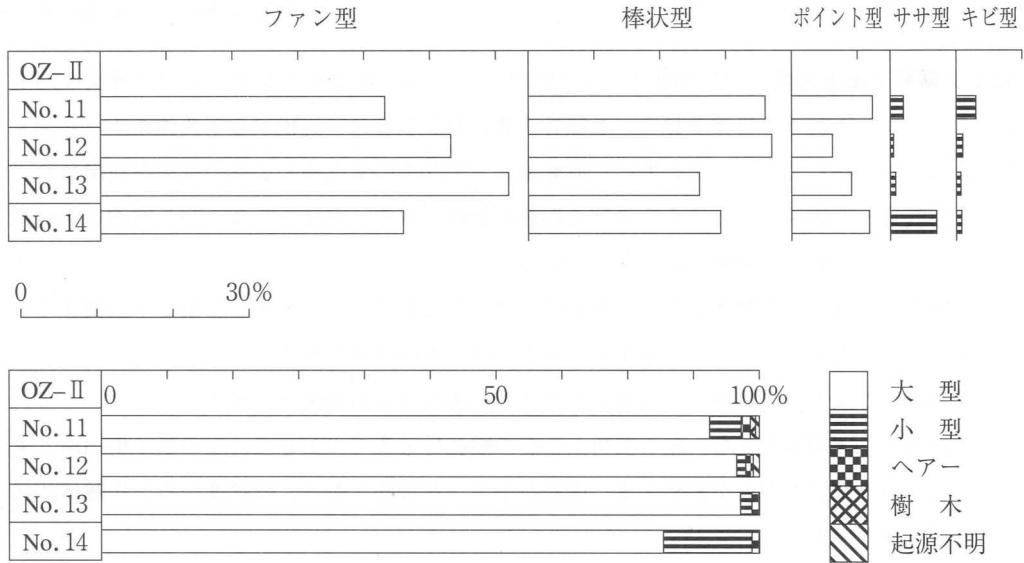


表13 鬼塚遺跡試料プラントオパール分析結果

試料 プラントオパール		OZ-II			
		No11	No12	No13	No14
大 型	ファン型	116	200	227	154
	棒状型	97	141	97	100
	ポイント型	33	24	34	40
		246	365	358	294
小 型	ササ型	6	1	3	23
	ヒゲシバ型	1			1
	キビ型	8	4	3	3
	その他				14
		15	5	6	41
ヘ ア ー	マクロヘアー	2	2	3	1
	マイクロヘアー	1			
		3	2	3	1
樹 木	はめ絵パズル状		1		
	平板状	2			1
		2	1	0	1
起源不明		1	4	1	1
プラントオパール		267	377	368	338
珪藻					+
海綿骨針				+	

2. 鬼塚遺跡出土人骨について

長野県看護大学 多賀谷昭

OZ I 土壌墓 1 出土人骨 複数個体の人骨が出土している。骨は風化が著しいので確実な同定ができないが、四肢骨の骨体多数と、下顎骨 8 個、およびそれに釘植する永久歯 29 本と乳歯 4 本の計 33 本が残存しており、この他に、遊離歯として 56 本の永久歯と 2 本の乳歯が検出されている。四肢骨と遊離歯の一部に火を受けた形跡が認められる。四肢骨の多くは土壌内の北西部から出土し、ほぼ北西—南東方向に向いている。

- ・ 下顎骨 1：成人の下顎体から右下顎枝にかけての部分で、右の犬歯から第 2 小臼歯までの 3 本、左の犬歯から第 3 大臼歯までの 6 本の計 9 本の歯が釘植する。
- ・ 下顎骨 2：成人の下顎体で、右第 1・第 2 小臼歯の計 2 本の歯が釘植する。
- ・ 下顎骨 3：下顎体のうち、左下顎角から右の頤孔付近までの部分で、左の第 1 小臼歯と第 3 大臼歯の計 2 本の歯が釘植する。歯冠が小さく女性的である。咬耗度から、年齢は 20 代の可能性が大きい。
- ・ 下顎骨 4：成人の左下顎体の一部で、第 2 小臼歯と第 1 大臼歯の計 2 本が釘植する。第 2 小臼歯は咬頭が平坦になるまで摩耗している。
- ・ 下顎骨 5：成人の右の下顎体と下顎枝の大部分で、右の大臼歯 3 本が釘植する。第 3 大臼歯には、歯冠の頬側に齧食がみられる。
- ・ 下顎骨 6：小児の下顎骨で、左右の乳臼歯計 4 本と、左右の切歯と犬歯および第 1 大臼歯の計 8 本が釘植する。このうち、切歯と犬歯はいずれも萌出の途中であり、左右とも第 1 小臼歯は萌出前で埋伏している。これらの状態から、年齢は 7 から 9 歳と推定できる。
- ・ 下顎骨 7：成人の下顎体で、比較的小さく、女性と推定される。左右の第 2 大臼歯が釘植し、その咬耗度から、年齢は 30 代以降と推定される。
- ・ 下顎骨 8：下顎体の一部であるが、歯は釘植していない。

以上のことから、この土壌には少なくとも成人 6 個体と小児 1 個体をふくむ 8 個体以上が埋葬されていたことになる。残存部位が四肢骨と下顎骨に偏っていることと骨の配置とから、再埋葬と考えられる。

OZ I 土壌墓 2 出土人骨 四肢骨と頭蓋骨および歯が残存するが、骨は風化が進んでおり、部位の正確な同定はできない。四肢骨の多くは、大きさの近いものが数本ずつまとめられた形で出土している。歯では釘植した状態で出土した永久歯 18 本と乳歯 9 本のほか、遊離した永久歯 23 本が検出された。一部の四肢骨に火を受けた形跡が見られる。

頭蓋骨は、南東の隅近くから一個と中央からやや北西に寄った位置から他の一個が出土している。前者は後頭骨と左の頭頂骨、側頭骨、およびこれと関節する左の下顎枝の一部からなる。後者は頭頂骨と思われる骨片と下顎骨で、下顎体の前半は失われて左右に分離しており、右の第 1 から第 3 大臼歯と左の第 2・第 3 大臼歯の計 5 本が釘植している。後者の上顎骨は残って

いるが、右上顎の第2・第3臼歯が下顎歯と咬合した状態で出土し、また、下顎骨の前部に相当する位置から、この個体の小臼歯と推定される歯が一本検出されている。大臼歯には咬耗による象牙質の露出が認められ、年齢は30代以上と推定される。

これらの頭蓋骨とは別に、中央やや南よりの位置から歯が20本出土している。上・下顎とも骨は風化して土塊となっているが、これらの歯は骨に釘植した位置関係を保って出土しており、一個体分と判断できる。このうち、9本は乳歯で、全部の乳臼歯と左の下顎乳犬歯からなり、残り11本の永久歯は、上顎の右第1大臼歯、右中切歯、左犬歯、下顎の左右の切歯と犬歯および左第1大臼歯からなる。歯冠の形成状態から、5から6歳の小児と推定される。

以上のことから、この土壌には少なくとも2個体の成人と1個体の小児がふくまれている。骨の配置からみて、四肢骨は分離し、頭蓋は下顎骨が関節した状態で埋葬されたものと推定される。再埋葬であるか、あるいは災害等により半ば白骨化した遺体を葬ったものと考えられる。

OZII自然流路3出土人骨 下顎骨を伴わない頭蓋骨1個が出土している。焼けた骨はふくまれていない。頭蓋骨は、成人のものと推定される頭蓋冠で、後頭骨から左右の側頭骨および右上顎骨の歯槽突起付近が残存し、頭蓋底を上に向けている。右上顎骨には第1または第2大臼歯が釘植する。このほかに、右の下顎第1・第2小臼歯と第1大臼歯と推定される計3本の遊離歯が検出されている。

OZII木棺墓1人骨 出土状態：全体として各骨はほぼ埋葬時の位置にあるものと思われ、？を頭位とした仰臥位で埋葬されている。頭部は顔面を右に向けている。下顎骨の関節突起は左でやや後方にずれているが、ほぼ側頭骨と関節した状態である。体幹は前面を上に向けている。上肢は左右上腕を体幹にほぼ平行させ、肘関節は左では直角に、また右では完全に屈曲している。手は左右とも手掌を下に向け、右手は頸部付近、左手は手背を上腹部付近に位置している。下肢は、左右とも膝関節を半ば屈曲し、股関節をやや屈曲かつ外転し、膝が木棺の側板に寄りかかった状態である。

保存状態：ほぼ全身にわたる骨と9本の歯が残存しているが、骨はかなり風化している。頭蓋では大部分が残存するが、左右の側頭鱗と左下顎体を欠いており、残存部位も風化と変形が著しいため、計測はできない。歯は、右上顎の第1小臼歯から第2大臼歯までの4本と右下顎の第1小臼歯から第3大臼歯までの5本の計9本が残存している。体幹では、椎骨はほとんど原型をとどめず、肋骨では中位肋骨と思われる左右各数本が残存する。上肢では、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の何れも骨体のみが残存し、さらに右の基節骨と思われる骨が3個残存する。下肢骨では、左右の寛骨の腸骨から坐骨にかけて残存し、右大腿骨の骨体と左大腿骨の骨体上部1/3、右の脛骨および腓骨、左腓骨の骨体の一部が残存する。このほかに、左右の足根骨と思われる骨が残存するが風化が著しく同定できない。

年齢・性別：歯の萌出状態と骨の大きさから成人と推定される。さらに、大臼歯の咬耗はほぼエナメル質内に留まっており、20代後半から30代の可能性が大きい。寛骨の坐骨切痕部は、やや変形があるので断定はできないが、女性的である。

3. 鬼塚遺跡出土歯牙について

金 広美

OZ-I 土壙墓1 (顎)

- 1-1 左下及び5]までの顎。成人。5 4 3|3 4 5 6 7 8の歯牙残存。
5 4 3]の咬耗が特に大きい。
- 1-2 前歯部分を除いた成人顎。歯根部分が、土と共に形を残している。
1]、5 4]の歯牙残存。
- 1-3 前歯部分を含む成人の左下顎。3]の歯根形跡有。オトガイ孔が明確に判る。
[4 8の歯牙残存。咬耗の度合より年齢は25~30?
歯冠が小さく、形態にまるみがあるので♀?
- 1-4 成人左下顎の[5 6の部分のみ。[5の歯牙、[6の歯根が残存。
[5は、平らな程に咬耗している。
- 1-5 成人右下顎、関節突起、筋突起に至る形態をある程度残している。
8 7 6]の歯牙残存。8]の歯冠頰側にカリエス?
- 1-6 _____
- 1-7 ★成人下顎、想定される歯列弓は、小さくまるみがあると思われるので♀?
7|7の歯牙残存。咬耗の度合から、年齢30代半ば過ぎ~
★小児下顎、永久歯萌出途中の歯が多く、混合歯の状態。
前歯が、そろって萌出途中で、小白歯4|4の埋伏状態が見られる。
6]は、萌出完了。6]と顎についた状態の4 3 2 1|1 2 3 4、e d|d eの歯牙残存。
年齢は7~9才?
- 1-8 _____

TOTAL.

①	
8 7 6 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 6 7 8	
8 7 6 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 6 7 8	e d d e
①②①②③②①①①①②③②②②②②	④本

総数 永久歯……29本+乳歯……4本=33本

顎 { 成人……6
小児……1

OZ-I 土墳墓1 (歯群)

①	②	①①②③②①③①②
8 7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 6 7 8
⑦⑦④③①	②①	①①②④②①

e、le……②本

永久歯 部位鑑別注記済、上記表の歯数……55本
 土墳墓1 東側より7 (表以外) ……1本

 56本

接合不完全により部位鑑別困難の歯
 土墳墓1—20……………2本
 土墳墓1—34……………2本

切歯……………12本
 小臼歯……………3本 およその数
 大臼歯……………1本

 20本

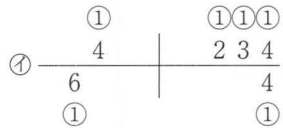
※全永久歯の数は、およそ56+20=76+乳歯②本=78本
 顎に残る歯と合わせて、78+33=111本

OZ-I 土墳墓1で、歯、歯片が出土したケースNo

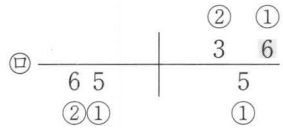
- I-47 歯片採取

- {
- I-10 焼歯片採取
- {
- I-45 焼歯片採取
- {
- I-75 焼歯片採取

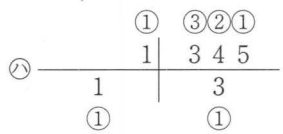
○Z-I 土壌墓1 固体別に分類の結果



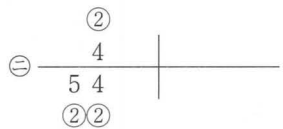
2 3 の歯冠がほぼ完成に至り、 $\frac{4}{4}$ も歯冠形成途中であることから5才前後?



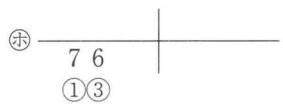
5 5 の歯根が未完成である。①②の個体は、年齢的に似かよっており、判別が困難である。



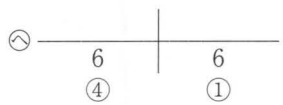
歯冠の咬耗状態より、20代~の成人? 上下犬歯は抜歯されていない。



咬耗が大きいのので、30代後半~40代の成人?



咬耗が特に激しく老年?

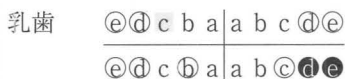


咬耗が大きいのので②の個体ぐらいの年齢?

その他

- ・土壌墓1-5と同個体と思われる歯…… I 3 1、I 4 3
- ・土壌墓1-7 (子供)と同個体と思われる歯…… I 6 6

○Z-I 土壌墓2 Naハ群



- ……Naハ群より
- ……Naハ群の土壌に残る
- ……水洗の歯群より

永久歯 $\frac{8\ 7\ ⑥\ 5\ 4\ 3\ 2\ 1}{8\ 7\ 6\ 5\ 4\ ③\ ②\ ①\ ①\ ②\ ③\ 4\ 5\ ⑥\ 7\ 8}$

Noハ群より、21本の歯を採取。内20本（上記の○●の歯）は、混合歯の状態の同一個体と推測される。永久歯の中には、歯冠未完成のものもあり、年齢5～6才ぐらいの小児と推定され、また、 $\overline{d\ e}$ 、 $\overline{1\ 1\ 2\ 3}$ の位置関係より、植立、萌出状態が明らかである。

○Z—I 土壌墓2（顎）

- 2—1 成人下顎（左） $\overline{7\ 8}$ の歯牙残存。咬耗のため、咬頭はエナメル質に穴があいている。
- 2—1 成人下顎（右） 関節突起、筋突起に至る形態を残す。上顎は全く残っていないが、 $\overline{8\ 7}$ は、咬合状態を残しているようである。 $\frac{8\ 7}{8\ 7\ 6}$ の歯牙残存。
- 2—15 全体に顎と判別できない土塊に、下顎の小白歯と思われる歯牙が一本残っている。

計 8本

○Z—I 土壌墓2 固体別に分類の結果

① ①

$\frac{7}{5\ 5\ 7}$
①①①

ハ群の小児と同年ぐらいで、別個体のものと思われる。
同一個体とするならば、①の歯は、ハ群のそれと比べて小さいようである。

㊦ ①②

$\frac{8\ 6}{5}$
③

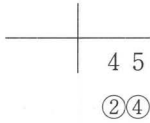
智歯の歯冠完成と咬耗も小さく、接触点（コンタクト）も不面瞭なので、12・13～10代の成人？

㊧ ② ②

$\frac{7\ 1}{5}$
②

同一個体の歯と推測できる要因にかなり激しい咬耗があげられる。老年？顎2—1と同一個体？

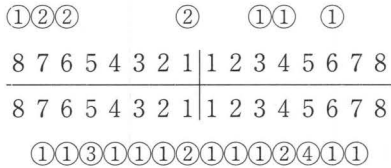
㊟



頰側咬頭の咬耗の大きさより、年齢 30代~?の成人。

OZ-I 土壙墓2 TOTAL

土壙墓2の部位鑑別注記済全永久歯 (Noハ群を含む)



31本

乳歯は、Noハ群の11本

永久歯……31

乳歯………11

42本

顎に残る歯と合わせて42+8=50 50本

II 1|2 ……土壙墓2—7より採取

II 4|1 ……土壙墓2—10~13より採取

OZ-I 土壙墓2で歯片

土壙墓2—7より大白歯片

土壙墓2—8より大白歯片

土壙墓2—10~13より2本 (6と?)

OZ-II 自然流路3 出土人骨

6 5 4|の歯冠残存。

6|………頰側の歯冠1/2、咬合面の咬耗大。

5 4|……完全な歯冠の形態を残す。6|ほど咬耗していない。

以上、3本の永久歯は一個体分のものと推定される。

土墳墓 1、2 焼骨の分布状況

○Z—I 土墳墓 1

No1、10、11、12、15、20、21、22、23、32、34、36、39、42、45、46、47、49、50、60、69、70、80、81、82、83、84

○Z—I、土墳墓 2

No 6 (only) 820730及び820731の水洗の骨の中に焼骨が多く見られる。

○Z—II 木棺墓 1

No39	7	6	5	4	
No37	8	7	6	5	4

No38 |1……切縁磨耗大、歯冠に穴があいている。

③	2
3 2	1 3

|2……磨耗によって1と同様に歯冠に穴があいている。

|1……遠心の切縁のみの磨耗は、歯軸が近心に傾斜していたため？

|3……尖頭が平らに磨耗している。

|2……犬歯化の傾向。 |3……近心舌側面、歯頸部欠損。

|3……部位も、鑑別困難で、これのみ別個体の歯と思われる。

○Z—II 木棺墓 1 のまとめ

以上、3を除く6本の前歯について|3|2|1、|1|2は、それぞれ同一個体のものと推定され（これらの、磨耗状態、歯の形態による）|3を含めて、左側の咬合関係を考察すると、左側にこのような著明な磨耗（歯冠エナメル質に穴があくほど……）が認められるのは、何か歯による作業をしていたのではなかろうか。

No37下顎の咬耗状態からも、小白歯部は、それほどの咬耗がみられないのに大白歯部にあっては、8に至るまで咬耗の度合いが大きいようである。

もちろん、対合歯にあたるNo39上顎についても同じである。

年令20代後半～30代の♀とするならば、前歯部（この場合は左側のみ）は、歯を酷使する作業のための磨耗、大白歯部は、食物の咀嚼による咬耗と推測してよいであろうか。

4. 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期の数種の土器片に塗布された赤色顔料物質の化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 井村由美

標記の赤色顔料物質について、筆者らの常法^(注1)とする、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行った結果、赤色顔料物質の成分を確認したので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

- 試料 No1 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期（滋賀里Ⅲb式）の浅鉢の内外面に塗布された赤色顔料物質。その内面のかなり広範囲に塗られたなかの1箇所から、鋼針で注意深く掻き取るようにして約2mgを採取し、分析用試料とする。
- 試料 No86 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期（滋賀里Ⅳ式）浅鉢の口縁部小破片の内面に僅に残る赤色顔料物質。その小部分より、鋼針で注意深く掻き取るようにして約1mgを採取し、分析用試料とする。
- 試料 No03 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期（滋賀里Ⅳ式）の土製品小破片の外面に薄く残る赤色顔料物質。その1箇所より、鋼針で注意深く掻き取るようにして約1mgを採取し、分析用試料とする。
- 試料 No74 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期（滋賀里Ⅳ～Ⅴ式）の浅鉢の極めて小さい破片の口縁端部に塗布された赤色顔料物質。その鮮明に残る部分1箇所より、鋼針で注意深く掻き取るようにして約1mgを採取し、分析用試料とする。

実験の部

試料検液の作製

上記の採取試料No1、No86、No03、No74をそれぞれガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分と分離した上澄液を加熱、濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用試料検液とする。試料検液の番号は掻く試料番号に対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No53（2cm×40cm）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と対照の鉄イオン（ Fe^{3+} ）と水銀イオン（ Hg^{2+} ）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わつたろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液並びに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットRf値と色調は、

下記の表14、表15のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド、アンモニアによる検出：(Hg²⁺は紫色、Fe³⁺は紫褐色スポットとして検出される。)

表14 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットの Rf 値と色調

		Rf 値 (色 調)
試料検液	No 1	0.13 (紫褐色)
〃	No86	0.11 (〃)
〃	No03	0.11 (〃)
〃	No74	0.11 (〃)
Fe ³⁺ 標準液		0.17 (〃)
Hg ²⁺ 標準液		0.91 (紫 色)

- (2) ジチゾンによる検出：(Hg²⁺)は橙色スポットとして検出され、Fe³⁺は反応陰性のため呈色せず。)

表15 ジチゾンによる呈色スポットの Rf 値と色調

		Rf 値 (色 調)
試料検液	No 1	呈色スポット発現せず
〃	No86	〃
〃	No03	〃
〃	No74	〃
Fe ³⁺ 標準液		〃
Hg ²⁺ 標準液		0.82 (橙 色)

判 定

以上の結果より、試料検液No 1、No86、No03、No74からは、いずれも Fe³⁺のみが検出され、Hg²⁺はまったく検出されなかった。このことから鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期の浅鉢など数種土器片に塗布された赤色顔料物質は、すべてベンガラ (Fe₂O₃) であって、水銀朱 (HgS) は使用されていないと判定する。

(1986年12月分析)

〔註〕

- 1) 安田博幸 鶴崎暁子：「尼崎市田能遺跡16号棺の人骨に付着の朱赤色物質の成分について」『古代学研究』第49号 p.9 (1967)

安田博幸 鶴崎暁子：「尼崎市田能遺跡17号棺からの水銀朱の検出」『古代学研究』第53号 p.27 (1968)

安田博幸：「埋蔵文化財の分析化学」『考古学と自然科学』第4号 p.33 (1971)

5. 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、剥片の石材産地分析

藁科 哲男、東村 武信

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で15年前から、蛍光X線分析法により研究を始めた。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている^{1, 2, 3)}。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の手続きも簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

鬼塚遺跡から出土した143点のサヌカイト遺物の産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、励起用の⁵⁵Fe、¹⁰⁹Cdの放射性同位元素とSi(Li)半導体検出器を組み合わせたエネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。⁵⁵Fe線源で励起したとき、K、Ca、Tiが¹⁰⁹Cd線源で励起したとき、Mn、Fe、Rb、Sr、V、Zr、Nbの元素がそれぞれ分析される。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Fe/Sr、Rb/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地など、合わせて23ヶ所の調査を終えている。図64にそれらの地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。図65にこの地域の調査した地点を示した。

これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると31の原石群に分類できる。その結果を表16に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西

群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表17に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。表18に示す、和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。表19に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表17、18のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない、二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表18のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものには風化に対して安定で、表面に薄い水合層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を表20に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、表20の試料番号17316番の遺物ではK/Caの値は0.254で、二上山群の[平均値]±[標準偏差値]は、 0.243 ± 0.009 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.2σ 離れている。ところで二上山原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.2\sigma$ のずれより大きいものが23ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 1.2σ 以上離れる確率は23%であると言える。だから、二上山群の平均値から 1.2σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものではないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約 12σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 12σ 以上離れている確率は、一兆分の一であると言える。このように、一兆個に一個

しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に23%、金山東群に百億分の1%の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表16のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、二上山群の原産地だけとなり、二上山産地または和泉・岸和田原産地の石材が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯1ヶの变量だけでなく、前述した7ヶの变量で取り扱うので变量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^{4,5)}。鬼塚遺跡より出土した遺物の産地推定の結果を表21に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料、例えば0.6cmとすると、原石試料との面積比は1/25になる。このため原石試料と同じ測定精度で、遺物から元素含有量を求めるには、測定時間を長時間掛けなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。

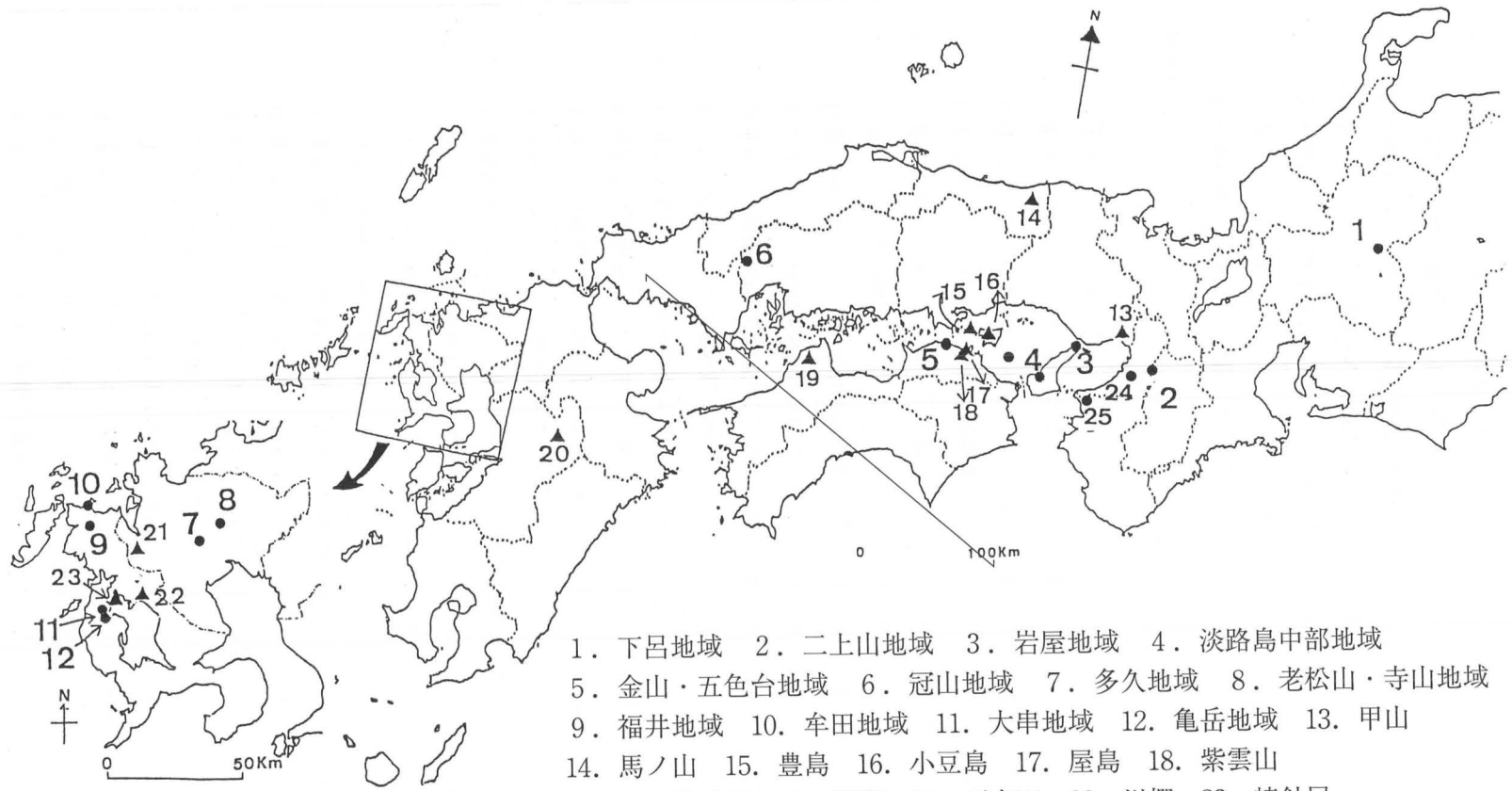
原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離 D^2 の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこの D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低い、そこの原石産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。

鬼塚遺跡出土の143点の縄文時代晩期の遺物の中で信頼限界の0.1%に達した遺物は131点で、10点はマハラノビス距離 D^2 の値によって石材の原石産地は判定され、これらの方法でも判定できなかったサヌカイト遺物2点にすぎなかった。この結果、原石産地の明らかになった141点の遺物の中で134点に二上山産原石、7点には金山東群の原石が使用されていることが明らかになった。しかし、金山東群に属する原石が用いられているからといっても、それぞれ、金山に産出するサヌカイト原石を用いていると結論するのは早計である。というのは、淡路の岩屋原産地および和泉・岸和田原産地からも、金山・五色台地域の白峰、法印谷、国分寺、蓮光寺、金山東、金山西の諸群のいくつかの原石と極めてよく似た原石を産出しているからである。したがって、今のように金山東群に帰属される原材から作られた遺物が得られた場合、この遺

物の石材産地は帰属された原石群の金山原産地の他に岩屋原産地および和泉・岸和田原産地からの原材である可能性をも考慮しなければならない。これら三地域の原産地のうちのどちらの産地の原石を使用したかの判定は、一つの遺跡より出土した多数の遺物を分析して遺物が岩屋原産地および和泉・岸和田産地に関係した諸群に帰属される頻度を求めて、この頻度分布と表17、18に示した岩屋原産地および和泉・岸和田原産地のサヌカイト原石の分類結果の頻度分布とを比較して行なう。すなわち、これらの遺物が、もし岩屋原産地および和泉・岸和田原産地から原材を採取して作られたものならば、分析の結果は、表17、18に近い頻度分布で、各原石群が現われるはずである。鬼塚遺跡の産地分析の結果を見ると、二上山群に帰属された遺物は134点で、金山東群に帰属された遺物が7点で、本遺跡から、二上山、金山東の両群を除くと岩屋原産地および和泉・岸和田原産地を構成する組成の遺物が見られないばかりか、両原産地に多数みられる岩屋第一群とか和泉群の組成の遺物が一点もみられない。このことは、鬼塚遺跡の遺物が岩屋原産地および和泉・岸和田原産地から供給された可能性が考えられないということを示している。したがって、鬼塚遺跡出土の二上山群の原材は二上山原産地よりの原石で、金山東群の原石は金山原産地より伝播した原石であると判定される。金山産原石の伝播は本遺跡が金山原産地地方の情報を得ていたという傍証になる結果で、この使用頻度が高いほど、金山産原石を使用する地域との交流が活発であると言えるであろう。本遺跡の縄文時代晩期の各時期における二上山産原石と金山産原石の使用頻度をみると、滋賀里Ⅳ式土器と併行する時期では、二上山産原石の使用頻度は約92%で、金山産原石の使用頻度は約8%である。滋賀里Ⅴ式土器併行期では、二上山産は約98%、金山産は約3%の使用頻度を示す。また、滋賀里Ⅳ～Ⅴ式土器の期間の遺物では、二上山産は96%で金山産が4%の使用頻度を示し、この結果は滋賀里ⅣとⅤ式の時期の結果の間に入る。このことは、滋賀里ⅣおよびⅤ式で得られた結果が遺跡の性格を比較的正確に反映していると言えるのではないか。本遺跡において滋賀里Ⅳの時期の方が滋賀里Ⅴの時期より金山産原石の使用頻度は高くなっているがその差は僅かである。今後、多くの遺跡について、本遺跡で行われた様に無作意に選択された多数の試料から、各原産地の原石使用頻度を定量的にもとめることは、交易とか交流を定量的に考察する際の貴重な資料を考古学の分野に与えるであろう。

参考文献

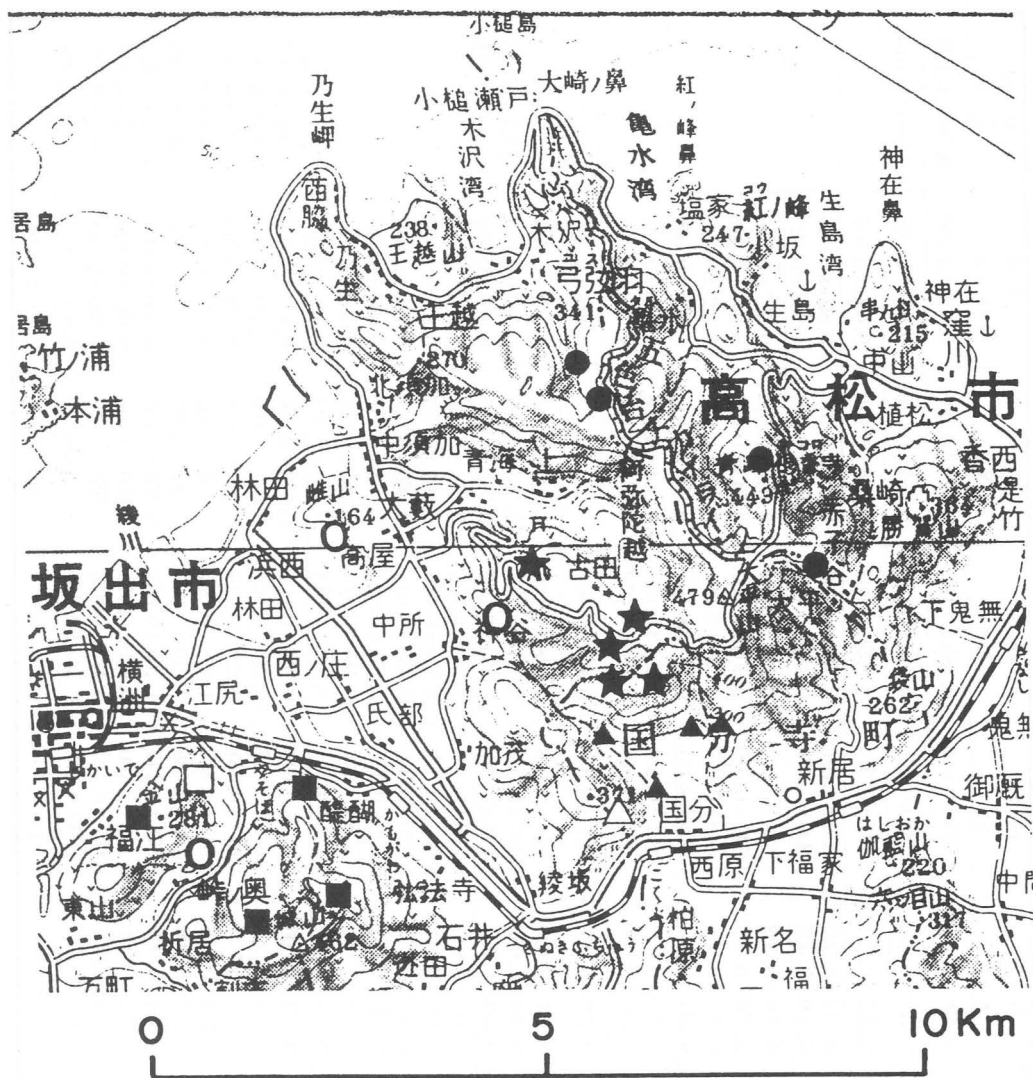
- 1) 藁科哲男・東村武信 (1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (Ⅱ)。考古学と自然科学、8:61—69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977) (1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学、10, 11:53—81:33—47
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59—89
- 4) 東村武信 (1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77—90
- 5) 東村武信 (1980)、考古学と物理化学。学生社



- 1. 下呂地域 2. 二上山地域 3. 岩屋地域 4. 淡路島中部地域
- 5. 金山・五色台地域 6. 冠山地域 7. 多久地域 8. 老松山・寺山地域
- 9. 福井地域 10. 牟田地域 11. 大串地域 12. 亀岳地域 13. 甲山
- 14. 馬ノ山 15. 豊島 16. 小豆島 17. 屋島 18. 紫雲山
- 19. 皿ヶ峰地域 20. 阿蘇 21. 西有田 22. 川棚 23. 崎針尾
- 24. 和泉・岸和田 25. 梅原

●：は石器原料として良質と考えられる産地
 ▲：はあまり良質と考えられない産地

第64図 サヌカイトの原産地



- 法印谷群 ★ 白峰群 ▲ 国分寺群
- △ 蓮光寺群 ■ 金山西群 □ 金山東群
- 五色台群 (ガラス質安山岩)

第65図 金山・五色台地域のサヌカイト，ガラス質安山岩の原産地

表16 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地名		分析 個数	K/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Ti/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Fe/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Rb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Y/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Zr/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Nb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$
岐阜県	下呂	56	1.475±0.041	0.248±0.010	0.745±0.011	0.283±0.005	0.029±0.005	0.442±0.010	0.040±0.008
奈良県	二上山	57	0.243±0.009	0.227±0.010	4.389±0.145	0.212±0.008	0.055±0.010	0.582±0.016	0.180±0.010
大阪府	和泉	15	0.433±0.011	0.337±0.011	3.741±0.074	0.299±0.007	0.075±0.010	0.659±0.007	
兵庫県	岩屋第一	17	0.576±0.018	0.249±0.009	3.559±0.096	0.369±0.006	0.056±0.010	0.800±0.023	
		19	0.482±0.017	0.269±0.007	3.399±0.070	0.337±0.007	0.044±0.008	1.038±0.023	
香川県	五色台	32	0.408±0.016	0.259±0.008	3.558±0.061	0.304±0.009	0.040±0.011	0.937±0.026	
		20	0.418±0.013	0.255±0.009	3.541±0.060	0.303±0.007	0.043±0.013	0.941±0.022	
		57	0.486±0.015	0.267±0.007	3.349±0.070	0.339±0.009	0.041±0.012	1.033±0.023	
		34	0.349±0.013	0.244±0.009	4.590±0.121	0.283±0.011	0.066±0.013	1.105±0.026	
	34	0.367±0.014	0.223±0.009	4.691±0.124	0.291±0.010	0.064±0.008	1.035±0.023		
37	0.437±0.016	0.230±0.006	4.496±0.050	0.320±0.012	0.064±0.009	1.133±0.030			
	* 五色台	57	0.785±0.031	0.129±0.008	2.015±0.052	0.495±0.014		0.648±0.025	
広島県	冠山	58	0.564±0.023	0.534±0.020	2.940±0.068	0.188±0.006	0.025±0.010	0.421±0.011	
		38	0.266±0.016	0.385±0.033	1.497±0.043	0.047±0.005	0.004±0.007	0.357±0.043	0.017±0.013
		34	1.067±0.114	0.523±0.034	2.018±0.066	0.259±0.007	0.019±0.007	0.483±0.012	0.248±0.011
佐賀県	多久第一	53	0.734±0.045	0.417±0.011	4.696±0.194	0.503±0.026	0.051±0.010	0.807±0.020	
		23	0.726±0.051	0.420±0.018	5.235±0.372	0.531±0.045	0.061±0.017	0.815±0.029	
		8	0.811±0.040	0.369±0.013	5.270±0.200	0.635±0.016	0.069±0.015	0.788±0.039	
	老松山	26	0.624±0.029	0.320±0.011	5.255±0.137	0.538±0.027	0.051±0.010	0.637±0.019	
		22	0.546±0.022	0.319±0.008	5.525±0.101	0.484±0.014	0.051±0.012	0.597±0.014	
17	0.387±0.017	0.352±0.006	6.728±0.154	0.306±0.014	0.172±0.384	0.480±0.021			
長崎県	大亀串	13	0.943±0.034	0.142±0.006	1.674±0.014	0.246±0.004	0.023±0.006	0.432±0.009	0.064±0.007
		17	0.976±0.038	0.157±0.007	1.675±0.017	0.244±0.004	0.017±0.006	0.441±0.006	0.069±0.006
	牟田第一	29	0.697±0.086	0.375±0.017	4.617±0.151	0.824±0.119	0.215±0.028	0.679±0.049	0.316±0.035
		13	0.531±0.044	0.354±0.018	7.530±0.387	1.068±0.091	0.334±0.034	0.942±0.060	0.508±0.043
	川棚	38	0.436±0.017	0.310±0.006	4.190±0.089	0.219±0.007	0.081±0.007	0.739±0.029	0.048±0.007
		15	0.563±0.013	0.344±0.009	7.578±0.141	1.163±0.032	0.356±0.013	0.996±0.024	0.554±0.024
	福井第一	25	0.460±0.010	0.334±0.008	7.106±0.100	0.916±0.018	0.286±0.010	0.845±0.016	0.437±0.015
		45	0.337±0.026	0.255±0.009	4.037±0.123	0.171±0.012	0.053±0.007	0.383±0.018	0.071±0.013
12	0.553±0.110	0.407±0.028	5.299±0.672	0.340±0.040	0.079±0.010	0.610±0.059	0.115±0.021		
熊本県	阿蘇	9	0.889±0.070	0.559±0.031	2.693±0.164	0.294±0.013	0.093±0.008	0.996±0.038	

* : ガラス質安山岩

\bar{X} : 平均値

σ : 標準偏差値

表17 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
〃	5	8	国分寺群に一致
〃	4	6	蓮光寺群に一致
〃	3	5	金山東群に一致
〃	2	3	和泉群に一致
〃	4	6	不明（どこの原石群にも属さない）

表18 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	〃 〃 〃
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	40	56	不明（どこの原石群にも属さない）

表19 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	〃 〃 〃
	10	48	不明（どこの原石群にも属さない）

表20-1 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器, 石片分析結果

試料番号	元 素 比							
	K/Ca	Ti/Ca	Rb/Sr	Zr/Sr	Fe/Sr	Y/Sr	Mn/Sr	Nb/Sr
17316	0.254	0.215	0.217	0.565	4.398	0.071	0.051	0.190
17317	0.246	0.218	0.211	0.576	4.488	0.084	0.051	0.026
17318	0.243	0.217	0.213	0.614	4.562	0.073	0.078	0.052
17319	0.241	0.219	0.207	0.553	4.559	0.110	0.059	0.019
17320	0.235	0.219	0.225	0.561	4.250	0.079	0.061	0.014
17321	0.246	0.218	0.218	0.598	4.489	0.072	0.062	0.012
17322	0.236	0.214	0.223	0.586	4.499	0.072	0.063	0.000
17323	0.245	0.214	0.210	0.580	4.587	0.073	0.066	0.097
17324	0.239	0.220	0.202	0.570	4.528	0.078	0.061	0.038
17325	0.238	0.212	0.222	0.572	4.396	0.094	0.056	0.032
17326	0.243	0.209	0.217	0.610	4.656	0.078	0.058	0.015
17327	0.241	0.218	0.224	0.613	4.575	0.071	0.060	0.025
17328	0.239	0.208	0.205	0.580	4.847	0.074	0.075	0.079
17329	0.240	0.219	0.206	0.582	4.422	0.063	0.053	0.026
17330	0.242	0.213	0.206	0.558	4.735	0.086	0.074	0.006
17331	0.240	0.211	0.242	0.552	4.516	0.051	0.068	0.042
17332	0.240	0.212	0.196	0.535	4.441	0.070	0.061	0.000
17333	0.239	0.214	0.198	0.596	4.617	0.055	0.067	0.000
17334	0.404	0.215	0.322	1.112	4.733	0.095	0.068	0.034
17335	0.241	0.214	0.212	0.542	4.412	0.077	0.055	0.006
17336	0.324	0.216	0.209	0.553	4.749	0.065	0.058	0.016
17337	0.240	0.221	0.212	0.578	4.470	0.075	0.058	0.033
17338	0.240	0.217	0.199	0.559	4.481	0.069	0.052	0.010
17339	0.242	0.217	0.217	0.600	4.487	0.072	0.053	0.026
17340	0.335	0.213	0.237	0.588	4.537	0.067	0.067	0.010
17341	0.241	0.214	0.227	0.570	4.772	0.087	0.069	0.017
17342	0.237	0.217	0.218	0.592	4.826	0.083	0.066	0.034
17343	0.250	0.211	0.212	0.534	4.494	0.072	0.067	0.000
17344	0.241	0.216	0.233	0.577	4.630	0.080	0.058	0.071
17345	0.241	0.217	0.217	0.580	4.353	0.049	0.054	0.004
17346	0.237	0.220	0.209	0.590	4.524	0.079	0.058	0.206
17347	0.245	0.216	0.213	0.571	4.418	0.087	0.050	0.021
17348	0.240	0.218	0.212	0.561	4.379	0.065	0.045	0.027
17349	0.247	0.216	0.215	0.583	4.425	0.068	0.055	0.019
17350	0.247	0.217	0.215	0.568	4.483	0.084	0.056	0.000
17351	0.242	0.219	0.206	0.568	4.453	0.072	0.048	0.000
17352	0.266	0.217	0.195	0.565	4.321	0.077	0.039	0.016
17353	0.239	0.215	0.211	0.574	4.409	0.052	0.051	0.028
17354	0.240	0.216	0.213	0.575	4.355	0.094	0.048	0.000
17355	0.238	0.212	0.201	0.588	4.473	0.105	0.055	0.070
17356	0.245	0.212	0.204	0.570	4.408	0.078	0.051	0.013
17357	0.243	0.215	0.181	0.595	4.219	0.069	0.052	0.021
17358	0.244	0.212	0.220	0.571	4.432	0.068	0.062	0.017
17359	0.239	0.216	0.211	0.595	4.488	0.060	0.064	0.025
17360	0.244	0.217	0.217	0.536	4.337	0.061	0.064	0.024
17361	0.437	0.216	0.303	1.120	4.458	0.087	0.071	0.079
17362	0.281	0.220	0.214	0.576	4.417	0.080	0.049	0.030
17363	0.247	0.217	0.229	0.587	4.638	0.105	0.070	0.000
17364	0.243	0.210	0.199	0.549	4.402	0.056	0.066	0.177
17365	0.245	0.214	0.202	0.563	4.584	0.077	0.055	0.000
17366	0.248	0.213	0.254	0.566	4.652	0.054	0.070	0.016
17367	0.240	0.222	0.201	0.568	4.355	0.067	0.047	0.004
17368	0.230	0.213	0.208	0.588	4.591	0.055	0.055	0.025
17369	0.246	0.217	0.213	0.566	4.344	0.075	0.048	0.008
17370	0.244	0.216	0.206	0.605	4.501	0.079	0.061	0.033
17371	0.397	0.214	0.311	1.132	4.628	0.074	0.055	0.069
17372	0.245	0.215	0.207	0.568	4.390	0.073	0.049	0.040

表20-2 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器, 石片分析結果

試料番号	元 素 比							
	K/Ca	Ti/Ca	Rb/Sr	Zr/Sr	Fe/Sr	Y/Sr	Mn/Sr	Nb/Sr
17373	0.245	0.213	0.218	0.575	4.369	0.087	0.051	0.035
17374	0.241	0.213	0.200	0.574	4.278	0.068	0.051	0.026
17375	0.242	0.219	0.205	0.582	4.360	0.066	0.044	0.016
17376	0.240	0.219	0.193	0.572	4.330	0.090	0.057	0.048
17377	0.240	0.221	0.202	0.575	4.416	0.078	0.042	0.024
17378	0.406	0.220	0.316	1.130	4.527	0.100	0.063	0.021
17379	0.240	0.218	0.211	0.567	4.396	0.074	0.054	0.012
17380	0.256	0.220	0.210	0.600	4.432	0.068	0.056	0.021
17381	0.236	0.213	0.219	0.573	4.301	0.073	0.065	0.019
17382	0.241	0.218	0.221	0.594	4.507	0.051	0.057	0.018
17383	0.247	0.220	0.228	0.598	4.535	0.067	0.065	0.000
17384	0.245	0.219	0.219	0.591	4.521	0.064	0.051	0.014
17385	0.238	0.214	0.233	0.593	4.504	0.066	0.060	0.013
17386	0.246	0.219	0.222	0.576	4.665	0.070	0.066	0.032
17387	0.242	0.211	0.219	0.562	4.855	0.055	0.073	0.018
17388	0.242	0.221	0.208	0.545	4.671	0.092	0.063	0.000
17389	0.245	0.215	0.211	0.546	4.702	0.083	0.075	0.010
17390	0.232	0.221	0.199	0.597	4.284	0.071	0.062	0.021
17391	0.236	0.219	0.217	0.576	4.445	0.071	0.064	0.015
17392	0.242	0.218	0.214	0.587	4.492	0.061	0.060	0.010
17393	0.263	0.216	0.216	0.604	4.507	0.072	0.068	0.015
17394	0.377	0.225	0.226	0.588	4.343	0.067	0.053	0.084
17395	0.245	0.219	0.217	0.572	4.457	0.105	0.060	0.025
17396	0.245	0.217	0.220	0.572	4.473	0.051	0.044	0.044
17397	0.243	0.219	0.214	0.569	4.432	0.077	0.064	0.010
17398	0.295	0.215	0.224	0.562	4.593	0.070	0.058	0.035
17399	0.239	0.218	0.210	0.561	4.451	0.084	0.074	0.033
17400	0.247	0.211	0.203	0.576	4.669	0.066	0.060	0.016
17401	0.252	0.217	0.214	0.579	4.571	0.072	0.069	0.074
17402	0.240	0.217	0.197	0.592	4.466	0.075	0.063	0.014
17403	0.238	0.221	0.206	0.581	4.348	0.079	0.058	0.016
17404	0.243	0.216	0.204	0.592	4.379	0.080	0.060	0.014
17405	0.239	0.220	0.206	0.592	4.298	0.074	0.061	0.070
17406	0.241	0.222	0.203	0.589	4.325	0.068	0.061	0.011
17407	0.407	0.218	0.316	1.138	4.498	0.082	0.071	0.000
17408	0.239	0.221	0.203	0.587	4.188	0.064	0.035	0.023
17409	0.246	0.212	0.204	0.582	4.454	0.082	0.054	0.018
17410	0.242	0.218	0.214	0.606	4.363	0.073	0.054	0.017
17411	0.240	0.214	0.215	0.588	4.502	0.063	0.062	0.016
17412	0.239	0.217	0.204	0.569	4.355	0.064	0.062	0.030
17413	0.270	0.220	0.219	0.584	4.363	0.055	0.061	0.000
17414	0.405	0.218	0.304	1.117	4.494	0.079	0.074	0.000
17415	0.352	0.217	0.220	0.577	4.476	0.074	0.063	0.050
17416	0.263	0.213	0.223	0.596	4.435	0.078	0.042	0.202
17417	0.242	0.214	0.205	0.563	4.525	0.086	0.059	0.007
17418	0.242	0.215	0.205	0.575	4.361	0.079	0.060	0.335
17419	0.242	0.218	0.216	0.589	4.443	0.069	0.066	0.098
17420	0.243	0.218	0.201	0.566	4.450	0.096	0.062	0.005
17421	0.244	0.220	0.263	0.550	4.575	0.072	0.067	0.017
17422	0.246	0.218	0.197	0.567	4.512	0.078	0.059	0.043
17423	0.253	0.217	0.222	0.579	4.464	0.082	0.069	0.010
17424	0.241	0.216	0.217	0.570	4.534	0.064	0.053	0.025
17425	0.245	0.218	0.227	0.594	4.535	0.074	0.060	0.000
17426	0.243	0.217	0.207	0.561	4.362	0.119	0.052	0.019
17427	0.412	0.219	0.320	1.148	4.677	0.082	0.070	0.038
17428	0.242	0.215	0.206	0.592	4.519	0.066	0.067	0.005
17429	0.239	0.220	0.208	0.592	4.419	0.092	0.059	0.025

表20-3 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器, 石片分析結果

試料番号	元 素 比							
	K/Ca	Ti/Ca	Rb/Sr	Zr/Sr	Fe/Sr	Y/Sr	Mn/Sr	Nb/Sr
17430	0.243	0.217	0.204	0.568	4.346	0.064	0.054	0.018
17431	0.260	0.215	0.212	0.594	4.371	0.065	0.055	0.008
17432	0.245	0.222	0.213	0.568	4.413	0.063	0.071	0.017
17433	0.241	0.218	0.213	0.587	4.525	0.062	0.040	0.019
17434	0.237	0.220	0.195	0.563	4.389	0.073	0.056	0.022
17435	0.238	0.214	0.212	0.564	4.369	0.060	0.064	0.089
17436	0.243	0.217	0.195	0.566	4.328	0.072	0.051	0.070
17437	0.272	0.192	0.231	0.589	4.819	0.061	0.048	0.024
17438	0.244	0.226	0.205	0.566	4.511	0.075	0.066	0.026
17439	0.245	0.213	0.221	0.578	4.673	0.098	0.057	0.017
17440	0.237	0.218	0.222	0.562	4.471	0.093	0.063	0.005
17441	0.243	0.225	0.207	0.558	4.285	0.082	0.054	0.030
17442	0.242	0.219	0.211	0.561	4.489	0.090	0.063	0.042
17443	0.239	0.218	0.206	0.571	4.527	0.089	0.065	0.007
17444	0.248	0.212	0.206	0.553	4.584	0.064	0.066	0.000
17445	0.307	0.220	0.203	0.575	4.457	0.079	0.058	0.010
17446	0.241	0.214	0.199	0.572	4.536	0.059	0.060	0.160
17447	0.239	0.220	0.224	0.580	4.587	0.068	0.073	0.000
17448	0.241	0.218	0.216	0.549	4.564	0.045	0.045	0.000
17449	0.240	0.216	0.212	0.560	4.603	0.075	0.060	0.011
17450	0.242	0.216	0.222	0.577	4.589	0.066	0.071	0.020
17451	0.240	0.220	0.202	0.592	4.360	0.050	0.053	0.050
17452	0.239	0.222	0.206	0.585	4.321	0.090	0.059	0.000
17453	0.244	0.214	0.206	0.570	4.494	0.060	0.058	0.025
17454	0.243	0.220	0.206	0.605	4.412	0.066	0.061	0.138
17455	0.251	0.216	0.211	0.571	4.658	0.073	0.060	0.013
17456	0.242	0.223	0.214	0.587	4.573	0.087	0.060	0.115
17457	0.242	0.220	0.204	0.590	4.648	0.092	0.057	0.094
17458	0.244	0.219	0.211	0.583	4.565	0.066	0.063	0.147

表21-1 鬼塚遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石器、石片の原産地推定結果

試料番号	名称・位置・層位	時代(伴出土器)	原石産地(確率)	判定	遺物品名	備考
17316	No.1・OZ-2・溝33・下部	縄文時代晩期(滋賀里V)	二上山(43%)	二上山	剥片	
17317	2・〃・〃	〃	〃(18%)	〃	〃	
17318	3・〃・〃	〃	〃(10%)	〃	〃	
17319	4・〃・溝33	〃	〃(D ² =39)	〃	〃	
17320	5・〃・〃	〃	〃(1%)	〃	〃	
17321	6・〃・〃	〃	〃(38%)	〃	〃	
17322	7・〃・溝33・下部	〃	〃(16%)	〃	〃	
17323	8・〃・溝33	〃	〃(39%)	〃	〃	
17324	9・〃・〃	〃	〃(22%)	〃	〃	
17325	10・〃・溝33・下部	〃	〃(0.4%)	〃	〃	
17326	11・〃・溝33	〃	〃(2%)	〃	〃	
17327	12・〃・〃	〃	〃(7%)	〃	〃	
17328	13・〃・〃	〃	〃(1%)	〃	〃	
17329	14・〃・溝33・下部	〃	〃(94%)	〃	〃	
17330	15・〃・〃	〃	〃(1%)	〃	〃	
17331	16・〃・溝33	〃	〃(1%)	〃	〃	
17332	17・〃・〃	〃	〃(3%)	〃	〃	
17333	18・〃・溝33・下部	〃	〃(20%)	〃	〃	
17334	19・〃・溝33	〃	金山東(0.1%)	金山	〃	
17335	20・〃・〃	〃	二上山(6%)	二上山	〃	
17336	21・〃・〃	〃	〃(D ² =114)	〃	〃	
17337	22・〃・溝33・下部	〃	〃(58%)	〃	〃	
17338	23・〃・〃	〃	〃(34%)	〃	〃	
17339	24・〃・〃	〃	〃(34%)	〃	〃	
17340	25・〃・溝33	〃	〃(D ² =130)	〃	〃	
17341	26・〃・〃	〃	〃(0.2%)	〃	〃	
17342	27・〃・〃	〃	〃(0.4%)	〃	〃	
17343	28・〃・溝33・下部	〃	〃(8%)	〃	〃	
17344	30・〃・〃	〃	〃(1%)	〃	〃	
17345	31・〃・〃	〃	〃(83%)	〃	ビエス・エスキエ or ビエス・エスキエ様片	
17346	32・〃・溝33	〃	〃(26%)	〃	〃	
17347	33・〃・〃	〃	〃(10%)	〃	〃	
17348	34・〃・黒灰色砂質土層 シルト混り	〃	〃(67%)	〃	〃	
17349	35・〃・溝33・下部	〃	〃(78%)	〃	〃	
17350	36・〃・溝33	〃	〃(14%)	〃	〃	
17351	37・〃・〃	〃	〃(64%)	〃	〃	
17352	38・〃・溝33・下部	〃	〃(2%)	〃	〃	
17353	39・〃・溝33	〃	〃(91%)	〃	〃	
17354	40・〃・溝33・下部	〃	〃(2%)	〃	〃	
17355	41・〃・溝33	〃	〃(0.1%)	〃	〃	
17356	42・〃・黒灰色粘土	(滋賀里IV)	〃(27%)	〃	削片・碎片など	
17357	43・〃・〃	〃	〃(1%)	〃	〃	
17358	44・〃・〃	〃	〃(43%)	〃	〃	
17359	45・〃・〃	〃	〃(81%)	〃	〃	
17360	46・〃・〃	〃	〃(12%)	〃	〃	
17361	47・〃・〃	〃	金山東(13%)、金山西(0.1%)	金山	〃	
17362	48・〃・〃	〃	二上山(0.2%)	二上山	〃	
17363	50・〃・〃	〃	〃(D ² =40)	〃	〃	
17364	52・〃・〃	〃	〃(27%)	〃	〃	
17365	54・〃・〃	〃	〃(14%)	〃	〃	
17366	55・〃・〃	〃	〃(D ² =34)	〃	〃	
17367	56・〃・〃	〃	〃(70%)	〃	〃	
17368	57・〃・〃	〃	〃(47%)	〃	〃	
17369	59・〃・〃	〃	〃(42%)	〃	折とり面・裁断面の ある調整削片	

表21-2 鬼塚遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石器、石片の原産地推定結果

試料番号	名称・位置・層位	時代(伴出土器)	原石産地(確率)	判定	遺物品名	備考
17370	No60・OZ-2・黒灰色粘土	縄文時代晩期(滋賀里IV)	二上山(12%)	二上山	折とり面・断面面のある細部調整剥片	
17371	61・〃・〃	〃	金山東(7%)、金山西(1%)	金山	〃	
17372	63・〃・〃	〃	二上山(56%)	二上山	〃	
17373	64・〃・〃	〃	〃(5%)	〃	〃	
17374	66・〃・〃	〃	〃(43%)	〃	ピエス・エスキエorピエス・エスキエ細部調整剥片	
17375	67・〃・〃	〃	〃(90%)	〃	〃	
17376	70・〃・〃	〃	〃(3%)	〃	〃	
17377	71・〃・〃	〃	〃(38%)	〃	〃	
17378	73・〃・〃	〃	金山東(3%)	金山	無調整で使用された可能性	
17379	73・〃・〃	〃	二上山(50%)	二上山	〃	
17380	74・〃・〃	〃	〃(40%)	〃	〃	
17381	74・〃・〃	〃	〃(13%)	〃	〃	
17382	77・〃・〃	〃	〃(72%)	〃	細部調整剥片	
17383	78・〃・〃	〃	〃(22%)	〃	〃	
17384	79・〃・黒灰色砂質土	〃	〃(73%)	〃	〃	
17385	82・〃・黒灰色粘土	〃	〃(4%)	〃	小型の削器	
17386	83・〃・〃	〃	〃(25%)	〃	〃	
17387	90・〃・〃	〃	〃(14%)	〃	剥片	
17388	91・〃・〃	〃	〃(0.2%)	〃	〃	
17389	92・〃・〃	〃	〃(2%)	〃	〃	
17390	94・〃・〃	〃	〃(38%)	〃	〃	
17391	96・〃・〃	〃	〃(50%)	〃	〃	
17392	99・〃・〃	〃	〃(93%)	〃	〃	
17393	100・〃・〃	〃	〃(6%)	〃	〃	
17394	101・〃・〃	〃		不明	〃	
17395	102・〃・〃	〃	二上山(0.1%)	二上山	〃	
17396	103・〃・〃	〃	〃(93%)	〃	〃	
17397	104・〃・〃	〃	〃(39%)	〃	〃	
17398	105・〃・〃	〃	〃(D ² =42)	〃	〃	
17399	106・〃・〃	〃	〃(10%)	〃	〃	
17400	107・〃・〃	〃	〃(22%)	〃	〃	
17401	108・〃・〃	〃	〃(41%)	〃	〃	
17402	109・〃・〃	〃	〃(23%)	〃	〃	
17403	110・〃・〃	〃	〃(43%)	〃	〃	
17404	111・〃・〃	〃	〃(27%)	〃	〃	
17405	160・〃・〃	〃	〃(58%)	〃	〃	
17406	161・〃・〃	〃	〃(84%)	〃	〃	
17407	162・〃・〃	〃	金山東(23%)、金山西(0.1%)	金山	〃	
17408	163・〃・黒灰色砂質土	(滋賀里IV~V)	二上山(65%)	二上山	使用痕あり無調整剥片	
17409	164・〃・〃	〃	〃(16%)	〃	〃	
17410	165・〃・〃	〃	〃(35%)	〃	剥片・碎片など	
17411	166・〃・〃	〃	〃(75%)	〃	〃	
17412	167・〃・〃	〃	〃(76%)	〃	〃	
17413	168・〃・〃	〃	〃(16%)	〃	削器・搔器	
17414	169・〃・〃	〃	金山東(42%)、金山西(1%)	金山	〃	
17415	170・〃・〃	〃		不明	小型剥片石器細部調整剥片	
17416	171・〃・〃	〃	二上山(3%)	二上山	〃	
17417	172・〃・〃	〃	〃(6%)	〃	剥片	
17418	173・〃・〃	〃	〃(33%)	〃	〃	
17419	174・〃・〃	〃	〃(73%)	〃	〃	
17420	175・〃・〃	〃	〃(1%)	〃	〃	
17421	176・〃・〃	〃	〃(D ² =60)	〃	〃	
17422	178・〃・〃	〃	〃(13%)	〃	〃	
17423	180・〃・〃	〃	〃(10%)	〃	〃	

表21-3 鬼塚遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石器、石片の原産地推定結果

試料番号	名称・位置・層位	時代(伴出土器)	原石産地(確率)	判定	遺物品名	備考
17424	No181・OZ-2・黒灰色砂質土	縄文時代晩期(滋賀里IV~V)	二上山(72%)	二上山	剥片	
17425	182・〃・〃	〃	〃(12%)	〃	〃	
17426	183・〃・〃	〃	〃(D ² =45)	〃	〃	
17427	184・〃・〃	〃	金山東(3%)、金山西(0.1%)	金山	〃	
17428	186・〃・〃	〃	二上山(59%)	二上山	〃	
17429	187・〃・〃	〃	〃(5%)	〃	ビエス・エスキエ or ビエス・エスキエ様削片	(細部調整)
17430	189・〃・〃	〃	〃(79%)	〃	〃	〃
17431	190・〃・〃	〃	〃(35%)	〃	〃	〃
17432	191・〃・〃	〃	〃(95%)	〃	〃	〃
17433	192・〃・〃	〃	〃(89%)	〃	〃	〃
17434	193・〃・〃	〃	〃(21%)	〃	〃	〃
17435	195・〃・〃	〃	〃(65%)	〃	〃	〃
17436	196・〃・〃	〃	〃(25%)	〃	〃	〃
17437	197・〃・〃	〃	〃(D ² =65)	〃	〃	〃
17438	198・〃・〃	〃	〃(37%)	〃	〃	〃
17439	199・〃・〃	〃	〃(0.1%)	〃	〃	〃
17440	200・〃・〃	〃	〃(1%)	〃	剥片	
17441	201・〃・〃	〃	〃(15%)	〃	〃	
17442	226・〃・〃	〃	〃(4%)	〃	〃	
17443	227・〃・〃	〃	〃(5%)	〃	〃	
17444	228・〃・〃	〃	〃(41%)	〃	〃	
17445	229・〃・〃	〃	〃(D ² =72)	〃	〃	
17446	230・〃・〃	〃	〃(57%)	〃	〃	
17447	232・〃・〃	〃	〃(35%)	〃	〃	
17448	233・〃・〃	〃	〃(59%)	〃	〃	
17449	234・〃・〃	〃	〃(23%)	〃	〃	
17450	235・〃・〃	〃	〃(48%)	〃	〃	
17451	236・〃・〃	〃	〃(83%)	〃	〃	
17452	237・〃・〃	〃	〃(9%)	〃	〃	
17453	238・〃・〃	〃	〃(87%)	〃	〃	
17454	239・〃・〃	〃	〃(61%)	〃	〃	
17455	240・〃・〃	〃	〃(21%)	〃	〃	
17456	241・〃・〃	〃	〃(6%)	〃	〃	
17457	無番-1		〃(1%)	〃	〃	
17458	〃-2		〃(75%)	〃	〃	

Ⅶ 考 察

1. 遺構について

イ. 調査地点における遺構の変遷と集落の推移

今回の調査で明らかになった各時代の遺構については、本文中で述べた。ここでは、調査地全域における遺構の変遷と、本遺跡における集落の推移について平成7年度現在20次を数える最近の調査成果も一部踏まえて、古い時期から順に述べたい。今回の調査までの位置については第2図、各調査出土遺物の時期などは表22を参照していただきたい。

縄文時代中期後半

今回の調査以外は、遺物が出土していない。これより古い時代の遺物として第13次調査（調査地点の北東400m・標高32m付近）で早期の押型文土器が少量出土しているが、遺構は検出していない。遺物の出土状況から、第Ⅰ調査区の北側に小規模な集落が存在したと考えられる。

縄文時代後期中頃

遺物は、第Ⅰ・Ⅱ調査区で出土しているが、遺構は第Ⅰ調査区で検出した溝と土壌があるだけである。現在までこの時代の遺物・遺構ともに、検出されていない。

遺物出土状況から見て、第Ⅰ調査区とその北側付近に小規模な集落が存在したと考えられる。

縄文時代後期末

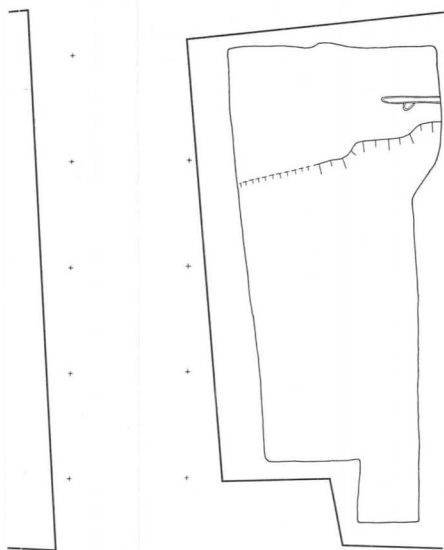
第4次調査（東300m・標高20m付近）で宮滝式に属す遺物が出土している。他の調査地点では出土していない。この付近に、小規模な集落が存在したものと考えられる。

縄文時代晩期中頃～後半

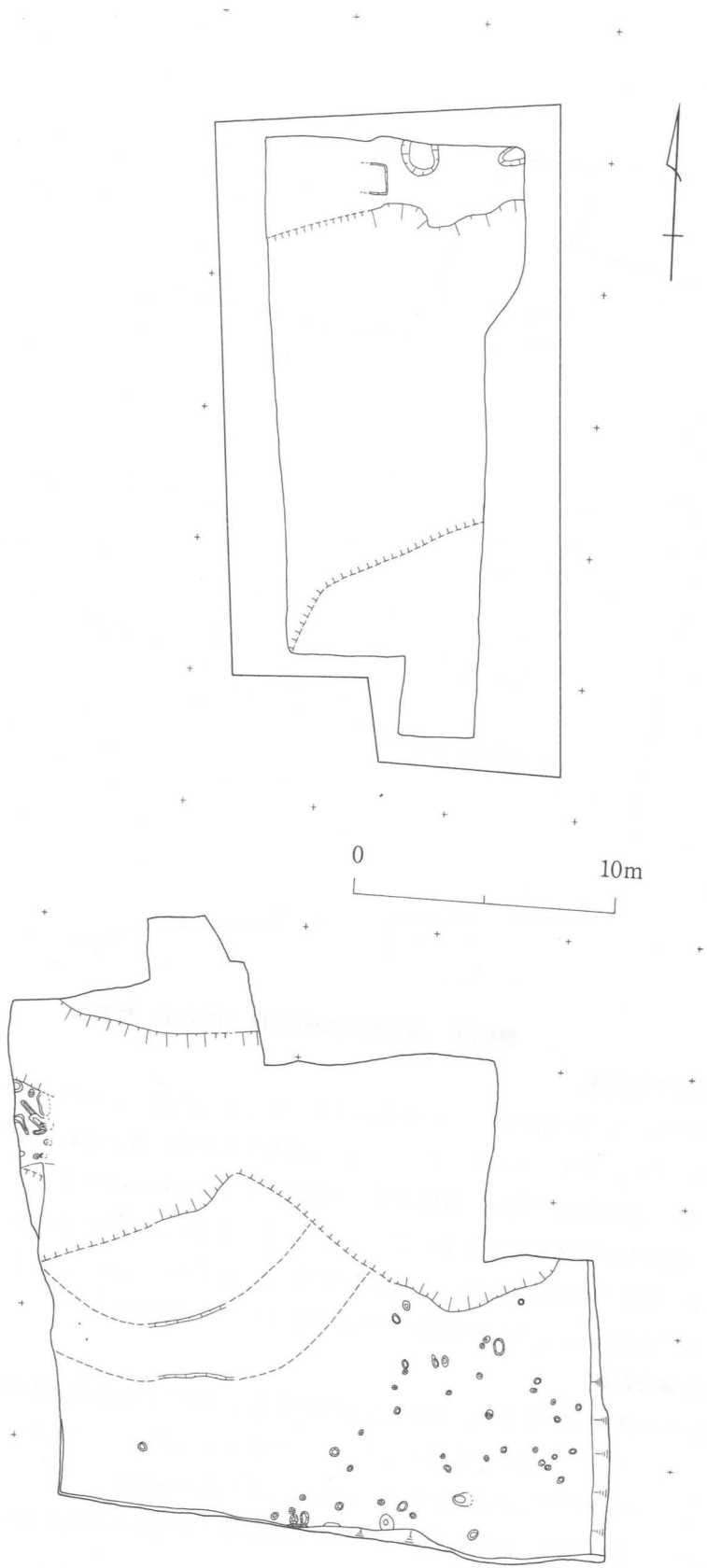
晩期前半の遺物は現在のところ出土していない。

中頃から後半（滋賀里Ⅲb～Ⅴ式前半併行）の遺物は、地点により若干の異なりはあるものの第1・3・4・6次調査と今回の調査で出土している。標高15～20m付近でかなり広く出土している。

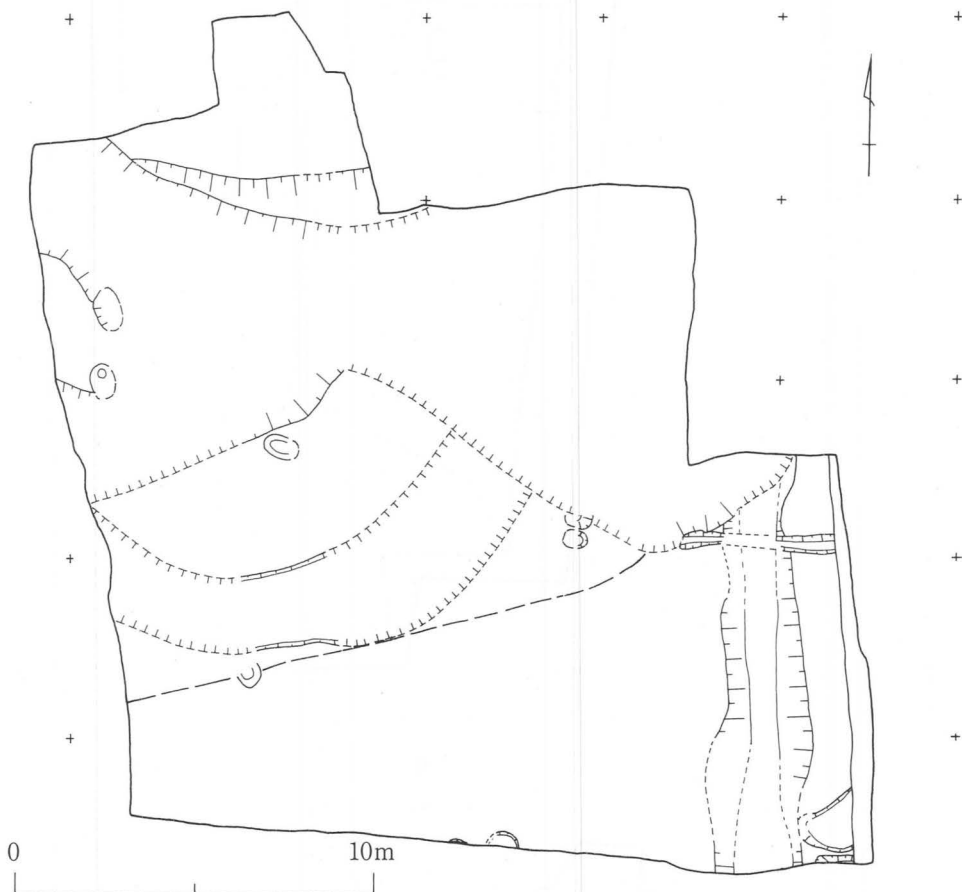
遺構が検出されているのは、今回の調査だけである。本文で述べたように、時期により遺構の性格や密度は異なるものの滋賀里Ⅲb・Ⅳ・Ⅴ式前半併行の遺構が検出されている。本調査地が集落の中心になる時期は、堅穴住居の柱穴と考えられるピットや再葬墓などが検出された滋賀里Ⅲb併行期である。滋賀里Ⅳ・Ⅴ式前半併行の時期は、遺構が少なく集落の外れに当たる地と考えられる。この時期の集落の中心は、第Ⅱ調査区およびその南ないし西側に存



第66図 縄文時代後期遺構（縄文Ⅴ）位置 在すると推定できる。



第67図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅳ）位置図



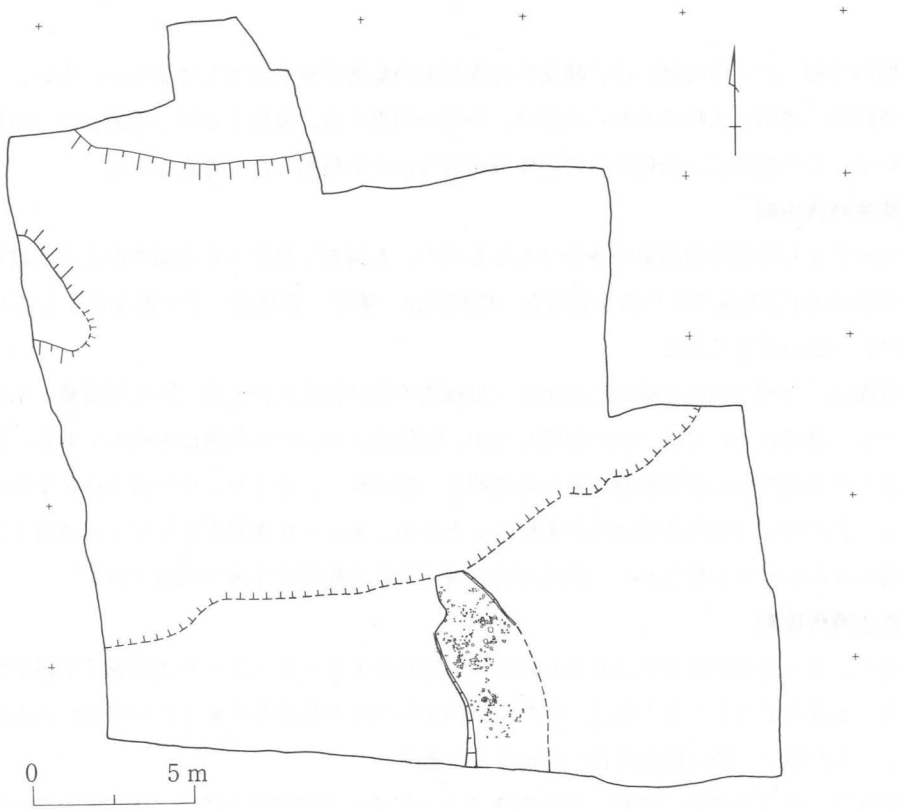
第68図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅲ）位置図

縄文時代晩期末

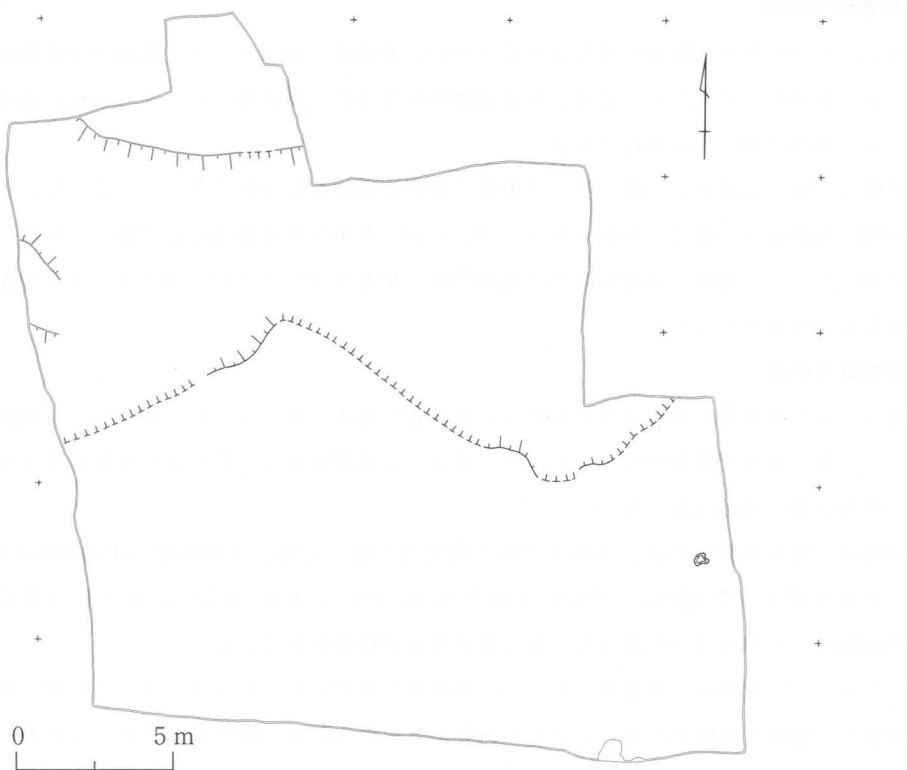
今回は出土していないが、いわゆる長原式に併行する時期の土器が、地点により若干の異なりはあるものの第1・3・4・5・9・13次調査などで量の多少はあるものの出土している。標高は18～32m付近である。遺構は第5次調査でピットが検出されている。第3次調査では遺構は未検出ながら遺物はまとまって出土している。土器だけで見れば最も広範囲から出土しているが、集落の中心は第3次～5次調査地点付近（標高18～25m）に想定でき、前代の居住地から東に約200mほどの生駒山側に居住地を変えたことが判明する。

弥生時代前期

縄文時代晩期末の土器が、弥生時代前期の土器と共伴した第3次調査がよく知られているが、第1・2・5次と本調査でも出土している。標高は18～25m付近である。遺構は、第5次調査でピットが検出されている。いわゆる長原式土器の出土範囲と比べると分布範囲は狭い。本調査で出土した土器は、自然流路内からの出土品が多く東方からの流れ込みと考えられる。この



第69図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅱ）位置図



第70図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅰ）位置図

時期の当初（古・中段階）は、縄文時代晩期末の集落が重なることはまちがいない。

新段階の遺構は未検出ながら土器は、今回の調査と東に隣接する第2次調査で一定量出土している。この段階には前代からの居住域が西方にやや移動したと考えられる。

弥生時代中期

地点により時期や遺物量の多少はあるものの、本調査と第3～6次調査および本調査地点の南東約400mで実施された第9次調査（標高25m・第Ⅱ～Ⅲ様式）で土器が出土している。標高は15～25m付近である。

遺構は、今回の調査で確認した第Ⅱ～Ⅲ様式の間営まれた土壇・方形周溝墓・木棺墓・溝がある。墓域については一画が判明したが、居住域についての遺構は未検出である。居住域は、土器の出土範囲から見て前期当初の居住域と一部重複し、そこからやや南に存在すると考えられる。第Ⅳ様式に属す遺構はまだ未検出であるが、第5・6次調査などで土器は出土しており、遺構の存在が当然予想される。墓域と居住域の関係の究明は今後の課題である。

弥生時代後期

地点により遺物量の多少はあるものの、本調査と第3～5・7・9次調査で土器が出土している。本調査で出土した土器は、自然流路内からの出土品が多く東方からの流れ込みと考えられる。主たる出土地の標高は19～25m付近である。

遺構は、第3次調査で壺棺、5次調査で火災にあった竪穴住居などが検出されている。したがって居住域は第5次調査地点付近で第3次調査地点は集落の縁辺部に位置すると考えられる。

古墳時代前期

地点により時期や遺物量の多少はあるものの、本調査と第4・5・7次調査で遺物が出土している。本調査で出土した土器は、自然流路内からの出土品が多く東方からの流れ込みと考えられる。標高は20～25m付近である。

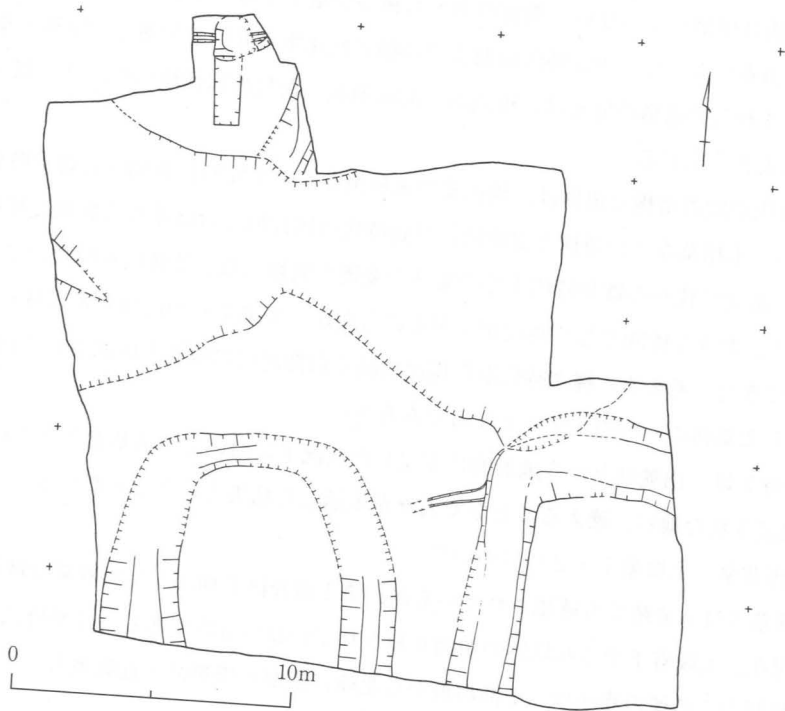
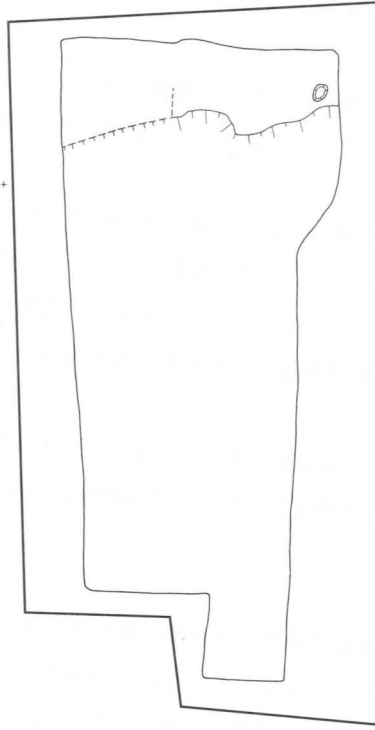
遺構は、第5次調査で土壇、第7次調査で掘立柱建物などが検出されている。したがってこの時期の居住域は、前代の集落より少し南に下がった第5次調査地付近が想定される。弥生時代後期に比して、現状では遺物の出土範囲が狭く量も少ないことから前代よりも小規模な集落である可能性が考えられる。

古墳時代中期

地点により遺物量の多少はあるものの、本調査と第4・6・9・11・13・15・17次調査などかなり広範な範囲で遺物が出土している。第2・3次調査でも土器の存在が推定できる。出土地の標高は19～32m付近である。

遺構は、第6次調査で溝、本調査で掘立柱建物や溝・土壇、本調査地の東約300mで実施された第11次調査（標高30m）で配石遺構や水田、同じく東約500mで実施された第17次調査（標高31m）で作り付けの竈をもつ竪穴住居などが検出されている。

したがって居住域は、本遺跡のかなりの部分を占めていたことはまちがいないが、第5・9次調査など遺物・遺構が出土していない調査地も認められる。居住地が点在しており、それが



第71図 弥生時代中期遺構位置図

一つにまとまって集落を形成していたことを示すと考える。

古墳時代後期

地点により遺物量の多少はあるものの、本調査と第4・6・7・9・13・15次調査などかなり広範な範囲で遺物が出土している。第2・3次調査でも土器の存在が推定できる。出土地の標高は15～32m付近である。

遺構は、第13次調査で溝や堅穴住居・土壇などが検出されている。居住域は中期と同様、本遺跡のかなりの部分を占めていたことはまちがいないが、居住地が点在しており、それが一つにまとまって集落を形成していたことを示すと考える。遺物の出土量や遺構の存在の仕方から見ると集落の中心は、第13次調査地点を初めとする標高24～32m前後の遺跡内では東より（生駒山より）の地と考えられる。

今回明らかになったように居住地を替えることにより6世紀中頃に一旦断絶し、6世紀後半から7世紀前半に遺構が再び形成されるという本調査地の遺構の推移は、遺跡内における居住域の移り変わりを端的に示している。

飛鳥～奈良時代以降

飛鳥時代の遺構は、本調査で検出した土壇1基だけである。現在まで実施された調査では、遺構はもちろん遺物もほとんど出土していない。本調査においても遺物の出土量は少ないが、調査地点の近くに集落が存在した可能性が高いとするしか判断できない。少なくとも集落が存在したことはまちがいない。

奈良時代は、第5次調査において遺構・遺物の存在が知られていたが、本調査ではこの時代以降の遺構は検出していない。遺物の出土も極く少量で小破片である。今回の調査実施後に行われた各調査によって、平安時代前期までの掘立柱建物や井戸など多くの遺構と遺物が出土している。これらの遺構の分布は、標高24～32m前後、前代の居住域の中心と一部重なり、さらに南北に大きく広がる。

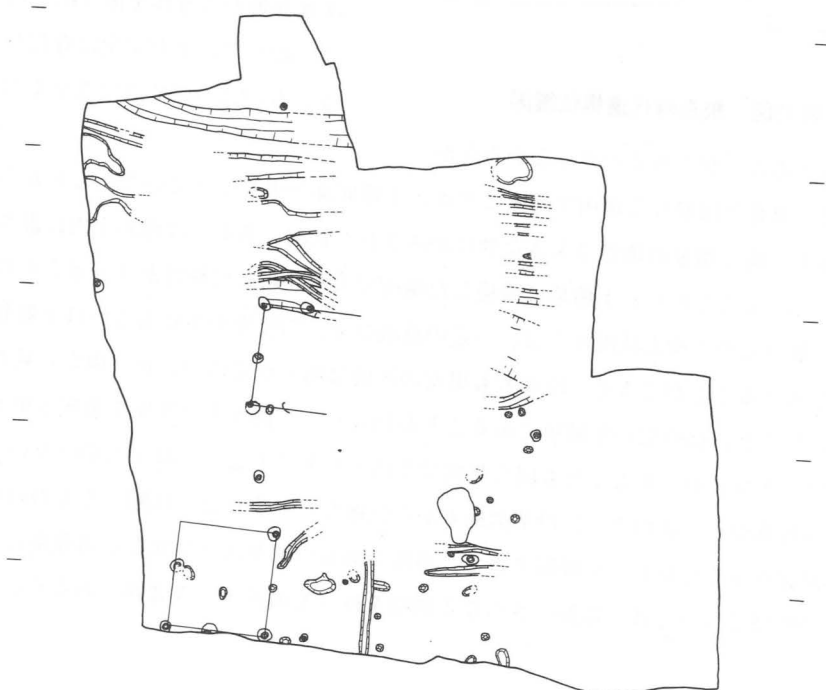
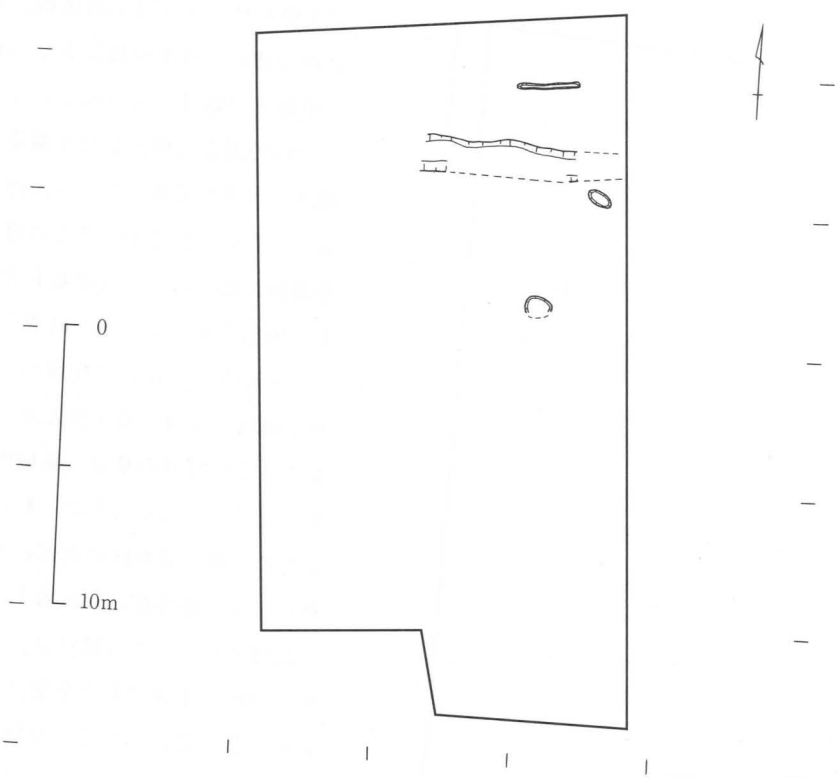
平安時代中期の遺構と遺物は、現在まだ未検出ながら平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・木棺墓などの遺構と遺物は、奈良時代の居住域とほぼ重なる状態で検出されている。

以上、縄文時代から鎌倉時代までの集落の変遷を概観した。遺跡内を時代により点々と居住域を替え、大きな傾向として時代が下がるにしたがって東よりの山側の地に移り住む状況を明らかにできたと考える。縄文時代から現代に続く自然河川に南北を区画された山麓部に安定的に営まれた集落の一つのモデルとなるであろう。

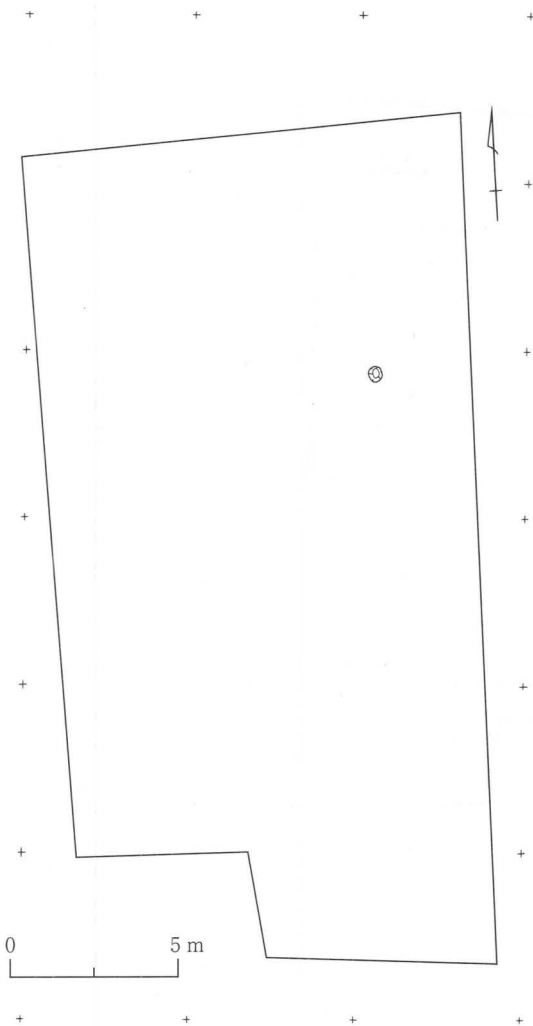
この背景は、山麓部という地形的に安定した状況下において生活基盤となる自然条件などが一定保証された地に、絶えることなく人々が生活した結果ということが出来る。

ロ.再葬墓（土壇墓1・2）について

再葬墓は日下遺跡でも確認されているが、第I調査区で検出した再葬墓は焼骨を含むという点で現在、大阪府下でこれ以外の類例が知られていないものである。設楽博^{注1}氏によれば縄文時代晩期のこの種の葬法は、中部高地から北陸に広がり伊勢湾・近畿地方に伝播したものとさ



第72図 古墳時代中期遺構位置図



第73図 飛鳥時代遺構位置図

焼成したと考えることができるのではなからうか。

火葬場所は土壙墓とは異なる場所であることは、土壙底面が火を受けていないことから確実である。しかし、両土壙墓の焼骨は大きな骨にかぶされた状況、あるいは埋め土内に混ざった状況で検出していることから、土壙墓に隣接した場所で火葬された可能性が十分考えられる。

土壙墓内に置ける骨の検出状況からは、一定の意識の元に四肢骨や頭骨あるいは下顎骨などを配置したと考えることができる。埋葬者も男女の区別は明らかではないが、歯から見た分析結果を参考にすると、幅の広い年齢層であることが知られる。個々人の関係を家族と早計に判断することはできないが、少なくとも同じ集落で生活した人であることはまちがいない。

この種の再葬墓が、上述のように伊勢湾地方から伝播したとすれば一時期下るものの東海系の縄文土器が存在する背景として理解できる。当時の通常の埋葬法とは異なる再葬墓に葬られた被葬者達の性格については、類例のさらなる増加を待って検討すべき課題であらう。

れる。また、縄文時代の埋葬に際して人骨を焼くことは中期後葉、中部高地で認められ事例数は少ないものの晩期まで継続しているという。

今回の調査で検出した土壙墓の時期は、本文中で述べたように滋賀里Ⅲb～Ⅳ式併行であることは確実で、他遺構の関係から滋賀里Ⅲb式(後半)併行と考えている。時期の認定に誤りがなければ、居住域から北にやや離れた位置に墓を営んだことになる。この時期の墓は、墓域内に密集してつくられることが一般的であるため、第Ⅰ調査区の北部に墓域が存在する可能性が高いと考えられる。

焼骨という点から見れば、今回検出した例は生焼けや火を受けていない骨も多く認められる。全身骨を完全に火葬したのではないことは明らかである。焼骨の存在理由の一つに1次埋葬地から遺体を掘り出し再葬するに際して、まだ完全に骨化していないものについて骨化させるために

表22 鬼塚遺跡各地点出土土器の時期と標高

地点	縄文			弥生					古墳			標高(T・P)	
	中	後	晩	I	II	III	IV	V	前	中	後		
1次(A地点)			☒	☒								20m	
2次(B地点)			////	////							////	15m	
3次(C地点)			☒☒☒	☒☒☒	////	////		////	壺棺		////	20m	
4次(D地点)		////	////			////		☒☒☒	////		////	22m	
5次(E地点)			☒	☒			////	☒☒☒	壺穴住居	土壙		25m	
6次(F地点)							////				☒☒	溝	14m
7次(G地点)			////					////	☒	堀立柱建物		22m	
8次(H地点)	////	////	☒☒☒	////	☒☒☒	☒☒☒	////	////			☒☒☒	堀立柱建物他	15m

☒☒☒ 良好な包含層
 //// 土器出土
 //// 土器の存在を想定

注1. 設楽博己 1993年「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集

参考文献

藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

藤井直正 1969年「縄文晩期土偶の2例」『河内考古学』3号

久貝健他 1970年「鬼塚遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高校地歴部

芋本隆裕 1975年「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会

下村晴文 1978年「鬼塚遺跡発掘調査概要Ⅰ」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17』東大阪市教育局

芋本隆裕 1979年「鬼塚遺跡Ⅱ、若江遺跡発掘調査報告」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19』東大阪市教育局

他各調査報告書

2. 縄文Ⅳ～Ⅰの土器について

本文中で遺構・包含層出土土器を縄文Ⅳ～Ⅰに分けて時期別の器種構成や在地産と他地域産の比率などについて述べた。ここでは、上述のように分けた各期の特徴や成形・調整・文様などについて、それぞれまとめておきたい。

縄文Ⅳ

滋賀里Ⅲ b式に併行すると考えている。最近、家根祥多氏は、滋賀里Ⅲ b式を篠原式と改称し古・中・新の3段階に分ける案を提出されている。篠原式の名称は一先ず置くとして、Ⅲ b式に時間幅があることはまちがいないと考える。

篠原遺跡出土品中には凸帯をもつものはないが、同氏が中段階の一括性の高い資料の代表としてあげておられる恩智遺跡土器集積Ⅰの資料内には浅鉢に凸帯をもつものが1点報告されている。本書で報告したこの時期の土器は、少量ながら1条の刻目をもたない凸帯をもつ深鉢H・浅鉢Dが存在する。また底部も丸底が存在している。以上のことから深鉢Ⅰのような前代からの残存型式が少量含まれるものの家根氏が提唱される新段階でも最終の時期の資料と考える。

滋賀里Ⅲ b式の土器は、周辺では恩智遺跡のほかに日下遺跡でも出土している。いずれも大洞系の土器(C₁式)を伴出しているが今回は出土していない。たまたま出土していない可能性も否定できないが、本資料の時期が終末に位置づけられるためではないかと考える。

縄文Ⅲ

滋賀里Ⅳ式に併行すると考えている。刻目凸帯が出現しかつ盛行する。周辺では、日下・水走^{注4}・馬場川遺跡などで少量の土器が出土している。また、前述の恩智遺跡でも少量出土している。しかし、今回の調査ほど良好な状態のものは、まだ報告例がない。現状では、河内のこの時期の土器を考えるうえで欠くことができないものといえよう。

底部は丸底が主体で平底も少量、存在する。小型でミガキ調整することから浅鉢の底部と思われる凹底も少量認められるが、下層の縄文Ⅳの状況から見ても前代の残存型式と考えられる。凹底が残存するのが深鉢ではなく浅鉢という点を注意しておきたい。

瀬戸内地方の原下層式、九州の夜臼Ⅰ式、東海地方の西ノ山式と併行する資料と考える。大洞系の土器は、出土していない。

また、本文でも述べたが在地産の深鉢の体部片の内面に玄米の圧痕のある土器が出土した。少なくともこの段階で、本遺跡に居住した人々の身近に米が存在したことは確実である。近隣では同時期の讚良郡条里遺跡の最下層から出土した土器にも^{注5} 粳圧痕が認められている。

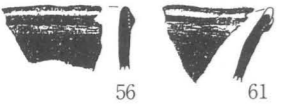
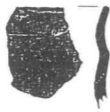

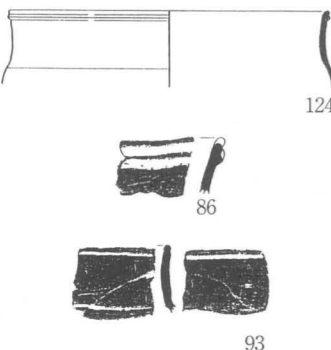
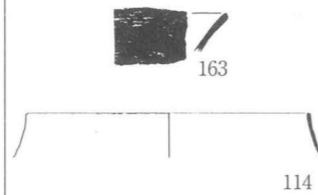

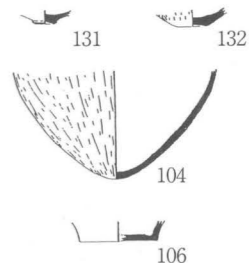
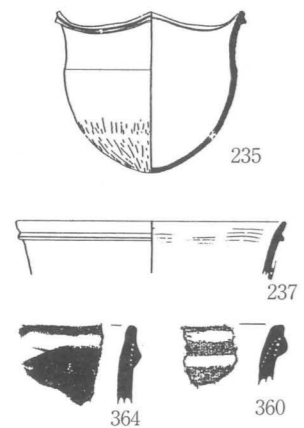
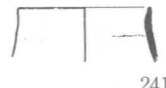
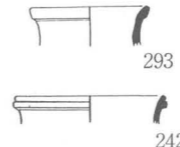
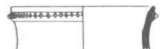
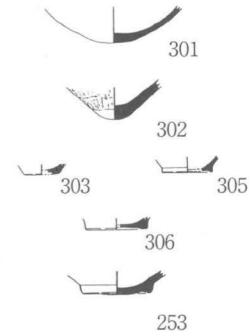
米を栽培したかは現状で判断資料が少ないため一先ず置くとしても、少なくとも北・中河内の縄文人の一部に米の存在は知られていたのである。周辺の遺跡からほとんど出土の知られていない打製石斧の存在も、生業の変化を考えるうえで注目しておきたい。

縄文Ⅱ・Ⅰ

土層や遺構では上下に分けられるが、縄文Ⅰの出土量が多くなく内容もほとんど変わらないため一括して説明する。

器種	深				鉢		
局位	A	B	C	D	E	F	G
繩文IV							
繩文III							
繩文II・I							

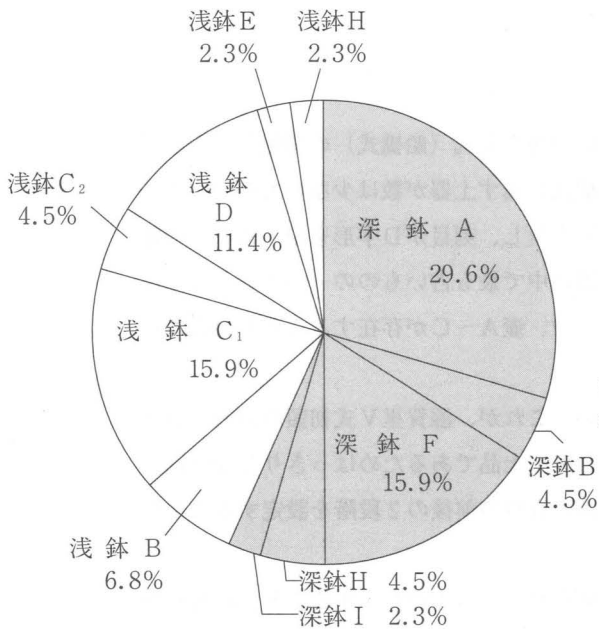
第74図 各遺構・層出土主要縄文土器（深鉢）一覽

器種 局位	深鉢		鉢		壺			底部	
	H	I	その他	A	B	C			
縄文IV	 56 61	 51						 44	
縄文III	 124 86 93		 163 114		 227		 131 132 104 106		
縄文II・I	 235 237 364 360			 241	 293 242	 294	 301 302 303 305 306 253		

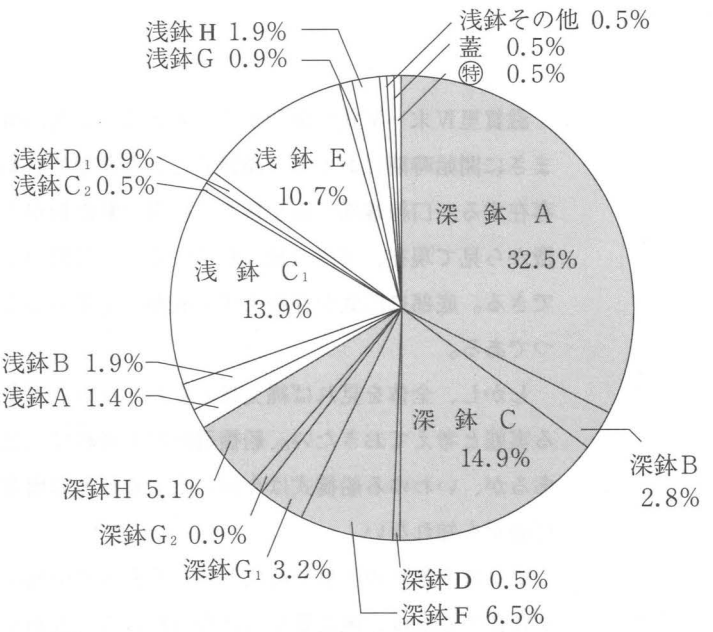
第75図 各遺構・層出土主要縄文土器（深鉢・壺・底部）一覧

器種 局位	浅鉢						
	A	B	C	D	E	F	その他
縄文IV		 64 63	 43 58 59 60	 65 62	 42 57		 66
縄文III	 98 174 134	 97 87  112	 103 115 120 121 91 123 111	 159	 160 229 233		 117 228 231
縄文II・I	 282 283 328	 336 338  307	 288 238 299 291 374 332	 353 346 278 382	 257 258 300	 286	 297 344 337

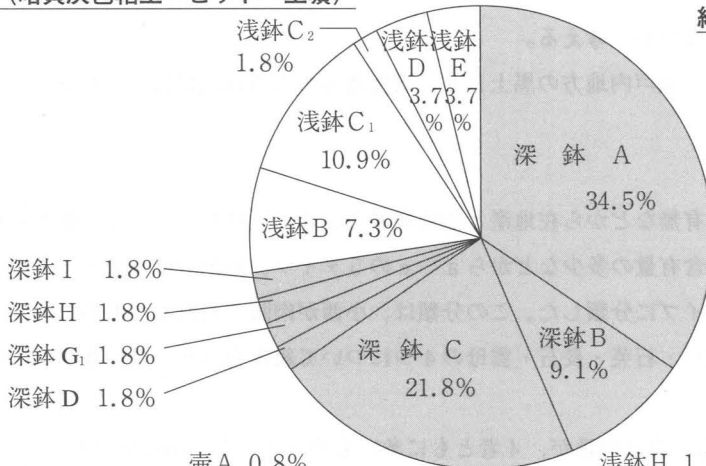
第76図 各遺構・層出土主要縄文土器（浅鉢）一覧



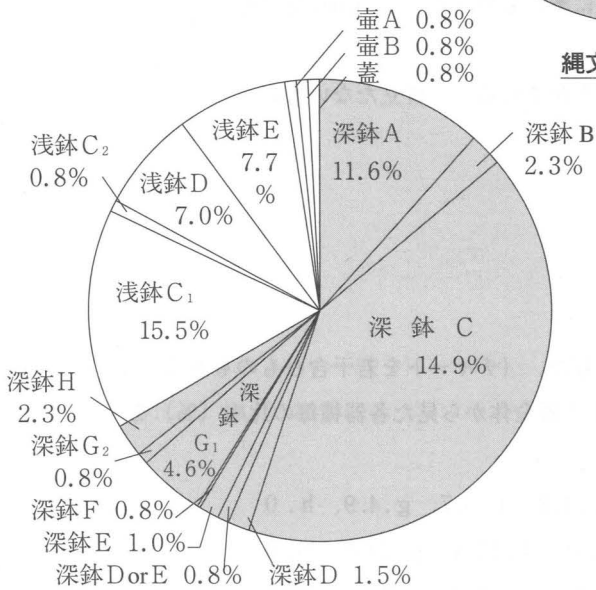
縄文Ⅳ (暗黄灰色粘土・ピット・土壙)



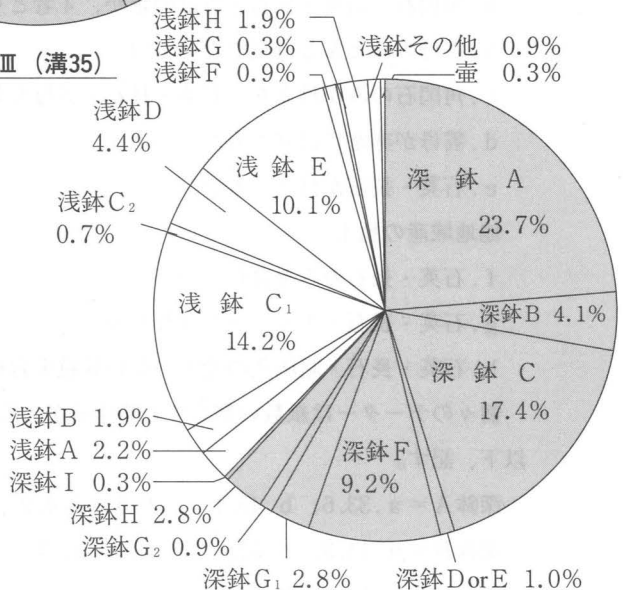
縄文Ⅲ (黒灰色粘土)



縄文Ⅲ (溝35)



縄文Ⅱ (溝33)



縄文Ⅱ (黒灰色砂質土)

第77図 各遺構・層出土縄文土器器種構成円グラフ

滋賀里Ⅳ末～Ⅴ式に併行すると考える。2条凸帯の出現をⅤ式（船橋式）の開始とするなら、まさに開始時期にあたる。深鉢Eとした典型的な船橋式に属す土器が数は少ないものの確実に存在する。口縁端部が面を持ち、凸帯の断面形が方形を呈し、刻目がD字形を呈するなどの特徴から見て現在、河内で知られているこの時期の土器の中で最も古いものの一つといえることができる。底部に凹底が存在せず平底が一定量あることや、壺A～Cが存在することも特徴の一つである。

しかし、全体を見れば縄文Ⅲと変わらない点も多い。これが、滋賀里Ⅴ式初頭の河内における実態と考えておきたい。船橋遺跡出土資料は、包含層出土品であるためはつきりしない点があるが、いわゆる船橋式は今回の出土資料と船橋遺跡の資料の前後の2段階を設定することが可能かも知れない。

緑豆の半割れの圧痕や前代と同じく玄米の圧痕が見られる土器片が存在すること、打製石斧が存在する点は、縄文Ⅲから認められることもありこの段階は本遺跡で稲作を開始していた可能性が非常に高いのではないかと考える。

九州の夜臼Ⅱ a～Ⅱ b、瀬戸内地方の黒土BⅡ、東海地方の五貫森式にほぼ併行すると考える。

胎土について

本文中では、角閃石の有無などから在地産と他地域産の2者に区別したが、より細かく胎土を観察し在地産は角閃石含有量の多少などからa～eの5タイプ、他地域産はチャートの含有の有無からf～hの3タイプに分類した。この分類は、小西が肉眼で判断したものである。

在地産の胎土は、角閃石・石英・長石・雲母の4つについて組み合わせと量の多少で分けた。以下、分類基準を期す。

- a. 角閃石・石英・長石・雲母の量が、4者ともに多いもの（だいたい同程度含むもの）。
- b. 雲母のほとんど目立たないもの。
- c. 角閃石のみが目立ち、石英・長石・雲母も若干含まれるが、目立たないもの。
- d. 雲母が非常に目立つもの。
- e. 石英・長石が目立つもの。

他地域産の胎土

- f. 石英・長石のみを含むもの。
- g. 石英・長石・チャートを含むもの。
- h. 石英・長石・暗灰色の光沢のない砂粒を含むもの。（チャートを若干含むものもある）

個々のデータは紙数の都合で省略するが、出土土器全体から見た各器種毎の比率（％）を以下、記す。

深鉢A = a. 33.6、b. 45.1、c. 6.6、d. 4.9、e. 1.2、f. 3.7、g. 4.9、h. 0

深鉢B = a. 14.3、b. 51.4、c. 2.9、d. 0、e. 0、f. 11.4、g. 20.0、h. 0

深鉢C = a. 16.7、b. 70.6、c. 3.5、d. 0、e. 0.4、f. 2.2、g. 4.8、h. 1.8

深鉢D = a.25.0、b.25.0、c.0、d.0、e.25.0、f.25.0、g.0、h.0
深鉢E = b.100、
深鉢F = a.40.7、b.37.3、c.10.1、d.3.4、e.0、f.3.4、g.3.4、h.1.7
深鉢G₁ = a.42.5、b.50.0、c.2.5、d.0、e.0、f.5.0、g.0、h.0
深鉢G₂ = a.0、b.77.8、c.0、d.0、e.0、f.5.0、g.11.1、h.11.1
深鉢H = a.22.0、b.65.8、c.4.9、d.0、e.0、f.0、g.7.3、h.0
深鉢I = a.33.3、b.33.3、c.33.3、d.0、e.0、f.0、g.0、h.0
浅鉢A = a.26.6、b.60.0、c.0、d.6.7、e.6.7、f.0、g.0、h.0
浅鉢B = a.26.1、b.30.5、c.4.3、d.4.3、e.0、f.13.1、g.17.4、h.4.3
浅鉢C₁ = a.37.2、b.54.8、c.2.9、d.0、e.0、f.2.2、g.2.9、h.0
浅鉢C₂ = a.14.3、b.42.8、c.0、d.0、e.0、f.28.6、g.0、h.14.3
浅鉢D = a.16.3、b.61.2、c.12.3、d.0、e.0、f.6.1、g.4.1、h.0
浅鉢E = a.15.5、b.59.8、c.1.0、d.0、e.1.0、f.15.5、g.7.2、h.0
浅鉢F = b.66.7、g.33.3、
浅鉢G = a.66.7、b.33.3、
浅鉢H = a.27.8、b.33.3、c.0、d.0、e.0、f.11.1、g.27.8、h.0
壺A = a.50.0、c.50.0、
壺B = a.40.0、b.60.0、
壺C = c.100、
蓋 = a.20.0、b.80.0

在地産で最も多いのは各器種を通じてbとした雲母のほとんど目立たないタイプである。次にaで、両者合わせると深鉢・浅鉢ともに約7～8割を占める。少なくともbは、本遺跡で製作された可能性が高いと考える。その他の在地産の各タイプは、本遺跡で製作されたものが混和材の砂粒の採取地の差が違いとなって現われているのか、近隣の集落で製作されたものかは今後、同様の観点から検討する必要があると考えている。

壺と蓋は絶対数が少ないため不確実であるが、他地域産の搬入品がなく全て在地産である点は、確実に製作・使用されていたことを示している。

成形について

全ての器種が、粘土紐をもちいて積み上げて製作されている。丸底の底部は、円板の内側を凹めたものである。

粘土紐の接合の仕方は、確認できるもの全てが内傾である。粘土紐の幅は、1.2～2.5cmまで見られるが、1.5cm前後が多い。深鉢・浅鉢など器種により変えることはない。また、同一個体においても幅に多少の異なりが見られるものがある。

調整について

外面の調整は、深鉢にあってはケズリ、浅鉢はミガキを主とする。しかし、深鉢A～Dの中

には二枚貝調整をするものが少量認められる。浅鉢の中にもC₁のようにケズリを施すものが見られる。

内面は深鉢がナデ、浅鉢はミガキないしナデを主とする。深鉢には貝殻で調整するものが3%前後、認められる。浅鉢も貝殻調整はほとんど施されないが、C₁に2.8%存在する。深鉢の中に内外面とも、あるいはいずれかの面にミガキを施すものが極くわずかであるが存在する。

壺は、口縁部の小破片しか存在しないため全体は明らかでないが、ナデで調整している。製作技法の復元については今後の課題としたい。

文様について

文様は、基本的に少ない。深鉢・浅鉢の順に述べる。

深鉢 種類として、凸帯・刻目凸帯・刻目・線刻・沈線がある。凸帯・刻目凸帯については後述する。刻目は、大半はヘラ状工具によるが既に述べた半截竹管状工具によるものが少量認められる。刻目の施文部位は、凸帯・口縁端部・頸部・頸部と体部の境である。

線刻は、頸部外面にヘラ状工具・半截竹管状工具などを用いて施すものがある。量は少ない。

沈線は、頸部下位にヘラ状工具・棒状工具を用いて施すものがある。1条が多いが2条も少数、見られる。量は少ない。

浅鉢 種類として、凸帯・刻目凸帯・刻目・沈線・突起がある。凸帯・刻目凸帯については後述する。深鉢に見られた線刻は、存在しない。

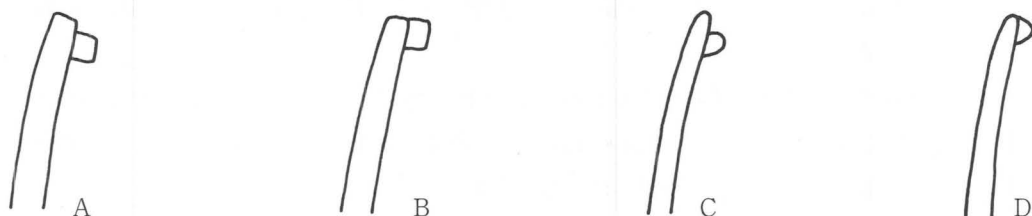
沈線は、口縁部内外面・頸部下位および凸帯上にヘラ状工具・棒状工具を用いて施すものがある。1条のものが多いが2条や多条も少数、見られる。量は少ない。

凸帯について

肩部の凸帯は数が少なく検討する対象にならないため、口縁部外面の凸帯の付く位置と口縁端部の形態の組み合わせを第78図のようにA～Dの4タイプ設定した。凸帯には刻目を持つものと持たないものがある。細かな比率は、表23・24を参照されたい。

A 口縁端部断面が方形を呈し、凸帯が少し下がった位置に付けられる。深鉢・浅鉢ともに存在する。後述するCに次いで多く主体の一面を占めている。

B 口縁端部断面が方形を呈し、凸帯が接して付けられる。深鉢Dに25%認められるが浅鉢を含めて他には存在しない。



第78図 凸帯分類図

表23 深鉢凸帯の施文部位の分類 (%)

深 鉢	タ イ プ	暗黄灰色 粘土	土壙・ピット	黒灰色粘土	黒灰色粘土 上面	溝35	土壙22	黒灰色砂 質土下層	黒灰色 砂質土	溝33	黄灰色 シルト	攪乱	合計
C	A			21.9	18.18	33.3		18.6	10.9	7.5	5		13.5
	C			78.1	81.81	66.7	100	81.4	87.3	90.6	95	100	85.7
	D			0					1.8	1.9			0.8
D	A			100						50			50
	B					100							25
	C									50			25
E	A									100			100
G ₁	A			14.3	12.5			37.5	11.1	16.7			15.9
	C			85.7	87.5	100		62.5	88.9	83.3	100	100	84.1
G ₂	A				50				66.7		100		40
	C			100	50			100	33.3	100			60
H	A			18.2	14.3			25		66.7		50	16.3
	C	100	100	81.8	85.7	100		75	100	33.3	100	50	83.7

表24 浅鉢凸帯の施文部位の分類 (%)

浅 鉢	タ イ プ	暗黄灰色 粘土	土壙・ピット	黒灰色粘土	黒灰色粘土 上面	溝35	土壙22	黒灰色砂 質土下層	黒灰色 砂質土	溝33	黄灰色 シルト	攪乱	合計
D	A	20					20	50		44.4	20		18
	C	80		100	66.7	100	80	50	92.9	55.6	80	100	78
	D				33.3				7.1				4
G	A	100		39.1	80	50		37.5	31.2	50	42.9	50	40.6
	C			52.2	20	50	100	62.5	68.8	50	57.1	50	57.4
	D			8.7									2.0

C 口縁端部断面が丸みもち凸帯が少し下がった位置に付けられる。深鉢・浅鉢ともに深鉢Eを除くすべてのタイプに認められる。量も多く主体を占める。

D 口縁端部断面が丸みを持ち凸帯が接して付けられるいわゆる長原式の特徴的なタイプに近いものは、深鉢Cに0.8%、浅鉢D4.0%、Eで2.0%認められるが主体を占めていない。

以上のタイプ分類結果によれば、口縁端部上面を面取りし一番丁寧に製作されたAは主体の一面を占めるとはいえ、中心は少し手を抜いたCであることが判明する。また、浅鉢には主体を占めないというものの、いわゆる長原式の凸帯に近いDが縄文Ⅲの段階で出現し、深鉢では縄文Ⅱで存在する。凸帯の出現も浅鉢が先である可能性が高いことと合わせ、深鉢の凸帯の変化は、浅鉢の動きを受けて起きているとも考えられ興味深い。

凸帯には刻目を持つものと持たないものがある。深鉢の比率は、縄文Ⅳが持たない凸帯100%、縄文Ⅲ刻目凸帯76.5%、持たない凸帯23.5%、縄文Ⅱ刻目凸帯88.7%、持たない凸帯11.3%、縄文Ⅰ刻目凸帯73.1%、持たない凸帯26.9%と量の少ない縄文Ⅰが少し異なるが、おおむね時期が下がるに従い刻目凸帯の占める割合が増加している。

深鉢の刻目凸帯の施文原体は、ヘラ状工具92.9%二枚貝5.3%棒状工具0.3%不明1.5%で、ヘラ状工具によるものがほとんどである。二枚貝によるものは、時期が下がるにしたがい多くなる。東海地方などの他地域の影響と考えられる。

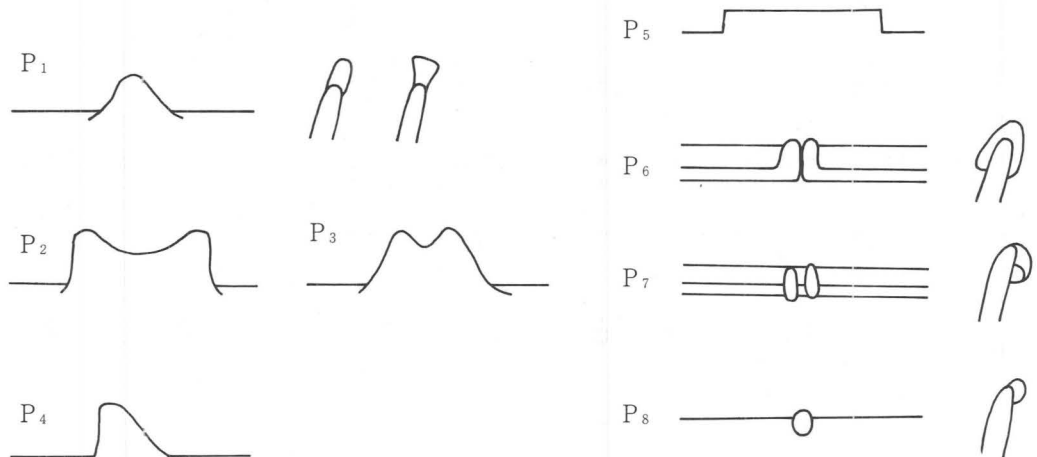
浅鉢の凸帯は、縄文Ⅲで刻目凸帯2.3%、縄文Ⅱで刻目凸帯1.1%がみられるがほとんどないに等しい。刻目の施文原体はヘラ状工具である。

凸帯上の刻目の形状は、D字・小D字、O字・小O字、V字状のものがある。D字・O字状が多いが、各時期ともいずれの形態も存在する。同一凸帯でも位置によりD字がV字状に変化するものも見られる。

凸帯はナデにより貼り付けられる。断面形は、台形・三角形・方形・半円形がある。

突起について

馬場川^{注7}・篠原遺跡出土品では、深鉢にも突起をもつものが見られるが今回の出土品では浅鉢にしか認められない。突起は形態から第79図のようにP₁～P₈に分類した。



第79図 突起分類図

表25に示したようにP₁は浅鉢A・Eに、P₂は同B、P₃はC₁、P₄はB・E、P₅はE・G、P₆・P₇はE、P₈はAにみられる。これ以外には認められない。

浅鉢Eは5タイプがあり他に比して多い。Eの中に占める突起をもつ土器の比率は、7.1%である。次いでA (17.6%)・B (21.7%)に2タイプ、C₁ (0.7%)・G (33.3%)に1タイプ見られる。突起が1個体に何個つくか明らかでないが特定の器種に一定の突起がつくとは考えられない。

最も単純な器形であるC₁にも突起が認められることから、今回確認できなかったタイプの浅鉢についても存在する可能性はある。

突起は、滋賀里Ⅱ式の深鉢に出現しⅢ式で浅鉢にも広がる。今回の資料はⅣ式で深鉢から突起が消失するか激減し、主に浅鉢に存在することを示している。おそらく穴森口酒井遺跡^{注8}や長原遺跡の土器から見てⅤ式(船橋式)の段階で浅鉢からも激減することが判明する。

これらの突起は、ほぼ同様の形態が九州から東海地方の西日本一帯の同時期の遺跡から出土している。しかし、他遺跡では1~2タイプがほとんどで、4タイプを超えるのは長行^{注9}(4) 榎原遺跡^{注10}(8)など非常に少ない。滋賀里遺跡^{注11}では3タイプである。本遺跡の突起の多様性は榎原遺跡と並んで目につく。あるいは、近畿地方は浅鉢に突起を付けることが盛行した地域と言えるのかも知れない。

同タイプの器形のなかで突起を持つ、持たないものがあり、かつ持つものが少ないということがどのような意味があるかは現時点では明らかにしえない。

浅鉢における黒色磨研および磨研風土器について

浅鉢A・B・C₂・D・E・Hに黒色磨研ないし磨研はしていないが、いぶし焼きを行い黒色化させたと考えられる黒色磨研風の土器が認められる。浅鉢全体(371点)の中では、黒色磨研(16点)4.3%、黒色磨研風(42点)11.3%である。細かな比率は、表26を参照されたい。

時期別に見れば、縄文Ⅳの段階では浅鉢全体に占める黒色磨研土器(15.8)、黒色磨研風土器(10.5)の割合は26.3%である。縄文Ⅲの黒灰色粘土層出土品は黒色磨研土器(11.4)、黒色磨研風土器(15.7)の割合は27.1%である。縄文Ⅱの溝33出土品は黒色磨研土器(2.5)、

表25 浅鉢、突起の個数と比率(%)

	突起の種類×個数					各器種の個体数	%
	縄文Ⅳ	縄文Ⅲ	縄文Ⅱ	縄文Ⅰ	攪乱		
浅A		P 1×1 P 8×1			P 1×1	(17)	17.6
浅B	P 2×1	P 4×2	P 4×2			(23)	21.7
浅C ₁			P 3×1			(138)	21.7
浅E		P 6×1 P 7×1	P 1×1 P 4×1 P 6×2		P 5×1	(98)	7.1
浅G		P 5×1				(3)	33.3
計	1点	7点	7点		2点	17点	100

表26 黒色磨研および磨研風土器の個数と比率（％）

遺構・層位	器形	黒色磨研土器	黒色磨研風土器	各遺構の各器形に占める割合（％）	
				黒色磨研土器	黒色磨研風土器
暗黄灰色粘土	浅B	1	0	33.3	0
土壙・ピット	浅C ₂	1	1	50	50
	浅D	0	1	0	20
	浅E	1	0	100	0
浅鉢における割合				15.8	10.5
黒灰色粘土	浅B	0	3	0	100
	浅B	1	2	25	50
	浅E	6	3	26.1	13.0
	浅H	1	3	25	75
浅鉢における割合				11.4	15.7
溝29	浅B	0	1	0	25
	浅E	1	1	50	50
浅鉢における割合				6.7	13.3
土壙16	浅B	0	1	0	50
	浅鉢における割合				0
溝30	浅C ₂	0	1	0	100
	浅D	0	2	0	22.2
	浅E	1	3	10	30
浅鉢における割合				2.5	15
黒灰色砂質土	浅A	1	2	14.3	28.6
	浅B	1	1	16.7	16.7
	浅C ₂	1	0	50.0	0
	浅D	0	1	0	7.1
	浅E	0	7	0	21.9
	浅H	0	1	0	100
	浅その他	0	1	0	33.3
浅鉢における割合				2.5	10.9
黒灰色砂質土 下層	浅B	0	1	0	100
	浅E	0	3	0	18.8
浅鉢における割合					
攪乱	E	0	1	0	25
	浅鉢における割合				0

- ・黄灰色シルトの中には、黒色磨研と思われるものはなかった。
- ・浅鉢371点中、黒色磨研16点、黒色磨研風のもの42点それぞれの比率は4.3%、11.3%である。

黒色磨研風土器（15）の割合は17.5%である。同黒灰色砂質土出土品では、黒色磨研土器（2.5）、黒色磨研風土器（10.9）の割合は13.4%である。縄文Ⅰでは出土していない。

縄文Ⅳの朱彩の黒色磨研土器（図42）は、朱彩にベンガラを用いていることが分析結果から明らかになった。なお、朱彩を施す浅鉢・土製品は非常に少なく分析を依頼したものが出土しただけである。

黒色磨研土器は滋賀里Ⅳ式の段階でほとんど消失すると言われている。本遺跡においては、滋賀里Ⅳ式併行期には磨研風土器を合わせればなお3割近く存在する。ようやく、Ⅴ式初頭に併行する縄文Ⅱの段階で急減しているが、それでも黒色磨研風土器が約1割、存在している。

浅鉢の煤付着

浅鉢に煤が付着するものが認められた。出土層・遺構と器種の比率を表27に示したので参照されたい。

浅鉢C₂を除く全ての器種に認められるが、中心はC₁とDである。時期により異なりはあるものの、C₁で50%前後、Dで50～60%前後を占めている。時期に関係なく少なくともこの2器種に関しては、形態は浅鉢であるが煮炊にも使用されたことは明らかである。

- 注1. 屋根祥多 1994年「篠原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土々器の検討」『縄文晩期—中葉の広域編年』平成4年度科学研究費（総合A）研究成果報告書
- 注2. 嶋村友子他 1987年「八尾市内昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ—恩智遺跡の調査」『八尾市文化財調査報告書』14 八尾市教育委員会
- 注3. 吉村博恵 1985年「日下遺跡発掘調査概要—11・12次調査—」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報』26 東大阪市教育委員会他
- 注4. 中村浩他 1984年「水走遺跡—東大阪生駒電鉄建設予定地内発掘調査概要—」大谷女子大学考古学研究会
- 注5. 西口陽一他 1991年『讚良郡糸里遺跡発掘調査概要・Ⅱ—寝屋川市出雲町所在—』大阪府教育委員会
- 注6. 佐原真他 1958年『船橋Ⅱ』
- 注7. 原田修他 1981年「馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳調査報告」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報』22 東大阪市教育委員会
- 注8. 浅岡俊夫 1988年「伊丹市口酒井遺跡の凸帯土器」『歴史と考古学』高井悌三郎先生喜壽記念事業会
- 注9. 宇野慎敏・山口信義 1983年「長行遺跡—北九州市小倉南区大字長行所在」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』20（財北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室）
- 注10. 末永雅雄・酒詰仲男他 1961年「橿原」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』17 奈良県教育委員会
- 注11. 加藤修・丹羽佑一他 1973年『湖西線関係遺跡調査報告書』 滋賀県教育委員会

表27 浅鉢、煤付着の個数と比率

浅鉢の煤の付着

・煤のある個体数/全体の個体数

浅鉢の種類	暗黄灰色 粘土 上壤・ピット	黒灰色 粘土	溝29	上壙16	黒灰色 砂質土	溝30
A	0/0	1/3	0/0	0/1	0/7	0/0
B	0/3	0/4	2/4	1/2	0/6	0/0
C ₁	4/7	12/30	6/6	1/2	26/45	13/20
D	4/5	1/2	1/2	3/5	8/14	6/9
E	0/1	6/23	0/2	0/1	14/32	3/10
F	0/0	0/0	0/0	0/0	1/3	0/0
G	0/0	1/2	0/0	0/0	0/1	0/0
H	0/1	1/4	0/0	0/0	0/6	0/0

各遺構・層位における器種内での比率

%

浅鉢の種類	暗黄灰色 粘土 上壤・ピット	黒灰色 粘土	溝29	上壙16	黒灰色 砂質土	溝30
A		33.3		0	0	
B	0	0	50.0	50.0	0	
C ₁	57.1	40.0	100	50.0	57.8	65.0
D	80.0	50.0	50.0	60.0	57.1	66.7
E	0	26.1	0	0	43.8	30.0
F					33.3	
G		50.0			0	
H		25.0			0	

Ⅷ 総 括

今回の調査は、本遺跡で実施された調査の中では規模も比較的大きく伸線工場の基礎などにより破壊されていた部分が多かったとはいえ、非常に大きな成果を上げることができた。以下に今回の調査で明らかにできた事柄を、遺構・遺物の順に個条書きで記す。

1. 本遺跡の開始時期は従前知られていたより古く、縄文時代後期に確実に存在し遺物から見れば縄文時代中期後半に遡る。
2. 縄文時代晩期中頃、滋賀里Ⅲb式併行期には第Ⅱ調査区で竪穴住居（2棟以上）、第Ⅰ調査区で大阪府下では現在、類例の知られていない焼骨を含んだ再葬墓（2基）が営まれ、調査地点が集落の中心地であることが判明した。また、引き続き晩期後半まで第Ⅱ調査区および近接地に集落が営まれていることが、土壙や溝の存在から明らかにできた。

現在の知見では、馬場川遺跡がこの時期にほとんど消滅する。自然条件や生業の変化などで移住を考えることができるのではなかろうか。

3. 弥生時代前期以降、居住域が東側に移動するが中期前半から中頃に方形周溝墓が3基（Ⅱ様式1基・Ⅲ様式2基）以上営まれ、墓域となることが判明した。方形周溝墓1では主体部の一つと考えられる木棺1基を検出した。他は後世に墳丘部が削平されているため検出できていない。
4. 古墳時代中期後半から後期にかけて掘立柱建物（2棟以上）や土壙・溝などを確認し、集落の中心の一つであることが判明した。柱穴の中には、柱根が残存するものや根石を据えたものが認められた。
5. 飛鳥時代の土壙を1基検出したことから、現在まだ未発見ながら近隣にこの時代の居住域が存在すると考えられる。
6. 調査地のほぼ中央を、東から西に向かい流れる縄文時代後期以前より古墳時代後期までの最大幅50mの自然河川を確認した。この河川はある時は幅狭く、ある時は幅広く流れを変えることが判明した。おそらく、河川の幅が狭くあるいは、ほぼ埋没した時に集落や墓域の中心地となったと考えられる。

古墳時代後期初頭以降は、完全に埋没し以降の河川が存在しないことから流れを人工的に変えたことも考えられる。

7. 今回の調査でコンテナ300個の遺物が出土した。内訳は、縄文時代に属するものが最も多くコンテナ120個、次いで古墳時代中期の遺物コンテナ100個、弥生時代の遺物コンテナ50個、古墳時代後期以降現代に至る遺物コンテナ30個である。
8. 縄文時代中期後半の土器は、出土数は少ないが従前河内では余り知られていないものである。東日本系の加曾利EⅡ式と西日本系の里木Ⅱ式系の土器が見られ、この時期に河内で使用された土器を知るうえで重要である。
9. 縄文時代後期の土器も量は少ないが、市内の山麓部に日下・縄手遺跡と並んで同時期の

集落が本遺跡に存在したことを示す資料である。

10. 滋賀里Ⅲ b式末期からV式初頭に併行する土器は、周辺では断片的に知られていただけで今回のように包含層や遺構からまとまって出土した例は報告されていない。出土資料から各時期を通して在地産が9割前後、他地域産が1割前後であることが判明した。

特に、滋賀里Ⅳ式併行の土器は、この時期を通した資料で当時の河内における実態を知る上で今後、欠くことのできない資料となろう。

11. 滋賀里Ⅳ・V式併行の玄米の圧痕が付いた土器は、畿内で現在知られている最も古い米に関する資料の一つである。この時期に米が身近に存在したことを端的に示している。緑豆の圧痕とあわせ、農耕の開始を考える上に重要な資料である。
12. 前代と変わらぬ土偶や土製品の存在は、米を知った段階でも精神生活は依然として前代の流れの中にあることを示している。
13. サヌカイト産地同定の結果、わずかながら香川県の金山産のものが含まれていることが明らかとなった。弥生時代前期から中期初頭にかけて同地産のサヌカイトが多くもたらされているが、既にこの時期に萌芽があったことを示している。

五貫森式に属す東海地方系の縄文土器や瀬戸内地方の原下層式の影響を受けた土器も出土している。滋賀里Ⅲ a式以前には、河内でも存在が知られる大洞系の土器(C₁~C₂に併行すると考えられる)は今回の調査で出土していない。これらの事柄は、当時の他地域との交流を考える上で重要である。

14. 石錘や打製石斧の存在は、当時の生業を考えるうえに貴重な資料である。特に滋賀里Ⅳ・V式に併行する打製石斧は、馬場川や日下遺跡からは出土が報告されていない。上述の米の圧痕とともに農耕の開始を考える上で今後、検討を要する。
15. 弥生時代前期の土器は、自然流路などからの出土で量も少ないが、従前知られていない新段階のものも存在し、古・中段階に引き続き生活が営まれたことを示している。
16. 弥生時代中期(第Ⅱ~Ⅲ様式前半)の土器は、量は少ない。しかし、方形周溝墓3に供献された土器群のように第Ⅲ様式前半の良好な一括資料が見られる。この資料は、同時期の周辺の方形周溝墓に供献された土器に比して、他地域産が多いことが被葬者との関連で注目される。また、自然流路や遺構内出土品で完形品ないしは完形に復元できたものの多くは、出土状況や体部に穿孔をもつものが認められることから見て墓と何らかの関係の有すると考えられる。
17. 古墳時代中期(5世紀後半から6世紀初頭)の遺物には、渡来系の移動式の竈や土製支脚が見られる。また、韓式系土器の中には、角閃石を含む在地産のものが認められる。

算盤玉形の紡錘車と通常、古墳の副葬品にしか見られない鑄造鉄斧も各1点出土した。製塩土器や轆の羽口も出土している。これらの遺物は、当時の本遺跡に居住した人々の性格を考える上で非常に重要である。

圖

版



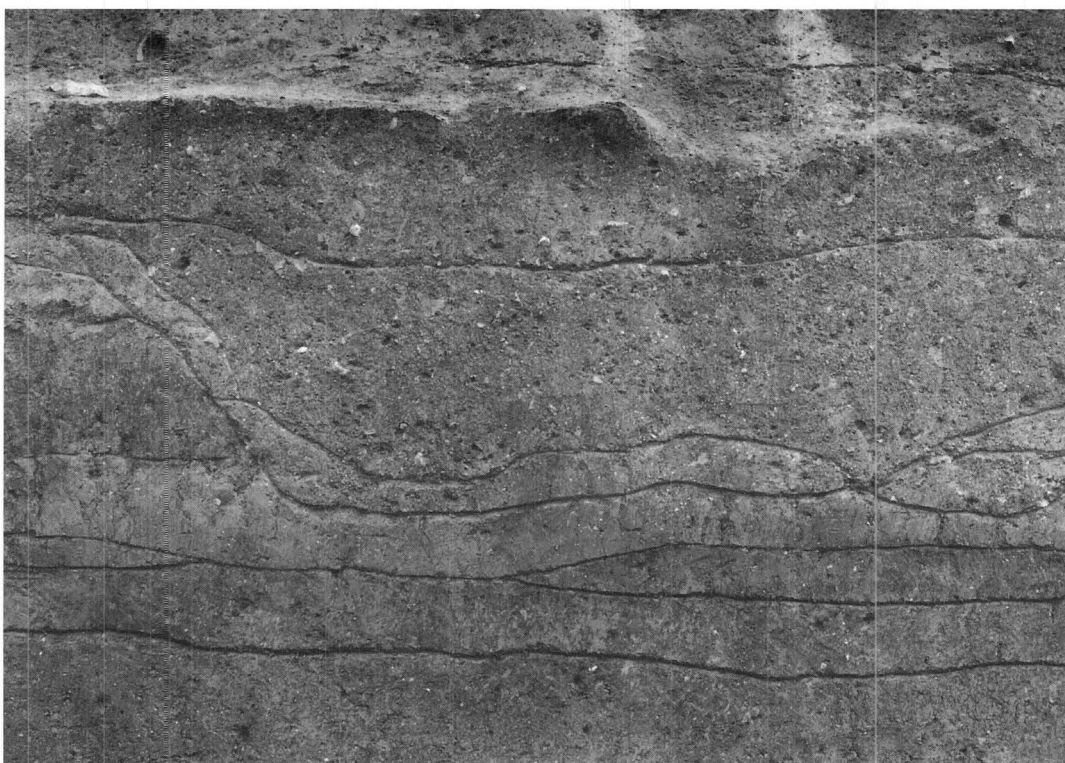
第1調査区調査開始風景（南西より）



第2調査区攪乱検出状況（北東より）



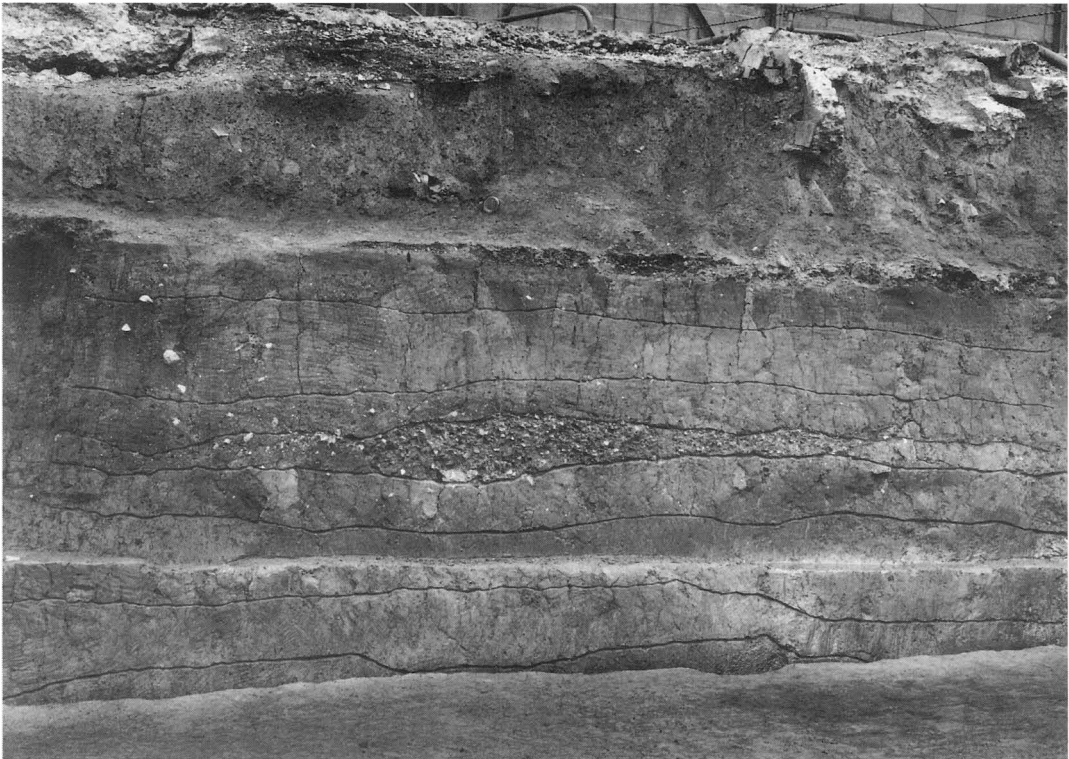
第2調査区南壁断面（北より）



第2調査区東壁断面（西より）



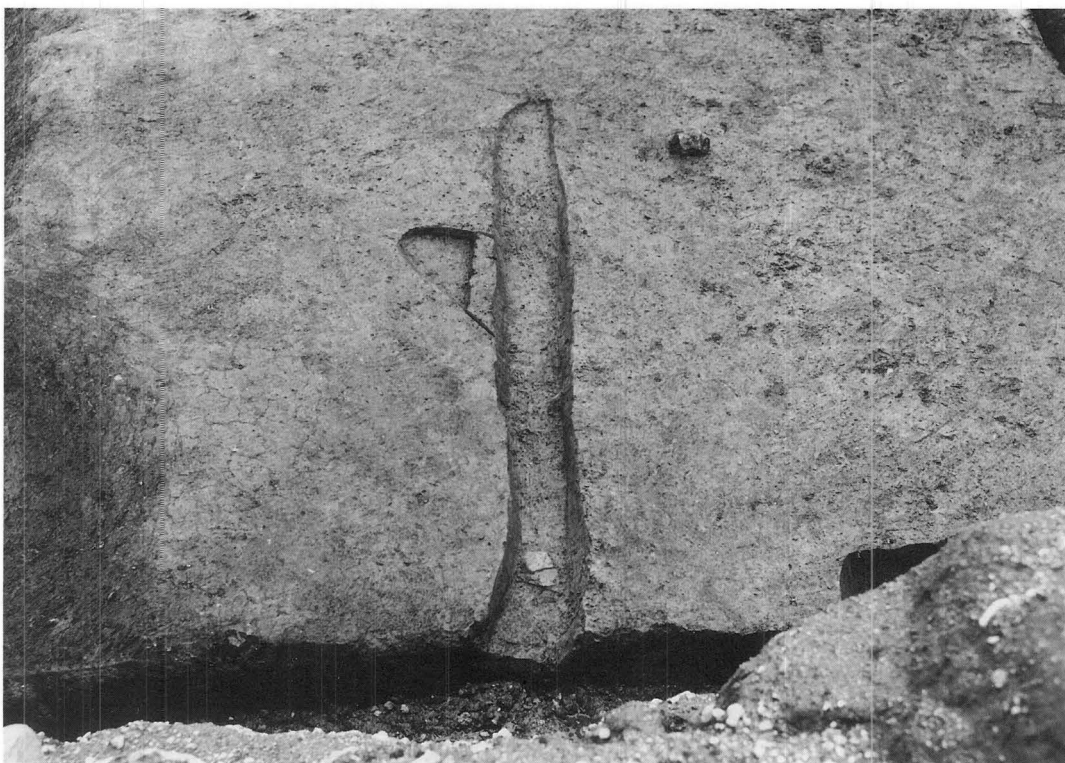
第2調査区南壁断面（北より）



第1調査区北壁断面（南より）



第1調査区西壁断面（北より）



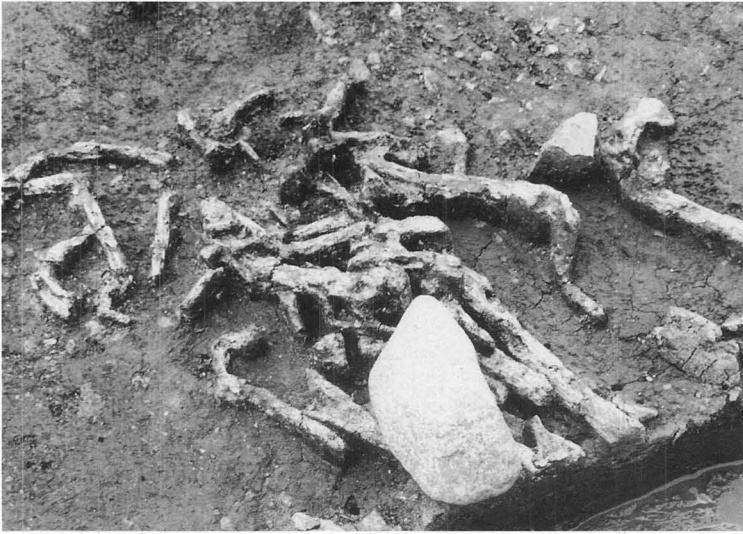
縄文V遺構（溝38・土壙48）検出状況（北より）



第1調査区土壙墓1・2検出状況(北より)



第1調査区土壙墓1検出状況(東より)



第1調査区土壙墓1
中央集骨状況(北東より)



第1調査区土壙墓1
石撤去後の状況(東より)



第1調査区土壙墓1
完掘状況(北東より)



第1調査区土壙墓2検出状況（北より）



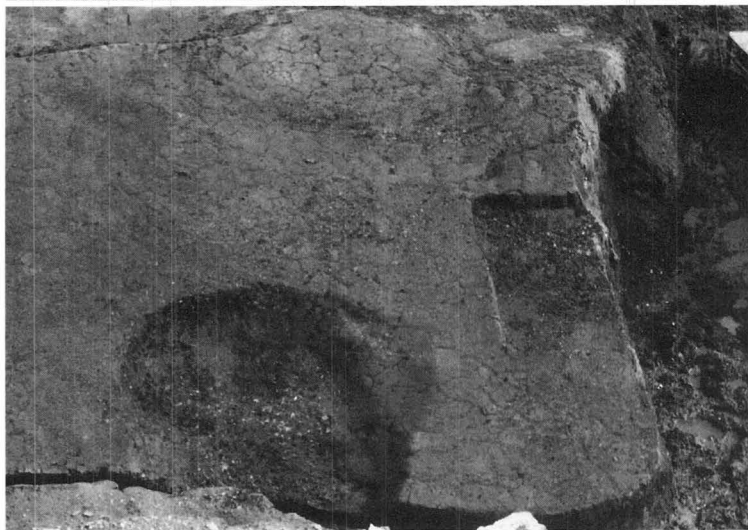
第1調査区土壙墓2検出状況（南より）



第1調査区土壙墓2
集骨状況(南より)



第1調査区土壙墓2
完掘状況(北東より)



第1調査区土壙墓1・2
完掘状況(北より)



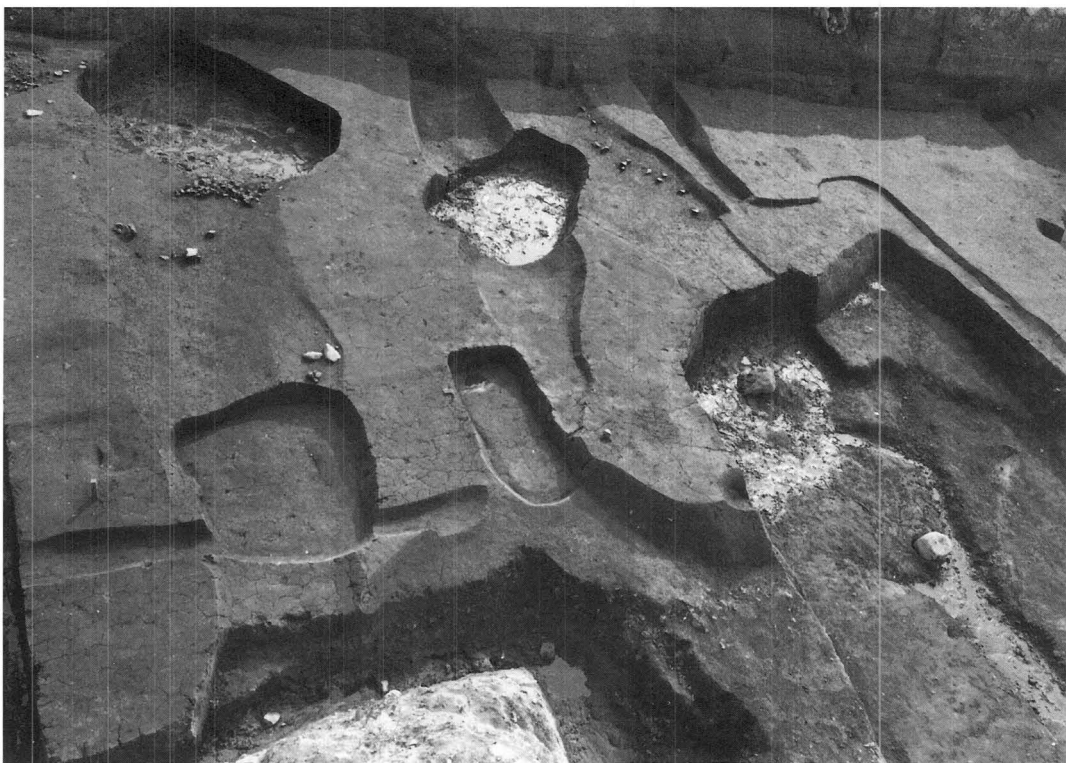
第2調査区ピット検出状況(南西より)



第2調査区ピット検出状況(北より)



第2調査区ピット検出状況(東より)



第2調査区溝35・33検出状況(北より)



第2調査区溝35検出状況（南西より）



第2調査区溝33検出状況（北より）



第2調査区溝33遺物出土状況（南西より）



第2調査区土壙22遺物出土状況（北より）

第2調査区溝33
遺物出土状況（北より）

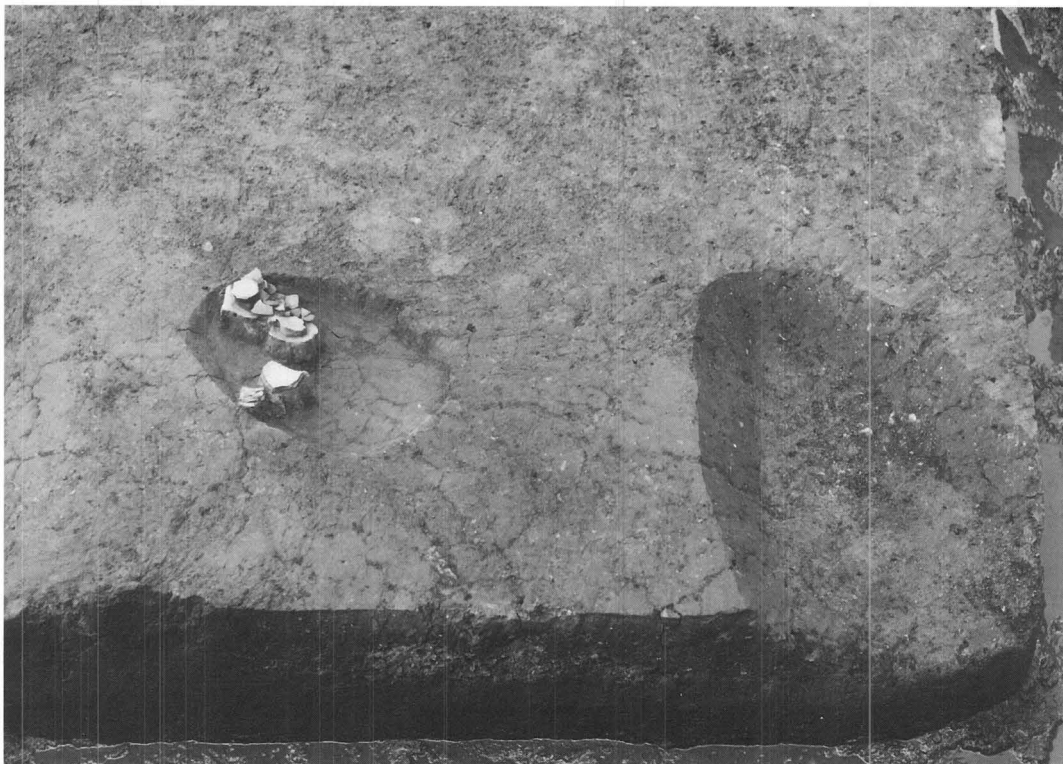


黒灰色粘土層遺物
出土状況下（北より）

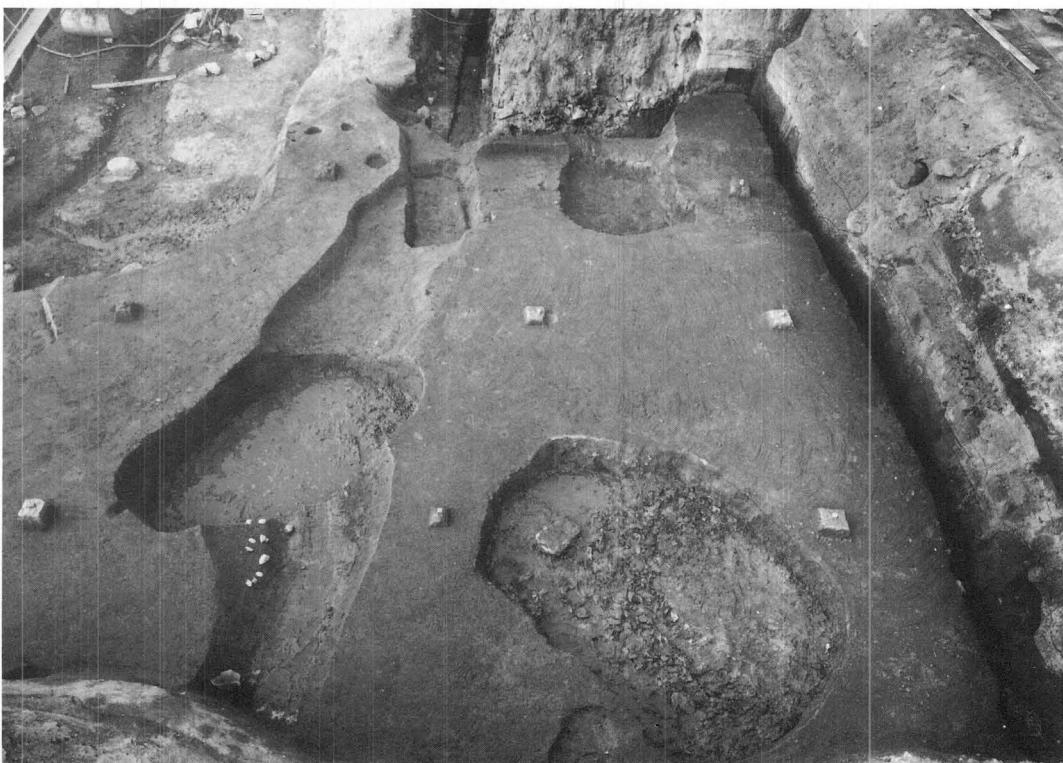


第2調査区暗黄灰色粘土層
深鉢出土状況（東より）





第1 調査区土壙 14 甕出土状況（北より）



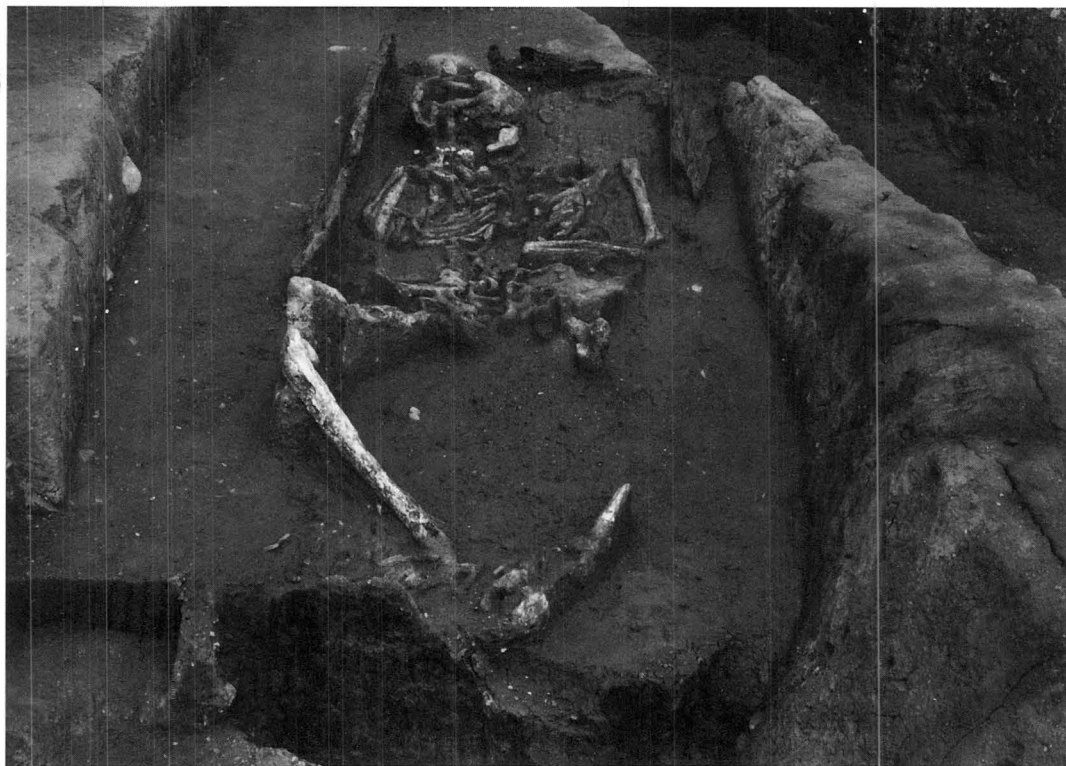
第2 調査区方形周溝墓 2 周溝検出状況（南より）



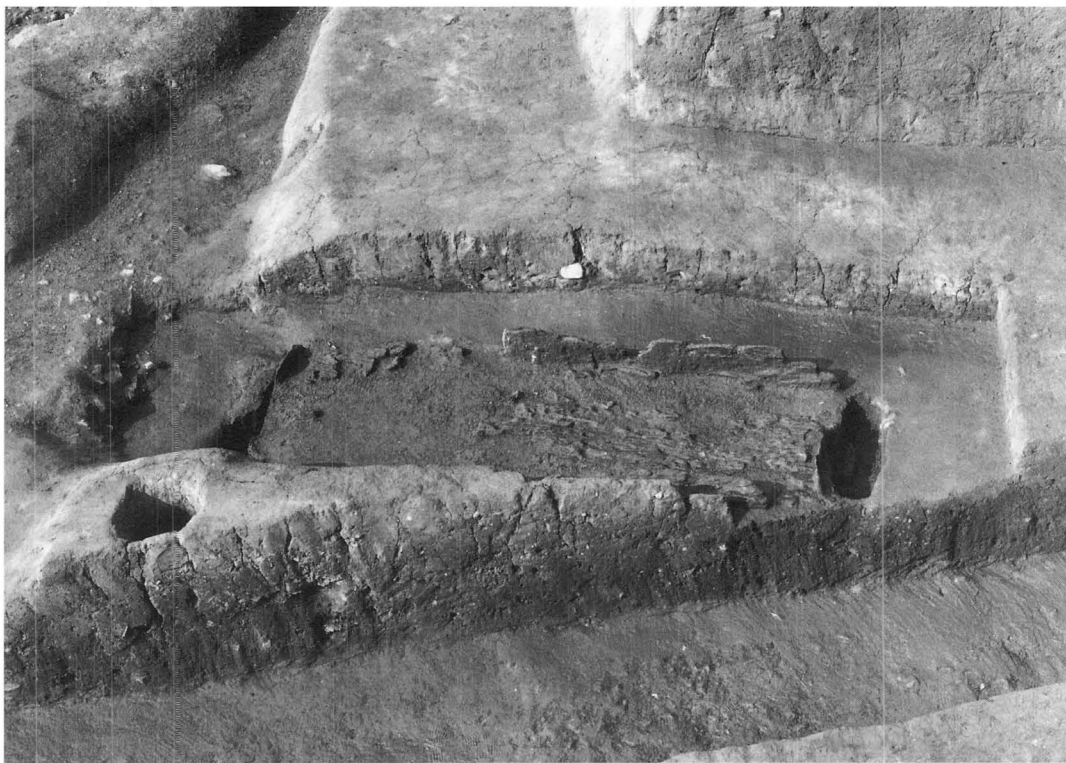
第2調査区木棺墓検出状況(西より)



第2調査区木棺墓蓋撤去後状況(北東より)



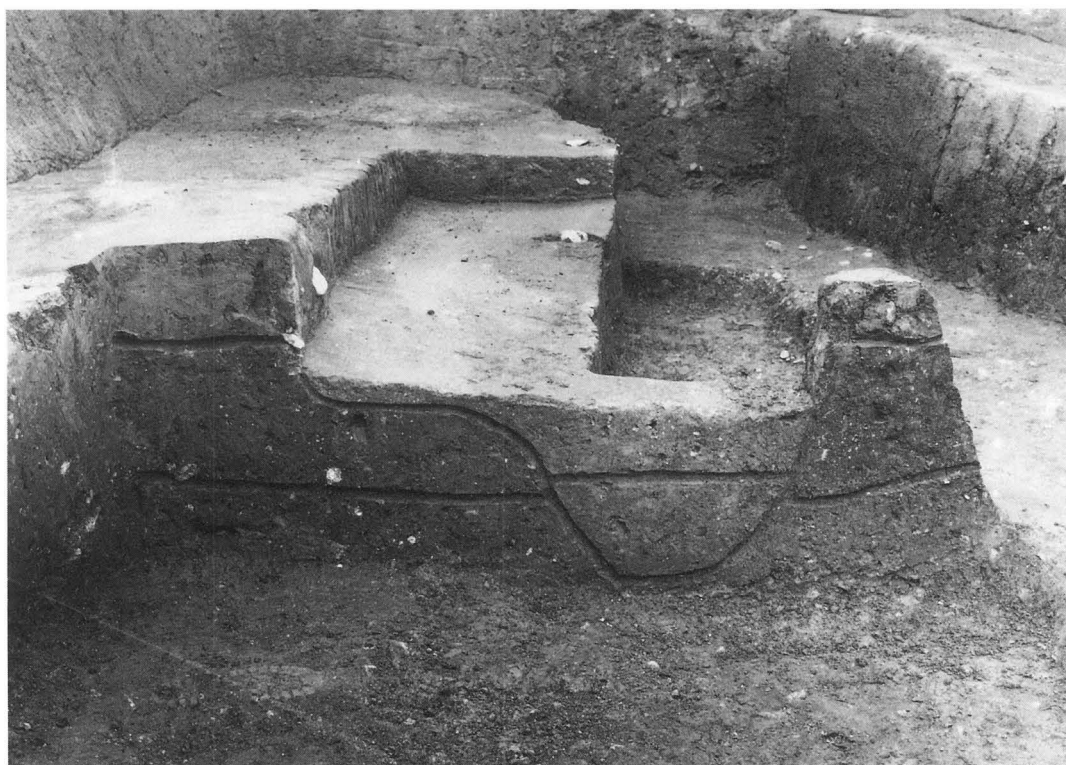
第2調査区木棺墓人骨検出状況（南より）



第2調査区木棺墓人骨取り上げ後の状況（東より）

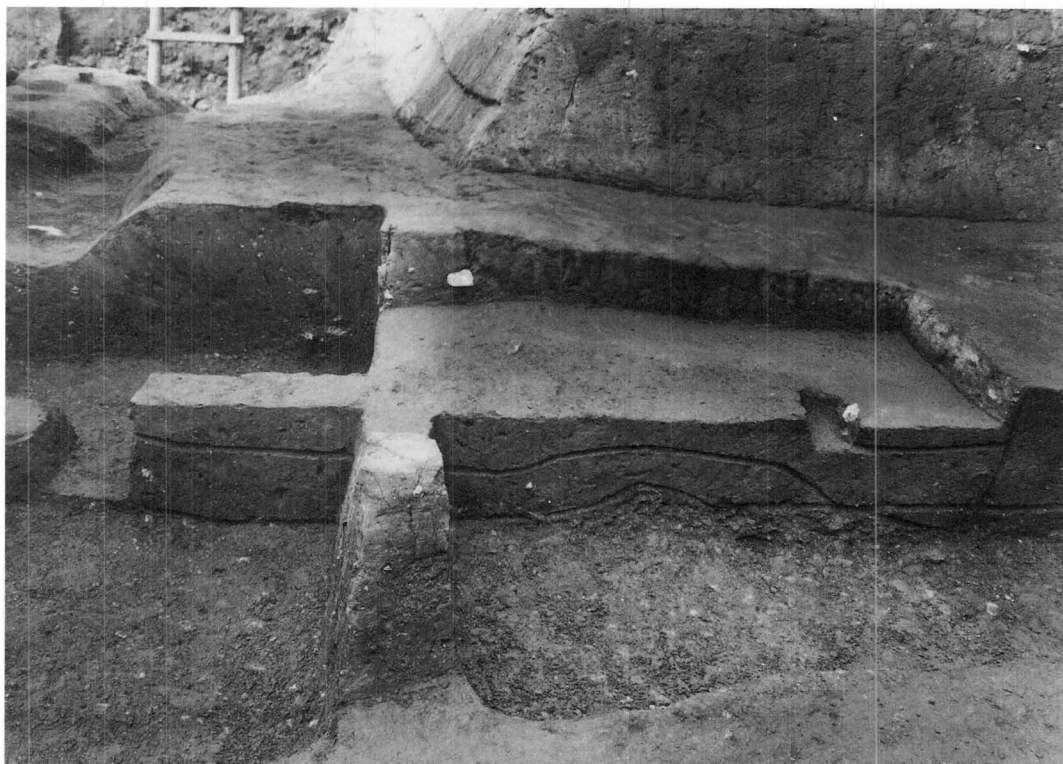


第2調査区木棺墓人骨上半身検出状況（東より）

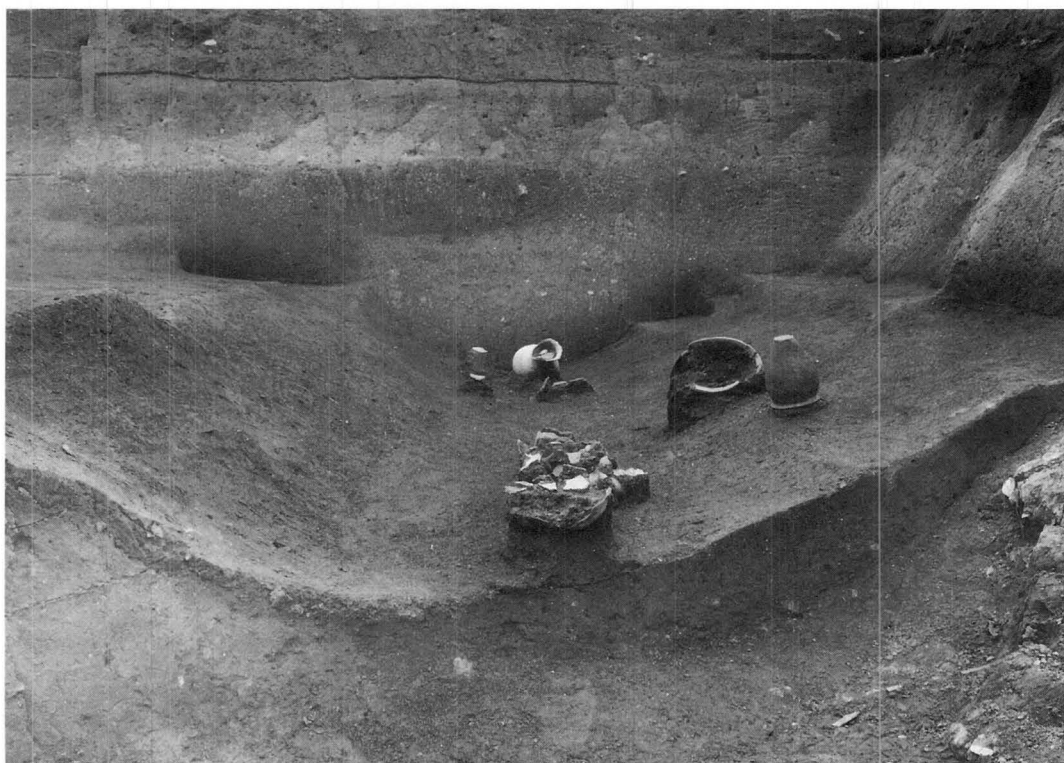


第2調査区木棺墓、堀方埋土の状況（南より）

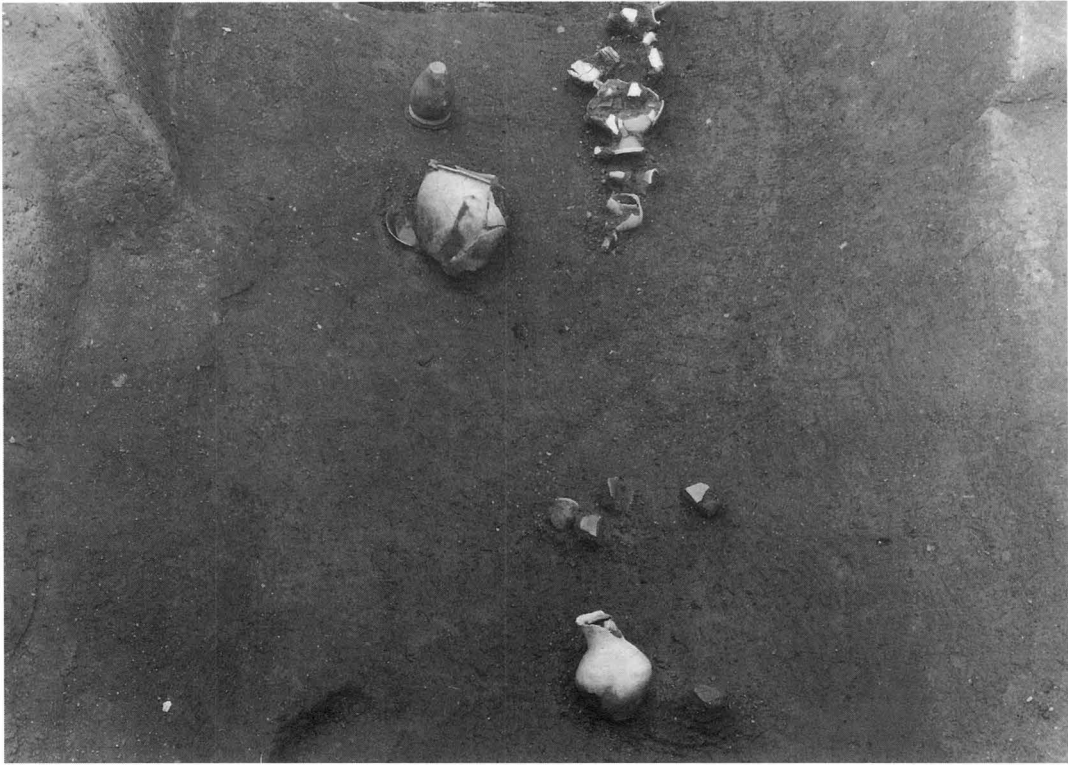
図版18
遺構（弥生時代中期）



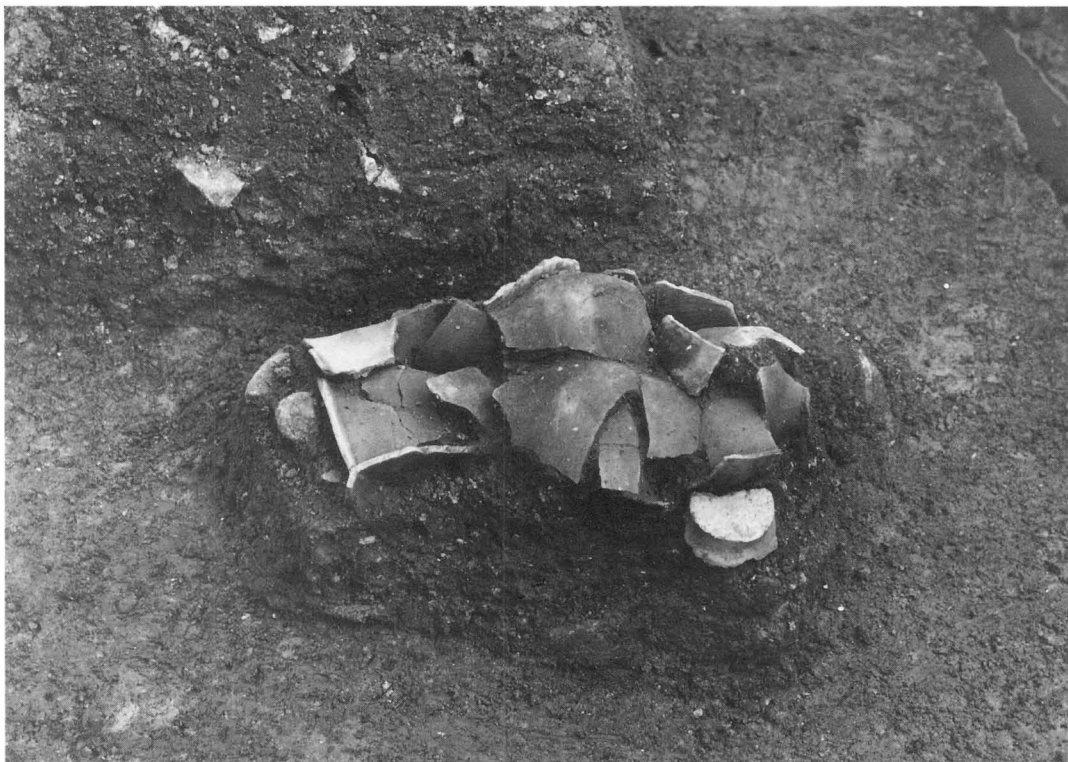
第2調査区木棺墓、堀方埋土の状況（東より）



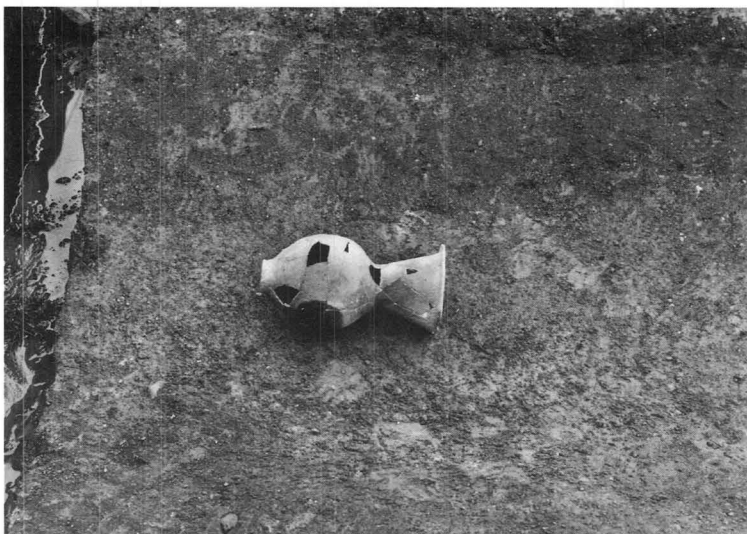
第2調査区方形周溝墓3、西側周溝供献土器出土状況（北より）



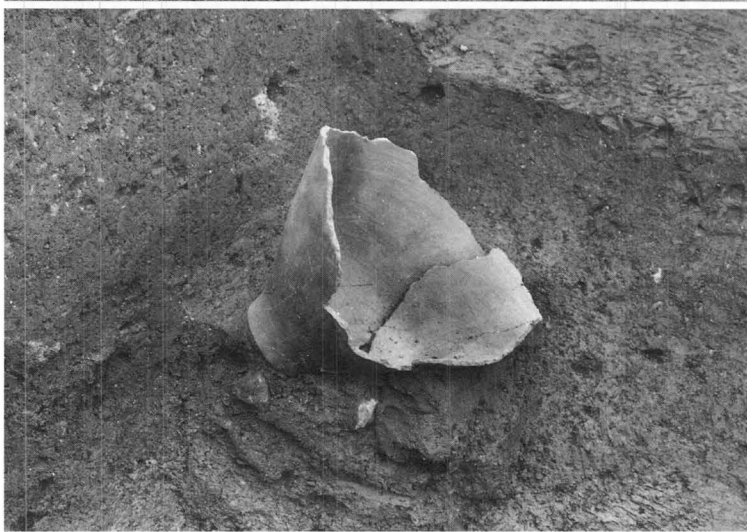
第2調査区方形周溝墓3、西側周溝供献土器出土状況（南より）



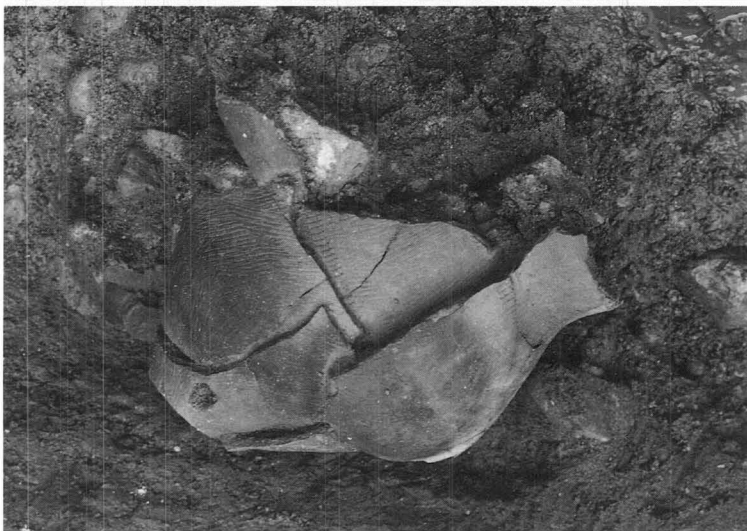
第2調査区方形周溝墓2、北側周溝供献土器出土状況（南より）



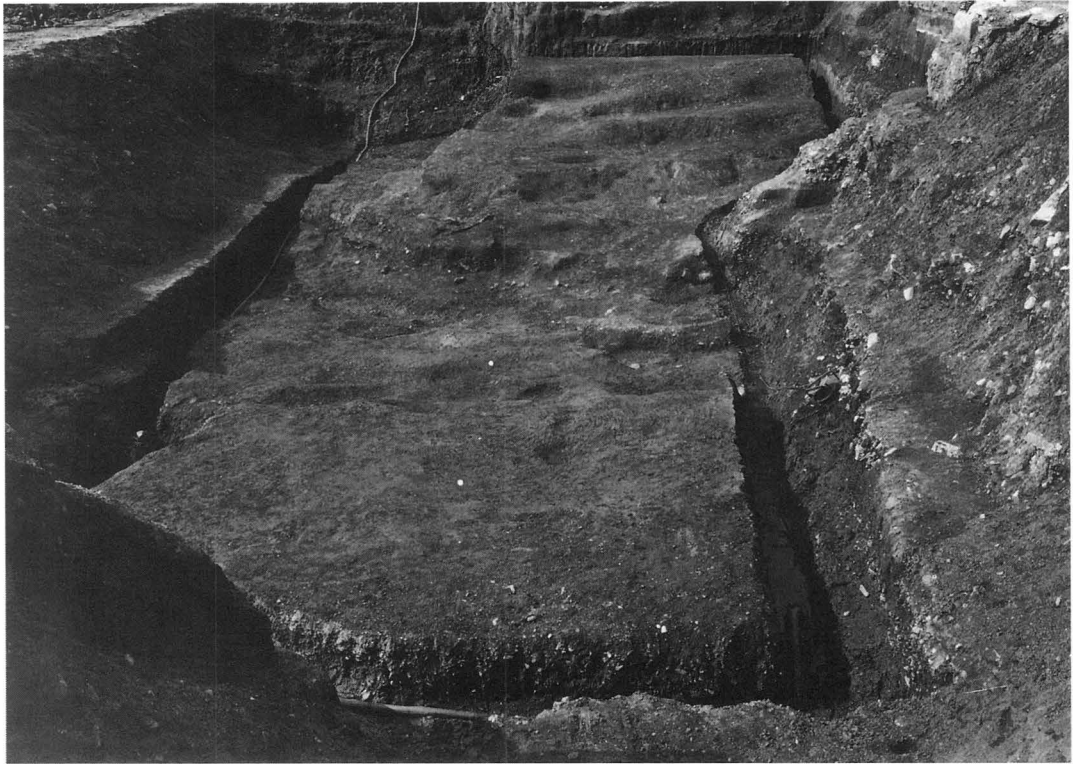
第2調査区方形周溝墓2
北側周溝供献土器出土状況
(北より)



第2調査区方形周溝墓2
西側周溝甕出土状況
(東より)



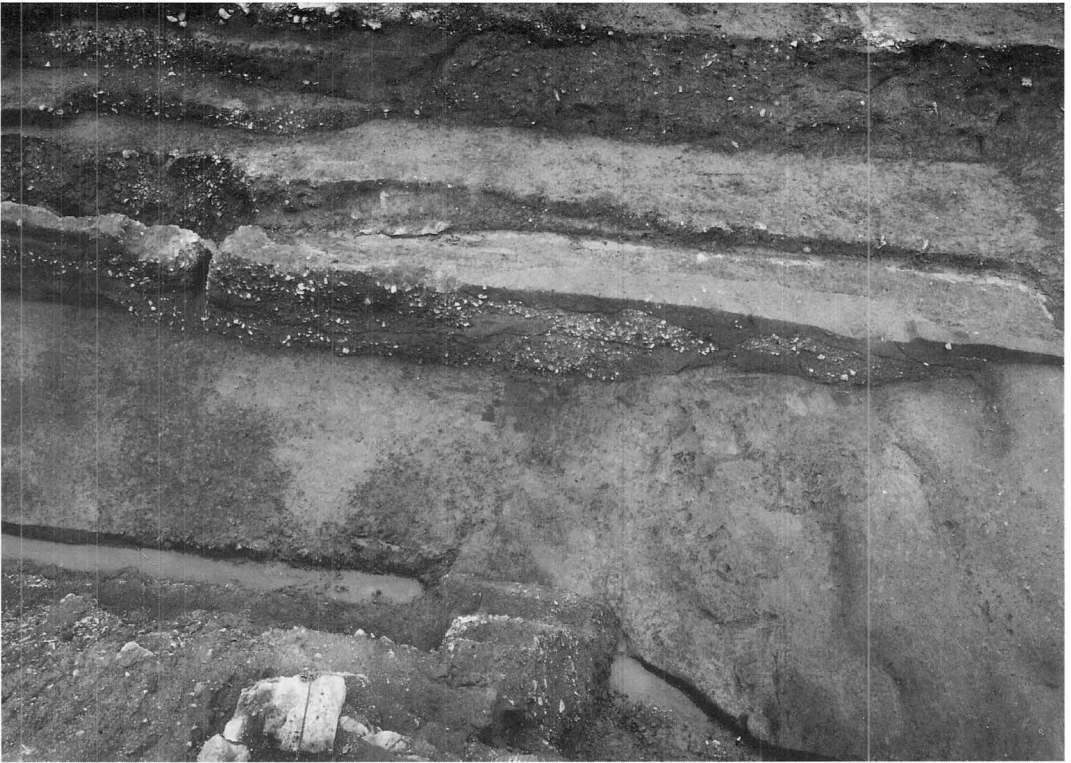
第2調査区自然流路3
壺出土状況(南より)



第1調査区自然流路1完掘状況（南より）



第1調査区自然流路1完掘状況（北より）



第1調査区自然流路1完掘状況(東より)



第1調査区自然流路1肩口完掘状況(東より)



第1調査区自然流路堆積土断面(東より)



第1調査区自然流路1肩口自然木検出状況(南より)



第1調査区遺構検出状況（北より）



第2調査区遺構検出状況（北より）



第2調査区遺構検出状況（東より）

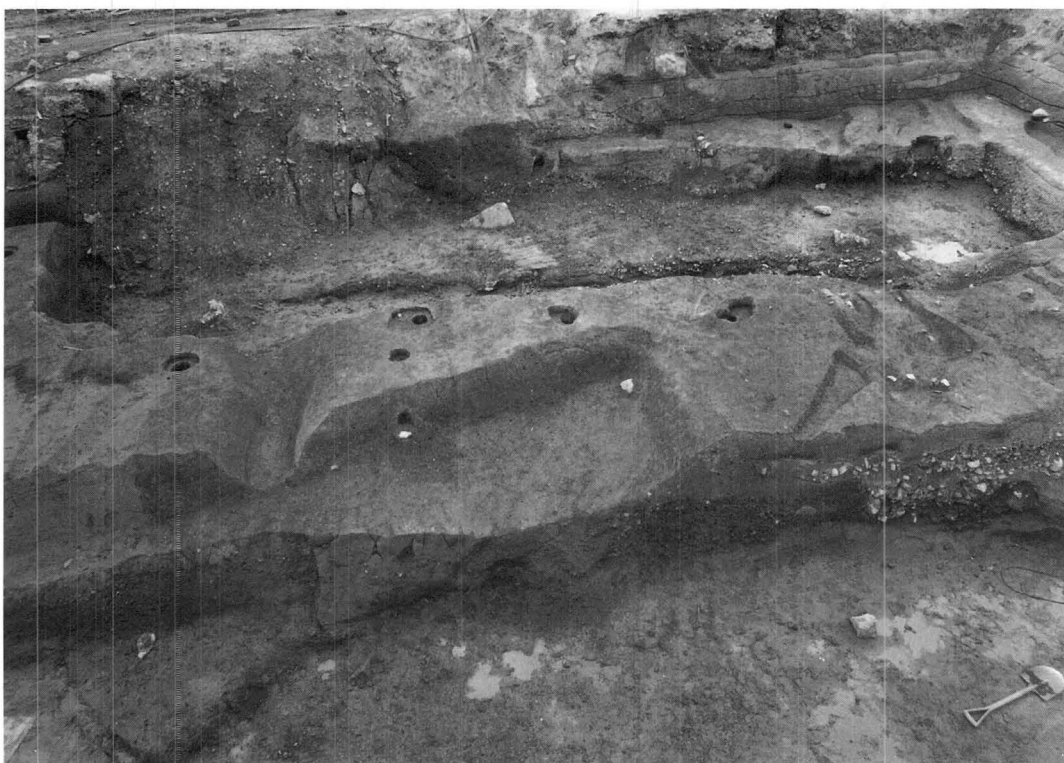


第2調査区中央部北半遺構検出状況（東より）

図版26
遺構（古墳時代中期）



第2調査区北西部遺構検出状況（東より）



第2調査区中央部南半遺構検出状況（東より）



第1調査区溝5遺物出土状況（西より）



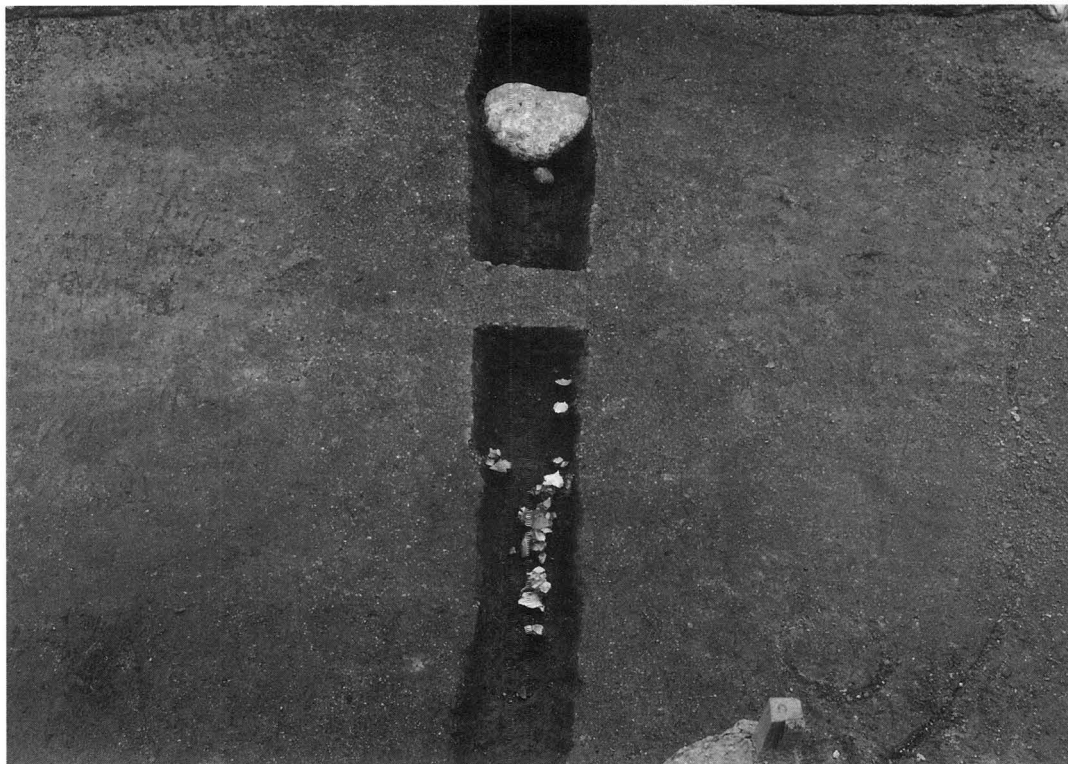
第1調査区土壙4遺物出土状況（東より）



第1 調査区東壁断面遺物出土状況（西より）



第1 調査区遺物出土状況（北西より）



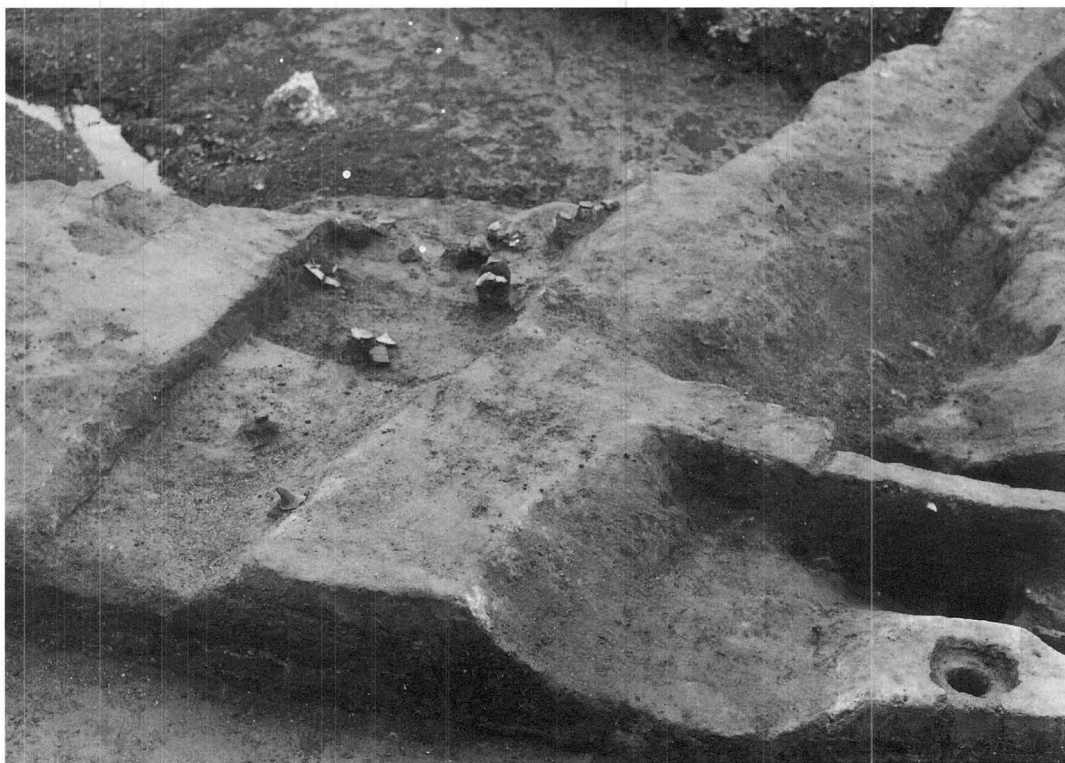
第2調査区溝21 製塩土器他出土状況（北より）



第2調査区溝・ピット検出状況（北より）



第2調査区溝27遺物出土状況（南より）



第2調査区溝26遺物出土状況（西より）



第2調査区南西部溝・ピット検出状況（北より）



第2調査区ピット33柱根検出状況（西より）



第2調査区ピット32検出状況（北より）



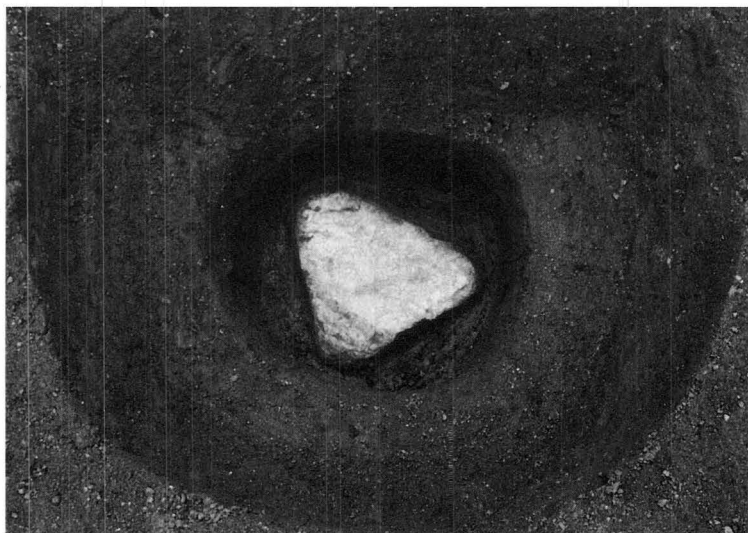
第2調査区掘立柱建物1柱穴（ピット32・33・35）断ち割り状況（西より）



第2調査区ピット35断ち割り状況（西より）



第2調査区ピット32断ち割り状況（西より）



第2調査区ピット28
根石検出状況(南より)



第2調査区ピット28
検出状況(東より)



第2調査区ピット30
根石検出状況(西より)

第2調査区ピット10
根石検出状況（南より）



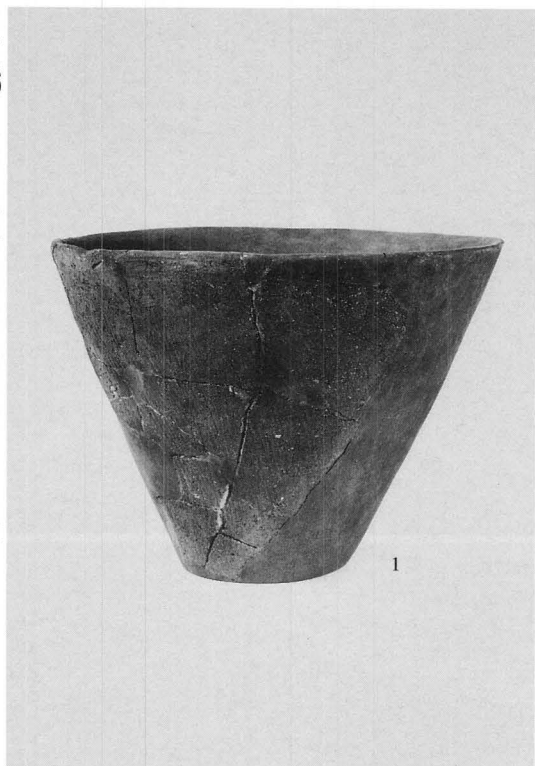
第2調査区ピット47
根石検出状況（東より）



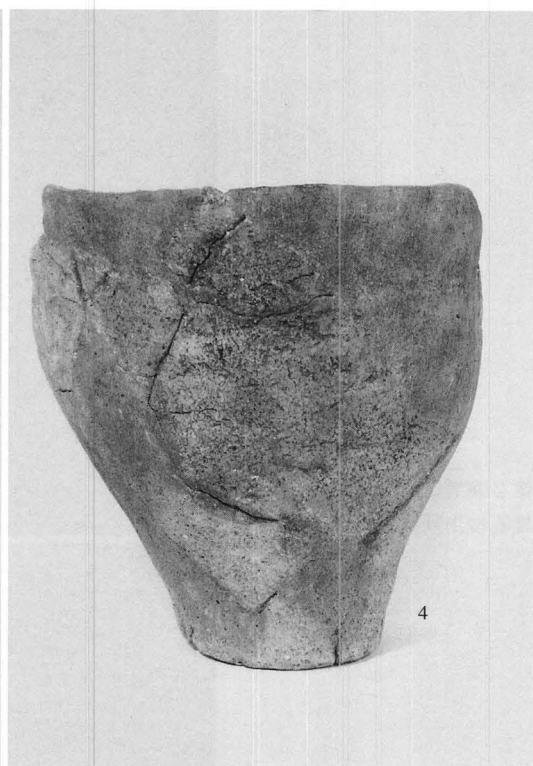
第2調査区ピット33
柱根取り上げ後の状況（西より）



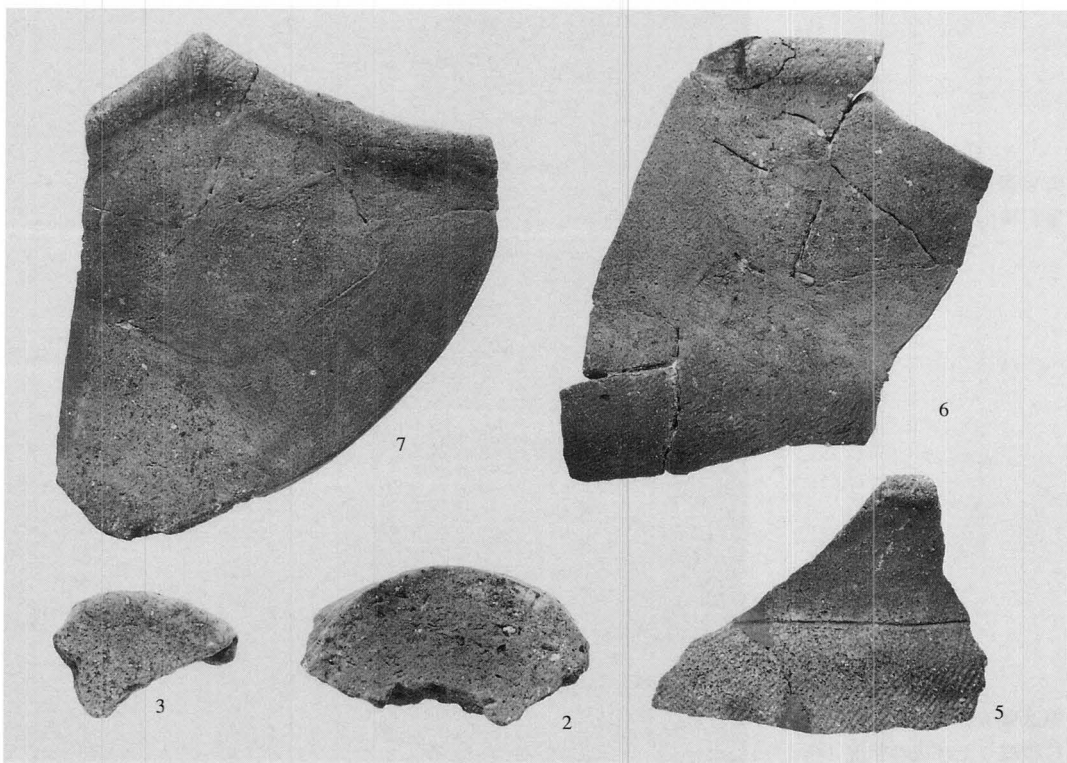
図版36 遺物（縄文時代後期以前・土器）



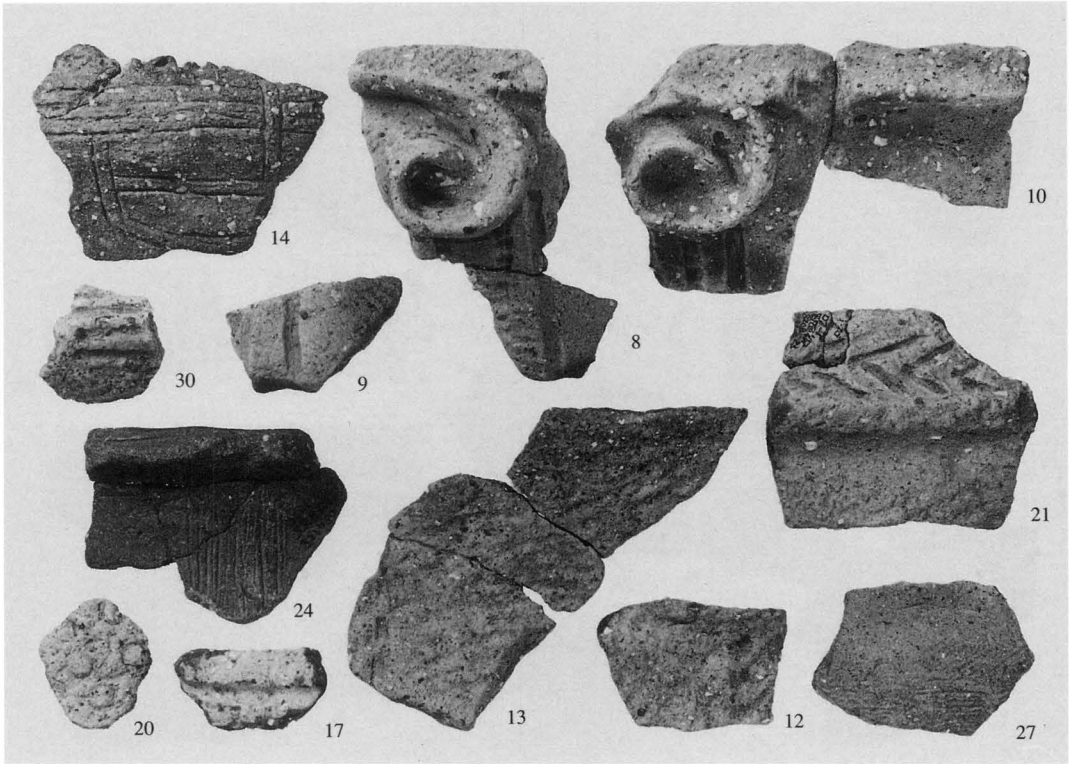
深鉢



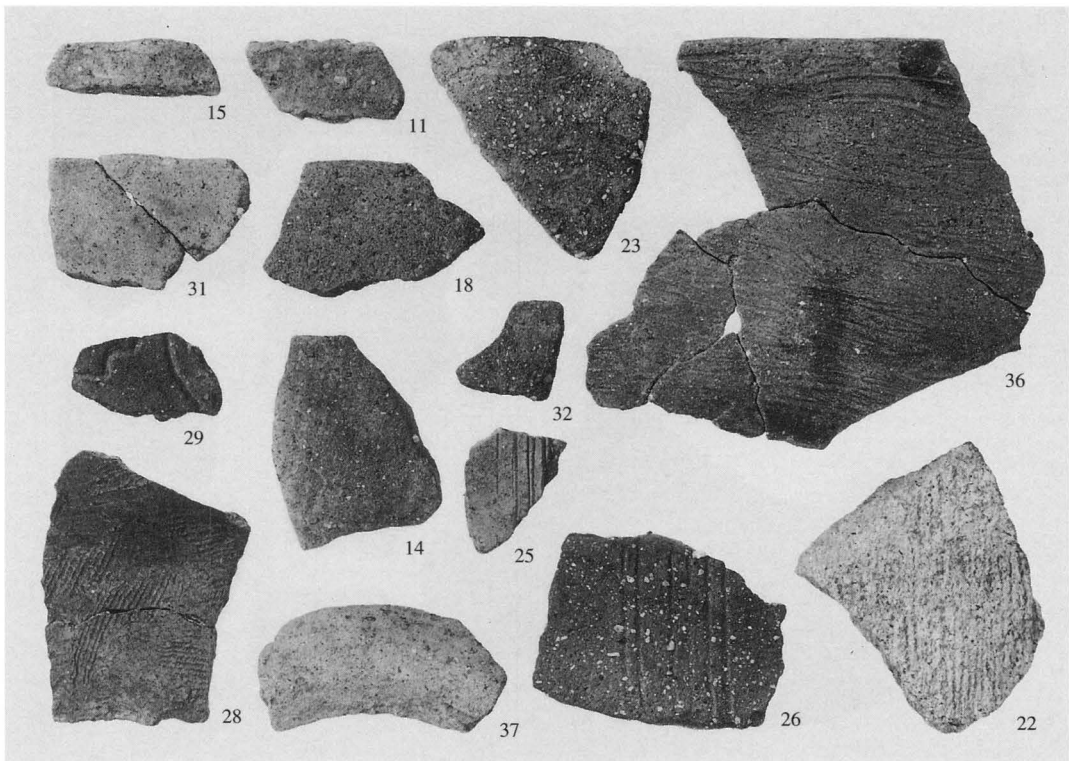
深鉢



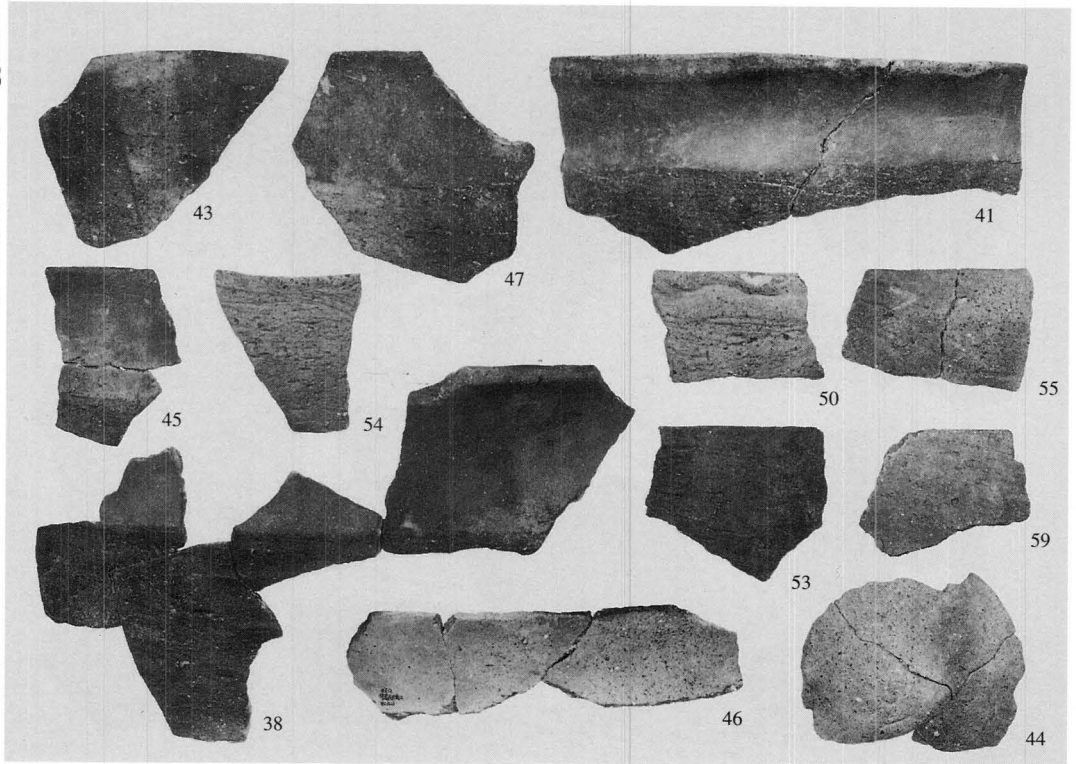
深鉢・浅鉢・底部



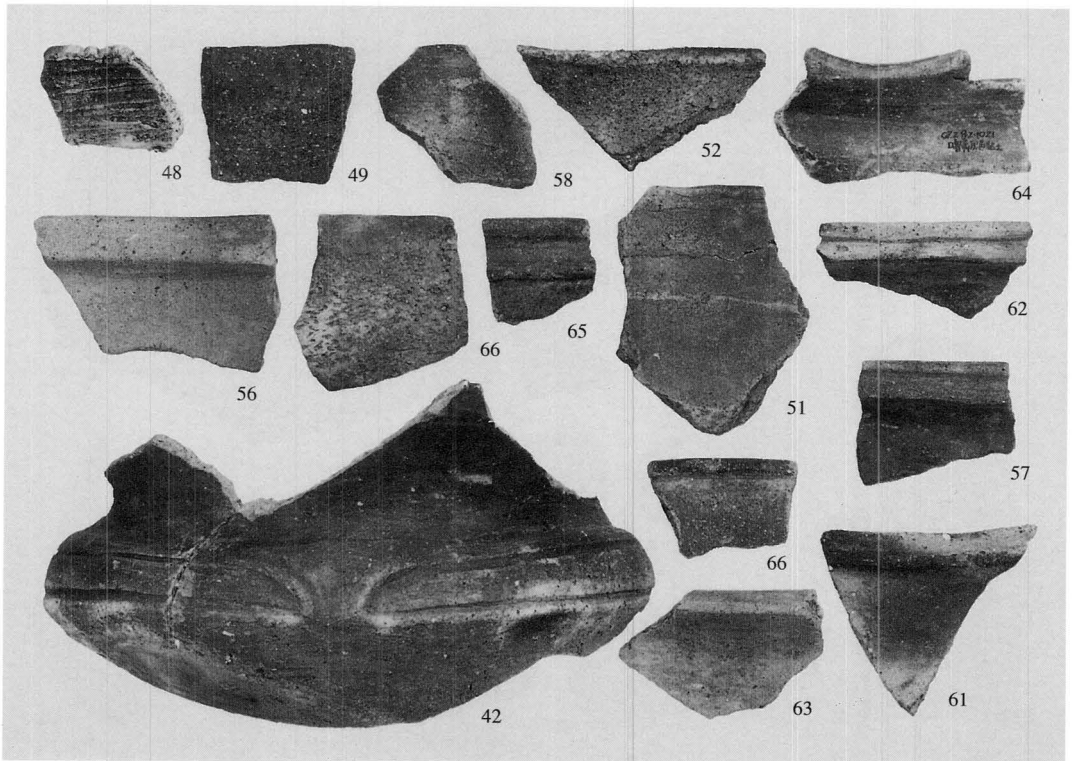
深鉢・浅鉢



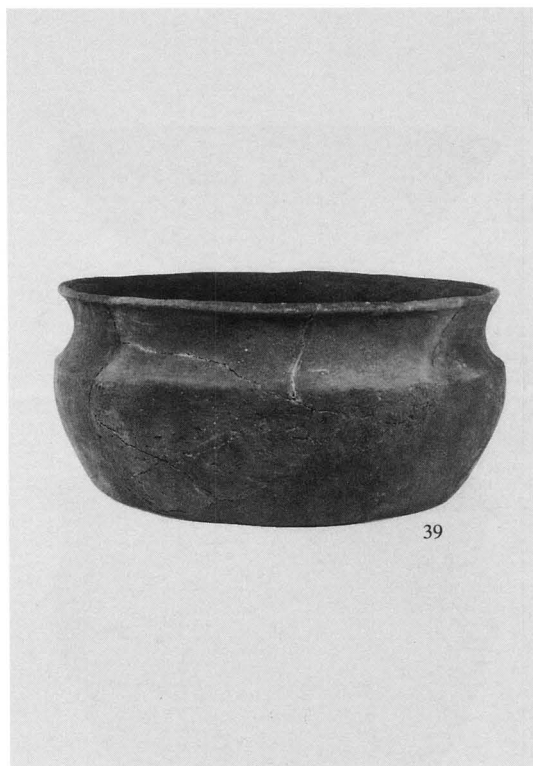
深鉢・浅鉢・底部



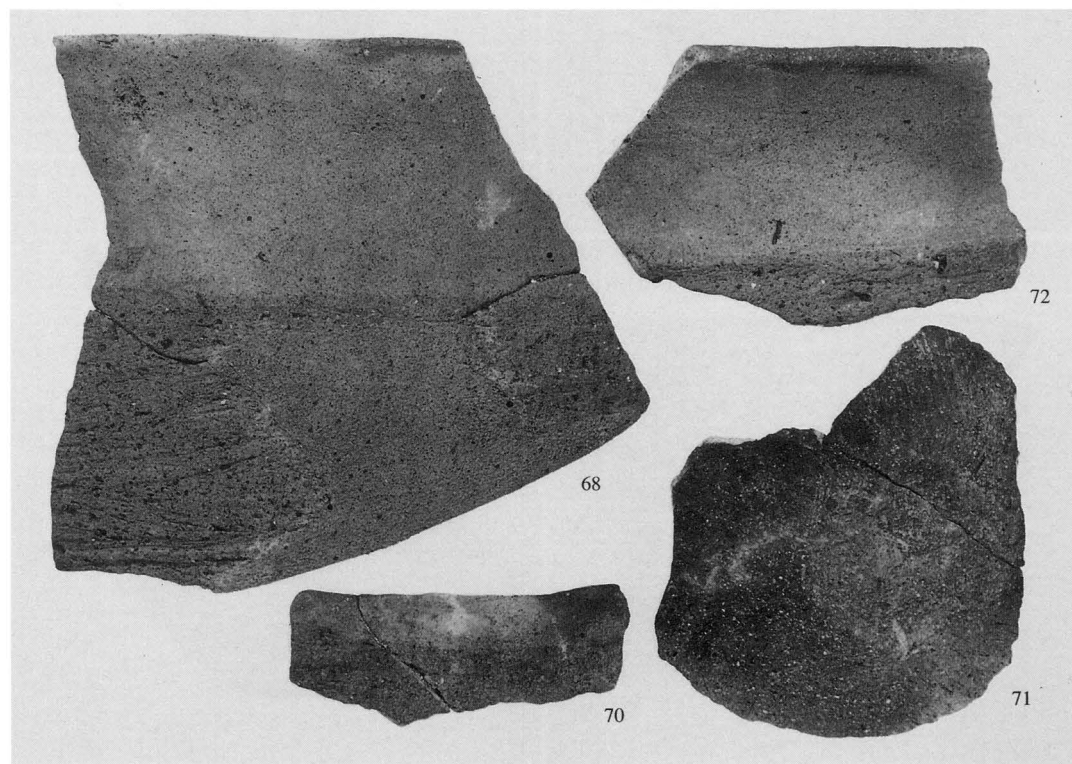
深鉢・浅鉢・底部



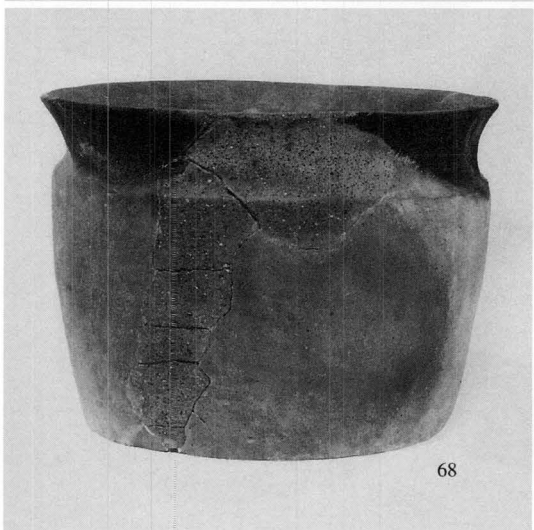
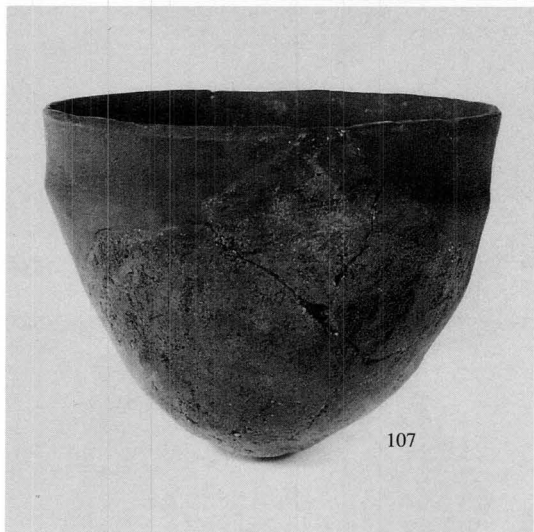
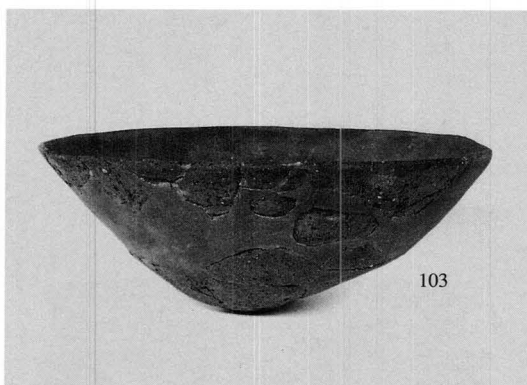
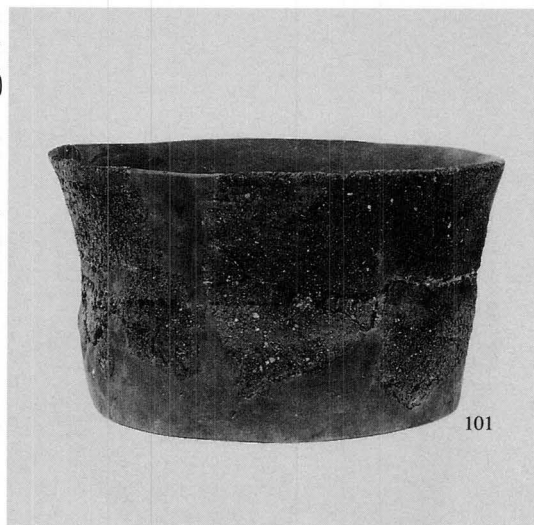
深鉢・浅鉢



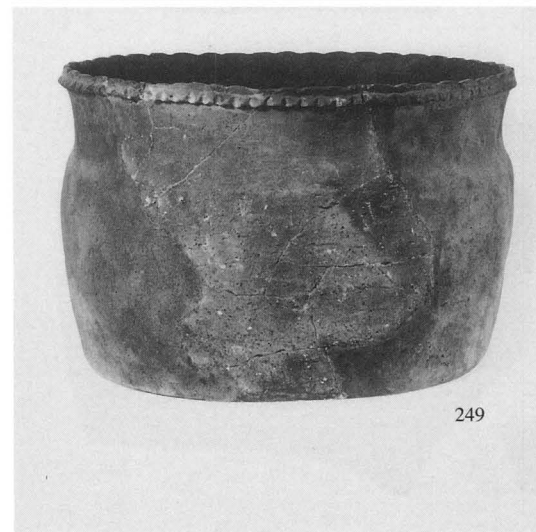
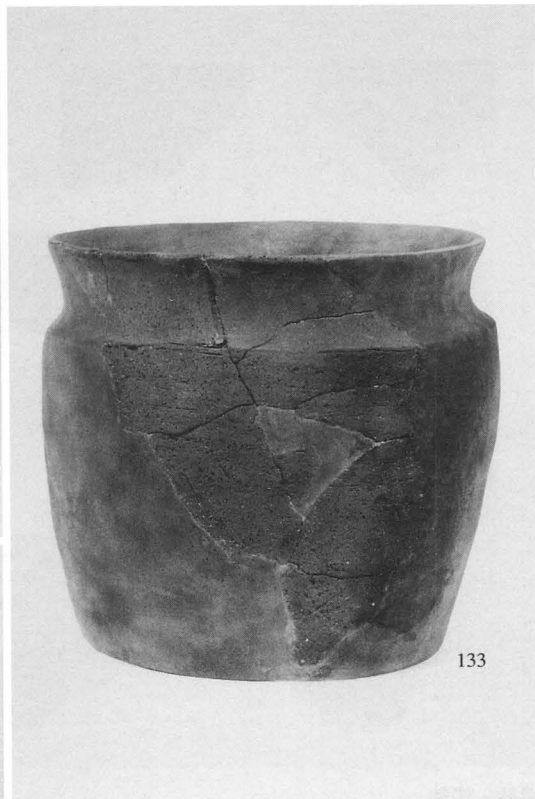
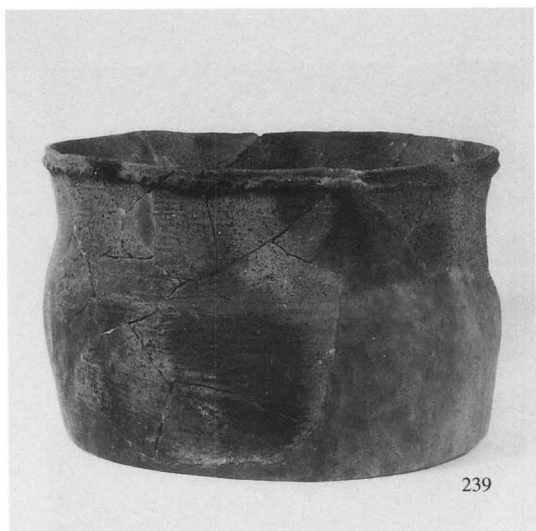
深鉢

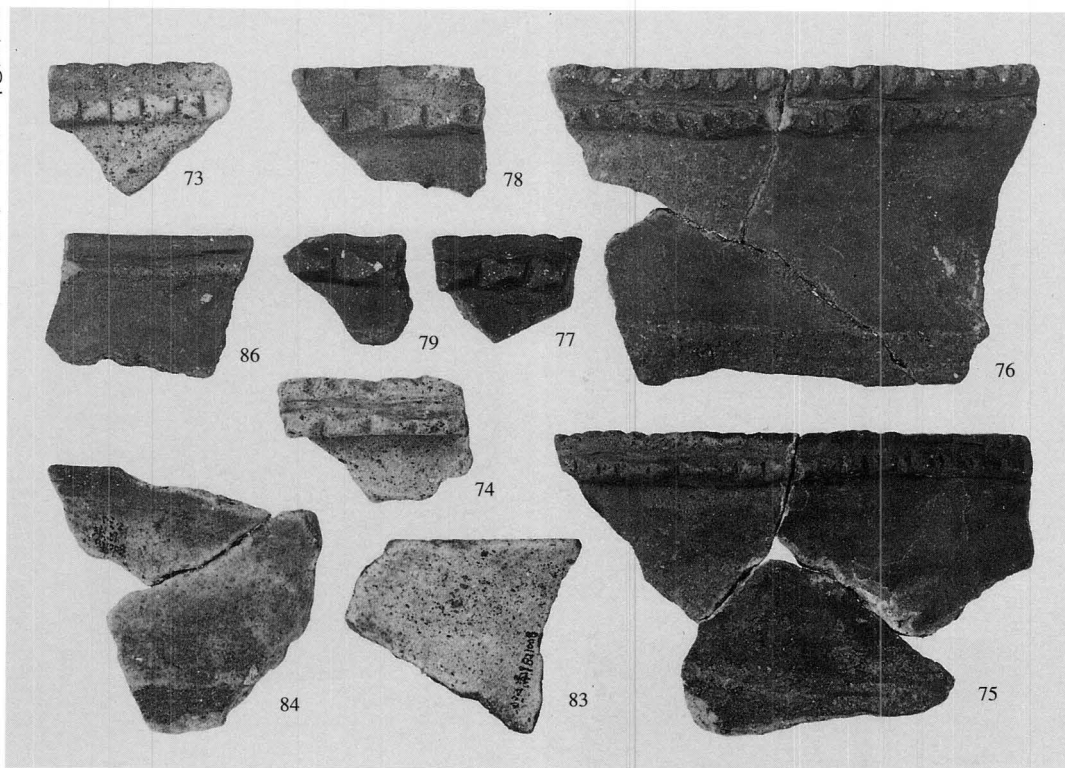


深鉢・底部

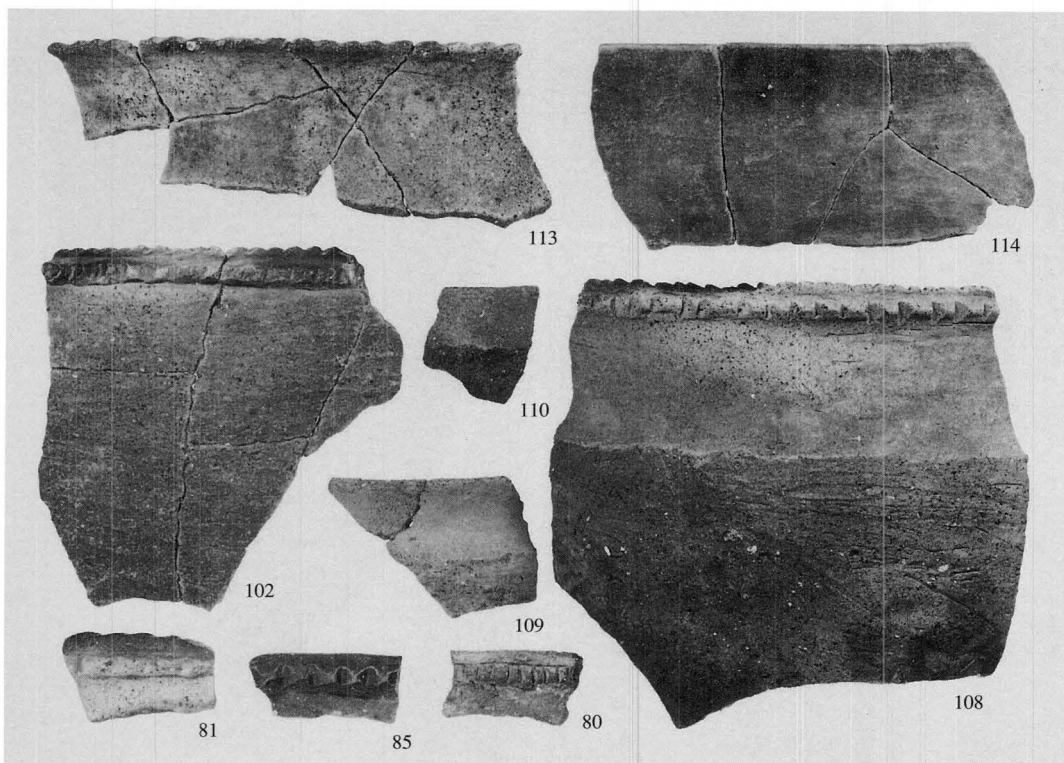


深鉢 (68・101・105・107・235) 浅鉢 (103)

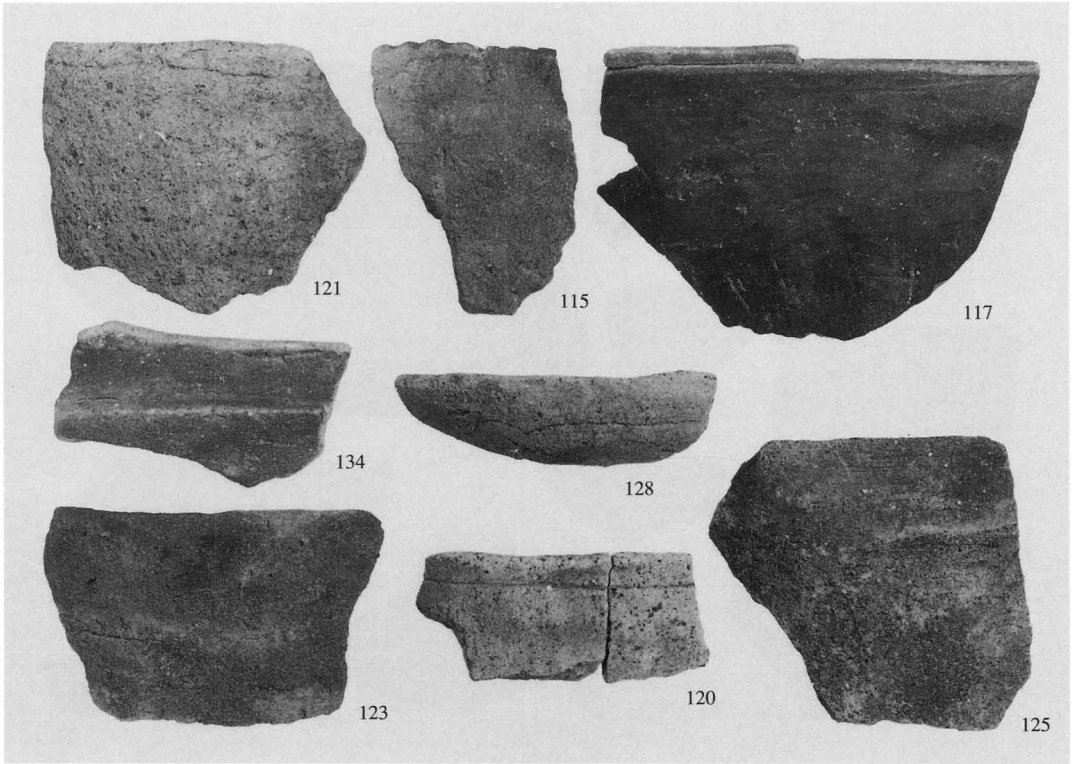




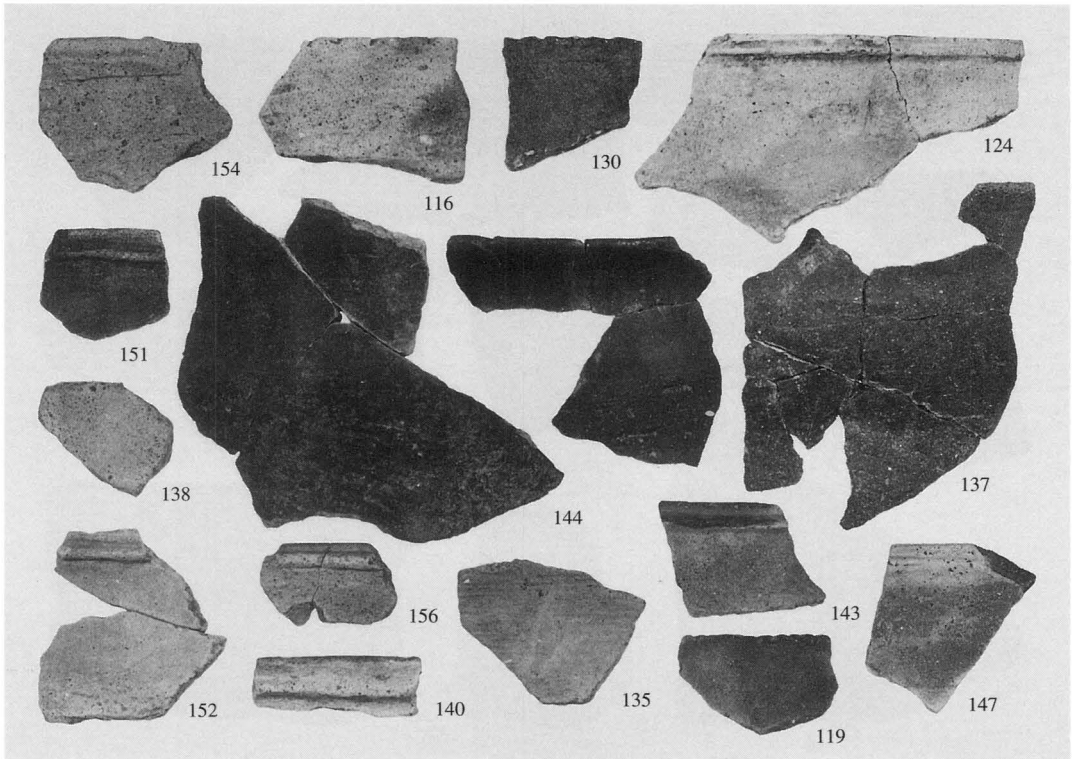
深鉢・浅鉢



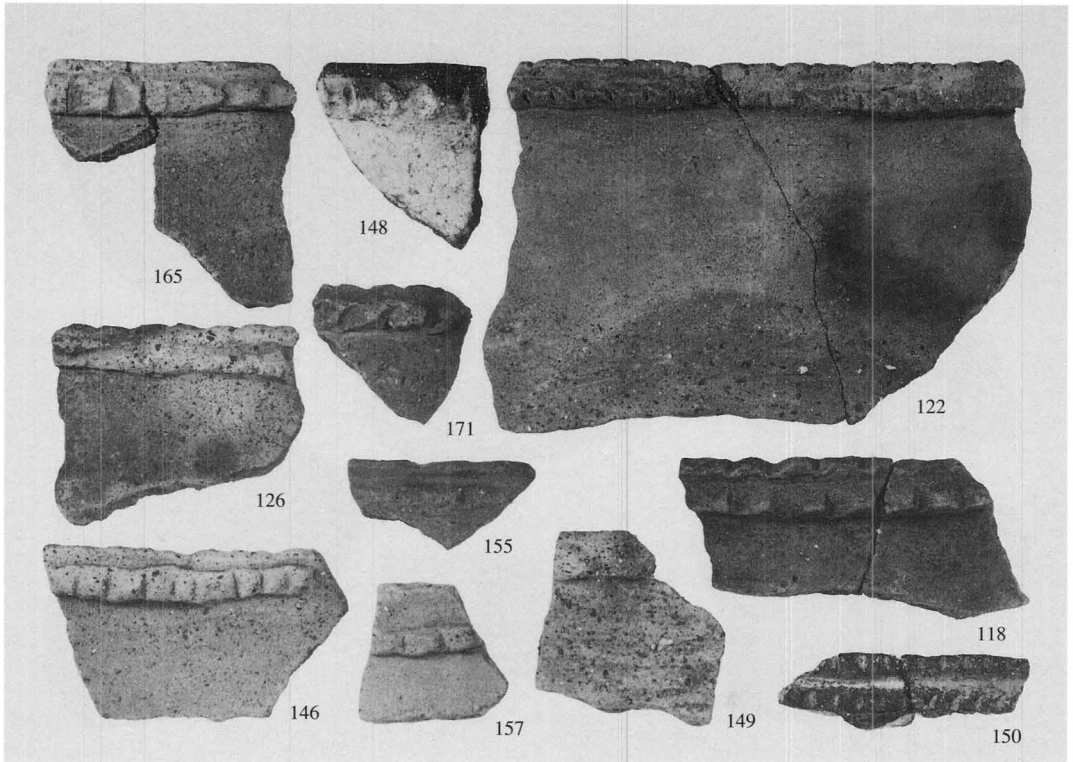
深鉢・浅鉢



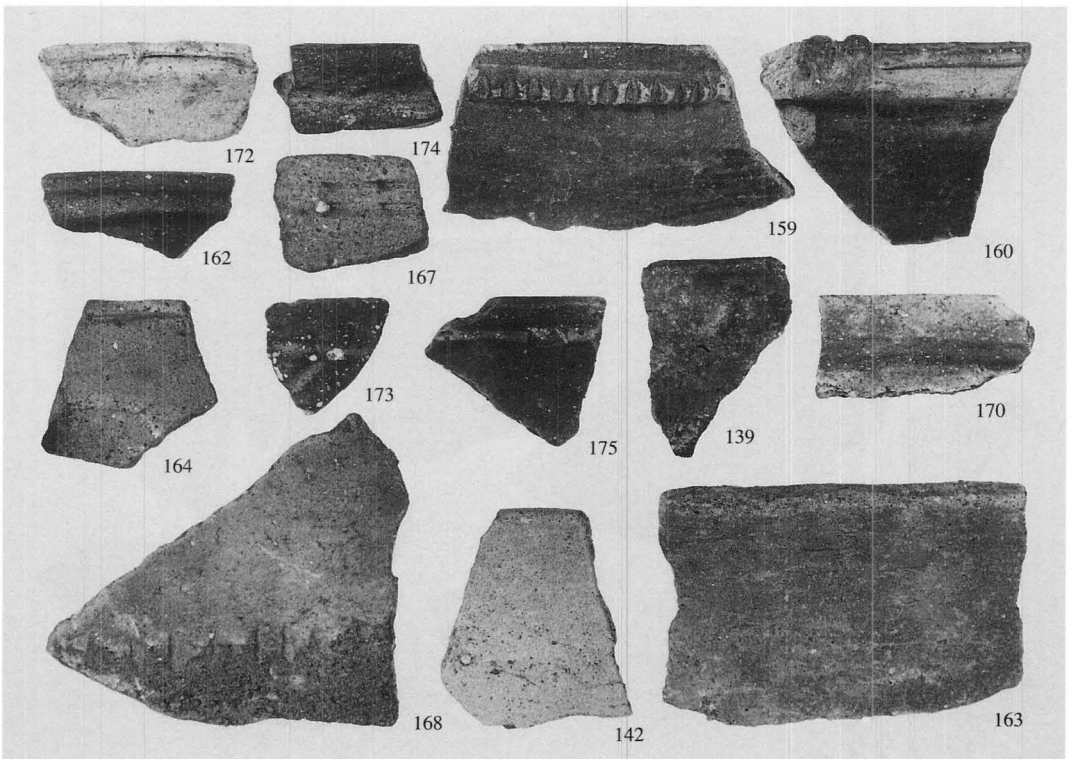
深鉢・浅鉢



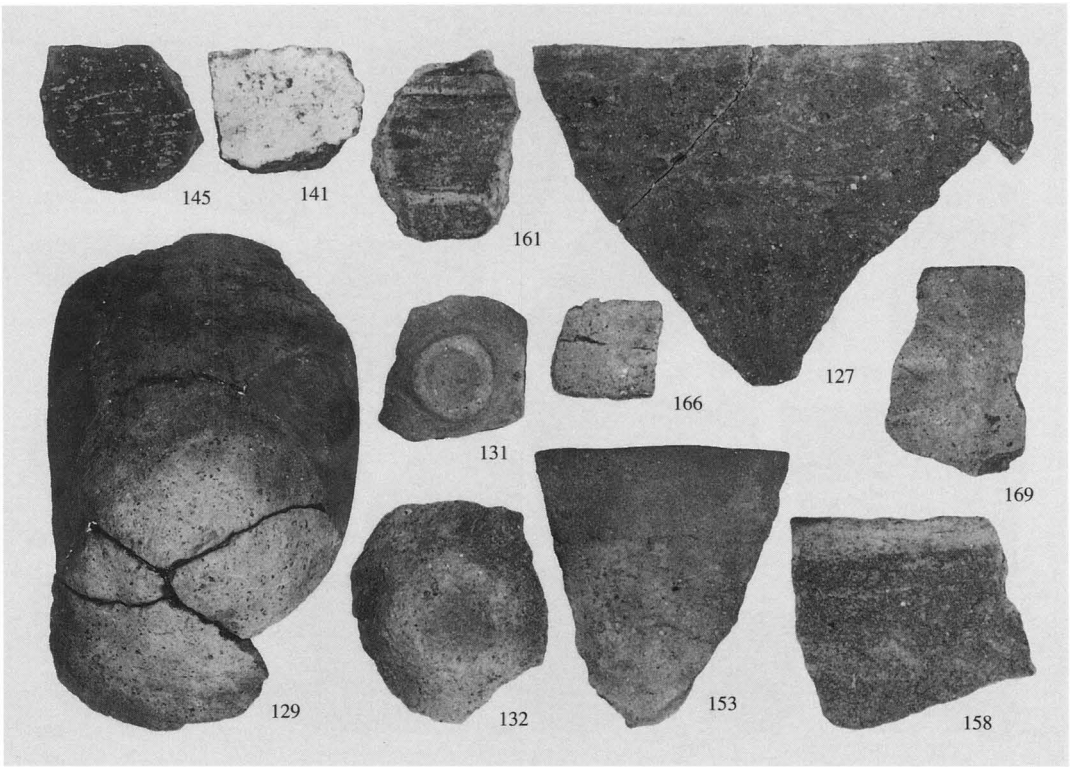
深鉢・浅鉢



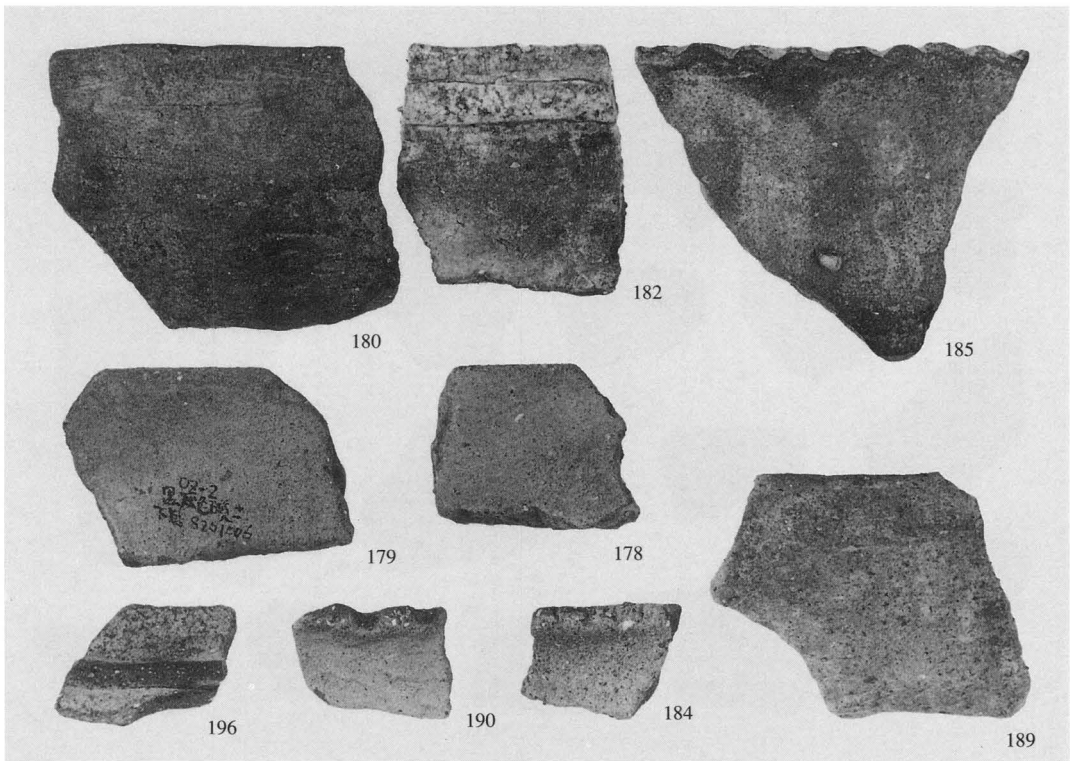
深鉢・浅鉢



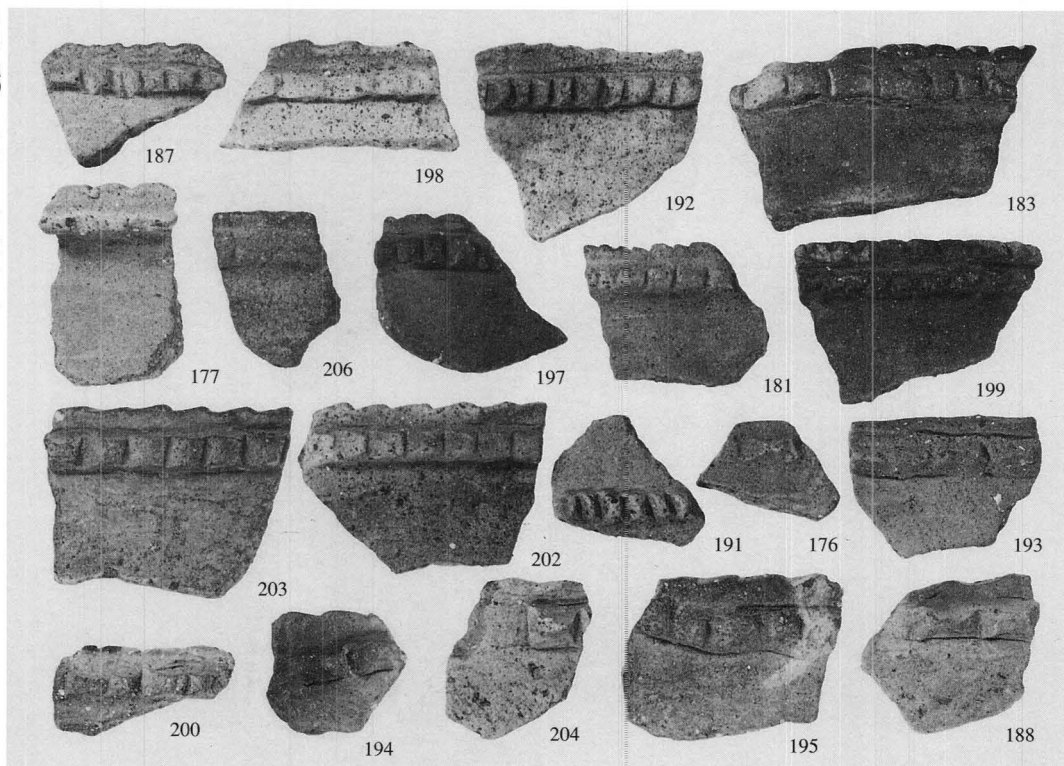
深鉢・浅鉢



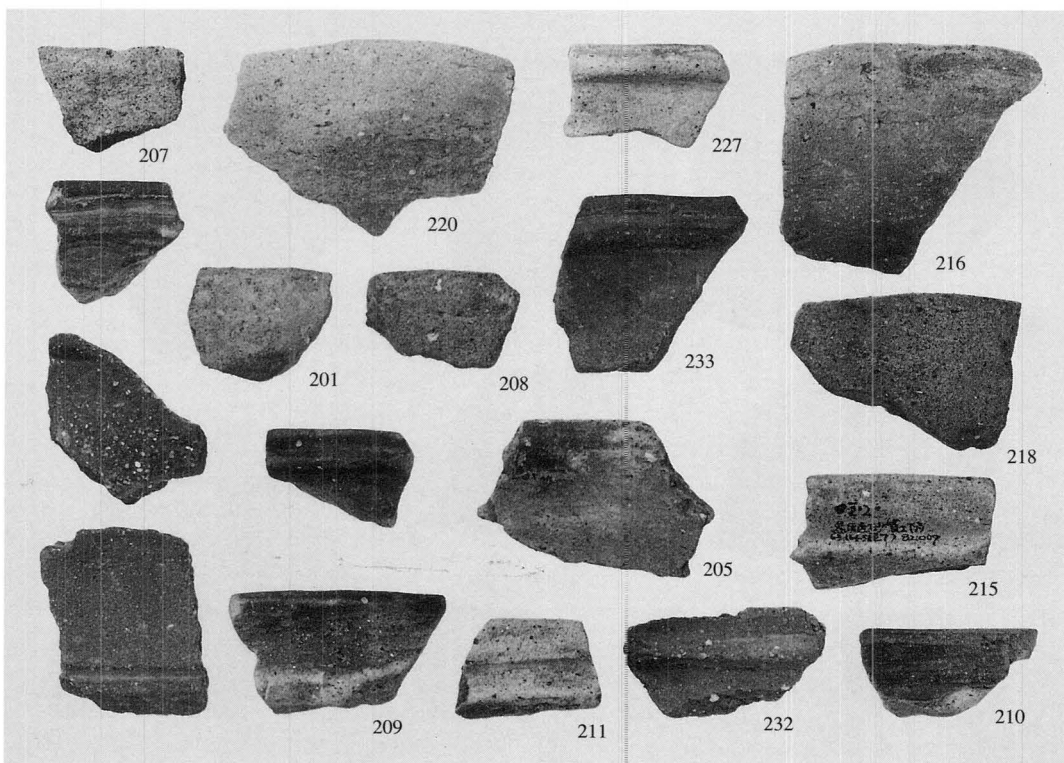
深鉢・浅鉢・底部



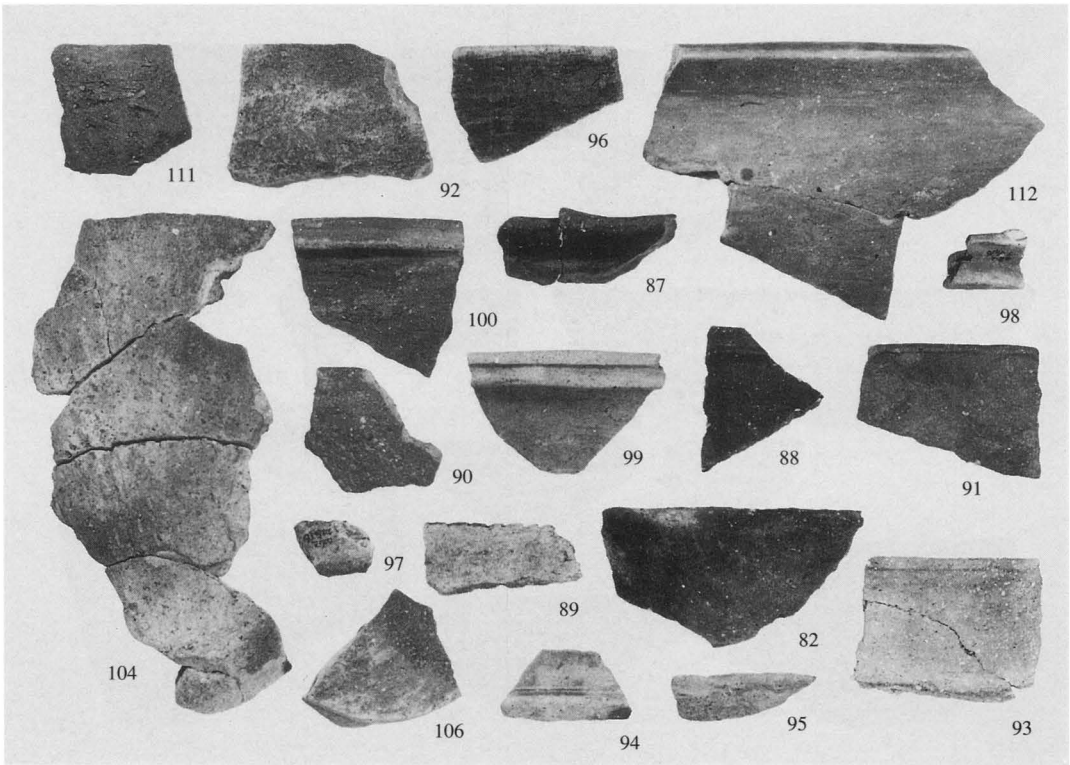
深鉢・浅鉢



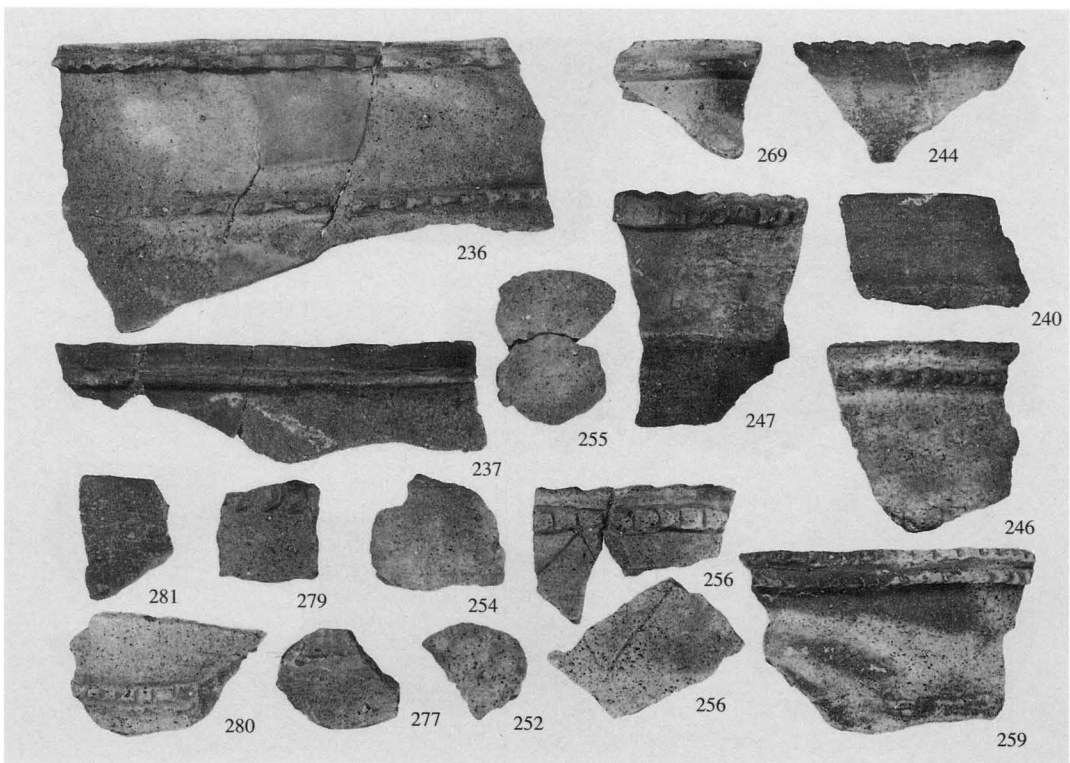
深鉢・浅鉢



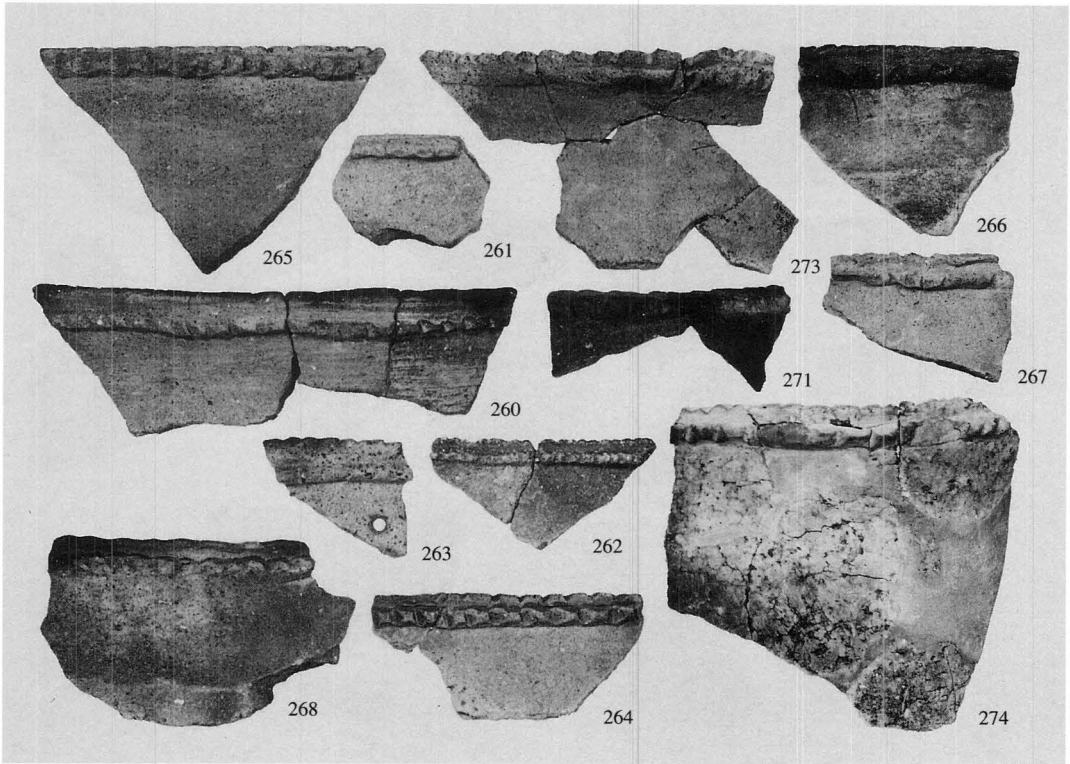
深鉢・浅鉢



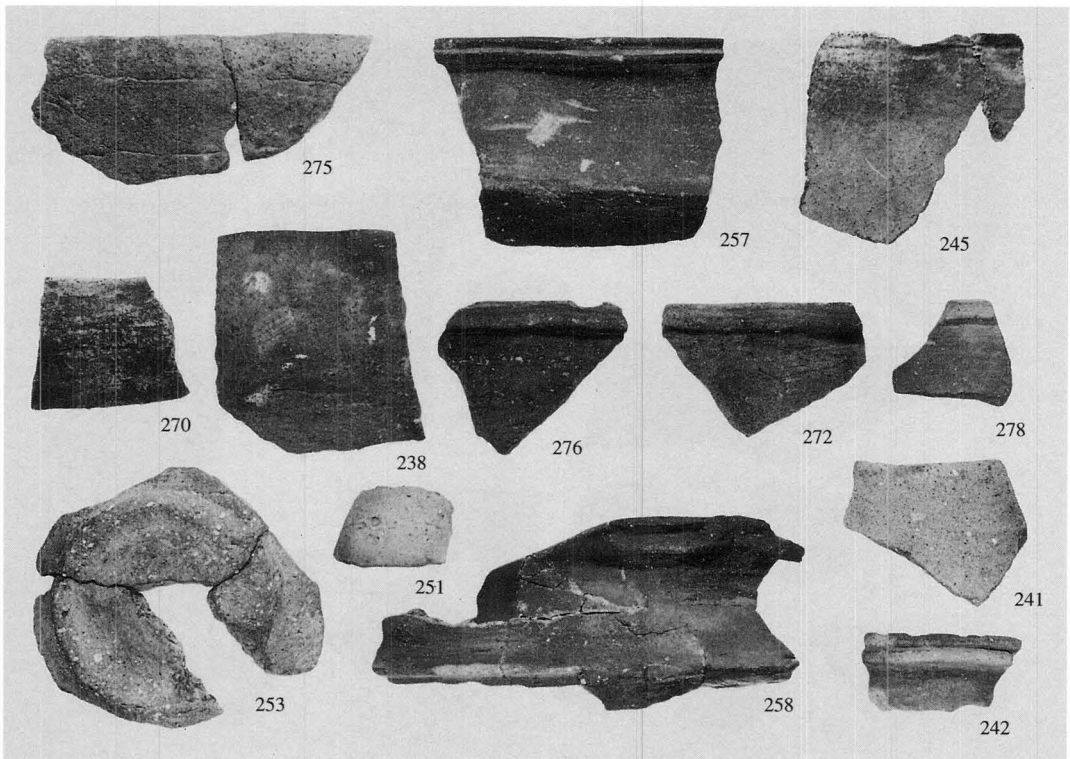
深鉢・浅鉢・底部



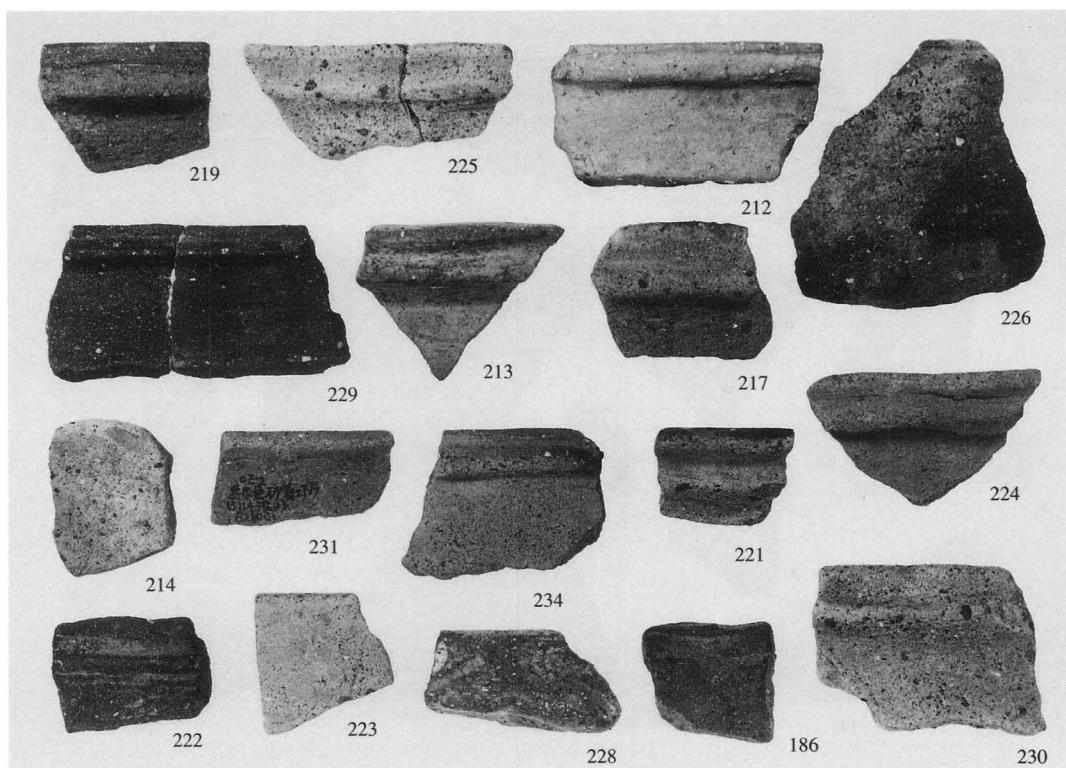
深鉢・浅鉢・底部



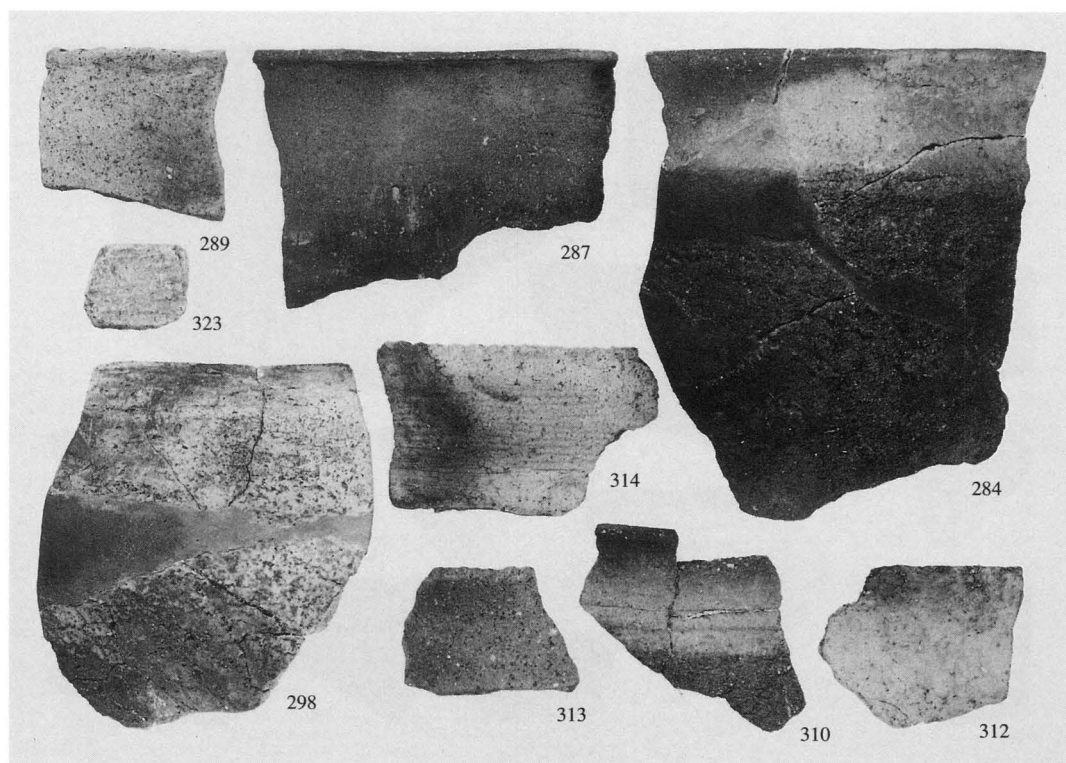
深鉢



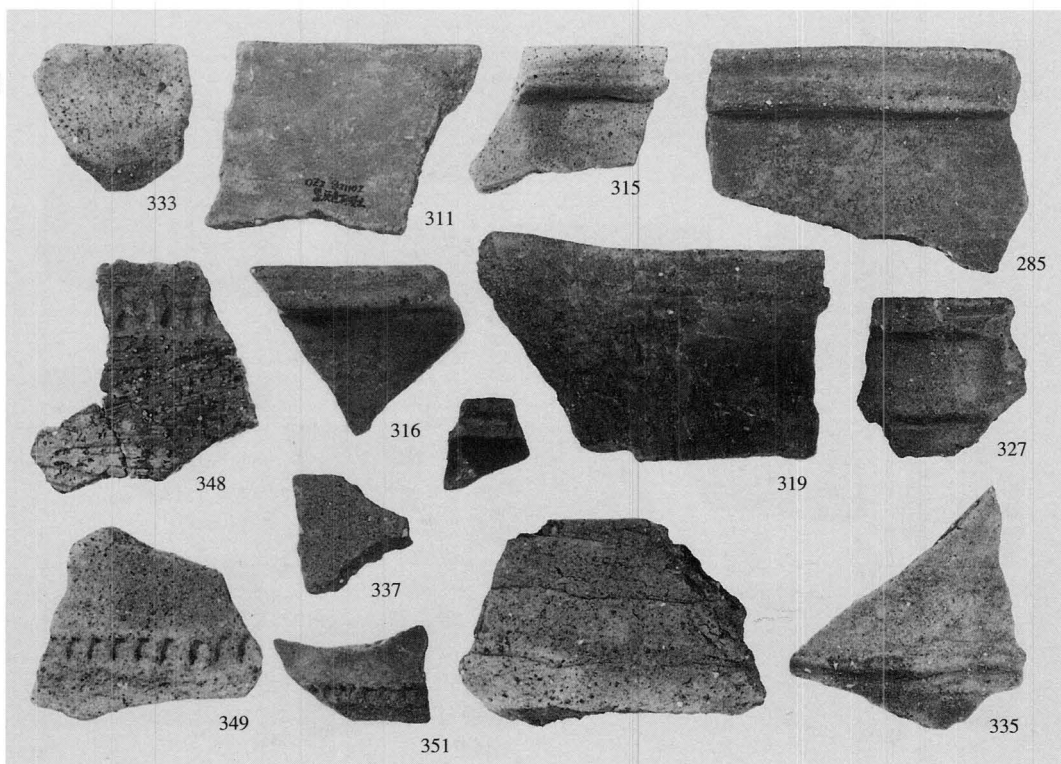
浅鉢・底部



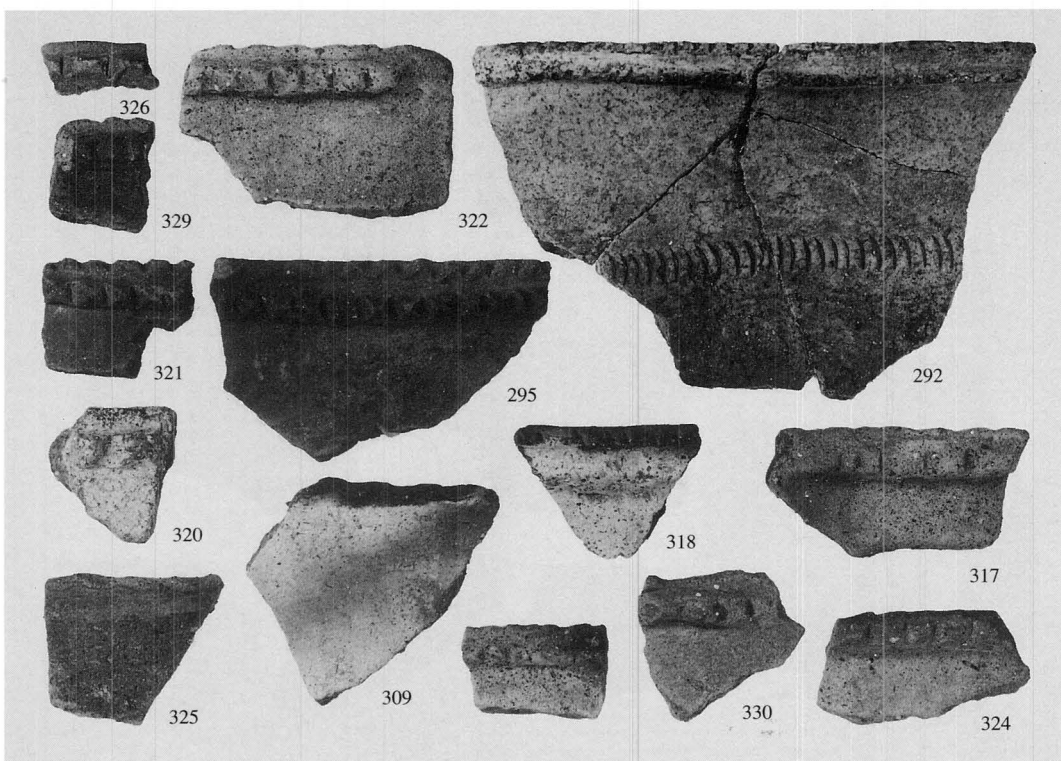
深鉢・浅鉢・底部



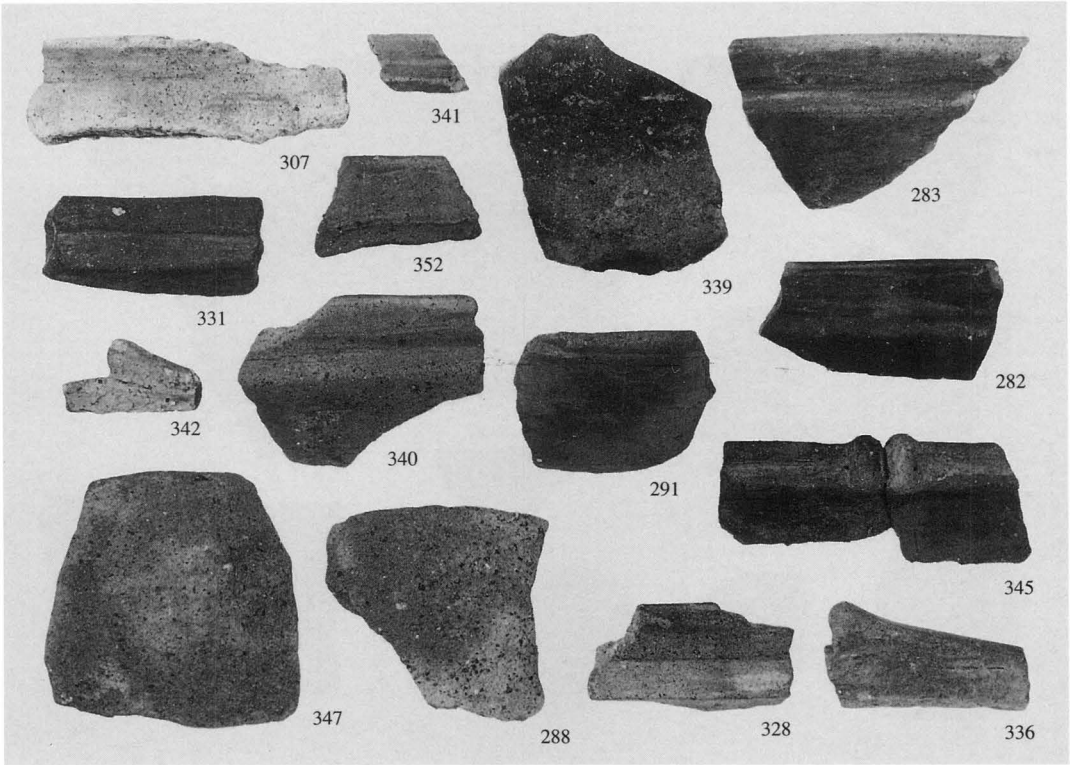
深鉢・浅鉢



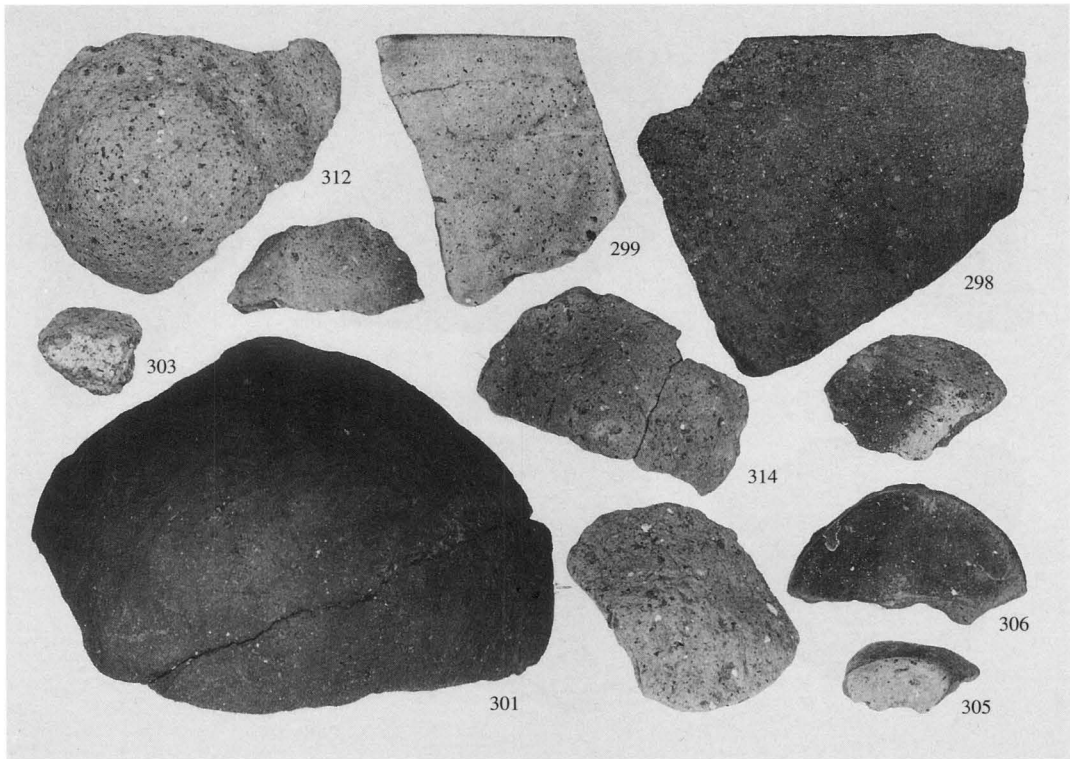
深鉢・浅鉢



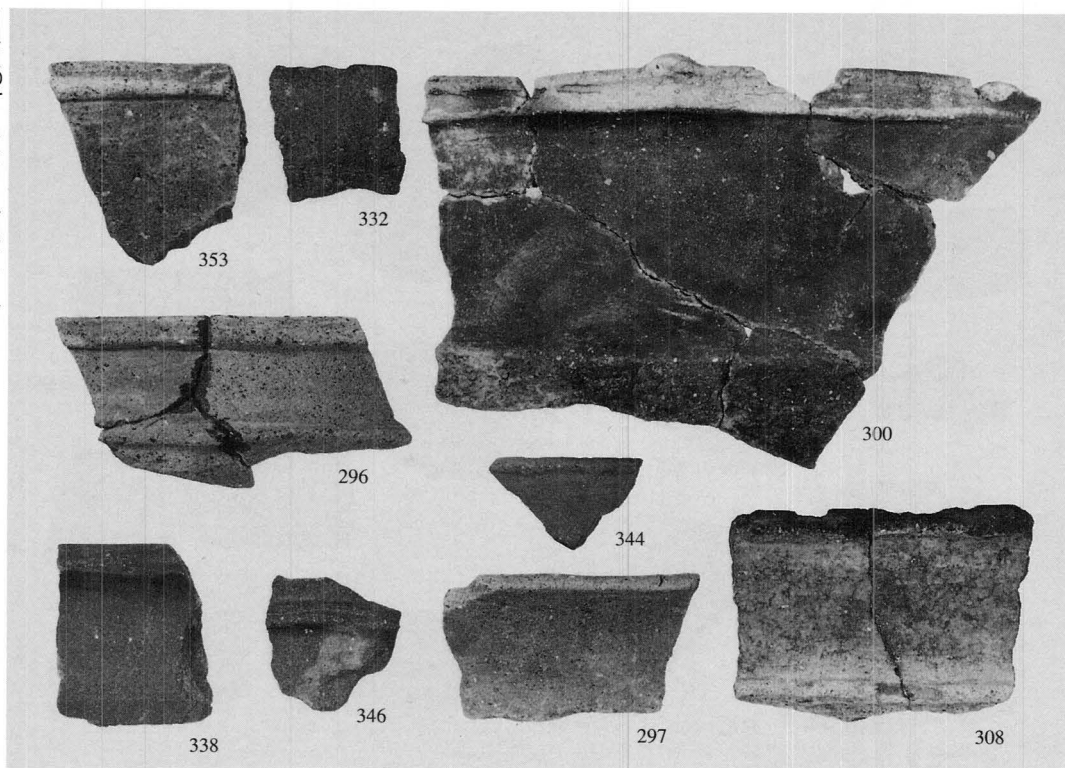
深鉢・浅鉢



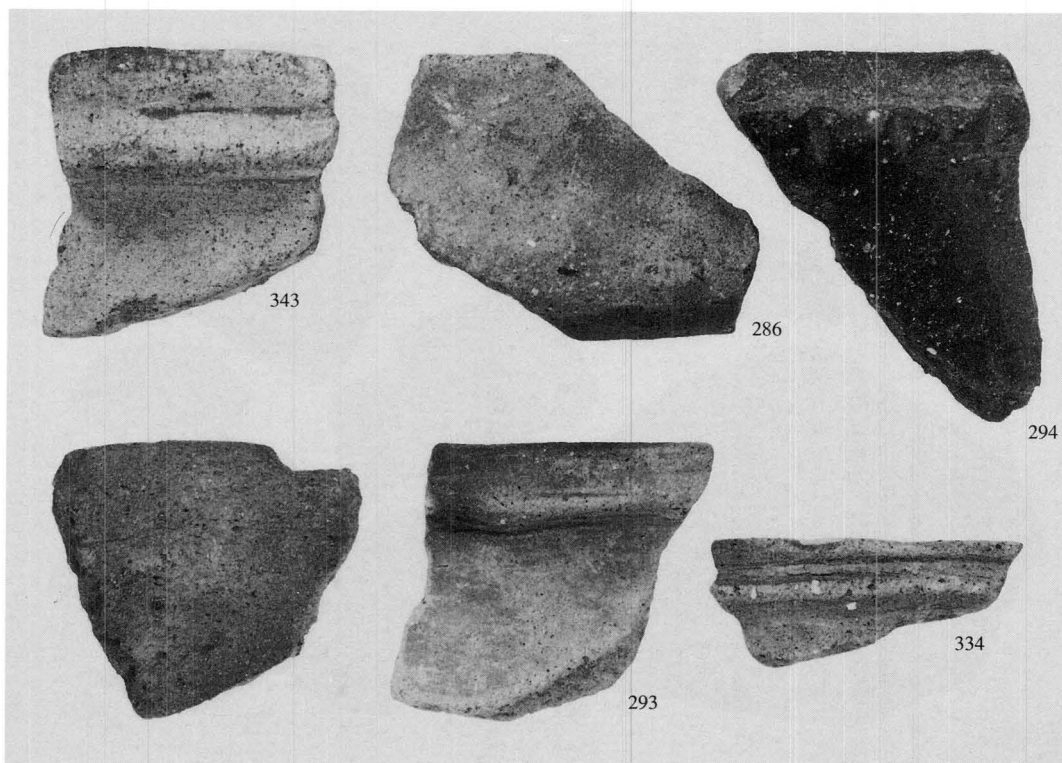
浅鉢



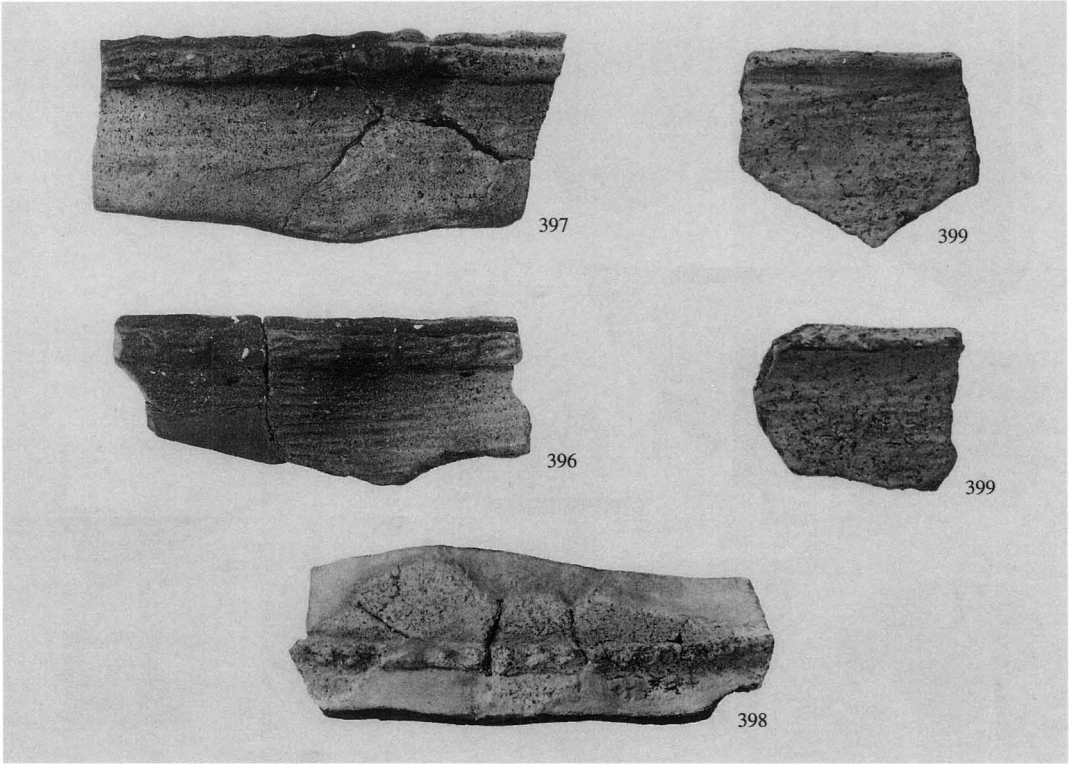
深鉢・底部



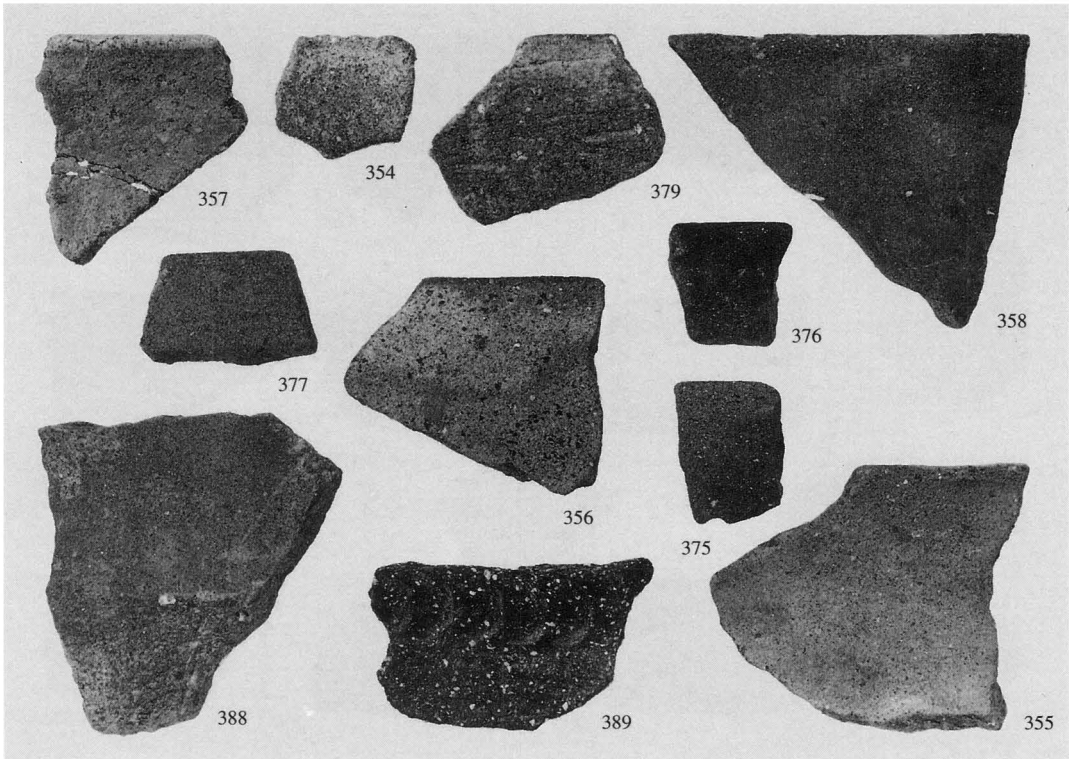
浅鉢



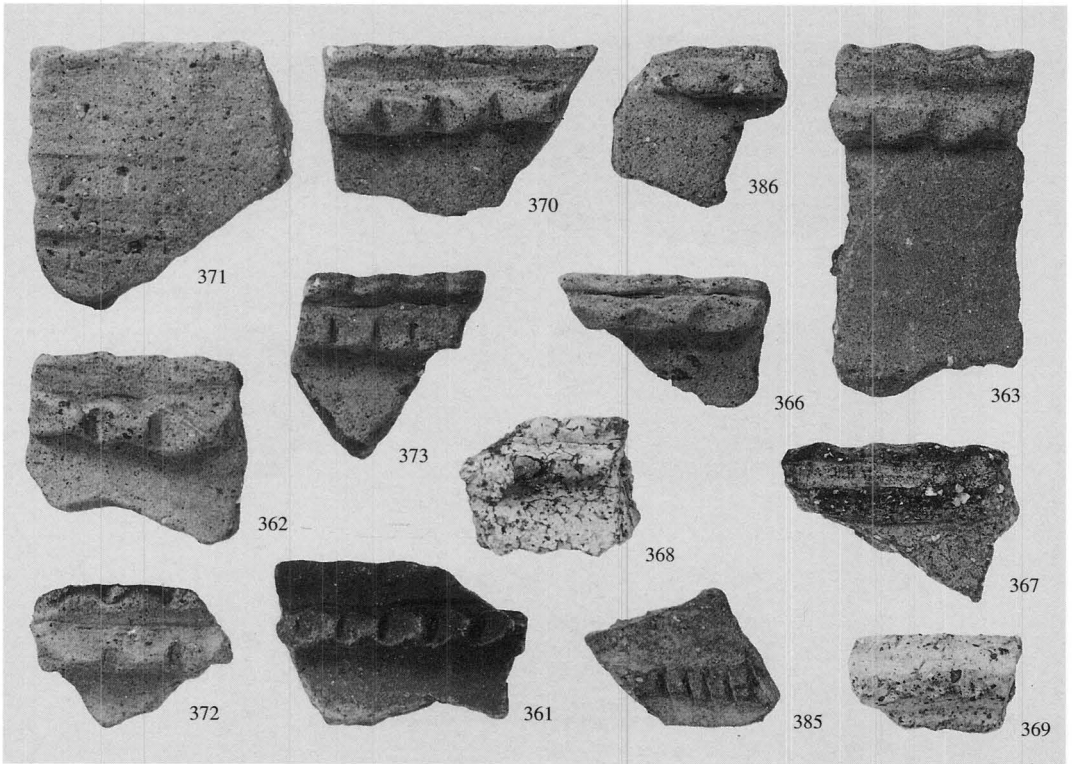
浅鉢・壺



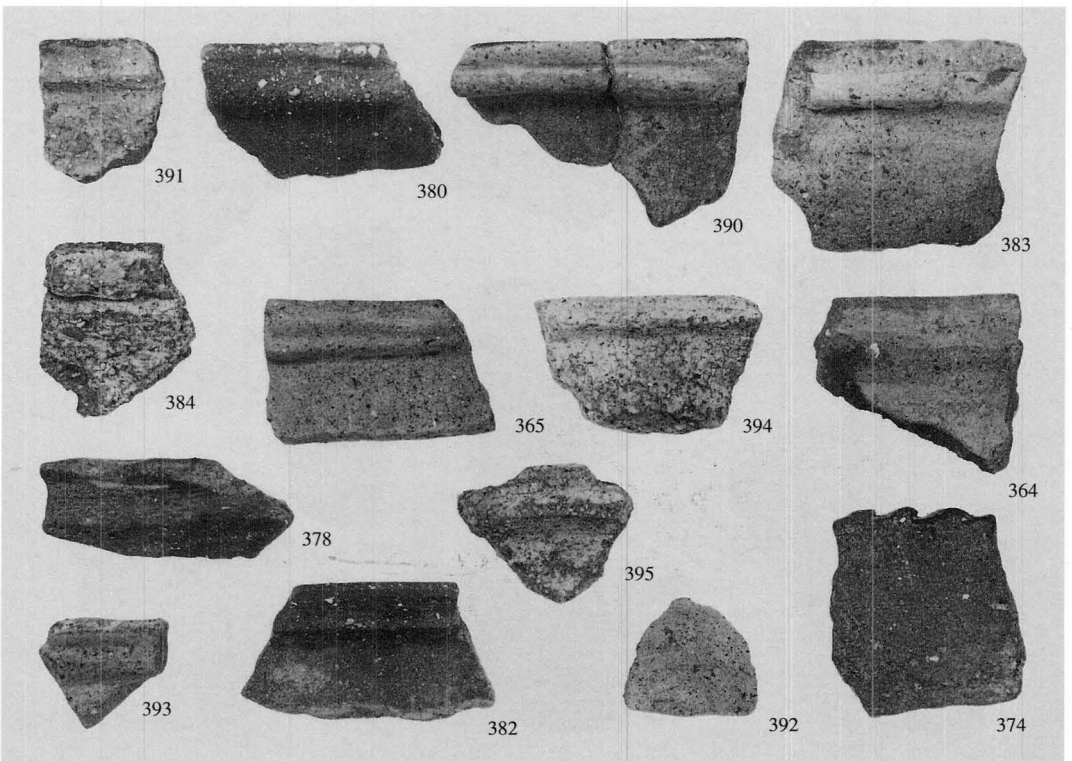
深鉢(東海地方系)



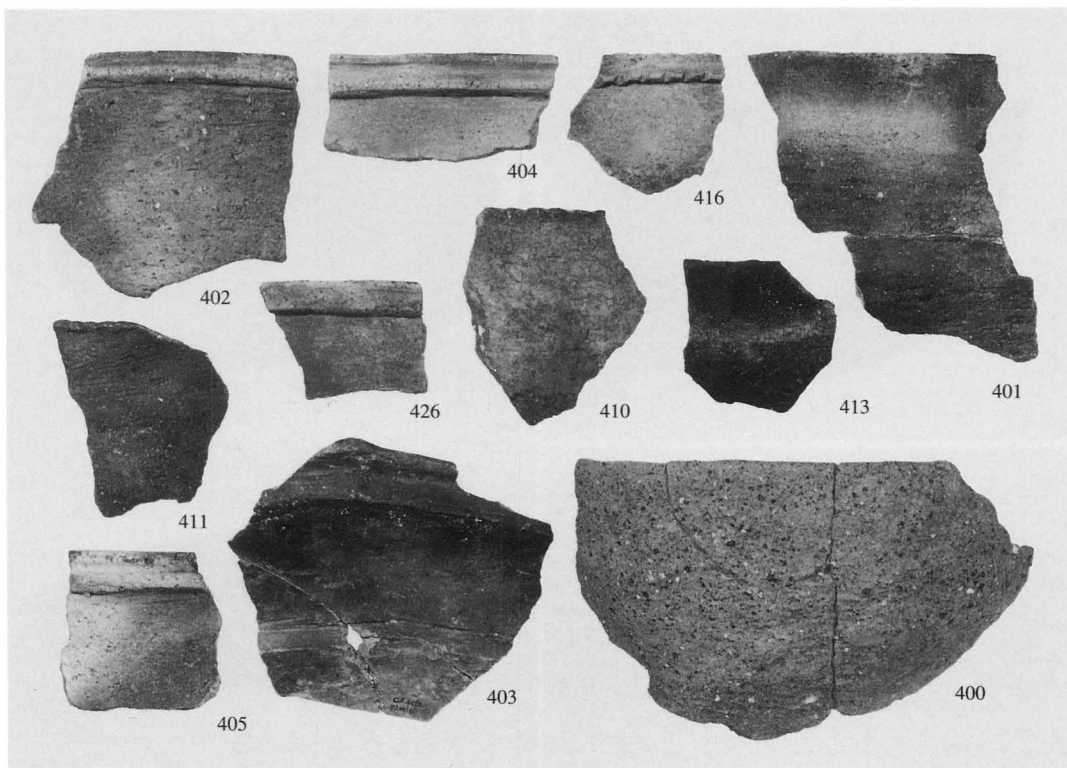
深鉢・浅鉢



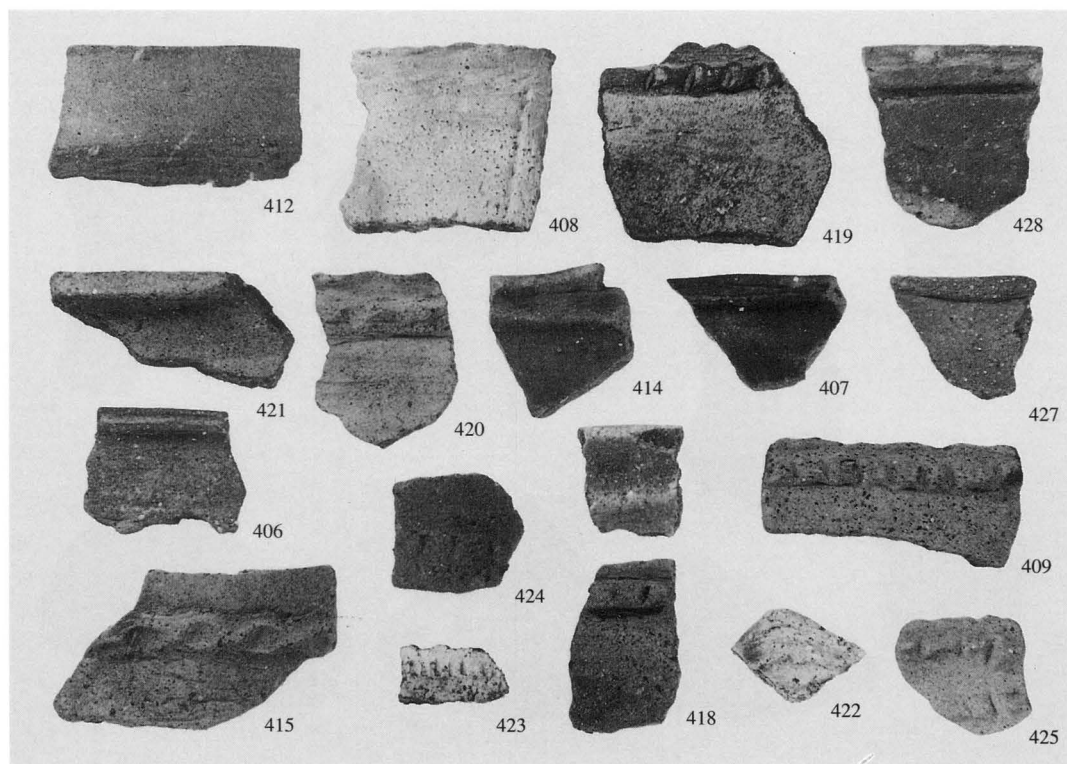
深鉢・浅鉢



深鉢・浅鉢・蓋 (392)

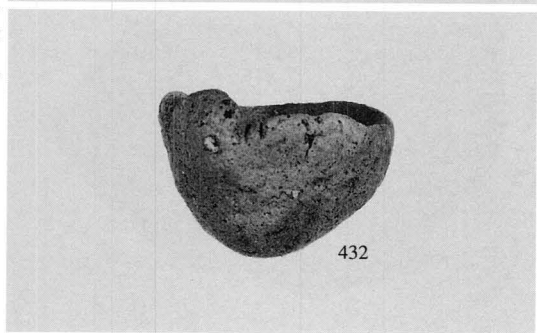
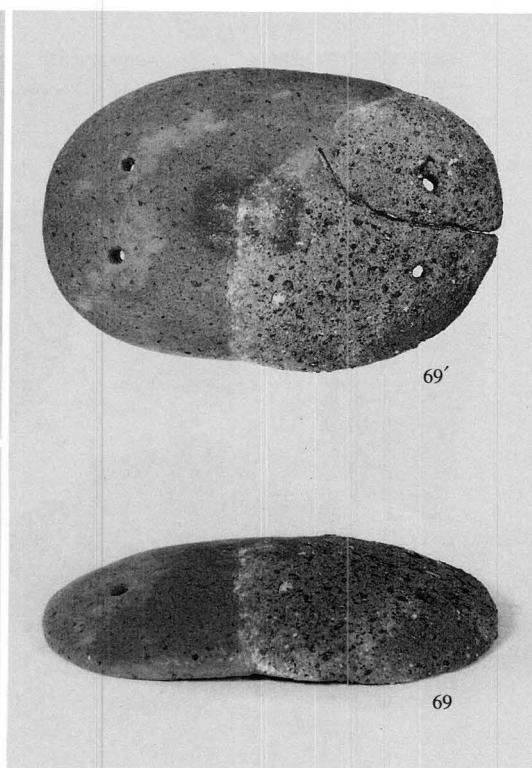
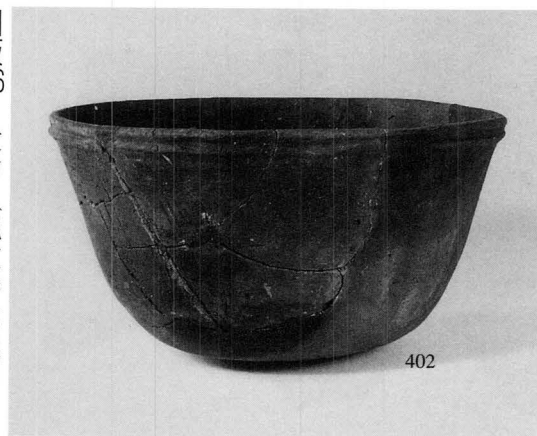


深鉢・浅鉢（攪乱出土）

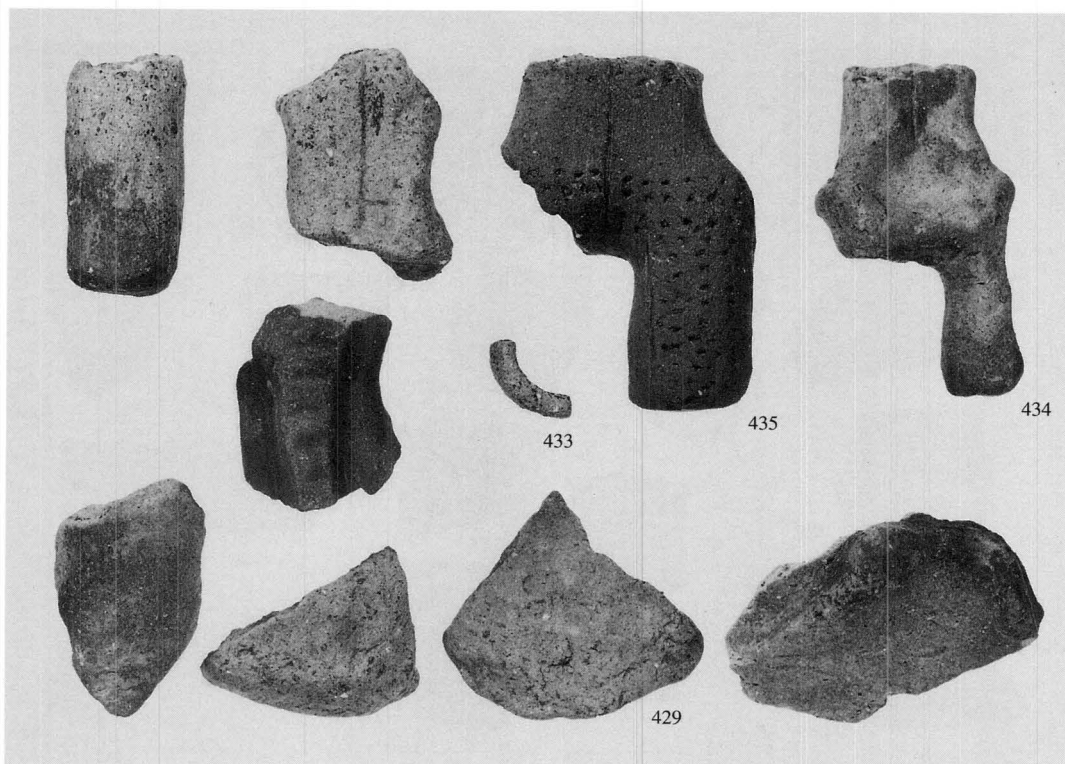


深鉢・浅鉢（攪乱出土）

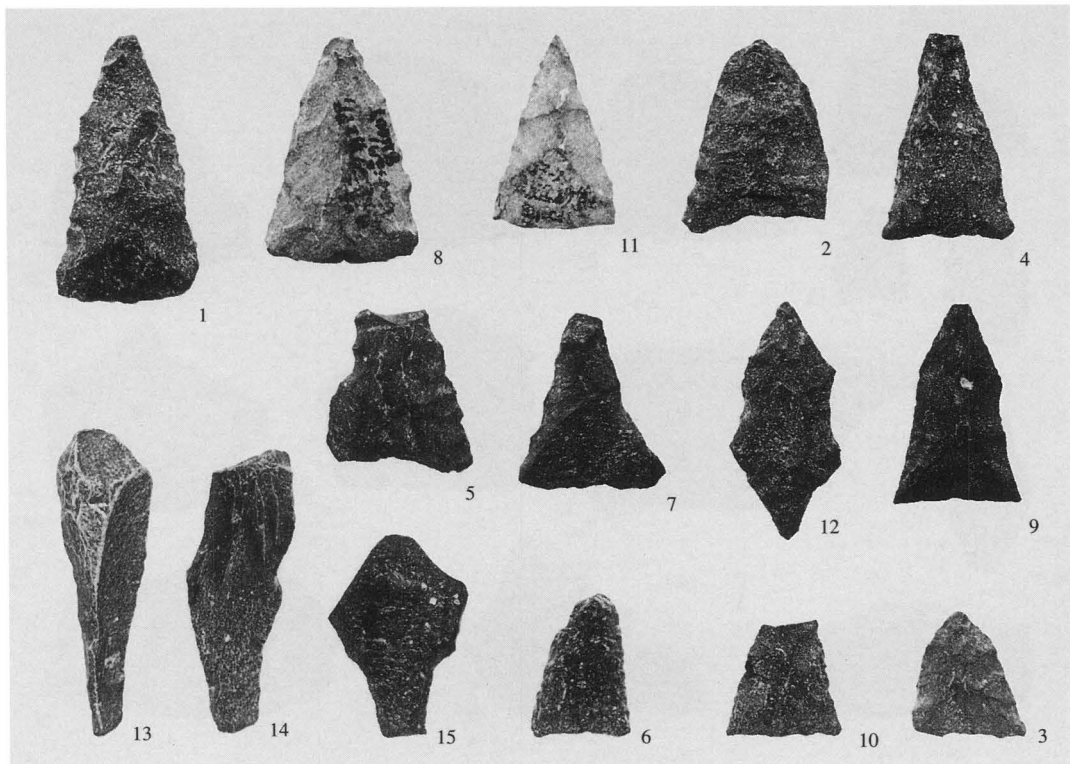
図版56 遺物（縄文時代晩期・土製品）



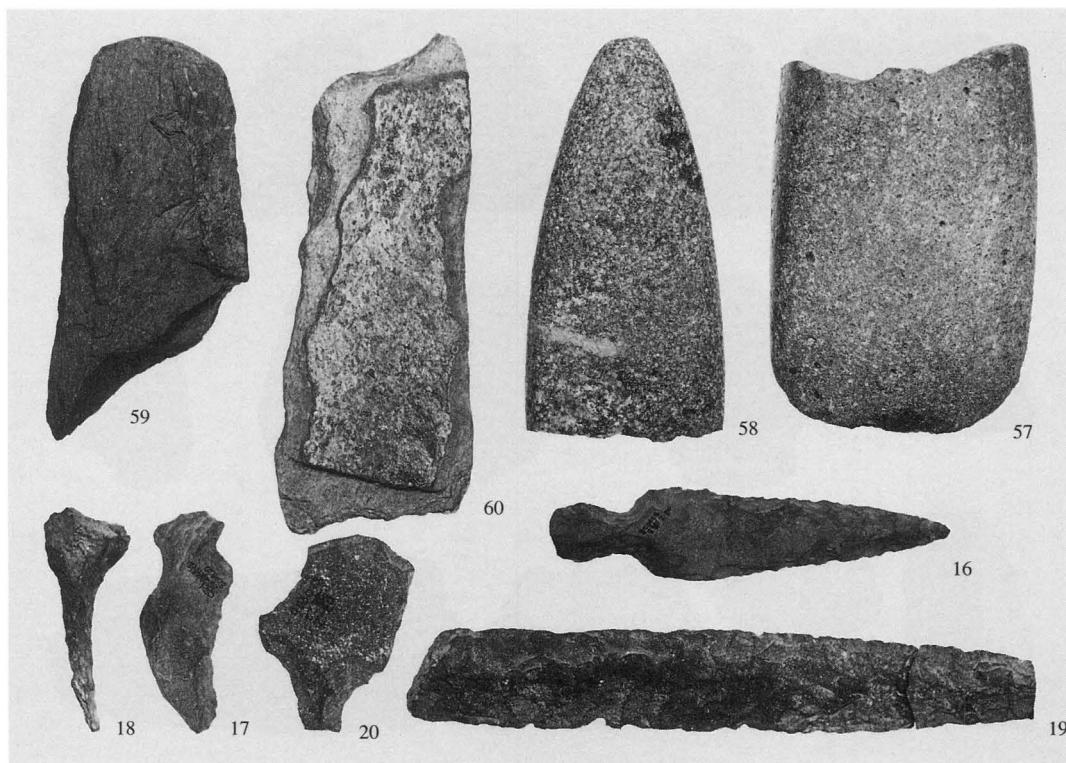
浅鉢・ミニチュア鉢・蓋



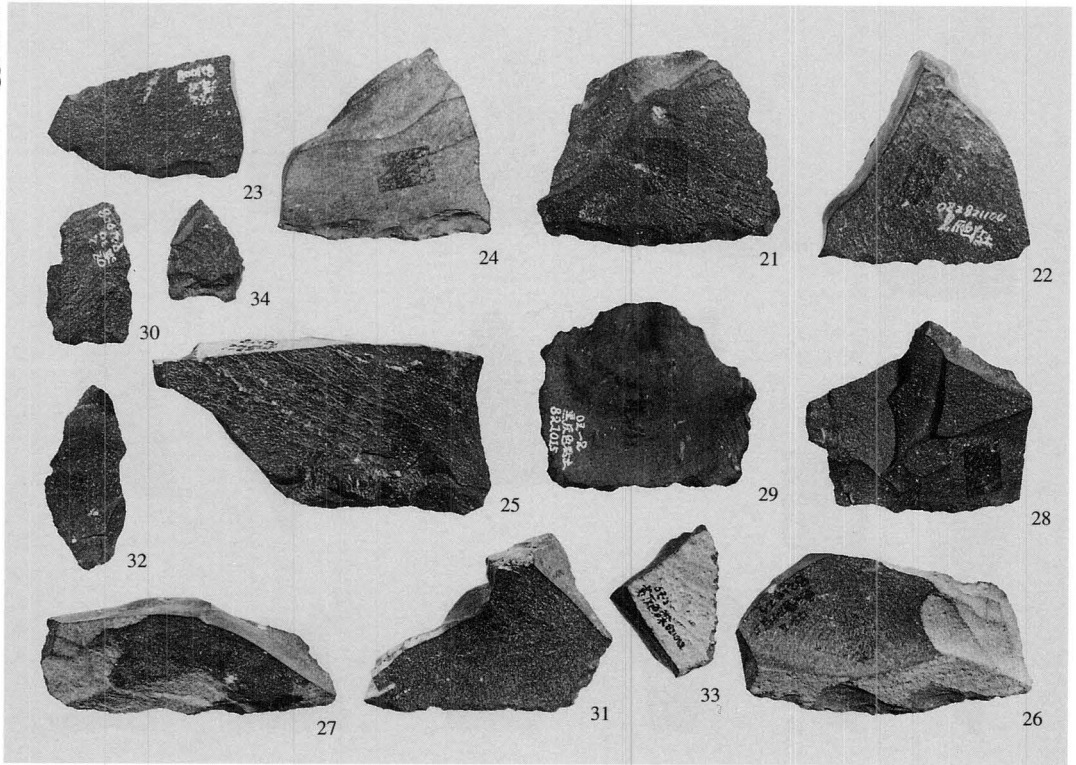
土偶・土製品



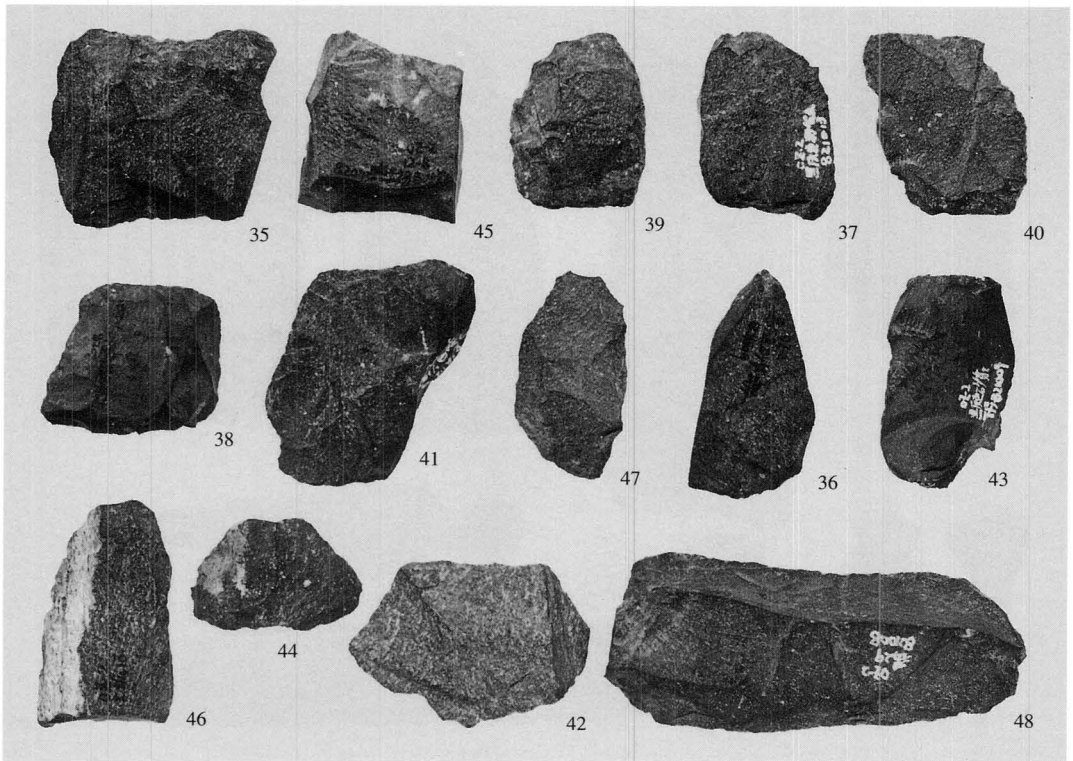
石鏃・石錐



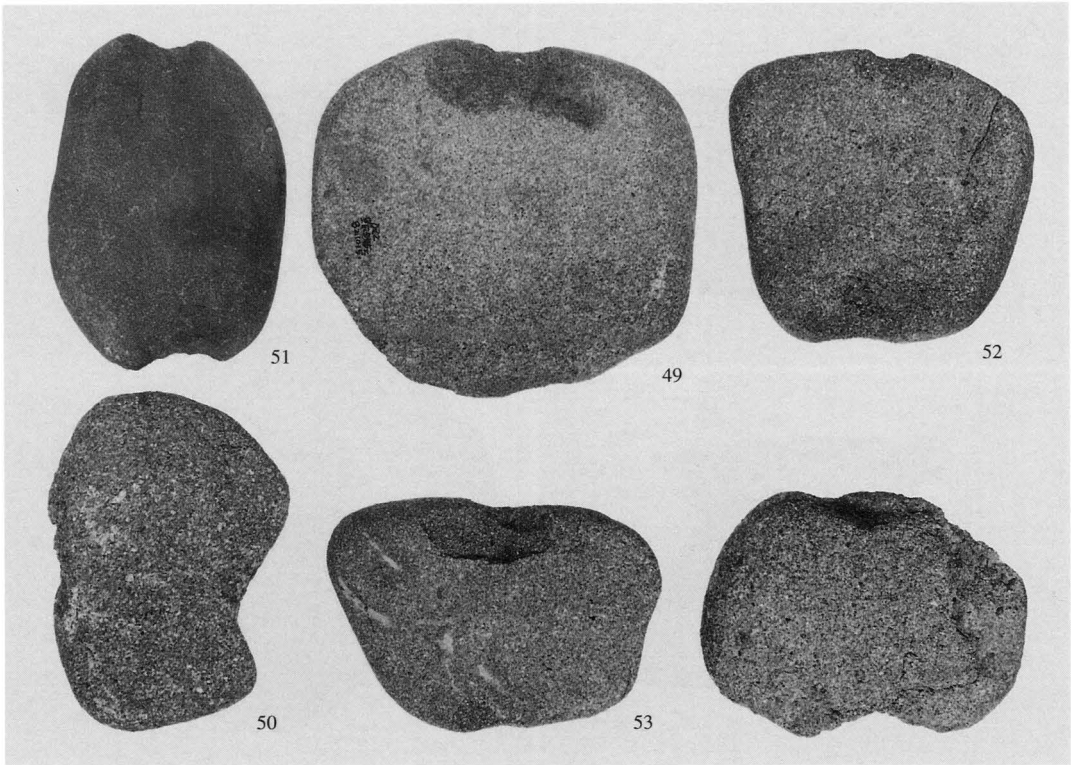
磨製石斧・打製石斧・石錐・石匙・打製石劍・打製尖頭器



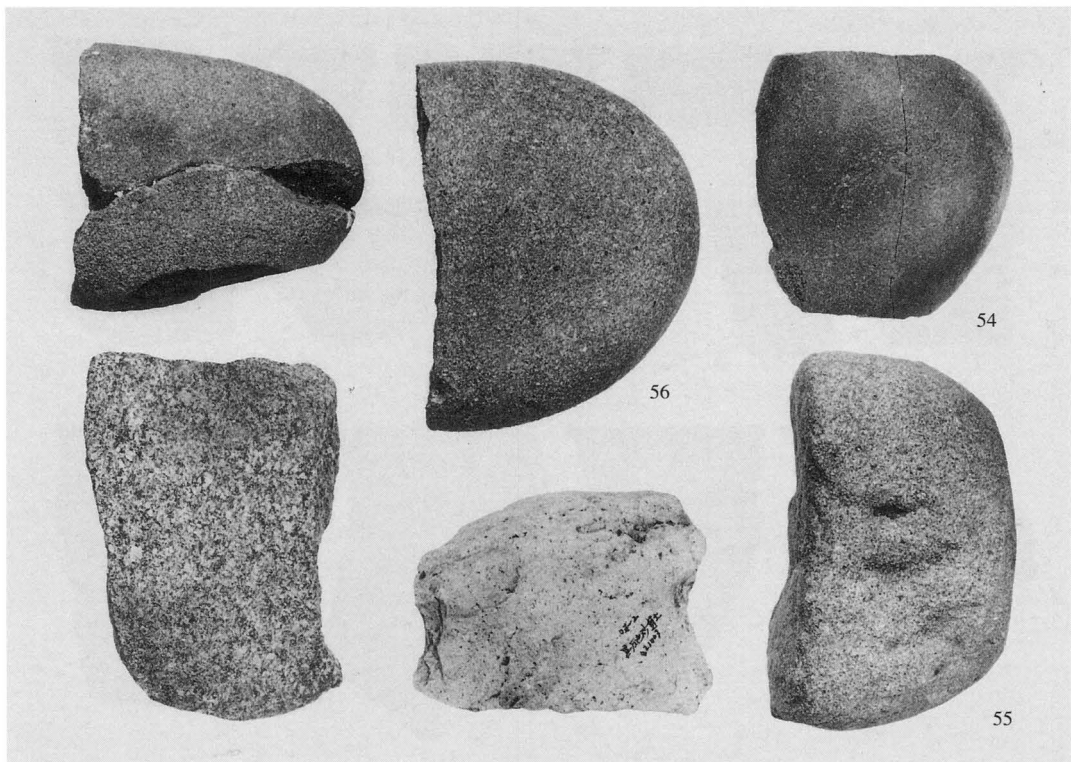
直刃削器他



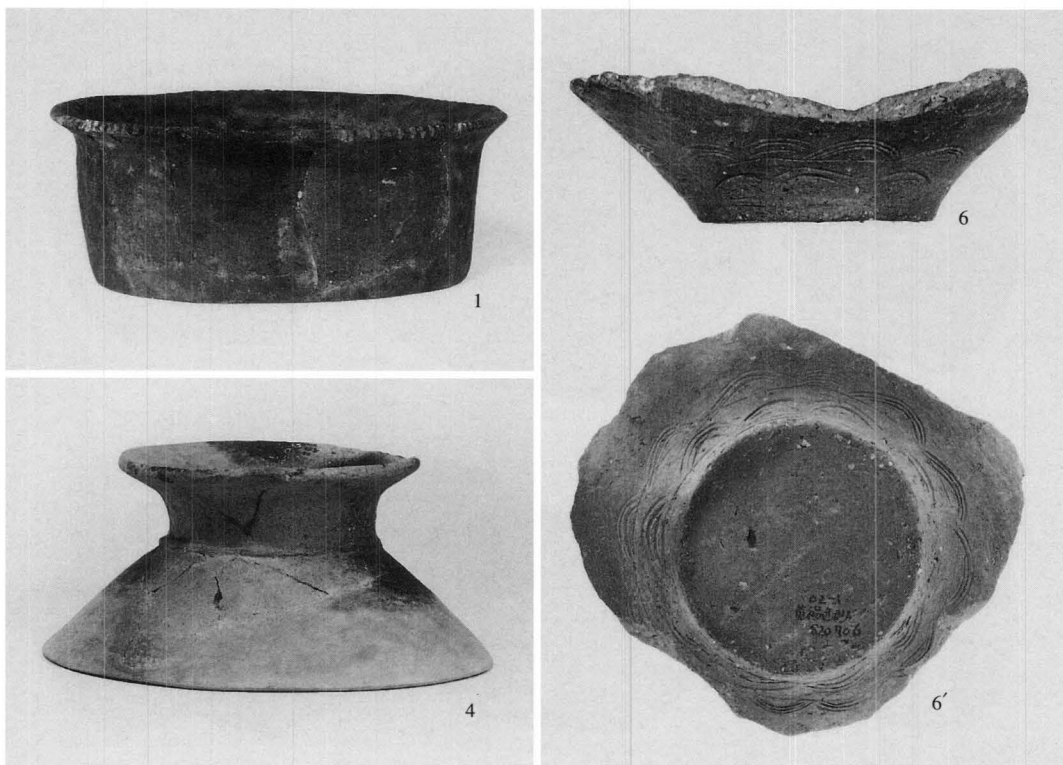
ピース・エスキーエ他



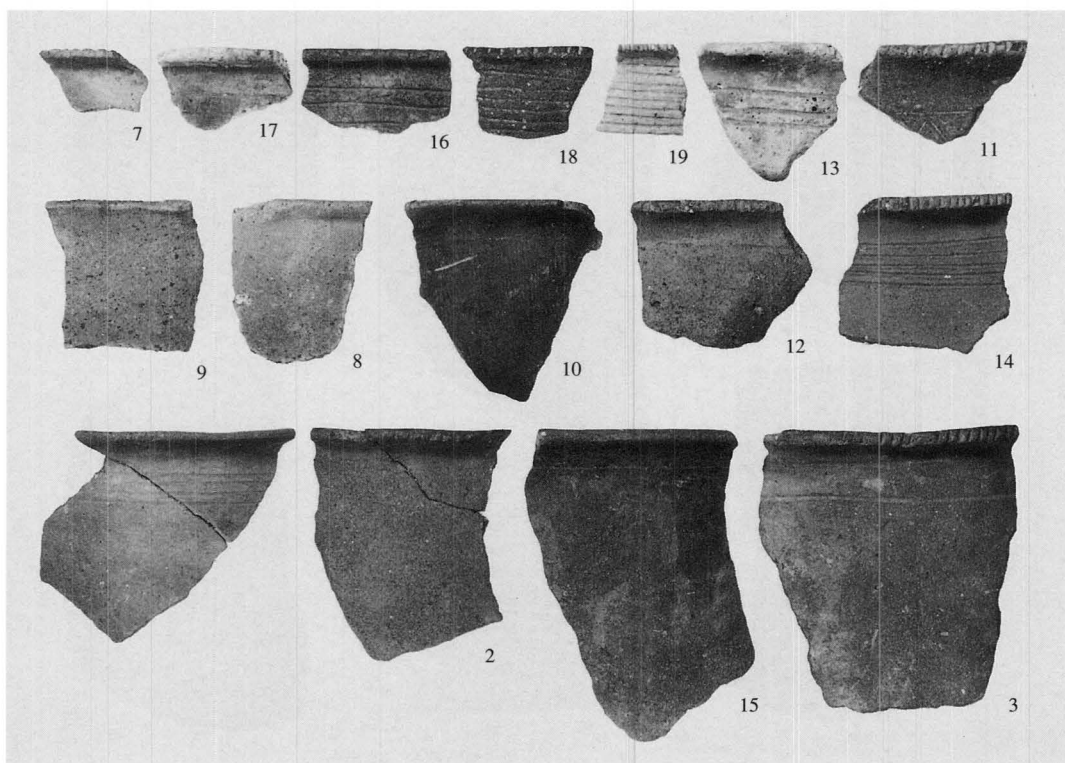
石錐



磨石・敲石

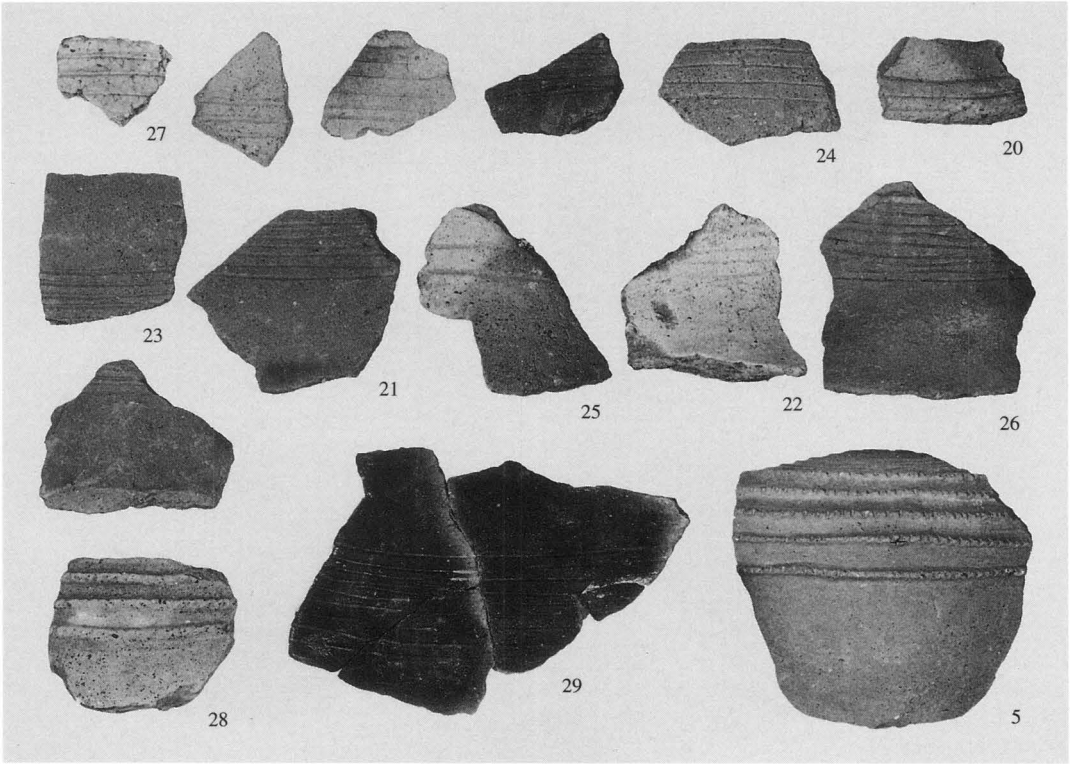


壺・甕・壺底部

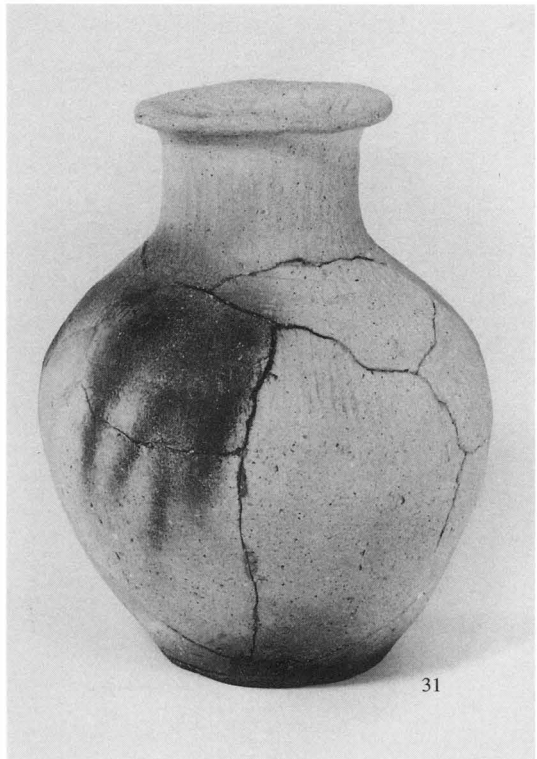
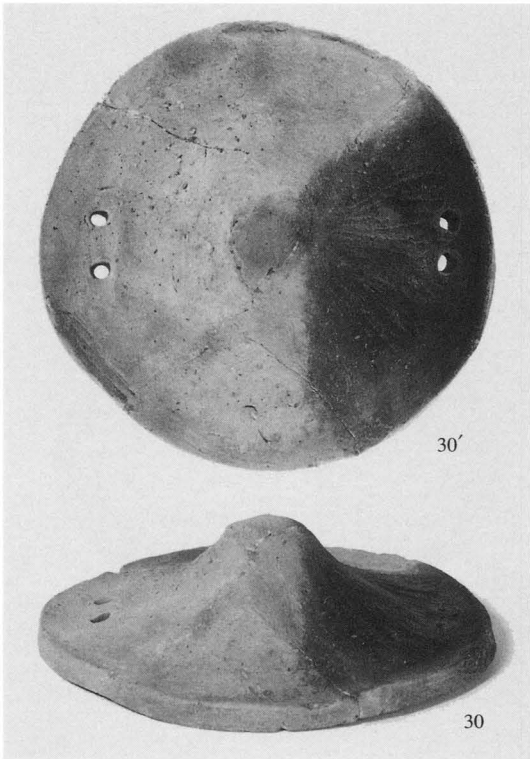


甕

図版61 遺物（弥生時代前期～中期・土器）

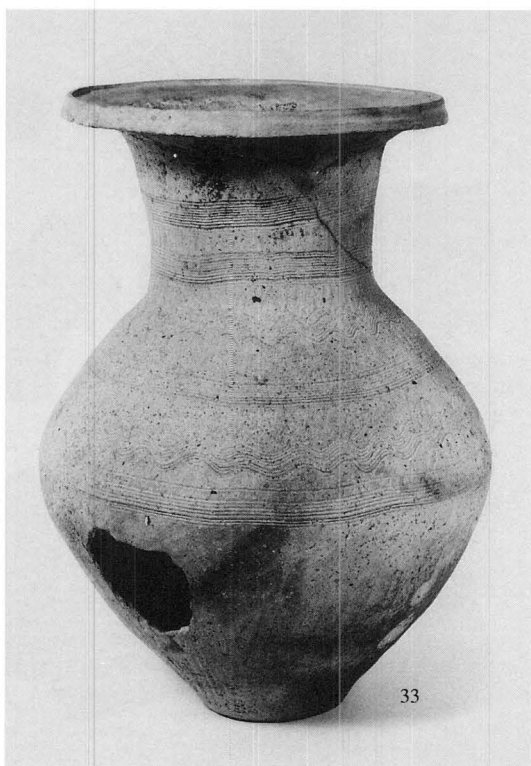


壺



蓋・壺

図版62 遺物(弥生時代中期・土器)



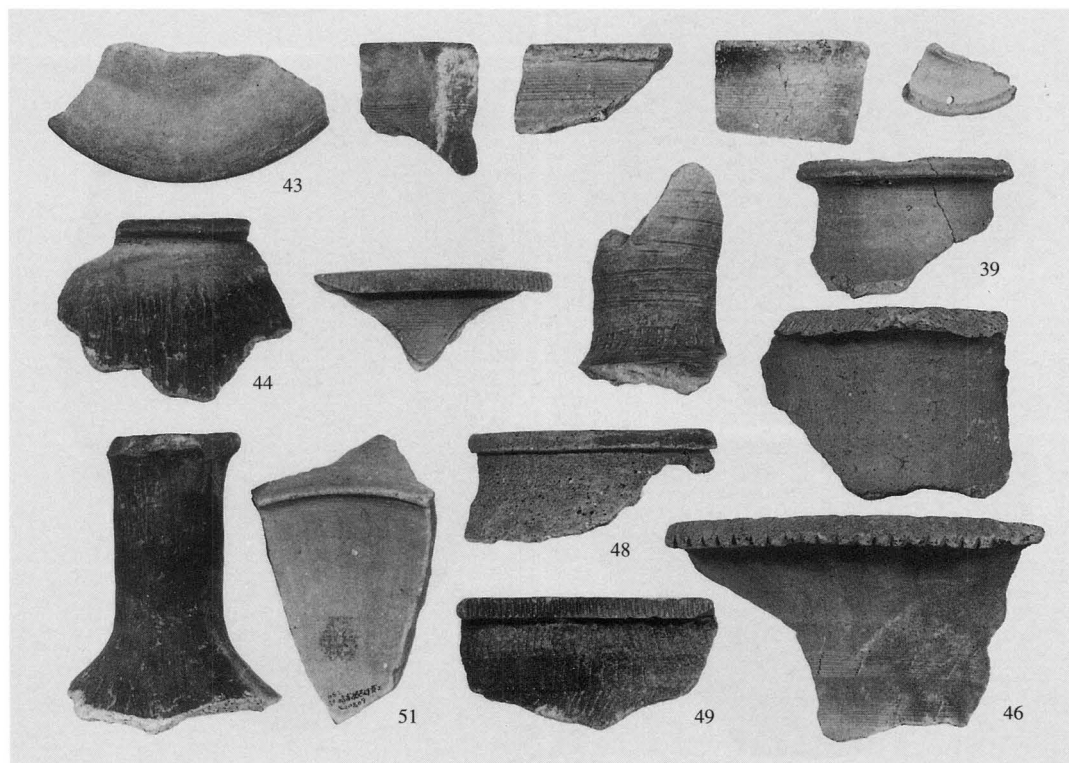
壺



壺

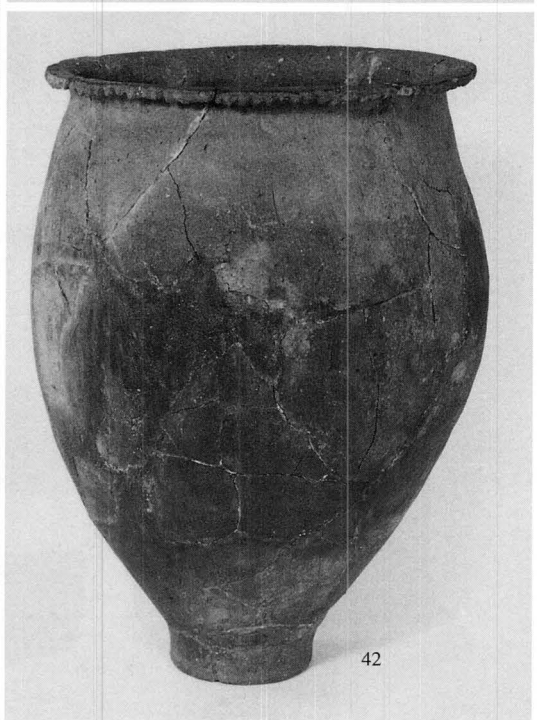
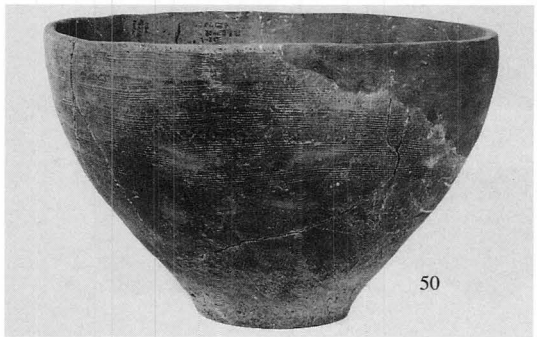
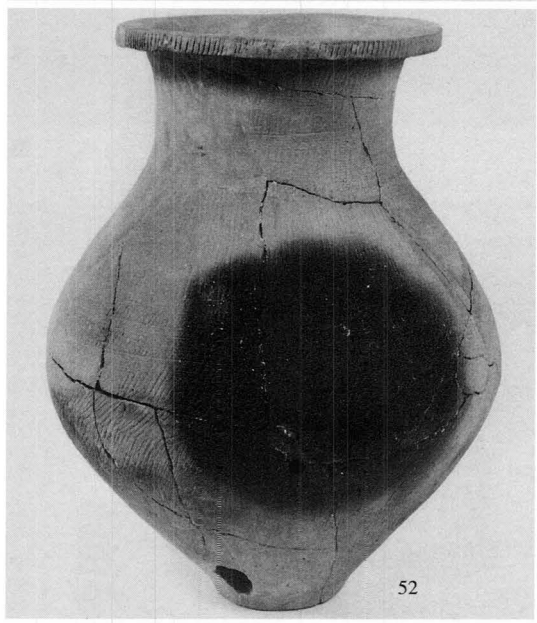
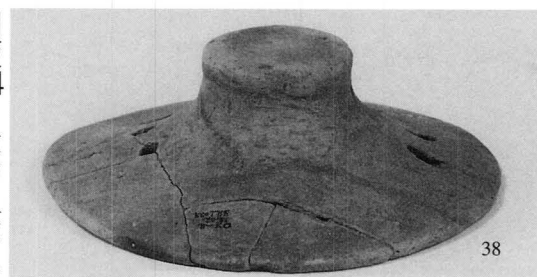


甕



壺・甕・高杯

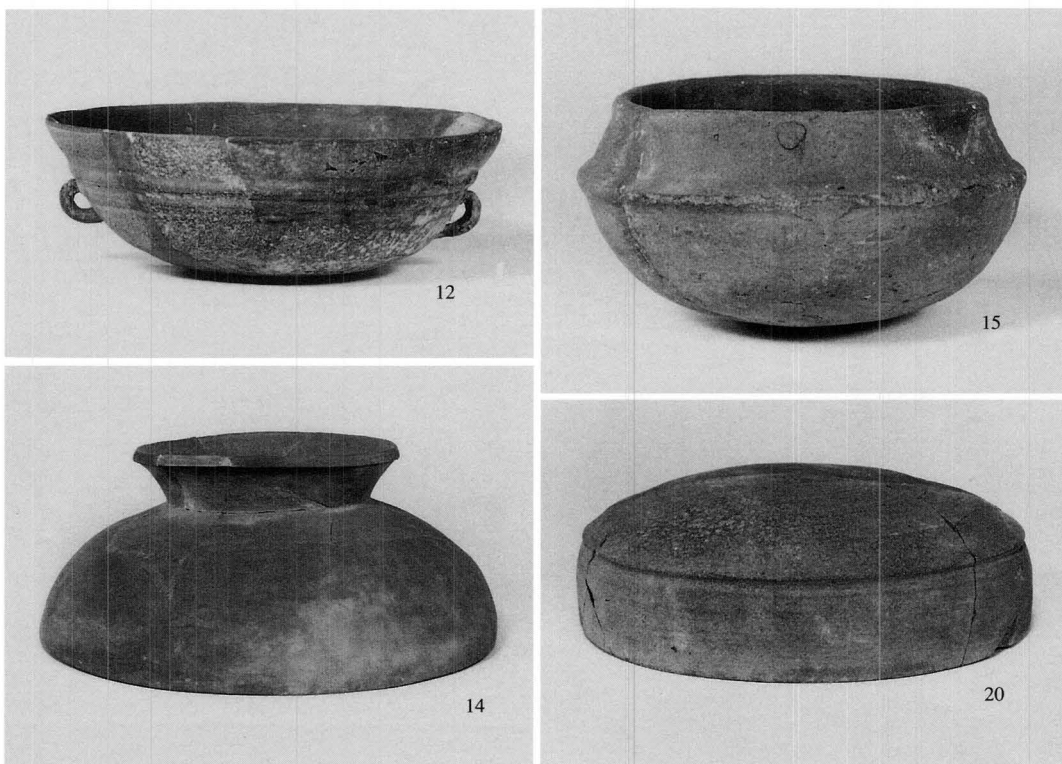
図版64 遺物(弥生時代中期・土器)



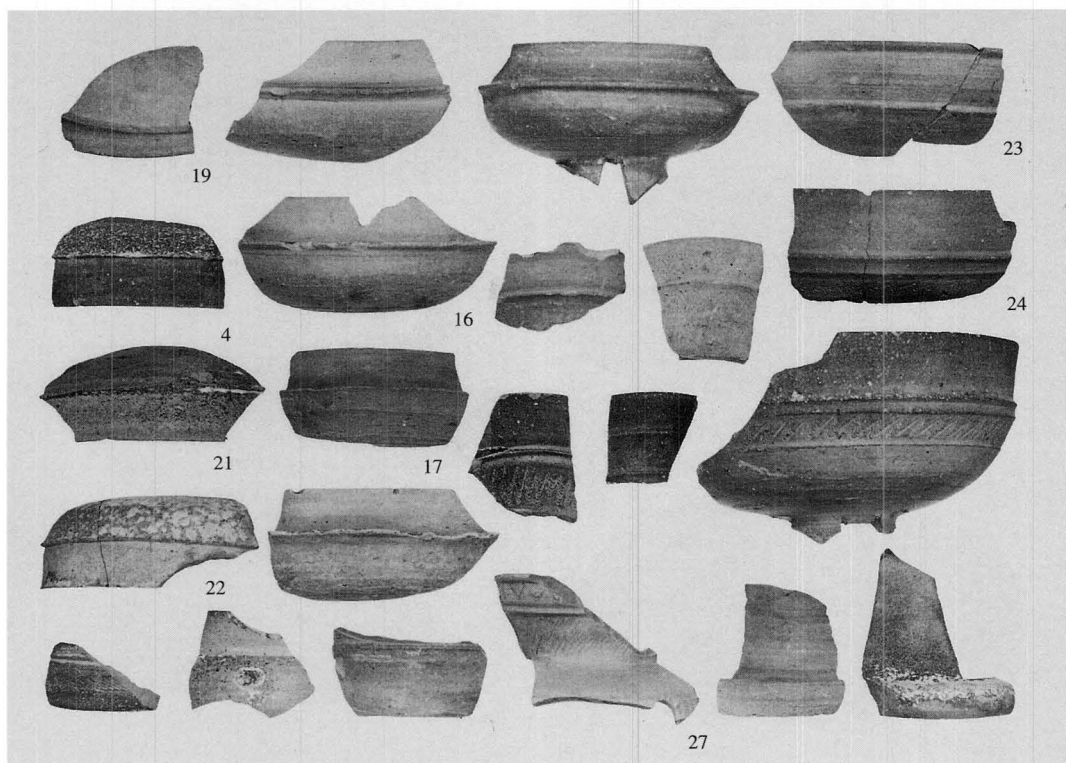
蓋 (38) 壺 (40・41・52) 甕 (42) 鉢 (50)



杯（1・2）杯蓋（5～7）有蓋高杯蓋（9・10）有蓋高杯（11）



無蓋高杯 (12) 甕 (14) 杯身 (15) 杯蓋 (20)



有蓋高杯・壺・高杯・杯身・杯蓋



25

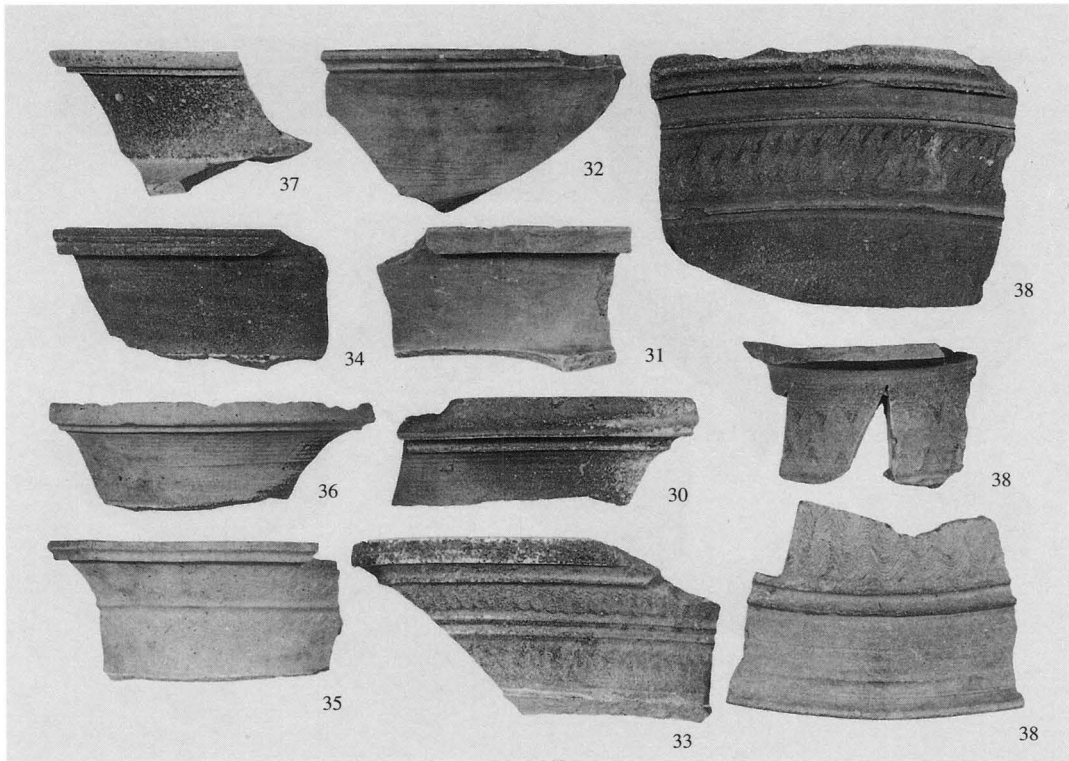


26

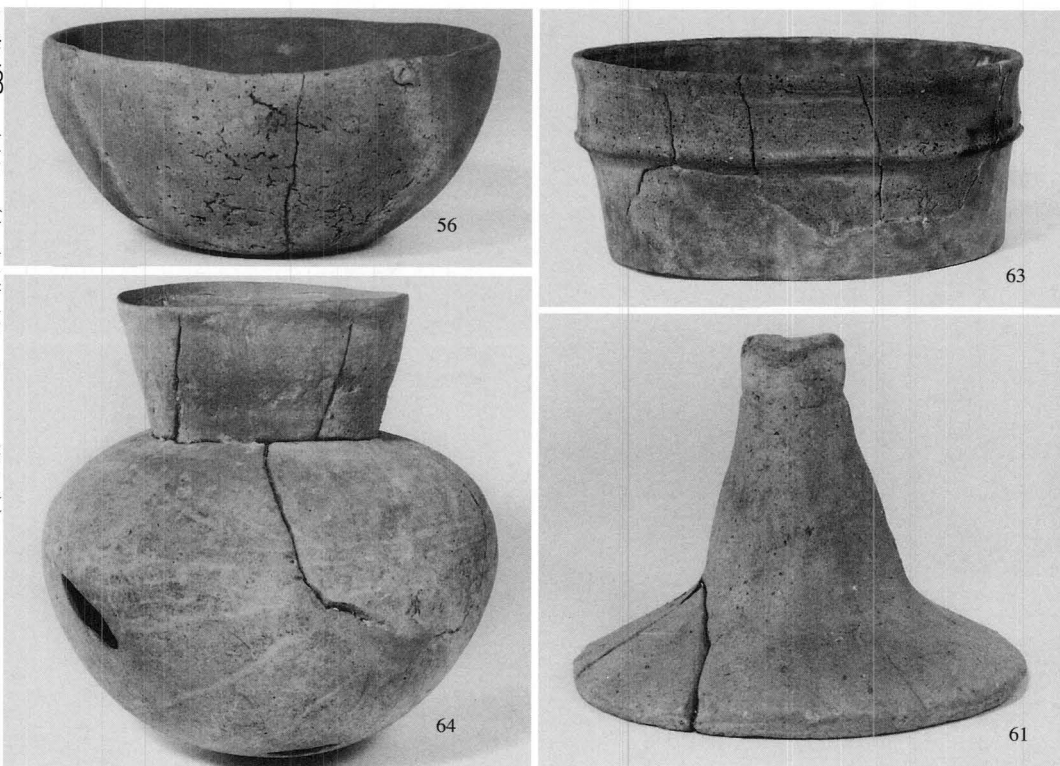


28

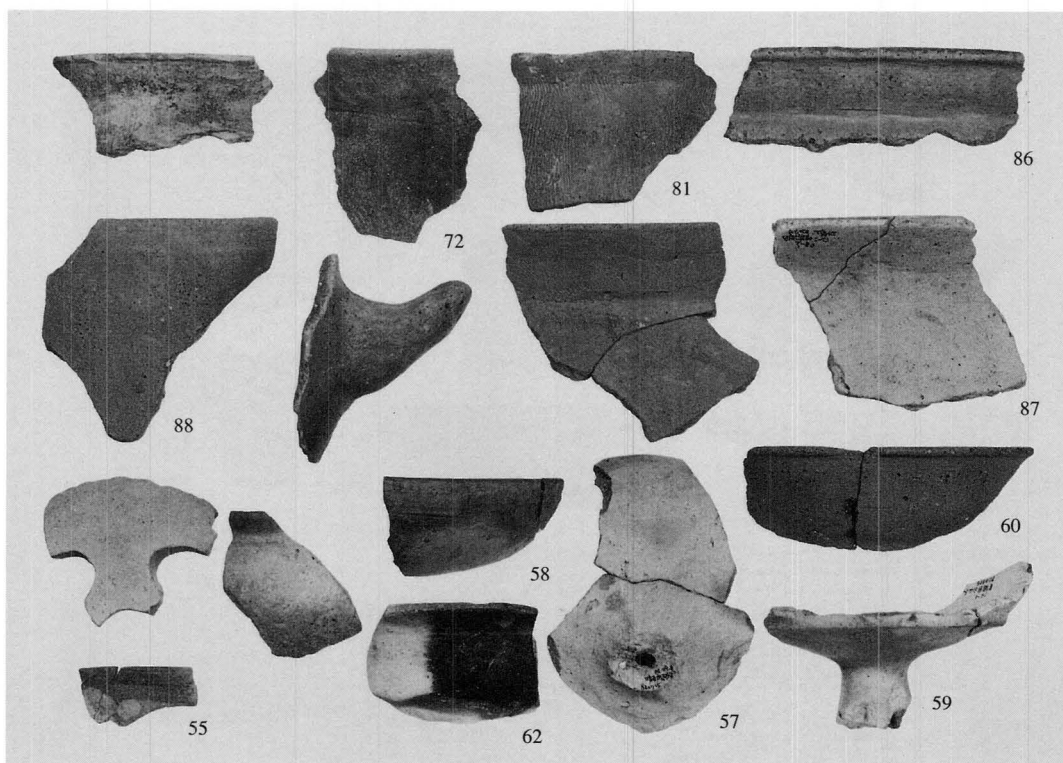
高杯 (25) 有蓋高杯 (26) 壺 (28)



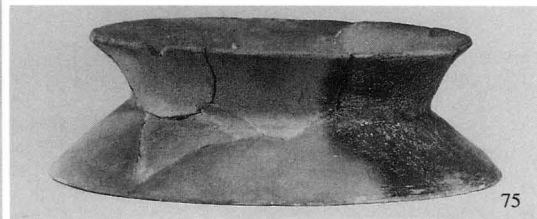
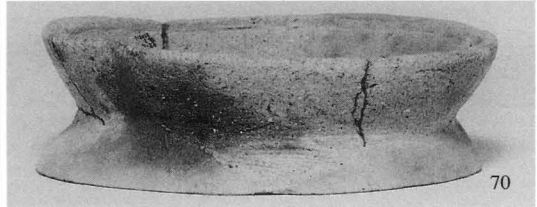
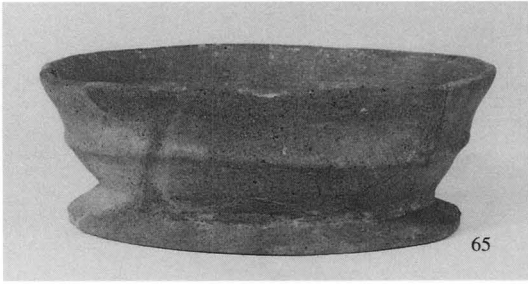
甕・壺・器台



鉢 (56) 壺 (64) 壺 (63) 高杯 (61)



甕・高杯・甗他

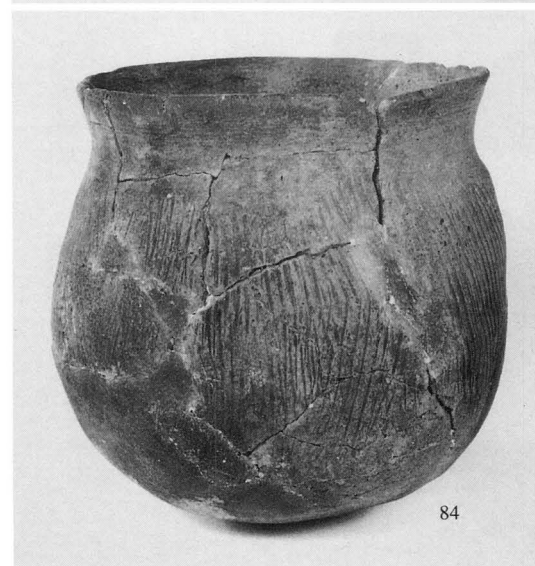
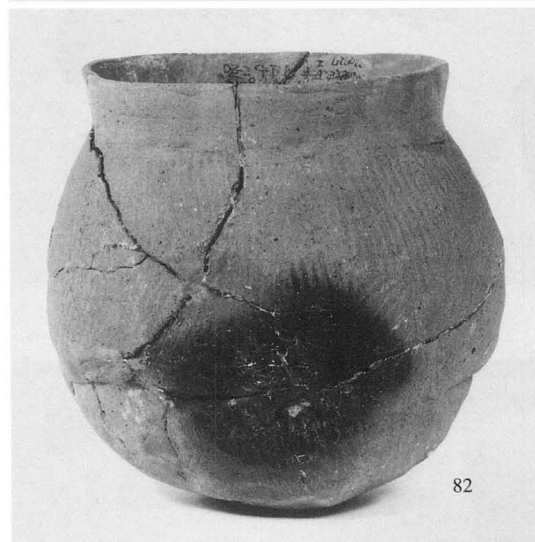


壺 (65・66) 甕 (70・71・73・74・75) 土製支脚 (67) 高杯 (69)

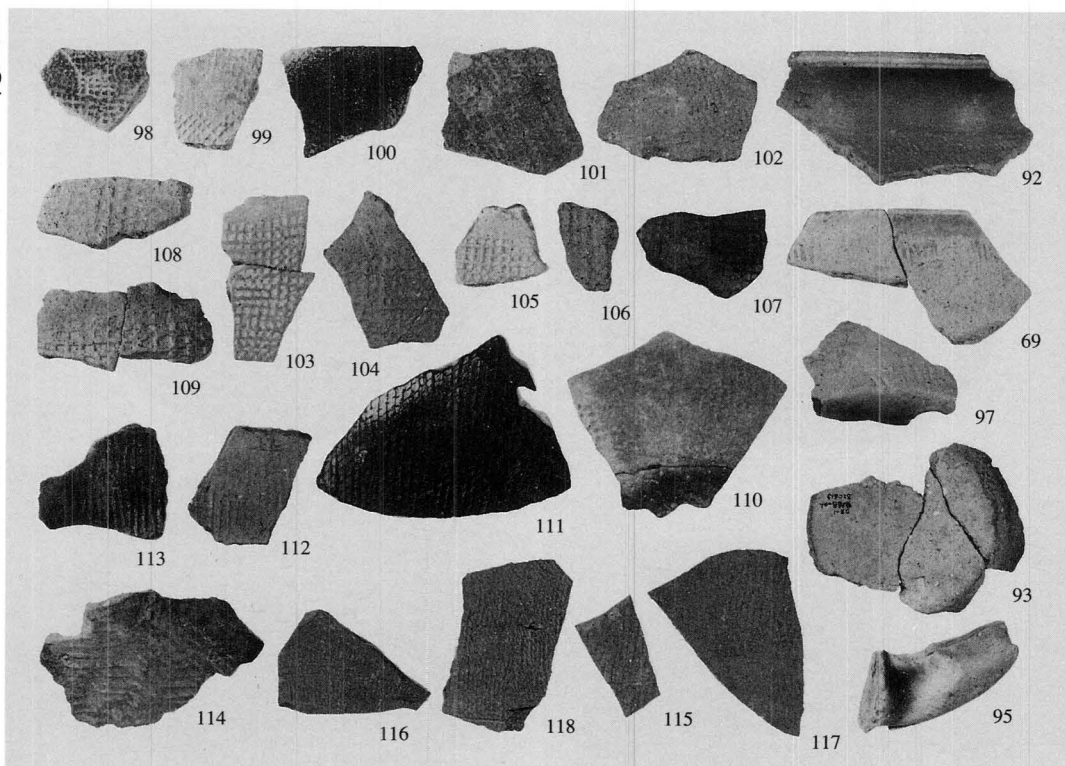
図版70 遺物（古墳時代中期・土師器）



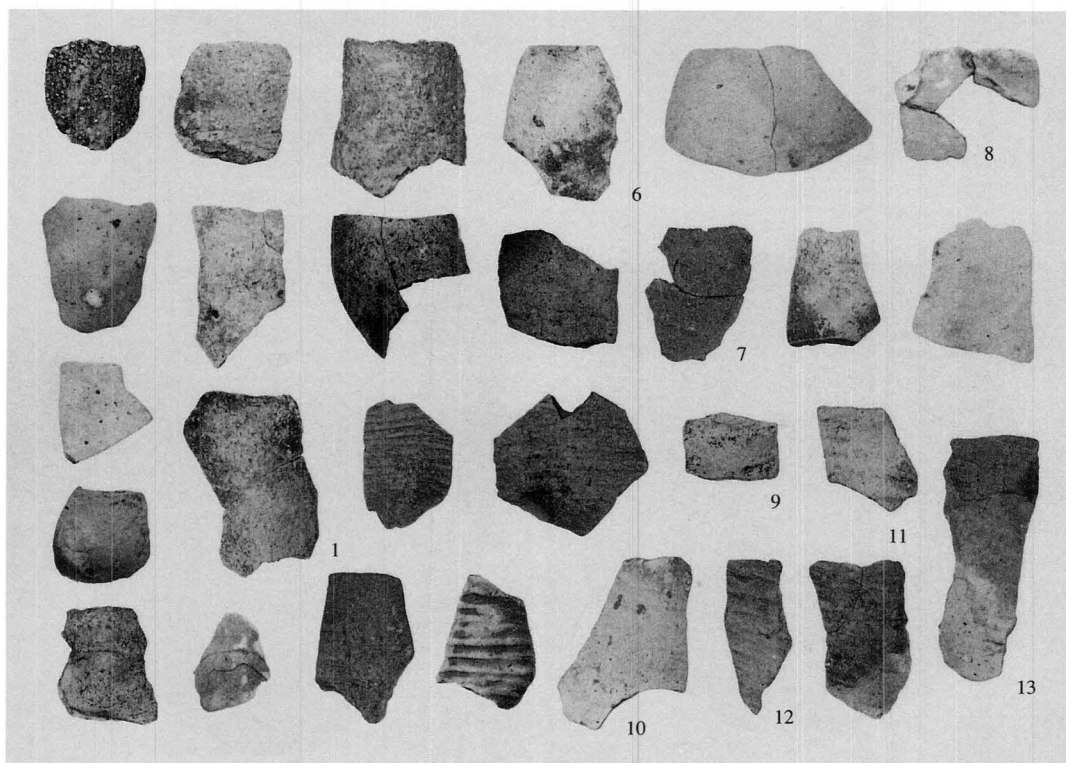
甕（76・77・91）土製支脚（68）移動式竈（78）



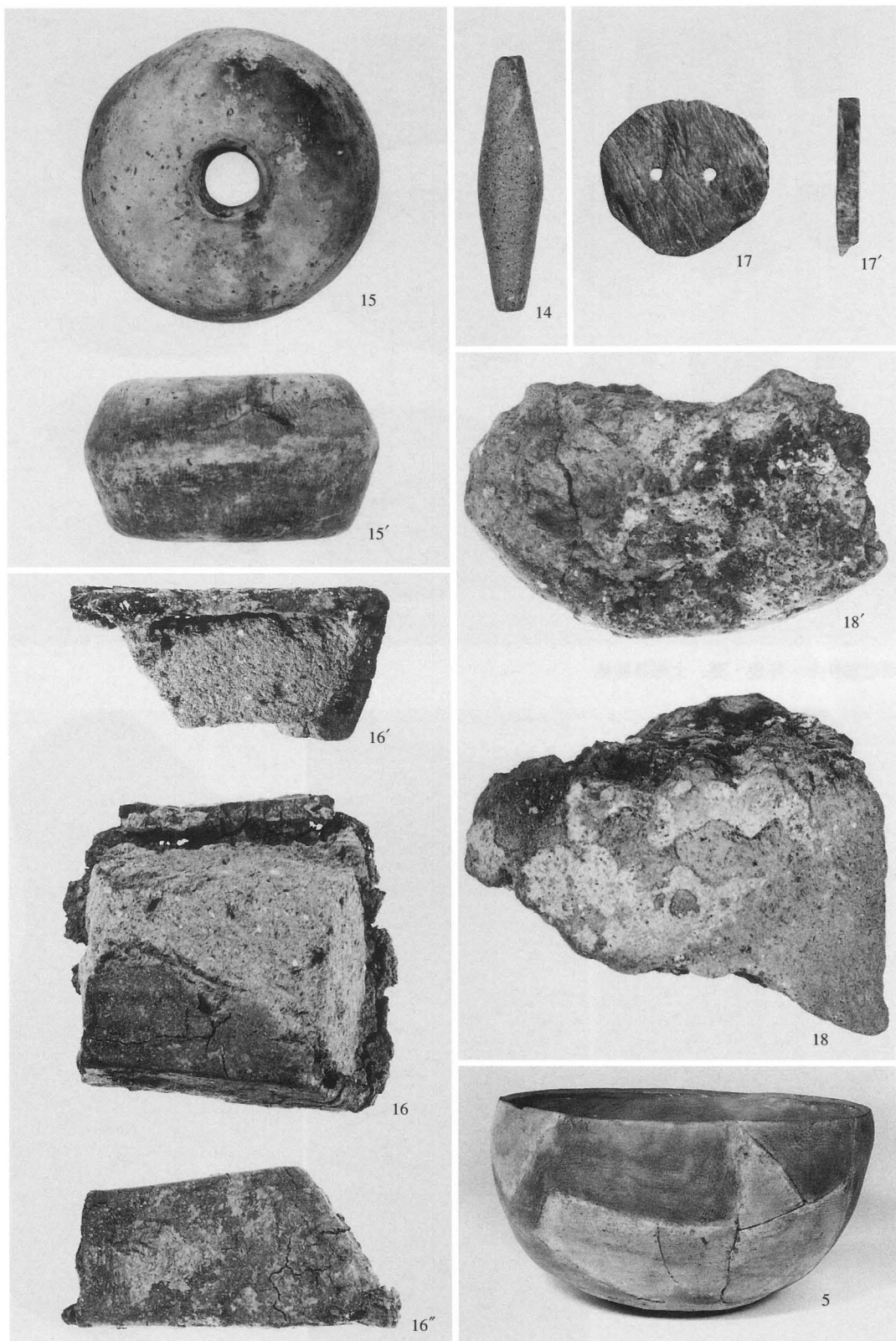
甕 (79・82~85・90)



韓式系土器甕他

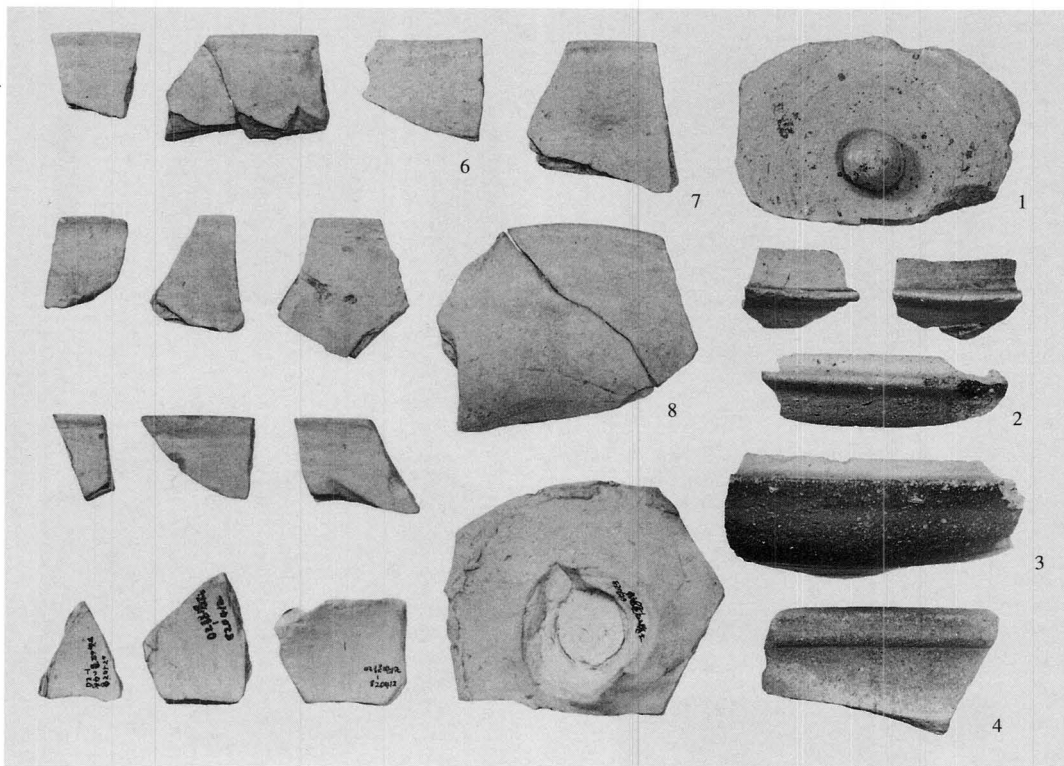


製塩土器



土製紡錘車 (15) 鑄造鉄斧 (16) 土錘 (14) 滑石製双孔円板 (17) 轡羽口 (18) 須恵器鉄鉢 (5)

図版74 遺物（縄文Ⅲ～Ⅱ、飛鳥時代・土器他）



須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器碗他



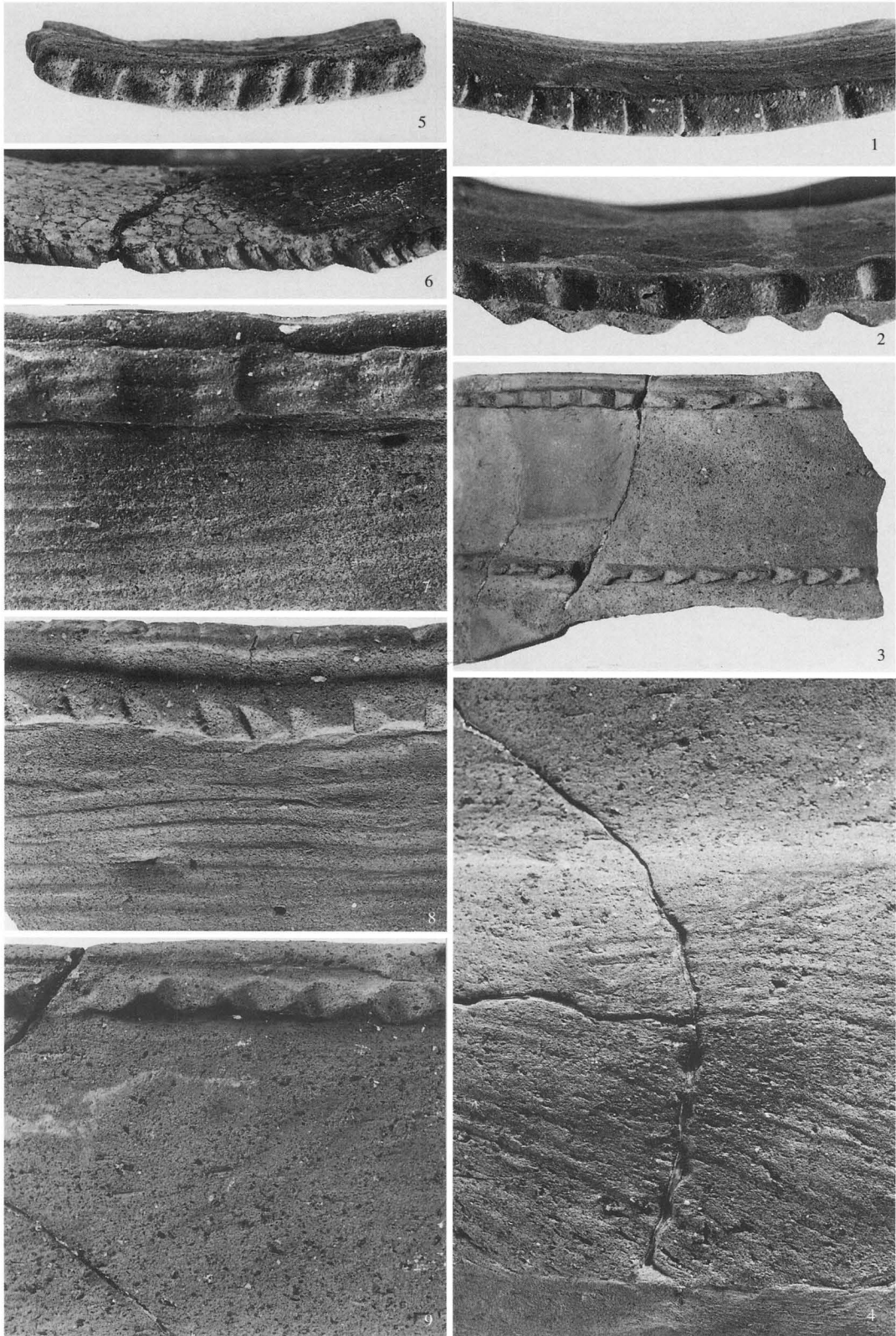
緑豆の半割れ



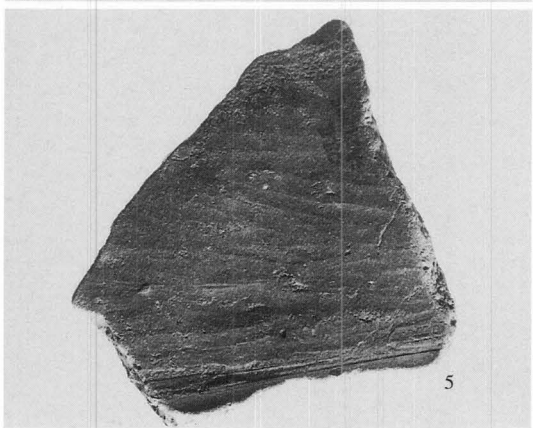
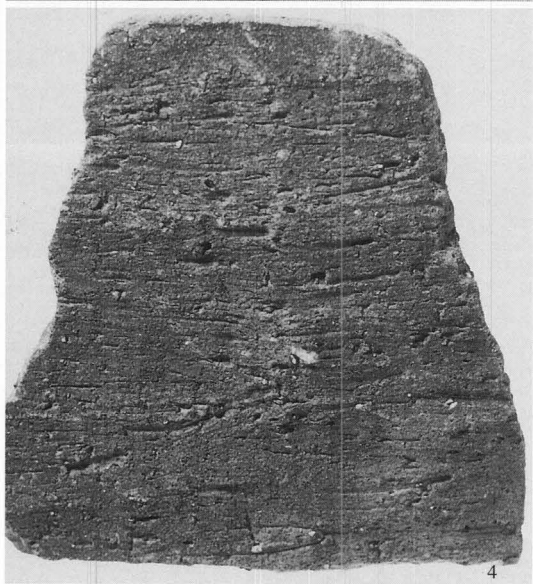
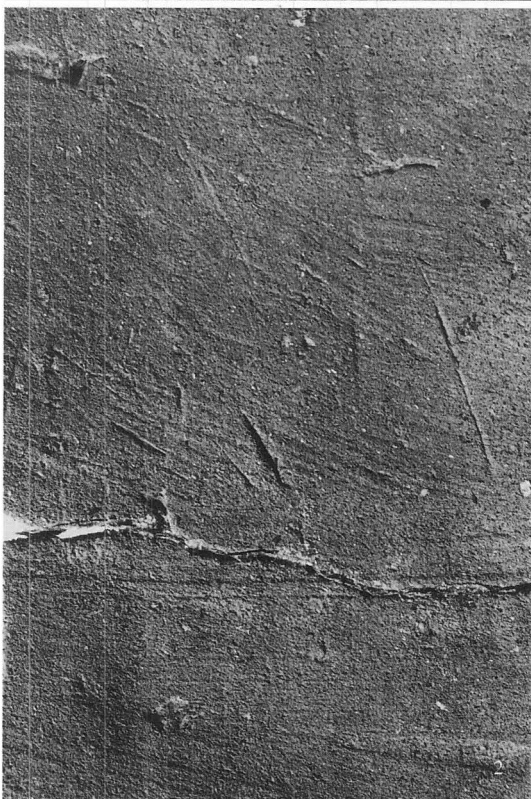
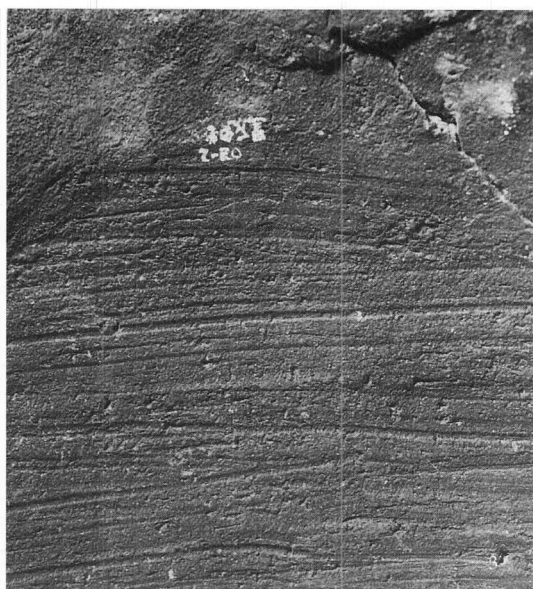
米（玄米）圧痕



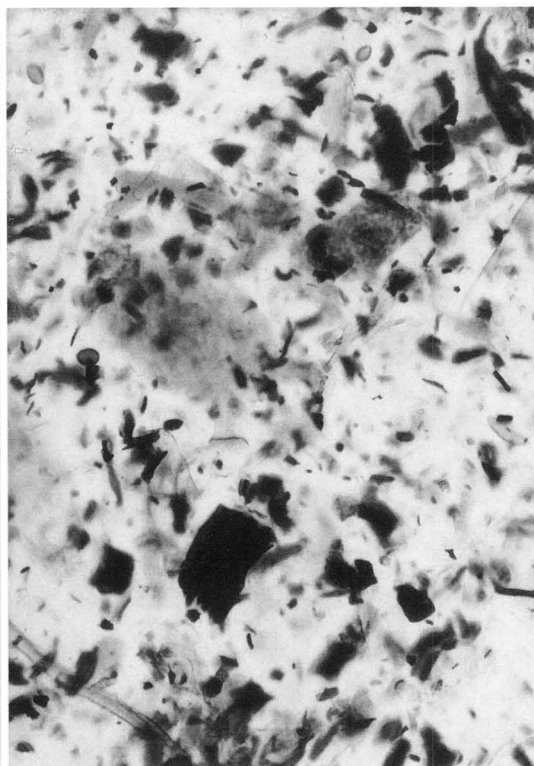
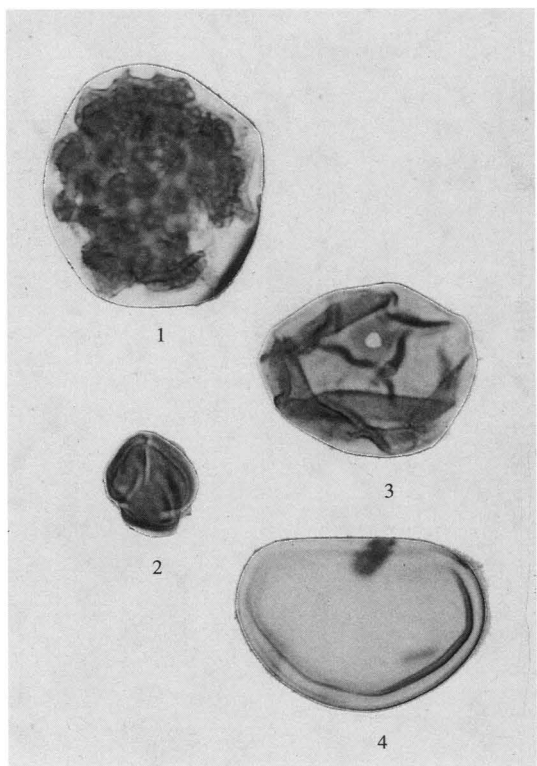
米（玄米）圧痕



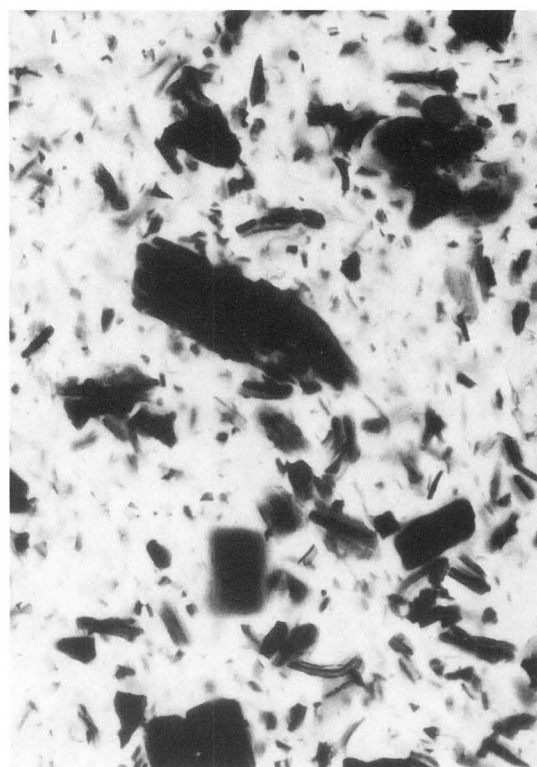
口縁端部の刻目（1・2・5・6）1条凸帯の刻目（7・8・9）
2条凸帯の刻目（3）体部の二枚貝調整（4）



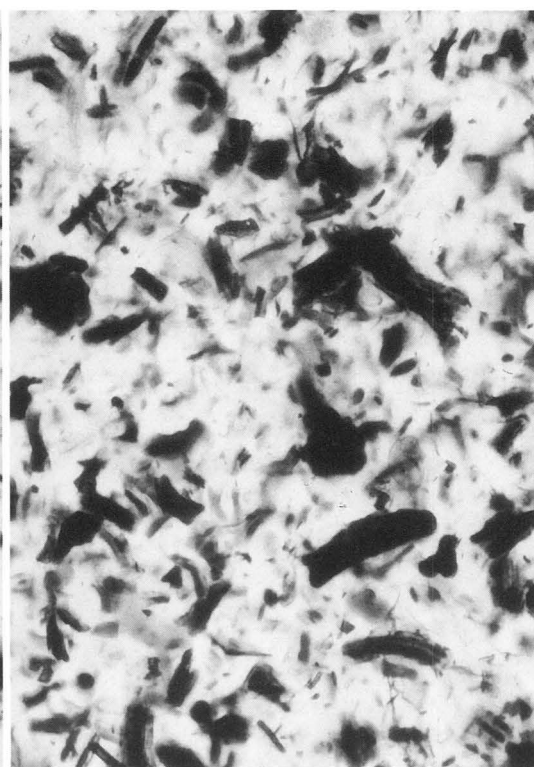
板ナデ（1・2）ケズリ（3・4・5）



5

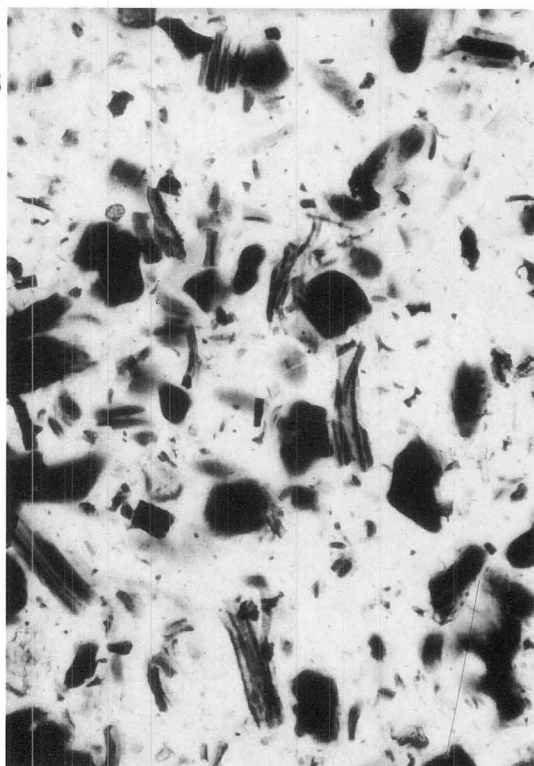


6

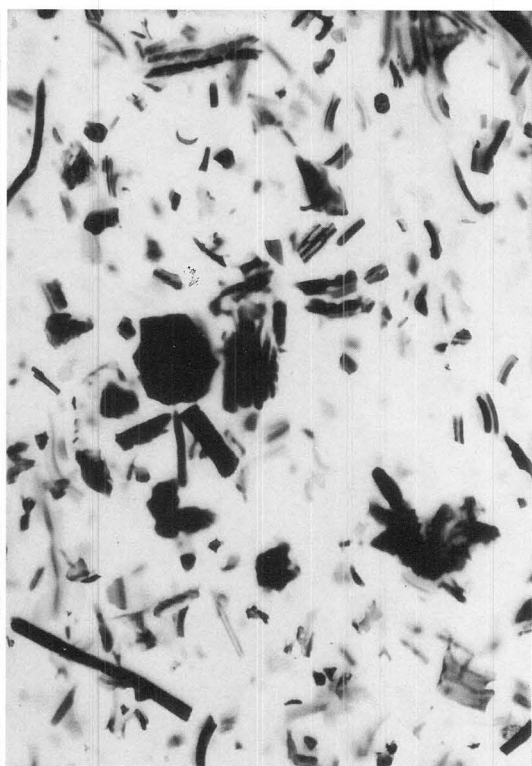


7

1.Carduoideae 2.Artemisia 3.Gramineae 4.Monolete spore 5・6・7. 状況写真



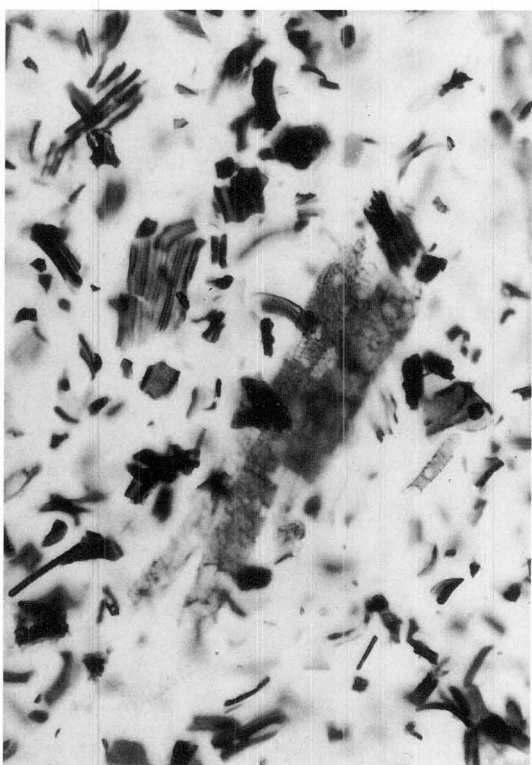
8



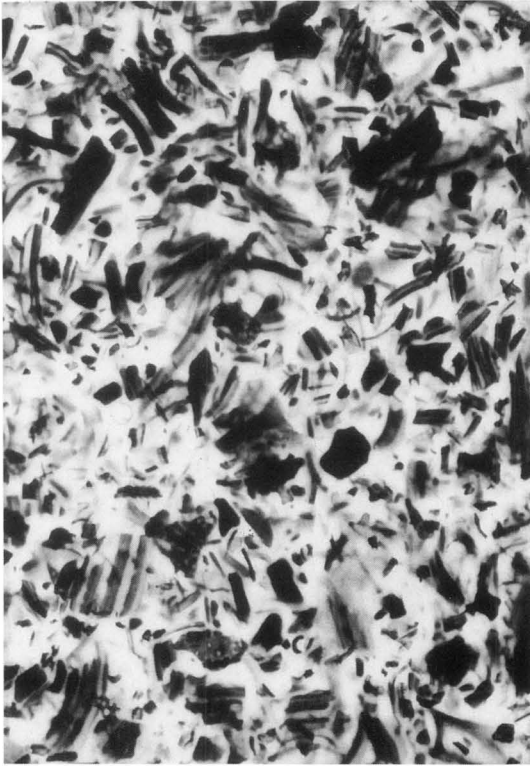
9



10



11



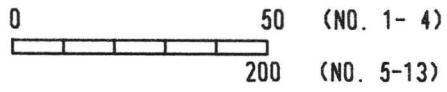
12

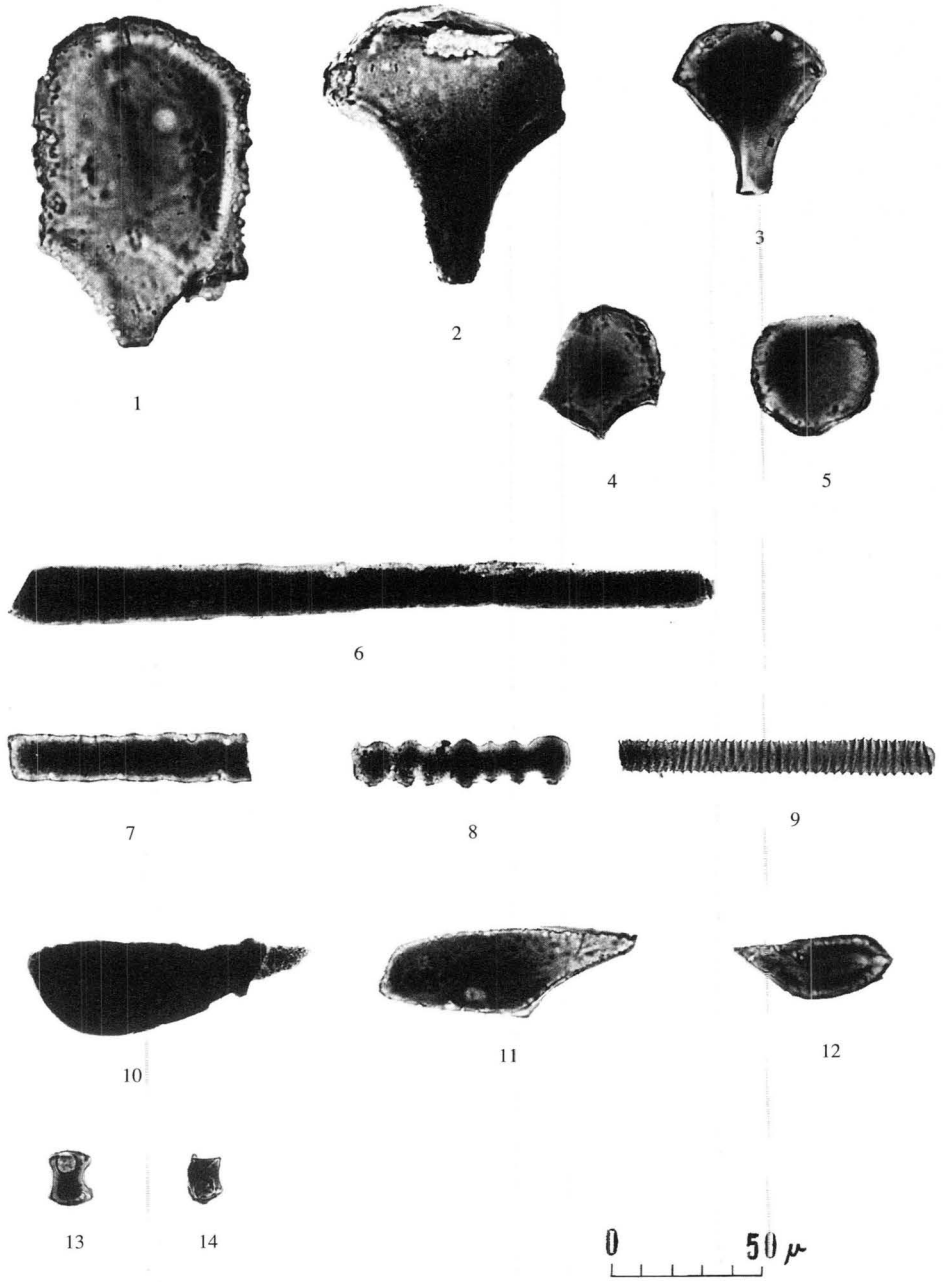


13

12・13. 状況写真

図版79
花粉化石





1~5. ファン型、6~9. 棒状 10~12. ポイント型、13・14. ササ型

報告書抄録

ふりがな	おにづかいせきだい じはくつちょうさほうこく				
書名	鬼塚遺跡第8次発掘調査報告				
副書名					
巻次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	福永信雄・中西克宏・多賀谷昭・金弘美・安田博幸・井村由美・藁科哲男・東村武信・小西優美・津田美智子				
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会				
所在地	〒577 東大阪市荒川3丁目28-21				
発行年月日	平成9年3月31日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
鬼塚遺跡 (第8次調査)	ひがしおおさかしんまち 東大阪市新町456番地	27227	昭和57年 5月24日 ～11月9日	850m ²	マンション建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
集落 墓域	縄文時代中期後半～ 古墳時代後期初頭	柱穴・溝・土塀・ 再葬墓・方形周 溝墓・掘立柱建 物	縄文土器・石器・ 弥生土器・須恵 器・土師器・韓 式土器・金属製 品	・滋賀里IV併行の一 括資料 ・焼骨を含む再葬墓 ・玄米圧痕をもつ縄 文晩期土器	

鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書

1997年3月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 株式会社 ミラテック